仙台市文化財調査報告書第 340 集

長町駅東遺跡第3次調査

―仙台市あすと長町土地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書Ⅲ―

［第２分冊］

2009 年 3 月

仙 台 市 教 育 委 員 会
国土交通省東北地方整備局

第2分冊　目　次

第５章　検出遺構と出土遺物 …… 359
　３．弥生時代の遺構と遺物 …… 359
　　⑴　竪穴住居跡 …… 360
　　⑵　性格不明遺構 …… 364
　　⑶　土器埋設遺構 …… 369
　　⑷　土坑 …… 379
　　⑸　ピット …… 389
　　⑹　Ⅳ層出土遺物 …… 392
　　⑺　その他の出土遺物 …… 427
　　⑻　接合資料 …… 455
　４．３Ａ区下層調査 …… 580
　　⑴　基本層序 …… 580
　　⑵　３Ａ区下層調査出土遺物 …… 580

第６章　自然科学分析 …… 592
　１．仙台市長町副都心土地区画整理事業関係遺跡発掘調査に伴う自然科学分析（火山灰分析） …… 592
　２．長町駅東遺跡出土鉄器の科学組成に基づく分類 …… 596

第７章　まとめ …… 607
　１．調査成果の基礎整理 …… 607
　２．長町駅東遺跡と西台畑遺跡の集落について …… 644
　３．長町駅東遺跡の区画施設について …… 646
　４．弥生時代の遺構について …… 650

第2分冊　挿図目次

第290図　弥生調査区遺構配置図 …… 361･362
第291図　ＳＩ１竪穴住居跡 …… 363
第292図　ＳＩ１竪穴住居跡出土遺物 …… 364
第293図　ＳＸ１性格不明遺構 …… 365
第294図　ＳＸ１性格不明遺構出土遺物 …… 365
第295図　ＳＸ２性格不明遺構 …… 366
第296図　ＳＸ２性格不明遺構出土遺物 …… 367
第297図　ＳＸ３性格不明遺構 …… 368
第298図　ＳＫ７～９土器埋設遺構配置図 …… 369
第299図　ＳＫ７土器埋設遺構 …… 370
第300図　ＳＫ７土器埋設遺構出土遺物⑴ …… 371
第301図　ＳＫ７土器埋設遺構出土遺物⑵ …… 372
第302図　ＳＫ８・９土器埋設遺構⑴ …… 373
第303図　ＳＫ８・９土器埋設遺構⑵ …… 374
第304図　ＳＫ８土器埋設遺構出土遺物 …… 375
第305図　ＳＫ９土器埋設遺構出土遺物 …… 376
第306図　ＳＫ31土器埋設遺構 …… 377
第307図　ＳＫ31土器埋設遺構出土遺物 …… 378
第308図　土坑⑴ …… 380
第309図　土坑⑵ …… 381

第310図　土坑(3) …… 382
第311図　土坑(4) …… 383
第312図　土坑(5) …… 384
第313図　土坑出土遺物(1) …… 387
第314図　土坑出土遺物(2) …… 388
第315図　ピット(1) …… 389
第316図　ピット(2) …… 390
第317図　ピット出土遺物 …… 392
第318図　弥生Ａ区遺物出土状況 …… 393
第319図　弥生Ｂ区遺物出土状況 …… 394
第320図　弥生Ｃ区遺物出土状況 …… 395
第321図　弥生Ｄ区遺物出土状況 …… 396
第322図　弥生Ｅ区遺物出土状況 …… 397
第323図　Ⅳ層出土遺物(1) …… 398
第324図　Ⅳ層出土遺物(2) …… 399
第325図　Ⅳ層出土遺物(3) …… 400
第326図　Ⅳ層出土遺物(4) …… 401
第327図　Ⅳ層出土遺物(5) …… 402
第328図　Ⅳ層出土遺物(6) …… 403
第329図　Ⅳ層出土遺物(7) …… 404
第330図　Ⅳ層出土遺物(8) …… 406
第331図　Ⅳ層出土遺物(9) …… 407
第332図　Ⅳ層出土遺物(10) …… 408
第333図　Ⅳ層出土遺物(11) …… 409
第334図　Ⅳ層出土遺物(12) …… 410
第335図　Ⅳ層出土遺物(13) …… 411
第336図　Ⅳ層出土遺物(14) …… 412
第337図　Ⅳ層出土遺物(15) …… 413
第338図　Ⅳ層出土遺物(16) …… 414
第339図　Ⅳ層出土遺物(17) …… 415
第340図　Ⅳ層出土遺物(18) …… 418
第341図　Ⅳ層出土遺物(19) …… 419
第342図　Ⅳ層出土遺物(20) …… 420
第343図　Ⅳ層出土遺物(21) …… 421
第344図　Ⅳ層出土遺物(22) …… 422
第345図　Ⅳ層出土遺物(23) …… 423
第346図　Ⅳ層出土遺物(24) …… 424
第347図　Ⅳ層出土遺物(25) …… 425
第348図　Ⅳ層出土遺物(26) …… 426
第349図　その他の出土遺物(1) …… 429
第350図　その他の出土遺物(2) …… 430
第351図　その他の出土遺物(3) …… 431
第352図　その他の出土遺物(4) …… 432
第353図　その他の出土遺物(5) …… 433
第354図　その他の出土遺物(6) …… 434
第355図　その他の出土遺物(7) …… 435
第356図　その他の出土遺物(8) …… 436
第357図　その他の出土遺物(9) …… 437
第358図　その他の出土遺物(10) …… 438
第359図　その他の出土遺物(11) …… 439
第360図　その他の出土遺物(12) …… 440
第361図　その他の出土遺物(13) …… 441
第362図　その他の出土遺物(14) …… 444
第363図　その他の出土遺物(15) …… 445
第364図　その他の出土遺物(16) …… 446
第365図　その他の出土遺物(17) …… 447
第366図　その他の出土遺物(18) …… 448
第367図　その他の出土遺物(19) …… 449
第368図　その他の出土遺物(20) …… 450
第369図　その他の出土遺物(21) …… 451
第370図　その他の出土遺物(22) …… 452
第371図　その他の出土遺物(23) …… 453
第372図　その他の出土遺物(24) …… 454
第373図　弥生調査区接合資料出土地点分布図 …… 456
第374図　弥生Ｂ区接合資料出土地点分布図 …… 457
第375図　弥生Ｃ区接合資料出土地点分布図 …… 458
第376図　接合資料(1) …… 459
第377図　接合資料(2) …… 460
第378図　接合資料(3) …… 461
第379図　接合資料(4) …… 462
第380図　接合資料(5) …… 463
第381図　接合資料(6) …… 464
第382図　接合資料(7) …… 465
第383図　接合資料(8) …… 466
第384図　接合資料(9) …… 467
第385図　接合資料(10) …… 468
第386図　接合資料(11) …… 469
第387図　接合資料(12) …… 470

第388図　接合資料(13) …… 471
第389図　接合資料(14) …… 472
第390図　接合資料(15) …… 473
第391図　接合資料(16) …… 474
第392図　接合資料(17) …… 476
第393図　接合資料(18) …… 477
第394図　接合資料(19) …… 478
第395図　接合資料(20) …… 479
第396図　接合資料(21) …… 480
第397図　接合資料(22) …… 481
第398図　接合資料(23) …… 482
第399図　接合資料(24) …… 483
第400図　接合資料(25) …… 484
第401図　接合資料(26) …… 485
第402図　接合資料(27) …… 486
第403図　接合資料(28) …… 487
第404図　接合資料(29) …… 488
第405図　接合資料(30) …… 489
第406図　接合資料(31) …… 490
第407図　接合資料(32) …… 491
第408図　接合資料(33) …… 492
第409図　接合資料(34) …… 493
第410図　接合資料(35) …… 494
第411図　接合資料(36) …… 495
第412図　接合資料(37) …… 496
第413図　接合資料(38) …… 497
第414図　接合資料(39) …… 498
第415図　接合資料(40) …… 499
第416図　接合資料(41) …… 500
第417図　接合資料(42) …… 501
第418図　接合資料(43) …… 502
第419図　接合資料(44) …… 503
第420図　接合資料(45) …… 504
第421図　接合資料(46) …… 505
第422図　接合資料(47) …… 506
第423図　接合資料(48) …… 507
第424図　接合資料(49) …… 508
第425図　接合資料(50) …… 509
第426図　接合資料(51) …… 510
第427図　接合資料(52) …… 511
第428図　接合資料(53) …… 512
第429図　接合資料(54) …… 513
第430図　接合資料(55) …… 514
第431図　接合資料(56) …… 515
第432図　接合資料(57) …… 517
第433図　接合資料(58) …… 518
第434図　接合資料(59) …… 519
第435図　接合資料(60) …… 520
第436図　接合資料(61) …… 521
第437図　接合資料(62) …… 522
第438図　接合資料(63) …… 523
第439図　接合資料(64) …… 524
第440図　接合資料(65) …… 525
第441図　接合資料(66) …… 526
第442図　接合資料(67) …… 527
第443図　接合資料(68) …… 528
第444図　接合資料(69) …… 529
第445図　接合資料(70) …… 530
第446図　接合資料(71) …… 531
第447図　接合資料(72) …… 532
第448図　接合資料(73) …… 533
第449図　接合資料(74) …… 534
第450図　接合資料(75) …… 535
第451図　接合資料(76) …… 536
第452図　接合資料(77) …… 537
第453図　接合資料(78) …… 538
第454図　接合資料(79) …… 539
第455図　接合資料(80) …… 540
第456図　接合資料(81) …… 541
第457図　接合資料(82) …… 542
第458図　接合資料(83) …… 543
第459図　接合資料(84) …… 544
第460図　接合資料(85) …… 545
第461図　接合資料(86) …… 546
第462図　接合資料(87) …… 547
第463図　接合資料(88) …… 548
第464図　接合資料(89) …… 549
第465図　接合資料(90) …… 550

第466図　接合資料(91) …… 551
第467図　接合資料(92) …… 553
第468図　接合資料(93) …… 554
第469図　接合資料(94) …… 555
第470図　接合資料(95) …… 556
第471図　接合資料(96) …… 557
第472図　接合資料(97) …… 558
第473図　接合資料(98) …… 559
第474図　接合資料(99) …… 560
第475図　接合資料(100) …… 561
第476図　接合資料(101) …… 562
第477図　接合資料(102) …… 563
第478図　接合資料(103) …… 564
第479図　接合資料(104) …… 565
第480図　接合資料(105) …… 566
第481図　接合資料(106) …… 567
第482図　接合資料(107) …… 568
第483図　接合資料(108) …… 569
第484図　接合資料(109) …… 570
第485図　接合資料(110) …… 571
第486図　接合資料(111) …… 573
第487図　接合資料(112) …… 574
第488図　接合資料(113) …… 575
第489図　接合資料(114) …… 576
第490図　接合資料(115) …… 577
第491図　接合資料(116) …… 578
第492図　接合資料(117) …… 579
第493図　３Ａ区下層調査区位置図 …… 581
第494図　３Ａ区下層調査区平面図 …… 582
第495図　３Ａ区下層調査区
北区北壁土層図 …… 583･584
第496図　３Ａ区下層調査区
北区西壁土層図 …… 585･586
第497図　３Ａ区下層調査区
南区北壁土層図 …… 587･588
第498図　３Ａ区下層調査区
南区西壁土層図 …… 589･590
第499図　３Ａ区下層調査区出土遺物 …… 591
第500図　No.１・２刀子の外観と
組織観察結果 …… 602
第501図　No.４①･②棒状の外観と
組織観察結果 …… 603
第502図　No.６鎌、No.７釘、No.８刀子の外観と
組織観察結果 …… 604
第503図　No.５鎌の外観と組織観察結果 …… 605
第504図　No.３刀子の外観と組織観察結果 …… 605
第505図　試料に含有されるＣｕ、Ｎｉ、Ｃｏ
三成分比の関係 …… 606
第506図　竪穴住居跡カマド付設方向 …… 609
第507図　長町駅東遺跡３Ｂ区
遺構重複関係図 …… 611･612
第508図　各期竪穴住居跡出土土器(1) …… 614･615
第509図　各期竪穴住居跡出土土器(2) …… 616･617
第510図　各期竪穴住居跡出土土器(3) …… 618･619
第511図　各期竪穴住居跡出土土器(4) …… 620･621
第512図　各期竪穴住居跡出土土器(5) …… 622･623
第513図　各期竪穴住居跡出土土器(6) …… 624･625
第514図　各期竪穴住居跡出土土器(7) …… 626･627
第515図　各期竪穴住居跡出土土器(8) …… 628･629
第516図　各期竪穴住居跡出土土器(9) …… 630･631
第517図　各期竪穴住居跡出土土器(10) …… 632･633
第518図　ＳＤ66出土土器集成(上層①) …… 634
第519図　ＳＤ66出土土器集成(上層②) …… 635
第520図　ＳＤ66出土土器集成(４層①) …… 636
第521図　ＳＤ66出土土器集成(４層②) …… 637
第522図　ＳＤ66出土土器集成(４層③) …… 638
第523図　ＳＤ66出土土器集成(４層④) …… 639
第524図　ＳＤ66出土土器集成(４層⑤) …… 640
第525図　ＳＤ66出土土器集成(４層⑥) …… 641
第526図　ＳＤ66出土土器集成(下層①) …… 642
第527図　ＳＤ66出土土器集成(下層②) …… 643
第528図　西台畑遺跡･郡山遺跡遺構配置図 …… 648
第529図　長町駅東遺跡遺構配置図 …… 649
第530図　長町駅東遺跡区画施設検出状況 …… 650
第531図　弥生時代の竪穴住居跡･土器埋設遺構･
土壙墓･水田域の位置関係図 …… 653･654

３．弥生時代の遺構と遺物

古代面の調査終了後、弥生時代の遺物包含層であるⅣ層および弥生時代の遺構確認面であるⅤ層を対象に調査を実施した。Ⅳ層は古代の竪穴住居跡等による遺構の掘り込みによる影響を受けており、特に遺構が重複している部分では殆ど残存していなかったため、古代の遺構分布が希薄で、Ⅳ層以下の基本層が比較的良好に残存していると考えられる範囲を対象に、Ａ～Ｆ区の調査区を設定した（第290図）。

その結果、調査区南側のＡ区からは遺構は検出されなかったものの、他の調査区からは、竪穴住居跡1軒、性格不明遺構３基、土器埋設遺構４基、土坑36基、ピット82基が検出された。また、Ⅳ層からは弥生時代中期の桝形囲式に比定される多数の弥生土器や石器などが出土したほか、古代の遺構堆積土や古代面の遺構確認作業においても、桝形囲式に比定される土器を主体として、剥片石器等が相当数出土した。それらの数量内訳は、下表に示したとおりである。

最大の成果として特筆されるのは、１軒のみであるが、弥生時代中期の桝形囲式期に帰属すると考えられる竪穴住居跡の存在を確認したことである。これにより、本遺跡からは竪穴住居跡（居住域）、本書にて報告する土器埋設遺構４基に加え、既に報告されている２Ｂ区（第324集）および４区（第315集）から検出された土器埋設遺構および土壙墓（墓域）、水田跡（生産域）がセットで検出されたことになる。これは当該期における集落の在り方や葬制を検討する上において非常に重要な資料といえる。

以下、各遺構について記載するが、遺構番号については古代の遺構と区別し、それぞれ第１号からとした。ただし、土坑と土器埋設遺構については、いずれも「ＳＫ」の略号を使用し、通し番号を付した。なお、遺構図や遺物分布図中の「●」は土器の、「▲」は石器の出土位置を示し、遺物実測図を掲載しているものは登録番号を付した。なお、土器の器種分類および部位呼称については『中在家南遺跡他』（仙台市教育委員会1996）に準じているが、部位については「胴部」を「体部」とし、壺の肩部は体部上半とした。また、「甕Ⅱ類」は本書において「深鉢」とした。

弥生時代の遺物　出土数一覧表（1）

出土地点＼種別		土器		打製石器		磨製石器		礫石器		石製品		土製品	
		掲載	非掲載	掲載	非掲載	掲載	非掲載	掲載	非掲載	掲載	非掲載	掲載	非掲載
遺構	SI1	4	59	2	7	0	0	0	0	0	0	0	1
	SX1	5	36	3	3	0	0	0	0	0	0	0	0
	SX2	9	64	2	11	0	0	0	0	0	0	0	1
	SX3	0	13	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	SK7	3	16	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	SK8	1	11	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	SK9	2	10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	SK31	2	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	SK2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	SK3	0	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0
	SK10	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	SK11	1	12	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	SK12	2	9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	SK13	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	SK14	1	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	SK16	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
	SK17	4	25	1	7	0	0	0	0	0	0	0	0
	SK18	2	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
	SK21	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	SK26	0	2	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0
	SK27	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	SK28	0	8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	SK29	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	SK32	0	11	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
	SK33	1	19	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0
	SK36	1	40	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

弥生時代の遺物　出土数一覧表(2)

出土地点 ＼ 種別		土器		打製石器		磨製石器		礫石器		石製品		土製品	
		掲載	非掲載	掲載	非掲載	掲載	非掲載	掲載	非掲載	掲載	非掲載	掲載	非掲載
遺構	SK38	1	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	SK39	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	SK40	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	SK42·43	0	4	2	1	0	0	0	1	0	0	0	0
	Pit1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	Pit4	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	Pit7	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	Pit9	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	Pit13	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	Pit18	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	Pit20	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	Pit22	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	Pit29	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	Pit31	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	Pit35	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	Pit36	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	Pit48	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	Pit52	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	Pit63	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	Pit71	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	Pit76	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	Pit77	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	Pit80	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Ⅳ層	A区	21	249	7	25	0	0	0	3	0	0	0	1
	B区	24	761	43	217	0	0	2	2	1	0	1	6
	C区	88	1827	41	149	0	0	8	8	2	0	1	7
	D区	10	121	4	35	0	0	2	0	0	0	0	2
	E区	20	202	15	59	0	0	2	4	0	0	0	1
	F区	3	184	0	6	0	0	0	0	0	0	0	0
その他(古代の遺構他)		156	5092	237	980	2	0	7	1	0	0	2	0
合計		366	8844	357	1513	2	0	21	19	3	0	4	19

(1)　竪穴住居跡(第290～292・415・446図)

調査時において、規模や平面形から住居跡の可能性があるものについては、遺構番号として「ＳＩ」を使用し調査を開始した。そのうちＥ区から検出されたＳＩ１については、床面から焼土を伴う掘り込みや、ピットの配列が壁面に沿うように検出されたことから竪穴住居跡とした。出土土器から、弥生時代中期の桝形囲式期に帰属するものと考えられる。その他については、規模や平面形などから竪穴住居跡の可能性が考えられたものの、付属施設がないことなどから性格不明遺構とし、「ＳＸ」の略号を使用し次項に記載した。

ＳＩ１　竪穴住居跡(第291・292・415・446図)

［位置・確認面］Ｅ区北側21・26グリッド、Ⅴ層上面で検出した。

［規模・形態］西側は古代の遺構により削平されているが、規模は長軸6.00ｍ×短軸4.60ｍ以上と推定される。平面形はピットの位置関係から不整楕円形を呈し、主軸方位は北西－南東に持つものと考えられる。

［堆積土］２層に分層した。堆積の状況から、自然堆積と考えられる。

［壁面］残存する壁高は最大16cmを測り、床面から緩やかに立ち上がる。

［床面］全体的に平坦で、硬化面は認められない。

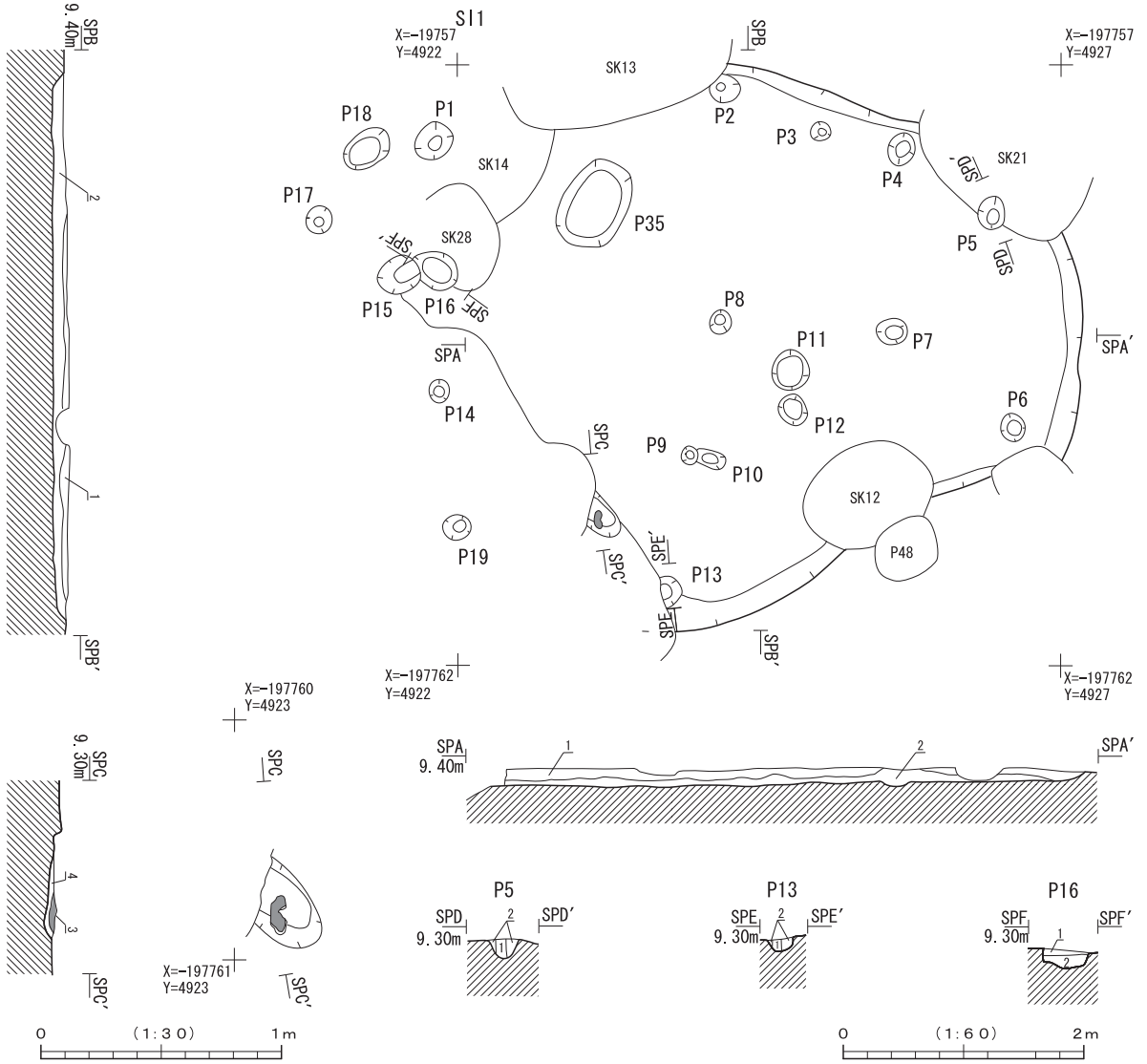
［炉］南壁側から地床炉の可能性が考えられる、浅い掘り込みを伴う焼土を検出した。一部削平を受けているが平面形は楕円形を呈するものと推定され、残存する規模は長軸31cm×短軸23cm、深さ6cmを測る。

［床面施設］ピットを20基確認した。そのうち、Ｐ１～5・13・17・18の8基については、壁面に沿って一定の間隔で並ぶように位置する。また、Ｐ5・13には柱痕が認められた。

［出土遺物］遺物は堆積土からの出土が大部分で、本遺構に明確に伴う遺物は認められない。本遺構の深さは最大でも20cmに満たないことから、廃絶後間もなく廃棄された、あるいは流入したものと考えられる。

第290図　弥生調査区遺構配置図

0　(1:250)　15m



SI1　堆積土註記表

部　位	層　位	土　色	土　性	備　　考
SI1	1	10YR3/1　黒褐色	砂質土	炭化物(径1～5mm)微量、鉄分少量、灰白色砂質土粒少量含む
	2	10YR4/2　灰黄褐色	砂質土	炭化物(径1～2mm)極微量、鉄分少量、灰白色土粒少量含む
焼土面	1	2.5YR6/6　橙色	-	-
	2	2.5YR3/3　極暗赤褐色	-	-
	3	2.5Y3/3　暗オリーブ褐色	砂質土	炭化物(径～5mm)微量含む

SI1　施設堆積土註記表

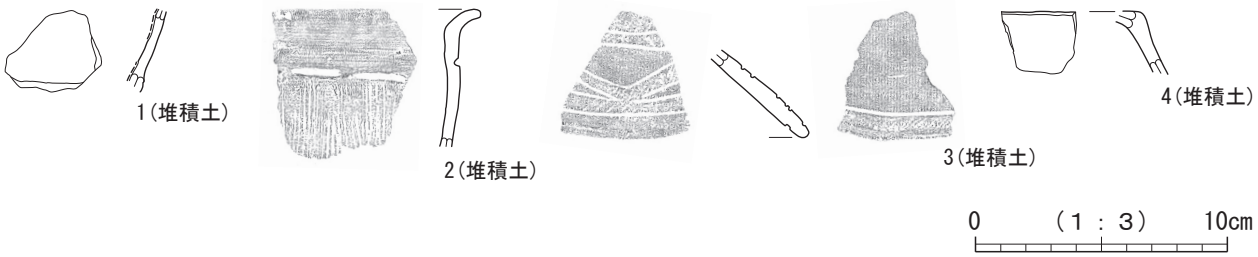
部　位	層　位	土　色	土　性	備　　考
P5	1	2.5Y3/1　黒褐色	砂質土	炭化物(径1mm)極微量含む
	2	2.5Y4/2　暗灰黄色	砂質土	炭化物極少量、鉄分少量、10YR8/1灰白色土ブロック(径5～10mm)含む
P13	1	2.5Y5/2　暗灰黄色	砂質土	炭化物(径1～3mm)微量、鉄分少量、灰白色土粒少量含む
	2	2.5Y5/3　黄褐色	砂質土	鉄分、10YR8/1灰白色粒含む
P16	1	2.5Y3/2　黒褐色	砂質シルト	炭化物微量含む
	2	2.5Y4/2　暗灰黄色	砂質土	炭化物(径1mm)極微量含む

SI1　施設観察表

遺構名	平面図	規模(cm)	深さ(cm)	備　　考
P1	楕円形	35×27	27.4	
P2	円形	25×23	5.2	
P3	円形	18×18	34.6	
P4	楕円形	28×20	8.7	
P5	楕円形	27×22	15	
P6	楕円形	24×19	-	
P7	楕円形	25×21	8.9	
P8	楕円形	22×18	13.2	
P9	円形	15×15	9.4	
P10	楕円形	-×16	7.7	

遺構名	平面図	規模(cm)	深さ(cm)	備　　考
P11	楕円形	35×30	6.1	
P12	楕円形	25×20	13.7	
P13	-	-×25	34.6	
P14	円形	18×18	4.9	
P15	楕円形	-×30	17.8	
P16	楕円形	42×30	17.6	
P17	円形	25×24	35.3	
P18	楕円形	44×30	23.5	
P19	楕円形	23×20	5.9	
P35	楕円形	76×55	12	

第291図　ＳＩ１竪穴住居跡



図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構		種別	器種	部位	外面調整・文様	内面調整・文様	備　考	写真図版
1	B-002	E区	SI1	堆積土	弥生土器	壺	口縁	ミガキ→赤彩	不明	口縁部上半欠失、内面剥離	120
2	B-004	E区	SI1	堆積土	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ→体:縦位ハケメ→体上端:列点刺突(押し引き、左→右)→口:ミガキ(粗)	口:ヨコナデ→口～体:横位ミガキ	B-258と同一個体	120
3	B-003	E区	SI1	堆積土	弥生土器	蓋	体下半～口縁	沈線→LR縄文→沈線→ミガキ(横位直線文+連続山形文)	口:沈線→LR縄文→沈線→体:ミガキ(横位直線文)		120
4	B-001	E区	SI1	堆積土	弥生土器	蓋or鉢	天井～体上半	ミガキ→体:赤彩	ミガキ(粗)		120

第292図　ＳＩ１竪穴住居跡出土遺物

出土遺物のうち、土器は壺･甕を各1点、蓋（蓋と推定されるものを含む）2点（第292図）、打製石器は接合資料2点を掲載した（第415･446図）。第292図-1は壺の口縁部で、上半を欠失し、外面はミガキ調整後、赤彩される。同図-2は甕の口縁部～体部で、体部はハケメ調整された後、上端に列点刺突文が押し引きにより施される。同一個体破片が本遺構から2点出土したほか、古代に帰属するSB-9掘立柱建物跡Pit15からも同一個体破片が出土した（第356図-93）。同図-3は蓋の体部下半から口縁部で、体部から直線的に口縁部へと開く器形を呈する。外面には横位直線文と連続山形文、内面には横位直線文が施文され、文様内は内外面共にＬＲ縄文が充填される。同図-4は蓋の天井部もしくは鉢の底部である。外面はミガキ調整された後、体部が赤彩される。

(2)　性格不明遺構（第290・293～297・394・395・487図）

規模や平面形などから竪穴住居跡の可能性が考えられるものの、炉や柱穴といった竪穴住居跡と認定し得る付属施設がない遺構3基について性格不明遺構とした。出土土器から、弥生時代中期の桝形囲式期に帰属するものと考えられる。

ＳＸ１　性格不明遺構（第290・293・294・394・395図）

［位置・確認面］Ｃ区中央部43グリッド、Ｖ層上面で検出した。東側は調査区外に延び、北側は古代の遺構に切られる。本遺構の約2ｍ南側には、SX2が位置する。

［規模・形態］検出した部分の規模は、南北3.00ｍ、東西2.35ｍ、深さ10cmを測る。平面形および主軸方位は不明であるが、南側に近接するSX2との位置関係から、平面形・主軸方位共にSX2と類似する可能性が考えられる。

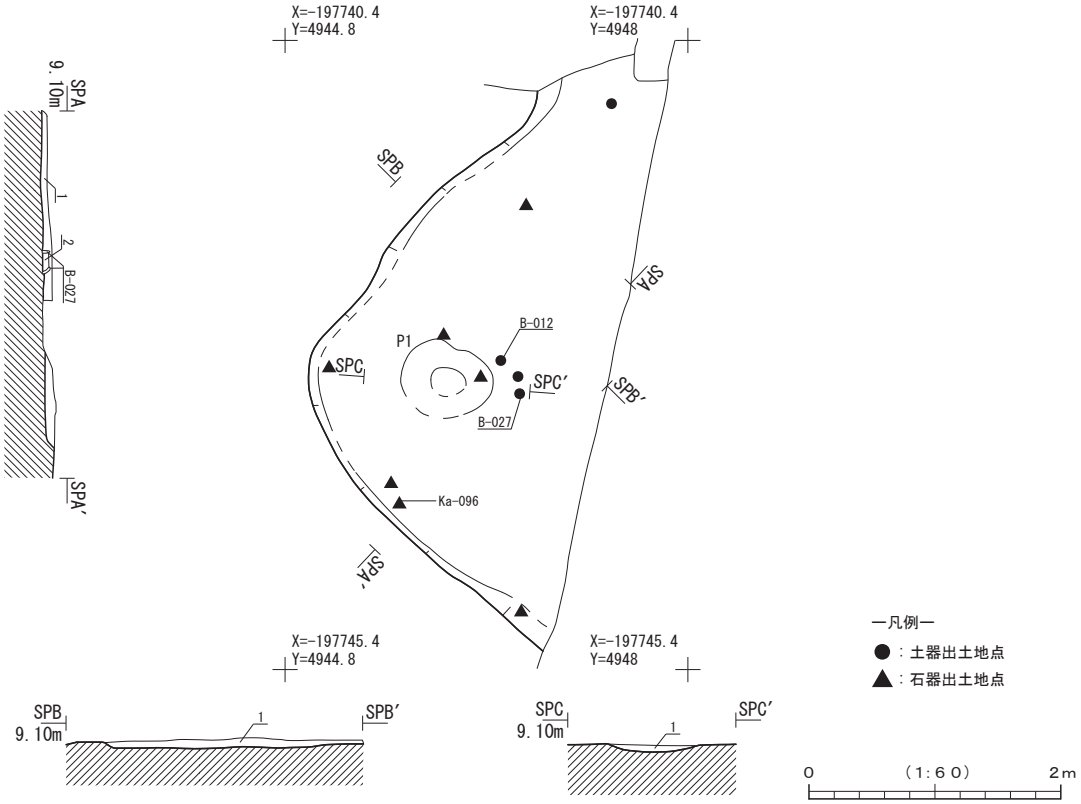
［堆積土］2層に分層した。自然堆積と考えられる。2層は底面から出土した壺形土器（第294図-1）内堆積土である。

［壁面］残存する壁高は最大10cmを測り、直線的に外傾する。

［底面］検出した部分においては、概ね平坦である。

［底面施設］ピットを1基確認した。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸72cm×短軸60cm、深さ3cmを測る。堆積土は遺構堆積土1層と同質であることから、浅い落ち込みの可能性も考えられる。

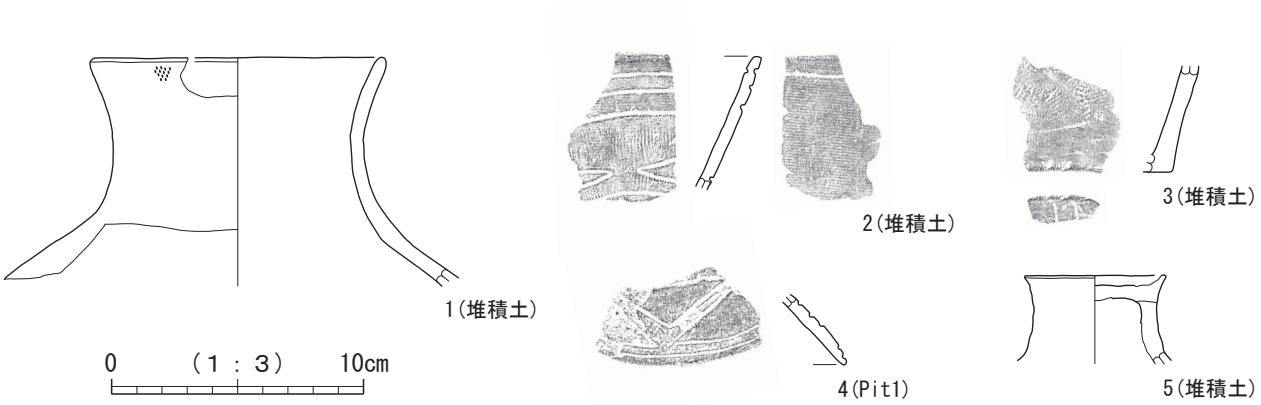
［出土遺物］遺物は多くが西側の堆積土を中心に出土した。本遺構からの出土遺物として、土器は壺・鉢or蓋・甕を各1点、蓋2点（第294図）、打製石器は接合資料2点を掲載した（第394・395図）。第294図-1は壺の口縁部から体部上端で、遺構底面から口縁部を上に向けた斜位の状態で出土した。口縁部には僅かにLR縄文が横位回転施文さ



SX1 観察表

遺構名	検出区	平面形	規模(cm)	深さ(cm)	層位	土色		土性	備考	重複
SX1	C	不整形	(380)×(235)	10	1	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	炭化物(径2～5mm)含む。10YR3/3暗褐色土層、10YR5/6黄褐色土層の混在層	SD65に切られる
					2	10YR3/1	黒褐色	シルト	炭化物(径5mm)、黄褐色土粒微量含む	
SX1 P1	C	楕円形	72×60	3	1	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	炭化物(径2～5mm)含む。10YR3/3暗褐色土層、10YR5/6黄褐色土層の混在層	なし

第293図　ＳＸ１性格不明遺構



図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構		種別	器種	部位	外面調整･文様	内面調整･文様	備考	写真図版
1	B-027	C区	SX1	底面	弥生土器	壺	口縁～体上半	口縁上端:LR縄文横位回転→頸～体:ミガキ(密)	横位ミガキ(密)	口径(11.6) cm	120
2	B-024	C区	SX1	堆積土	弥生土器	鉢 or 蓋	口縁～体上半	沈線→口唇・体上半:植物茎回転文→沈線→ミガキ(横位直線文+連弧文)	口:沈線→口～体:横位ミガキ(密)(横位直線文)		120
3	B-025	C区	SX1	堆積土	弥生土器	甕	体下半～底	体下半:LR縄文横位回転→体下端:ミガキ、底:木葉痕	横位ミガキ(密)		120
4	B-026	C区	SX1	Pit1	弥生土器	蓋	体下半～口縁	沈線→LR縄文→沈線→ミガキ(横位直線文+連続山形文)	ミガキ(密)	体部内面炭化物付着	120
5	B-023	C区	SX1	堆積土	弥生土器	蓋	天井～体上半	ミガキ(粗)	ミガキ(粗)	天井部径(5.6) cm	120

第294図　ＳＸ１性格不明遺構出土遺物

れる。同図-2は鉢の口縁部から体部上半としたが、蓋の可能性もある。外面には横位直線文と連弧文、内面には横位直線文が施文され、外面には植物茎回転文が充填される。同図-3は鉢の体部下半から底部で、外面にLR縄文が横位回転施文される。同図-4はＰ１から出土した蓋の体部下半から口縁部である。外面には横位直線文と連続山形文が施文され、文様内にはLR縄文が充填される。また、体部内面には炭化物の付着が認められる。同図-5は蓋の天井部から体部上半で、内外面とも粗くミガキ調整される。

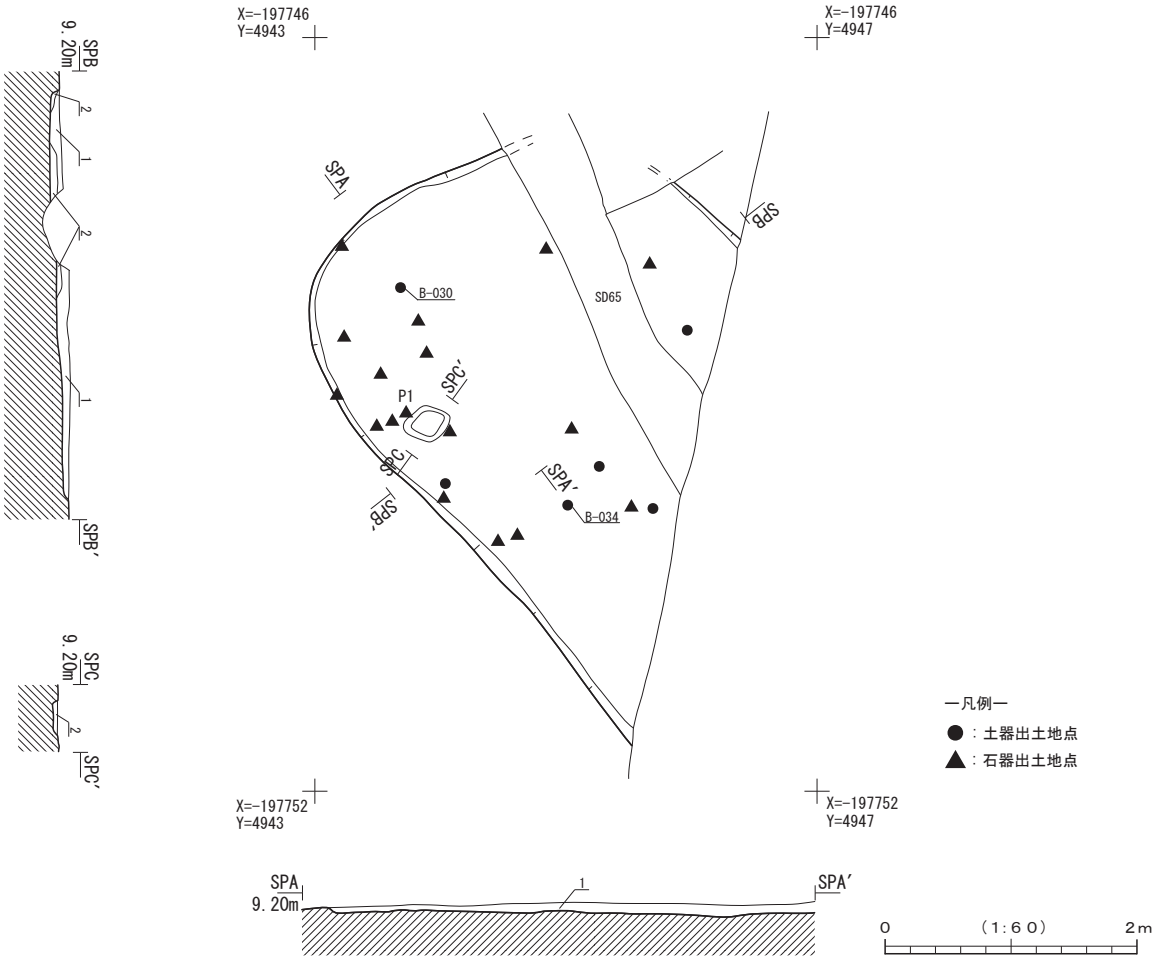
ＳＸ２　性格不明遺構（第290・295・296・487図）

［位置・確認面・重複］Ｃ区南東側38グリッド、Ｖ層上面で検出した。SK 33を切る。東側は調査区外に延び、北側は古代の遺構に切られる。本遺構の約2ｍ北側には、SX1が位置する。

［規模・形態］検出した部分の規模は、長軸4.64ｍ×短軸3.22ｍ、深さ16cmを測る。平面形は隅丸長方形を呈するものと推定され、主軸方位は北西-南東に持つものと考えられる。

［堆積土］2層に分層した。炭化物を多量に含む黒褐色シルトを主体とする。

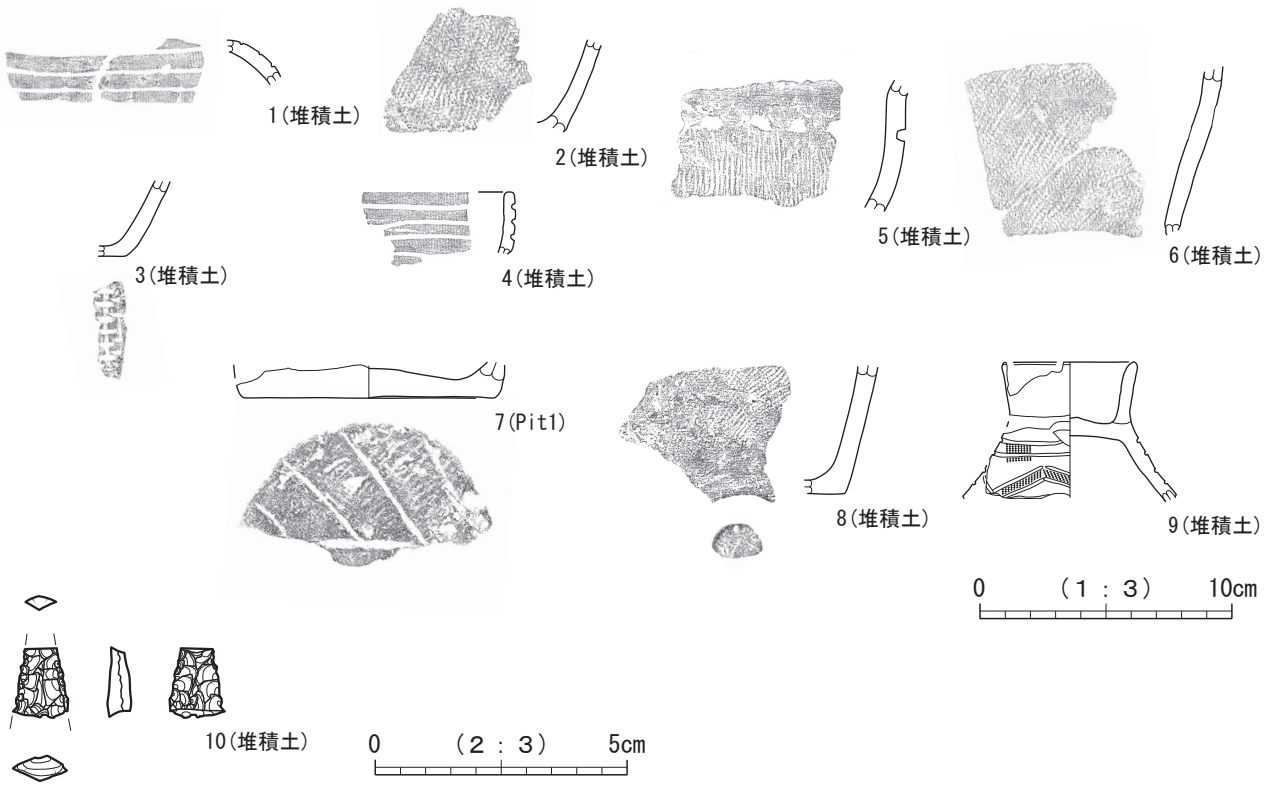
［壁面］残存する壁高は最大16cmを測り、直線的に外傾する。



SX2 観察表

遺構名	検出区	平面形	規模(cm)	深さ(cm)	層位	土色		土性	備考	重複
SX2	C	隅丸長方形?	(464)×322	16	1	7.5YR3/1	黒褐色	シルト	黒褐色土ブロック(径10～30mm)多量、白色粒多量、炭化物(径5～15mm)多量含む	SK33を切る、SD65に切られる
					2	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	炭化物(径1～3mm)微量含む。ややグライ化。	
SX2 P1	C	隅丸方形	39×30	4	-	-	-	-	-	-

第295図　ＳＸ２性格不明遺構



図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構		種別	器種	部位	外面調整・文様	内面調整・文様	備　考	写真図版
1	B-036	C区	SX2	堆積土	弥生土器	壺	体上半	沈線→植物茎回転文→沈線→ミガキ (横位直線文)	ナデ		120
2	B-032	C区	SX2	堆積土	弥生土器	鉢	体下半	LR縄文横位回転	ミガキ(密)		120
3	B-031	C区	SX2	堆積土	弥生土器	鉢	体下半 ～底	体下半:ミガキ、 底:網代痕	ミガキ		120
4	B-028	C区	SX2	堆積土	弥生土器	深鉢	口縁	沈線→ミガキ(密) (横位直線文)	ミガキ(密)		120
5	B-035	C区	SX2	堆積土	弥生土器	甕	口縁～ 体上半	口:ヨコナデ→体:植物茎回転文横位回転 →体上端:列点刺突(左→右・右→左)	口:ヨコナデ →体:横位ミガキ(密)	口縁部上半欠失	120
6	B-034	C区	SX2	堆積土	弥生土器	甕	体	LR縄文横位回転	横位ミガキ(密)		120
7	B-029	C区	SX2	Pit1	弥生土器	甕?	体下端 ～底	体下端:ミガキ(粗)、 底:木葉痕	ミガキ(密)	底径(10.0) cm	120
8	B-030	C区	SX2	堆積土	弥生土器	甕	体下半 ～底	体下半:LR縄文横位回転→体下端:ミガキ、 底:木葉痕	横位ミガキ(密)	底部外面二次加熱痕	120
9	B-033	C区	SX2	堆積土	弥生土器	蓋	つまみ ～ 体上半	つまみ:ミガキ(粗)、 体上半:沈線→植物茎回転文 →沈線→ミガキ (横位直線文+連続山形文)	つまみ:ナデ、 体上半:横位ミガキ(密)	つまみ部径(5.2) cm	120

図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構	層位	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考	写真番号
10	Ka-004	C区	SX2	堆積土	打製石器	石鏃	-	(1.3)×(1.0)×0.5	0.56	流紋岩	両端部欠損,厚幅比(0.5)	120

第296図　ＳＸ２性格不明遺構出土遺物

［底面］中央部が僅かに窪むものの、概ね平坦である。

［底面施設］ピットを１基確認した。規模は一辺39cm、深さ4cmを測り、平面形は隅丸方形を呈する。規模や形状からみて底面の浅い落ち込みの可能性がある。

［出土遺物］遺物は大部分が堆積土から出土し、なかでも北西側からは石器が多く出土した。本遺構からの出土遺物として、土器は壺１点、鉢２点、深鉢１点、甕４点（甕 ? １点を含む）、蓋1点（第296図）、打製石器は石鏃１点（同図-10）、接合資料１点を掲載した（第487図）。第296図-1は壺の体部上端で、外面には横位直線文内に植物茎回転文が充填される。同図-2・3は鉢の体部下半である。内面はいずれもミガキ調整される。外面は、２がＬＲ縄文が横位回転施文され、3が丁寧にミガキ調整される。同図-4は深鉢の口縁部である。ほぼ直立する器形を呈し、外面には横位直線文が施文される。同図-5～8は甕の破片資料である。5は口縁部に最大径を持つ器形と考えられ、体部外面は植物茎回転文が横

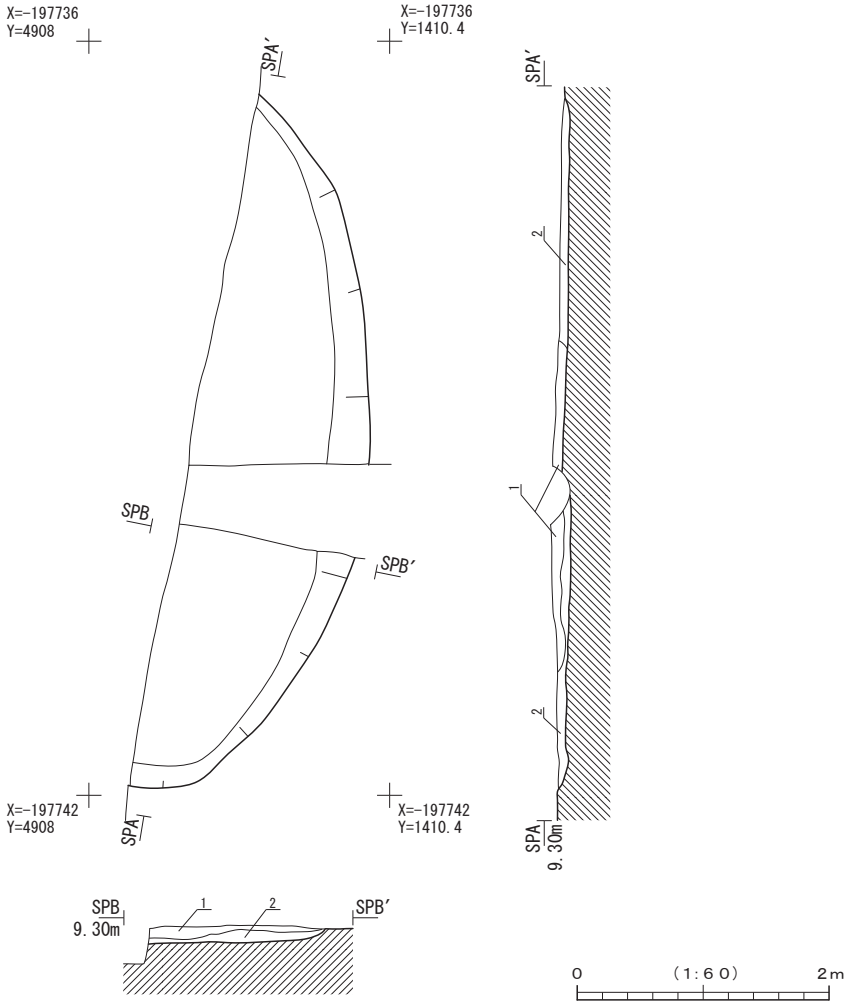
位回転施文された後、上端に断面方形の施文具による列点刺突文が施される。6・8は外面にＬＲ縄文が横位回転施文され、7・8の体部下端はミガキ調整される。内面はいずれも丁寧にミガキ調整される。同図-9は蓋のつまみ部から体部上半である。横位直線文と連続山形文が施文され、文様内には植物茎回転文が充填される。同図-10は尖端部と身部の大半を欠損する石鏃である。両面を平坦剥離で整形しており、側縁を入念に調整している。両面の中央の稜は器軸に沿っている。断面形は菱形を呈する。石材は流紋岩である。

ＳＸ３　性格不明遺構（第290・297図）

［位置・確認面］Ｄ区北側49グリッド、Ｖ層上面で検出した。西側は調査区外に延び、中央部は古代の遺構に切られる。

［規模・形態］検出した部分の規模は、南北5.06ｍ×東西1.42ｍ、深さ11cmを測る。西側は大部分が調査区外に延びているため判然としないが、平面形は円形ないし楕円形を呈するものと思われる。主軸方位については不明である。

［堆積土］2層に分層した。自然堆積と考えられる。



SX3 観察表

遺構名	検出区	平面形	規模(cm)	深さ(cm)	層位	土色		土性	備考	重複
SX3	D	不明	(506)×(142)	11	1	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	地山砂質シルト少量、10YR4/1褐灰色シルトブロック(径10～20mm)微量含む、炭化物(径1～2mm)微量	SD63に切られる
					2	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	地山砂質シルト少量、10YR4/1褐灰色シルトブロック(径10～20mm)微量含む、炭化物(径1～2mm)微量	

第297図　ＳＸ３性格不明遺構

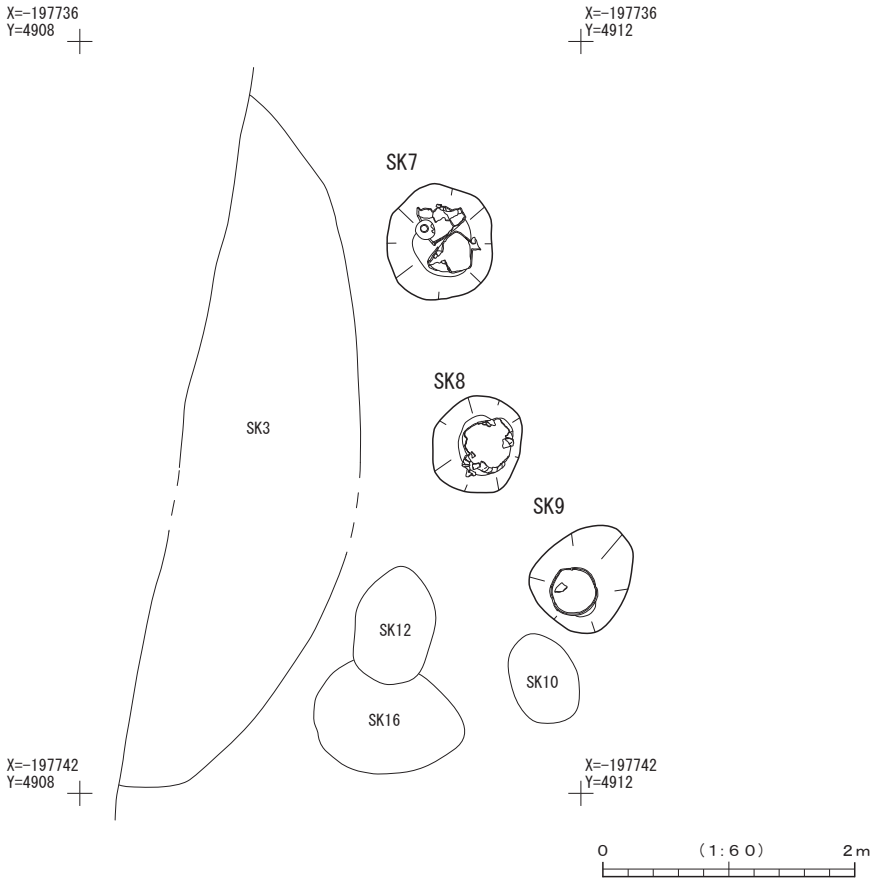
［壁面］残存する壁高は11cmを測り、大きく外傾する。
［底面］南側に比べて北側が4cm程高まるものの、概ね平坦である。
［出土遺物］出土遺物は無い。

(3)　土器埋設遺構（第290・298～307図）

３Ｂ区北東側の弥生Ｃ区から１基（SK31）検出したほか、３Ｂ区北西側の弥生Ｄ区中央部からは、北西-南東方向に60～80cmの間隔で並ぶように3基（SK7～9）検出した（第298図）。すべて弥生時代中期の桝形囲式期に帰属するものと考えられる。掘り方となる土壙は埋設される土器に比べてかなり大きく掘り込まれた後、土器の形状に合わせるかのように内部に土が充填される傾向が認められる。土器は正位の状態で埋設されたものと横位の状態で埋設されたものの２種が認められるほか、甕と精製の蓋はセット関係を有する可能性が窺われる。

ＳＫ７　土器埋設遺構（第290・298～301図）

Ｄ区北側45グリッド、Ｖ層上面で検出した。約80cm南側にはSK8が位置する（第298図）。掘り方の規模は径90cm前後、深さ33cmを測る。平面形状は不整円形、断面形状は不整逆台形を呈し、底面中央部は僅かに窪み、

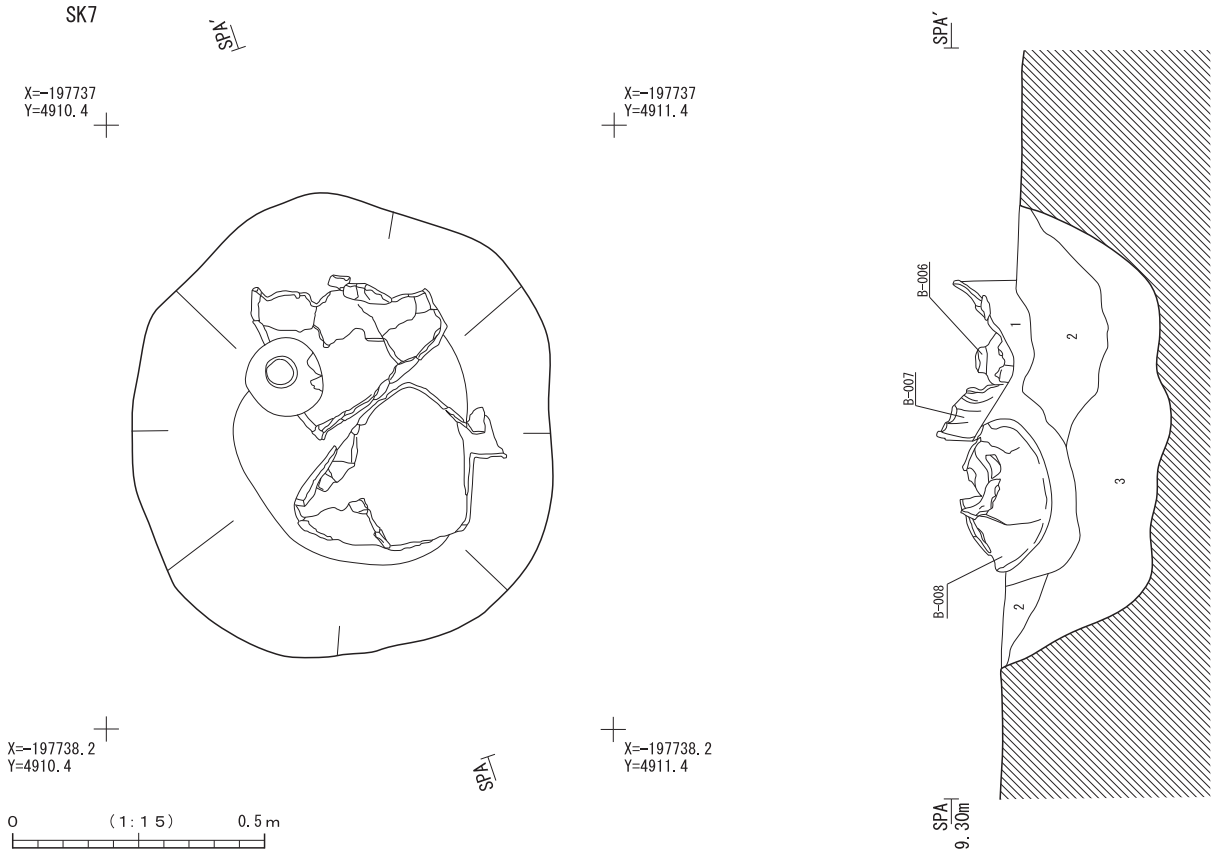


第298図　ＳＫ７～９土器埋設遺構配置図

壁は内湾して立ち上がる。堆積土はにぶい黄褐色ないし灰黄褐色シルトを主体とする3層に分層された。土器は1層中に粗製の壺、甕、精製の蓋各1点が埋設されており、壺（第300図-1）は口縁部を北東に向けた横位の状態で、これとは対照的に、甕（第301図-1）は口縁部を南西に向けた横位の状態で出土し、甕の口縁部直上から完形の精製蓋（同図-2）が正位の状態で出土した（第299図）。遺物の出土位置関係から、甕と蓋のセット関係が窺われる。

壺（第300図-1）は口径が底径より僅かに大きく、体部上半に最大径をもつ。体部上端はやや丸みを帯び、頸部は

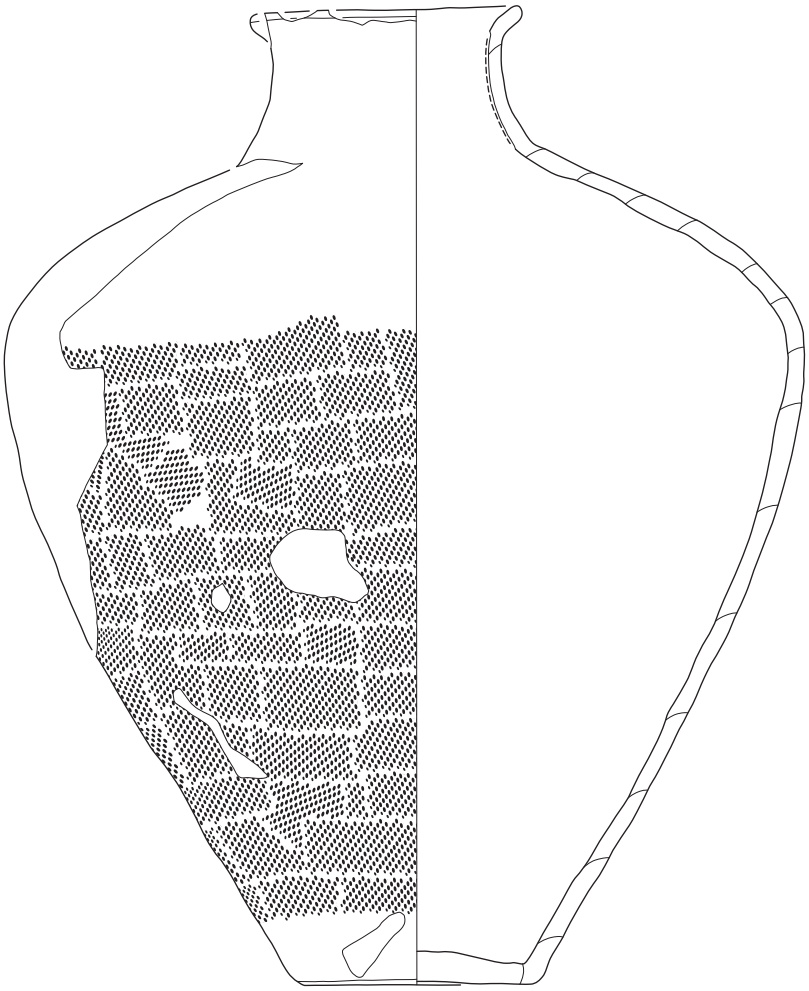
口縁部に向かって僅かに内傾し、口縁部は短く外反する器形を呈する。体部外面にはＬＲ縄文が横位および斜位回転施文される。甕（第301図-1）は口縁部に最大径をもち、底部は上げ底で体部は僅かに内湾し、口縁部は短く外反する器形を呈する。体部外面にはＬＲ縄文（直前段３条）が横位および斜位回転施文された後、上端に列点刺突文が施される。底部は焼成後に穿孔され、割れ口が整形される。精製蓋（同図-2）は、口縁部と体部上端に施文された横位直線文の内部に７単位の連弧文が横に半単位ずらして2段施文され、連孤文内には植物茎回転文が充填される。天井部には木葉痕が観察され、周縁は指頭によるつまみ上げで整形される。



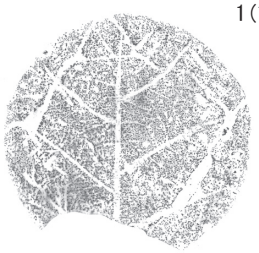
SK7　土器埋設遺構観察表

遺構名	検出区	平面形	規模(cm)	深さ(cm)	層位	土　色		土　性	備　　考	重　複
SK7	D	円形	93×87	33	1	10YR3/3	暗褐色	砂質シルト	地山砂質シルト少量、炭化物(径10～20mm)微量含む	なし
					2	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	地山砂質シルト少量、炭化物微量含む	
					3	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	地山砂質シルト少量、炭化物(径10～20mm)微量、10YR4/1褐灰色シルトブロック(径10～20mm)微量含む	

第299図　ＳＫ７土器埋設遺構



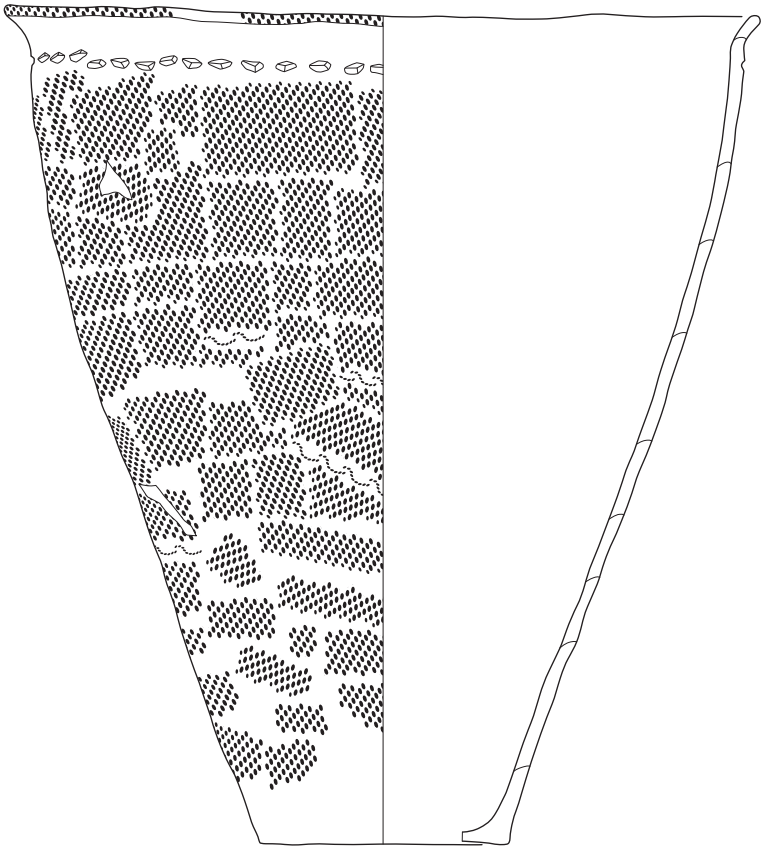
1（1層）



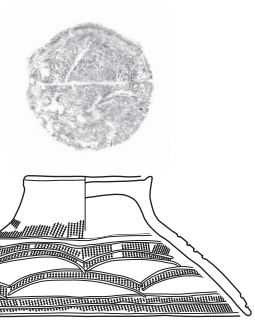
0　（1：3）　10cm

図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構		種別	器種	部位	外面調整・文様	内面調整・文様	備　考	写真図版
1	B-008	D区	SK7	1層	弥生土器	壺	口縁～底	口:ヨコナデ、体:LR縄文横位・斜位回転→頸～体上半:ミガキ、底:木葉痕	口:ヨコナデ、頸:ミガキ（粗）	口径10.5cm、底径9.0cm、器高38.9cm、頸部内面剥離	121

第300図　ＳＫ７土器埋設遺構出土遺物（1）



2(1層)



3(1層)

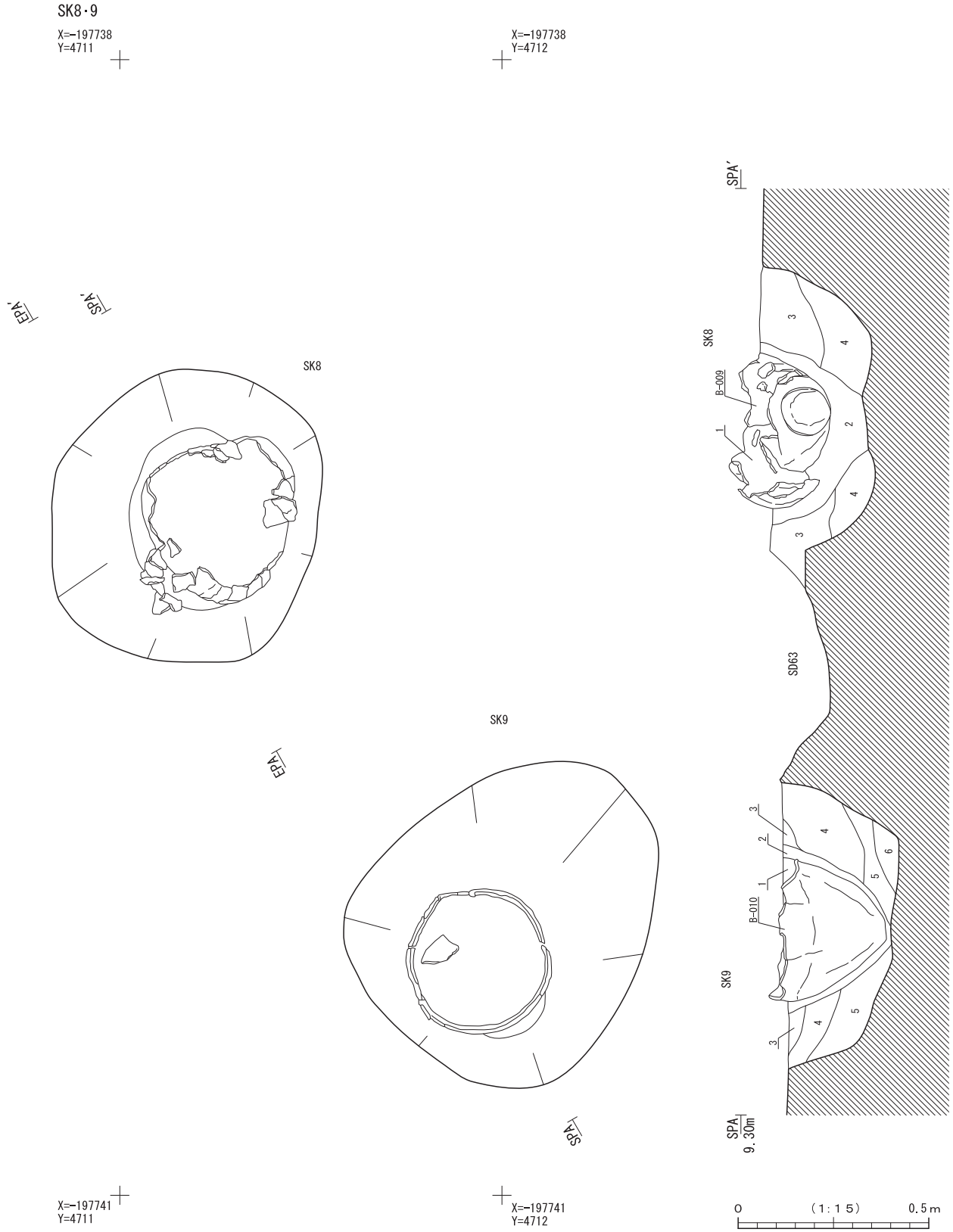
0　（1：3）　10cm

図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構		種別	器種	部位	外面調整・文様	内面調整・文様	備　考	写真図版
2	B-007	D区	SK7	1層	弥生土器	甕	口縁～底	口:ヨコナデ →口唇・体:LR縄文横位・斜位回転 →体上端:列点刺突(左→右)	口:ヨコナデ →口～底:横位ミガキ	口径30.1cm、 底径10.0cm、 器高33.7cm、 体部下半外面二次加熱痕、 底部穿孔(焼成後、割れ口整形)	122
3	B-006	D区	SK7	1層	弥生土器	蓋	天井～口縁	天井:木葉痕→つまみ上げ(周縁)→ナデ、 体～口:沈線→植物茎回転文 →沈線→ミガキ(横位直線文+連弧文)	ミガキ(密)	口径13.2cm、 天井部径5.0cm、 器高5.6cm、 体部下端～口縁部内面炭化物付着	122

第301図　ＳＫ７土器埋設遺構出土遺物(2)

ＳＫ８　土器埋設遺構（第290・298・302 ～ 304図）

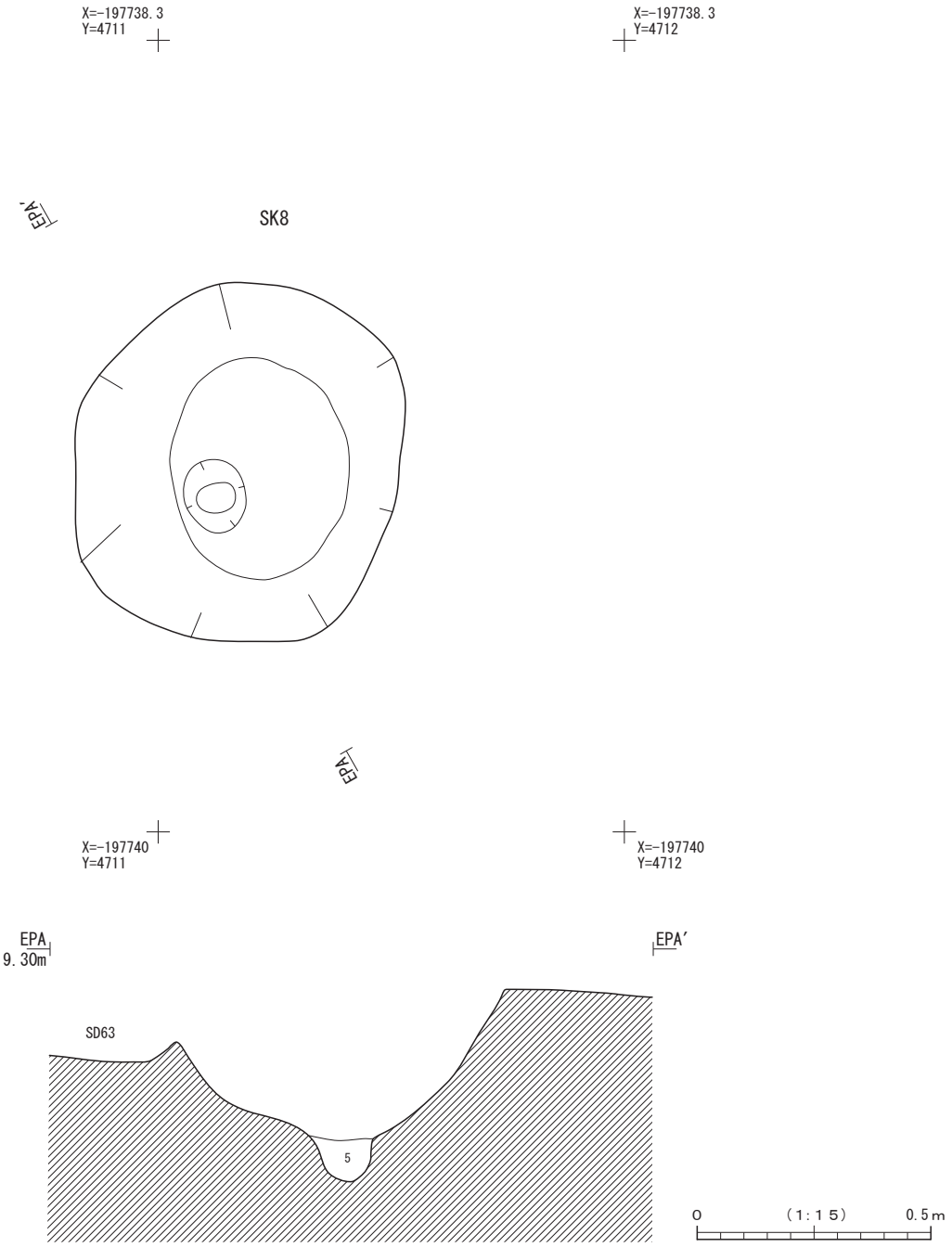
Ｄ区北側45グリッド、Ｖ層上面で検出した。約80cm北側にはSK7が、約60cm南西にはSK9が位置する（第298図）。掘り方の規模は長軸85cm×短軸72cm、深さ40cmを測り、長軸方向を北東-南東にもつ。平面形状は楕



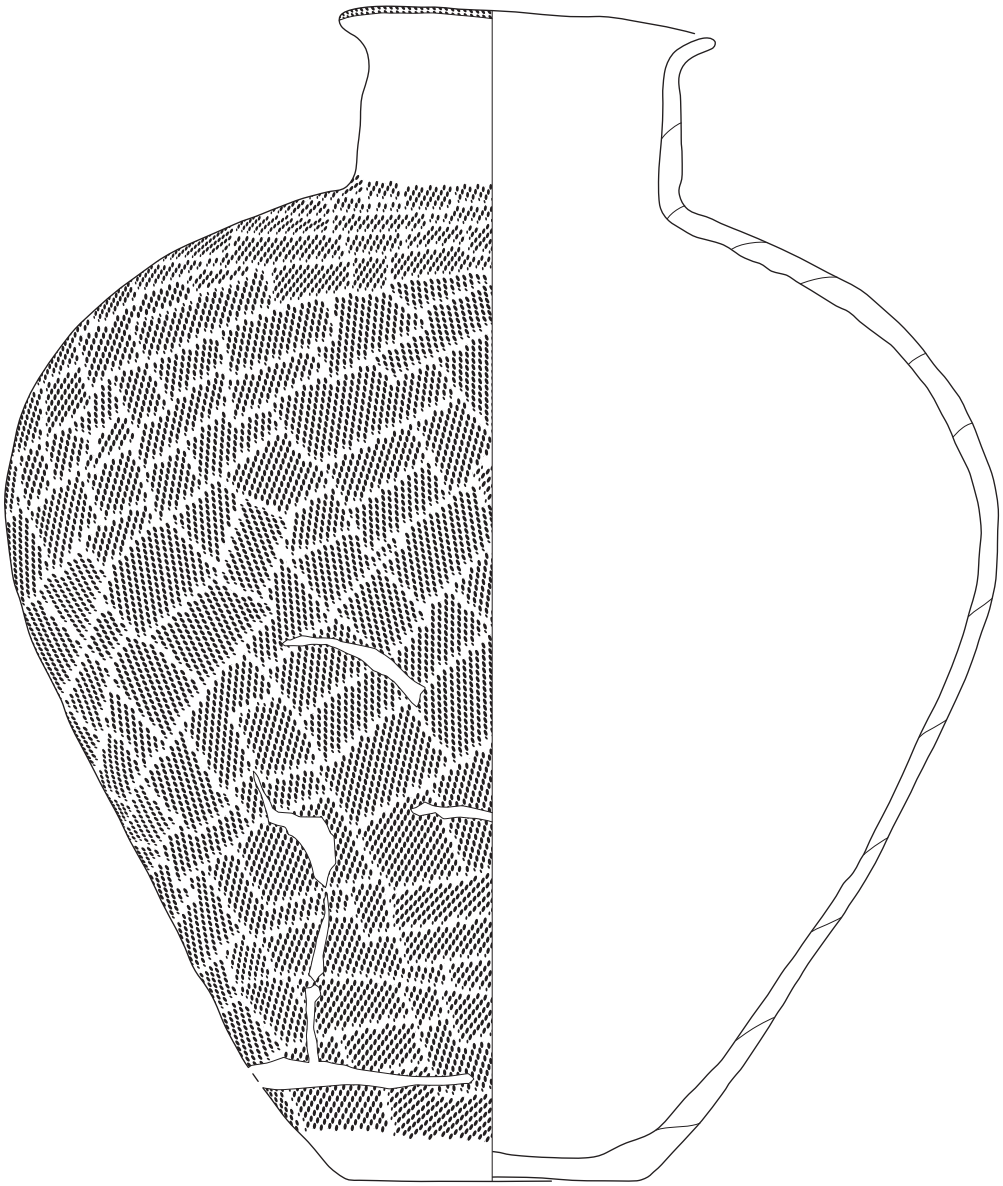
第302図　ＳＫ８・９土器埋設遺構（1）

SK８・９　土器埋設遺構観察表

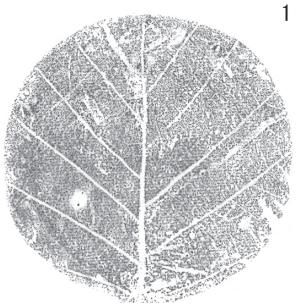
遺構名	検出区	平面形	規模(cm)	深さ(cm)	層位	土　色		土　性	備　　考	重　複
SK8	D	楕円形	85×72	40	1	10YR3/3	暗褐色	砂質シルト	地山砂質シルト微量、炭化物微量含む	なし
					2	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	地山砂質シルト微量含む	
					3	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	地山砂質シルト少量、炭化物(径0.1 ～ 0.2mm)微量、2.5Y8/1灰白色粒(径0.1 ～ 0.2mm)を全体に少量含む	
					4	7.5Y4/2	灰褐色	砂質シルト	地山砂質シルト微量、10YR4/1褐灰色シルトブロック(径20 ～ 30mm)微量含む	
					5	10YR3/2	黒褐色	砂質シルト	地山砂質シルトブロック少量全体に含む。	
SK9	D	楕円形	85×67	33	1	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	地山砂質シルト微量、2.5Y8/1灰白色粒(径0.1 ～ 0.2mm)少量全体、2.5Y4/1黄灰色シルトブロック微量まだらに含む*甕内部の埋土	なし
					2	2.5Y4/1	黄褐色	砂質シルト	地山砂質シルト微量、2.5Y8/1灰白色粒(径0.1 ～ 0.2mm)微量含む	
					3	10YR4/1	褐灰色	砂質シルト	地山砂質シルト微量、2.5Y8/1灰白色粒(径0.1 ～ 0.2mm)微量含む	
					4	2.5Y4/3	ｵﾘｰﾌﾞ褐色	砂質シルト	地山砂質シルト少量、2.5Y4/1黄褐色シルトブロック(径10 ～ 20mm)微量含む	
					5	2.5Y4/3	ｵﾘｰﾌﾞ褐色	砂質シルト	地山砂質シルト少量、5Y4/1灰色シルトブロック(径10 ～ 30mm)微量含む	
					6	10YR3/3	暗褐色	砂質シルト	地山砂質シルト微量含む	



第303図　ＳＫ８・９土器埋設遺構(2)



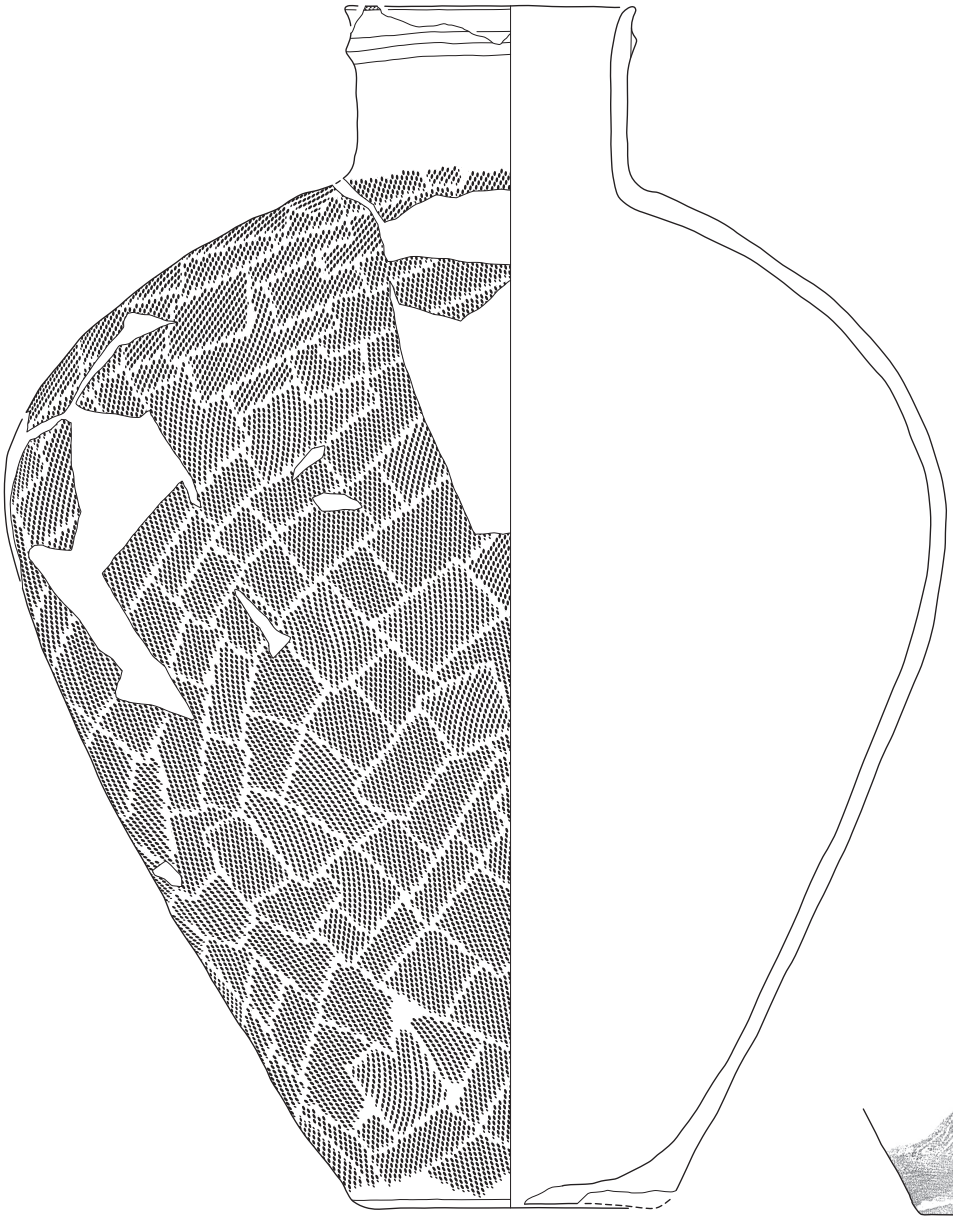
1(2層)



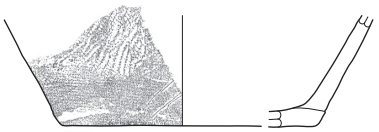
0　（1：3）　10cm

図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構		種別	器種	部位	外面調整・文様	内面調整・文様	備　考	写真図版
1	B-009	D区	SK8	2層	弥生土器	壺	口縁～底	口唇・体:LR縄文横位・斜位回転 →口～頸・体下端:ミガキ、 底:木葉痕	口～頸:ミガキ、 →体～底:ミガキ(粗)	口径15.0cm、 底径11.8cm、 器高46.8cm	123

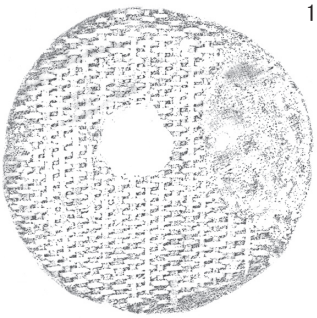
第304図　ＳＫ８土器埋設遺構出土遺物



1(2層)



2(堆積土)



0　（1：3）　10cm

図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構		種別	器種	部位	外面調整・文様	内面調整・文様	備　考	写真図版
1	B-010	D区	SK9	2層	弥生土器	壺	口縁～底	頸上端:横位隆帯貼付→口:ヨコナデ →口唇・体:LR縄文斜位回転 →口～頸:ミガキ、 底:網代痕	口～頸:ミガキ	口径11.3cm、底径12.0cm、 器高48.0cm、 底部穿孔(焼成後、外→内)、 隆帯断面形三角	124
2	B-011	D区	SK9	堆積土	弥生土器	甕	体下半～底	体下半:LR縄文横位・斜位回転 →体下端:ミガキ、 底:木葉痕	ミガキ	底径(10.0) cm、 底部穿孔か不明	124

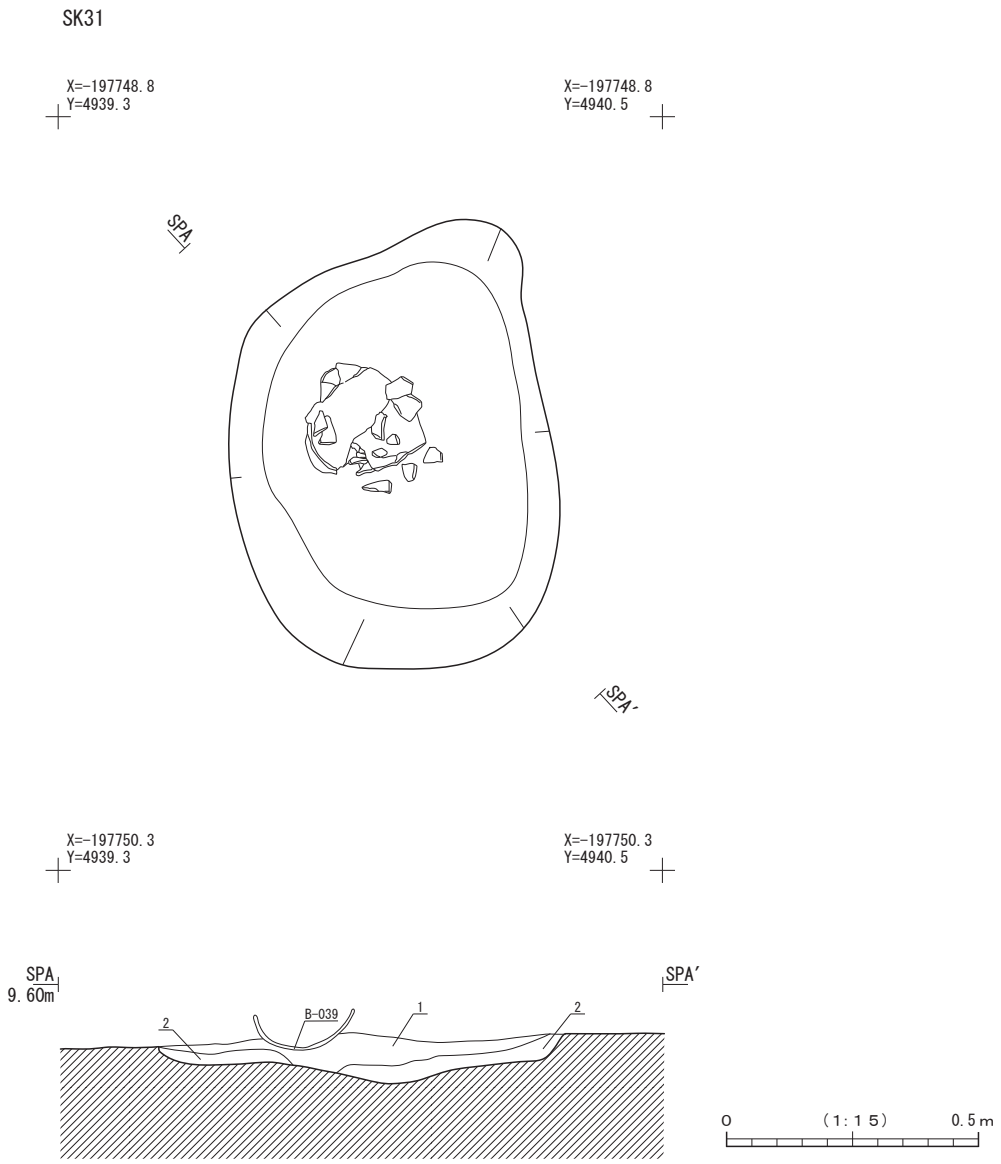
第305図　ＳＫ９土器埋設遺構出土遺物

円形、断面形状は不整逆台形を呈し、底面中央部には僅かな高まりがみられ、壁は内湾して立ち上がる。堆積土は5層に分層された。1層は土器内の堆積土である。土器は2層中に埋設され、大型の壺1点が口縁部を南西に向けた横位の状態で出土した。

埋設された壺（第304図-1）は口径が底径より僅かに大きく、体部上半に最大径をもつ。体部上端はやや丸みを帯び、頸部は口縁部に向かって僅かに内傾し、口縁部は短く外反する器形を呈する。体部外面全面にはＬＲ縄文が横位および斜位回転施文される。

ＳＫ９　土器埋設遺構（第290・298・302・305・321図）

Ｄ区北側45グリッド、Ｖ層上面で検出した。約60cm北西にはSK8が位置する（第298図）。掘り方の規模は長軸85cm×短軸67cm、深さ33cmを測り、長軸方向を北東-南西にもつ。平面形状は楕円形、断面形状は不整逆台



SK31　土器埋設遺構観察表

遺構名	検出区	平面形	規模(cm)	深さ(cm)	層位	土色		土性	備考	重複
SK31	C	楕円形	183×130	9	1	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	炭化物(径5～15mm)多量に含む。黒褐色土層とややグライ化した黄白色化した黄褐色土の混在層	なし
					2	10YR5/3	にぶい黄褐色	シルト	炭化物(径5mm)微量に含む。ややグライ化した黄褐色土主体に黒褐色土少量混在	

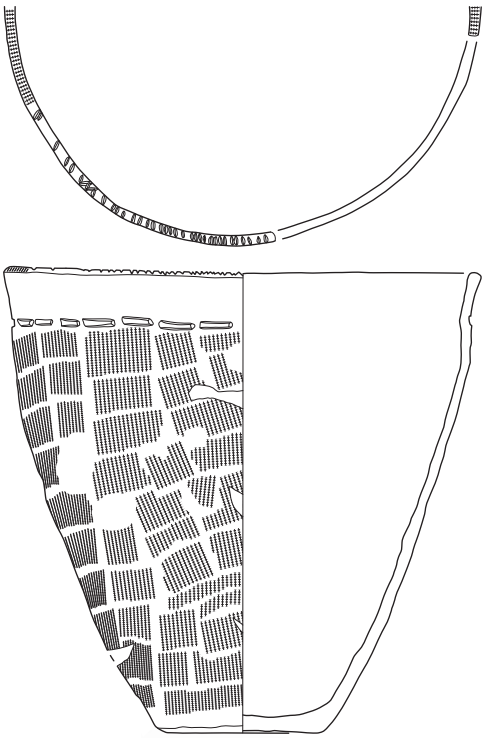
第306図　ＳＫ31土器埋設遺構

形を呈し、底面中央部は僅かに窪み、壁は直線的に外傾する箇所と中程が僅かに括れる箇所が認められる。堆積土は6層に分層された。1層は土器内の堆積土である。土器は2層中に埋設され、大型の壺1点が口縁部から胴部上半を欠失する正立の状態で出土した（第302図）。口縁部から胴部上半の破片は、本遺構の約2m北西から纏まって出土したほか、約17m南のD区南端からも出土した（第321図）。こうした出土状況ならびに接合関係が人為的なものに起因するのか、あるいは自然作用に起因するのかは判然としない。このほか、堆積土からは壺の底部破片が出土した。

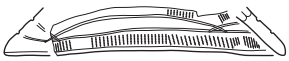
埋設された壺（第305図-1）は口径と底径がほぼ等しく、体部上半に最大径をもつ。底部は上げ底で体部上端は丸みを帯び、頸部は直立し口縁部上端が僅かに外反する器形を呈する。頸部上端には幅1cm、断面が三角形を呈する隆帯が横位に貼り付けされ、体部外面全面にＬＲ縄文が斜位回転施文される。底部は焼成後に外面側から穿孔される。同図-2は外面にＬＲ縄文が横位および斜位回転施文される壺の体部下半から底部である。底部は穿孔された可能性があるが、判然としない。

ＳＫ31　土器埋設遺構（第290・306・307図）

Ｃ区南側37グリッド、Ｖ層上面で確認した。掘り方の規模は長軸183cm×短軸130cm、深さ9cmを測り、長軸



1（1層）



2（堆積土）

0　（1：3）　10cm

図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構		種別	器種	部位	外面調整・文様	内面調整・文様	備　考	写真図版
1	B-039	C区	SK31	1層	弥生土器	甕	口縁～底	口:ヨコナデ →口唇・体:植物茎回転文横位回転 →体上端:列点刺突(押し引き、左→右) →口:ミガキ(粗)、口唇:沈線、 底:木葉痕→ヘラ状施文具or紐状の圧痕?	口～頚:横位ミガキ、 体:縦位ミガキ、 底:ミガキ(粗)	口径20.0cm、 底径6.0cm、 器高18.5cm、 体部外面二次加熱痕 及び火ハネ痕	125
2	B-037	C区	SK31	堆積土	弥生土器	蓋	体下半～口縁	沈線→植物茎回転文→ミガキ (横位直線文+連弧文)	口:ミガキ	口径(11.2) cm、 内面劣化	125

第307図　ＳＫ31土器埋設遺構出土遺物

方向をほぼ南北にもつ。平面形状は楕円形、断面形状は不整逆台形を呈し、底面中央部は窪み、壁は内湾する箇所と直線的に外傾する箇所が認められる。堆積土は2層に分層された。レンズ状の堆積を示す。土器は1層中に埋設され、小型の甕1点（第307図-1）が口縁部を北東に向けた横位の状態で出土した。また、堆積土からは精製蓋（同図-2）が出土しており、SK7と同様に、甕と精製蓋とのセット関係が窺われる。

埋設された甕（第307図-1）は口縁部に最大径をもち、底部は上げ底で体部は上位まで直線的に立ち上がり、体部上端から口縁部は僅かに外傾する器形を呈する。体部外面は全面に植物茎回転文が横位および斜位回転施文された後、上端に押し引きによる列点刺突文が施される。口唇部には植物茎回転文の他、沈線が施文される。底部には木葉痕の他、ヘラ状施文具とも紐状の圧痕ともみてとれる痕跡が観察される。堆積土から出土した精製蓋（同図-2）は横位直線文と連弧文が施文され、文様内に植物茎回転文が充填される。

⑷　土坑（第290・298・308～314・403・463図）

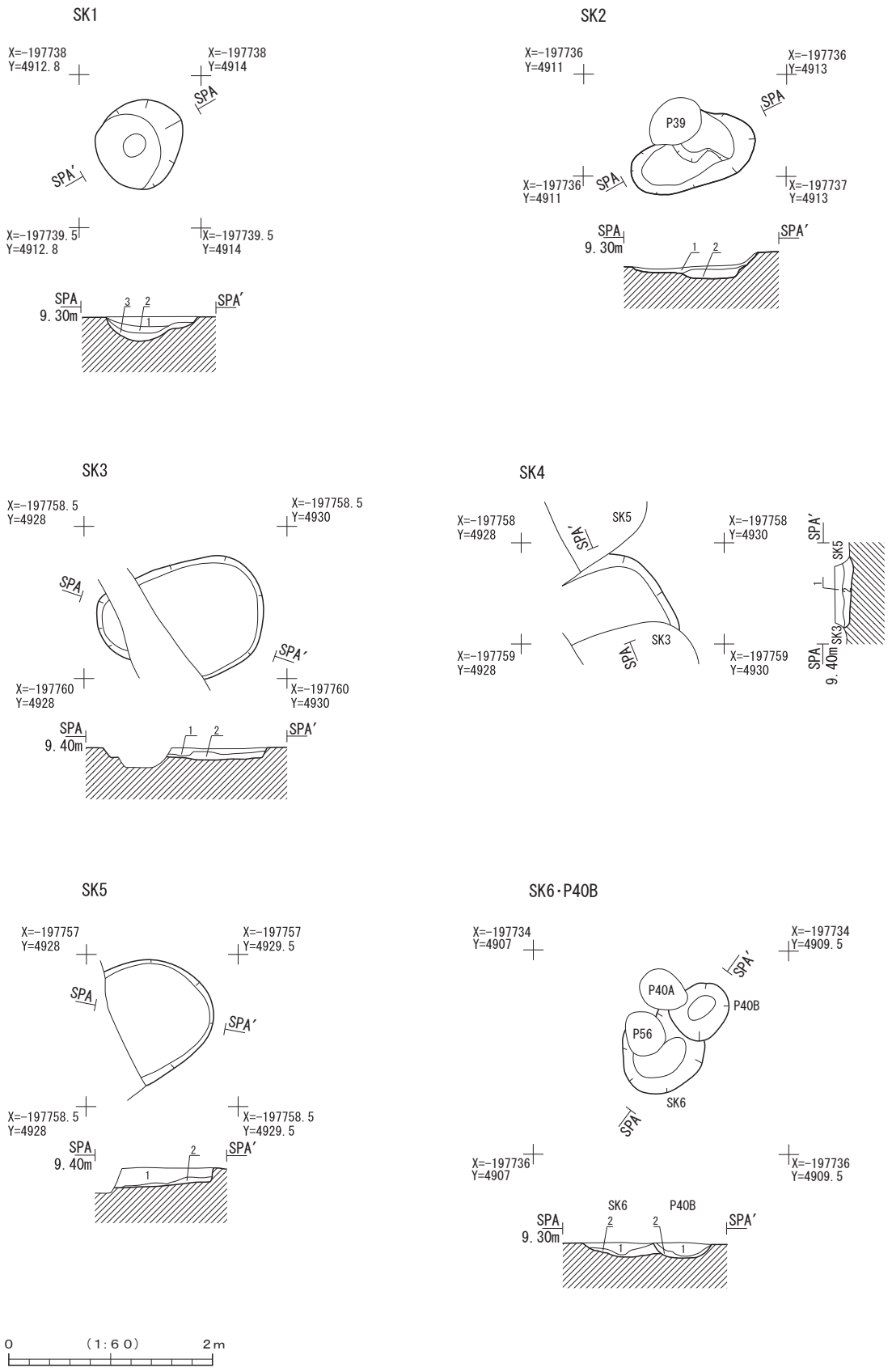
Ｂ区から2基、Ｃ区から3基、Ｄ区から8基、Ｅ区から18基、Ｆ区から5基、合計36基検出した（土器埋設遺構を含まない）。検出面はⅤ層上面である。このうち、SK12については調査時にＤ区とＥ区から検出されたものについて重複して遺構番号を付しており、整理段階で混乱を避けるため、便宜的にＤ区から検出されたものをSK12Ａ、Ｅ区から検出されたものをSK12Ｂとした。検出された位置も別で、時期差を表したものではない。

規模･形状に大きな特徴は認められず、また、殆どの土坑から遺物が出土しているものの、土坑の性格を特定出来るような遺物や出土状況は見出し難いことから、位置や規模、堆積土等の諸属性については、観察表に纏めて記載することとした。

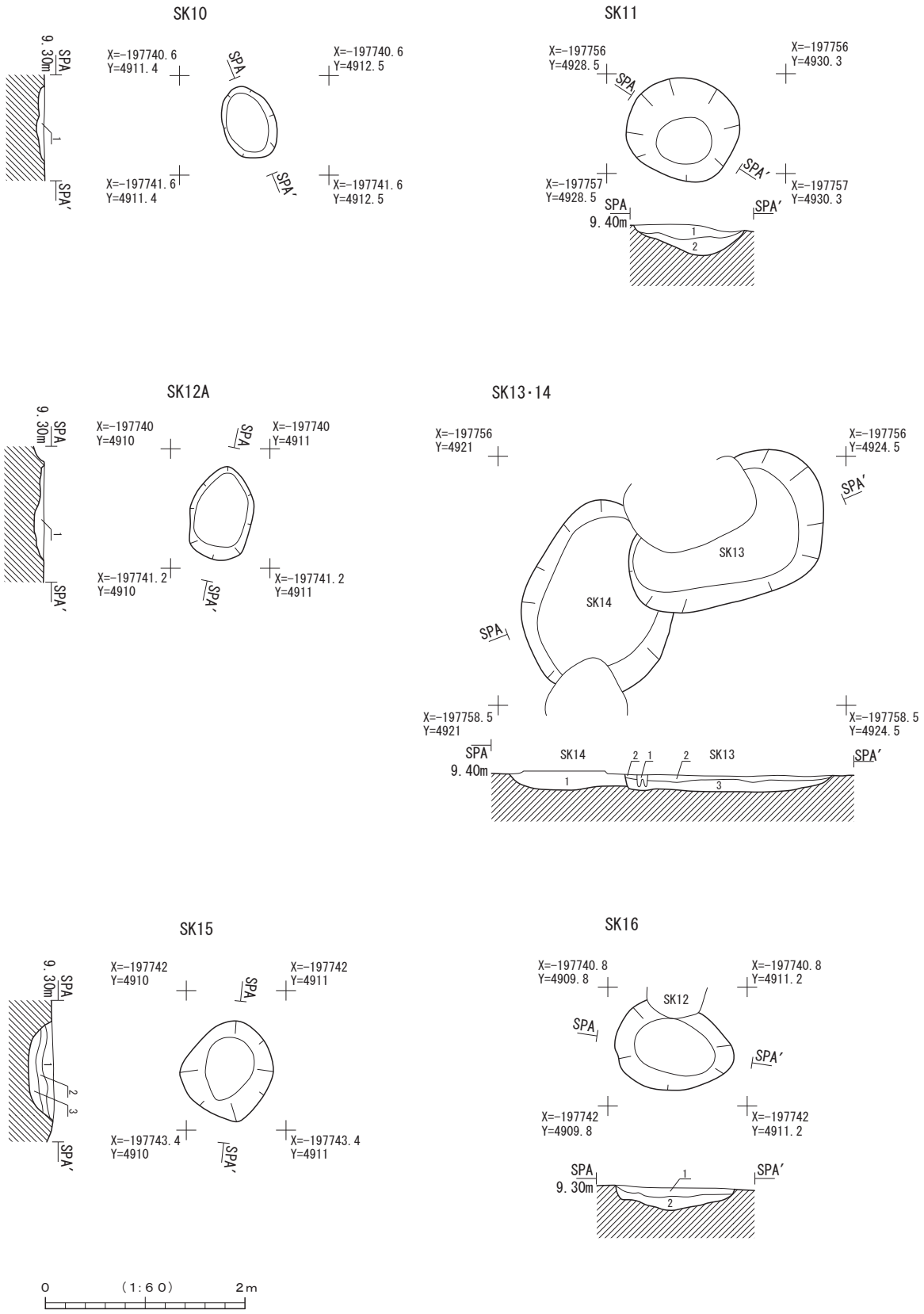
構築位置をみると、SI1竪穴住居跡や、竪穴住居跡の可能性があるSX3性格不明遺構の周辺に密集する傾向が看取される。特にSI1が検出されたＥ区においては、検出数も他の調査区に比べて多いことから、Ｅ区周辺には本来多くの土坑が構築された可能性が考えられる。

上に記したように、ほぼ全ての土坑から遺物が出土したものの、細片資料が多く、掲載した遺物は少ない。

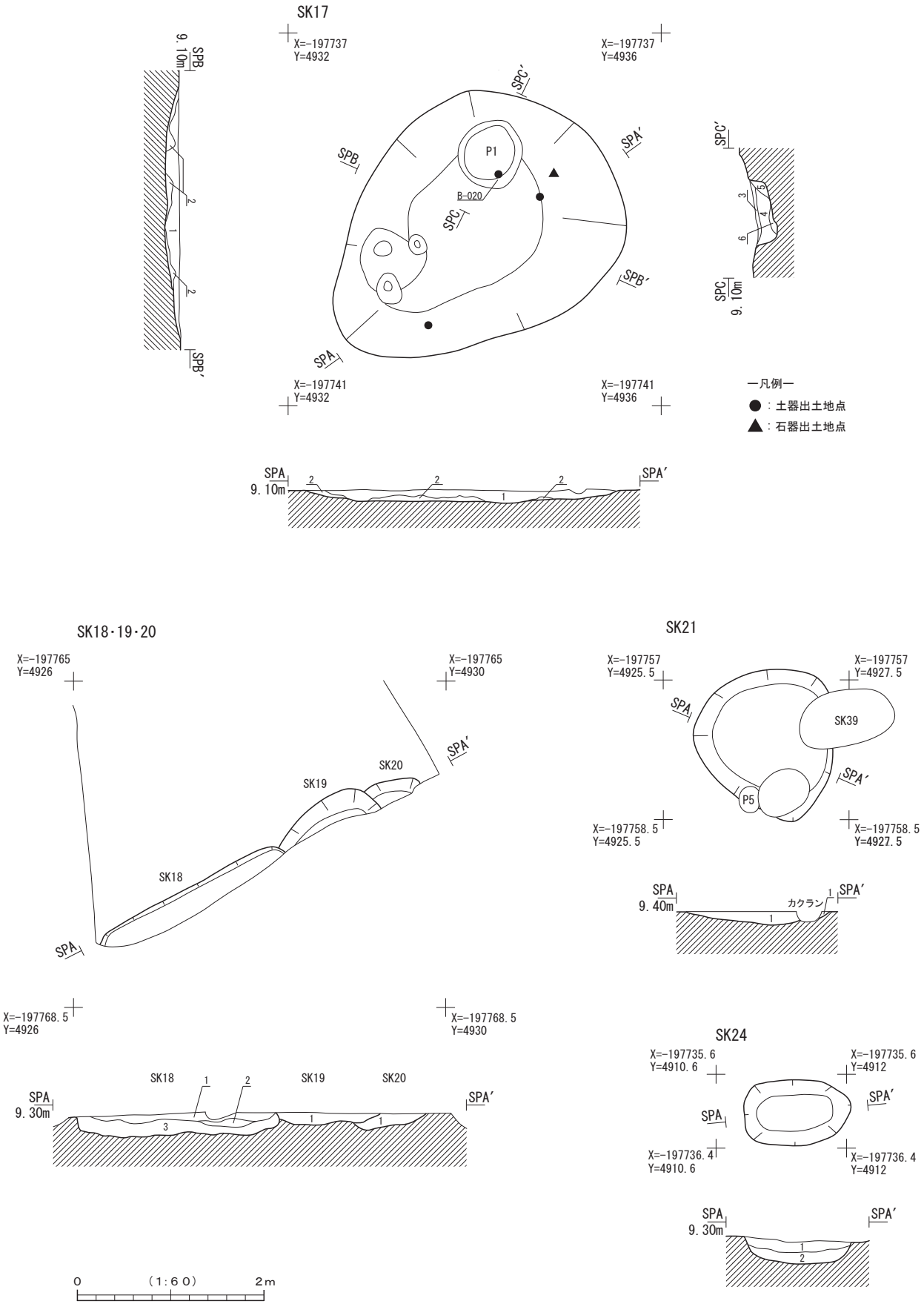
SK2堆積土から出土した壺１点（第313図-1）、SK11堆積土から出土した深鉢1点（同図-2）、SK12Ａ堆積土から出土した壺1点（同図-3）、SK12Ｂ堆積土から出土した壺1点（同図-4）、SK14堆積土から出土した甕1点（同図-5）、SK17Pit1から出土した壺3点（同図-6･7、第314図-1）、鉢1点（第313図-8）、堆積土から出土した石鏃未成品1点（第314図-8）、SK18堆積土から出土した壺1点（同図-2）、蓋1点（同図-3）、SK33堆積土4層から出土した壺1点（同図-4）、SK36堆積土から出土した甕1点（同図-5）、SK38堆積土から出土した甕1点（同図-6）、SK39堆積土から出土した甕1点（同図-7）を掲載した。土器はいずれも弥生時代中期の桝形囲式に比定される。SK11堆積土から出土した深鉢（第314図-2）は、体部外面に横位直線文の他、菱形文と鉤形文の組み合わせが施文されており、このような文様が施文される土器は、今回の調査ではこの一点のみである。第314図-8は石鏃未成品である。尖端部を欠損している。表裏両面は平坦剥離で整形されており、裏面中央部に素材面を残している。両面の中央の稜は器軸に沿っていない。断面形は菱形を呈している。石材は流紋岩である。この他、第403･463図には、SK42･43から出土した接合資料を掲載した。


SK1
X=-197738
Y=4912.8
X=-197738
Y=4914
SPA
SPA′
X=-197739.5
Y=4912.8
X=-197739.5
Y=4914
SPA
9.30m
SPA′
SK2
X=-197736
Y=4911
X=-197736
Y=4913
P39
X=-197736
Y=4911
X=-197737
Y=4913
SPA
9.30m
SPA′
SK3
X=-197758.5
Y=4928
X=-197758.5
Y=4930
X=-197760
Y=4928
X=-197760
Y=4930
SPA
9.40m
SPA′
SK4
X=-197758
Y=4928
SK5
X=-197758
Y=4930
X=-197759
Y=4928
SK3
X=-197759
Y=4930
SPA
9.40m
SPA′
SK5
X=-197757
Y=4928
X=-197757
Y=4929.5
X=-197758.5
Y=4928
X=-197758.5
Y=4929.5
SPA
9.40m
SPA′
SK6・P40B
X=-197734
Y=4907
X=-197734
Y=4909.5
P40A
P40B
P56
SK6
X=-197736
Y=4907
X=-197736
Y=4909.5
SK6
P40B
SPA
9.30m
SPA′
0
(1:60)
2m

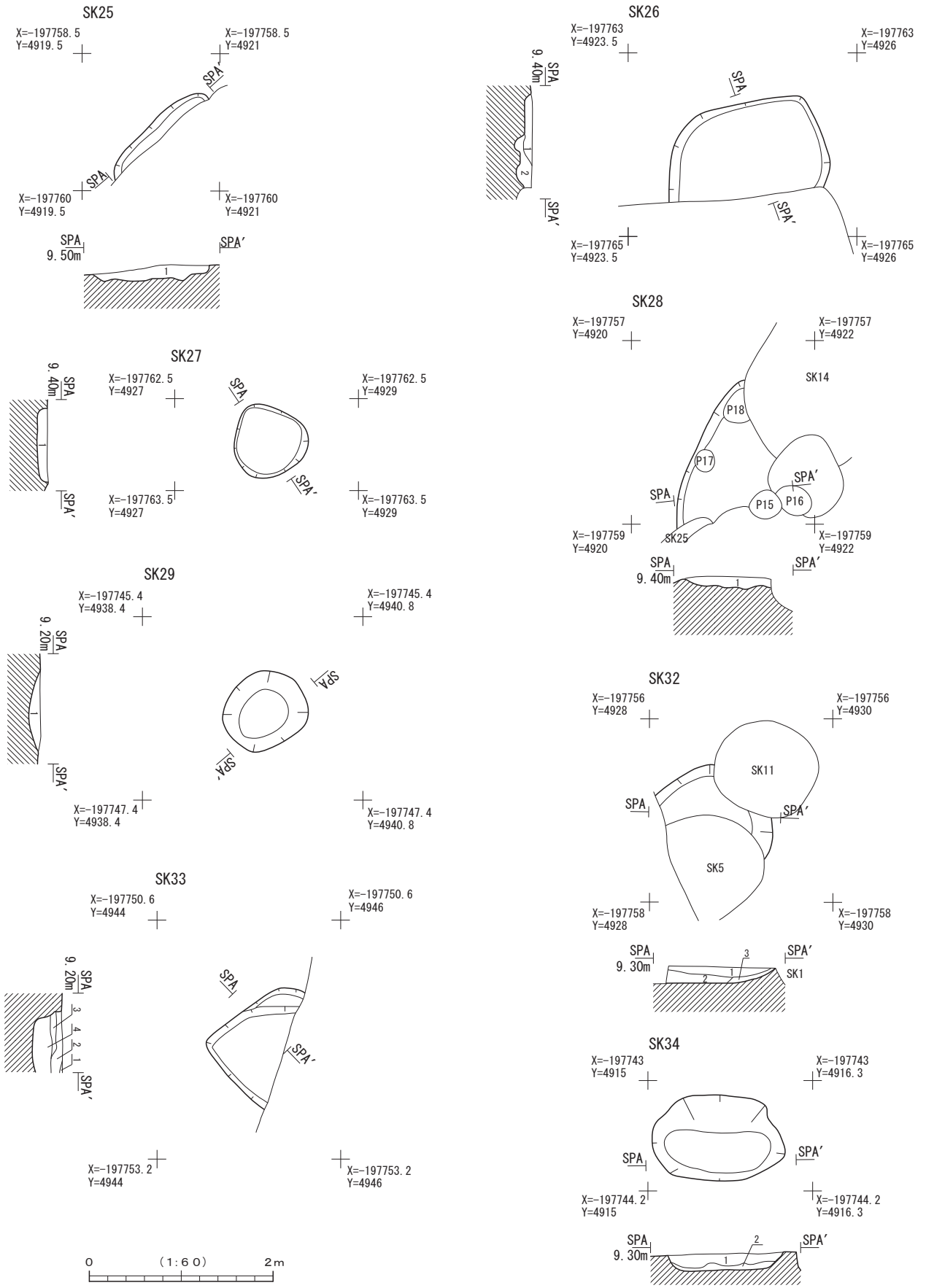
第308図　土坑(1)


SK10
9.30m
SPA
SPA′
X=-197740.6
Y=4911.4
X=-197740.6
Y=4912.5
X=-197741.6
Y=4911.4
X=-197741.6
Y=4912.5
SK11
X=-197756
Y=4928.5
X=-197756
Y=4930.3
X=-197757
Y=4928.5
X=-197757
Y=4930.3
9.40m
SK12A
X=-197740
Y=4910
X=-197740
Y=4911
X=-197741.2
Y=4910
X=-197741.2
Y=4911
SK13・14
X=-197756
Y=4921
X=-197756
Y=4924.5
SK13
SK14
X=-197758.5
Y=4921
X=-197758.5
Y=4924.5
9.40m
SK15
X=-197742
Y=4910
X=-197742
Y=4911
X=-197743.4
Y=4910
X=-197743.4
Y=4911
9.30m
SK16
X=-197740.8
Y=4909.8
X=-197740.8
Y=4911.2
SK12
X=-197742
Y=4909.8
X=-197742
Y=4911.2
9.30m
0
(1:60)
2m

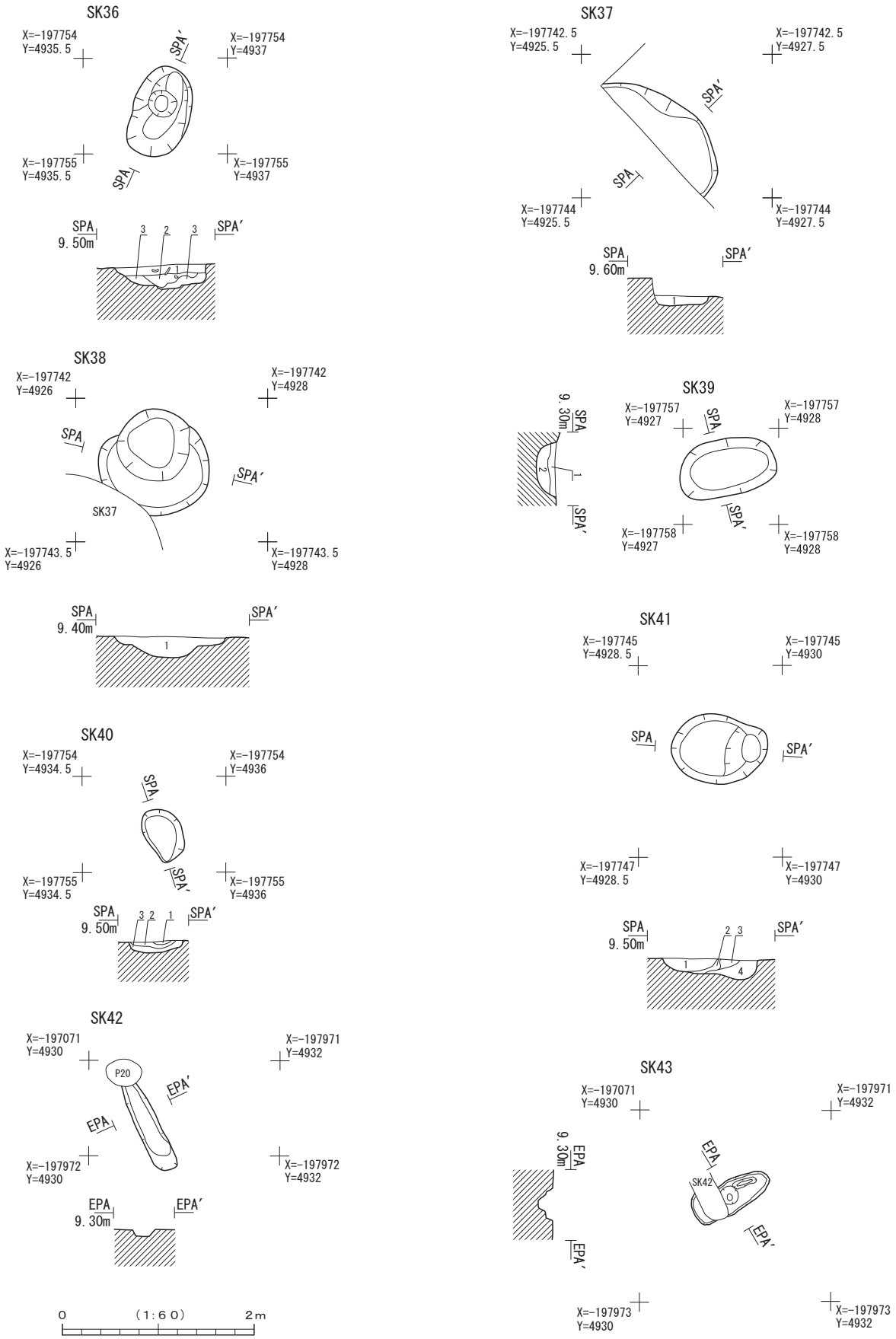
第309図　土坑(2)


SK17
X=-197737
Y=4932
X=-197737
Y=4936
X=-197741
Y=4932
X=-197741
Y=4936
P1
B-020
SPA
SPA′
SPB
SPB′
SPC
SPC′
9.10m
一凡例一
●：土器出土地点
▲：石器出土地点
SK18・19・20
X=-197765
Y=4926
X=-197765
Y=4930
X=-197768.5
Y=4926
X=-197768.5
Y=4930
SK18
SK19
SK20
9.30m
SK21
X=-197757
Y=4925.5
X=-197757
Y=4927.5
X=-197758.5
Y=4925.5
X=-197758.5
Y=4927.5
SK39
P5
9.40m
カクラン
SK24
X=-197735.6
Y=4910.6
X=-197735.6
Y=4912
X=-197736.4
Y=4910.6
X=-197736.4
Y=4912
0
(1:60)
2m

第310図　土坑(3)


SK25
X=-197758.5
Y=4919.5
X=-197758.5
Y=4921
SPA′
SPA
X=-197760
Y=4919.5
X=-197760
Y=4921
SPA
9.50m
SPA′
SK26
X=-197763
Y=4923.5
X=-197763
Y=4926
9.40m
SPA
SPA′
X=-197765
Y=4923.5
X=-197765
Y=4926
SK27
9.40m
X=-197762.5
Y=4927
X=-197762.5
Y=4929
X=-197763.5
Y=4927
X=-197763.5
Y=4929
SK28
X=-197757
Y=4920
X=-197757
Y=4922
SK14
P18
P17
P15
P16
SK25
X=-197759
Y=4920
X=-197759
Y=4922
9.40m
SK29
X=-197745.4
Y=4938.4
X=-197745.4
Y=4940.8
9.20m
X=-197747.4
Y=4938.4
X=-197747.4
Y=4940.8
SK32
X=-197756
Y=4928
X=-197756
Y=4930
SK11
SK5
X=-197758
Y=4928
X=-197758
Y=4930
9.30m
SK1
SK33
X=-197750.6
Y=4944
X=-197750.6
Y=4946
9.20m
X=-197753.2
Y=4944
X=-197753.2
Y=4946
SK34
X=-197743
Y=4915
X=-197743
Y=4916.3
X=-197744.2
Y=4915
X=-197744.2
Y=4916.3
9.30m
0
(1:60)
2m

第311図　土坑(4)


SK36
X=-197754
Y=4935.5
X=-197754
Y=4937
X=-197755
Y=4935.5
X=-197755
Y=4937
SPA
SPA′
9.50m
SK37
X=-197742.5
Y=4925.5
X=-197742.5
Y=4927.5
X=-197744
Y=4925.5
X=-197744
Y=4927.5
9.60m
SK38
X=-197742
Y=4926
X=-197742
Y=4928
SK37
X=-197743.5
Y=4926
X=-197743.5
Y=4928
9.40m
SK39
X=-197757
Y=4927
X=-197757
Y=4928
X=-197758
Y=4927
X=-197758
Y=4928
9.30m
SK40
X=-197754
Y=4934.5
X=-197754
Y=4936
X=-197755
Y=4934.5
X=-197755
Y=4936
9.50m
SK41
X=-197745
Y=4928.5
X=-197745
Y=4930
X=-197747
Y=4928.5
X=-197747
Y=4930
9.50m
SK42
X=-197071
Y=4930
X=-197971
Y=4932
P20
EPA
EPA′
X=-197972
Y=4930
X=-197972
Y=4932
9.30m
SK43
X=-197071
Y=4930
X=-197971
Y=4932
SK42
X=-197973
Y=4930
X=-197973
Y=4932
0
(1:60)
2m

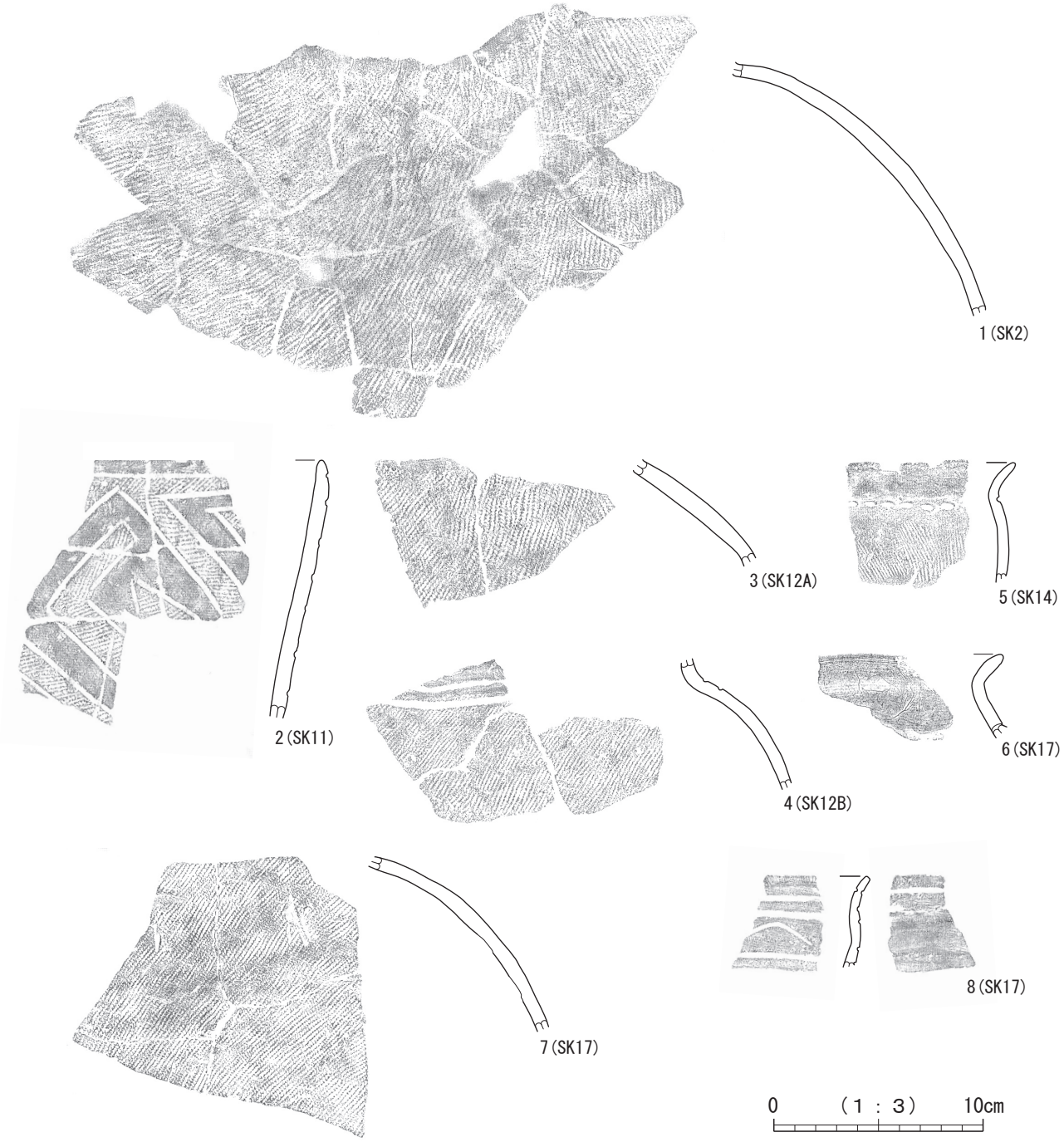
第312図　土坑(5)

土坑観察表（１）

遺構名	検出区	平面形	規模(cm)	深さ(cm)	層位	土色		土性	備考	重複
SK1	D	円形	83×79	26	1	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	地山砂質シルト少量含む	なし
					2	10YR4/4	褐色	シルト	地山砂質シルト少量、10YR3/1黒褐色シルトブロック(径10～20mm)を微量含む	
					3	2.5Y4/2	暗灰黄色	シルト	地山砂質シルト少量、10YR3/1黒褐色シルトブロック(径10～20mm)を全体に含む	
SK2	D	長楕円形	123×(171)	26	1	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	地山砂質シルト少量、10YR4/2灰黄褐色シルトブロック(径10～20mm)を全体に少量含む	P39に切られる
					2	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	1層と類似、地山砂質シルト微量、10YR4/2灰黄褐色シルトブロック(径10～20mm)を微量含む	
SK3	E	楕円形	165×117	11	1	2.5Y3/1	黒褐色	砂質シルト	地山シルト少量、炭化物(径2～3mm)微量、焼土粒極微量含む	SK4を切る
					2	2.5Y6/4	にぶい黄色	砂質シルト	2.5Y4/1黄灰色ブロックを少量含む	
SK4	E	不明	(106)×(106)	15	1	2.5Y3/1	黒褐色	砂質シルト	黒色土ブロック(径5～10mm)、炭化物(径1～2mm)微量含む	SK3･5に切られる
					2	2.5Y6/2	灰黄色	砂質シルト	2.5Y6/4にぶい黄色土少量含む	
SK5	E	楕円形?	118×(97)	9	1	2.5Y3/14	黒褐色	砂質シルト	灰白色土粒(径1～2mm)少量、炭化物(径2～3mm)微量含む	SK4･32に切られる、P67を切る
					2	2.5Y6/2	灰黄色	砂質シルト	2.5Y6/4にぶい黄色土少量含む	
SK6	D	不整楕円形	(83)×81	10	1	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	地山砂質シルト微量、10YR4/1褐灰色シルトブロック(径2～4cm)微量含む	P40･56に切られる
					2	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	地山砂質シルト少量含む	
SK7	-	-	-	-	-	-	-	-	土器埋設遺構	-
SK8	-	-	-	-	-	-	-	-	土器埋設遺構	-
SK9	-	-	-	-	-	-	-	-	土器埋設遺構	-
SK10	D	楕円形	75×55	12	1	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	10YR5/6黄褐色砂質シルト少量含む	なし
SK11	E	円形	110×102	30	1	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂質土	炭化物(径1～2mm)微量、白色粒(径1～2mm)少量含む	SK32を切る
					2	2.5Y3/1	黒褐色	砂質土	炭化物(径～5mm)炭化物極微量、鉄分少量、10YR8/1灰白色粒含む	
SK12A	D	楕円形	95×63	9	1	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	10YR5/6黄褐色砂質シルト少量含む	SK16を切る
SK12B	E	楕円形	107×80	14	1	2.5Y4/4	ｵﾘｰﾌﾞ褐色	砂質シルト	にぶい黄色土粒微量、炭化物(径1～2mm)極微量含む	P48に切られる
					2	2.5Y6/4	にぶい黄色	砂質シルト	黒色土ブロック(径10～30mm)、鉄分多量含む	
SK13	E	楕円形	215×138	19	1	10YR2/3	黒褐色	粘質シルト		SK14を切る
					2	10YR3/3	暗褐色	砂質シルト	炭化物微量、10YR8/1灰白色粒、鉄分含む	
					3	2.5Y6/4	にぶい黄色	砂質土	黒色土ブロック(径～10mm)微量、鉄分微量含む	
SK14	E	楕円形	195×150	16	1	2.5Y4/3	暗灰黄色	砂質シルト	黒色土ブロック微量、炭化物微量含む	SK13に切られる
SK15	D	隅丸方形	94×84	27	1	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	地山砂質シルト少量、10YR3/1黒褐色シルトブロック(径10～20mm)微量含む	なし
					2	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	地山砂質シルト少量、10YR3/1黒褐色シルトブロック(径10～20mm)微量含む	
					3	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	2層類似、地山砂質シルト微量含む	
SK16	D	楕円形	120×(80)	24	1	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	地山砂質シルト微量含む	SK12に切られる、P49を切る
					2	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	地山砂質シルト少量	
SK17	C	不整楕円形	340×264	20	1	10YR3/2	黒褐色	シルト	黄褐色度ブロック(径1mm)を極多量、炭化物(径2～5mm)多量含む。	なし
					2	10YR5/4	にぶい黄褐色	シルト	黄褐色土層主体、褐色土少量含む	
SK17 Pit1	C	円形	70×65	29	1	10YR4/1	褐灰色	シルト	黄褐色土ブロック(径2～3mm)少量、炭化物(径1～2mm)含む	なし
					2	10YR4/1	褐灰色	シルト	黄白色土ブロック(径100mm)、炭化物(径5～15mm)含む	
					3	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	黄白色土ブロック多量、細砂粒極多量含む	
					4	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	炭化物(径1mm)少量、黄褐色土粒極多量含む	
					5	10YR5/6	黄褐色	シルト	地山層、一部グライ化し白色化したブロック含む(掘り過ぎ)	
SK18	E	不明	(216)×(50)	23	1	10YR3/1	黒褐色	砂質土	炭化物(径1～2mm)微量、にぶい黄橙色砂質土ブロック(径2～10mm)少量含む	SK19を切る
					2	10YR4/2	灰黄褐色	砂質土	炭化物(径1～5mm)、焼土粒(径1～2mm)極微量含む	
					3	10YR5/2	灰黄褐色	シルト	焼土粒(径2～3mm)極微量、灰白色粒(径1～2mm)少量、10YR8/4浅黄橙色ブロックを斑紋状に少量含む	
SK19	E	不明	(106)×(32)	10	1	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	炭化物(径1～3mm)微量、鉄分少量、灰白色粒含む	SK18に切られる、SK20を切る

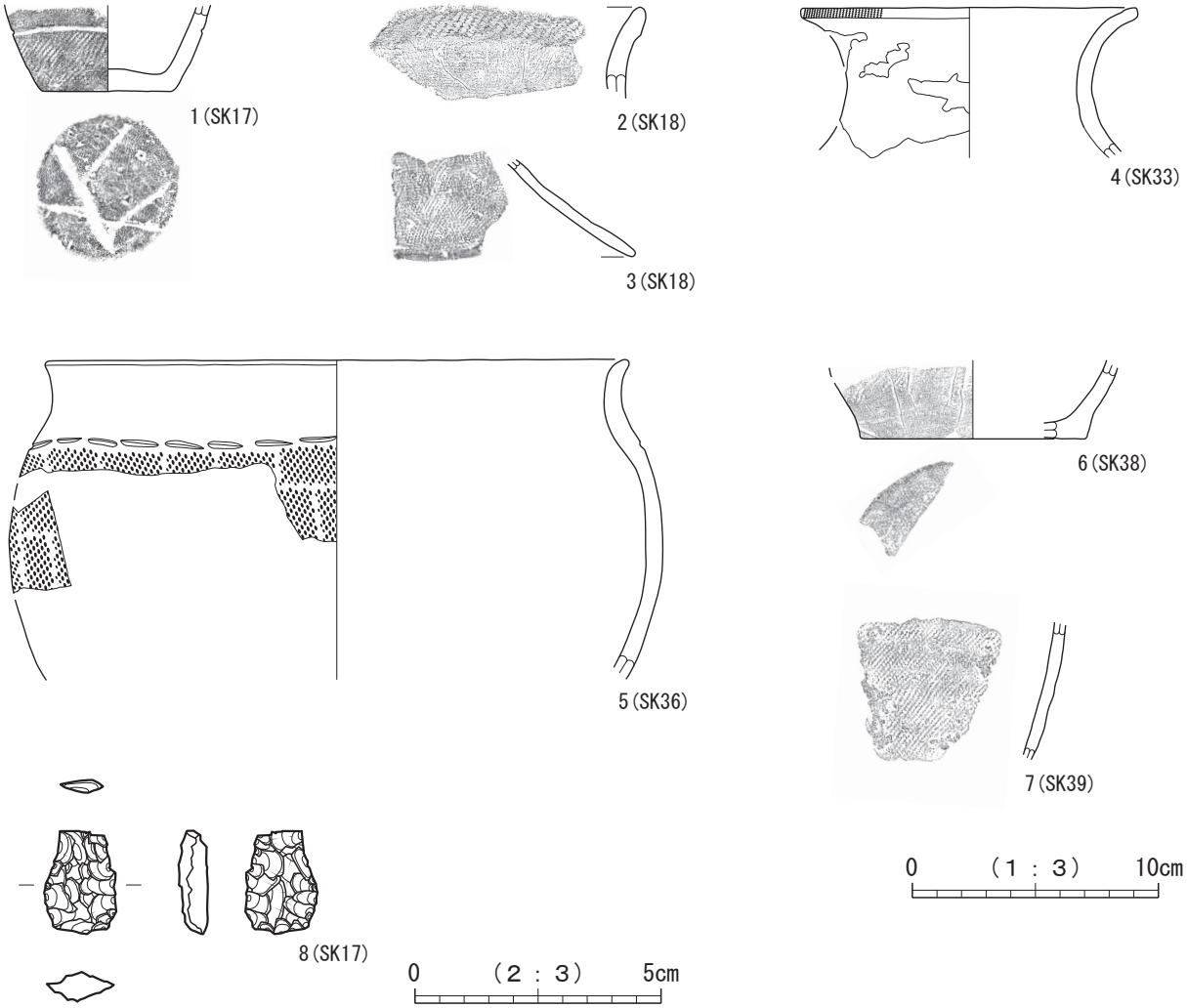
土坑観察表（２）

遺構名	検出区	平面形	規模(cm)	深さ(cm)	層位	土色		土性	備考	重複
SK20	E	不明	(50)×(26)	10	1	10YR4/1	褐灰色	砂質シルト	10YR8/4浅黄橙色ブロック少量、炭化物(径1～2mm)少量含む	SK19に切られる
SK21	E	不整円形	165×152	13	1	10YR4/2	灰黄褐色	砂質土	炭化物(径1～3mm)極微量、鉄分微量、10YR4/1褐灰色土粒含む	SK39、P31･69に切られる
SK22	-	-	-	-	-	-	-	-	欠番(SX1に変更)	-
SK23	-	-	-	-	-	-	-	-	欠番(SX2に変更)	-
SK24	E	隅丸長方形	115×71	27	1	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	10YR4/1褐灰色シルトブロック(径10～20mm)微量、地山砂質シルト微量含む	なし
					2	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	10YR4/1褐灰色シルトブロック(径10～20mm)微量、地山砂質シルト微量、含む	
SK25	E	不明	(133)×(19)	19	1	10YR3/1	黒褐色	砂質土	10YR8/1灰白色土粒少量、炭化物(径1～5mm)微量、鉄分(径2～3mm)微量含む	SK28を切る
SK26	E	隅丸長方形?	180×(97)	15	1	2.5Y5/2	暗灰黄色	砂質シルト	2.5Y8/1灰白色土ブロック少量、炭化物微量含む	なし
					2	2.5Y6/2	灰黄色	砂質シルト	褐灰色粒少量、鉄分少量含む	
SK27	E	円形	85×80	13	1	2.5Y5/3	黄褐色	砂質シルト	炭化物(径2mm)微量、鉄分少量含む	なし
SK28	E	不明	(180)×(93)	19	1	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	10YR7/4にぶい黄橙色土粒少量、炭化物(径～2mm)微量含む	SK14･25に切られる
SK29	C	楕円形	93×79	10	1	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	炭化物(径1～2mm)微量、全体的にグライ化	なし
SK30	-	-	-	-	-	-	-	-	平面図･断面図なし	-
SK31	-	-	-	-	-	-	-	-	土器埋設遺構	-
SK32	E	不明	(123)×(75)	22	1	10YR2/3	黒褐色	砂質シルト	にぶい黄色土粒(径～20mm)微量、炭化物(径3mm)微量含む	SK11に切られる
					2	10YR3/1	黒褐色	砂質シルト	褐灰色土ブロック(径10～20mm)少量、炭化物(径2～20mm)微量含む	
					3	10YR3/4	暗褐色	砂質土	10YR8/1灰白色土ブロック(径10mm)少量、炭化物極少量含む	
SK33	C	不明	(122)×(87)	29	1	10YR3/3	暗褐色	シルト	炭化物(径5mm)含む。	SK23に切られる
					2	10YR5/2	灰黄褐色	シルト	黄褐色土ブロック(径1mm)多量、炭化物(径2～3mm)少量含む。グライ化	
					3	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	黄褐色土粒多量、炭化物(径2～3mm)多量含む	
					4	10YR6/2	灰黄褐色	砂質シルト	黄褐色土ブロック(径2mm)少量、炭化物(径5～20mm)含む。全体的にグライ化し灰白色化	
SK34	D	不整楕円形	143×95	26	1	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	地山砂質シルト微量、10YR3/1黒褐色シルトブロック(径10～20mm)少量、炭化物(径1～2mm)微量含む	なし
					2	10YR4/4	褐色	砂質シルト	10YR3/1黒褐色シルトブロック微量、炭化物(径1～2mm)微量含む	
SK35	-	-	-	-	-	-	-	-	欠番(SX3に変更)	-
SK36	F	楕円形	95×61	27	1	10YR3/3	暗褐色	砂質シルト	10YR4/4褐色砂質シルトブロック微量、10YR4/3にぶい黄褐色シルトブロック少量、炭化物粒微量含む	なし
					2	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	10YR4/4褐色砂質シルト小ブロック、10YR4/3黄褐色砂質シルト小ブロック含む	
					3	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	10YR4/4褐色砂質シルト少量含む	
SK37	F	不明	(137)×(53)	12	1	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト小ブロック少量含む	SK38を切る
SK38	F	円形	114×111	17	1	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	10YR4/4褐色砂質シルト少量含む	SK37に切られる
SK39	E	長楕円形	102×59	35	1	10YR3/3	暗褐色	砂質土	10YR8/1白色土粒少量、炭化物(径1～2mm)微量含む	SK21を切る
					2	10YR3/4	暗褐色	砂質土	10YR8/1灰白色粒微量、炭化物(径1～5mm)微量、焼土粒(径5mm)極微量、鉄分微量含む	
SK40	F	楕円形	57×40	12	1	10YR3/3	暗褐色	砂質シルト	炭化物粒少量、白色小礫粒含む	なし
					2	10YR4/4	褐色	砂質シルト	10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルトブロック含む	
					3	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	10YR5/2灰黄褐色砂質シルトブロック微量含む	
SK41	F	楕円形	100×73	20	1	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト小ブロック少量含む	なし
					2	10YR3/3	暗褐色	砂質シルト		
					3	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	炭化物少量、10YR3/3暗褐色砂質シルトブロック少量含む	
					4	10YR3/3	暗褐色	砂質シルト	10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト小ブロック微量含む	
SK42	B	長楕円形	(97)×24	7	-	-	-	-	断面図なし	SK43を切る
SK43	B	長楕円形	87×34	17	-	-	-	-	断面図なし	SK42に切られる



図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構		種別	器種	部位	外面調整・文様	内面調整・文様	備　考	写真図版
1	B-012	C区	SK2	堆積土	弥生土器	壺	頸下端～体上半	体上半:LR縄文横位回転→頸下端:ミガキ	ミガキ(粗)		125
2	B-013	E区	SK11	堆積土	弥生土器	深鉢	口縁～体上半	沈線→LR縄文→沈線→ミガキ(横位直線文+菱形文+鈎形文)	横位ミガキ	体部内面炭化物付着	125
3	B-015	D区	SK12A	堆積土	弥生土器	壺	頸下端～体上半	体:LR縄文横位回転→頸下端:ミガキ	ミガキ		125
4	B-014	E区	SK12B	堆積土	弥生土器	壺	頸下端～体上半	体:LR縄文横位回転→頸下端:沈線→ミガキ(横位直線文)	横位ナデ		125
5	B-016	E区	SK14	堆積土	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ→口唇・体:植物茎回転文横位・斜位回転→体上端:列点刺突(左→右)→口～頸部ミガキ(粗)	横位ミガキ(密)		125
6	B-019	C区	SK17	Pit1	弥生土器	壺?	口縁～頸	口:ヨコナデ→頸:横位ミガキ(粗)	口:ヨコナデ→口～頸:横位ミガキ(粗)		125
7	B-020	C区	SK17	Pit1	弥生土器	壺	体上半	LR縄文横位回転	ミガキ(粗)		125
8	B-017	C区	SK17	Pit1	弥生土器	鉢	口縁～体上半	沈線→口唇・体:植物茎回転文→ミガキ(横位直線文+波状文)	口:沈線→口～体上半:ミガキ(密)(横位直線文)		125

第313図　土坑出土遺物(1)



図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構		種別	器種	部位	外面調整・文様	内面調整・文様	備　考	写真図版
1	B-018	C区	SK17	Pit1	弥生土器	壺or甕	体下半～底	体下半:LR縄文横位回転→沈線→ミガキ(横位直線文)、底:木葉痕	ミガキ(粗)	底径(5.3) cm	125
2	B-022	E区	SK18	堆積土	弥生土器	壺	口縁～頸	口:LR縄文横位回転→頸:ミガキ	ナデ→ミガキ(粗)		125
3	B-021	E区	SK18	堆積土	弥生土器	蓋	体下半～口縁	体下半:LR縄文縦位・横位回転→口:ミガキ	横位ミガキ(密)		125
4	B-040	C区	SK33	4層	弥生土器	壺	口縁～頸	口:ナデ→口唇:植物茎回転文横位回転、頸:ミガキ	横位ミガキ	口径(13.8) cm、頸部内面一部剥離	125
5	B-041	F区	SK36	堆積土	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ→口唇・体:LR縄文横位回転→体上端:列点刺突(破線、左→右)→口:ミガキ(粗)	口:ヨコナデ→横位ミガキ、体:ミガキ(密)	口径23.6cm	126
6	B-042	F区	SK38	堆積土	弥生土器	甕	体下半～底	体下半:LR縄文横位回転→体下端:ミガキ、底:織布痕	ミガキ(密)	底径(9.0) cm	126
7	B-043	E区	SK39	堆積土	弥生土器	甕or蓋	体	LR縄文横位回転	横位ミガキ(密)	内外面炭化物付着	126

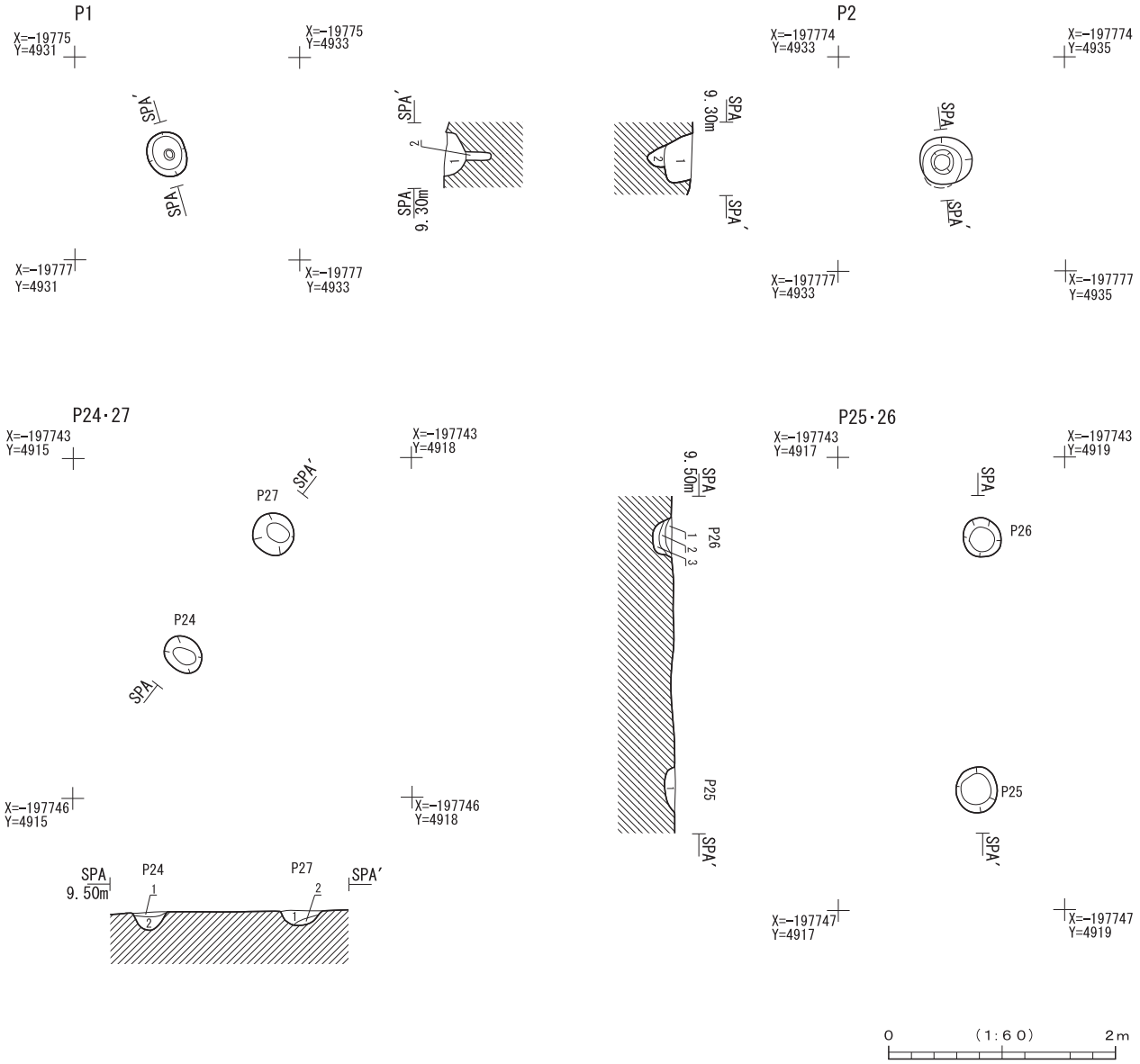
図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構	層位	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考	写真番号
8	Ka-003	C区	SK17	堆積土	打製石器	石鏃	-	(2.0)×1.4×0.6	1.64	流紋岩	未成品、厚幅比0.42	126

第314図　土坑出土遺物(2)

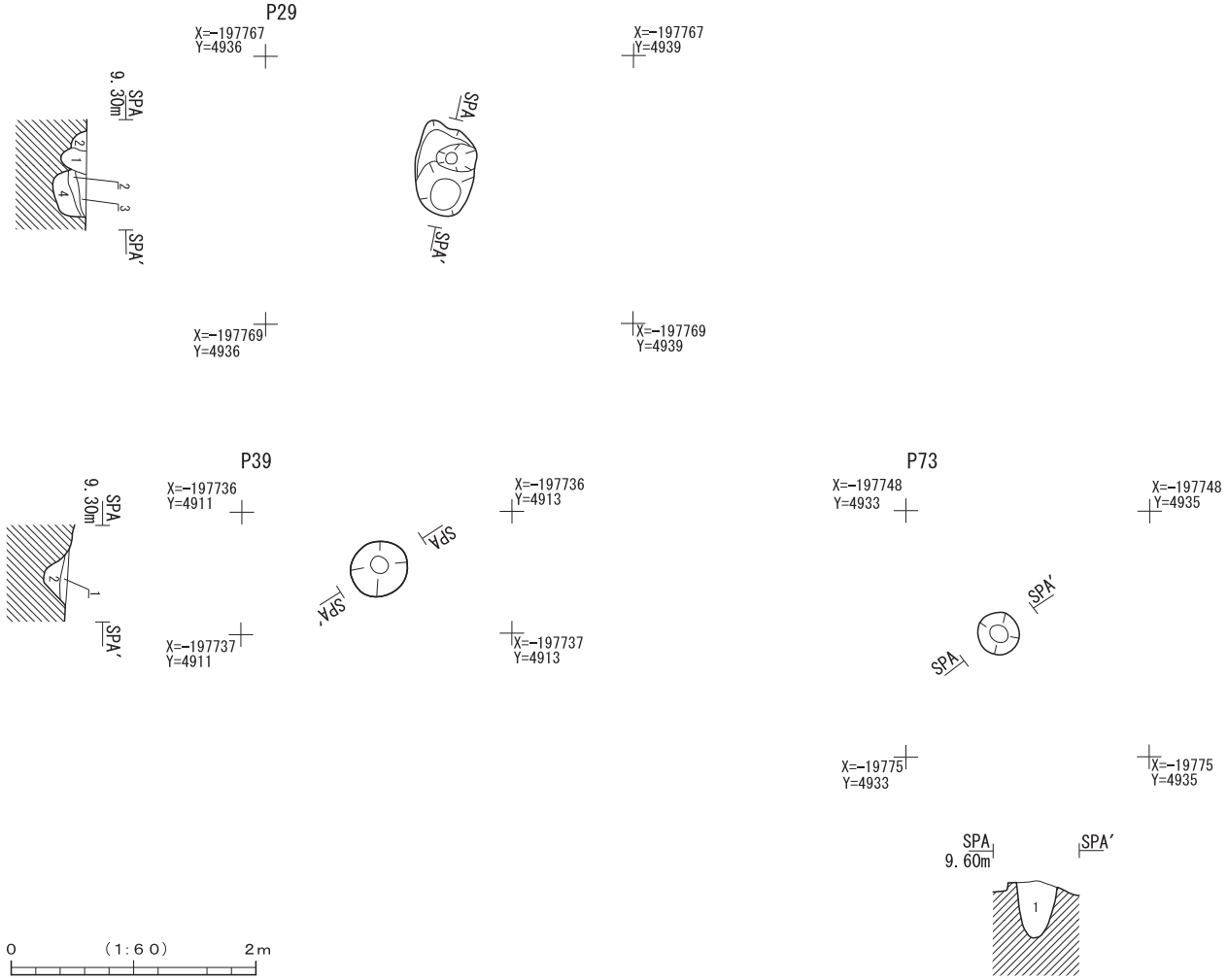
(5)　ピット（第290・298・315～317図）

Ｂ区から30基、Ｄ区から21基、Ｅ区から20基、Ｆ区から11基、合計82基検出した。検出面はＶ層上面である。平面形状は大部分が円形ないし楕円形を呈し、規模は上端径20～40cm前後、深さ20～30cm程を測るものが多い。位置や出土遺物に大きな特徴が認められず、個々の性格についても不明と言わざるを得ないが、中には第314図に掲載したＰ1･Ｐ2のように底面に小穴を伴う柱穴的性格が想定されるものが少なからず存在する。調査時に断面図を作成したものについては個別の図面を掲載し、その他については観察表に纏めて記載した。

出土遺物として、Ｐ4･18･63から出土した弥生土器を掲載した（第317図）。1は壺の底部で、焼成後に外面側から穿孔された可能性がある。2は内外面がミガキ調整後に赤彩される。3は横位直線文と連弧文が施文される鉢で、文様内にはＬＲ縄文が充填される。いずれも弥生時代中期の桝形囲式に比定される。



第315図　ピット(1)



第316図　ピット(2)

ピット観察表(1)

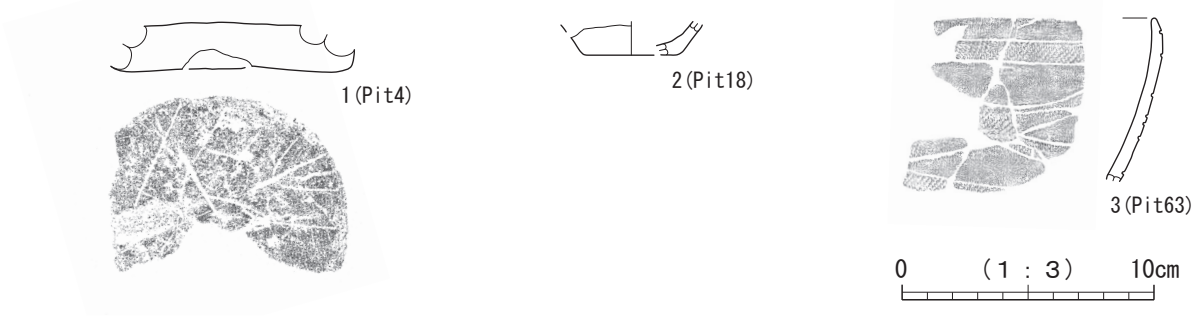
遺構名	検出区	平面形	規模(cm)	深さ(cm)	層位	土色		土性	備考	重複
P1	B	円形	45×45	40	1	10YR3/3	暗褐色	砂質シルト	10YR6/6明黄褐色砂質土少量、10YR8/1灰白色土ブロック(径5～10mm)少量含む	なし
					2	7.5YR2/1	黒色	砂質シルト	炭化物微量、10YR6/2灰黄褐色粒含む	
P2	B	楕円形	40×35	45	1	10YR3/3	暗褐色	砂質シルト	10YR8/1灰白色土粒少量、鉄分少量含む	なし
					2	10YR2/1	黒色	粘土質シルト	灰白色土ブロック(径5～10mm)少量含む	
P3	B	円形	25×24	10	1	-	黒褐色	砂質シルト	地山ブロック少量含む	なし
P4	B	四角形	27×25	36	1	-	褐灰色	砂質シルト	地山ブロック少量含む	なし
P5	B	楕円形	30×27	31	1	-	黒褐色	砂質シルト	地山ブロック、褐灰色粘土少量含む	なし
P6	B	楕円形	25×20	16	1	-	褐灰色	砂質シルト	地山ブロック含む	なし
P7	B	楕円形	19×16	22	1	-	黒褐色	砂質シルト	地山ブロック少量含む	なし
P8	B	円形	20×20	15	1	-	黒褐色	砂質シルト	地山ブロック少量含む	なし
P9	B	円形	35×31	18	1	-	黒褐色	砂質シルト	地山ブロック、焼土粒少量含む	なし
P10	B	円形	14×12	12	1	-	褐色	砂質シルト	地山ブロック少量含む	なし
P11	B	円形	25×24	16	1	-	黒褐色	砂質シルト	地山ブロック少量、灰褐色土粒微量含む	なし
P12	B	楕円形	43×34	9	1	-	暗褐色	砂質シルト	地山ブロック少量含む	なし
P13	B	楕円形	65×55	14	1	-	暗褐色	砂質シルト	地山ブロック少量含む	なし
P14	B	楕円形	42×35	14	1	-	黒褐色	砂質シルト	地山ブロック少量、炭化物粒微量含む	なし
P15	B	楕円形	30×22	23	1	-	黒色	砂質シルト	地山ブロック、炭化物粒微量含む	なし
P16	B	楕円形	38×25	18	1	-	黒色	砂質シルト	地山ブロック、炭化物粒微量含む	なし
P17	B	楕円形	32×26	14	1	-	黒色	砂質シルト	灰色粘土、マンガン含む	なし
P18	B	不明	(43)×23	14	1	-	黒褐色	砂質シルト	地山ブロック微量含む	P23との新旧不明
P19	B	楕円形	62×54	23	1	-	黒褐色	砂質シルト	地山ブロック少量含む	なし
P20	B	楕円形	37×30	7	1	-	黒褐色	砂質シルト	地山ブロック少量含む	SX1を切る
P21	B	楕円形	40×35	5	1	-	黒褐色	砂質シルト	地山ブロック少量含む	なし
P22	B	楕円形	35×22	17	1	-	黒褐色	砂質シルト	地山ブロック少量含む	なし
P23	B	楕円形?	30×(22)	12	1	-	黒褐色	砂質シルト	地山ブロック少量含む	P18との新旧不明

ピット観察表（2）

遺構名	検出区	平面形	規模(cm)	深さ(cm)	層位	土色		土性	備考	重複
P24	D	円形	35×33	18	1	10YR3/3	暗褐色	シルト	地山砂質シルト微量、10YR4/2灰黄褐色シルト小ブロック(径10～20mm)少量全体に含む	なし
					2	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂質シルト	地山砂質シルトブロック微量含む	
P25	D	円形	45×40	8	1	10YR3/3	暗褐色	砂質シルト	地山砂質シルト少量含む	なし
P26	D	円形	35×32	18	1	10YR3/3	暗褐色	砂質シルト	地山砂質シルト微量、10YR3/1黒褐色シルト小ブロック(径1～3mm)微量含む	なし
					2	10YR3/2	黒褐色	砂質シルト	地山砂質シルト微量含む	
					3	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	地山砂質シルト少量、10YR3/1黒褐色シルトブロック含む	
P27	D	円形	38×38	13	1	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	10YR3/2黒褐色シルト小ブロック(径1～3mm)微量含む	なし
					2	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	1層と類似、地山砂質シルトブロックが1層より多量、10YR3/2黒褐色シルトブロック(径8～10mm)微量含む	
P28	B	楕円形	50×32	16	1	-	暗褐色	砂質シルト	地山ブロック微量含む	なし
P29	B	楕円形	70×45	33	1	10YR6/2	灰黄褐色	砂質シルト	褐灰色土ブロック(径3～5mm)、黒褐色土ブロック(径～30mm)、炭化物(径～3mm)微量含む	なし
					2	10YR5/2	灰黄褐色	砂質シルト	灰白色土ブロック(径3～5mm)少量、炭化物極微量含む	
					3	10YR5/2	灰黄褐色	砂質シルト	2層と類似、焼土粒微量含む	
					4	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂質シルト	黒褐色粘土ブロック少量、炭化物微量含む	
P30	B	楕円形	34×27	4	1	-	黒褐色	砂質シルト	地山ブロック、炭化物粒微量含む	なし
P31	E	円形	53×54	20	1	-	暗褐色	砂質シルト		SK21を切る
P32	-	-	-	-	-	-	-	-	欠番	-
P33	E	楕円形	40×30	15	1	-	暗褐色	砂質シルト		なし
P34	E	楕円形	20×17	11	1	-	暗褐色	砂質シルト		なし
P35	E	楕円形	76×55	12	1	-	黒褐色	砂質シルト	炭化物粒少量含む	なし
P36	-	-	-	-	-	-	-	-	欠番	-
P37	D	円形	36×35	6	1	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂質シルト		なし
P38	D	円形	27×27	8	1	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	10YR3/2黒褐色シルトブロック少量含む	なし
P39	D	楕円形	55×44	14	1	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	地山砂質シルト微量含む	SK2を切る
					2	10YR3/3	暗褐色	シルト	地山シルト微量含む	
P40A	D	楕円形	56×48	13	1	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	地山砂質シルト微量含む	SK6･P40Bに切られる
					2	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂質シルト	地山砂質シルト少量含む	
P40B	D	楕円形	50×38	18	1	-	暗褐色	砂質シルト	地山ブロック少量含む	SK6･P40Aを切る
P41	D	円形	25×25	10	1	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	10YR3/2黒褐色シルトブロック少量含む	なし
P42	B	楕円形	38×24	9	1	-	黒色	シルト	炭化物粒微量含む	なし
P43	D	円形	35×31	10	1	-	暗褐色	砂質シルト	地山ブロック少量含む	なし
P44	D	円形	28×28	4	1	-	暗褐色	砂質シルト	地山ブロック微量含む	なし
P45	D	楕円形	30×25	10	1	-	暗褐色	砂質シルト	地山ブロック微量含む	なし
P46	D	円形	24×24	16	1	-	暗褐色	砂質シルト	地山ブロック微量含む	なし
P47	-	-	-	-	-	-	-	-	欠番	-
P48	E	楕円形	55×49	18	1	-	暗褐色	砂質シルト	地山ブロック、炭化物微量含む	SK12を切る
P49	D	円形?	33×(26)	11	1	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	10YR4/4褐色シルトブロック少量含む	SK16に切られる
P50	B	楕円形	46×32	20	1	-	黒褐色	砂質シルト		なし
P51	B	楕円形	35×25	12	1	-	黒褐色	シルト		なし
P52	E	隅丸方形	46×32	27	1	-	黒褐色	砂質シルト	炭化物微量含む	なし
P53	E	不明	63×(63)	13	1	-	暗褐色	砂質シルト	炭化物微量含む	なし
P54	E	楕円形	44×32	10	1	-	黒褐色	砂質シルト		なし
P55	D	円形	35×34	18	1	-	黒褐色	砂質シルト	地山ブロック微量含む	なし
P56	D	楕円形	44×40	21	1	-	暗褐色	砂質シルト	地山ブロック、炭化物微量含む	SK6を切る
P57	D	円形	25×25	17	1	-	暗褐色	砂質シルト	地山ブロック、炭化物微量含む	なし
P58	D	円形	30×28	17	1	-	暗褐色	砂質シルト	地山ブロック、炭化物微量含む	なし
P59	D	楕円形	44×40	21	1	-	暗褐色	砂質シルト	地山ブロック少量含む	なし
P60	D	円形	40×40	18	1	-	暗褐色	砂質シルト	地山ブロック微量含む	なし
P61	E	楕円形	30×25	4	1	-	暗褐色	砂質シルト	炭化物少量含む	なし
P62	E	楕円形	30×25	10	1	-	褐色	シルト	炭化物少量含む	なし
P63	E	円形	30×29	9	1	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	地山ブロック微量含む	なし
P64	E	円形	26×25	6	1	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	炭化物少量含む	なし
P66	E	不整楕円形	45×32	15	1	10YR3/2	黒褐色	砂質シルト	地山ブロック、炭化物微量含む	なし
P67	E	楕円形	53×30	27	1	10YR5/1	灰褐色	砂質シルト	炭化物微量含む	SK5･32に切られる
P68	E	円形	25×24	6	1	2.5Y4/1	暗灰色	砂質シルト	炭化物微量含む	なし
P69	E	円形	35×33	-	1	10YR3/3	暗褐色	砂質シルト	炭化物微量含む	SK21を切る
P70	F	隅丸方形	39×30	13	1	10YR3/3	暗褐色	砂質シルト		なし
P71	F	隅丸方形	36×35	11	1	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	暗黄褐色砂質シルト微量含む	なし
P72	F	円形	40×38	10	1	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト		なし
P73	F	円形	35×35	56	1	10YR3/3	暗褐色	シルト	10YR3/4暗褐色シルトブロック、10YR4/4褐色シルト含む	なし
P74	F	円形	35×32	12	1	10YR3/4	暗褐色	シルト	地山ブロック微量含む	なし
P75	F	楕円形	25×18	20	1	10YR3/3	暗褐色	砂質シルト	10YR4/4褐色砂質シルトブロック含む	なし

ピット観察表（3）

遺構名	検出区	平面形	規模(cm)	深さ(cm)	層位	土色		土性	備考	重複
P76	F	楕円形	40×35	17	1	10YR3/3	暗褐色	砂質シルト	10YR4/4褐色砂質シルトブロック含む	なし
P77	F	楕円形	40×24	23	1	10YR3/3	暗褐色	砂質シルト	10YR4/4褐色砂質シルトブロック含む	なし
P78	F	楕円形	55×32	8	1	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルトブロック、白色粘土含む	なし
P79	F	楕円形	55×45	18	1	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルトブロック、白色粘土含む	なし
P80	F	楕円形	40×31	12	1	10YR3/3	暗褐色	砂質シルト	10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルトブロック、白色粘土含む	なし



図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構		種別	器種	部位	外面調整・文様	内面調整・文様	備考	写真図版
1	B-044	E区	Pit4	堆積土	弥生土器	壺	体下端～底	体下端:縄文原体横位回転?、底:木葉痕	ナデ(粗)	底部穿孔の可能性有(焼成後、外→内)	126
2	B-045	B区	Pit18	堆積土	弥生土器	壺or鉢	体下端～底	体下端:ミガキ→体下端～底:赤彩	体下端:ミガキ(粗)→体下端～底:赤彩	底径(3.8) cm	126
3	B-046	E区	Pit63	堆積土	弥生土器	鉢	口縁～体上半	口:ヨコナデ→体:沈線→LR縄文→沈線→ミガキ(横位直線文+連弧文)	ミガキ(密)	B-068と同一個体の可能性有	126

第317図　ピット出土遺物

(6)　Ⅳ層出土遺物（第318～339図）

本節の冒頭でも触れたように、各弥生調査区内において、弥生時代の遺物包含層であるⅣ層からは総数4,000点を超える多くの遺物が出土した（遺物出土数一覧表参照）。第318～322図には、F区を除く各弥生調査区における遺物出土状況を水平分布で示した。

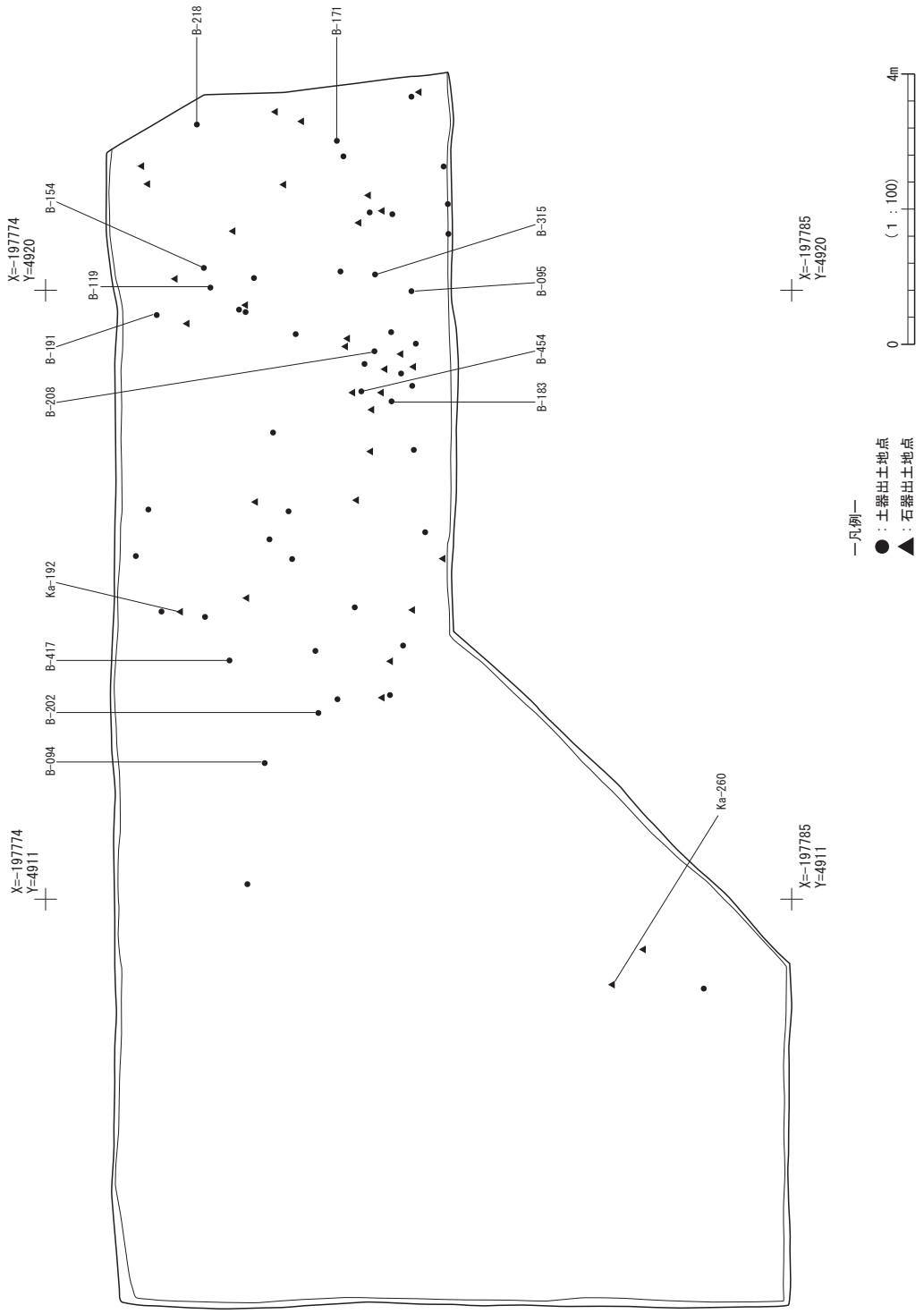
以下、Ⅳ層から出土した遺物について記載するが、剥片石器の接合資料については、弥生時代の遺構や古代の遺構から出土したものも含めて相当数存在することから纏めて後述することとし、ここでは土器、土製品、接合資料以外の石器、石製品について記載する。

a．土器・土製品（第323～339図）

弥生A～E区における土器の出土状況（第318～339図）を概観すると、A区東側、B区全域、C区南側、E区中央部から遺物が多く出土している。中でもC区からの出土数量は、他の弥生調査区と比べて圧倒的に多い（遺物出土数一覧表参照）。こうした状況を3B区全体でみると、遺物の分布は東半域に偏る傾向が認められ、遺構の分布とほぼ合致する。出土地を記録した遺物の一部には、B区から検出されたP8･9･12･13、C区から検出されたSX1･2やSK17･31、E区から検出されたSI1、SK12･14の遺構プラン内に集中するものが認められることから、Ⅳ層出土として取り上げた土器の中には、遺構に帰属するものが少なからず存在する可能性がある。

土器の接合関係については、D区の中央北側から検出されたSK9土器埋設遺構に埋設された壺（第305図-1）と、SK9周辺と約17m離れたD区南端から出土した土器片が接合した以外に、遠距離間での接合は認められない。

以下、Ⅳ層出土遺物として第323～339図に掲載した弥生土器166点について、器種毎の概要を記載するほか、土製品として掲載したミニチュア土器の可能性があるスプーン形土製品？（第339図-167）、桝形囲式と考えられる土器片から作出された円盤状土製品？（同図-168）各1点についても、合わせて記載する。

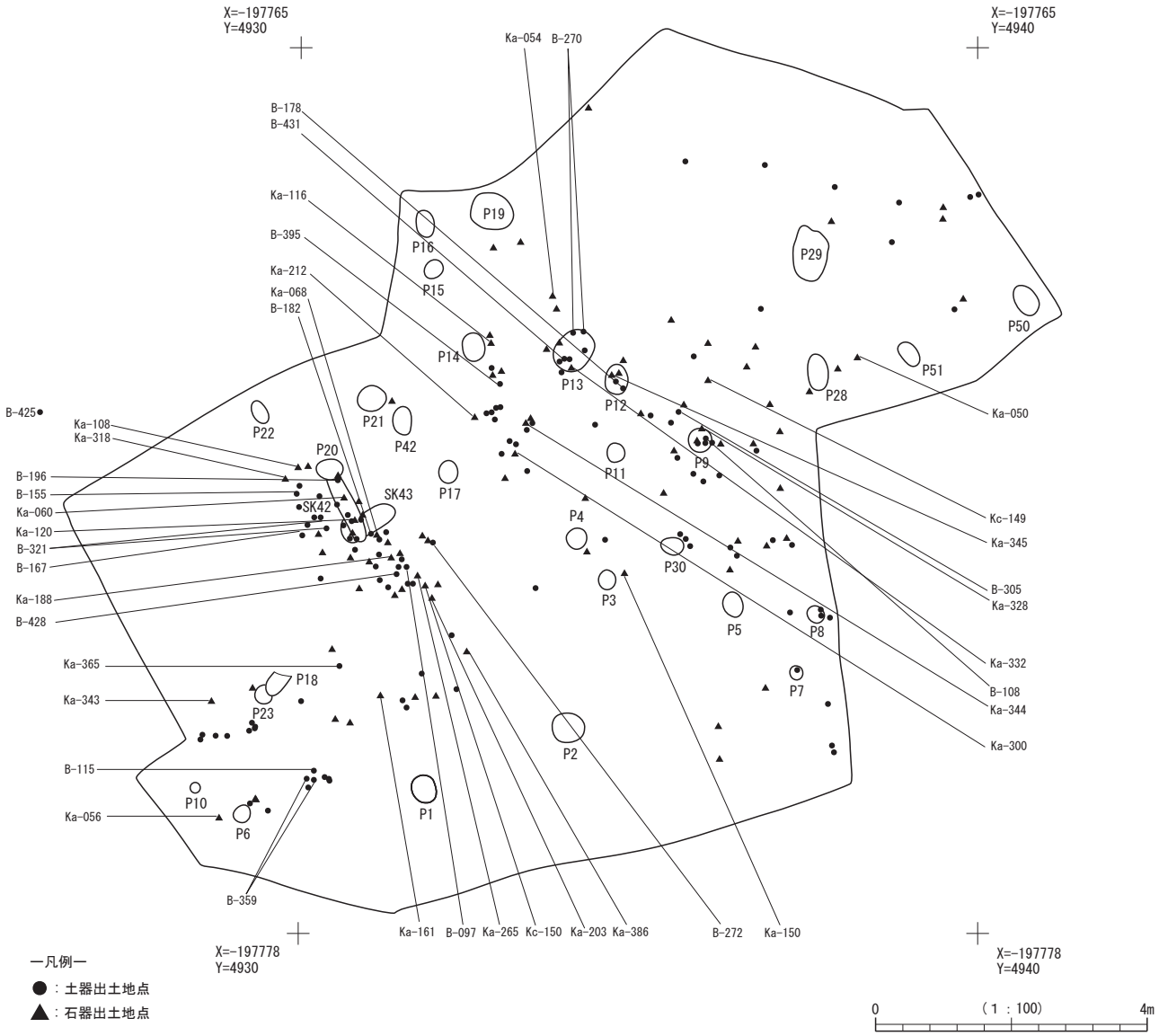


第318図　弥生Ａ区遺物出土状況

1)弥生土器(第323 ～ 339図)

Ⅳ層から出土した弥生土器は、いずれも弥生時代中期の桝形囲式に比定される。器種には、壺・高坏・鉢・深鉢・甕・蓋が認められ、壺33点、高坏10点、鉢22点、深鉢8点、甕64点、蓋29点を掲載した（各器種に推定されるものを含む)。高坏は装飾文様が施文される精製土器、甕は装飾文様が施文されない粗製土器ばかりで、この二器種を除く各器種には精製と粗製の両者が認められる。

装飾文様は、壺以外の器種には横位直線文と連弧文や連続山形文の組み合わせ、壺には横位直線文と渦文や方形

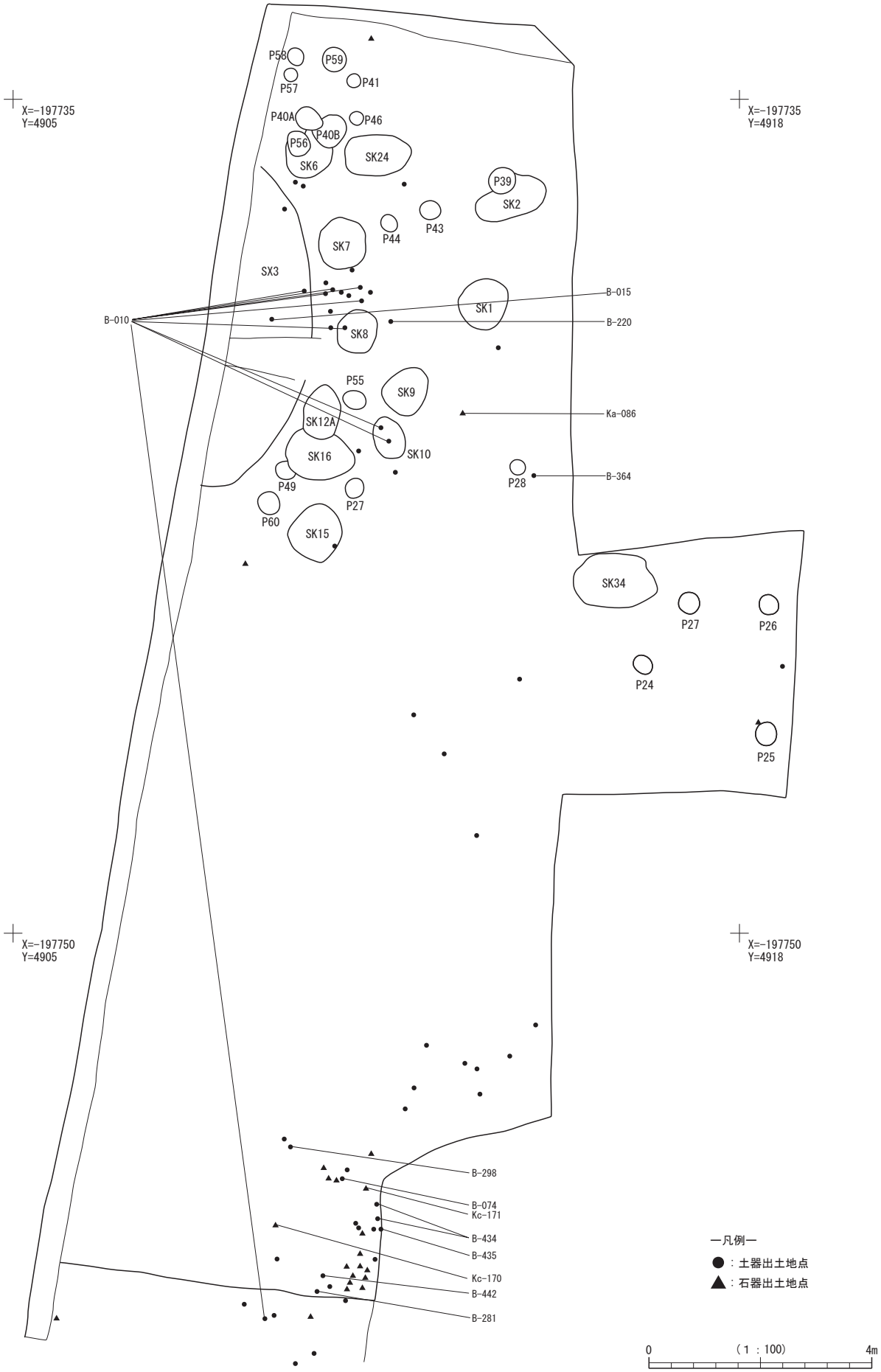


第319図　弥生Ｂ区遺物出土状況

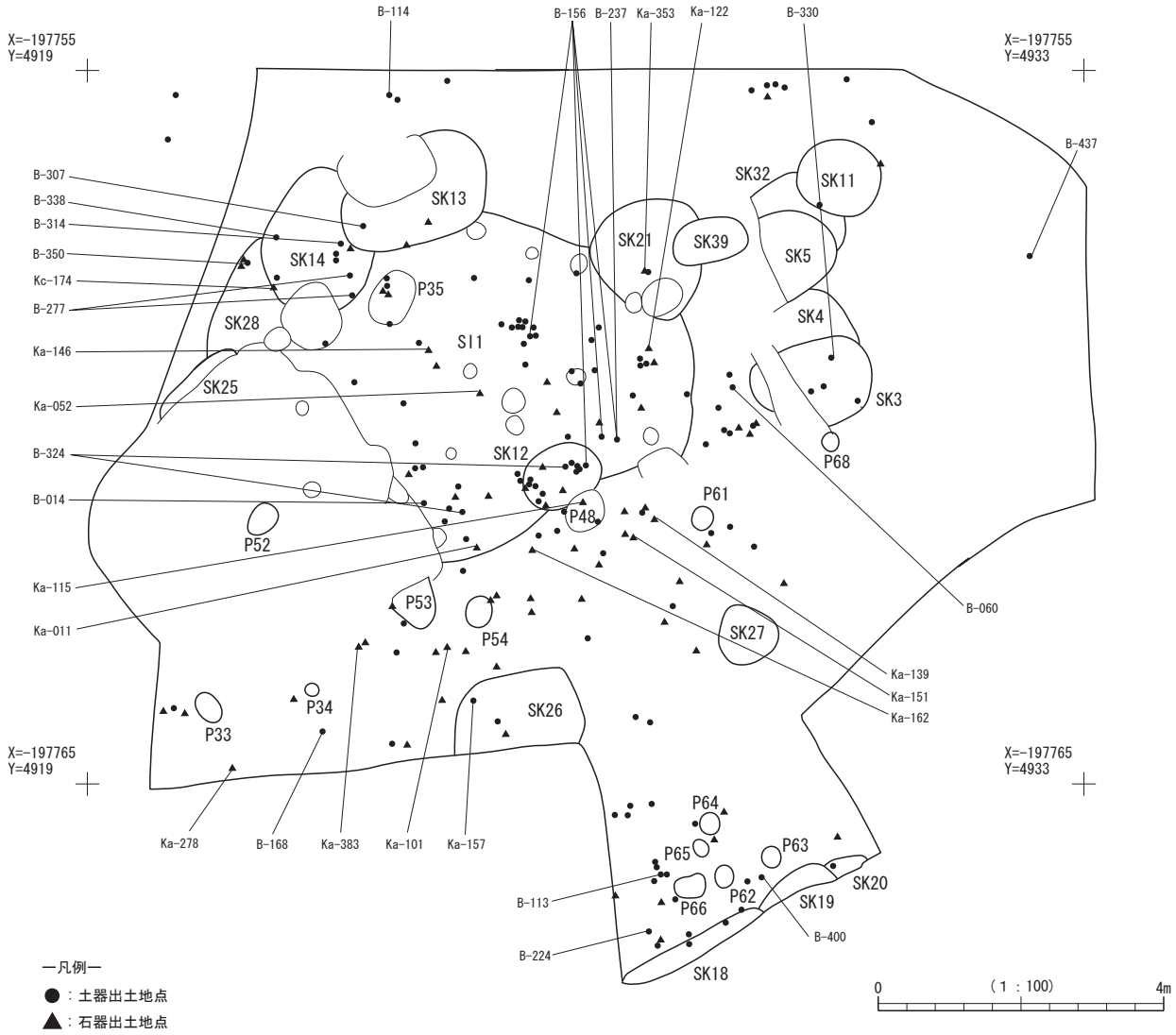
文、錨形文の組み合わせが認められる。横位直線文については、連弧文、連続山形文、渦文、方形文、錨形文といった各種文様意匠と無文帯もしくは地文部を区画するように施文されるもの、内外面口縁部や体部に1～複数条が施文されるものがある。また、方形文は壺と深鉢に多用される傾向が認められる。このほか、文様内は地文が施文されるものと無文のもののほか、赤彩されるものがある。このうち、地文が施文されるものについては、沈線施文後に地文を充填し、再度沈線を施文した後にミガキ調整を加える手法（充填縄文手法）によるものが大部分であるが、これとは対照的に、地文上に装飾文様を施文した後、ミガキ調整を加える手法（磨消縄文手法）によるものについても少なからず認められる。装飾されない部分については、地文として縄文原体の回転施文や植物茎回転文が施文されるほか、ミガキ調整やナデ調整されるのみで無文帯となるものが認められる。

地文や各種文様内の充填に使用される縄文原体は、器種を問わず単節ＬＲが圧倒的に多く、一般的な2段の原体の他、0段多条や直前段多条（3条）、附加条、撚り戻しなどのバリエーションが認められる。このほか、少数だが単節ＲＬ、無節Ｒが回転施文されるものも存在する。また、原体を問わず横位ないし斜位回転により施文されるものが殆どで、条が縦走するものが多い。なお、複数の種類の縄文が施文されるものや、縄文と植物茎回転文の両方が施文されるものは認められない。

第320図　弥生C区遺物出土状況



第321図　弥生D区遺物出土状況



第322図　弥生Ｅ区遺物出土状況

壺（第323～326図）

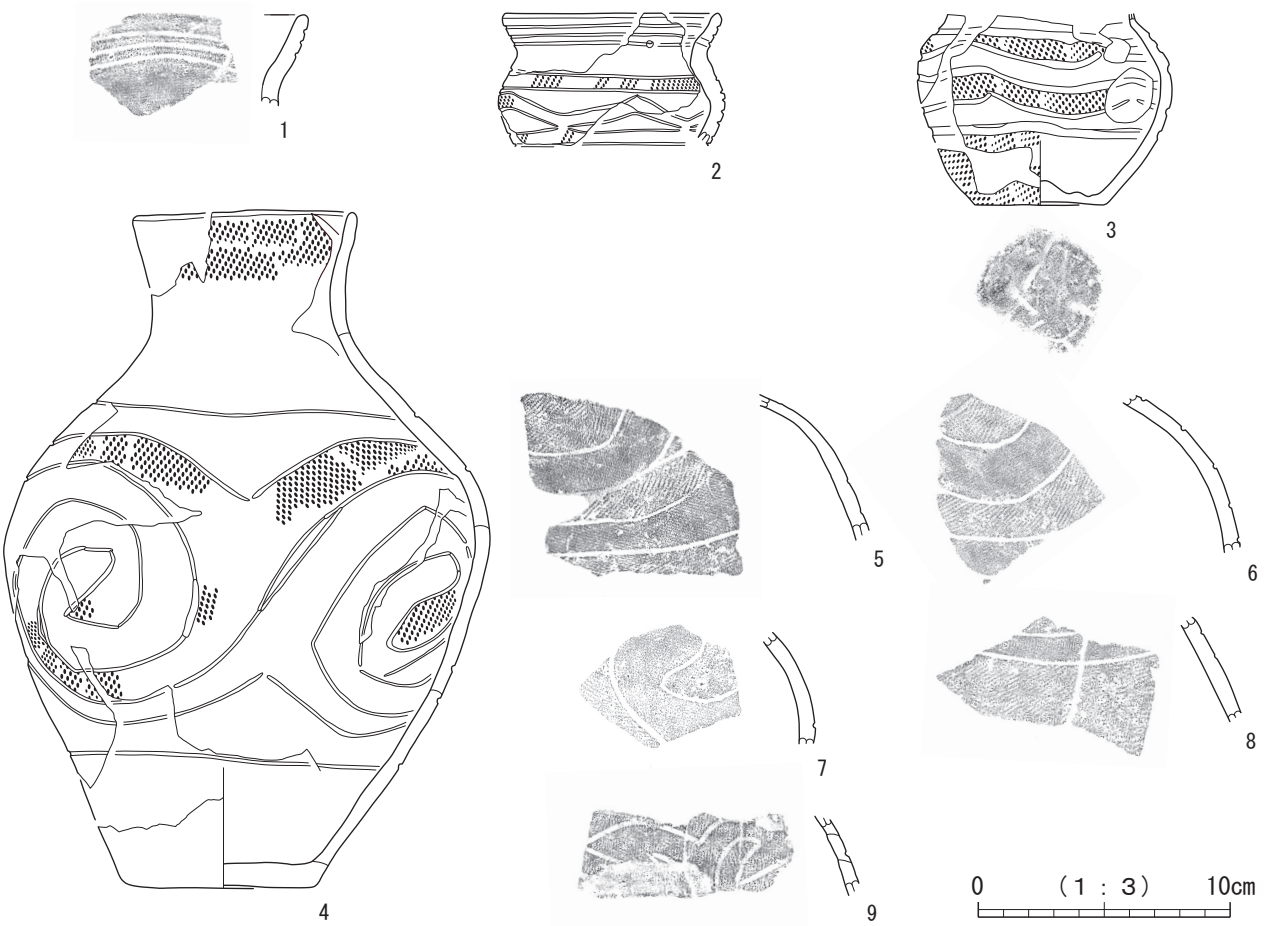
壺（壺と推定される破片資料を含む）は、器高が10cm前後と推定される小型品（第323図-２・３）、30cm前後と推定される中型品（第323図-４、第324図-14～16、第325図-22）、40cm超と推定される大型品（第324図-10、第325図-17～20･23～25、第326図-26･31～33）があり、後二者については装飾文様が施されるものと、無文もしくは地文のみのものに大別される。

器形は、小型品は体部に丸みを帯び、最大径を体部上半にもつ。中型品は最大径を持つ体部上半に丸みを帯びるものと張りを持つものがあり、頸部は短く外反するものと僅かに内傾する長頸のもの（第324図-14～16）を基調とする。大型品は体部上半が丸みを帯び、頸部は直立気味に立ち上がるものと僅かに内傾するものがある。口縁部は短く外反するものと直線的に外傾するものがあり、口縁部の形態は平縁のものが殆どであるが、頂部に刻みを伴う山形突起を有するものがある（第325図-18）。

装飾文様は、横位直線文に連続山形文、連弧文、渦文、方形文のいずれかが組み合わされて施文されるもの（第323図-2･3･4、第324図-10）のほか、横位直線文と短い弧状の沈線が組み合わされるもの（第324図-14）、錨形文が施文されるもの（第323図-9）が認められ、それらの多くは文様内にＬＲ縄文や植物茎回転文が充填される。装飾文様の施文部位は、小型品はいずれも口縁部から体部上半、中型および大型品は口縁部と体部全体もしくは上半に施

文され、中には頸部に施文されるもの（第324図-14）、口縁部内面にも横位直施文が施文されるもの（第324図-10）が認められる。

装飾文様が施文されない頸部はミガキ調整だけのものが多く、大型品の中には頸部上端に断面三角形の隆帯が横位に貼り付けされるものがある。器高の大小を問わず、体部下半はＬＲ縄文の回転施文や植物茎回転文が施文されるものと無文のものが認められる。このほか、焼成前に口縁部が外側から穿孔されるもの（第323図-2）や、赤色顔料の付着が認められるものが存在する（第323図-4、324図-11）が、赤彩範囲についは判然としない。



図版番号	登録番号	弥生調査区	取上番号	種別	器種	部位	外面調整・文様	内面調整・文様	備　考	写真図版
1	B-327	C区	P409	弥生土器	壺	口縁～頸	口:沈線→口～頸:ミガキ（横位直線文）	ミガキ（密）		126
2	B-418	C区	-	弥生土器	壺	口縁～体下半	沈線→LR縄文→沈線→ミガキ（密）（横位直線文+連続山形文）	口～頸:横位ミガキ（密）、体:ミガキ（粗）	口径（8.5）cm、口縁部穿孔（焼成前、外→内）	126
3	B-115	B区	P7	弥生土器	壺	体上半～底	体:沈線→LR縄文横位回転（横位直線文+連弧文）、底:木葉痕?→ナデ	ナデ	底径5.2cm	126
4	B-393	B区	-	弥生土器	壺	口縁～底	口:LR縄文横位回転、体:沈線→LR縄文→ミガキ（横位直線文+渦文）、底:ミガキ	口～頸:ミガキ（密）、体～底:ミガキ（粗）	口径8.6cm、底径7.2cm、器高27.0cm、口縁部外面赤色顔料付着、体部内面二次加熱による劣化	126
5	B-434	D区	P10	弥生土器	壺	体上半	沈線→LR縄文→沈線→ミガキ（渦文）	ナデ	B-434 ～ 436・442同一個体	126
6	B-435	D区	P8	弥生土器	壺	体上半	沈線→LR縄文→沈線→ミガキ（渦文）	ナデ	B-434 ～ 436・442同一個体	126
7	B-436	D区	-	弥生土器	壺	体上半	沈線→LR縄文→沈線→ミガキ（渦文）	ナデ	B-434 ～ 436・442同一個体	126
8	B-442	D区	P5	弥生土器	壺	体上半	沈線→LR縄文→沈線→ミガキ（渦文）	ナデ	B-434 ～ 436・442同一個体	126
9	B-441	C区	P147	弥生土器	壺	体上半	沈線→LR縄文（錨形文）	不明	内外面劣化	126

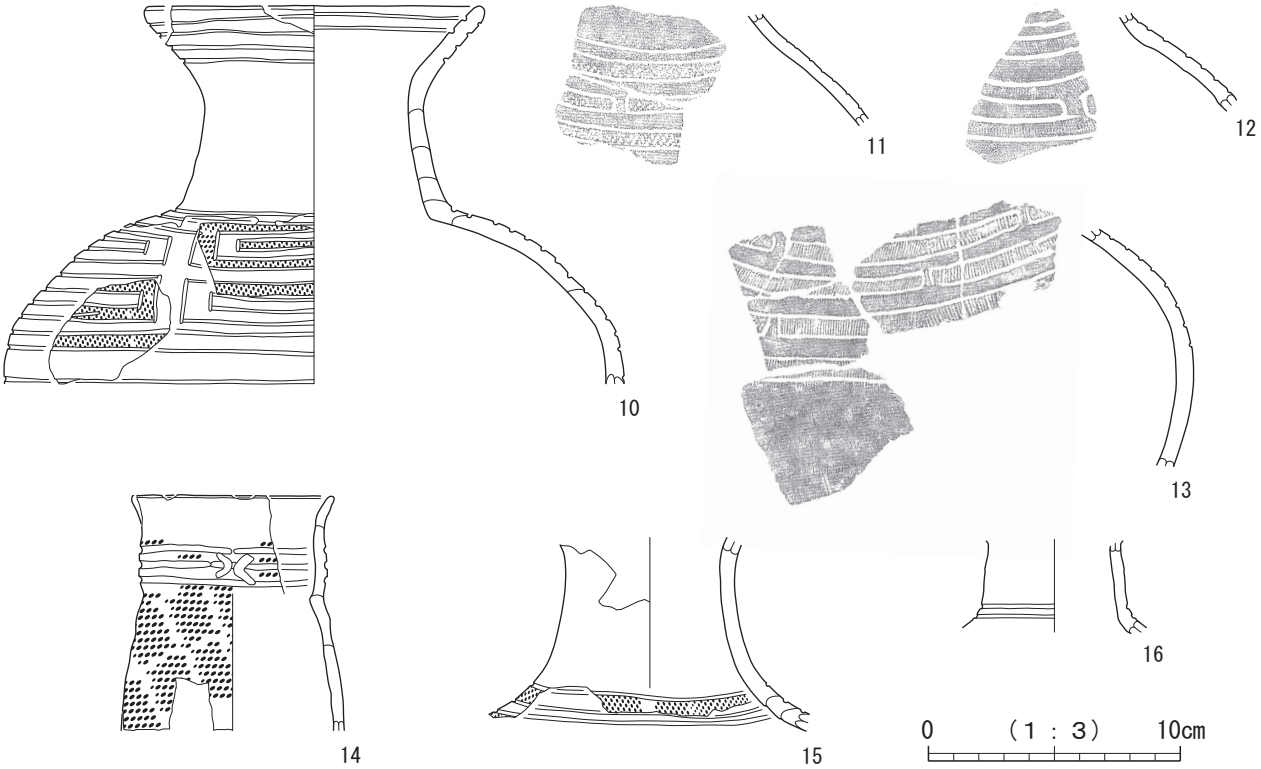
第323図　Ⅳ層出土遺物（1）

装飾文様が施文されない粗製のものは大型品に多い。口縁部はヨコナデ調整されるものが多く、地文はＬＲ縄文の回転施文が多用されるほか、植物茎回転文が施文されるものも認められる。例外的なものとして、一個体のみ体部外面に条痕のみが観察される破片資料（第326図-27 ～ 29）が認められる。

高坏（第327図）

高坏（高坏と推定される破片資料を含む）は、全て装飾文様が施される精製の破片資料である。器形は、坏部が直線的ないし内湾気味に外傾するものを基調とし、口縁部形態は平縁が大部分であるが、山形突起を有するものもある（第327図-1）。脚部は中空の円錐台形を呈し、裾部から直線的に立ち上がるものと裾部が僅かに外反するものがある。

装飾文様は、坏部･脚部とも横位直線文と連弧文の組み合わせを主体とし、他には横位直線文と連続山形文や円形文の組み合わせ、脚部には横位直線文のみ施文されるものが認められる（同図-43）。文様内はＬＲ縄文や植物茎



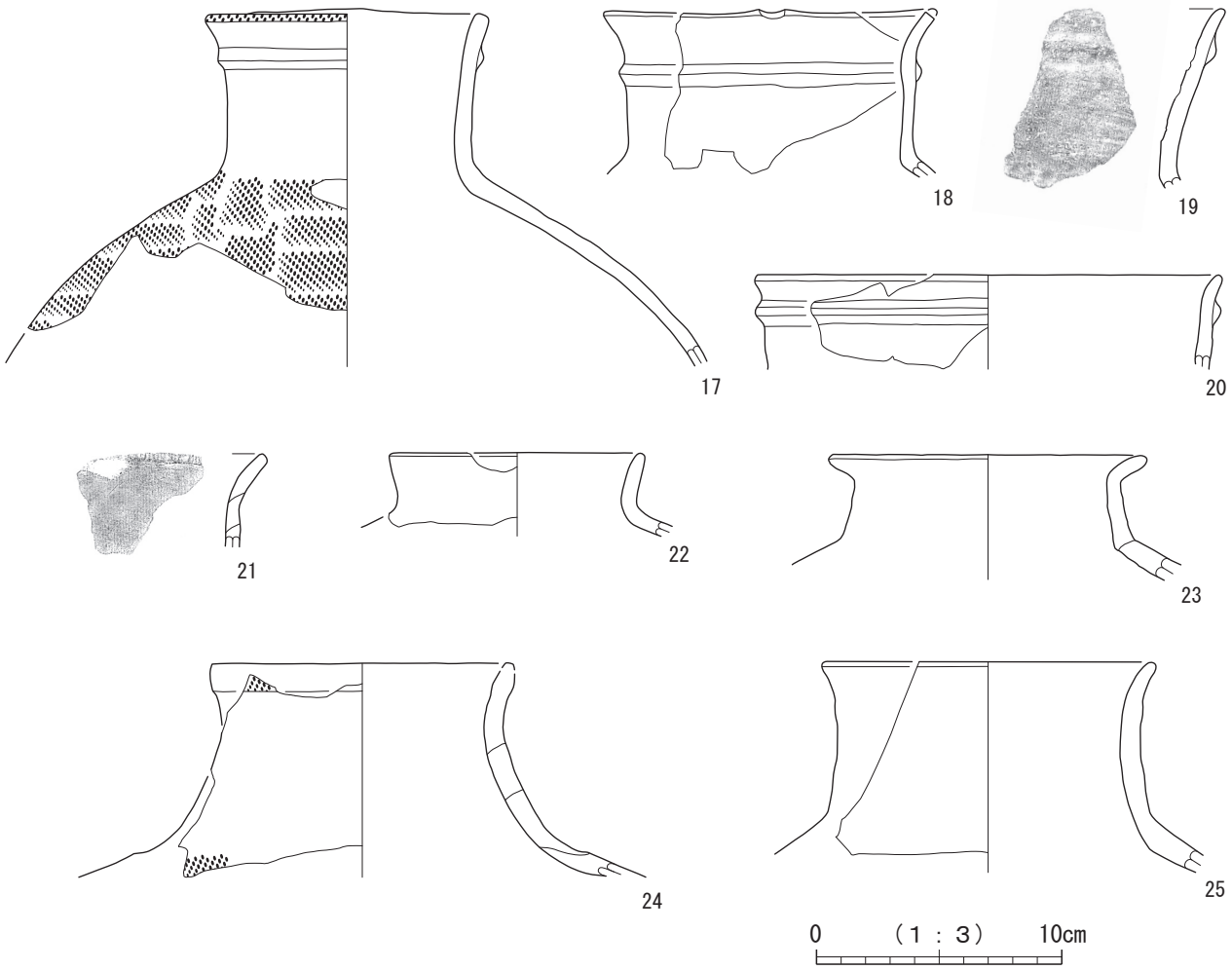
図版番号	登録番号	弥生調査区	取上番号	種別	器種	部位	外面調整･文様	内面調整･文様	備　考	写真図版
10	B-425	B区	P40	弥生土器	壺	口縁～体上半	口:沈線→口～頸:ミガキ、 体上半:沈線→LR縄文 →沈線(横位→縦位)→ミガキ (横位直線文+方形文)	口:沈線 →口～体:ミガキ(粗) (横位直線文)	口径(13.4) cm、 外面体部上半 二次加熱による火ハネ	127
11	B-433	C区	-	弥生土器	壺	体上半	沈線→LR縄文→沈線(横位→縦位)→ミガキ (横位直線文+方形文)	横位ミガキ	外面赤色顔料付着	127
12	B-448	C区	P264	弥生土器	壺	体上半	沈線(横位)→植物茎回転文 →沈線(横位→縦位)→ミガキ (横位直線文+方形文)	未調整		127
13	B-447	C区	-	弥生土器	壺	体上半	沈線→植物茎回転文 →沈線(横位→縦位)→ミガキ(密) (方形文)	横位ミガキ		127
14	B-416	C区	P347	弥生土器	壺	口縁～頸	口:ナデ→ミガキ、 頸:LR縄文斜位回転→沈線(横位→弧)	ナデ	長頸壺、口径(8.0) cm、 外面炭化物付着、 内面輪積み痕明瞭	127
15	B-426	C区	P340	弥生土器	壺	頸～体上半	頸下端～体:沈線→LR縄文→頸～体:ミガキ (横位直線文)	頸:ミガキ(粗)、 体:無調整	長頸壺、 体部内面輪積み痕明瞭	127
16	B-427	B区	-	弥生土器	壺	頸～体上端	頸下端:沈線→頸～体:ミガキ(密) (横位直線文)	ナデ	長頸壺	127

第324図　Ⅳ層出土遺物(2)

回転文により充填されるものが多く、充填後に文様内が赤彩されるものも認められる（同図-43）。装飾文様が施文される部位は、坏部は口縁部から体部に施文されるものが多く、中には内面口縁部にも施文されるものがある（同図-37）。脚部については下半に限定的に施文され、上半はミガキ調整されるのみとなる。

鉢（第328・329図）

鉢（鉢と推定される破片資料を含む）は、口径に対し器高が2/3程度になるという点で、後述する深鉢と区別さ



図版番号	登録番号	弥生調査区	取上番号	種別	器種	部位	外面調整・文様	内面調整・文様	備　考	写真図版
17	B-406	C区	P294	弥生土器	壺	口縁～体上半	頸上端:横位隆帯貼付→口～頸:ナデ→口唇・体:RL縄文横位・斜位回転→頸～体上端:横位ミガキ	口～頸:ミガキ(粗)、体:ナデ	口径10.5cm、隆帯断面形三角	127
18	B-392	C区	P9	弥生土器	壺	口縁～体上端	頸上端:横位隆帯貼付→口～頸上端:ヨコナデ→横位ミガキ(粗)、口唇:山形突起状の頂部に刻み	口:ヨコナデ→口～頸:ミガキ(粗)、体:不明	口径(12.2) cm、口縁部山形突起、隆帯断面形三角、	127
19	B-389	C区	-	弥生土器	壺	口縁～頸	頸上端:横位隆帯貼付→口:ヨコナデ→ミガキ、頸:ナデ→ミガキ	口:ヨコナデ→口～頸:ミガキ(粗)	隆帯断面形三角	127
20	B-398	C区	P296	弥生土器	壺	口縁～頸	頸上端:横位隆帯貼付→口～頸:ナデ→ミガキ、口唇:縄文原体回転?	ミガキ(粗)	口径(18.8) cm、隆帯断面形三角	127
21	B-415	C区	-	弥生土器	壺	口縁～頸	口唇:植物茎回転文横位回転、口～頸:ミガキ(密)	横位ミガキ(密)		127
22	B-395	B区	P45	弥生土器	壺	口縁～体上端	横位ミガキ(密)	横位ミガキ	口径(10.2) cm	127
23	B-401	C区	P150	弥生土器	壺	口縁～体上端	口:横位ミガキ(粗)、頸～体:ミガキ(密)	口～頸:横位ミガキ(密)、体:無調整	口径(12.6) ㎝	127
24	B-399	B区	-	弥生土器	壺	口縁～体上端	口～頸上半:ナデ→口唇・体上端:LR縄文横位回転→口～体:横位ミガキ	口:ナデ→口～頸:ミガキ(粗)、体:不明	口径(12.3) cm、体部内面劣化	127
25	B-400	E区	P93	弥生土器	壺	口縁～体上端	口:ナデ、頸～体:ミガキ	口～頸:横位ミガキ、体:ミガキ(粗)	口径(13.4) cm	127

第325図　Ⅳ層出土遺物(3)

図版番号	登録番号	弥生調査区	取上番号	種別	器種	部位	外面調整･文様	内面調整･文様	備　考	写真図版
26	B-452	C区	P306	弥生土器	壺	体	植物茎回転文横位回転 →体上端:ミガキ(密)	横位ミガキ(密)	外面炭化物付着	128
27	B-348	C区	-	弥生土器	壺or甕	体下半	条痕(縦位・斜位)	横位ミガキ	B-347 ～ 349同一個体	128
28	B-349	C区	P398	弥生土器	壺or甕	体下半	条痕(縦位・斜位)	横位ミガキ	B-347 ～ 349同一個体	128
29	B-347	C区	P24	弥生土器	壺or甕	体下半	条痕(縦位・斜位)	横位ミガキ	B-347 ～ 349同一個体	128
30	B-371	C区	P224	弥生土器	壺?	体下半 ～底	体下半:横位ミガキ、 底:木葉痕・網代痕	ナデ	底径9.6cm、 体部下端外面二次加熱痕	128
31	B-359	B区	P8	弥生土器	壺?	体下半 ～底	体下端:ハケメ→体下半:LR縄文横位回転 →体下端:横位ミガキ、 底:網代痕	体:ミガキ(粗)	底径(12.4) cm、 底部穿孔(焼成後、外→内?)	128
32	B-382	C区	P346	弥生土器	壺?	底	網代痕	無調整	底部穿孔(焼成後)の可能性有	128
33	B-454	A区	P21	弥生土器	壺	頸下端 ～底	体:ヘラナデ→LR縄文縦位・横位・斜位回転 →頸下端・体下端:ミガキ、 底:木葉痕	ミガキ	底径10.9cm、 内外面剥離顕著	128

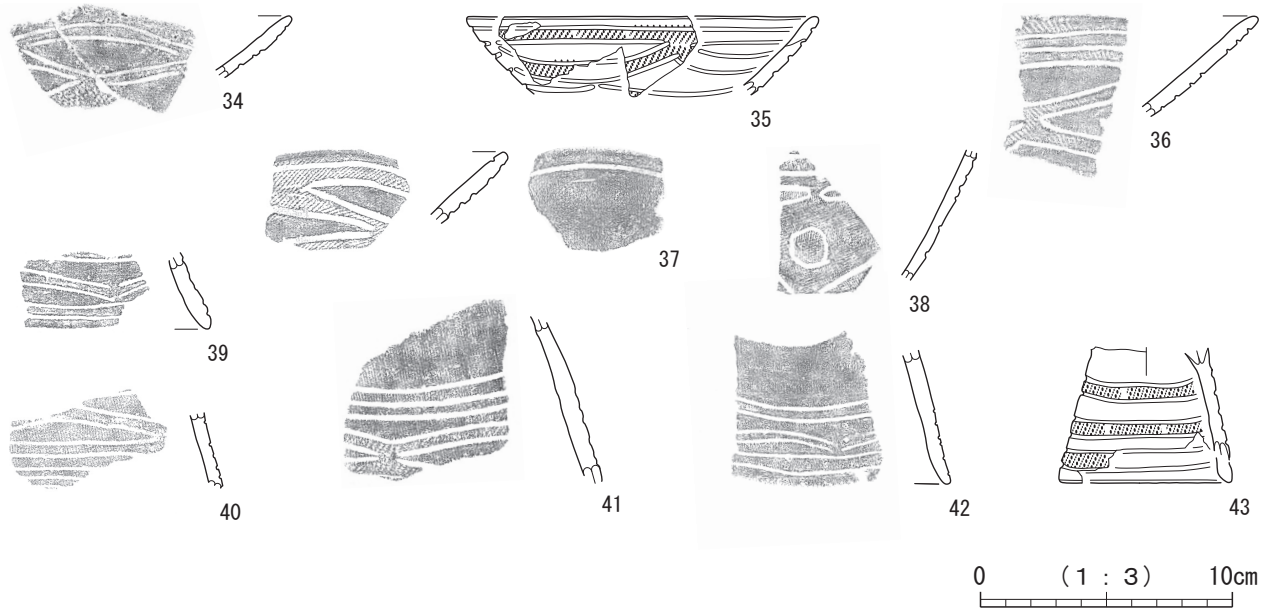
第326図　Ⅳ層出土遺物(4)

れる。器高5cm程度の小型品（第328図-44･46･47）と、10cm程度ないしそれ以上と推定される中型品（同図-45･49～60、第329図-61～65）に大別される。前者はいずれも精製のみで、後者は精製と粗製の二種が認められる。

器形は、小型品が内湾する体部から先細る口縁部へと立ち上がるカップ状を呈し、中型品と推定されるものは、体部が小型品と同様に内湾し、口縁部と体部の境界が括れるもの（第328図-55）や、屈曲するもの（同図-48）が認められる。口縁部形態は平縁が殆どであるが、山形突起を有するものもある（同図-49）。

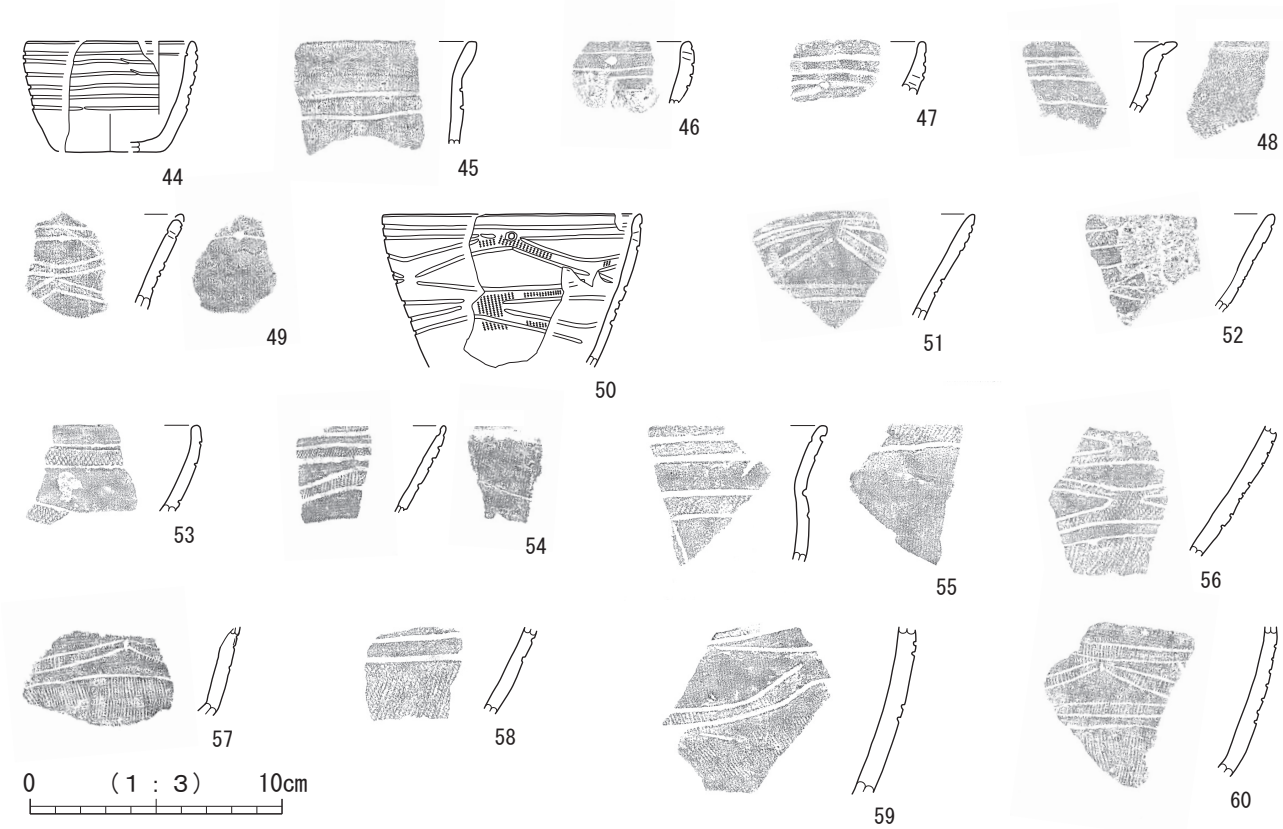
装飾文様は、小型品は口縁部から体部上半に横位直線文が多条に施文され、体部下半は無文でミガキ調整されるのみである。中型品は口縁部から体部上半にかけて横位直線文と連弧文もしくは連続山形文の組み合わせが施文されるほか、内面口縁部に横位直線文が施文されるものがある（第328図-44･48･49･54･55）。文様内は内外面共にＬＲ縄文もしくは植物茎回転文で充填されるものが多く、これに縦位の短い沈線が加わるもの（同図-57･60）や、文様内が赤彩されるもの（同図-52）が認められる。また、焼成前に口縁部が外側から穿孔されるものも少なくない（第328図-46･47･49･50）。

体部下半には地文としてＬＲ縄文の回転施文や植物茎回転文が施文され、第328図-58や第329図-62のように地文部が赤彩されるものがあり、後者は縦位帯状に赤彩される。装飾されない粗製のものは、同一個体と考えられる１点のみである（第329図-64･65）。器高は10～15cm程の中型品と推定され、内外面とも丁寧にミガキ調整される。



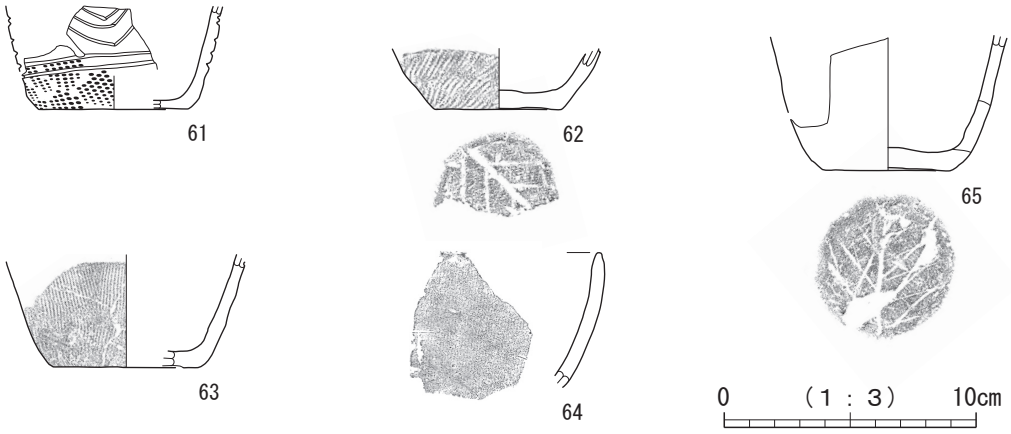
図版番号	登録番号	弥生調査区	取上番号	種別	器種	部位	外面調整･文様	内面調整･文様	備　考	写真図版
34	B-085	C区	P96	弥生土器	高坏 or蓋	口縁～体上半	沈線→LR縄文→沈線→ミガキ（横位直線文+連弧文）	ミガキ	口縁部山形突起	128
35	B-186	C区	-	弥生土器	高坏 or 蓋	口縁～体上半	口:ナデ→体上半:沈線→LR縄文→沈線→ミガキ（横位直線文+連弧文）	横位ミガキ（粗）	口径（14.0）cm	128
36	B-184	A区	-	弥生土器	高坏 or鉢	口縁～体上半	沈線→植物茎回転文→沈線→ミガキ（横位直線文+連続山形文）	ミガキ（密）		128
37	B-183	A区	P24	弥生土器	高坏 or 蓋	口縁～体上半	沈線→LR縄文→沈線→ミガキ（横位直線文+連続山形文）	口:沈線、口～体上半:ミガキ（密）（横位直線文）		128
38	B-114	E区	P128	弥生土器	高坏?	体	沈線→植物茎回転文→ミガキ（密）（円文+横位直線文）	ミガキ（密）	内外面劣化	128
39	B-079	A区	-	弥生土器	高坏	脚	沈線→ミガキ（横位直線文+連弧文）	ナデ		128
40	B-113	E区	P110	弥生土器	高坏	脚	沈線→植物茎回転文→ミガキ（横位直線文+連弧文）	ナデ		128
41	B-052	C区	P294	弥生土器	高坏	脚	沈線→LR縄文→沈線→ミガキ（横位直線文+連弧文）	ナデ		128
42	B-073	A区	-	弥生土器	高坏	脚	沈線→ミガキ（横位直線文+連弧文）	ナデ		128
43	B-054	C区	P68	弥生土器	高坏 or 台付鉢	脚	沈線→LR縄文→沈線→ミガキ→縄文部分赤彩（横位直線文）	横位ミガキ（密）	脚部径（6.8）cm	128

第327図　Ⅳ層出土遺物（5）



図版番号	登録番号	弥生調査区	取上番号	種別	器種	部位	外面調整・文様	内面調整・文様	備　考	写真図版
44	B-099	B区	-	弥生土器	鉢	口縁～底	口～体上半:沈線 →口～体下半:ミガキ (横位直線文)	口:沈線 →口～体下半:ミガキ (横位直線文)	口径(7.0) cm、底径(4.2) cm、 器高4.4cm、 底部内外面劣化	129
45	B-060	E区	P114	弥生土器	鉢	口縁～体上半	体:植物茎回転文横位回転、沈線 (横位直線文)	不明	内外面劣化	129
46	B-098	C区	-	弥生土器	鉢	口縁～体上半	沈線→ミガキ (横位直線文)	ミガキ	口縁部穿孔(焼成前、外→内)	129
47	B-097	B区	P21	弥生土器	鉢	口縁～体上半	沈線→ミガキ (横位直線文+連弧文?)	ミガキ	口縁部穿孔(焼成前、内→外)、 内外面劣化	129
48	B-058	A区	-	弥生土器	鉢	口縁～体上半	沈線→口唇・体:LR縄文→ミガキ (横位直線文)	口:沈線→口～体上半:ミガキ (横位直線文)		129
49	B-078	C区	-	弥生土器	鉢 or 高坏	口縁～体上半	沈線→植物茎回転文→ミガキ (横位直線文+連弧文)	口:沈線→ミガキ、 (横位直線文)	口縁部山形突起、 口縁部穿孔(焼成前、内→外)	129
50	B-064	A区	-	弥生土器	鉢	口縁～体下半	沈線→植物茎回転文→沈線→ミガキ(密) (横位直線文+連弧文)	ミガキ(密)	口径(10.2) cm、 口縁部穿孔(焼成前、外→内)	129
51	B-196	B区	P39	弥生土器	鉢	口縁～体上半	沈線→植物茎回転文→沈線→ミガキ (横位直線文+連弧文)	横位ミガキ(密)		129
52	B-076	C区	P156	弥生土器	鉢 or 高坏	口縁～体上半	口:ナデ→口～体:沈線→LR縄文 →沈線→ミガキ→文様帯赤彩 (横位直線文+連弧文)	ミガキ(密)	内外面剥離	129
53	B-068	E区	-	弥生土器	鉢	口縁～体上半	口:ヨコナデ→口～体上半:沈線 →LR縄文→沈線→ミガキ (横位直線文+連弧文)	口:ヨコナデ →口～体上半:ミガキ	B-046と同一個体の可能性有	129
54	B-074	D区	P14	弥生土器	鉢	口縁～体上半	沈線→LR縄文→沈線→ミガキ (横位直線文+連続山形文)	口:沈線 →口～体上半:ミガキ (横位直線文)		129
55	B-417	A区	P10	弥生土器	鉢	口縁～体上半	沈線→LR縄文→ミガキ (横位直線文+連続山形文?)	口:LR縄文横位回転 →沈線(横位直線文) →体:横位ミガキ		129
56	B-108	B区	P110	弥生土器	鉢	体	体上半:沈線→LR縄文→沈線→ミガキ (横位直線文+連弧文)、 体下半:LR縄文横位回転	ミガキ		129
57	B-204	C区	P388	弥生土器	鉢or蓋	体	体上半:沈線→植物茎回転文→縦位短線 (横位直線文+連弧文)、 体下半:植物茎回転文横位回転	横位ミガキ(密)	内面火ハネ痕	129
58	B-111	C区	-	弥生土器	鉢	体	沈線→LR縄文→ミガキ→赤彩 (横位直線文+連弧文)	ミガキ		129
59	B-346	C区	P160	弥生土器	鉢 or 深鉢	体	体上半:沈線→植物茎回転文 →沈線→ミガキ(横位直線文+連弧文)、 体下半:植物茎回転文斜位回転	横位ミガキ(密)		129
60	B-112	C区	P389	弥生土器	鉢	体	体上半:沈線→植物茎回転文 →縦位短線→ミガキ (横位直線文+連続山形文)、 体下半:植物茎回転文横位回転	横位ミガキ		129

第328図　Ⅳ層出土遺物(6)



図版番号	登録番号	弥生調査区	取上番号	種別	器種	部位	外面調整・文様	内面調整・文様	備　考	写真図版
61	B-116	C区	P47	弥生土器	鉢	体下半～底	体:沈線→体下端:LR縄文横位回転→ミガキ(横位直線文+連弧文?)、底:ナデ	ミガキ(密)	底径(6.0) cm	129
62	B-126	C区	P189	弥生土器	鉢	体下半～底	体下半:沈線(横位直線文)、LR縄文横位回転→赤彩、底:木葉痕	横位ミガキ(密)	底径(4.4) cm	129
63	B-132	C区	P80	弥生土器	鉢?	体下半～底	体下半:沈線(横位直線文)、植物茎回転文横位回転、底:木葉痕?	横位ミガキ(密)	底径(5.8) cm、底部外面剥離	129
64	B-107	C区	P400	弥生土器	鉢	口縁～体上半	ミガキ(密)	ミガキ(密)	B-138と同一個体	129
65	B-138	C区	P393	弥生土器	鉢	体下半～底	体下半:横位ミガキ(密)、底:木葉痕	体:横位ミガキ(密)、底:横位ナデ→ミガキ(粗)	底径5.0cm、B-107と同一個体	129

第329図　Ⅳ層出土遺物(7)

深鉢(第330・331図)

深鉢（深鉢と推定される体部下半資料を含む）は、器高20cm前後もしくはそれ未満の中型品（第330図-66～71・73、第331図-76・78・79）と、器高35cm前後もしくはそれ以上と推定される大型品（第330図-72、第331図-74・75・77）に大別され、大型品は、口縁部に装飾文様が施文されるものと無文のものに細別される。口径に対し、器高が1ないしそれ以上になるという点で、前述した鉢とは区別される。また、大型品は口縁部が外反しない点で後述する甕と区別される。器形は、最大径を口縁部にもつものと体部上端にもつものがある。体部は底部から寸胴気味に立ち上がるものと底部から大きく開くものに大別される。前者は中型品に限定され、後者は大型品に特徴的である。口縁部と体部の境界には括れをもち、口縁部は内湾するものが大部分であるが、括れを持たないものや、口縁部が直線的に外傾するものも認められる。口縁部形態は中型品が平縁のみであるが、大型品には波状口縁（第331図-75、推定12単位）も認められる。

装飾文様は口縁部と体部上半に施文され、括れを持つ口縁部と体部の境界は、ミガキ調整のみで無文となるものが多い。口縁部の文様意匠は横位直線文と方形文の組み合わせを基調とし、この他に、口縁部に横位直線文が多条に施文されるもの（第330図-68・70・72・73、第331図-76）や、横位直線文と連続山形文の組み合わせが施文されるもの（第330図-71）、また、内面にも横位直線文が施文されるもの（第330図-72、第331図-74）がある。体部の文様意匠は口縁部と同様、横位直線文と方形文の組み合わせを基調とし、横位直線文と連弧文の組み合わせが施文されるもの（第330図-70）や、大型品の中には、体部上端に数条の横位直線文が施文されるもの（第331図-74・75・77）、1点のみ列点刺突文が施されるもの（第331図-77）が認められる。口縁部・体部共に文様内は無文となるものが大部分だが、文様内がＬＲ縄文で充填されるものが少数存在する（第330図-70、第331図-74）。方形文は、口縁部・体部共に1段5～7単位で、横位に半単位ずらすように複数段施文され、1単位が縦位・横位共に2条の沈線で構成されるものと、縦位2条に対し横位3～4条の沈線で構成されるものが認められるほか、体部においては、隣り合う方形文の間に縦位の短い沈線が施文されるものがある（第330図-66・69）。装飾文様が施文されない体部下半にはＬＲ縄文の回転施文や植物茎回転文が施文され、一部は口唇部にも施文される。

甕（第332～337図）

甕（甕と推定される底部破片を含む）は、破片資料が多いものの、大部分が器高20cm前後の中型品と推定され、このほか、器高30～35cm程の大型品と推定されるものが少数存在する（第331図-80、第334図-110、第335図-111・113～115、第337図-132・137）。器高を問わず、外面には二次加熱痕が認められるものが多い。器形は、最大径を口縁部にもつものと体部上端にもつものに大別される。体部は底部から下半までが直線的に外傾して立ち上がり、上半が丸みを帯びるものを基調とする。体部上端から口縁部の境界は括れをもつものとほぼ直線的なものがあり、前者においては直角に近い角度で強く屈曲するものと鈍角に屈曲するものがある。口縁部は平縁で短く外反し、口唇部は上方ないし斜め上方を向くものと、ほぼ真横を向くものがある。装飾文様が施文されるものは無く、口縁部は明瞭なヨコナデ調整、体部は地文として縄文原体の回転施文や植物茎回転文が施文される。地文は口唇部に施文されるものも少なくない。また、体部には地文を施文する前のハケメ調整が観察されるものや、縄文原体を結縛した痕跡が観察されるものが認められる。体部上端には列点刺突文が施されるものが殆どで、施文方向には左右の別が認められるほか、押し引きが施されるものが少なくない。このほか、体部上端に沈線が施文されるもの（第337図-128）や、無文のもの（同図-129～135）がある。内面には丁寧なミガキ調整が施されるものが大部分である。

蓋（第338・339図）

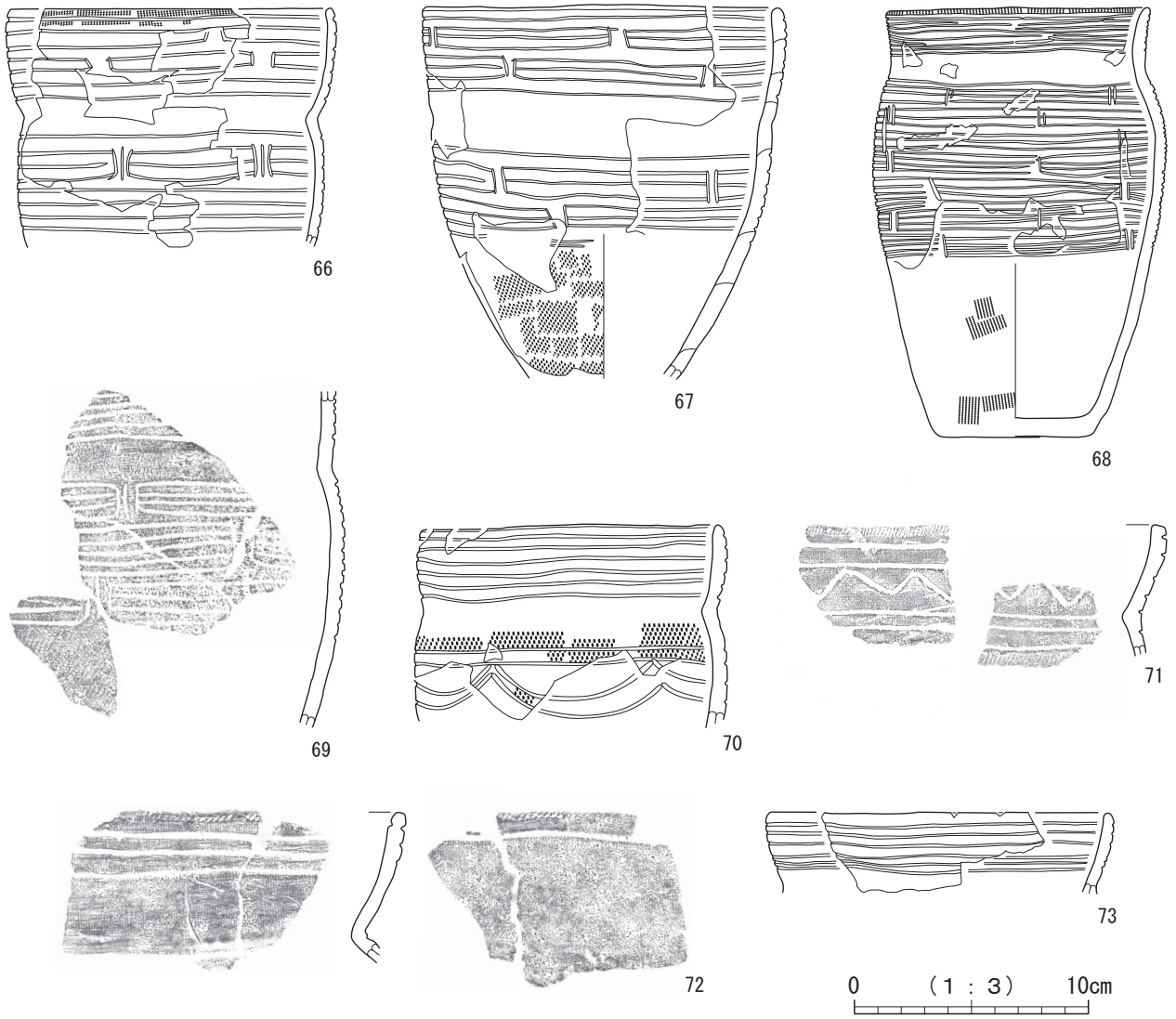
蓋（蓋と推定されるものを含む）は破片資料が多いが、口径15cm前後もしくはそれ未満、器高10cm未満と推定される小型品（第338図-138・149・150）と、口径20cm前後、器高10cm前後もしくはそれ以上と推定される中型品（第338図-139・151・152、第339図-158・166）に大別され、それぞれに装飾文様が施文される精製と、装飾文様が施文されない粗製が存在する。また、精製・粗製に関わらず、使用に伴うものと考えられる口縁部の黒色化や口唇部の劣化が認められるものが多い。

器形は、円錐台形を基調とする。体部上半は体部下半に向かって外反するものと直線的なものがあり、体部下半から口縁部にかけては直線的に開くもの、外反するもの、内湾するものに三大別される。口縁部はすべて平縁である。天井部には、つまみ部が付くものと付かないものがある。つまみ部は天井部から直線的に外傾する高さ数cmの低いリング状を基調とする。つまみ部が無いものは、天端部に僅かな高まりをもつもの（第338図-139）や、側縁部が外側に向かって僅かに張り出すもの（第339図-162・163）がある。

装飾文様は、外面は体部下半から口縁部に限定的に施文される。文様意匠は横位直線文と連弧文もしくは連続山形文の組み合わせを主体とし、この他に、口縁部に横位直線文が多条に施文されるもの（第338図-138・144・145）が認められる。前者は文様内にＬＲ縄文や植物茎回転文が充填されるのに対し、後者にはそれが認められない。連弧文や連続山形文には横位に半単位ずらして2段にわたって施文されるものがあり、隣り合う単位の境界に縦位の短い沈線が施文されるものがある（第338図-140）。また、口縁部内面に横位直線文が施文されるものが少数存在し、ＬＲ縄文が充填されるものと、されないものに分かれる。装飾文様が施文されない部分には、縄文原体の回転施文や植物茎回転文の地文が施文されるものが大部分であるが、ナデ調整やミガキ調整のみが施される無文のものも多い（第338図-151・152、第339図-154・156・163・164・166）。

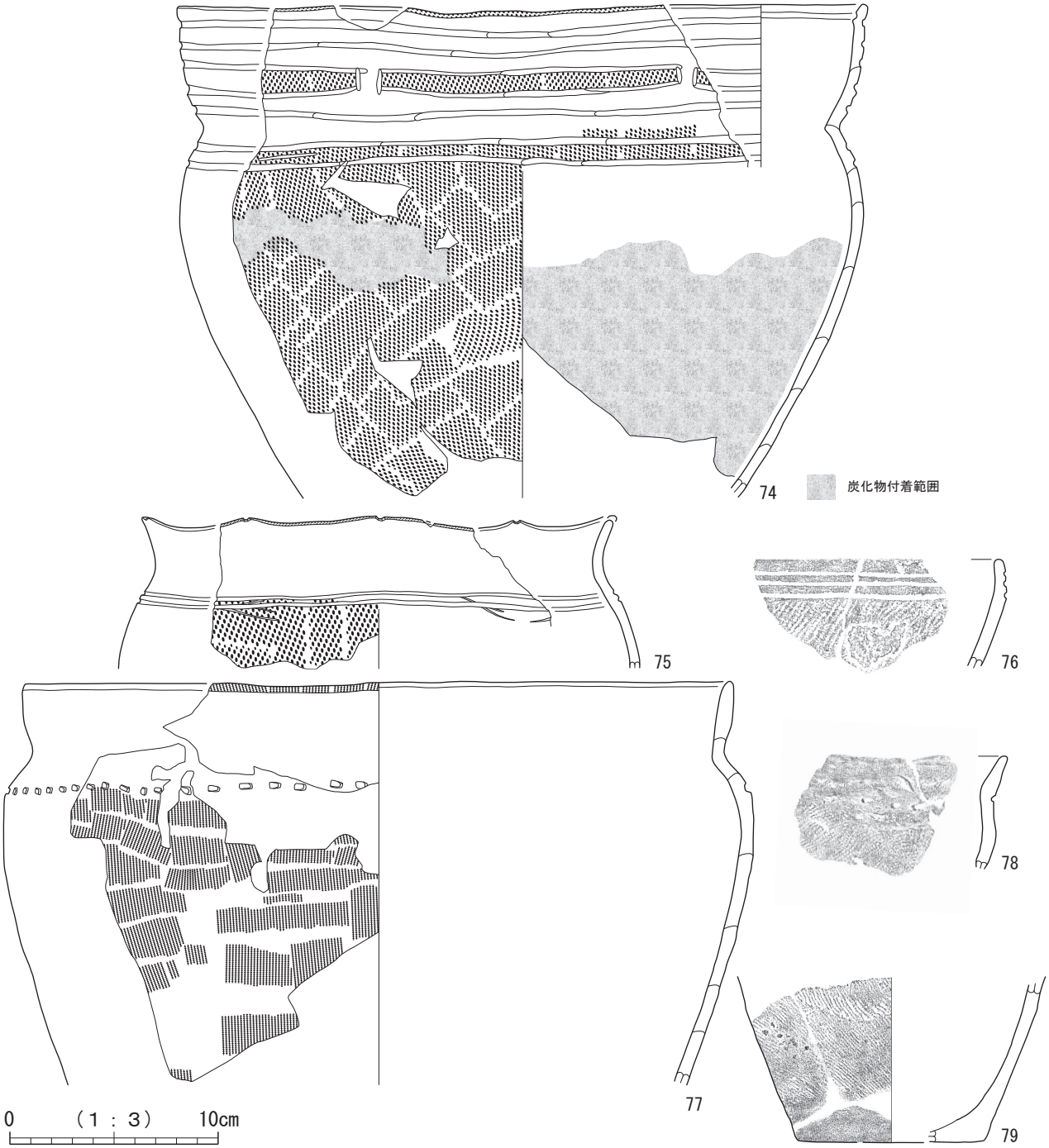
2）土製品（第339図）

スプーン形土製品？（第339図-167）は破片資料で、丸底のミニチュア土器の可能性も考えられる。内外面ともナデ調整される。円盤状土製品？（同図-168）は六角形を呈する土器片で、外面にはＬＲ縄文が回転施文される。



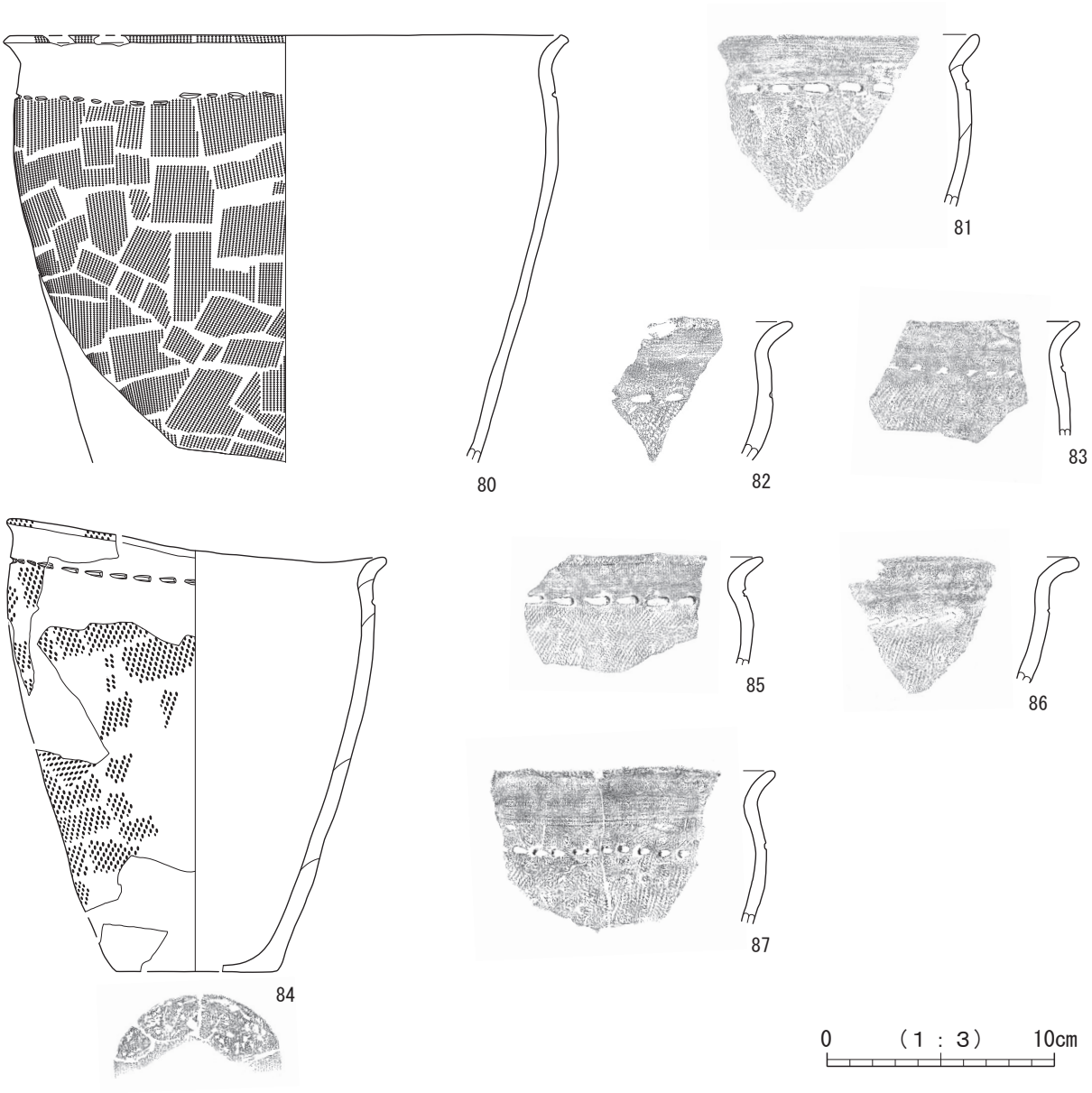
図版番号	登録番号	弥生調査区	取上番号	種別	器種	部位	外面調整・文様	内面調整・文様	備　考	写真図版
66	B-320	C区	P271	弥生土器	深鉢	口縁～体上半	口唇:植物茎回転文横位回転 →口～体上半:沈線(横位→縦位) →ミガキ、体上半:縦位短線 (横位直線文+方形文)	ミガキ(密)	口径(13.8) cm、 内外面剥離	130
67	B-319	C区	P280	弥生土器	深鉢	口縁～体下半	口～体上半:沈線(横位→縦位) (横位直線文+方形文)、 体下半:LR縄文横位回転	ナデ	口径(15.1) cm、 口縁部輪積み痕明瞭	130
68	B-321	B区	-	弥生土器	深鉢	口縁～底	口唇:植物茎回転文横位回転、 口:沈線→ミガキ(横位直線文)、 体上半:沈線(横位→縦位)→ミガキ (横位直線文+方形文)、 体下半:植物茎回転文横位・斜位回転、 底:不明	口～体:ミガキ、 底:ナデ	口径11.1cm、底径6.2cm、 器高18.4cm、 口縁部外面炭化物付着、 体部下半外面火ハネによる 剥離顕著	130
69	B-338	E区	P97	弥生土器	深鉢	口縁～体	口:沈線→ミガキ(横位直線文)、 体上半:沈線(横位→縦位)、縦位短線 →ミガキ(横位直線文+方形文)、 体下半:LR縄文横位回転	ミガキ	口縁部上半欠失、 外面炭化物付着、 及び二次加熱による劣化	130
70	B-323	A区	-	弥生土器	深鉢	口縁～体上半	口:沈線(横位直線文)、 体上半:沈線→LR縄文→沈線→ミガキ (横位直線文+連弧文)	ミガキ	口径12.7cm、 内外面二次加熱による劣化	130
71	B-328	A区	-	弥生土器	深鉢	口縁～体上端	口唇:LR縄文横位回転、 口～体上端:沈線→ミガキ、 (横位直線文+連続山形文)	横位ミガキ(密)		130
72	B-324	E区	P13	弥生土器	深鉢	口縁～体上端	口唇:LR縄文横位回転、 口～体上端:沈線→ミガキ (横位直線文)	口:沈線 →口～体上端:ミガキ? (横位直線文)	内面二次加熱による劣化	130
73	B-325	E区	P133	弥生土器	深鉢	口縁	沈線→ミガキ(横位直線文)	横位ミガキ(密)	口径(14.4) cm	130

第330図　Ⅳ層出土遺物(8)



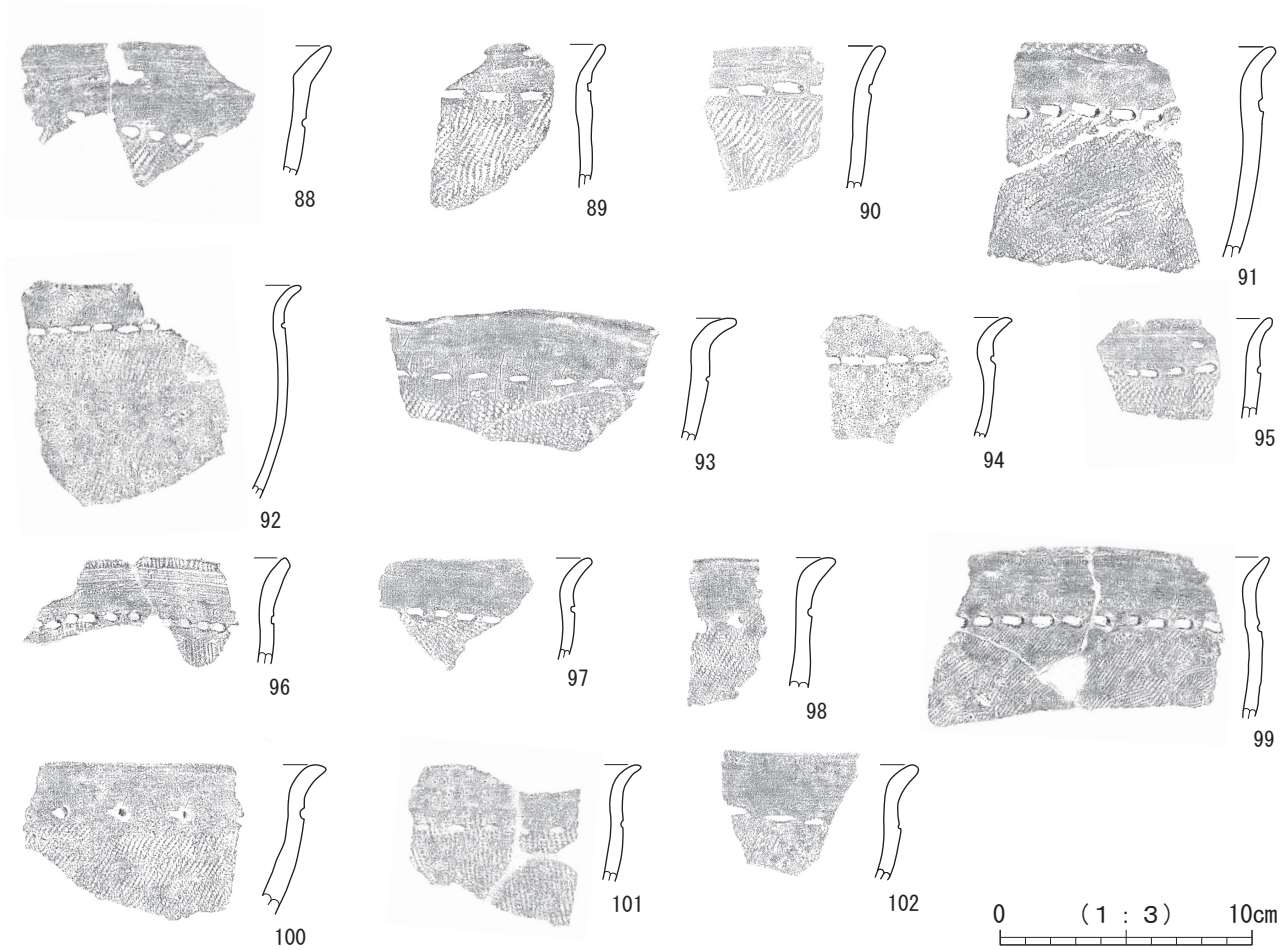
図版番号	登録番号	弥生調査区	取上番号	種別	器種	部位	外面調整・文様	内面調整・文様	備　考	写真図版
74	B-330	E区	P70	弥生土器	深鉢	口縁～体下半	口唇:LR縄文横位回転、 口:沈線→LR縄文→沈線(横位→縦位) →ミガキ(横位直線文+方形文)、 体:LR縄文斜位回転 →体上端:沈線→ミガキ(横位直線文)	口:沈線→口～体:ミガキ (横位直線文)	口径(32.9) cm、 口縁部～体部上半外面 及び体部下半内面炭化物付着、 体部外面縄文原体末端の解け有	130
75	B-428	B区	P18	弥生土器	深鉢	口縁～体上半	口唇:LR縄文横位回転→波頂部押圧刻み、 口:ヨコナデ→体上半:LR縄文横位回転 →体上端:沈線→口:横位ミガキ	横位ミガキ(密)	口径(25.8) cm、 波状口縁、 体部内外面炭化物付着	130
76	B-094	A区	P31	弥生土器	深鉢	口縁～体上半	体上半:LR縄文横位回転 →口:沈線→ミガキ(横位直線文)	横位ミガキ	沈線内赤彩?、 体部内外面炭化物付着	130
77	B-331	B区	-	弥生土器	深鉢	口縁～体下半	体:斜位ハケメ →口唇・体:植物茎回転文横位回転 →体上端:列点刺突(押し引き、左→右) →口:横位ミガキ	横位ミガキ(密)	口径(34.0) cm、 波状口縁の可能性有	131
78	B-253	C区	P344	弥生土器	深鉢	口縁～体上半	口:ヨコナデ→体:LR縄文横位・斜位回転 →体上端:列点刺突(右→左)→口:ミガキ	横位ミガキ(粗)	波状口縁の可能性有	131
79	B-366	C区	P357	弥生土器	深鉢? or 甕?	体下半～底	体:RL縄文横位回転、 体下端:横位ミガキ(密)、 底:木葉痕→ミガキ(密)	横位ミガキ(密)	底径(9.0) cm	131

第331図　Ⅳ層出土遺物(9)



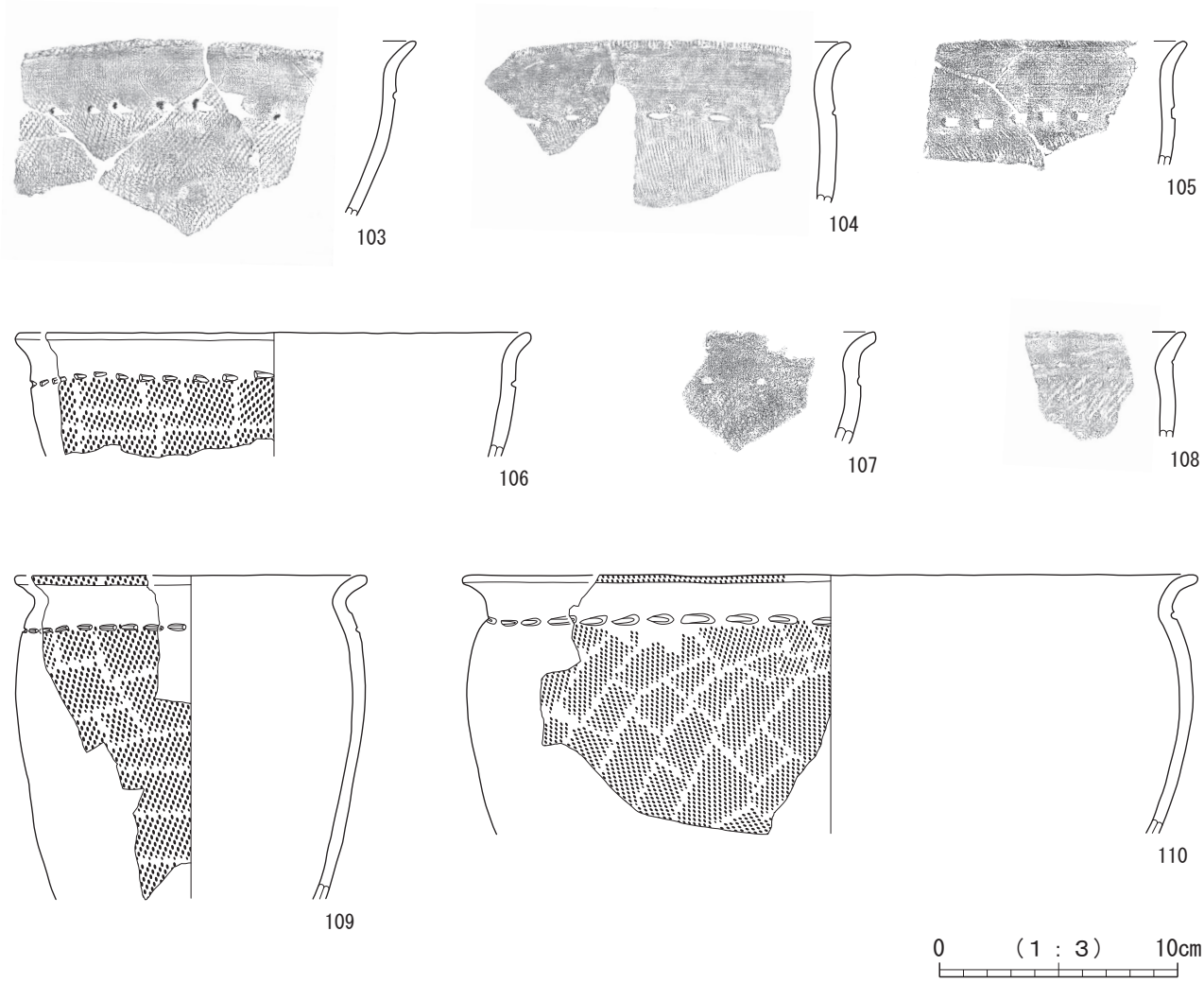
図版番号	登録番号	弥生調査区	取上番号	種別	器種	部位	外面調整・文様	内面調整・文様	備　考	写真図版
80	B-308	B区	-	弥生土器	甕	口縁～体下半	口:ヨコナデ →口唇・体:植物茎回転文横位・斜位回転、 →体上端:列点刺突(押し引き、左→右)	口:ヨコナデ →口～体:横位ミガキ(密)	口径(24.3) cm	131
81	B-228	C区	P334	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ→体:LR縄文斜位回転 →体上端:列点刺突(押し引き、左→右)	横位ミガキ		131
82	B-235	F区	-	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ →体:LR縄文横位回転 →体上端:列点刺突(押し引き、左→右) →口:ミガキ(粗)	ミガキ		131
83	B-252	C区	P211	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ、体:LR縄文横位回転 →体上端:列点刺突(押し引き、左→右)	ミガキ	内外面二次加熱痕	131
84	B-303	D区	P20	弥生土器	甕	口縁～底	口:ヨコナデ →口唇・体:LR縄文横位・斜位回転 →体上端:列点刺突(左→右)、 体下端:ミガキ(粗)、 底:木葉痕?→ミガキ(粗)	横位ミガキ(密)	口径(16.6) cm、底径(7.0) cm、 器高19.9cm、 体部中央外面 二次加熱による火ハネ、 底部穿孔(焼成後)の可能性有	131
85	B-267	F区	-	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ →口唇・体:LR縄文横位回転 →体上端:列点刺突(左→右)	横位ミガキ		131
86	B-206	A区	-	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ →口唇・体:LR縄文横位回転 →体上端:列点刺突(左→右)	口:ヨコナデ →口～体:横位ミガキ(密)		131
87	B-276	C区	P220	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ →口唇・体:LR縄文横位・斜位回転 →体上端:列点刺突(右→左)	横位ミガキ(密)	口縁部外面炭化物付着	131

第332図　Ⅳ層出土遺物(10)



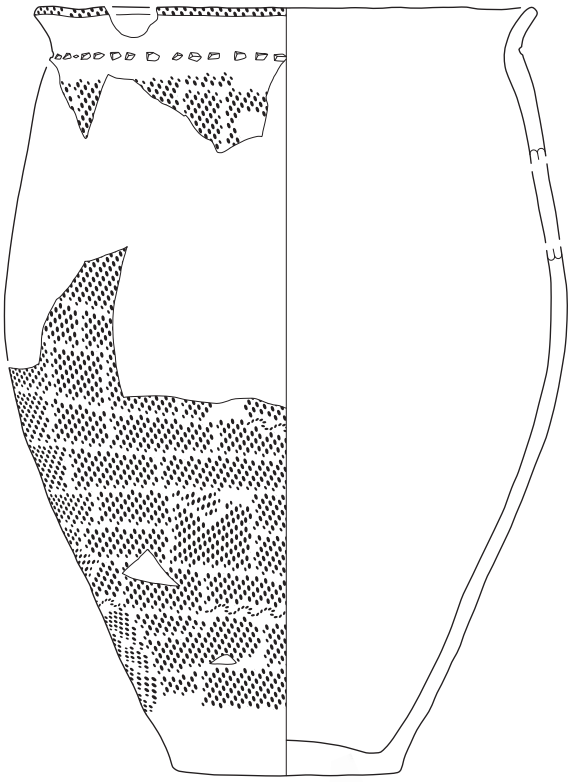
図版番号	登録番号	弥生調査区	取上番号	種別	器種	部位	外面調整・文様	内面調整・文様	備　考	写真図版
88	B-229	E区	-	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ→体:LR縄文横位回転 →体上端:列点刺突(押し引き、左→右)	横位ミガキ(密)		132
89	B-224	E区	P117	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ナデ→体:LR縄文横位回転 →体上端:列点刺突(押し引き、左→右)	横位ミガキ(粗)		132
90	B-216	B区	-	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ナデ→体:LR縄文横位回転 →体上端:列点刺突(押し引き、左→右)	横位ミガキ(粗)		132
91	B-270	B区	P46	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ →口唇・体:LR縄文横位回転 →体上端:列点刺突(押し引き、左→右)	横位ミガキ(密)		132
92	B-222	C区	P299	弥生土器	甕	口縁～体上半	口唇・口:不明、体:LR縄文横位回転 →体上端:列点刺突(押し引き、左→右)	ミガキ	内外面二次加熱痕	132
93	B-237	E区	P50	弥生土器	甕	口縁～体上半	体:ハケメ→口:ヨコナデ →体:LR縄文横位・斜位回転 →体上端:列点刺突(押し引き、左→右)	横位ミガキ		132
94	B-217	C区	P65	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:不明、口唇・体:LR縄文回転?、 体上端:列点刺突(押し引き、左→右)	不明	内外面二次加熱痕	132
95	B-271	F区	-	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ→体:LR縄文横位回転 →体上端:列点刺突(左→右)	横位ミガキ(密)		132
96	B-275	C区	P123	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ、 →口唇・体:植物茎回転文横位回転 →体上端:列点刺突(左→右)	横位ミガキ(密)		132
97	B-218	A区	P44	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ →体:LR縄文横位回転 →体上端:列点刺突(押し引き、左→右) →口:ミガキ(粗)	横位ミガキ		132
98	B-242	C区	P404	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ →体:LR縄文横位回転 →体上端:列点刺突(左→右)	横位ミガキ		132
99	B-220	D区	P40	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ →口唇・体:LR縄文横位・斜位回転 →体上端:列点刺突(左→右)	横位ミガキ		132
100	B-241	C区	P405	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ→体:LR縄文横位回転 →体:上端列点刺突(左→右)	横位ミガキ		132
101	B-244	C区	-	弥生土器	甕	口縁～体上半	口唇・口:不明、 体:LR縄文斜位回転 →体上端:列点刺突(左→右)	不明	内外面二次加熱痕	132
102	B-208	A区	P23	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ →体:LR縄文横位回転 →体上端:列点刺突(押し引き、左→右)	不明	内面劣化	132

第333図　Ⅳ層出土遺物(11)

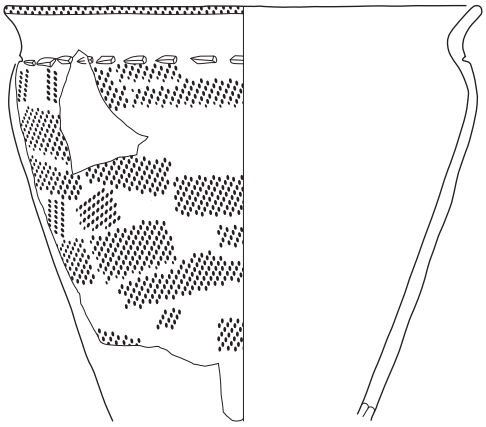


図版番号	登録番号	弥生調査区	取上番号	種別	器種	部位	外面調整・文様	内面調整・文様	備　考	写真図版
103	B-281	D区	P3	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ →口唇・体:LR縦文横位回転 →体上端:列点刺突(右→左)	横位ミガキ(密)	外面炭化物付着	132
104	B-279	C区	P242	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ →口唇・体:植物茎回転文横位回転 →体上端:列点刺突(右→左)	横位ミガキ(密)		132
105	B-284	C区	P323	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ →口唇・体:Rl縦文横位回転 →体上端:列点刺突(右→左)	口:ヨコナデ →口～体:横位ミガキ	外面炭化物付着	132
106	B-305	B区	P68	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ →体:ハケメ→LR縦文横位回転 →体上端:列点刺突(右→左)	横位ミガキ	口径(21.4) cm	132
107	B-256	B区	-	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ →体:LR縦文横位回転 →体上端:列点刺突(右→左)	横位ミガキ		132
108	B-249	C区	-	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ →体:Lr縦文横位回転 →体上端:列点刺突(右→左)	横位ミガキ		132
109	B-310	E区	-	弥生土器	甕	口縁～体下半	口:ヨコナデ →口唇・体:LR縦文横位回転 →体上端:列点刺突(押し引き、左→右)	口:ヨコナデ →口～体:横位ミガキ	口径(14.8) cm	132
110	B-317	C区	P295	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ →口唇・体:LR縦文横位・斜位回転 →体上端:列点刺突(押し引き、左→右)	横位ミガキ	口径(30.6) cm、 口縁部～体部上端外面 炭化物付着、 口縁部～体部上半内外面 二次加熱による劣化	132

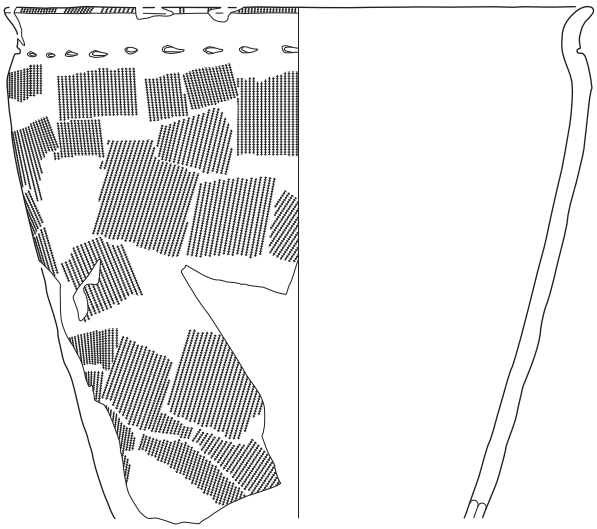
第334図　Ⅳ層出土遺物(12)



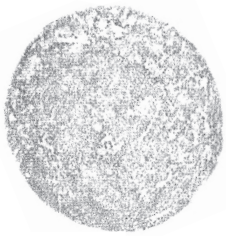
111

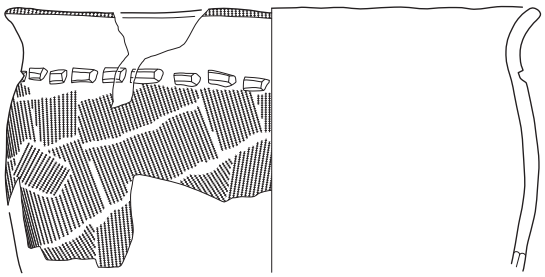


112



113





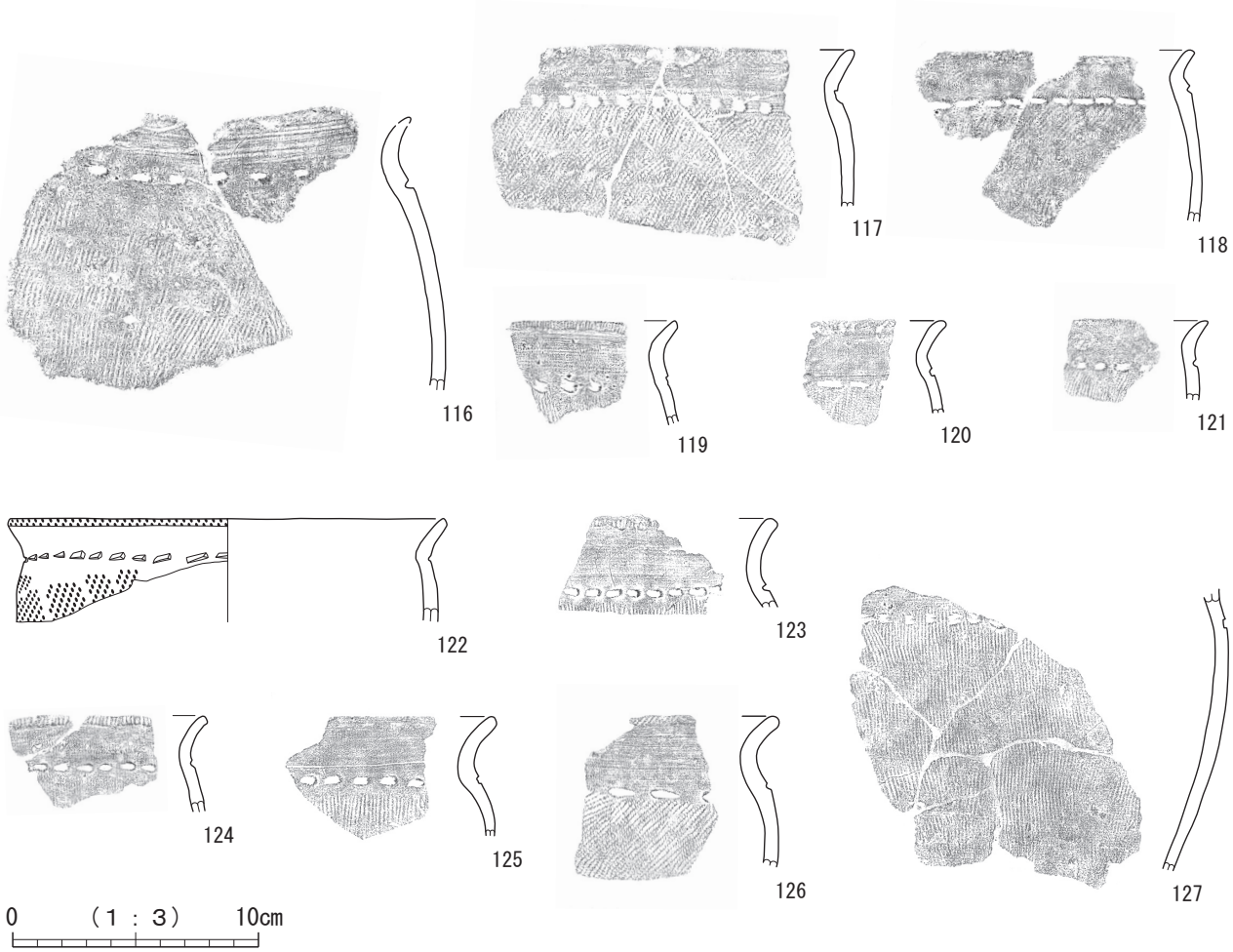
114

115

0　（1：3）　10cm

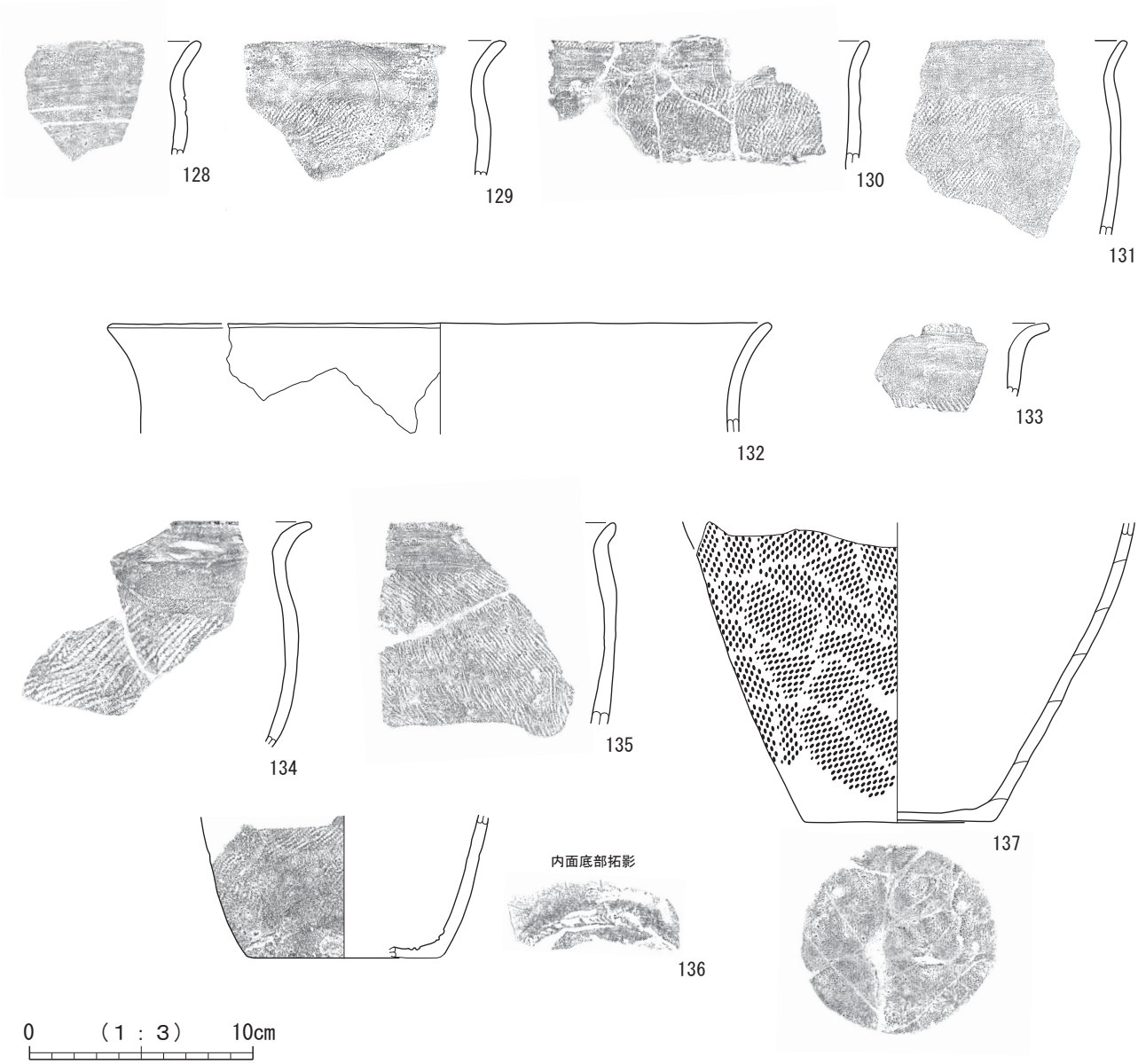
図版番号	登録番号	弥生調査区	取上番号	種別	器種	部位	外面調整・文様	内面調整・文様	備　考	写真図版
111	B-364	D区	P38	弥生土器	甕	口縁～底	口:ヨコナデ →口唇・体:LR縄文横位・斜位回転 →体上端:列点刺突(押し引き、左→右)、 体下端:横位ミガキ(粗)、 底:木葉痕→ミガキ(粗)	横位ミガキ(密)	図上復元、 口径(19.4) cm、 底径9.0cm、 器高(21.0) + (6.3) cm	133
112	B-309	C区	-	弥生土器	甕	口縁～体下半	口:ヨコナデ →口唇・体:LR縄文横位・斜位回転 →体上端:列点刺突(左→右)	横位ミガキ	口径(18.9) cm、 内外面二次加熱による劣化	133
113	B-307	E区	P23	弥生土器	甕	口縁～体下半	口:ヨコナデ →口唇・体:植物茎回転文横位・斜位回転、 →体上端:列点刺突(右→左)	口:ヨコナデ →口～体:横位ミガキ(密)	口径(23.2) cm、 内外面炭化物付着	133
114	B-315	A区	P36	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ →口唇・体:植物茎回転文横位・斜位回転 →体上端:列点刺突(押し引き、左→右)	横位ミガキ	口径(20.6) cm	133
115	B-314	E区	P22	弥生土器	甕	口縁～体下半	口:ヨコナデ →口唇・体:植物茎回転文横位回転 →体上端:列点刺突(左→右)	横位ミガキ	口径(26.0) cm、 体部上半外面炭化物付着	133

第335図　Ⅳ層出土遺物(13)



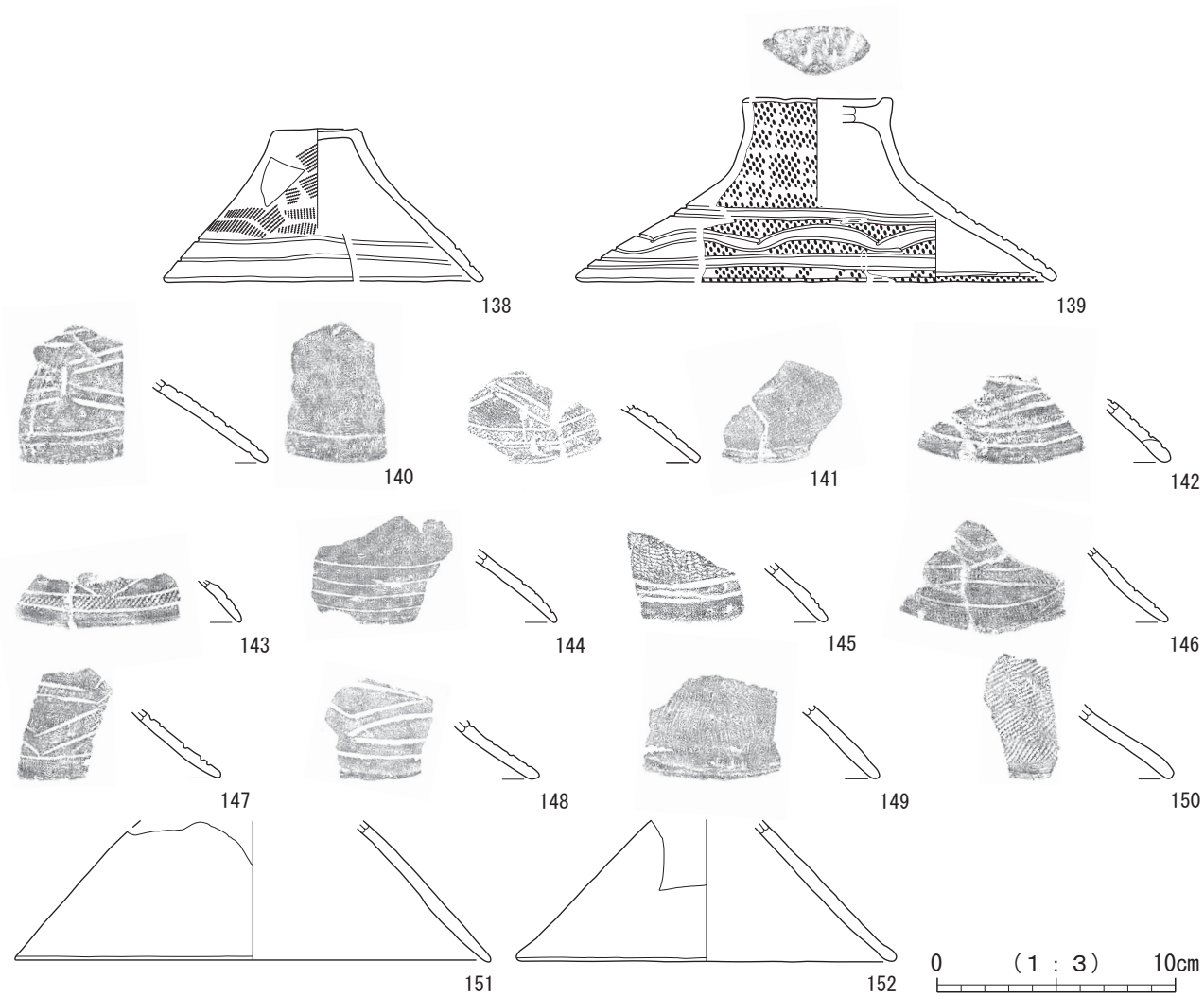
図版番号	登録番号	弥生調査区	取上番号	種別	器種	部位	外面調整・文様	内面調整・文様	備　考	写真図版
116	B-312	C区	P295	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ →体:植物茎回転文横位・斜位回転 →体上端:列点刺突(押し引き、左→右)	横位ミガキ	口唇部欠失	133
117	B-227	C区	P171	弥生土器	甕	口縁～体上半	口唇:LR縄文回転?、 口:ヨコナデ →体:LR縄文横位回転 →体上端:列点刺突(押し引き、左→右)	横位ミガキ		133
118	B-223	C区	-	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ →口唇・体:LR縄文横位回転 →体上端:列点刺突(押し引き、左→右)	ナデ	内外面二次加熱痕	133
119	B-286	C区	P81	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ →体:植物茎回転文斜位回転 →体上端:列点刺突(押し引き、左→右)	横位ミガキ		133
120	B-273	C区	P399	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ →口唇・体:LR縄文斜位回転 →体上端:列点刺突(押し引き、左→右) →口:ミガキ(粗)	横位ミガキ		134
121	B-226	C区	P136	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ →体:植物茎回転文横位回転 →体上端:列点刺突(押し引き、左→右)	横位ミガキ(密)		134
122	B-262	C区	P189	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ →体:LR縄文横位回転 →体上端:列点刺突(左→右)	口:ヨコナデ →口～体:横位ミガキ	口径(19.8) cm、 外面二次加熱痕・炭化物付着	134
123	B-285	C区	P316	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ →口唇・体:植物茎回転文横位回転 →体上端:列点刺突(左→右)	横位ミガキ		134
124	B-277	E区	P77	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ →口唇・体:植物茎回転文横位回転 →体上端:列点刺突(左→右)	横位ミガキ		134
125	B-272	B区	P37	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ →口唇・体:植物茎回転文横位回転 →体上端:列点刺突(左→右)	横位ミガキ(密)		134
126	B-266	C区	P358	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ →口唇・体:LR縄文横位回転 →体上端:列点刺突(右→左)	口:ヨコナデ →口～体:横位ミガキ	口縁部内面炭化物付着	134
127	B-336	C区	P301	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ →体:ハケメ?→植物茎回転文横位回転 →体上端:列点刺突(押し引き、左→右)	横位ミガキ	口縁部上半欠失	134

第336図　Ⅳ層出土遺物(14)



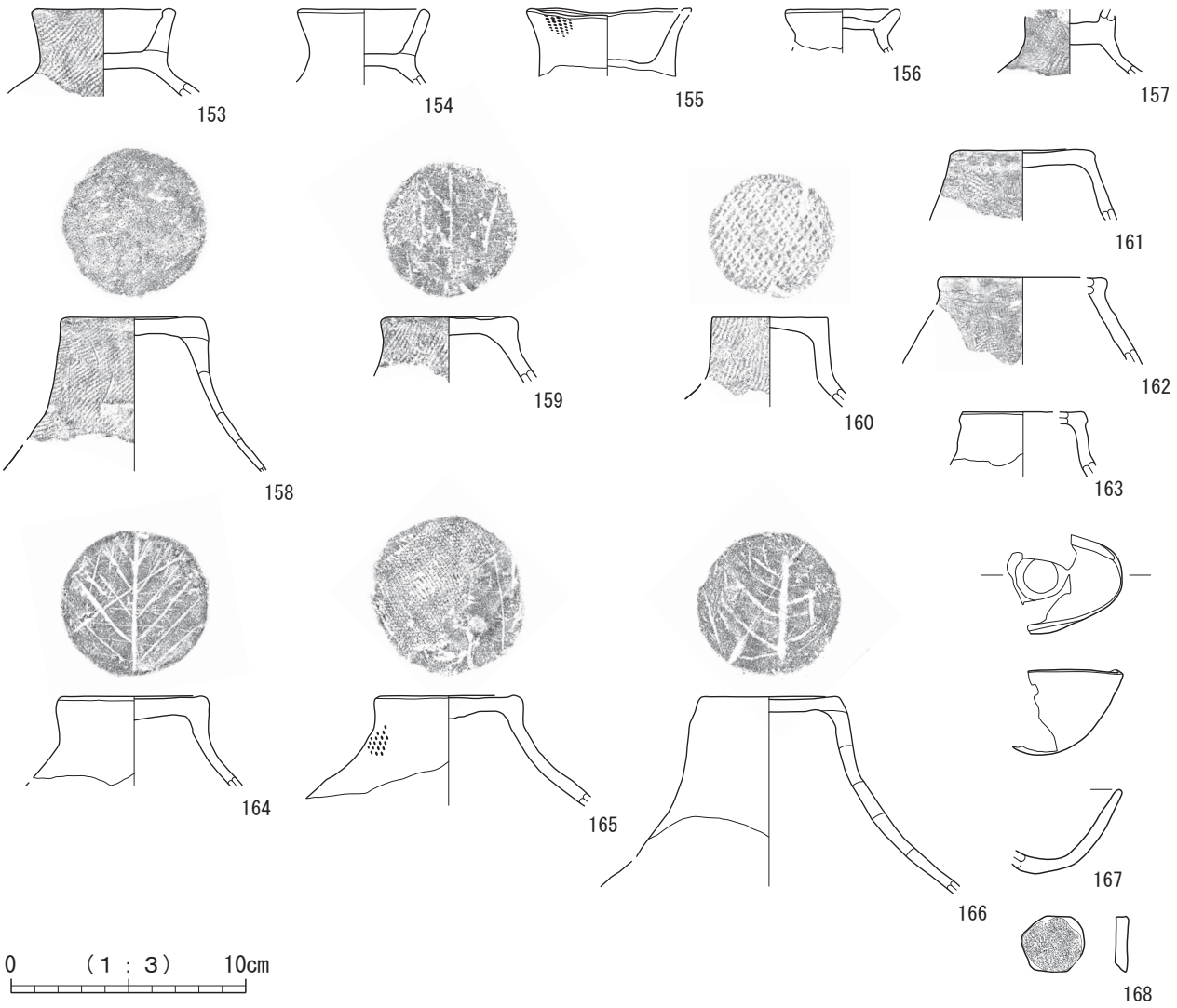
図版番号	登録番号	弥生調査区	取上番号	種別	器種	部位	外面調整・文様	内面調整・文様	備　考	写真図版
128	B-297	C区	P269	弥生土器	甕	口縁～体上半	口唇:不明、口:ヨコナデ、体:地文不明 →体上端:沈線(横位直線文)	ミガキ	内外面劣化	134
129	B-292	C区	P108	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:横位ナデ →体:LR縄文横位回転	横位ミガキ		134
130	B-298	D区	P16	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ →口唇・体:LR縄文横位回転	横位ミガキ(密)		134
131	B-290	C区	P57	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:横位ナデ →体:LR＋r（第1類)付加条縄文横位回転	横位ミガキ		134
132	B-332	C区	-	弥生土器	甕?	口縁～体上半	ミガキ(密)	ミガキ(密)	口径(29.0) cm	134
133	B-300	C区	P312	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ →口唇・体:植物茎回転文横位・斜位回転	横位ミガキ	口縁部外面剥離	134
134	B-431	B区	P51	弥生土器	甕 or 深鉢	口縁～体上半	口:ナデ →体:LR縄文横位回転 →口:ミガキ(粗)	ナデ	波状口縁の可能性有	134
135	B-289	C区	P15	弥生土器	甕	口縁～体上半	口唇:不明、口:ヨコナデ →体:RL縄文横位回転	横位ミガキ		134
136	B-119	A区	P32	弥生土器	甕? or 鉢?	体下半～底	LR縄文横位回転、 底:木葉痕?	横位ミガキ、 体下端:縄文原体(L)側面押圧	底径(8.2) cm、 外面二次加熱痕	134
137	B-350	E区	P20	弥生土器	甕?	体下半～底	体下半:LR縄文横位・斜位回転、 体下端:横位ミガキ(粗)、 底:木葉痕	横位ミガキ	底径8.3cm、 外面二次加熱痕および劣化	134

第337図　Ⅳ層出土遺物(15)



図版番号	登録番号	弥生調査区	取上番号	種別	器種	部位	外面調整・文様	内面調整・文様	備　考	写真図版
138	B-166	C区	P325	弥生土器	蓋	天井～口縁	体上半:植物茎回転文横位・斜位回転→体下半～口:沈線→横位ミガキ（横位直線文）	ミガキ	口径13.4cm、天井部径3.4cm、器高6.4cm、天井部外面凹凸顕著（剥離？）	134
139	B-156	E区	P52	弥生土器	蓋	天井～口縁	天井:網代痕、体～口:沈線→LR縄文→沈線→ミガキ（密）（横位直線文+連弧文）	口:沈線→LR縄文横位回転→沈線→口～体:ミガキ（密）（横位直線文）	口径（19.9）cm、天井部径（6.2）cm、器高7.7cm、口縁部内外面炭化物付着及び黒色化	134
140	B-181	C区	P202	弥生土器	蓋or高坏	体下半～口縁	沈線、縦位短線→ミガキ（横位直線文+連続山形文）	口:沈線→ミガキ（横位直線文）	内外面二次加熱痕	134
141	B-193	E区	-	弥生土器	蓋	体下半～口縁	沈線→LR縄文→沈線→ミガキ（横位直線文+連続山形文）	口:沈線→口～体:ミガキ（横位直線文）	口縁部内外面黒色化	134
142	B-188	C区	P408	弥生土器	蓋	体下半～口縁	沈線→ミガキ（横位直線文+連弧文）	ミガキ	外面二次加熱痕、口縁部内外面黒色化	135
143	B-082	C区	-	弥生土器	蓋	体下半～口縁	口:ヨコナデ→体下半～口:沈線→LR縄文→沈線→ミガキ（横位直線文+連弧文？）	口:ヨコナデ→口～体:ミガキ	口縁部内面黒色化	135
144	B-095	A区	P45	弥生土器	蓋	体下半～口縁	体下半～口:LR縄文横位回転、口:沈線→ミガキ（横位直線文）	ミガキ（密）	口縁部内面黒色化	135
145	B-189	C区	P27	弥生土器	蓋	体下半～口縁	体:LR縄文斜位回転→口:沈線→ミガキ（横位直線文）	ミガキ	口縁部内外面黒色化	135
146	B-197	C区	P411	弥生土器	蓋	体下半～口縁	沈線→植物茎回転文→沈線→ミガキ（横位直線文+連弧文）	横位ミガキ（密）	外面二次加熱痕	135
147	B-199	C区	P411	弥生土器	蓋	体下半～口縁	沈線→植物茎回転文→沈線→ミガキ（横位直線文+連弧文）	横位ミガキ（密）		135
148	B-191	A区	P31	弥生土器	蓋	体下半～口縁	沈線→ミガキ（横位直線文+連弧文）	ミガキ	内外面口縁部黒色化	135
149	B-202	A区	P4	弥生土器	蓋	体下半～口縁	口:ヨコナデ→体下半～口:植物茎回転文横位・斜位回転	横位ミガキ（密）	口縁部内外面黒色化、口縁部内面炭化物付着、外面二次加熱痕	135
150	B-194	C区	P236	弥生土器	蓋	体下半～口縁	LR縄文横位回転	ミガキ（粗）	内外面口縁部黒色化	135
151	B-178	B区	P53	弥生土器	蓋	体上半～口縁	ナデ→ミガキ（粗）	横位ミガキ（密）	口径（20.0）cm、口縁部内面黒色化	135
152	B-179	C区	P329	弥生土器	蓋	体上半～口縁	口:ヨコナデ→体上半～口:横位ミガキ	横位ミガキ	口径（15.6）cm、口縁部内面黒色化・炭化物付着	135

第338図　Ⅳ層出土遺物（16）



図版番号	登録番号	弥生調査区	取上番号	種別	器種	部位	外面調整・文様	内面調整・文様	備　考	写真図版
153	B-151	C区	P250	弥生土器	蓋	つまみ～体上半	LR縄文横位・斜位回転	つまみ:ヨコナデ、体上半:ミガキ(密)	つまみ部径(5.8) cm	135
154	B-155	B区	-	弥生土器	蓋	つまみ～体上半	ミガキ(粗)	ミガキ(粗)	つまみ部径5.3cm	135
155	B-154	A区	P33	弥生土器	蓋	つまみ～体上半	LR縄文斜位回転	ミガキ(粗)	つまみ部径(6.8) cm	135
156	B-162	C区	P403	弥生土器	蓋	つまみ～体上半	ミガキ(粗)	つまみ:ミガキ(粗)、体上半:ナデ?	つまみ部径4.8cm	135
157	B-160	C区	P128	弥生土器	蓋	つまみ～体上半	LR縄文横位回転	つまみ:ミガキ(粗)、体上半:ミガキ	つまみ部上半欠失	135
158	B-167	B区	P27	弥生土器	蓋	天井～体上半	天井:ミガキ?、体上半:LR縄文横位・斜位回転	ミガキ	天井部径5.7cm、外面二次加熱痕	135
159	B-169	C区	P1	弥生土器	蓋	天井～体上半	天井:木葉痕→ミガキ、体上半:LR縄文横位回転	横位ミガキ	天井部径5.5cm	135
160	B-168	E区	P2	弥生土器	蓋	天井～体上半	天井:網代痕、体上半:LR縄文横位・斜位回転	ミガキ(密)	天井部径5.0cm、体部外面赤色顔料付着	135
161	B-124	C区	P334	弥生土器	蓋or鉢	天井～体上半	天井:木葉痕?→ミガキ、体上半:LR縄文縦位回転	ミガキ(粗)	天井部径(5.3) cm	135
162	B-163	C区	-	弥生土器	蓋	天井～体上半	天井:木葉痕→ミガキ(粗)、体:LR縄文横位回転→体上端:横位ミガキ(密)	ミガキ	天井部径(6.9) cm	135
163	B-174	C区	-	弥生土器	蓋	天井～体上半	天井:木葉痕、体上半:ナデ	横位ミガキ(粗)	天井部径(5.2) cm、内外面二次加熱痕	135
164	B-173	C区	P127	弥生土器	蓋	天井～体上半	天井:木葉痕、体上半:ミガキ	横位ミガキ	天井部径6.1cm、外面二次加熱痕	135
165	B-172	C区	P369	弥生土器	蓋	天井～体上半	天井:織布痕・木葉痕、体上半:ナデ→LR縄文横位回転	体:横位ミガキ、天井:ミガキ(粗)	天井部径5.8cm	135
166	B-171	A区	P43	弥生土器	蓋	天井～体上半	天井:木葉痕、体上半:ミガキ(粗)	横位ミガキ(粗)	天井部径5.8cm	135
167	P-030	C区	P391	土製品	スプーン形土製品?	口縁～底	ナデ	ナデ	残存長4.9cm、残存幅3.8cm、残存高3.6cm、ミニチュア土器の可能性有	135
168	P-033	B区	-	土製品	円盤状土製品?	体	LR縄文横位回転	ミガキ	径2.7cm、厚さ0.7cm	135

第339図　Ⅳ層出土遺物(17)

ｂ.石器（第340～348図）

古代の遺構検出面Ⅳ層より出土した石器のうち、29点の資料を掲載した。

弥生時代以前の石器については下記の分類基準に従って記載を行った。

打製石器

器種ごとの形態、二次加工の観察される範囲、微細剥離痕の施される範囲を中心に分類した。

石鏃

有茎石鏃（Ⅰ類）、アメリカ式石鏃（Ⅱ類）に分けられる。これらは長さの違いから、A種:2.5cm以上、B種:2.5cm未満に分けられる。Ⅰ類・Ⅱ類は厚幅比（厚さ÷幅）から、1種:厚幅比0.40以上、2種:厚幅比0.40未満に分けられる。

二次加工のある剥片

二次加工の加工面によりⅠ～Ⅲ類に分けられる。

Ⅰ類:表面に加工があるもの

Ⅱ類:裏面に加工があるもの

Ⅲ類:表面と裏面に加工があるもの

微細剥離痕のある剥片

微細剥離痕の分布範囲によりⅠ・Ⅱ類に分けられる。

Ⅰ類:1縁辺に微細剥離痕があるもの

Ⅱ類:複縁辺に微細剥離痕があるもの

礫石器

礫石器にみられる使用痕跡には磨痕・凹痕・敲打痕の3つがあり、単独やこれらの組み合わせのものがみられる。

凹痕の中には痕跡が僅かで、敲打痕との区別が困難なものも含まれていた。従って便宜上の判別基準として、凹面を形成しているものを凹痕、素材の形状を残しているものを敲打痕とした。使用痕跡は、その範囲・部位・数・程度について観察し、記述を行っている。礫石器として報告した器種では、磨石、凹石、敲石、台石があり、使用痕と素材形状から下記の分類を行った。

磨・凹・敲石

磨痕・凹痕・敲打痕の組み合わせから、以下のように分類される。

Ⅰ類:磨痕のみのもの

Ⅱ類:凹痕のみのもの

Ⅲ類:敲打痕のみのもの

Ⅳ類:磨痕と凹痕がみられるもの

Ⅴ類:磨痕と敲打痕がみられるもの

Ⅵ類:凹痕と敲打痕がみられるもの

Ⅶ類:全てがみられるもの

Ⅰ～Ⅶ類は素材形状からA～C種に細分される。なお、素材形状は便宜上の判断基準として長幅比（長さ÷幅）から認定している。

A種:円礫素材のもの（長幅比0.95以上1.05未満）

B種:楕円礫素材のもの（長幅比1.05以上2.00未満）

C種:棒状礫素材のもの（長幅比2.00以上）

1)打製石器

石鏃

169･170は未成品であるが完成形態はⅠ類Ａ1種と推測される。171はⅠ類Ａ2種、172はⅠ類Ｂ2種、173は石鏃未成品である。169は先端部、171は先端部と基部、173は基部を欠損している。169 ～ 172は両面を整形しており、側縁を入念に調整している。173は周縁を整形している。170 ～ 172は素材剥片の剥離面を僅かに残しており、173は素材剥片の剥離面を大きく残している。169の断面形は身部、基部共に凸レンズ状を呈している。170の断面形は身部、基部共に六角形を呈している。171の断面形は身部が三角形で、基部は凸レンズ状を呈している。172の断面形は身部が凸レンズ状で、基部は六角形を呈している。173の断面形は凸レンズ状を呈している。石鏃に用いられている石材は、169は流紋岩、170は鉄石英、171は珪質頁岩、172は玉髄、173は珪化凝灰岩である。

二次加工のある剥片

174 ～ 179はⅢ類である。174は平坦剥離で周縁を調整している。尖端部が作出されておらず、石鏃とは区別され、別の用途の小型の石器と考えられる。175･176･179は二次加工を縁辺に施しており、二次加工の施された縁辺には微細剥離痕も観察される。177は二次加工を１縁辺に施しており、自然面を残している。178は素材剥片の一部を折り取り、その面を打面とした二次加工を施している。本来の素材縁辺に施された二次加工とあわせて、尖端部を作り出している。二次加工のある剥片に用いられている石材は全て流紋岩である。

微細剥離痕のある剥片

180はⅠ類であり、横長剥片を素材とし、自然面を残している。石材は流紋岩である。

2)礫石器

磨・凹・敲石

181はⅠ類Ｂ種、182 ～ 184･185はⅣ類Ｂ種、186 ～ 188はⅤ類Ｂ種、189はⅥ類Ｂ種、190･191はⅦ類Ｂ種である。181はａ面中央に磨痕が認められる。182はａ面中央に浅い凹痕とｂ面中央に磨痕が認められる。183･184はａ面中央に磨痕と凹痕が複合して残され、ｂ面中央に浅い凹痕が認められる。185はａ面中央に凹痕が複数残され、一方の端部に磨痕が認められる。186はａ面中央に磨痕が残され、ａ面右側縁に強い敲打痕が認められる。187は両面中央に磨痕が残され、両端に敲打痕が認められる。188は両面中央に磨痕が残され、上下両端部とｂ面に敲打痕が観察され、特に下端部の敲打痕は損傷が著しい。189は両面中央に深い凹痕が残される。ａ面右側縁に敲打痕が認められる。190はｂ面の中央左側に磨痕が残され、両面中央に深い凹痕が観察され、下端部に敲打痕が認められる。191は両端に磨面と敲打痕が残され、ａ面中央に浅い凹痕が観察される。磨･凹･敲石に用いられている石材は181 ～ 184･189･190は凝灰岩、185 ～ 188･191は安山岩である。

台石

192はａ面中央に浅い凹痕が認められる。193はａ面の広範囲に磨痕が観察され、中央の凹んだ部分は特に顕著である。破損は火ハネによるものである。台石に用いられている石材は、192は凝灰岩、193は安山岩である。

礫器

194はｄ面側より連続的な二次加工を施し、２箇所に片刃の刃部を形成している。石材は珪化凝灰岩である。

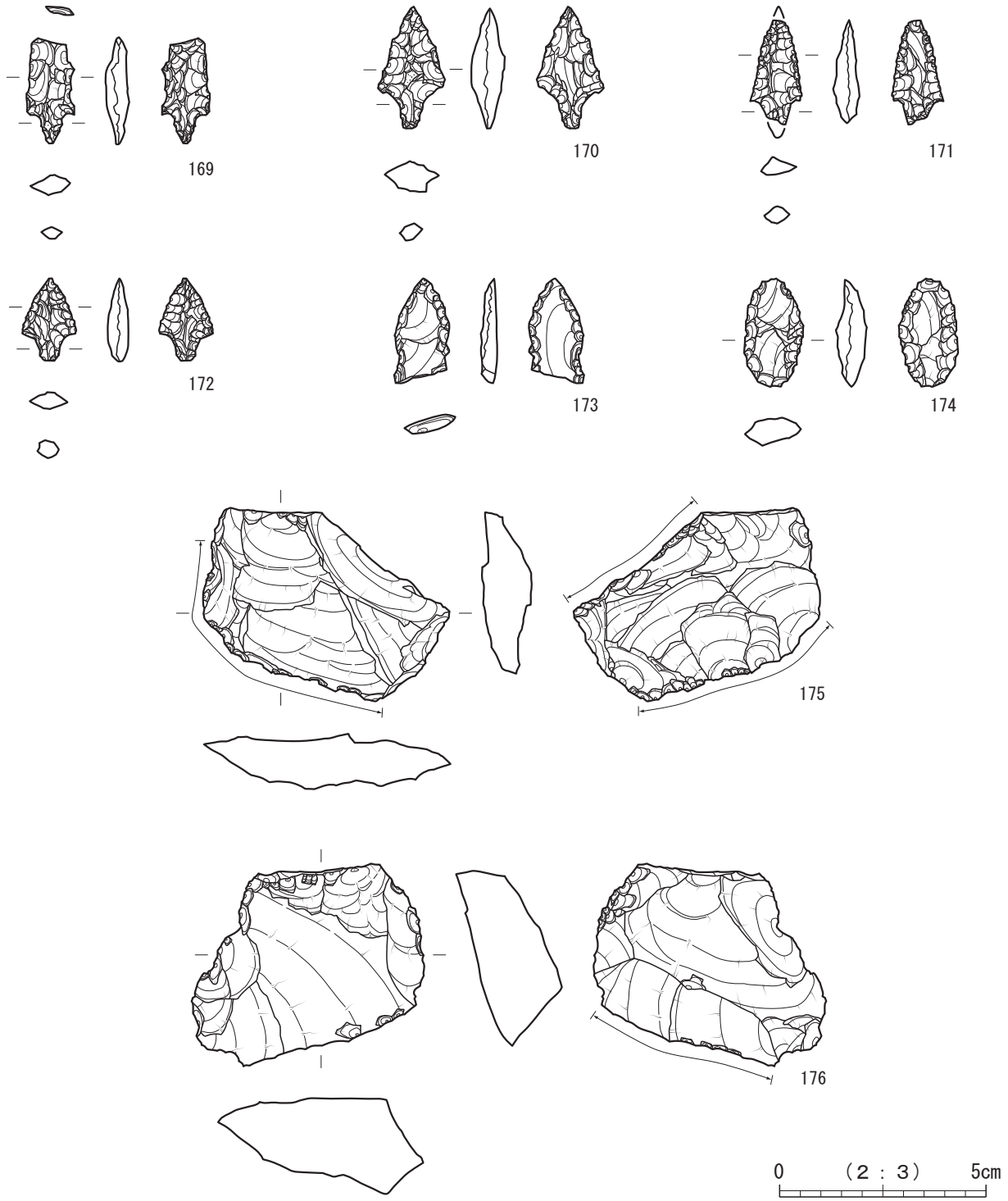
3)石製品

縁辺に粗い条痕のある礫片

195･196は１縁辺に直交する粗い条痕が認められ、使用による痕跡と考えられる。石材はいずれも凝灰岩である。

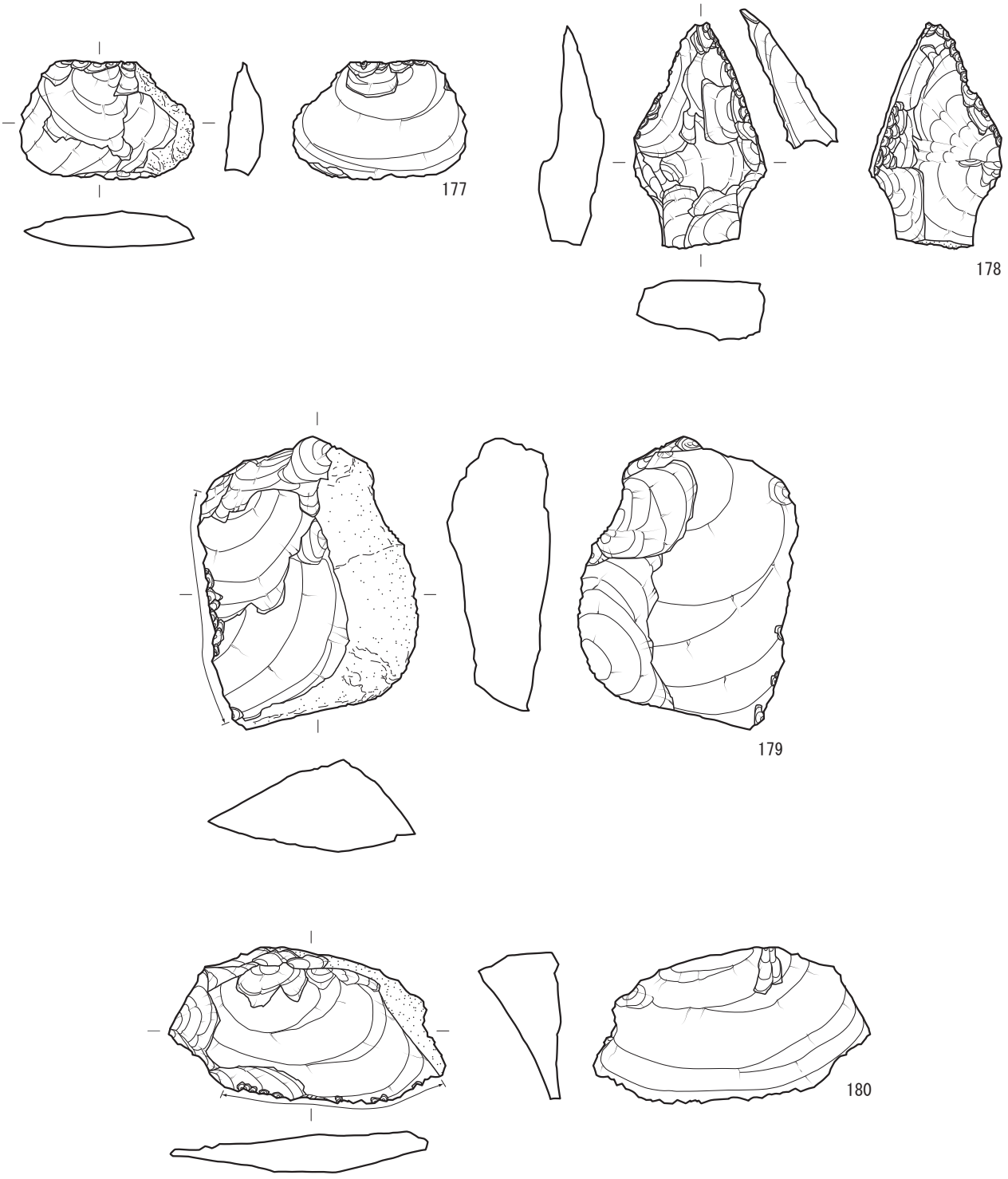
筋砥石

197は３条の筋状の研磨痕が形成された後、ａ面に深い凹痕が顕著であることから、凹石に転用されている。石材は凝灰岩である。



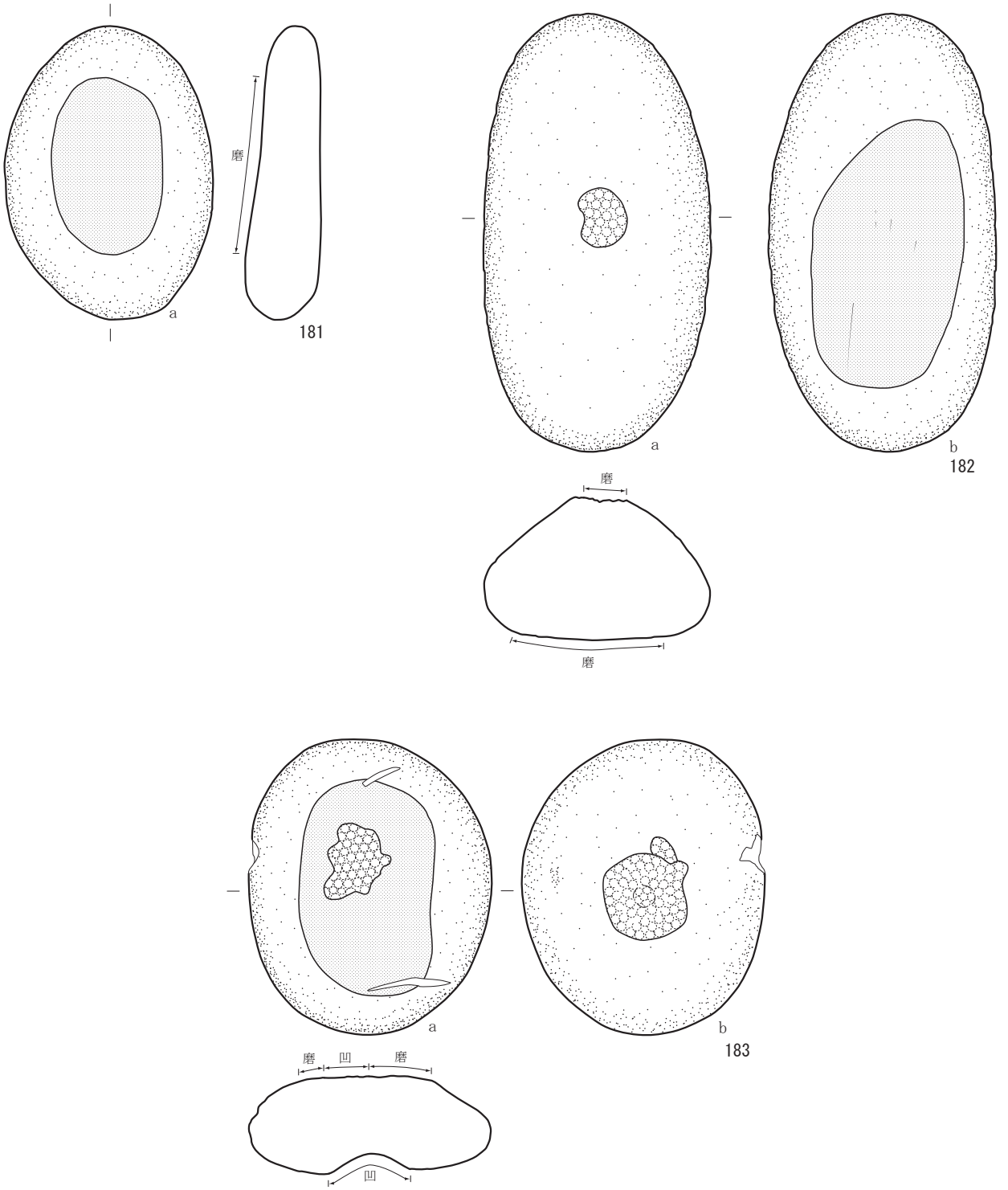
図版番号	登録番号	弥生調査区	層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真番号
169	Ka-009	C区	Ⅳ層	S21	打製石器	石鏃	ⅠA1	(2.5)×1.2×0.5	1.19	流紋岩	有茎、未成品、厚幅比0.41	136
170	Ka-011	E区	Ⅳ層	S14	打製石器	石鏃	ⅠA1	2.9×1.5×0.8	2.31	鉄石英	有茎、未成品、厚幅比0.53、素材面残す	136
171	Ka-006	C区	Ⅳ層	S35	打製石器	石鏃	ⅠA2	(2.5)×1.6×0.6	1.37	珪質頁岩	有茎、完成品、両端部欠損、厚幅比0.37、素材面残す	136
172	Ka-007	C区	Ⅳ層	S83	打製石器	石鏃	ⅠB2	2.0×1.3×0.5	0.95	玉髄	有茎、完成品、先端角55°、厚幅比0.38	136
173	Ka-002	B区	Ⅳ層	-	打製石器	石鏃	-	(2.4)×1.3×0.4	1.50	珪化凝灰岩	未成品、先端角59°、厚幅比0.30、素材面残す	136
174	Ka-008	C区	Ⅳ層	S168	打製石器	二次加工のある剥片	Ⅲ	2.6×1.4×0.7	2.25	流紋岩	打面部加工、表面＋裏面加工、周縁に二次加工あり	136
175	Ka-387	B区	Ⅳ層	-	打製石器	二次加工のある剥片	Ⅲ	4.1×6.0×1.7	32.53	流紋岩	平坦打面、剥離角140°、表面＋裏面加工、周縁に二次加工あり、同側縁に微細剥離痕あり	136
176	Ka-388	B区	Ⅳ層	-	打製石器	二次加工のある剥片	Ⅲ	4.6×5.4×2.4	52.48	流紋岩	平坦打面、剥離角126°、表面＋裏面加工、周縁に二次加工あり、同側縁に微細剥離痕あり	136

第340図　Ⅳ層出土遺物(18)



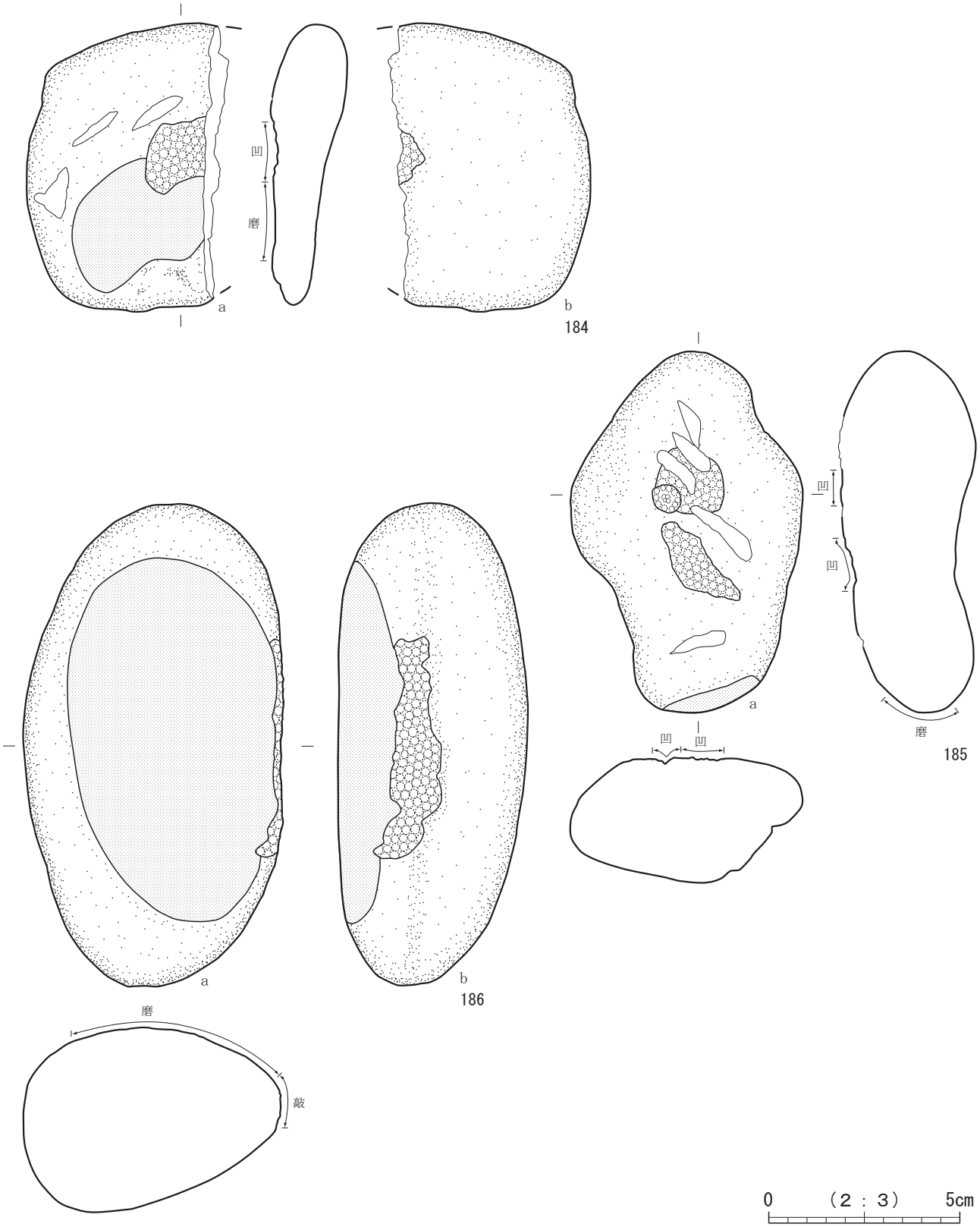
図版番号	登録番号	弥生調査区	層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真番号
177	Ka-389	C区	Ⅳ層	-	打製石器	二次加工のある剥片	Ⅲ	2.9×4.3×0.9	13.07	流紋岩	打面部加工、剥離角122°、表面＋裏面加工、自然面あり	136
178	Ka-390	C区	Ⅳ層	S191	打製石器	二次加工のある剥片	Ⅲ	5.4×3.2×1.7	23.58	流紋岩	平坦打面、剥離角102°、表面＋裏面加工、自然面あり	136
179	Ka-001	B区	Ⅳ層	-	打製石器	二次加工のある剥片	Ⅲ	6.7×5.2×2.5	88.77	流紋岩	切子打面、剥離角121°、表面＋裏面加工、同側縁に微細剥離痕あり、自然面あり	136
180	Ka-005	C区	Ⅳ層	S24	打製石器	微細剥離痕のある剥片	Ⅰ	3.7×6.4×2.1	30.60	流紋岩	自然面打面、剥離角103°、1縁辺に微細剥離痕あり、自然面あり	136

第341図　Ⅳ層出土遺物(19)



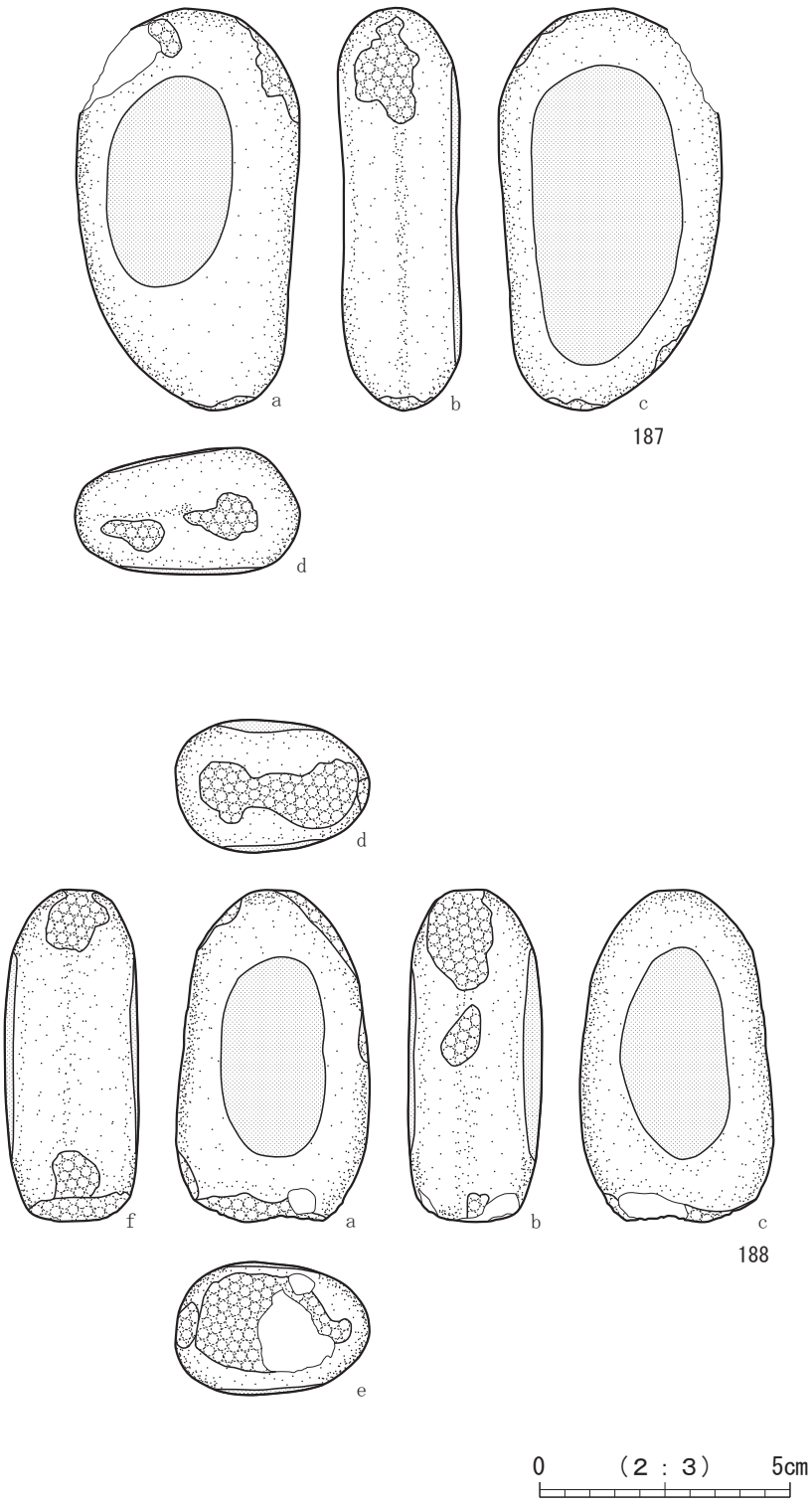
図版番号	登録番号	弥生調査区	層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真番号
181	Kc-168	C区	Ⅳ層	S175	礫石器	磨石	ⅠB	9.7×6.8×2.5	125.47	凝灰岩	完形品、楕円礫、磨1面(平)	136
182	Kc-159	C区	Ⅳ層	S135	礫石器	磨＋凹	ⅣB	14.5×7.5×4.5	394.53	凝灰岩	完形品、楕円礫、磨1面(平)、凹1面(単)深さ(微)	136
183	Kc-149	B区	Ⅳ層	S72	礫石器	磨＋凹	ⅣB	9.7×8.0×3.3	178.45	凝灰岩	完形品、楕円礫、磨1面(平)、凹2面(単＋単)深さ(浅)	136

第342図　Ⅳ層出土遺物(20)



図版番号	登録番号	弥生調査区	層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真番号
184	Kc-177	E区	Ⅳ層	-	礫石器	磨＋凹	ⅣB	9.8×(6.8)×2.5	133.03	凝灰岩	欠損品、楕円礫、磨1面(平)、凹2面(単＋単)深さ(浅)	136
185	Kc-170	D区	Ⅳ層	S12	礫石器	磨＋凹	ⅣB	12.6×8.1×4.4	512.25	安山岩	完形品、楕円礫、磨1面(凸)、凹1面(複)深さ(浅)	136
186	Kc-163	C区	Ⅳ層	S137	礫石器	磨＋敲	ⅤB	16.8×9.1×6.2	1285.35	安山岩	完形品、楕円礫、磨1面(凸)、敲(端1箇所)程度(強)	136

第343図　Ⅳ層出土遺物(21)

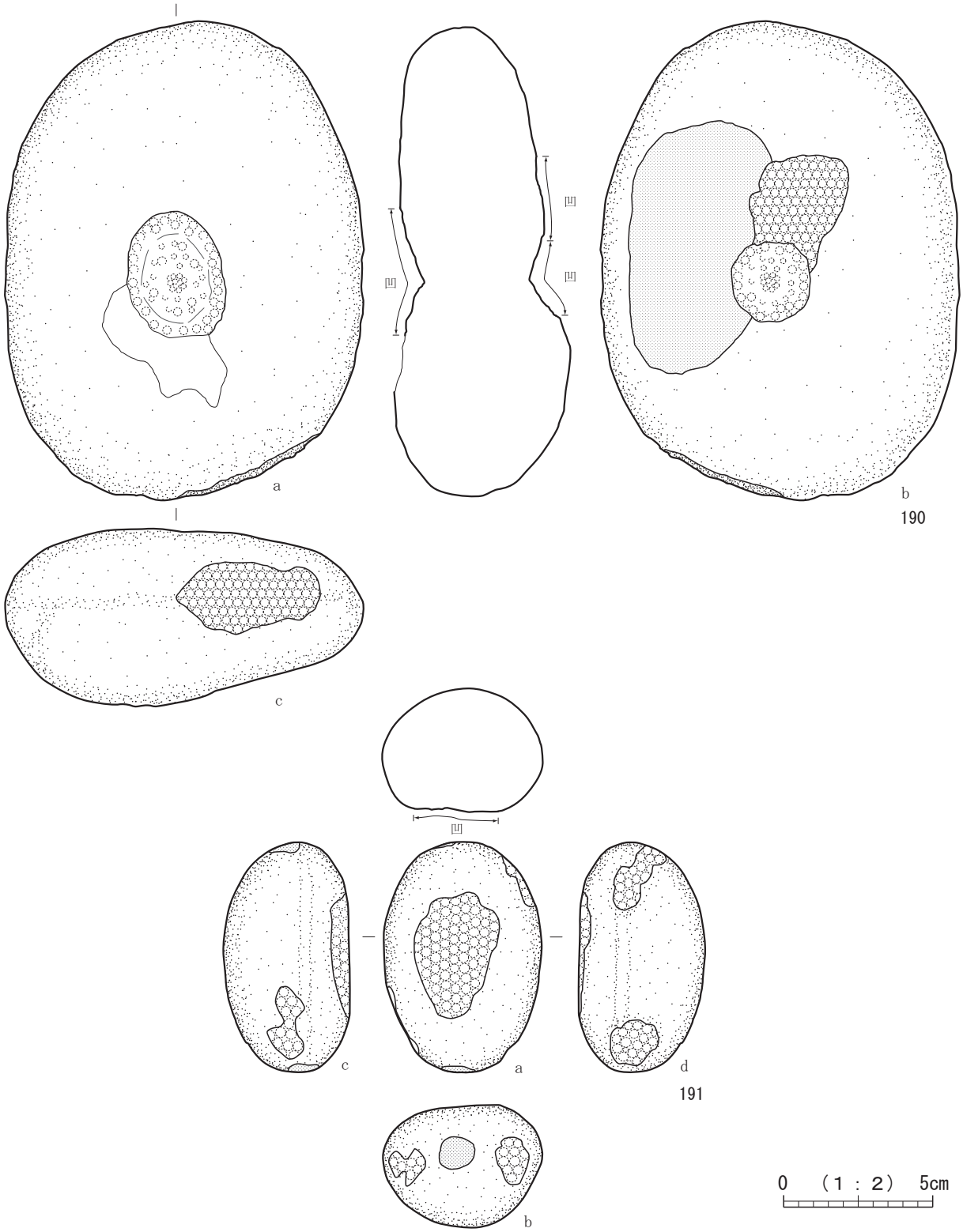


図版番号	登録番号	弥生調査区	層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真番号
187	Kc-165	C区	Ⅳ層	S5	礫石器	磨＋敲	VB	10.7×5.9×3.4	300.23	安山岩	完形品、楕円礫、磨2面(平)、敲(端2箇所)程度(強)	137
188	Kc-171	D区	Ⅳ層	S16	礫石器	磨＋敲	VB	8.8×5.1×3.5	270.66	安山岩	完形品、楕円礫、磨2面(平)、敲(端2箇所＋側1箇所)程度(強)	137

第344図　Ⅳ層出土遺物(22)

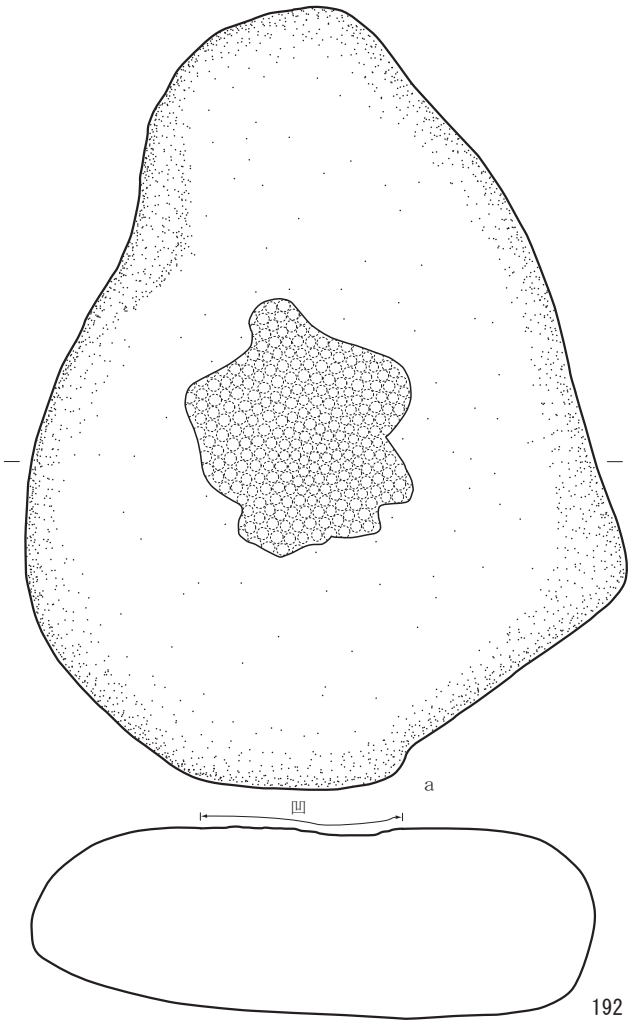
図版番号	登録番号	弥生調査区	層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真番号
189	Kc-154	C区	Ⅳ層	S109	礫石器	凹＋敲	ⅥB	(16.6)×12.8×5.3	804.04	凝灰岩	欠損品、楕円礫、凹2面(複＋複)深さ(深)、敲(側1箇所)程度(弱)	137

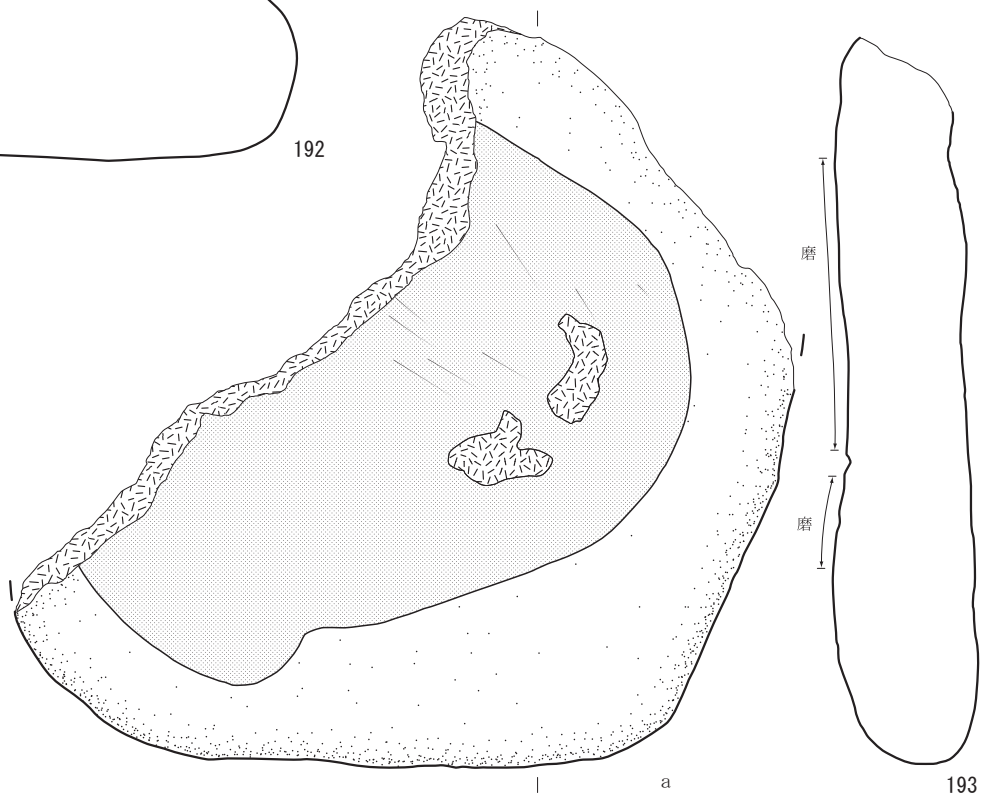
第345図　Ⅳ層出土遺物(23)



図版番号	登録番号	弥生調査区	層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真番号
190	Kc-174	E区	Ⅳ層	S52	礫石器	磨＋凹＋敲	ⅦB	16.8×12.9×5.2	863.24	凝灰岩	完形品、楕円礫、磨1面(平)、凹2面(単＋単)深さ(深)、敲(端1箇所)程度(弱)	137
191	Kc-162	C区	Ⅳ層	S189	礫石器	磨＋凹＋敲	ⅦB	7.7×5.3×4.1	243.47	安山岩	完形品、楕円礫、磨2面(凸)、凹1面(単)深さ(微)、敲(側3箇所)程度(弱)	138

第346図　Ⅳ層出土遺物(24)

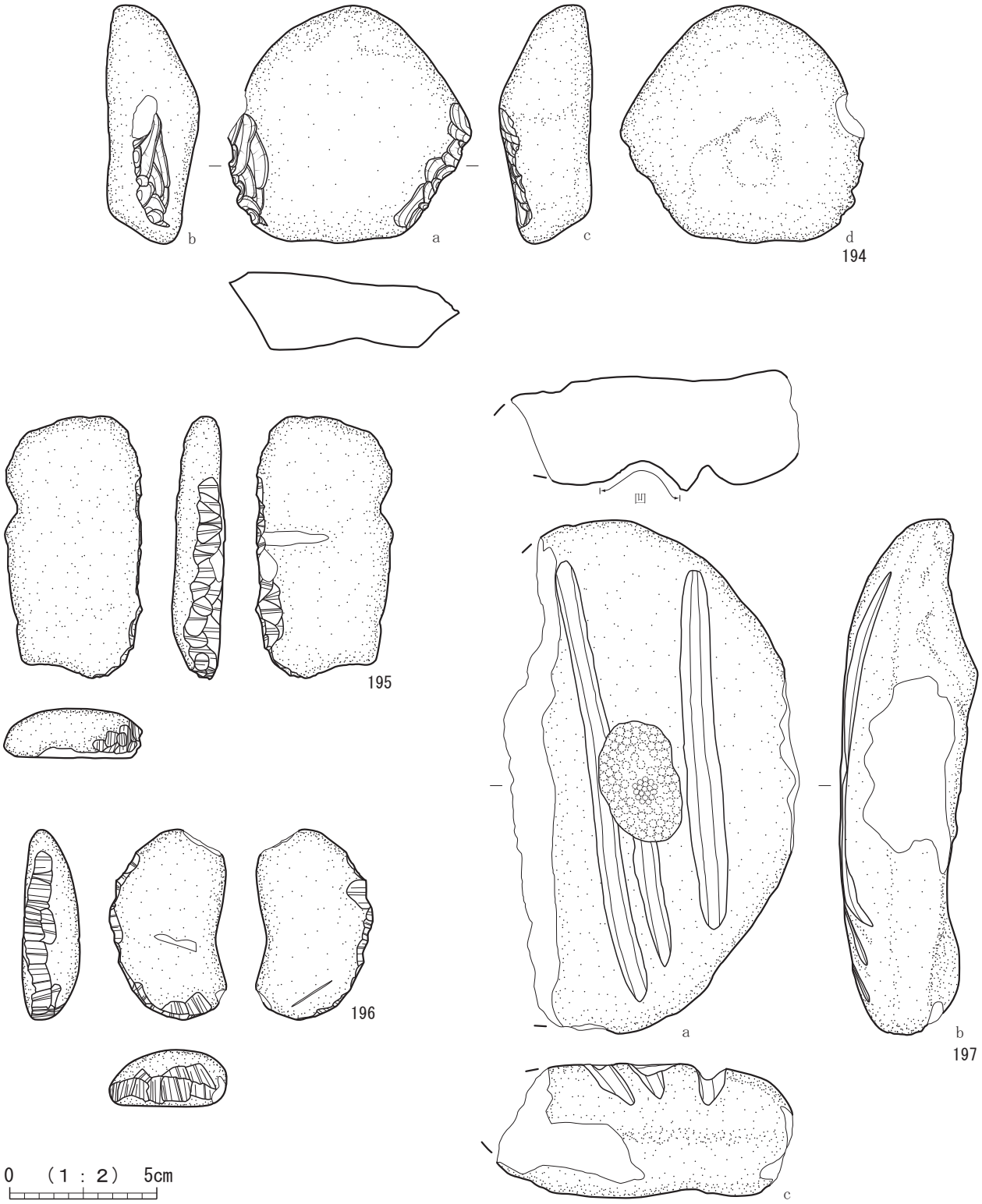




0 （1：2） 5cm

図版番号	登録番号	弥生調査区	層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真番号
192	Kc-155	C区	Ⅳ層	S117	礫石器	台石	-	20.7×16.0×5.0	1580.34	凝灰岩	完形品、楕円礫、凹1面(単)深さ(微)	138
193	Kc-150	B区	Ⅳ層	S13	礫石器	台石	-	(19.5)×(20.6)×3.7	1640.23	安山岩	欠損品、楕円礫、磨1面(平)、全面被熱	138

第347図　Ⅳ層出土遺物(25)



図版番号	登録番号	弥生調査区	層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真番号
194	Kc-169	C区	Ⅳ層	S14	礫石器	礫器	-	7.9×8.3×3.2	202.92	珪化凝灰岩	完形品、楕円礫、片刃	138
195	Kd-037	B区	Ⅳ層	-	石製品	縁辺に粗い条痕のある礫片	-	8.9×4.6×1.5	43.72	凝灰岩	完形品、自然礫、板状、1縁辺に連続する条痕あり	138
196	Kd-038	C区	Ⅳ層	-	石製品	縁辺に粗い条痕のある礫片	-	6.5×4.0×1.9	30.83	凝灰岩	完形品、自然礫、板状、1縁辺に連続する条痕あり	138
197	Kd-039	C区	Ⅳ層	S159	石製品	筋砥石	-	17.4×(10.0)×4.5	526.14	凝灰岩	欠損品、自然礫、板状、無孔、溝状痕あり、自然面あり、凹1面(単)深さ(深)	138

第348図　Ⅳ層出土遺物(26)

(7)　その他の出土遺物（第349 ～ 372図）

弥生時代に帰属すると考えられる遺物は、前項に掲載した弥生調査区Ⅳ層から出土した遺物のほか、Ⅳ層の遺構堆積土やそれらの検出作業中においても相当数出土している。本項では、それらの遺物について記載する。

ａ．土器・土製品（第349 ～ 361図）

1）弥生土器

土器は、壺21点、高坏11点、鉢26点、深鉢12点、甕61点、蓋24点、ミニチュア土器1点を掲載した（各器種に推定されるものを含む）。いずれも弥生時代中期の桝形囲式に比定される。したがって、器形や装飾文様の特徴については前項とほぼ共通するが、本項においても器種毎の概要を記載する。

壺（第349 ～ 350図）

壺（壺と推定されるものを含む）は全て破片資料であるが、残存する器形の特徴から、小型（第349図-6･9）・中型（第349図-2･10･11、第350図-14･15･19）・大型（第349図-1･3･4･7･8、第350図-16･18･20･21）に区別される。器形はいずれも最大径を体部上半にもち、口縁部形態は平縁を基調とするが、第349図-1・8のように山形突起を有するものも認められ、後者においては山形突起の頂部に刻みを伴う。装飾文様は口縁部と体部上半に施文され、口縁部には内面にも施文されるものもある（第349図-1・2）。口縁部には内外面共に横位直線文が施文され、体部には横位直線文と連続山形文の組み合わせが施文されるもの（同図-6）のほか、横位直線文に同心円文、渦文、錨形文と思われる意匠のいずれかが組み合わされて施文されるものが ある（同図-1・2・4・5）。それらの多くは、文様内に縄文や植物茎回転文が充填されるほか、文様帯が赤彩されるものもある（同図-1）。装飾文様が施文されない口縁部や頸部はヨコナデ調整、ナデ調整、ミガキ調整のいずれかが施されるだけのものが多く、大型品と推定されるものの中には、頸部上端に断面三角形の隆帯が横位に貼り付けされるものがある（同図-7・8）。装飾文様が施文されない粗製のものには、地文にＬＲ縄文の回転施文もしくは植物茎回転文が多用されるほか、地文が施文されずにミガキ調整されるだけのものがある（第350図-19）。

高坏（第351図）

高坏は全て装飾文様が施される精製の破片資料である。器形は、坏部が直線的ないし内湾気味に外傾するものを基調とし、口縁部形態は平縁が大部分であるが、山形突起を有するものもある（第351図-1 ～ 3）。脚部は中空の円錐台形を呈し、裾部から直線的に立ち上がるものと裾部が僅かに外反するものがある。装飾文様は、坏部・脚部共に横位直線文と連弧文の組み合わせを主体とし、連孤文は横位に半単位ずらして複数段施文されるものが少なくない（同図-25・27・29・30）。他には坏部に方形文が施文されるものがある（同図-28）。また、口縁部内面にも横位直線文が施文されるもの（同図-22 ～ 24・26 ～ 28）や、これに縦位の短い沈線が加わるもの（同図-24・28）がある。脚部には方形文が施文されるもの（同図-32）や、横位直線文が多条に施文されるもの（同図-31）がある。装飾文様内は縄文や植物茎回転文により充填されるものが多く、充填後に文様内が赤彩されるもの（赤彩された可能性のあるものを含む）が認められる（同図-30・31）。

鉢（第352・353図）

鉢（鉢と推定される破片資料を含む）は、器高5cm程度の小型品（第352図-33･35･36、第353図-48）と、10cm程度ないしそれ以上と推定される中型品（第352図-34･37 ～ 46、第353図-47･49 ～ 58）がある。器形は、小型品が内湾する体部から先細る口縁部へと立ち上がるカップ状を呈し、第352図-33の口径と底径の比は、約1.5:1となる。中型品と推定されるものは、口縁部から体部が直線的に外傾するものと内湾するものがあり、他には口縁部と体部の境界が括れるもの（第352図-38・39、第353図-50）や、口縁部が外反するもの（同図-49）がある。口縁部形態は平縁を基調とするが、山形突起を有するものもある（第352図-46）。装飾文様は口縁部から体部上半に施文され、横位直線文と連弧文もしくは連続山形文の組み合わせを主体とし、文様内は縄文や植物茎回転文で充填されるものが多い。このほか、横位直線文が

数条施文されるもの（第352図-46、第353図-47 ～ 53）や、口縁部内面にも横位直線文が施文されるもの（第352図-33・41 ～ 43・46、第353図-47・50）もある。連弧文および連続山形文には、横位に半単位ずらして複数段施文されるもの（第352図-34・38・39）や、隣り合う単位の境界に縦位の短い沈線が施文されるものがある（同図-34）。また、縦位の短い沈線は、山形突起内面頂部にも施文される（第352図-46）。この他、焼成前に口縁部が内面側から穿孔されるものがある（第352図-36・39）。地文には、ＬＲ縄文の回転施文や植物茎回転文が施文される。

深鉢（第354図）

深鉢（深鉢と推定されるものを含む）として掲載したものは、口縁部あるいは口縁部から体部上端の破片資料のみである。残存部の特徴から、いずれも器高20cm前後もしくはそれ未満の中型品と推定されるが、第354図-69・70は器高35cm程の大型品の可能性がある。器形は頸部に括れをもち、内湾する口縁部を基調とし、口縁部形態はいずれも平縁である。装飾文様は口縁部と体部上半に施文され、括れを持つ口縁部と体部の境界はミガキ調整により無文となる。口縁部の装飾文様は横位直線文が多条に施文されるものが多く、中には文様間に縄文が充填されるものがある（第354図-69）。また、同図-59・60のように、横位直線文と方形文の組み合わせが施文されるものも認められる。前者については隣り合う単位の間に縦位の短い沈線が施文される。体部の装飾文様については不明な点が多く、横位直線文や方形文の施文が部分的に確認されるのみである（第354図-61・62）。装飾文様が施文されない粗製のものは、1点のみである（同図-70）。地文としてＬＲ縄文が横位回転施文される。

甕（第355 ～ 359図）

甕（甕と推定される底部破片を含む）は、破片資料が多いものの、大部分が器高20cm前後の中型品と推定される。第355図-71・74、第357図-102、第359図-131は器高35cm程の大型品に属する。また、中型・大型を問わず、外面に二次加熱痕が認められるものが多い。器形は、最大径を口縁部にもつものと体部上端にもつものに大別される。体部上半は丸みを帯び、口縁部との境界に括れをもつ。口縁部は短く外反するものを基調とし、口唇部は上方ないし斜め上方を向くものと、ほぼ真横を向くものがある。口縁部は明瞭なヨコナデ調整、体部は地文として縄文原体の回転施文や植物茎回転文が施文され、地文は口唇部に施文されるものも多い。また、体部には縄文原体の開端を結縛した痕跡や、地文を施文する前段階のハケメ調整が観察されるものが認められる。殆どの体部上端には地文を施文した後に列点刺突文が施され、刺突方向には左右の別が認められるほか、押し引きが施されるものも多い。また、体部上端に沈線が施文されるもの（第359図-128）や、無文のもの（同図-124 ～ 127・129）がある。内面は丁寧にミガキ調整されるものが多い。

蓋（第360・361図）

蓋（蓋と推定される破片資料を含む）は、器高が10cm未満の小型品に推定されるもの（第360図-132・142）と、口径20cm前後、器高10cm前後もしくはそれ以上の中型品に推定されるもの（第360図-133・140）がある。また、口縁部における装飾文様の有無についても区別される。このほか、殆どの口縁部破片には、使用に伴うものと考えられる黒色化が認められる。器形は円錐台形を基調とする。体部から口縁部は外反するもの、内湾するもの、直線的なものに三大別され、口縁部形態はすべて平縁である。天井部には、つまみ部が付くものと付かないものがある。つまみ部の器形は、天井部から直線的に外傾する高さ数cmの低いリング状を呈する。つまみ部がないものは、天端部に僅かな高まりをもつもの（第361図-148・149）や、側縁が外側に向かって僅かに張り出すもの（同図-150 ～ 154）がある。装飾文様は、外面は体部下半から口縁部に限定的に施文される。文様は横位直線文と連弧文もしくは連続山形文（連続山形文の可能性があるものを含む）の組み合わせを主体とし、連弧文や連続山形文には横位に半単位ずらして2段にわたり施文されるものがある（第360図-132・134）。この他に、口縁部に横位直線文が複数条施文されるもの（同図-142・143）や、口縁部内面にも横位直線文が施文されるものがある（同図-132・133・137・140・142・143）。外面の文様内には縄文や植物茎回転文が充填されるものの他に、雑な磨消縄文手法により文様内に地文を残すものも認められる（第360図-133・137）。装飾文様が施文されない体部上半やつまみ部には、縄文原体の回転施文や植物茎回転文の地文が施文されるものが大部分である

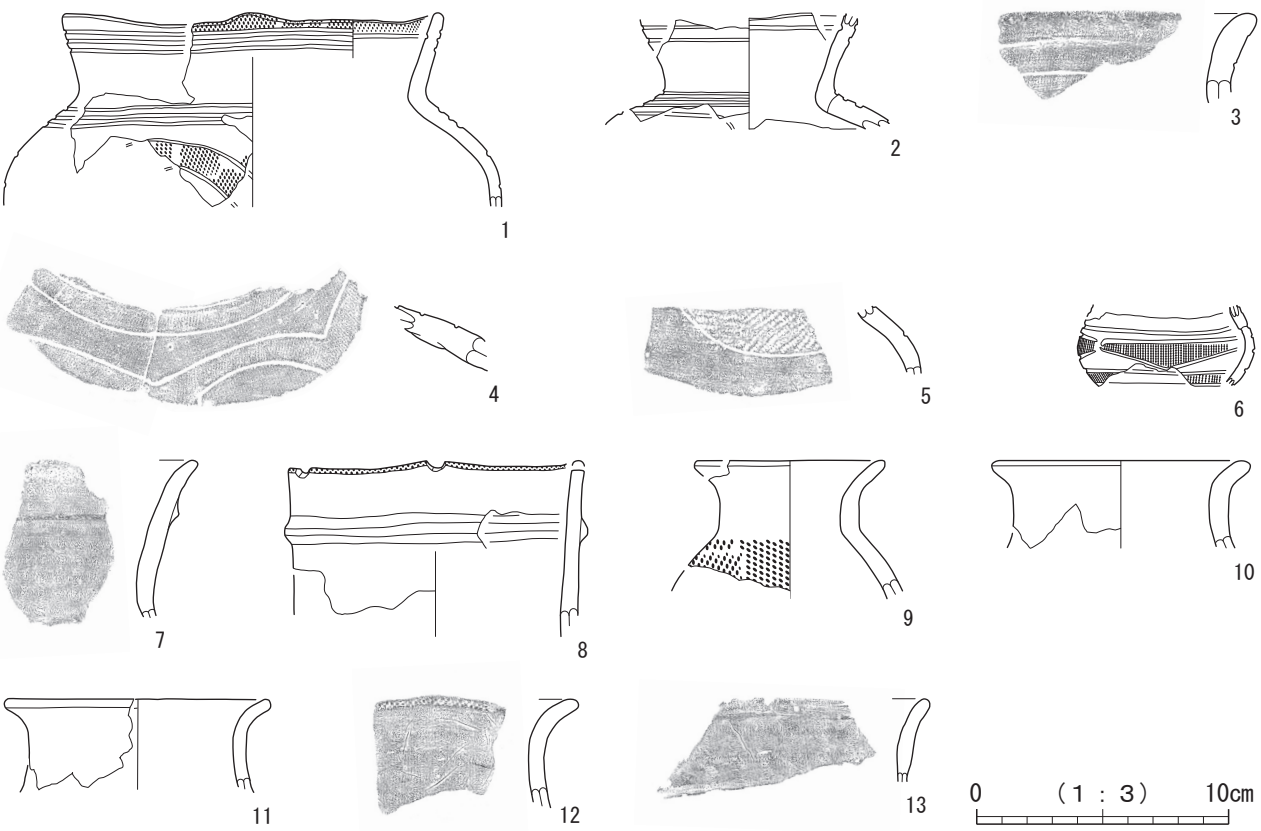
が、ナデ調整やミガキ調整のみが施される無文のものも多い（第361図-145・150・151）。

ミニチュア土器（第361図）

第361図-156は外面全体がミガキ調整された後、体部中程に横位の沈線が施文される。内面はナデ調整される。

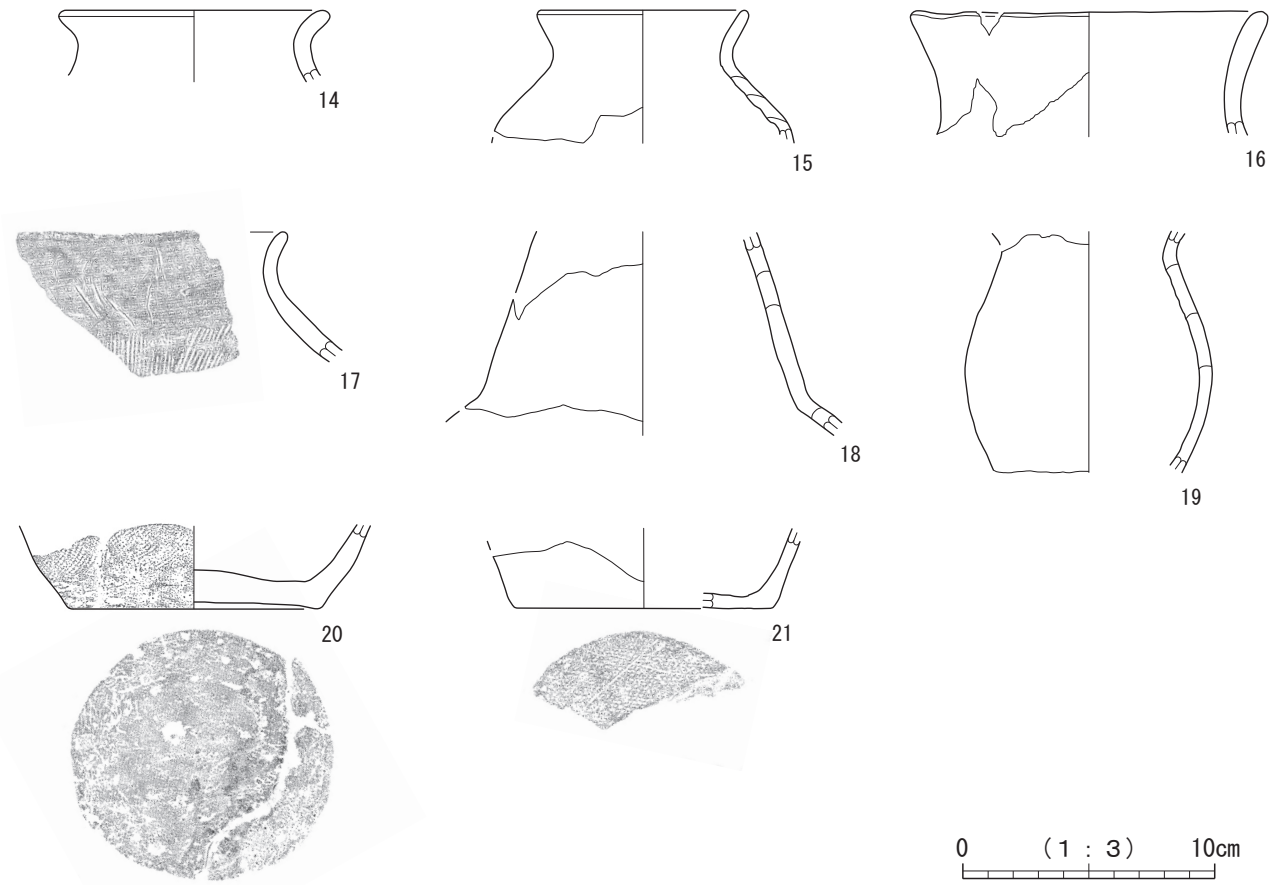
2）土製品（第361図）

円盤状土製品の可能性がある弥生土器破片2点を掲載した。第361図-157は六角形、同図-158は隅丸長方形を呈し、外面にはＬＲ縄文が回転施文される。



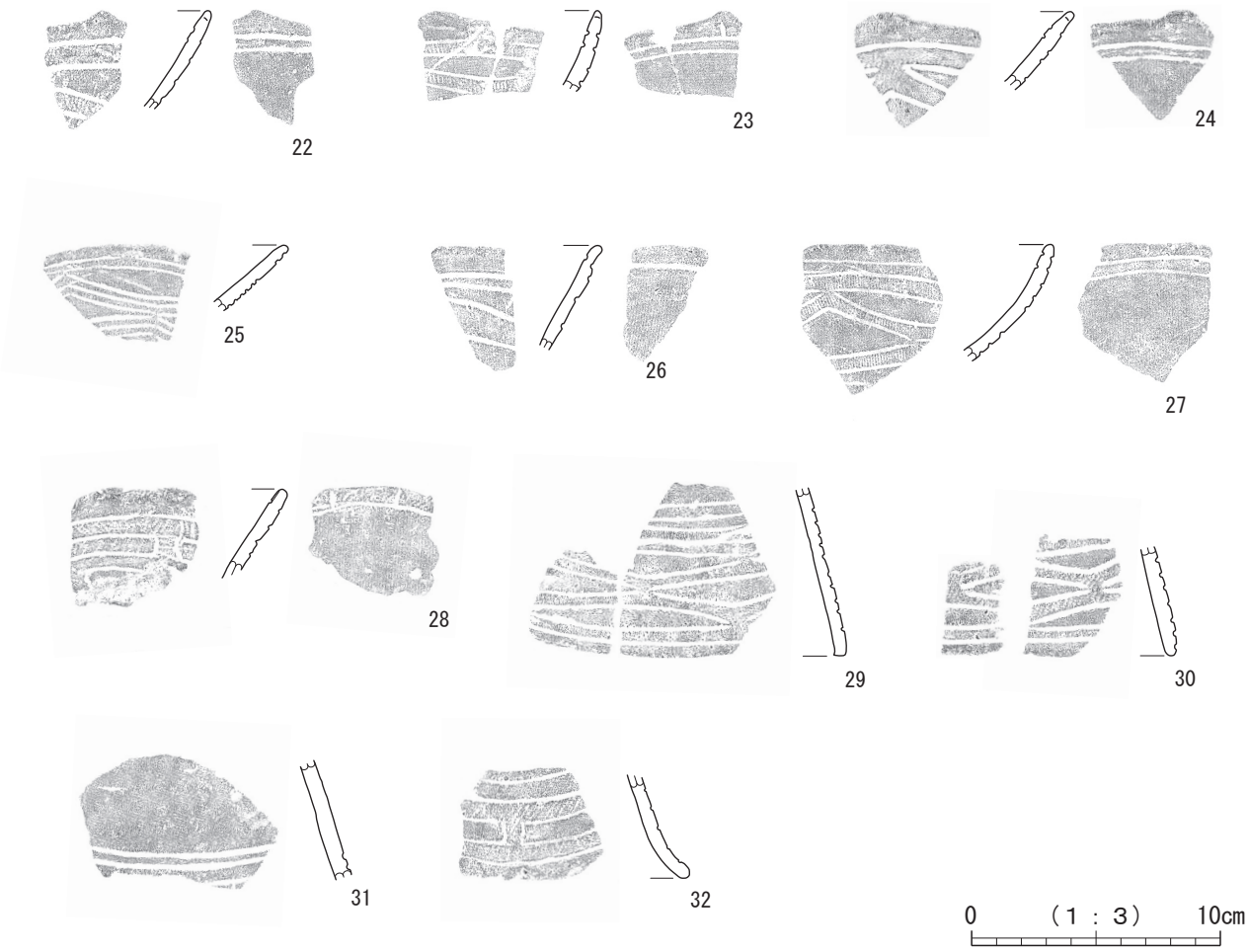
図版番号	登録番号	出土遺構		種別	器種	部位	外面調整・文様	内面調整・文様	備　考	写真図版
1	B-429	Pit248	堆積土	弥生土器	壺	口縁～体上半	口唇:LR縄文横位回転、口～体上半:沈線→LR縄文→沈線→ミガキ（口～頸:横位）→文様帯赤彩（横位直線文+同心円文?）	口:沈線→LR縄文横位回転→沈線→ミガキ（横位直線文）、体:ミガキ（粗）	口径（15.0）cm、口縁部山形突起	139
2	B-419	SI127	堆積土	弥生土器	壺	口縁～体上半	沈線→ミガキ（横位直線文+渦文?）	口:沈線→ミガキ（横位直線文）、体:ナデ	口縁部上端欠失	139
3	B-413	-	-	弥生土器	壺	口縁～頸	ナデ→沈線（横位直線文）	ナデ		139
4	B-439	SI127	堆積土	弥生土器	壺	体上半	沈線→LR縄文→沈線→ミガキ（横位直線文+錨形文?）	ミガキ（粗）	体部内面輪積み痕	139
5	B-438	SI99	床面	弥生土器	壺	体上半	沈線→LR縄文→ミガキ（渦文?）	ヘラナデ		139
6	B-449	SI99	床面	弥生土器	壺	体	沈線→植物茎回転文横位回転→ミガキ（横位直線文+連続山形文）	ナデ	外面赤色顔料付着、内面輪積み痕	139
7	B-390	SI131	堆積土	弥生土器	壺	口縁～頸	頸上端:横位隆帯貼付→口～頸上端:ヨコナデ→ミガキ?、	ミガキ（粗）	隆帯断面形三角	139
8	B-388	SI119	掘り方	弥生土器	壺	口縁～頸	口唇:山形突起頂部に刻み、LR縄文横位回転 頸上端:横位隆帯貼付→口～頸上端:ヨコナデ→横位ミガキ、	口:ナデ→口～頸:ミガキ（粗）	口径（11.6）cm、口縁部山形突起5単位、隆帯断面形三角	139
9	B-397	-	-	弥生土器	壺	口縁～体上半	体上半:LR縄文横位・斜位回転→口～頸:ミガキ（密）	口～頸:ミガキ、体:ナデ	口径（7.2）cm	139
10	B-403	SI109	堆積土	弥生土器	壺	口縁～頸	ナデ→ミガキ	ミガキ（粗）	口径（9.9）cm	139
11	B-404	-	-	弥生土器	壺	口縁～頸	口唇:LR縄文横位回転、口～頸:ミガキ	ミガキ	口径（10.4）cm	139
12	B-405	-	-	弥生土器	壺	口縁～頸	口唇:LR縄文横位回転、口～頸:ミガキ	ミガキ（密）		139
13	B-412	SI127	堆積土	弥生土器	壺	口縁～頸	横位ミガキ	横位ミガキ		139

第349図　その他の出土遺物（1）



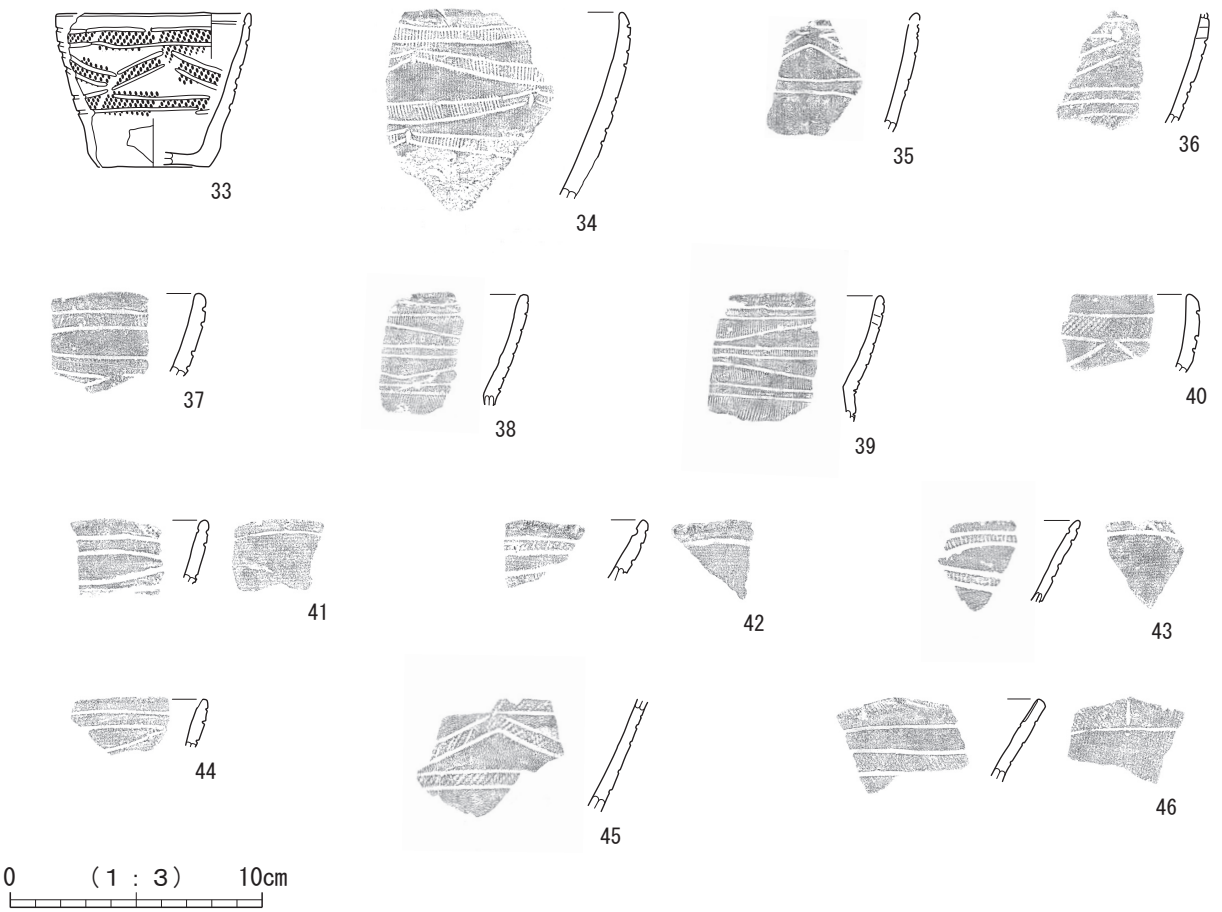
図版番号	登録番号	出土遺構		種別	器種	部位	外面調整・文様	内面調整・文様	備　考	写真図版
14	B-402	-	-	弥生土器	壺	口縁～頸	ヨコナデ	ミガキ	口径(10.3) cm、内外面劣化	139
15	B-394	-	-	弥生土器	壺	口縁～体上半	ミガキ	口:ミガキ	口径(8.0) cm、体部内面輪積み痕	139
16	B-409	Pit148	堆積土	弥生土器	壺	口縁～頸	縦位ミガキ	横位ミガキ	口径(13.8) cm	139
17	B-432	-	-	弥生土器	壺	口縁～体上端	体上端:植物茎回転文横位・斜位回転→口:横位ミガキ	横位ミガキ		139
18	B-057	-	-	弥生土器	壺	頸～体上端	頸:縦位ミガキ、体上端:横位ミガキ	ミガキ(粗)		139
19	B-455	-	-	弥生土器	壺	頸～体下半	ミガキ	頸:ミガキ、体:ナデ	体部内面輪積み痕	139
20	B-365	-	-	弥生土器	壺?	体下半～底	体下半:LR縄文横位回転、底:木葉痕→ナデ	ミガキ(粗)	底径(10.0) cm、底部内外面白色付着物有	140
21	B-385	-	-	弥生土器	壺?	体下半～底	体下端:ミガキ(密)、底:織布痕→「×」沈線	ミガキ	底径(10.2) cm	140

第350図　その他の出土遺物(2)



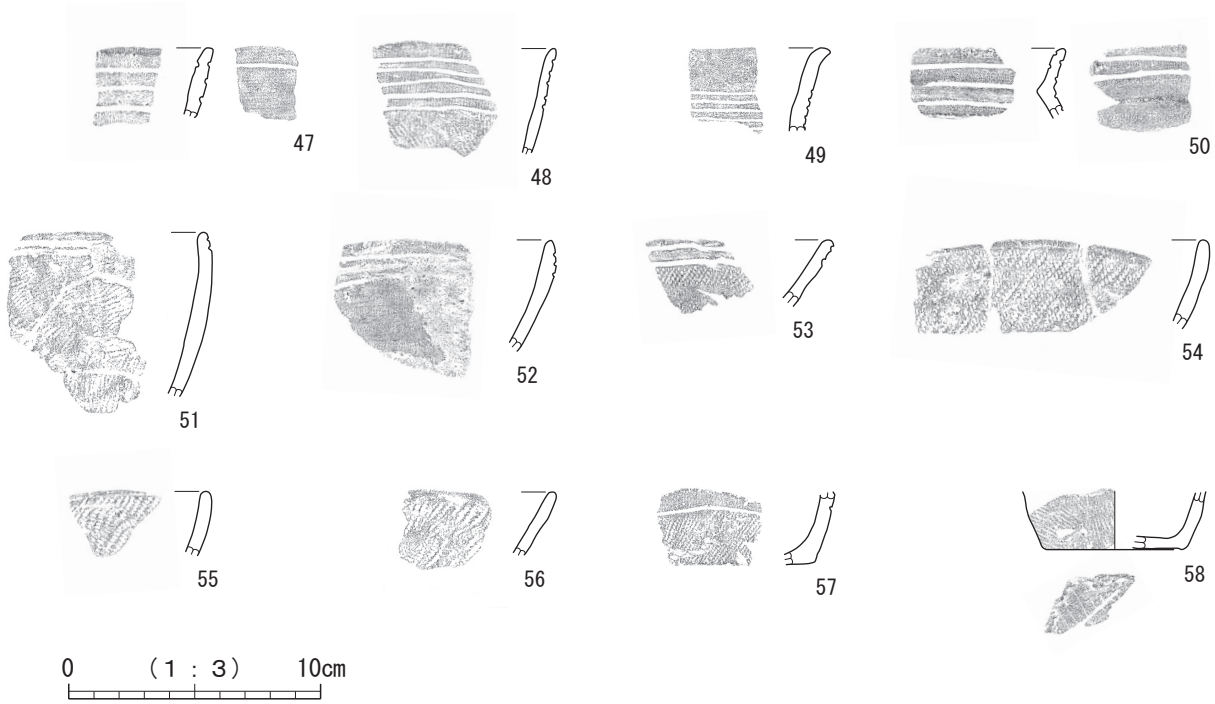
図版番号	登録番号	出土遺構		種別	器種	部位	外面調整・文様	内面調整・文様	備　考	写真図版
22	B-072	SI83	1層	弥生土器	高坏	口縁～体上半	沈線→LR縄文斜位回転→ミガキ（横位直線文+連弧文?）	沈線→ミガキ（横位直線文）	口縁部山形突起、内外面劣化	140
23	B-050	SI84	堆積土	弥生土器	高坏	口縁～体上半	沈線→植物茎回転文→沈線→ミガキ（横位直線文+連弧文）	沈線→縦位短線→ミガキ（密）（横位直線文）	口縁部山形突起	140
24	B-087	SI107	堆積土	弥生土器	高坏	口縁～体上半	沈線→LR縄文→沈線→ミガキ（横位直線文+連弧文?）	沈線→ミガキ（横位直線文）	口縁部山形突起	140
25	B-084	SI99	床面	弥生土器	高坏	口縁～体上半	沈線→植物茎回転文→ミガキ（横位直線文+連弧文）	ミガキ		140
26	B-077	SI126	堆積土	弥生土器	高坏?	口縁～体上半	沈線→LR縄文→ミガキ（横位直線文+連弧文?）	沈線→ミガキ（横位直線文）	外面劣化	140
27	B-066	-	-	弥生土器	高坏	口縁～体上半	沈線→植物茎回転文→沈線→ミガキ（横位直線文+連弧文）	沈線→ミガキ（横位直線文）	内外面劣化	140
28	B-090	SD59	堆積土	弥生土器	高坏	口縁～体上半	口唇:LR縄文横位回転、口～体上半:沈線→LR縄文→沈線→ミガキ（方形文）	沈線→LR縄文横位回転→沈線→縦位短線→ミガキ（横位直線文）	口縁部山形突起	140
29	B-051	Pit1302	堆積土	弥生土器	高坏	脚	沈線→植物茎回転文（横位直線文+連弧文）	ナデ	外面二次加熱痕	140
30	B-075	SI88	堆積土	弥生土器	高坏	脚	沈線→LR縄文→沈線→ミガキ→文様部赤彩	ナデ		140
31	B-053	SI99	掘り方	弥生土器	高坏	脚	沈線→ミガキ→赤彩?（横位直線文）	ミガキ（粗）	沈線内に赤彩残存	140
32	B-056	-	-	弥生土器	高坏	脚	沈線→LR縄文→沈線（横位→縦位）→ミガキ（方形文）	ナデ（粗）	裾端部欠失	140

第351図　その他の出土遺物（3）



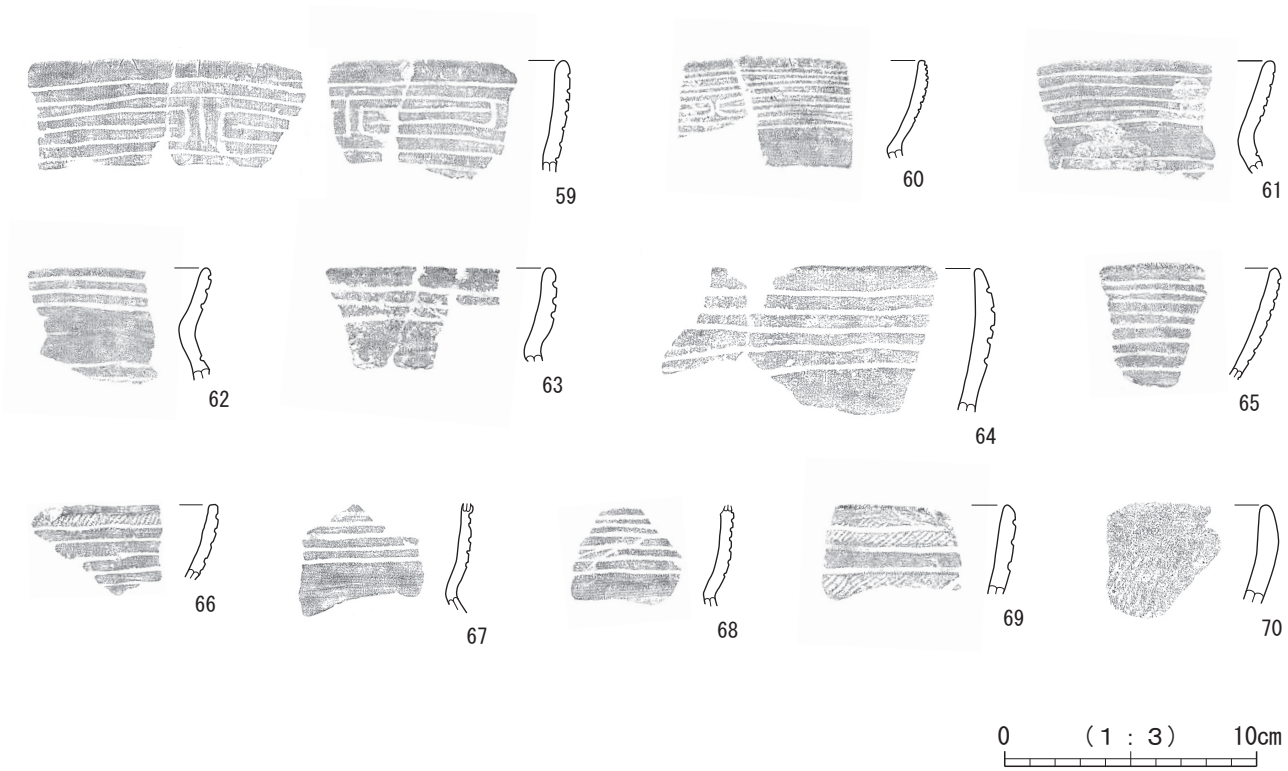
図版番号	登録番号	出土遺構		種別	器種	部位	外面調整・文様	内面調整・文様	備　考	写真図版
33	B-063	-	-	弥生土器	鉢	口縁～底	口～体上半:沈線→LR縄文→沈線→ナデ（横位直線文+連続山形文）、底:ナデ	口:沈線→ミガキ（粗）（横位直線文）	口径（7.8）cm、底径（4.8）cm、器高6.1cm	140
34	B-065	-	-	弥生土器	鉢	口縁～体上半	沈線→植物茎回転文→縦位短線→ミガキ（密）（横位直線文+連弧文）	ミガキ（密）	外面二次加熱による火ハネ	140
35	B-067	SI107	堆積土	弥生土器	鉢	口縁～体上半	沈線→ミガキ（横位直線文+連弧文）	ミガキ（密）	口縁部上端欠失	140
36	B-109	-	-	弥生土器	鉢	口縁～体上半	口～体上半:沈線→LR縄文?→穿孔→ミガキ、体下半:LR縄文横位回転（横位直線文+連弧文?）	不明	口縁部上端欠失、口縁部穿孔（焼成前、内→外）、内外面劣化	140
37	B-070	SI99	床面	弥生土器	鉢	口縁～体上半	沈線→植物茎回転文→ミガキ（横位直線文+連弧文?）	ミガキ		140
38	B-047	SI84	堆積土	弥生土器	鉢?	口縁～体上端	口唇:植物茎回転文横位回転、口～体上端:沈線→植物茎回転文→沈線→ミガキ（横位直線文+連続山形文）	ミガキ	B-062と同一個体、壺・深鉢の可能性も有	140
39	B-062	SI127	堆積土	弥生土器	鉢?	口縁～体上端	口唇:植物茎回転文横位回転、口～体上端:沈線→植物茎回転文→沈線→穿孔→ミガキ（横位直線文+連続山形文）	ミガキ	B-047と同一個体、口縁部穿孔（焼成前、内→外）、壺・深鉢の可能性も有	140
40	B-069	SI109	2層	弥生土器	鉢	口縁～体上半	沈線→LR縄文→ミガキ（横位直線文+連弧文?）	ミガキ		140
41	B-081	SD66	6層	弥生土器	鉢	口縁～体上半	沈線→ミガキ（横位直線文+連弧文）	口:沈線→ミガキ（横位直線文）		140
42	B-049	SI99	床面	弥生土器	鉢	口縁～体上半	沈線、LR縄文→ミガキ（横位直線文+連弧文）	口:沈線→ミガキ（横位直線文）		140
43	B-200	SD66	堆積土	弥生土器	鉢?	口縁～体上半	沈線→植物茎回転文→沈線→ミガキ（横位直線文+連続山形文?）	口:沈線→横位ミガキ（密）（横位直線文）	口縁部内外面黒色化、蓋の可能性も有	140
44	B-083	SI99	周溝	弥生土器	鉢	口縁～体上半	沈線→植物茎回転文→沈線→ミガキ（横位直線文+連弧文?）	ミガキ		140
45	B-110	SD59	堆積土	弥生土器	鉢	体上半	沈線→LR縄文→沈線→ミガキ（横位直線文+連続山形文）	ナデ		140
46	B-086	SI113	掘り方	弥生土器	鉢	口縁～体上半	口唇:植物茎回転文横位回転、口縁～体上半:沈線→植物茎回転文→沈線→ミガキ（横位直線文）	口:植物茎回転文→横位沈線→縦位短線→ミガキ（横位直線文）	口縁部山形突起	140

第352図　その他の出土遺物（4）



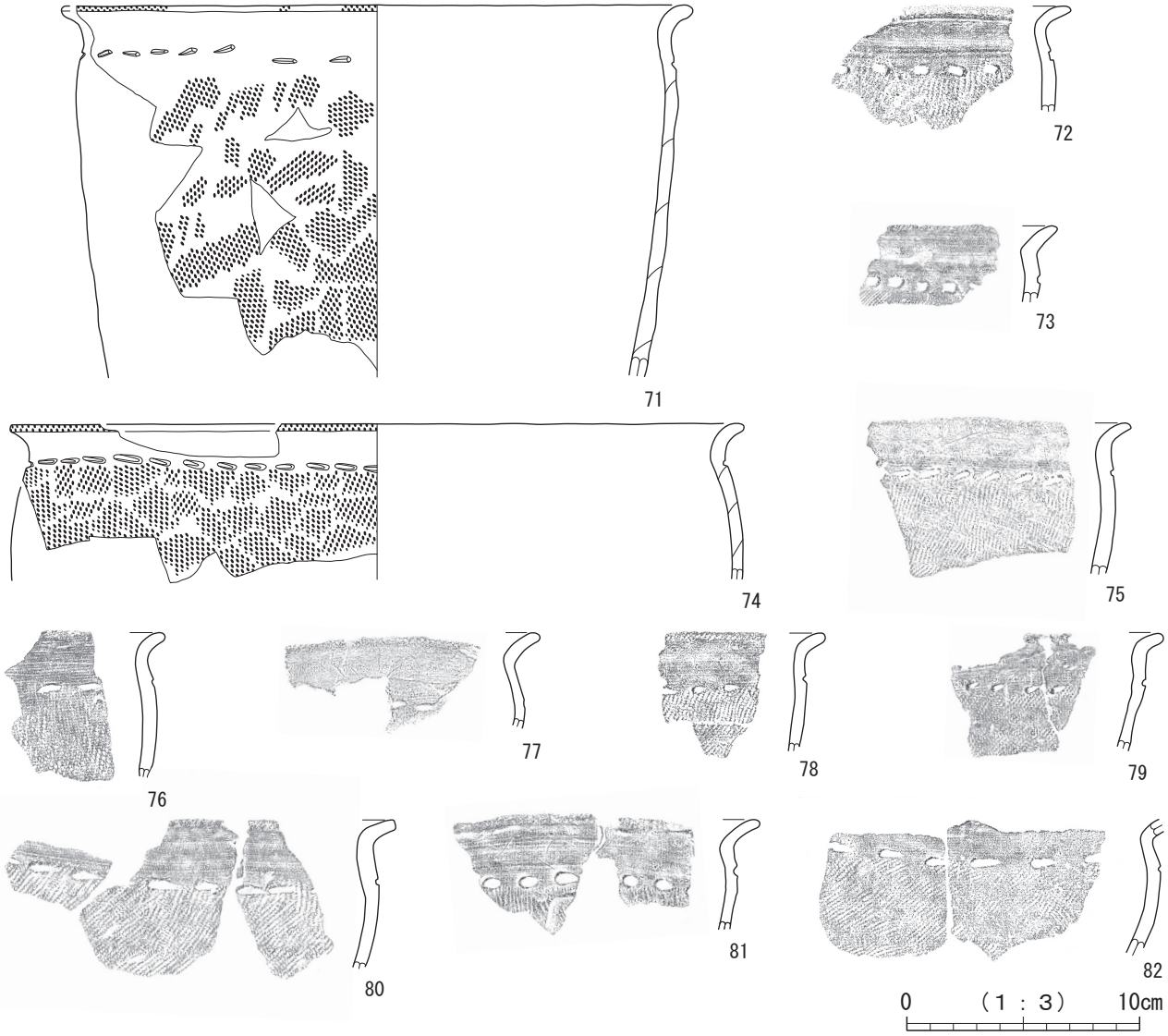
図版番号	登録番号	出土遺構		種別	器種	部位	外面調整･文様	内面調整･文様	備　考	写真図版
47	B-091	SI113	堆積土	弥生土器	鉢	口縁～体上半	口唇:植物茎回転文、 口縁～体上半:沈線?、 植物茎回転文→ミガキ (横位直線文)	口縁:沈線→ミガキ(密) (横位直線文)		140
48	B-088	SI90B	堆積土	弥生土器	鉢	口縁～体上半	口:沈線→植物茎回転文→ミガキ、 体上半:植物茎回転文(斜位)、 (横位直線文)	ミガキ(粗)		140
49	B-059	SD42	堆積土	弥生土器	鉢	口縁～体上半	沈線(横位直線文)	不明	内外面劣化	140
50	B-424	SI115B	堆積土	弥生土器	鉢or壺	口縁～体上半	口:沈線→ミガキ (横位直線文)	口:沈線→ミガキ (横位直線文)		140
51	B-100	-	-	弥生土器	鉢	口縁～体上半	口:沈線(横位直線文)、 体:LR縄文横位・斜位回転	ナデ→ミガキ(粗)		140
52	B-096	-	-	弥生土器	鉢	口縁～体上半	口:沈線→ミガキ(粗) (横位直線文)	ミガキ		140
53	B-190	SI119	掘り方	弥生土器	鉢	口縁～体上半	体上半:LR縄文横位回転 →口:沈線→ミガキ (横位直線文)	横位ミガキ		141
54	B-101	SD42	堆積土	弥生土器	鉢or壺	口縁～体上半	LR縄文横位回転	ナデ→ミガキ		141
55	B-103	-	-	弥生土器	鉢	口縁～体上端	LR縄文横位回転	ミガキ		141
56	B-104	SI115B	堆積土	弥生土器	鉢	口縁～体上端	ナデ→LR縄文横位回転	ミガキ		141
57	B-117	SI115A	堆積土	弥生土器	鉢?	体下半～底	体下半:沈線→LR縄文横位回転 →ミガキ(横位直線文+連弧文?)、 底部:木葉痕→ミガキ(粗)	ミガキ		141
58	B-135	SI99	堆積土	弥生土器	鉢?	体下半～底	体下半:植物茎回転文斜位回転、 底:木葉痕	ミガキ	底径(5.5) cm、 体部外面赤色顔料付着	141

第353図　その他の出土遺物(5)



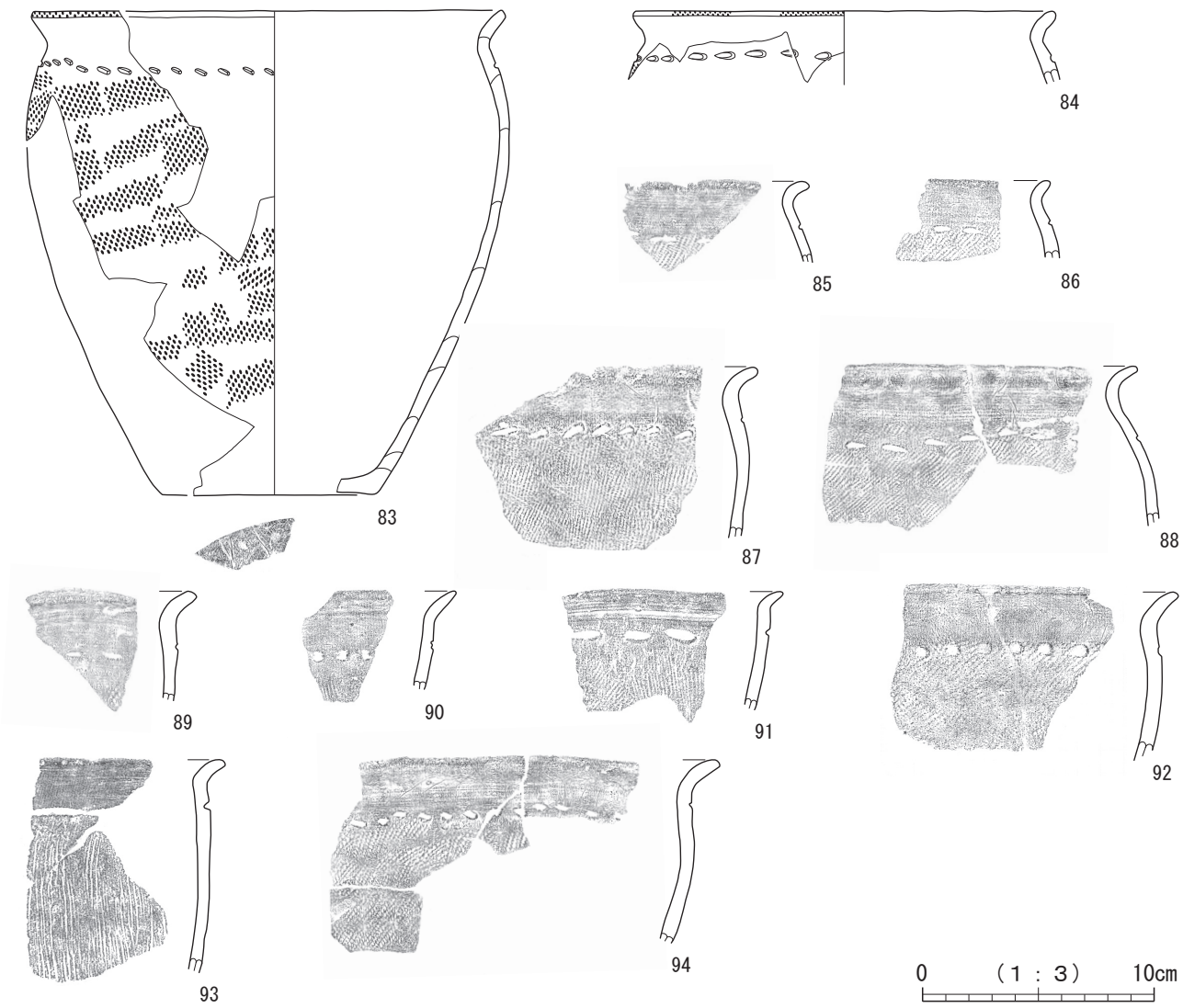
図版番号	登録番号	出土遺構		種別	器種	部位	外面調整・文様	内面調整・文様	備　考	写真図版
59	B-092	SD66	4a層	弥生土器	深鉢	口縁	沈線（横位→縦位）→ミガキ （横位直線文+方形文）	ミガキ		141
60	B-322	-	Ⅱ層	弥生土器	深鉢	口縁～ 体上端	口：沈線（横位→縦位）→ミガキ （横位直線文+方形文）	横位ミガキ（密）		141
61	B-420	SI93	床面	弥生土器	深鉢	口縁～ 体上端	沈線（横位→縦位）→ミガキ、赤彩？ （横位直線文+方形文）	横位ミガキ（密）	口縁部赤彩痕、 外面二次加熱による火ハネ	141
62	B-421	SI89	1層	弥生土器	深鉢	口縁～ 体上端	沈線→横位ミガキ （横位直線文）	不明	内外面二次加熱痕	141
63	B-422	SI103B	堆積土	弥生土器	深鉢	口縁～ 体上端	口：沈線→横位ミガキ （横位直線文）	不明	内外面二次加熱痕	141
64	B-093	SI107	堆積土	弥生土器	深鉢	口縁～ 体上端	口唇：LR縄文横位回転、 口：沈線→ミガキ（粗） （横位直線文）	横位ミガキ（粗）		141
65	B-326	SI99	2層	弥生土器	深鉢	口縁	沈線→ミガキ（横位直線文）	横位ミガキ（粗）		141
66	B-055	SI106	P2	弥生土器	深鉢？	口縁	沈線→LR横位回転→ミガキ （横位直線文）	ミガキ（粗）		141
67	B-340	-	Ⅱ層	弥生土器	深鉢	口縁～ 体上端	沈線→ミガキ （横位直線文）	横位ミガキ	口唇部上端欠失、 B-339と同一個体の可能性有	141
68	B-339	SI90B	22層	弥生土器	深鉢	口縁～ 体上端	沈線→ミガキ （横位直線文）	横位ミガキ	口唇部上端欠失、 B-340と同一個体の可能性有	141
69	B-089	SI92B	堆積土	弥生土器	深鉢	口縁	沈線→LR縄文→ミガキ （横位直線文）	ナデ→横位ミガキ	内面炭化物付着	141
70	B-102	SD42	堆積土	弥生土器	深鉢	口縁	LR縄文横位回転	不明	内外面劣化	141

第354図　その他の出土遺物（6）



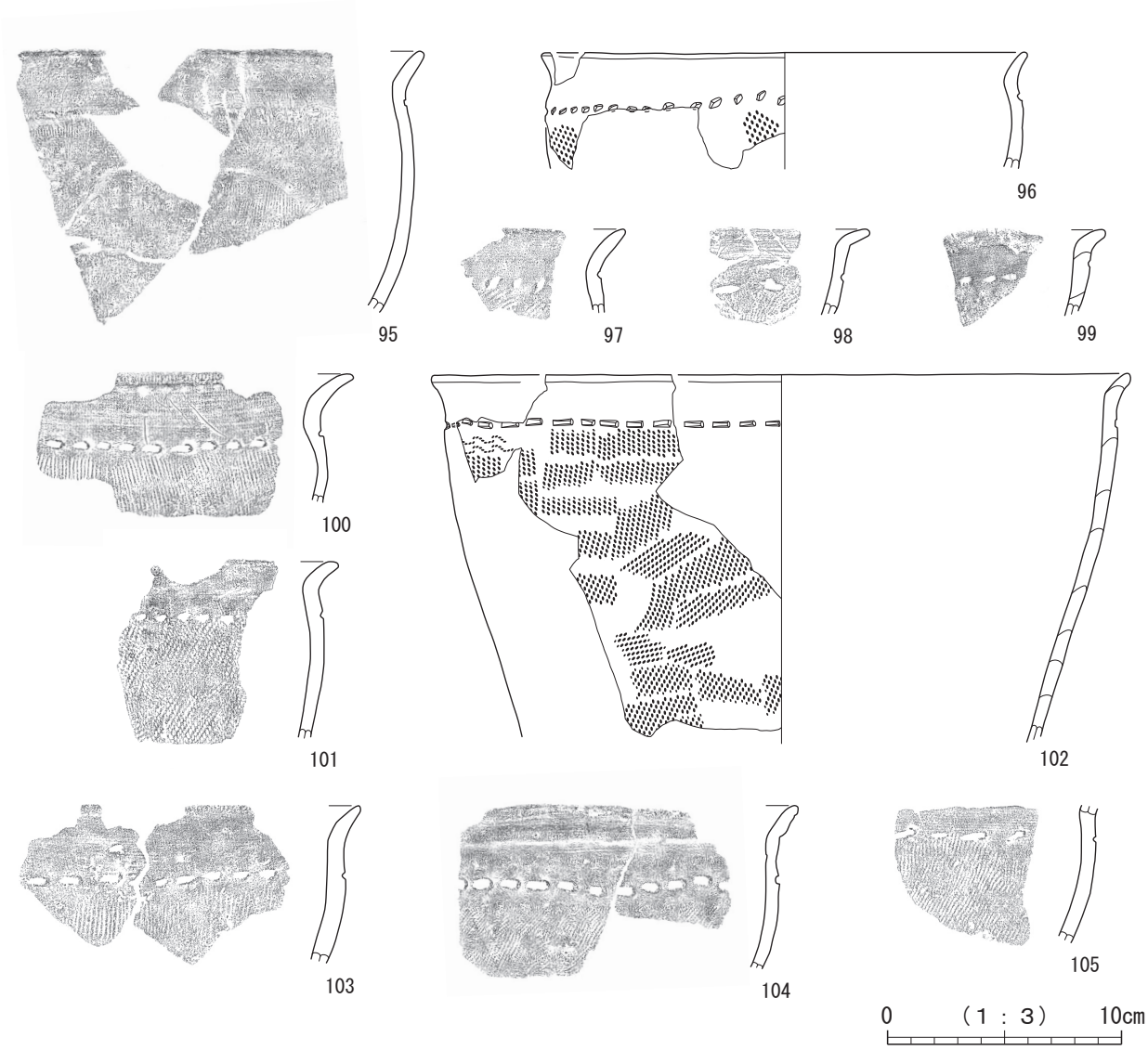
図版番号	登録番号	出土遺構		種別	器種	部位	外面調整･文様	内面調整･文様	備　考	写真図版
71	B-304	-	-	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ→体:縦位ハケメ →口唇・体:LR縄文横位・斜位回転 →体上端:列点刺突(押し引き、左→右)	ミガキ	口径(26.8) cm、 外面炭化物付着	141
72	B-254	SI126	-	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ→体:LR縄文横位・斜位回転 →体上端:列点刺突(押し引き、左→右)	横位ミガキ	外面二次加熱痕	141
73	B-274	-	-	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ →口唇・体:LR縄文横位回転 →体上端:列点刺突(押し引き、左→右)	横位ミガキ		141
74	B-318	-	-	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ →口唇・体:LR縄文横位・斜位回転 →体上端:列点刺突(押し引き、左→右)、 口:ミガキ(粗)	横位ミガキ	口径(31.4) cm、 外面炭化物付着	142
75	B-263	SI88	掘り方	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ→体:ハケメ? →口唇・体:LR縄文横位・斜位回転 →体上端:列点刺突(押し引き、左→右)	横位ミガキ	外面体部及び 内面炭化物付着	142
76	B-213	SI127	堆積土	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ→体:ハケメ →LR縄文斜位回転 →体上端:列点刺突(左→右)	横位ミガキ(密)	外面体部炭化物付着	142
77	B-269	-	-	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ →口唇・体:LR縄文横位回転 →体上端:列点刺突(左→右)	横位ミガキ		142
78	B-278	SI108	堆積土	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ →口唇・体:LR縄文横位・斜位回転 →体上端:列点刺突(右→左)	横位ミガキ		142
79	B-243	SI99	床面	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ→体:LR縄文横位回転 →体上端:列点刺突(右→左)	ミガキ		142
80	B-264	-	-	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ →口唇・体:LR縄文横位・斜位回転 →体上端:列点刺突(右→左)	横位ミガキ		142
81	B-287	SI80	堆積土	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ →口唇・体:植物茎回転文横位・斜位回転 →体上端:列点刺突(右→左)	横位ミガキ	外面二次加熱痕	142
82	B-333	SI80	堆積土	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ→体:LR縄文横位回転 →体上端:列点刺突(右→左)	ミガキ	口唇部上半欠失、内面劣化	142

第355図　その他の出土遺物(7)



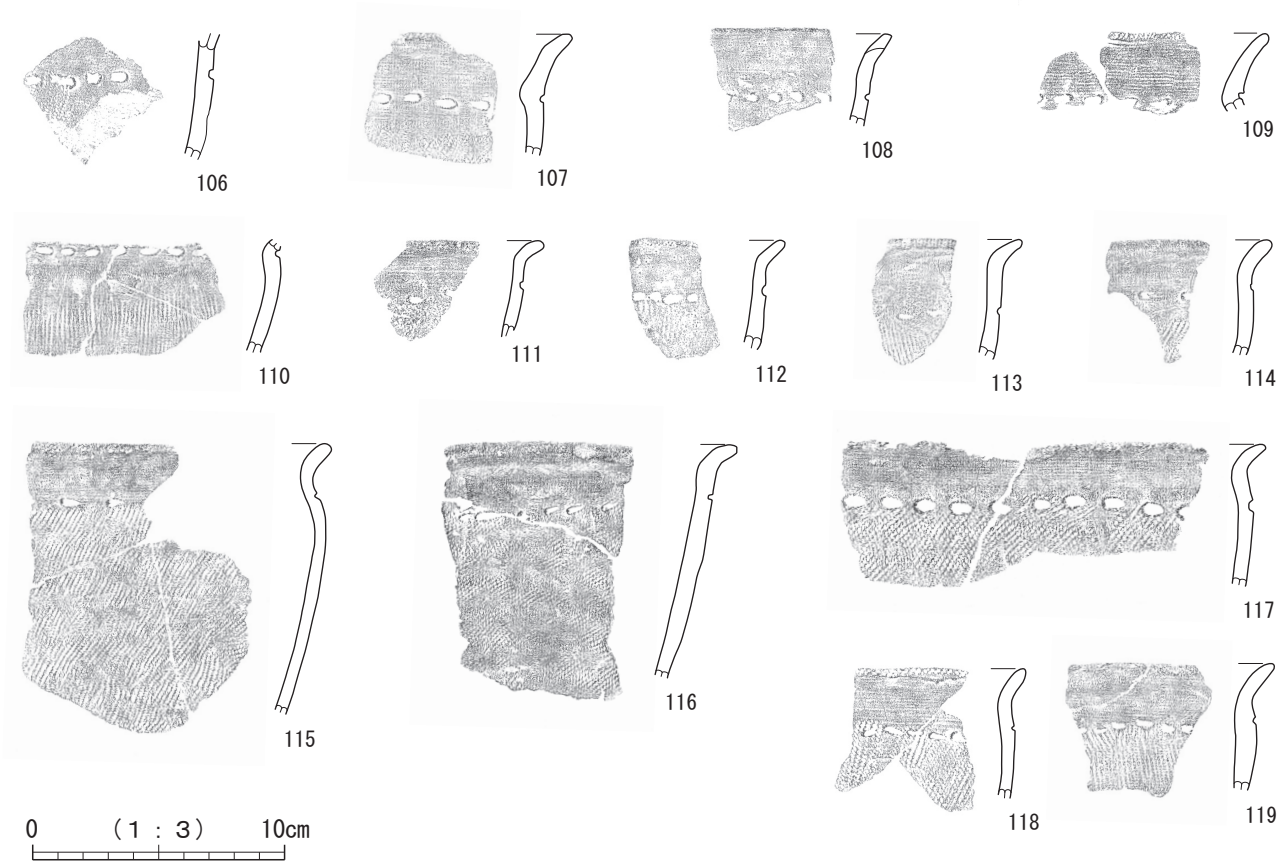
図版番号	登録番号	出土遺構		種別	器種	部位	外面調整・文様	内面調整・文様	備　考	写真図版
83	B-311	SI96	掘り方	弥生土器	甕	口縁～底	口:ヨコナデ →口唇・体:LR縄文横位・斜位回転 →体上端:列点刺突(押し引き、左→右)、 体下端:横位ミガキ、 底:木葉痕	横位ミガキ	口径(20.8) cm、底径(8.8) cm、 器高20.9cm、 底部穿孔(焼成後、外→内)、 口唇部劣化	142
84	B-215	SI82	下層	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ→口唇・体LR縄文横位回転 →体上端:列点刺突(左→右)	ミガキ	口径18.0cm	142
85	B-282	SI88	掘り方	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ→口唇・体:LR縄文横位回転 →体上端:列点刺突(押し引き、左→右)	横位ミガキ(密)		142
86	B-210	SI115A	堆積土	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ→口唇・体:LR縄文横位回転 →体上端:列点刺突(押し引き、左→右)	横位ミガキ(密)		142
87	B-212	SI83	堆積土	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ →口唇・体:LR縄文横位・斜位回転 →体上端:列点刺突(左→右)	横位ミガキ	体部内面炭化物付着	142
88	B-211	SI99	掘り方	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ→体:LR縄文横位回転 →体上端:列点刺突(右→左)	横位ミガキ		142
89	B-238	SI88	堆積土	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ→体:ハケメ →体上端:列点刺突(押し引き、左→右)	横位ミガキ		142
90	B-246	-	-	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ →口唇・体:植物茎回転文横位回転 →体上端:列点刺突(押し引き、左→右)	横位ミガキ		142
91	B-207	SI113	堆積土	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ→体:ハケメ →口唇・体:植物茎回転文横位・斜位回転 →体上端:列点刺突(押し引き、左→右)	横位ミガキ		143
92	B-251	-	-	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ→体:LR縄文横位回転 →体上端:列点刺突(押し引き、左→右)	横位ミガキ		143
93	B-258	SB9-P15	堆積土	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ→体:縦位ハケメ →体上端:列点刺突(押し引き、左→右) →口:ミガキ(粗)	口:ヨコナデ →体:横位ミガキ	B-004と同一個体	143
94	B-233	SI96	掘り方	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ →口唇・体:LR縄文横位回転 →体上端:列点刺突(押し引き、左→右)	横位ミガキ		143

第356図　その他の出土遺物(8)



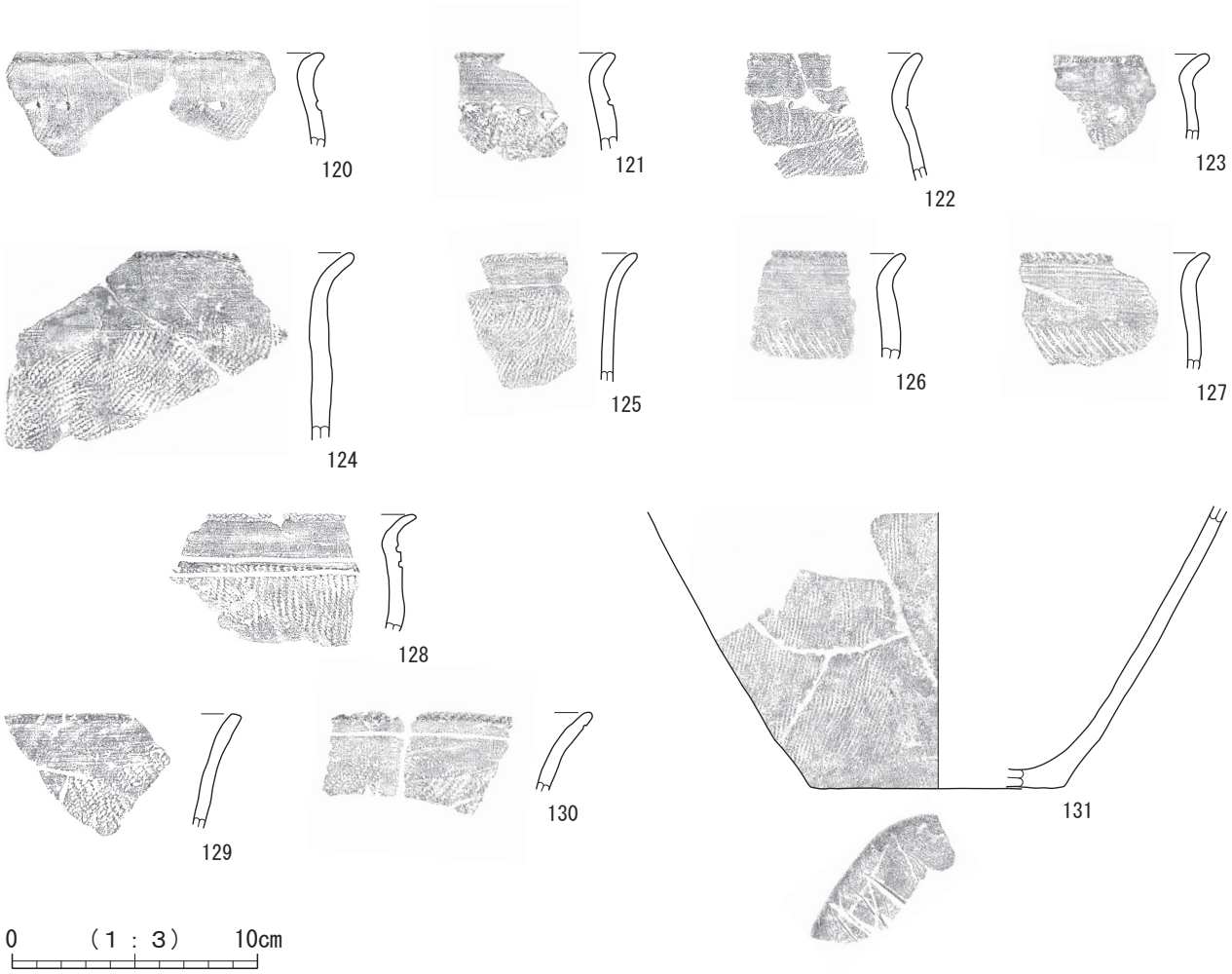
図版番号	登録番号	出土遺構		種別	器種	部位	外面調整・文様	内面調整・文様	備　考	写真図版
95	B-313	-	-	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ →体:植物茎回転文横位回転 →体上端:列点刺突(押し引き、左→右)	ミガキ	外面劣化	143
96	B-232	SI99	掘り方	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ→体:LR縄文横位回転 →体上端:列点刺突(押し引き、右→左)	横位ミガキ	口径(20.4) cm	143
97	B-250	SI126	堆積土	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ→体:LR縄文横位回転 →体上端:列点刺突(押し引き、右→左)	横位ミガキ		143
98	B-239	SK73	堆積土	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ →体:植物茎回転文斜位回転 →体上端:列点刺突(左→右)	横位ミガキ		143
99	B-240	SA5	堆積土	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ →口唇・体:LR縄文横位回転 →体上端:列点刺突(左→右)	横位ミガキ	口縁部内外面炭化物付着、外面劣化	143
100	B-265	SD42	堆積土	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ →口唇:LR縄文横位回転、 体:植物茎回転文横位・斜位回転 →体上端:列点刺突(左→右)	横位ミガキ(密)		143
101	B-234	SI113	堆積土	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ→体:LR縄文横位回転 →体上端:列点刺突(左→右)	横位ミガキ		143
102	B-316	SI127	堆積土	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ→体:LR縄文横位・斜位回転 →体上端:列点刺突(押し引き、左→右)	横位ミガキ(密)	口径(29.8) cm	143
103	B-283	SI132	周溝	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ →口唇・体:植物茎回転文横位回転 →体上端:列点刺突(押し引き、左→右)	横位ミガキ	外面二次加熱痕	143
104	B-221	-	-	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ→体:LR縄文横位回転 →体上端:列点刺突(押し引き、左→右)	ミガキ	内面二次加熱痕	143
105	B-334	SI121	床面	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ→体:LR縄文横位回転 →体上端:列点刺突(押し引き、左→右)	ミガキ	口縁部上半欠失、内外面炭化物付着	143

第357図　その他の出土遺物(9)



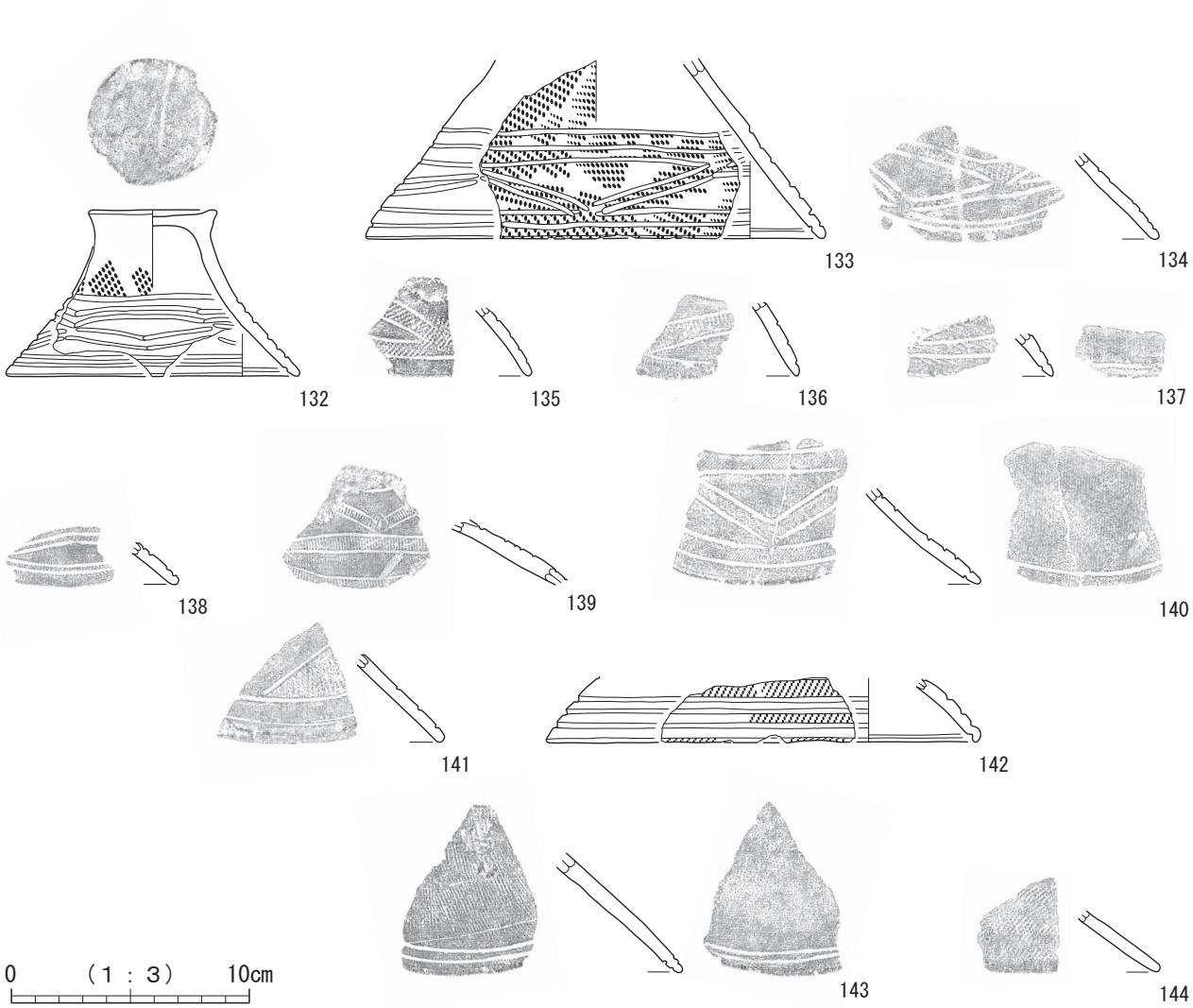
図版番号	登録番号	出土遺構		種別	器種	部位	外面調整・文様	内面調整・文様	備　考	写真図版
106	B-335	SI127	堆積土	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ→体:LR縄文横位回転 →体上端:列点刺突(押し引き、左→右)	横位ミガキ	口縁部上半欠失	143
107	B-268	SM140	底面	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ→口唇・体:LR縄文横位回転 →体上端:列点刺突(左→右)	横位ミガキ(密)		143
108	B-231	SI120	床面	弥生土器	甕	口縁～体上半	口唇:不明、口:ヨコナデ →体:植物茎回転文斜位回転? →体上端:列点刺突(左→右)	不明	内面輪積み痕、 内外面劣化	143
109	B-260	SD66	7層	弥生土器	甕	口縁～体上半	口唇:LR縄文横位回転、口:ヨコナデ →体上端:列点刺突(左→右)	横位ミガキ		143
110	B-337	SI131	堆積土	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ→体:植物茎回転文横位回転 →体上端:列点刺突(左→右)	横位ミガキ(密)	口縁部上半欠失、 外面炭化物付着	143
111	B-247	-	-	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ→体:LR縄文横位回転 →体上端:列点刺突(右→左)	横位ミガキ		144
112	B-219	SI113	周溝	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ→体:LR縄文斜位回転 →体上端:列点刺突(右→左)	ミガキ	外面劣化	144
113	B-288	SD62	堆積土	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ →口唇・体:植物茎回転文斜位回転 →体上端:列点刺突(右→左)	横位ミガキ(密)		144
114	B-245	-	-	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ→体:LR縄文横位回転 →体上端:列点刺突(右→左)	横位ミガキ		144
115	B-280	SI108	堆積土	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ→口唇・体:LR縄文横位回転 →体上端:列点刺突(右→左)	横位ミガキ		144
116	B-205	-	-	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ→口唇・体:LR縄文横位回転 →体上端:列点刺突(右→左)	横位ミガキ(密)	内面口縁部黒色化、 内面体部炭化物付着	144
117	B-306	-	-	弥生土器	甕	口縁～体上半	口唇:不明、口:ヨコナデ →体:LR縄文横位回転 →体上端:列点刺突(右→左)	横位ミガキ	口唇部劣化	144
118	B-261	SI118	掘り方	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ→体:ハケメ? →口唇・体:LR縄文横位回転 →体上端:列点刺突(右→左)	横位ミガキ(密)		144
119	B-230	SI95B	堆積土	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ →口唇・体:植物茎回転文横位・斜位回転 →体上端:列点刺突(右→左)	ミガキ	内面劣化	144

第358図　その他の出土遺物(10)



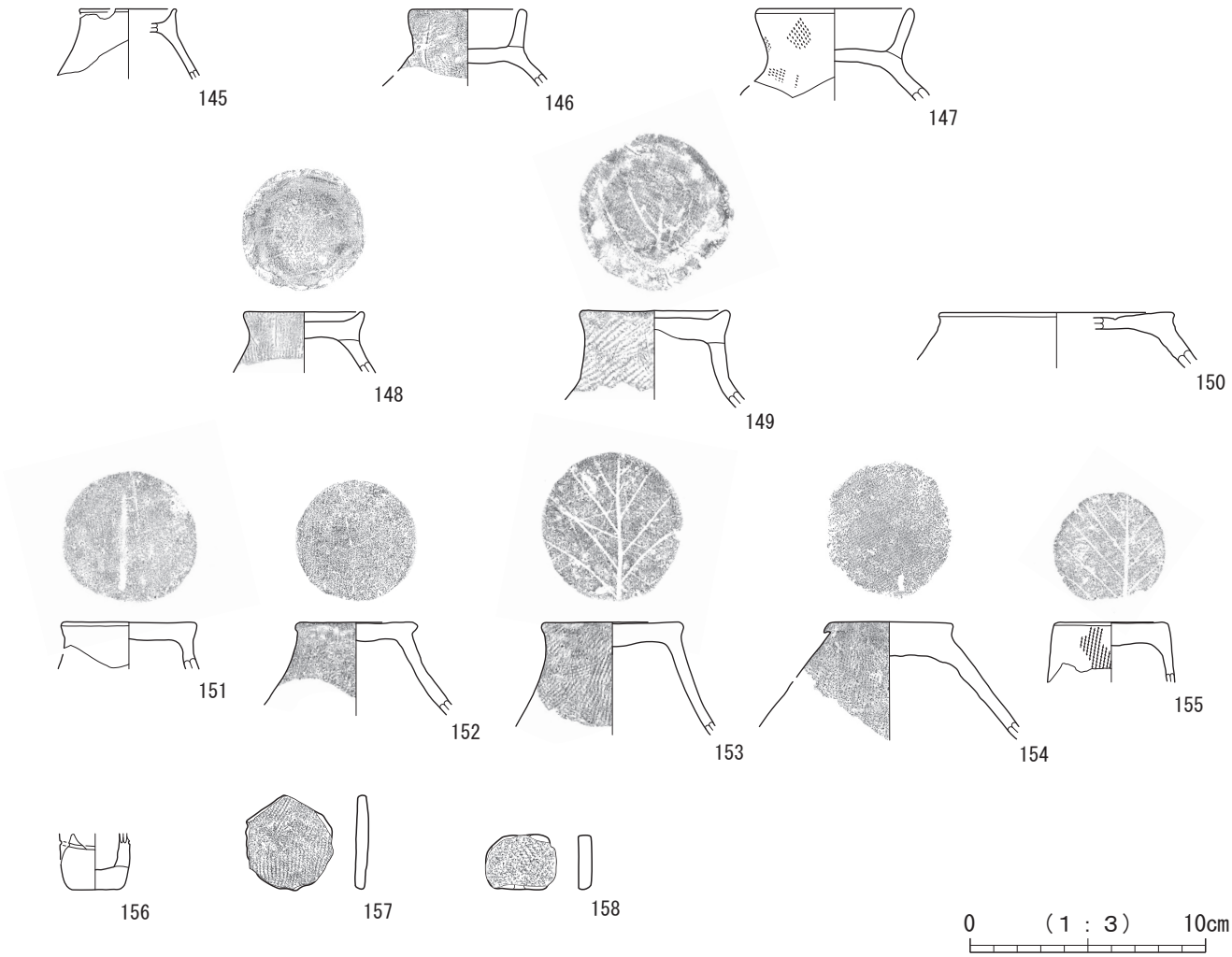
図版番号	登録番号	出土遺構		種別	器種	部位	外面調整・文様	内面調整・文様	備　考	写真図版
120	B-255	SI99	堆積土	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ→体:LR縄文横位回転→体上端:列点刺突(左→右)	横位ミガキ		144
121	B-236	-	-	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ→体:LR縄文横位回転→体上端:列点刺突(右→左)	ミガキ		144
122	B-214	-	-	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ→体:ハケメ→Rl縄文横位回転→体上端:列点刺突(右→左)	ミガキ		144
123	B-295	Pit1302	-	弥生土器	甕	口縁～体上半	口唇:LR縄文横位回転、口:ヨコナデ→体:LR縄文斜位回転→体上端:列点刺突?	横位ミガキ	外面一部剥離	144
124	B-291	Pit1113	堆積土	弥生土器	甕	口縁～体上半	口唇:不明、口:ヨコナデ→体:LR縄文横位回転	横位ミガキ	外面炭化物付着、口唇部劣化	144
125	B-061	-	-	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ→口唇・体:LR縄文横位回転	横位ミガキ		144
126	B-296	SK79	堆積土	弥生土器	甕	口縁～体上半	口唇:ハケメ、口:ヨコナデ→体:斜位ハケメ	横位ミガキ	ハケメは櫛状施文具、B-299と同一個体	144
127	B-299	-	-	弥生土器	甕	口縁～体上半	口唇:ハケメ、口:ヨコナデ→体:斜位ハケメ	横位ミガキ	ハケメは櫛状施文具、B-296と同一個体	144
128	B-302	-	-	弥生土器	甕	口縁～体上半	口唇:LR縄文横位回転、口:ヨコナデ→体:LR縄文斜位回転→体上端:沈線(横位直線文)	ミガキ(粗)		144
129	B-293	SI88	掘り方	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ→体:RL縄文横位回転	口:ヨコナデ→口～体:横位ミガキ(粗)	波状口縁?、深鉢の可能性有	144
130	B-301	-	-	弥生土器	甕	口縁～体上半	口:ヨコナデ、沈線?→口唇・体:LR縄文横位回転	横位ミガキ(粗)	沈線?は整形痕の可能性大	144
131	B-351	SD66	4層	弥生土器	甕?	体下半～底	体下半:LR縄文横位・斜位回転→体下端:横位ミガキ、底:木葉痕	横位ミガキ(密)	底径(10.0) cm、外面二次加熱痕、底部穿孔(焼成後)の可能性有	144

第359図　その他の出土遺物(11)



図版番号	登録番号	出土遺構		種別	器種	部位	外面調整・文様	内面調整・文様	備　考	写真図版
132	B-157	SI93	堆積土	弥生土器	蓋	天井～口縁	天井:木葉痕→ミガキ、 体上半:LR縄文横位・斜位回転、 体下半:沈線、LR縄文→ミガキ (横位直線文+連続山形文)	口:沈線→ミガキ (横位直線文)	口径(12.2) cm、 天井部径5.2cm、 器高7.0cm、 外面二次加熱痕	145
133	B-176	SI119	掘り方	弥生土器	蓋	体下半～口縁	口唇:RL縄文横位回転、体:RL縄文横位・斜位回転 →体下半～口:沈線 →ミガキ(横位直線文+連弧文)(磨消縄文)	口:沈線→ミガキ (横位直線文)	口径(19.4) cm、 口縁部内外面黒色化 及び炭化物付着	145
134	B-185	SD66	4a層	弥生土器	蓋	体下半～口縁	沈線→LR縄文→ミガキ (横位直線文+連続山形文)	ミガキ	口縁部内外面黒色化、 内外面劣化	145
135	B-187	SB9-P11	堆積土	弥生土器	蓋	体下半～口縁	沈線→LR縄文→ミガキ (横位直線文+連弧文?)	ミガキ	口縁部内外面黒色化	145
136	B-080	Pit1111	堆積土	弥生土器	蓋?	体下半～口縁	沈線→植物茎回転文→ミガキ (横位直線文+連弧文?)	ミガキ(粗)		145
137	B-071	SD72	堆積土	弥生土器	蓋	体下半～口縁	口唇:RL縄文横位回転、 体下半～口:RL縄文横位回転→沈線 →ミガキ(横位直線文+連弧文)(磨消縄文)	口:沈線→ミガキ (横位直線文)	口縁部内外面黒色化、 内面沈線内炭化物付着	145
138	B-192	SI115A	堆積土	弥生土器	蓋	体下半～口縁	LR縄文斜位回転→沈線 →ミガキ→赤彩? (横位直線文+連続山形文?)	ミガキ	口縁部内外面黒色化、 沈線内赤彩痕	145
139	B-203	SD59	堆積土	弥生土器	蓋	体下半～口縁	沈線→植物茎回転文 →沈線→縦位短線→ミガキ (横位直線文+連続山形文)	横位ミガキ(密)	口唇部欠失、 口縁部内外面黒色化	145
140	B-180	SB9-P16	堆積土	弥生土器	蓋	体下半～口縁	沈線→LR縄文→沈線→ミガキ→文様部赤彩 (横位直線文+連続山形文)	口:沈線→ミガキ(密) (横位直線文)	内外面口縁部炭化物付着	145
141	B-048	SI115A	堆積土	弥生土器	蓋?	体下半～口縁	沈線→LR縄文→沈線→ミガキ (横位直線文+山形文?)	ミガキ(粗)		145
142	B-177	SI99	床面	弥生土器	蓋?	体下半～口縁	沈線、LR縄文横位回転	口:沈線→ミガキ (横位直線文)	口径(18.2) cm、 内外面劣化	145
143	B-201	SI132	周溝	弥生土器	蓋	体下半～口縁	ハケメ→口:沈線→ミガキ (横位直線文)	口:沈線→ミガキ? (横位直線文)	口縁部内外面黒色化、 内面劣化	145
144	B-195	SI99	床面	弥生土器	蓋	体下半～口縁	LR縄文横位回転	ミガキ	口縁部内外面黒色化	145

第360図　その他の出土遺物(12)



図版番号	登録番号	出土遺構		種別	器種	部位	外面調整・文様	内面調整・文様	備　考	写真図版
145	B-161	SD42	堆積土	弥生土器	蓋	つまみ～体上半	つまみ～体上半:ミガキ	つまみ:ナデ、体:ミガキ	つまみ部径(4.0) cm	145
146	B-153	SI99	掘り方	弥生土器	蓋	つまみ～体上半	LR縄文横位・斜位回転	つまみ:ナデ(粗)、体:ミガキ(粗)	つまみ部径(4.6) cm、外面二次加熱痕	145
147	B-152	-	-	弥生土器	蓋	つまみ～体上半	LR縄文横位回転	つまみ:ナデ(粗)、体:ミガキ(粗)	つまみ部径6.4cm、外面二次加熱痕	145
148	B-159	SI106	堆積土	弥生土器	蓋	天井～体上半	天井:織布痕・木葉痕→ナデ、体上半:植物茎回転文横位・斜位回転	ミガキ	天井部径(4.9) cm	145
149	B-158	SI95B	ｶﾏﾄﾞ	弥生土器	蓋	天井～体上半	体上半:LR縄文横位回転、天井:木葉痕→ナデ	横位ミガキ	天井部径(6.2) cm、天井部内面一部剥離	145
150	B-143	Pit1284	-	弥生土器	蓋?	天井～体上端	ナデ	ナデ	天井部径(9.6) cm、内外面二次加熱痕、内面炭化物付着	145
151	B-175	-	-	弥生土器	蓋	天井～体上端	天井:木葉痕→ミガキ、体上半:ナデ	ナデ	天井部径5.6cm、外面二次加熱痕	145
152	B-165	SD66	2層	弥生土器	蓋	天井～体上半	天井:木葉痕→ミガキ、体上半:ハケメ→LR縄文斜位回転	ミガキ(粗)	天井部径4.8cm	145
153	B-164	Pit248	堆積土	弥生土器	蓋	天井～体上半	天井:木葉痕、体上半:LR縄文横位・斜位回転	ミガキ	天井部径5.8cm	145
154	B-136	Pit943	堆積土	弥生土器	蓋	天井～体上半	天井:周縁ミガキ、体上半:植物茎回転文横位回転?	ナデ	天井部径(4.6) cm、外面劣化	145
155	B-170	SB9-P3	堆積土	弥生土器	蓋	天井～体上半	体上半:植物茎回転文横位回転	ミガキ(粗)	天井部径4.8cm、外面二次加熱痕	145
156	B-464	-	-	弥生土器	ミニチュア	体～底	体:ミガキ→沈線、底:ミガキ	ナデ	底径2.0cm	145
157	P-031	SI84	堆積土	土製品	円盤状土製品?	体	LR縄文横位・斜位回転	不明	径4.0cm、厚さ0.6cm、内面劣化	145
158	P-032	-	-	土製品	円盤状土製品?	体	LR縄文横位回転	ミガキ	径2.4cm、厚さ0.6cm	145

第361図　その他の出土遺物(13)

ｂ.石器（第362～372図）

竪穴住居跡をはじめとする古代の遺構内堆積土及び現代の撹乱から出土した石器48点の資料を一括して掲載した。

1）打製石器

石鏃

159～162はⅠ類Ａ1種、163～166はⅠ類Ａ2種、167～170はⅠ類Ｂ1種、171～174はⅠ類Ｂ2種、175はⅡ類Ｂ2種、176はⅠ類2種である。177～179は未成品である。159は先端部を欠損している。両面を平坦剥離で整形しており、側縁を入念に調整している。両面の中央の稜は器軸に沿っていない。断面形は身部が扁平な菱形で、基部は菱形を呈している。160は平坦剥離で周縁を調整しており、両面に素材剥片の剥離面を残している。断面形は身部が扁平な菱形で、基部は菱形を呈している。161は基部を欠損している。両面を平坦剥離で整形しており、側縁を入念に調整している。両面の中央の稜は器軸に沿っている。断面形は身部、基部共に菱形を呈している。162は基部を欠損している。両面を平坦剥離で整形しており、側縁を入念に調整している。両面の中央の稜は器軸に沿っていない。断面形は身部が扁平な菱形で、基部は菱形を呈している。163は基部を欠損しているが、推定される長さは2.5㎝以上であり、Ａ種とした。平坦剥離で周縁を調整しており、片面に素材剥片の剥離面を残している。断面形は身部が扁平な菱形で、基部は菱形を呈している。164は平坦剥離で周縁を調整しており、片面に素材剥片の剥離面を残している。断面形は身部が扁平な三角形で、基部は菱形を呈している。165は両面を平坦剥離で整形しており、側縁を入念に調整している。両面の中央の稜は器軸に沿っている。断面形は身部が扁平な菱形で、基部は菱形を呈している。166は基部を欠損しているが、推定される長さは2.5㎝以上であり、Ａ種とした。平坦剥離で周縁を調整しており、片面に素材剥片の剥離面を残している。断面形は身部が菱形を呈している。167は尖端部を欠損している。両面を平坦剥離で整形しており、側縁を入念に調整している。裏面に素材面をわずかに残す。両面の中央の稜は器軸に沿っていない。断面形は身部、基部共に菱形を呈している。168はスクリントーン部分が調整面とは異なりくすんだ状態であり、加熱処理が施されたものと考えられる。平坦剥離で周縁を調整しており、調整剥離面は光沢をもっている。片面に素材剥片の剥離面を残している。断面形は身部が凸レンズ状を呈している。169は平坦剥離で周縁を調整しており、片面に素材剥片の剥離面を残している。断面形は身部が凸レンズ状で、基部は菱形を呈している。170は両面を平坦剥離で整形しており、側縁を入念に調整している。両面の中央の稜は器軸に沿っていない。断面形は身部が扁平な菱形で、基部は三角形を呈している。171は平坦剥離で周縁を調整しており、両面に素材剥片の剥離面を残している。断面形は身部、基部共に五角形を呈している。172は両面を平坦剥離で整形しており、側縁を入念に調整している。両面の中央の稜は器軸に沿っていない。断面形は身部が扁平な菱形で、基部は菱形を呈している。尖端部を再加工している。173はスクリントーン部分が調整面とは異なりくすんだ状態であり、加熱処理が施されたものと考えられる。加熱処理後、平坦剥離で周縁を調整しており、光沢が見られる。両面に素材剥片の剥離面を残している。断面形は身部、基部共に凸レンズ状を呈している。174はスクリントーン部分が節理面を示している。平坦剥離で周縁を調整しており、両面に素材剥片の剥離面を残している。断面形は身部が凸レンズ状で、基部は菱形を呈している。175はアメリカ式石鏃である。基部両端及び先端部を欠損している。両面を平坦剥離で整形しており、側縁を入念に調整している。両面の中央の稜は器軸に沿っていない。断面形は身部、基部共に凸レンズ状を呈している。176は先端部を大きく欠損している。平坦剥離で周縁を調整しており、両面に素材剥片の剥離面を残している。断面形は身部が凸レンズ状で、基部は菱形を呈している。177～179は二次加工を周縁に施している。長さ2.0～3.4㎝と石鏃の範疇に収まるものであり、製作途中に成品に仕上げるには不適合と判断され廃棄した失敗品と考えられる。177のスクリントーン部分は火ハネを示しているが、剥離面を切っていることから、加工後に生じたものである。石鏃に用いられている石材は、159～161･165･170･173･174は鉄石英、164･167･171･172･175･176･178･179は珪質頁岩、166･168･169･177は玉髄、163は流紋岩、162は瑪瑙で

ある。

板状石器

180は残存刃部長6.7㎝で、刃角68°～73°である。左側縁を欠損し、右側縁と上端縁は自然面である。181は残存刃部長3.4㎝で、刃角76°～84°である。刃部は連続的な二次加工により形成している。裏面下端部には、わずかに光沢が認められる。左側縁は欠損し、右側縁は折損、上端縁は折り取り後、二次加工を施している。182は残存刃部長9.4㎝で、刃角43°である。刃部にはスナップ剥離による剥離面が生じている。左右両側縁と上端縁は自然面である。板状石器に用いられている石材は、全て安山岩である。

二次加工のある剥片

183～186はⅠ類、187はⅡ類、188～192はⅢ類である。183は打面部を欠損している。表面下端縁に連続的な二次加工を施している。184は裏面に自然面を残している。表面下端縁には連続的な二次加工が認められる。185は表面下端縁側に自然面を残している。186の網掛けスクリントーン部分は加熱範囲を示しており、黒変している。裏面上端縁のスクリントーン部分は火ハネを示している。187は表面に自然面を残している。剥片剥離工程の初期の剥片を素材としている。188は連続する二次加工を周縁に施している。表面には、自然面を残している。189は平坦剥離で周縁を調整しており、両面に素材剥片の剥離面を残している。スクリントーン部分は火ハネを示している。断面形は凸レンズ状を呈している。190のスクリントーン部分は加熱範囲を示している。加熱後、二次加工を周縁に施しており、剥離面には光沢が認められる。191は素材剥片の末端側に二次加工を施している。同一縁辺には微細剥離痕が認められる。192は打面部を加工している。上端縁にはツブレが見られ、周辺は二次加工が施されている。裏面に原石時の転石による潜在割れで生じたと考えられる円錐割れが認められる。二次加工のある剥片に用いられている石材は、183～185･187･189は流紋岩、186･191は珪化凝灰岩、188は玉髄、190は鉄石英、192は瑪瑙である。

微細剥離痕のある剥片

193･194はⅠ類であり、195～197はⅡ類である。195～197は縦長剥片の縁辺に微細剥離痕が認められる。微細剥離痕のある剥片に用いられている石材は、193～195は流紋岩、196は珪質頁岩、197は珪化凝灰岩である。

2)磨製石器

磨製石斧

198は太型蛤刃石斧であり、刃角116°～120°である。刃部は入念に研磨を施しているが、器体には調整時の敲打痕が残存する。折損後、折れ面に二次加工を施している。199は太型蛤刃石斧の基部と考えられ、器体には調整時の敲打痕が残存する。折損後、折れ面に二次加工を施している。基端面に敲打痕の著しい部分が認められる。磨製石斧に用いられている石材は、198は石英安山岩、199は安山岩である。

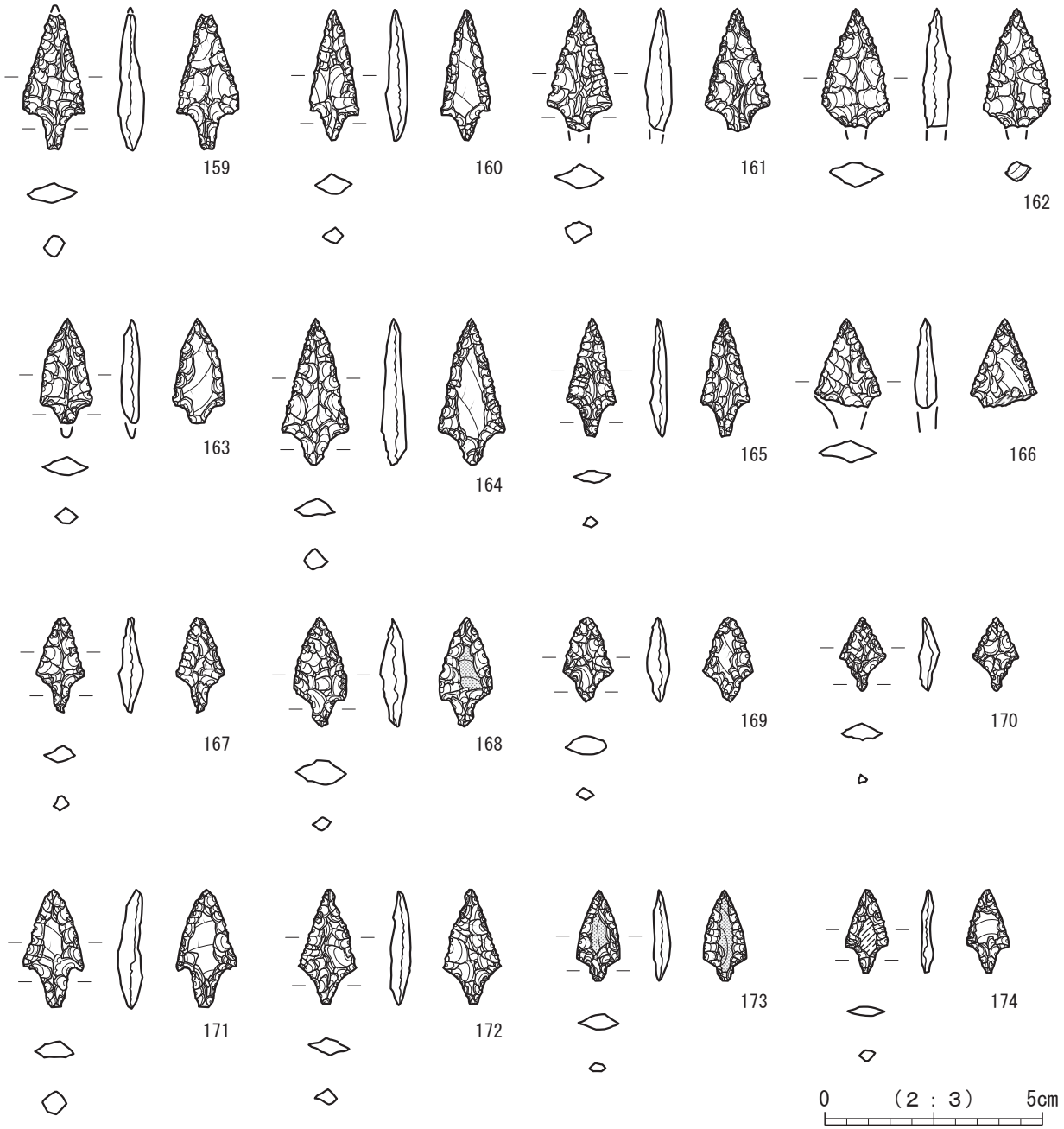
3)礫石器

磨・凹・敲石

200･201はⅡ類B種、202はⅢ類C種、203はⅣ類B種、204はⅥ類C種、205はⅦ類B種、200はa面中央に複数の深い凹痕が残され、b面中央の平坦面に浅い凹痕が認められる。201は中央に凹痕形成後、複数の溝状痕が認められる。202は両端に敲打痕が認められる。203はa面中央に浅い凹痕を残し、b面に磨痕が認められる。204はb面上端部側とc面中央に浅い凹痕が残され、両側縁と下端部に敲打痕が認められる。205はb、c両面とa面に磨痕を残し、b面中央に浅い凹痕が認められる。磨･凹･敲石に用いられている石材は、200･201･203は凝灰岩、202･204･205は安山岩である。

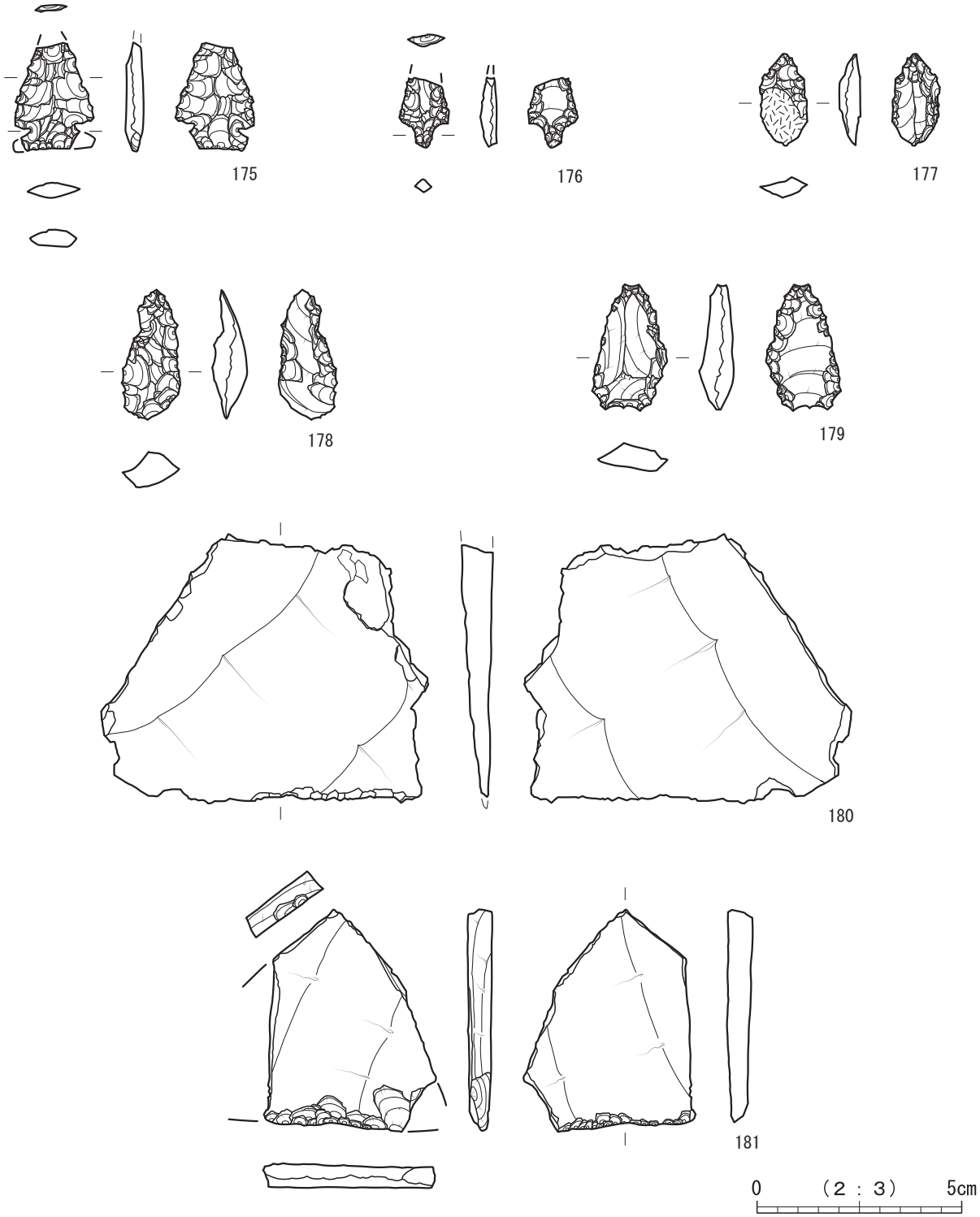
台石

206は片面に、複数の浅い凹痕が認められる。石材は凝灰岩である。



図版番号	登録番号	出土遺構・層位	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真番号
159	Ka-023	Pit564・堆積土	打製石器	石鏃	IA1	(3.1)×1.4×0.6	1.62	鉄石英	有茎、完成品、先端部欠損、厚幅比0.42	146
160	Ka-015	SD65・堆積土	打製石器	石鏃	IA1	3.0×1.1×0.5	1.17	鉄石英	有茎、完成品、先端角28°、厚幅比0.45、素材面残す	146
161	Ka-027	遺構検出面	打製石器	石鏃	IA1	(2.8)×1.5×0.6	1.74	鉄石英	有茎、完成品、基部欠損、先端角38°、厚幅比0.40	146
162	Ka-026	遺構検出面	打製石器	石鏃	IA1	(2.7)×1.5×0.6	1.65	瑪瑙	有茎、完成品、基部欠損、先端角37°、厚幅比0.40	146
163	Ka-018	SI83・堆積土	打製石器	石鏃	IA2	(2.4)×1.2×0.4	0.99	流紋岩	有茎、完成品、基部欠損、厚幅比0.33、素材面残す	146
164	Ka-012	SA5・堆積土	打製石器	石鏃	IA2	3.3×1.5×0.5	1.85	珪質頁岩	有茎、完成品、先端角33°、厚幅比0.33、素材面残す	146
165	Ka-038	カクラン	打製石器	石鏃	IA2	2.7×1.1×0.3	0.70	鉄石英	有茎、完成品、先端角32°、厚幅比0.27	146
166	Ka-024	Pit1311・堆積土	打製石器	石鏃	IA2	(2.0)×1.5×0.5	0.77	玉髄	有茎、完成品、基部欠損、厚幅比0.33、素材面残す	146
167	Ka-033	遺構検出面	打製石器	石鏃	IB1	(2.1)×1.1×0.5	0.70	珪質頁岩	有茎、完成品、先端部欠損、厚幅比0.45	146
168	Ka-031	遺構検出面	打製石器	石鏃	IB1	2.5×1.2×0.5	1.34	玉髄	有茎、完成品、先端角35°、厚幅比0.41、加熱処理あり、素材面残す	146
169	Ka-029	遺構検出面	打製石器	石鏃	IB1	1.9×1.1×0.5	0.76	玉髄	有茎、完成品、先端角45°、厚幅比0.45、素材面残す	146
170	Ka-019	SI90・堆積土	打製石器	石鏃	IB1	1.7×1.0×0.4	0.44		有茎、完成品、先端角45°、厚幅比0.40、	146
171	Ka-013	SD42・堆積土	打製石器	石鏃	IB2	2.7×1.4×0.5	1.35	珪質頁岩	有茎、未成品、先端角40°、厚幅比0.35、素材面残す	146
172	Ka-028	遺構検出面	打製石器	石鏃	IB2	2.6×1.3×0.4	1.00	珪質頁岩	有茎、完成品、先端部再加工、厚幅比0.30	146
173	Ka-022	Pit276・堆積土	打製石器	石鏃	IB2	2.4×1.0×0.3	0.57	鉄石英	有茎、完成品、先端角38°、厚幅比0.30、加熱処理あり、素材面残す	146
174	Ka-025	遺構検出面	打製石器	石鏃	IB2	1.9×1.0×0.3	0.35	鉄石英	有茎、完成品、先端角45°、厚幅比0.30、素材面残す	146

第362図　その他の出土遺物(14)

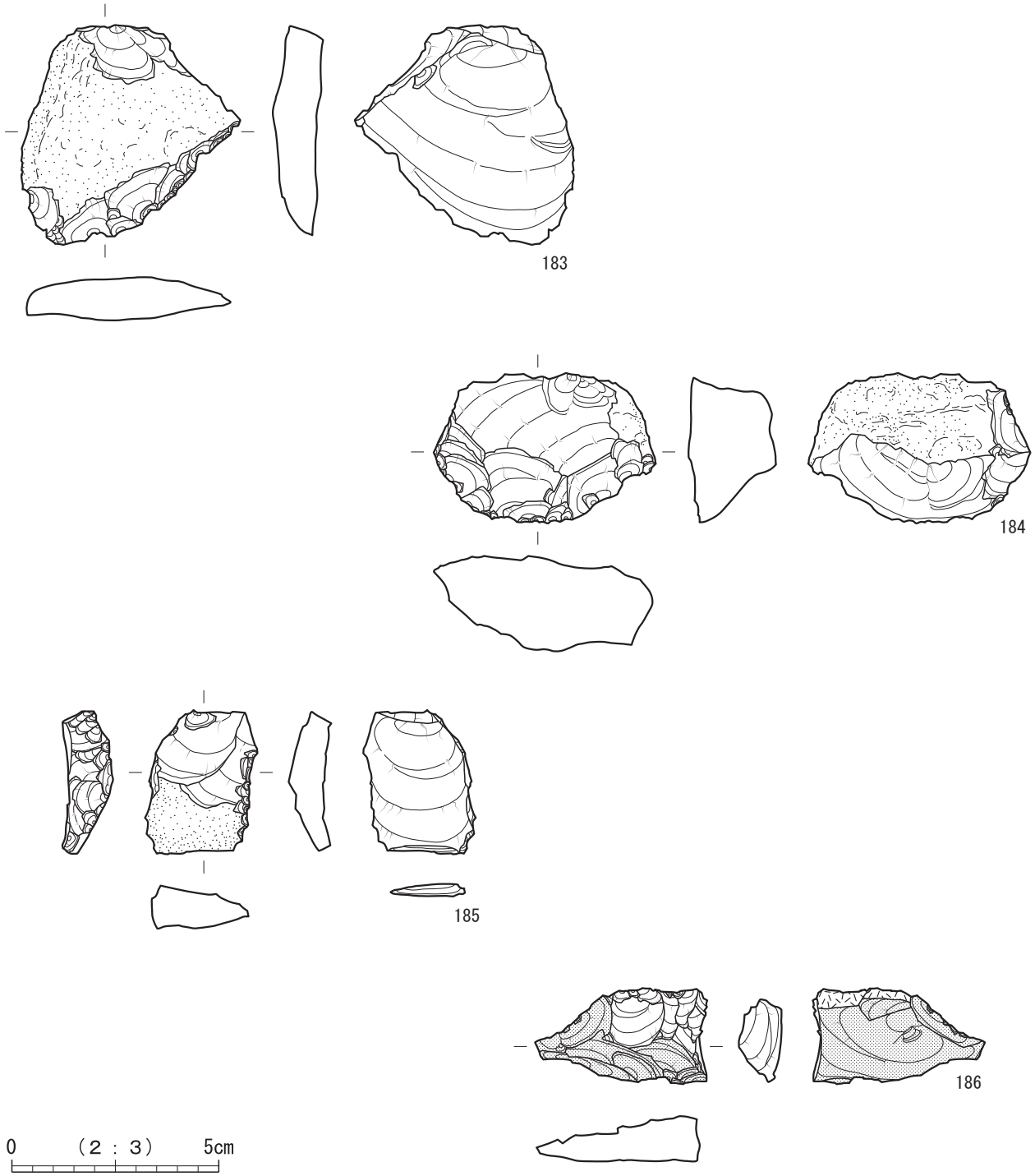


図版番号	登録番号	出土遺構・層位	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真番号
175	Ka-016	SD66・堆積土	打製石器	石鏃	ⅡB2	2.6×1.9×0.4	2.02	珪質頁岩	アメリカ式、完成品、両端部欠損、厚幅比0.21	146
176	Ka-030	遺構検出面	打製石器	石鏃	I2	1.6×1.2×0.4	0.69	珪質頁岩	有茎、完成品、先端部欠損、厚幅比0.33、素材面残す	146
177	Ka-032	遺構検出面	打製石器	石鏃	-	2.2×1.1×0.5	1.07	玉髄	未成品、先端角80°、厚幅比0.45、素材面残す	146
178	Ka-021	SI119・堆積土	打製石器	石鏃	-	3.4×1.4×0.8	2.44	珪質頁岩	未成品、先端角45°、厚幅比0.57、素材面残す	146
179	Ka-034	遺構検出面	打製石器	石鏃	-	3.0×1.7×0.8	4.08	珪質頁岩	未成品、先端角50°、厚幅比0.47、素材面残す	146
180	Ka-020	SI90A・堆積土	打製石器	板状石器	-	6.4×7.6×0.9	48.54	安山岩	刃部長6.7cm、刃角68°～73°、右側縁欠損、 左側縁自然面、上端縁欠損	146
181	Ka-037	遺構検出面	打製石器	板状石器	-	5.2×4.0×0.6	20.76	安山岩	刃部長3.4cm、刃角76°～84°、下端縁二次加工、 右側縁折れ、左側縁欠損、上端縁折れ＋二次加工	146

第363図　その他の出土遺物(15)

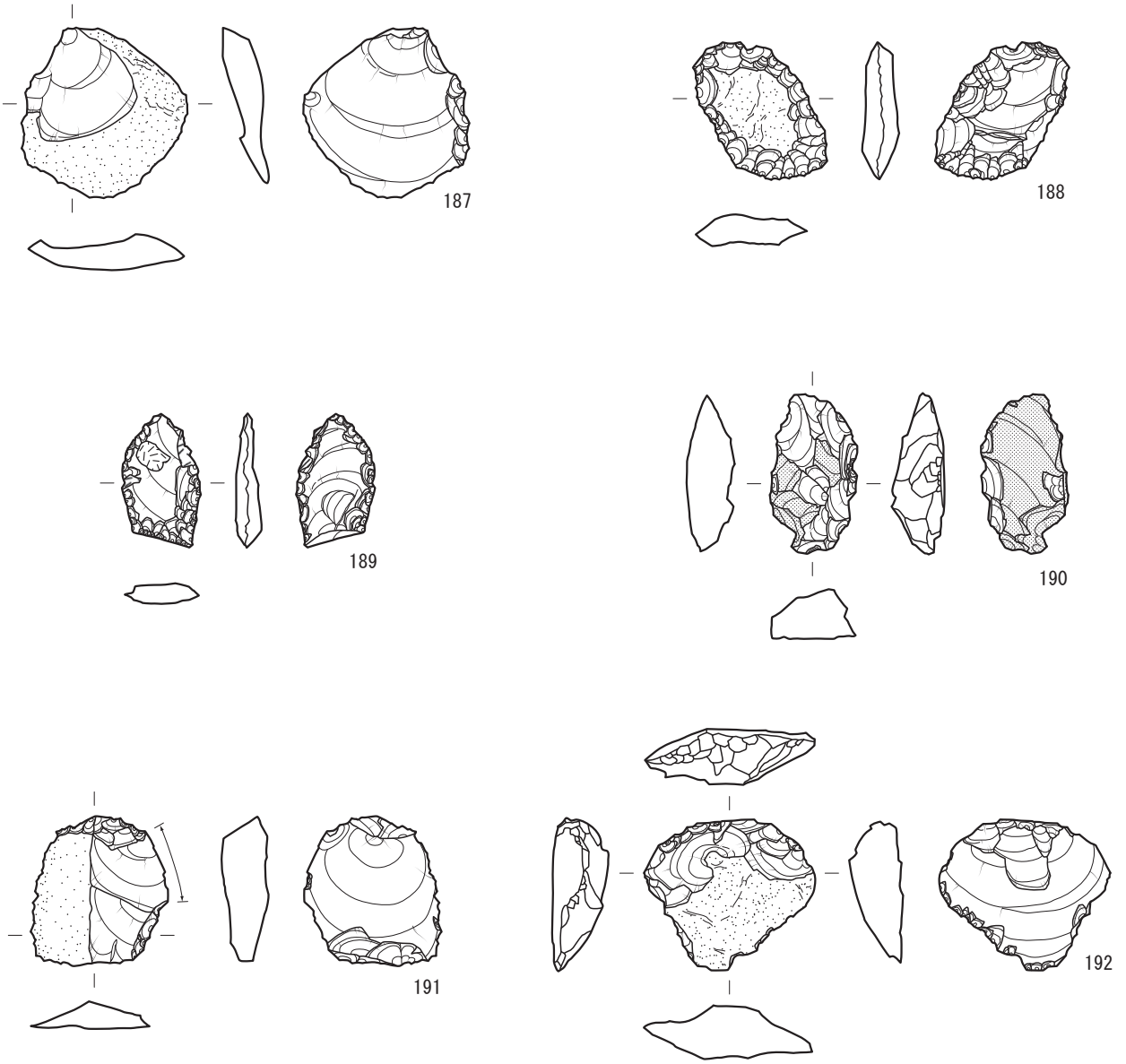
図版番号	登録番号	出土遺構・層位	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ（cm）	重量（g）	石材	備　考	写真番号
182	Ka-017	SD66・2層	打製石器	板状石器	-	12.6×13.1×2.3	375.34	安山岩	刃部長9.4cm、刃角43°、右側縁自然面、左側縁自然面、上端縁自然面	146

第364図　その他の出土遺物（16）



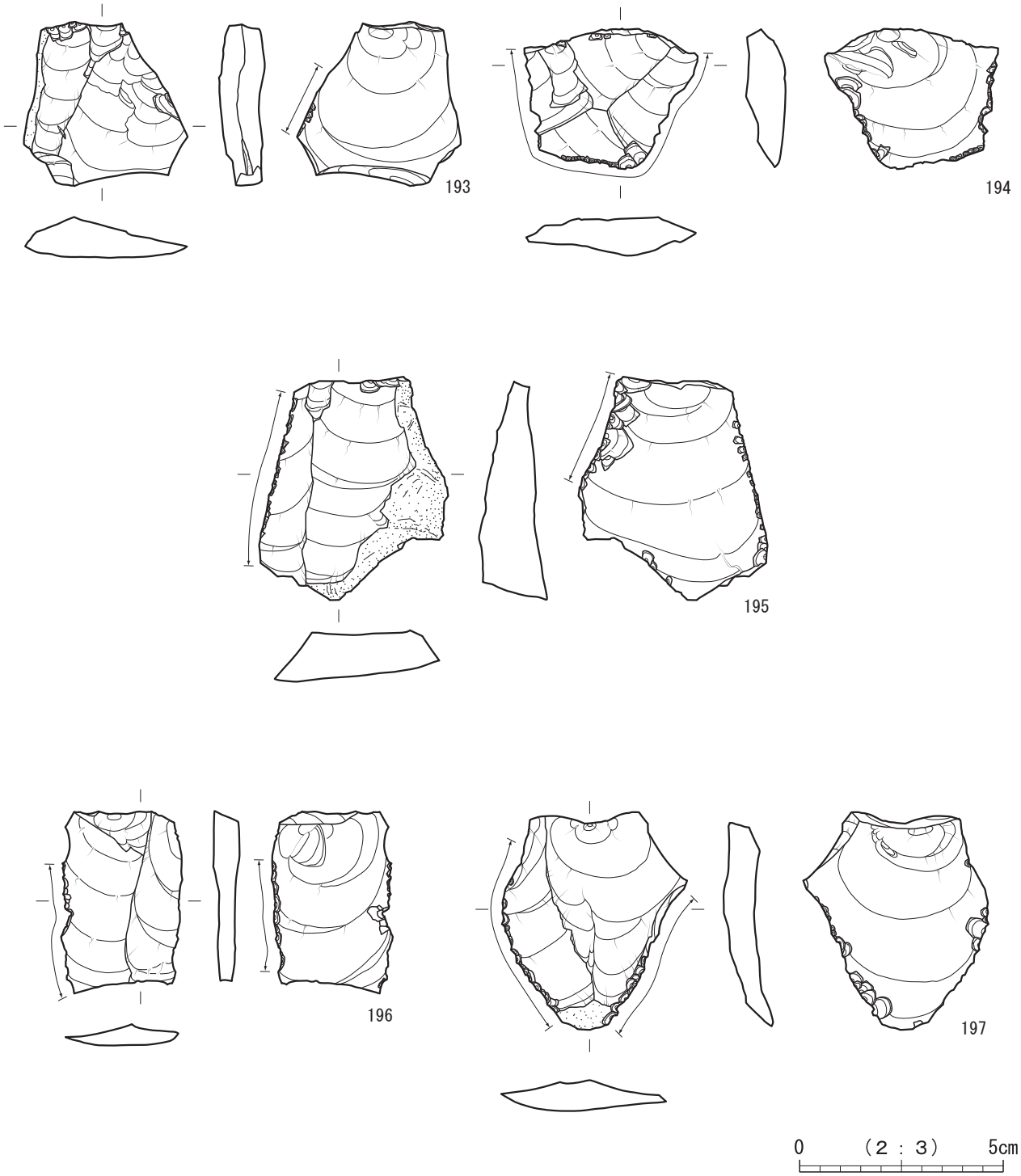
図版番号	登録番号	出土遺構・層位	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真番号
183	Ka-397	Pit1412・堆積土	打製石器	二次加工のある剥片	I	5.2×5.1×1.4	35.80	流紋岩	打面部欠損、表面加工、自然面あり	146
184	Ka-394	SI83・堆積土	打製石器	二次加工のある剥片	I	6.7×5.4×2.4	41.9	流紋岩	自然面打面、剥離角123°、表面加工、自然面あり	146
185	Ka-398	遺構検出面	打製石器	二次加工のある剥片	I	3.4×2.4×1.0	9.88	流紋岩	平坦打面、剥離角116°、表面加工、自然面あり	146
186	Ka-393	SI82・堆積土	打製石器	二次加工のある剥片	I	2.2×4.0×1.1	10.06	珪化凝灰岩	打面部欠損、表面加工、加熱処理	146

第365図　その他の出土遺物(17)



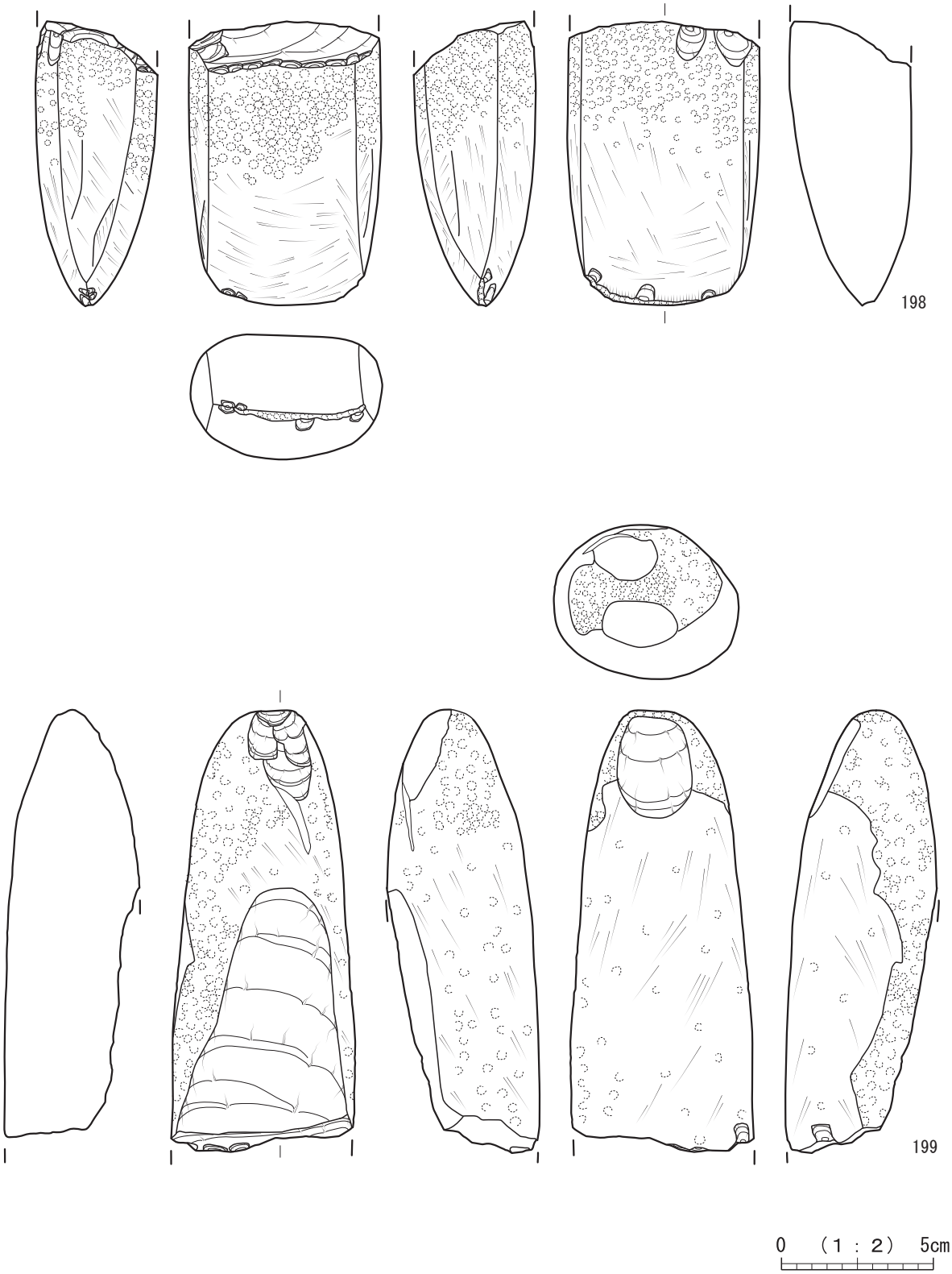
図版番号	登録番号	出土遺構・層位	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真番号
187	Ka-391	SD55・堆積土	打製石器	二次加工のある剥片	Ⅱ	3.7×3.6×1.0	9.15	流紋岩	平坦打面、剥離角116°、裏面加工、自然面あり	146
188	Ka-036	遺構検出面	打製石器	二次加工のある剥片	Ⅲ	3.0×2.4×0.8	6.93	玉髄	打面部加工、表面＋裏面加工、周縁に二次加工あり、自然面あり	146
189	Ka-035	遺構検出面	打製石器	二次加工のある剥片	Ⅲ	2.8×1.7×0.6	2.69	流紋岩	平坦打面、剥離角130°、表面＋裏面加工、周縁に二次加工あり、自然面あり	146
190	Ka-400	遺構検出面	打製石器	二次加工のある剥片	Ⅲ	3.5×1.9×1.1	7.85	鉄石英	打面部加工、表面＋裏面加工、周縁に二次加工あり、加熱処理	146
191	Ka-392	SI78・堆積土	打製石器	二次加工のある剥片	Ⅲ	3.3×3.0×1.0	8.02	珪化凝灰岩	平坦打面、剥離角120°、表面＋裏面加工、1縁辺に微細剥離痕あり、自然面あり	146
192	Ka-402	SI115 A・堆積土	打製石器	二次加工のある剥片	Ⅲ	3.3×3.8×1.2	13.68	瑪瑙	打面部加工、表面＋裏面加工、1縁辺に潰れあり	146

第366図　その他の出土遺物(18)



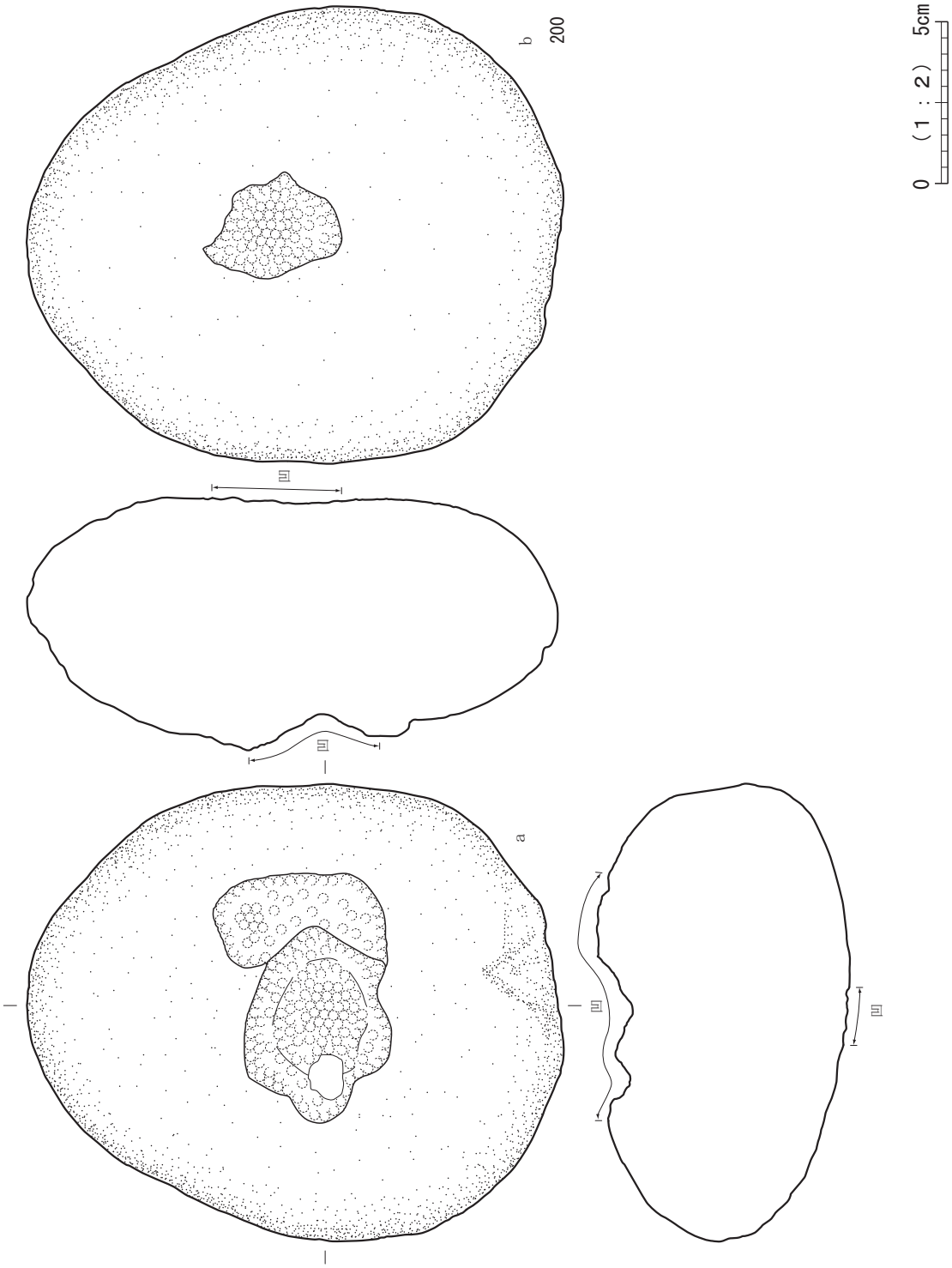
図版番号	登録番号	出土遺構・層位	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考	写真番号
193	Ka-395	SI126・堆積土	打製石器	微細剥離痕のある剥片	Ⅰ	4.0×4.0×1.2	16.11	流紋岩	平坦打面、剥離角123°、1縁辺に微細剥離痕あり、自然面あり	146
194	Ka-399	カクラン	打製石器	微細剥離痕のある剥片	Ⅰ	3.4×4.2×1.0	13.03	流紋岩	平坦打面、剥離角123°、1縁辺に微細剥離痕あり	146
195	Ka-401	遺構検出面	打製石器	微細剥離痕のある剥片	Ⅱ	5.4×4.4×1.6	34.53	流紋岩	打面部欠損、複縁辺に微細剥離痕のあり、自然面あり	146
196	Ka-396	SI126・堆積土	打製石器	微細剥離痕のある剥片	Ⅱ	4.6×3.1×0.9	8.88	珪質頁岩	平坦打面、剥離角124°、複縁辺に微細剥離痕あり	146
197	Ka-014	SD55・堆積土	打製石器	微細剥離痕のある剥片	Ⅱ	5.0×4.4×1.1	17.04	珪化凝灰岩	平坦打面、剥離角119°、複縁辺に微細剥離痕あり、自然面あり	146

第367図　その他の出土遺物(19)



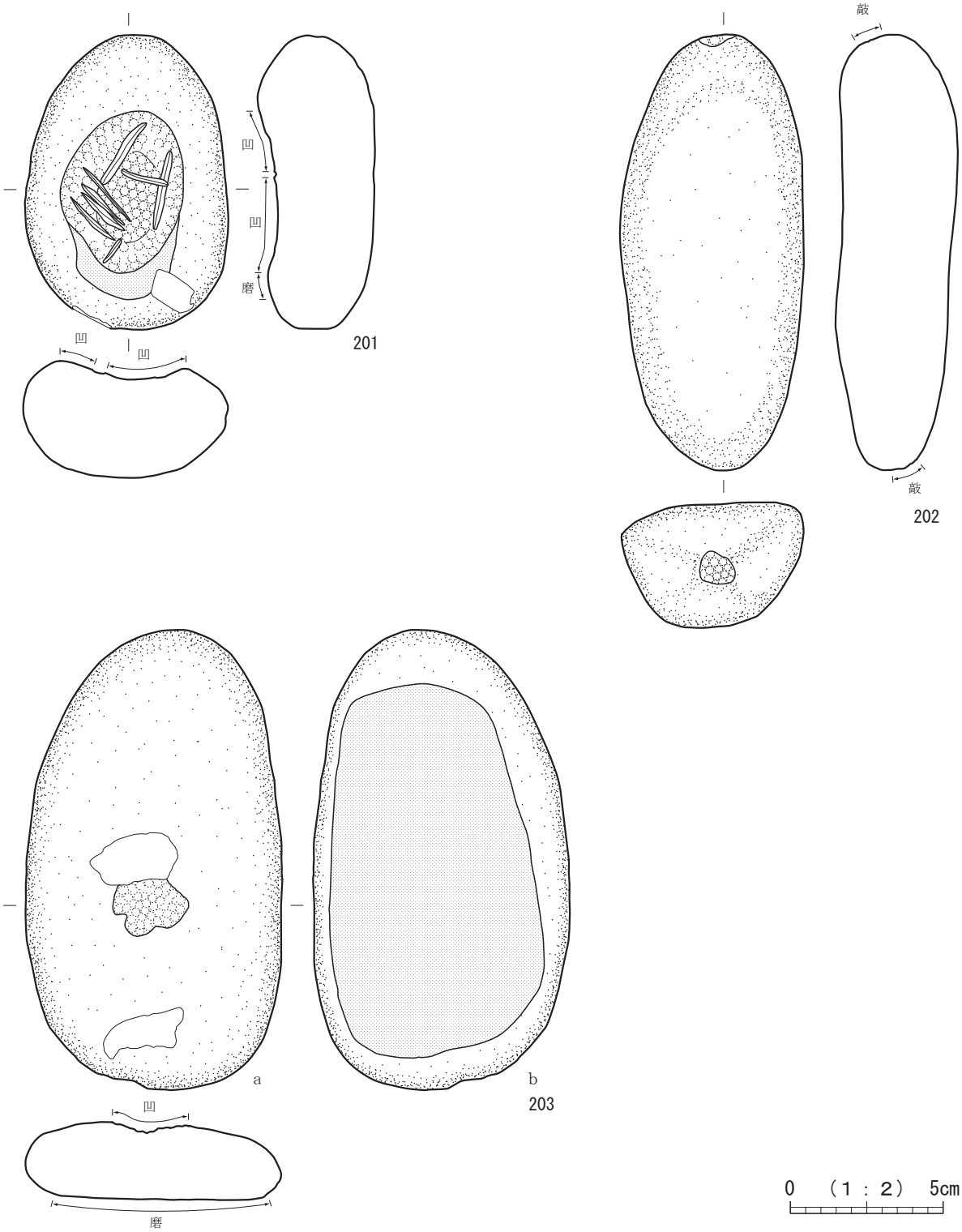
図版番号	登録番号	出土遺構・層位	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真番号
198	Kb-01	SI106・堆積土	磨製石器	磨製石斧	-	(9.3)×6.3×4.2	389.34	石英安山岩	欠損品、刃角116°～120°	147
199	Kb-02	SD66・2b層	磨製石器	磨製石斧	-	(14.6)×6.2×4.5	593.68	安山岩	欠損品、棒状礫、磨1面(凸)、敲(端1箇所)程度(強)	147

第368図　その他の出土遺物(20)



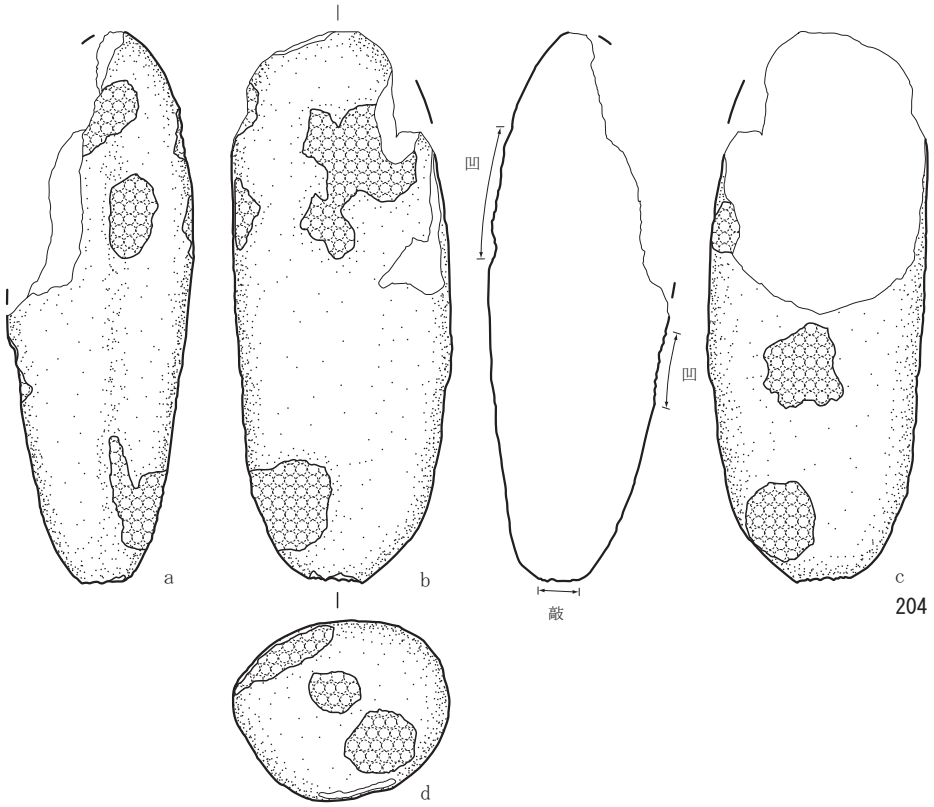
図版番号	登録番号	出土遺構・層位	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真番号
200	Kc-138	遺構検出面	礫石器	凹石	ⅡB	16.5×14.0×7.7	1580.39	凝灰岩	完形品、楕円礫、凹2面(複＋単)深さ(浅)	147

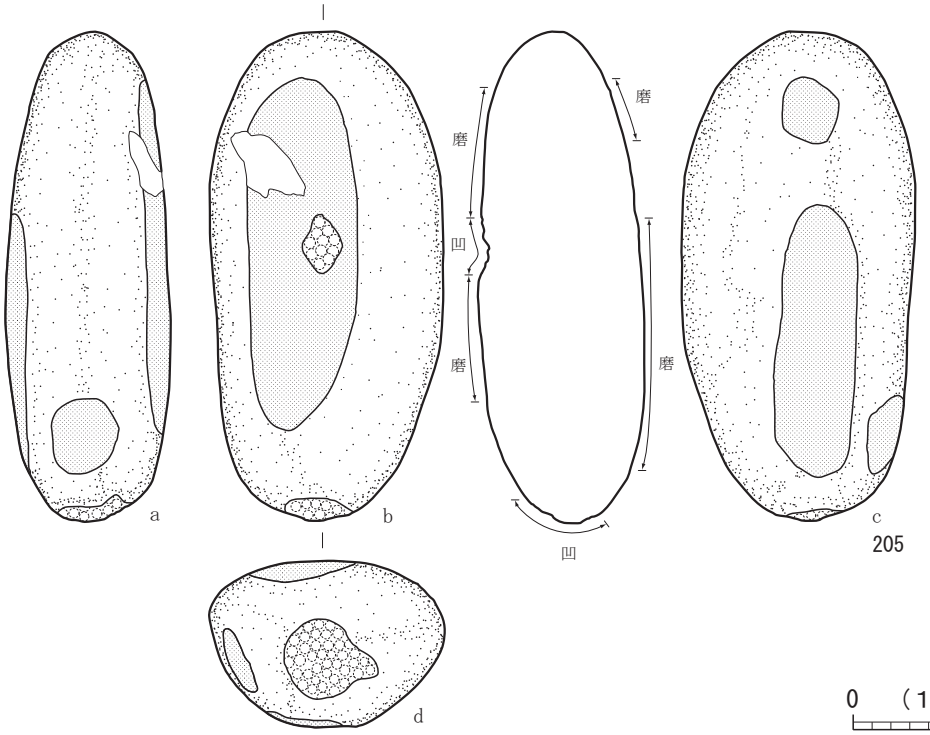
第369図　その他の出土遺物(21)



図版番号	登録番号	出土遺構・層位	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真番号
201	Kc-139	遺構検出面	礫石器	凹石	ⅡB	9.6×5.6×3.6	150.47	凝灰岩	完形品、楕円礫、凹2面(単)深さ(深)、溝状痕あり	147
202	Kc-133	SM156・堆積土	礫石器	敲石	ⅢC	14.2×6.0×4.0	476.83	安山岩	完形品、棒状礫、敲(端2箇所)程度(弱)	147
203	Kc-135	遺構検出面	礫石器	磨＋凹	ⅣB	14.0×8.4×2.5	282.72	凝灰岩	完形品、楕円礫、磨1面(平)、凹1面(単)深さ(浅)	147

第370図　その他の出土遺物(22)

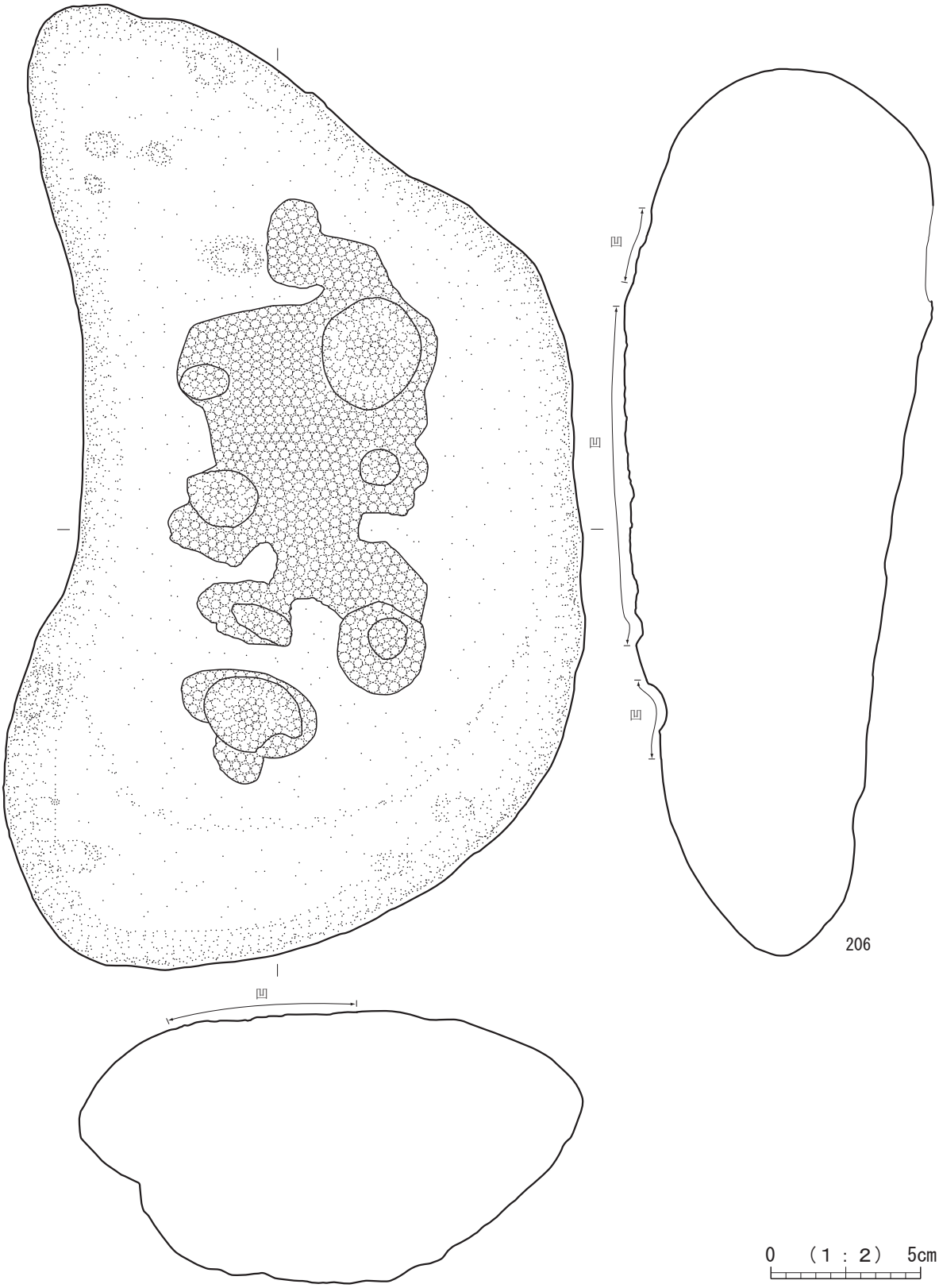




0 （1：2） 5cm

図版番号	登録番号	出土遺構・層位	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真番号
204	Kc-140	遺構検出面	礫石器	凹＋敲	ⅥC	14.6×5.8×4.7	423.46	安山岩	欠損品、棒状礫、凹2面(単＋単)深さ(微)、敲(端2箇所＋側2箇所)程度(弱)	147
205	Kc-141	遺構検出面	礫石器	磨＋凹＋敲	ⅦB	12.9×6.2×4.4	520.13	安山岩	完形品、楕円礫、磨四面(凸)、凹1面(単)深さ(浅)、敲(端1箇所)程度(弱)	147

第371図　その他の出土遺物(23)



図版番号	登録番号	出土遺構･層位	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真番号
206	Kc-145	遺構検出面	礫石器	台石	-	32.1×19.3×10.7	4600.00	凝灰岩	完形品、楕円礫、凹1面(複)深さ(浅)	147

第372図　その他の出土遺物(24)

(8)　接合資料（第373～492図）

Ⅳ層とⅤ層及び、古代の遺構内堆積土、現代の撹乱から出土した石器のうち、122点の接合資料を掲載した。これらは、剥片剥離作業を示すものである。

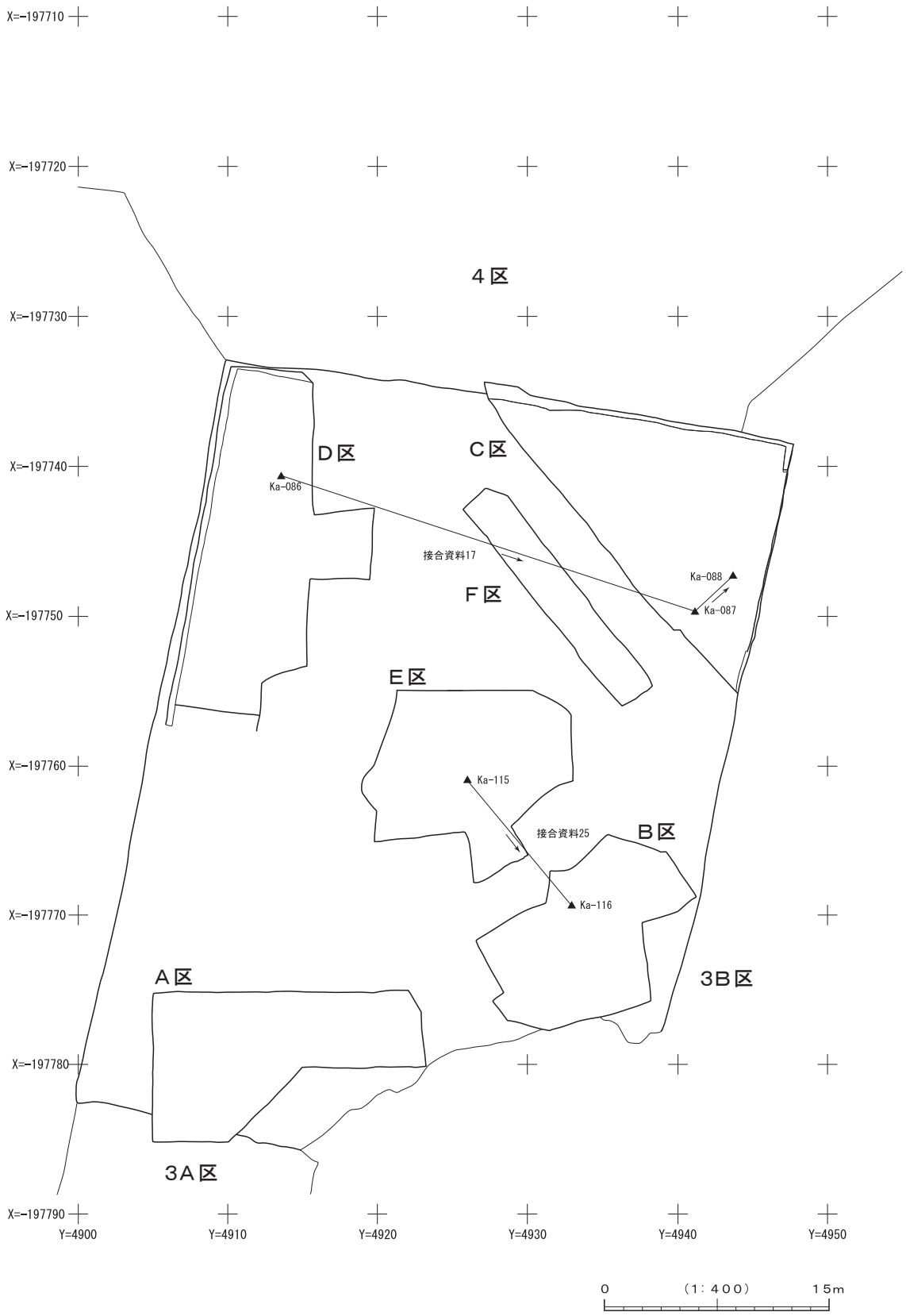
平面分布図中に記入した「▲」は剥片を「△」は石核の出土位置を示し、Ka-○○の登録番号を付した。矢印の方向は剥片剥離の順番を意味し、それは古い剥離段階から新しい剥離段階へ移ることを示す。

第373図～第375図は接合資料の出土地点分布図であり、第373図は各弥生調査区を越えて接合したものである。接合資料17は、Ｄ区から出土した原礫を分割した際の剥片であるKa-086と、約28ｍ離れた場所のＣ区において検出されたKa-087とKa-088の２点の剥片が接合したものである。Ｄ区での分割とＣ区での剥片剥離作業が推定される。接合資料25は、剥片同士の接合であり、Ka-115とKa-116は約10ｍ離れて出土している。第374図は弥生Ｂ区内で接合したものである。接合資料112は、石核であるKa-343から剥離された剥片Ka-344が約６ｍ離れた場所から出土している。第375図は弥生Ｃ区内で接合したものである。接合資料66は、原礫を分割した際の剥片Ka-222と石核であるKa-223から剥離されたKa-224は約1.2ｍの範囲内で剥片剥離が行われている。接合資料20は、剥片同士の接合であり、Ka-095･Ka-096とKa-097は約６ｍ離れて出土している。接合資料67は、剥片同士の接合であり、Ka-225とKa-226は約1.5ｍ離れて出土している。接合資料101は、微細剥離痕のある剥片同士の接合であり、Ka-319とKa-320は約1.5ｍ離れて出土している。接合資料121は、剥片であるKa-367とKa-368は約1.5ｍ離れて出土している。石核であるKa-366の出土位置は不明である。接合資料122は、同時割れを起こした剥片であるKa-369とKa-370は約0.7ｍ離れて出土している。接合資料127は、同時割れを起こした剥片であるKa-379とKa-380は約0.4ｍ離れて出土している。

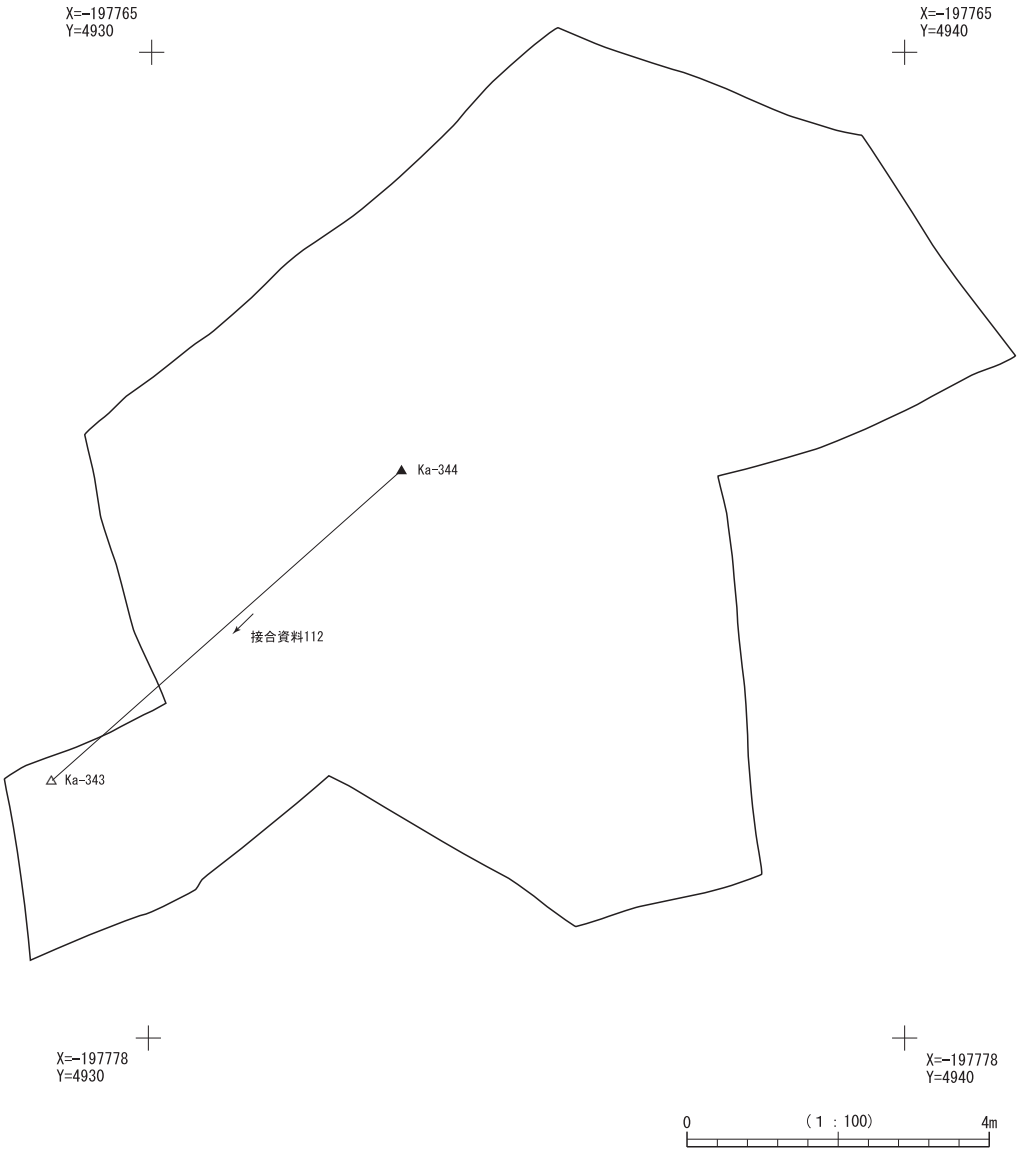
また、各弥生調査区の打製石器の分布は、Ａ区32点、Ｂ区263点、Ｃ区219点、Ｄ区40点、Ｅ区93点、Ｆ区６点の出土となっている。礫石器の分布は、Ａ区３点、Ｂ区６点、Ｃ区16点、Ｄ区２点、Ｅ区２点の出土となっており、Ｆ区からは出土していない。石製品の分布は、Ｂ区１点、Ｃ区２点のみの出土となっている。

各弥生調査区の石器組成については、Ａ区は二次加工のある剥片･剥片･石核･凹石･台石、Ｂ区は石鏃･二次加工のある剥片･微細剥離痕のある剥片･石核･磨石･磨＋凹･台石･縁辺に粗い条痕のある礫片、Ｃ区は石鏃･二次加工のある剥片･微細剥離痕のある剥片･剥片･石核･磨石･凹石･敲石･磨＋凹･磨＋敲･凹＋敲･磨＋凹＋敲･台石･礫器･筋砥石･縁辺に粗い条痕のある礫片、Ｄ区は微細剥離痕のある剥片･剥片･磨＋凹･磨＋敲の構成となっている。

これらの石器の分布･組成･接合状況と重ね合わせると、Ｃ区は剥片石器200点以上の集中域となっており、礫石器の分布で最も多く出土している調査区もＣ区である。他の調査区については極めて少ない。そして、剥片剥離作業に関わると推測される加工具の、敲石類（敲石･磨＋敲･凹＋敲･磨＋凹＋敲）を含み、石鏃･二次加工のある剥片･微細剥離痕のある剥片･剥片･石核を含むことから、剥片剥離作業から石器製作及び廃棄までの一連の作業の中心がＣ区で展開されていると推測される。敲石類を含まないものの、Ｂ区も石器の分布･組成がＣ区と類似しており、剥片石器の総数ではＣ区を上回る集中域となっていることから、同じく剥片剥離作業から石器製作及び廃棄までの一連の作業の中心であったと考えられる。Ｅ区の剥片石器は100点以下であり、剥片剥離作業に関わると推測される加工具が認められないが、石鏃･二次加工のある剥片･微細剥離痕のある剥片･剥片･石核を含むことから、石器製作及び廃棄を行っていたと考えられる。Ａ区の剥片石器も100点以下であり、剥片剥離作業に関わると推測される加工具は認められないが、二次加工のある剥片･剥片･石核を含むことから、石器製作及び廃棄を行っていたと考えられる。Ｄ区は剥片石器100点以下で石核も認められず、微細剥離痕のある剥片と剥片の構成となっている。Ｆ区は剥片石器６点と弥生調査区中もっとも希薄な分布であり、石核が認められず、剥片のみである。Ｄ･Ｆ区の剥片石器は廃棄されたものと考えられる。



第373図　弥生調査区接合資料出土地点分布図



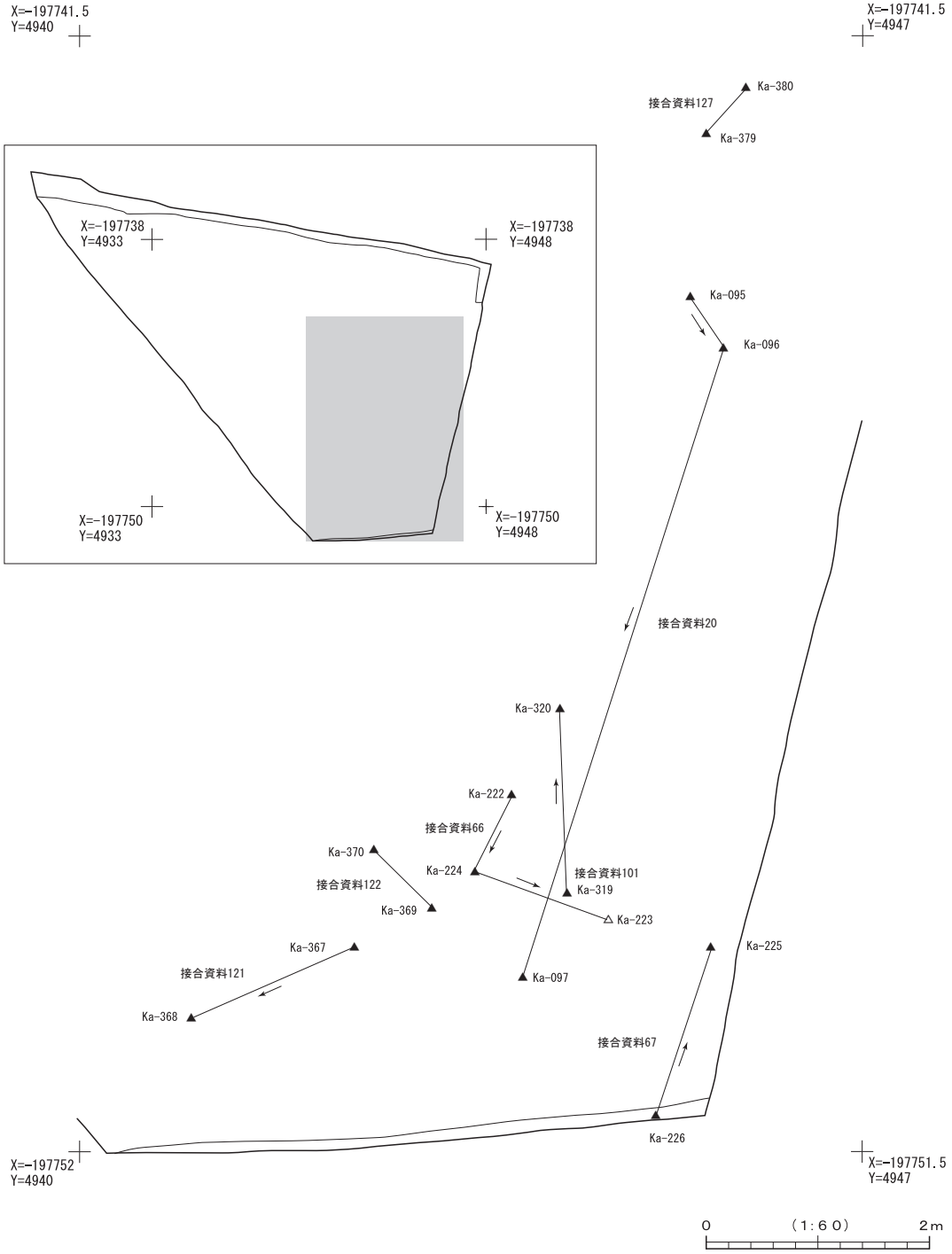
第374図　弥生Ｂ区接合資料出土地点分布図

接合資料１（第376図、写真図版148）

二次加工のある剥片１点と剥片１点の接合資料である。ともに自然面を打面とし、同一方向からの加撃によって剥離されている。１は垂直割れを起こしている剥片である。２は二次加工のある剥片Ⅲ類である。ともに古代の遺構内堆積土からの出土である。石材は流紋岩である。

接合資料２（第377図、写真図版148）

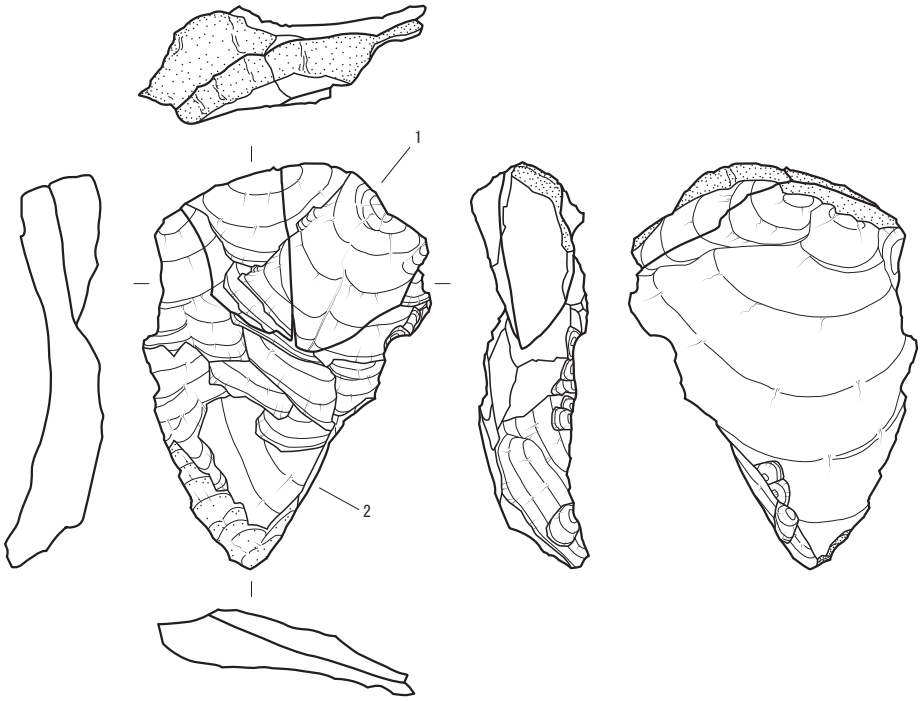
微細剥離痕のある剥片１点と剥片１点の接合資料である。ともに自然面を打面とし、同一方向からの加撃によって剥離されている。１は先行する剥離によって形成された稜線が伸びる方向に打撃を加えて剥離された微細剥離痕のある縦長剥片である。２の剥片は末端に自然面を残しており、石核の高さが確認できる。同時割れを起こしている。１は微細剥離痕のある剥片Ⅰ類である。１は古代の遺構内堆積土、２は古代の遺構検出面からの出土である。石材は流紋岩である。



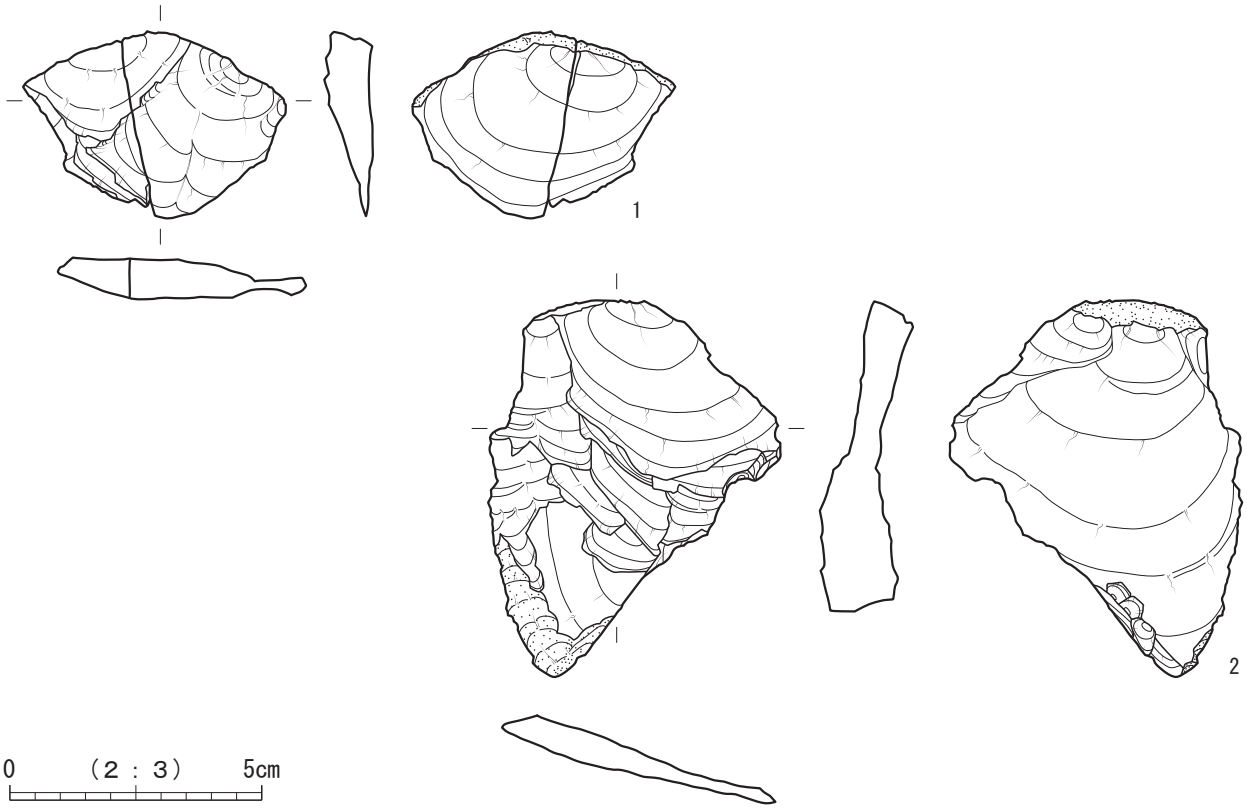
第375図　弥生Ｂ区接合資料出土地点分布図

接合資料３（第378図、写真図版148）

微細剥離痕のある剥片１点と剥片１点の接合資料である。ともに表面に自然面を残している。１は剥離面を打面として剥離された、微細剥離痕のある剥片である。２の剥片も同一方向からの加撃によって剥離されている。１は微細剥離痕のある剥片Ｉ類である。１は古代の遺構内堆積土、２は弥生Ｃ区からの出土である。石材は流紋岩である。

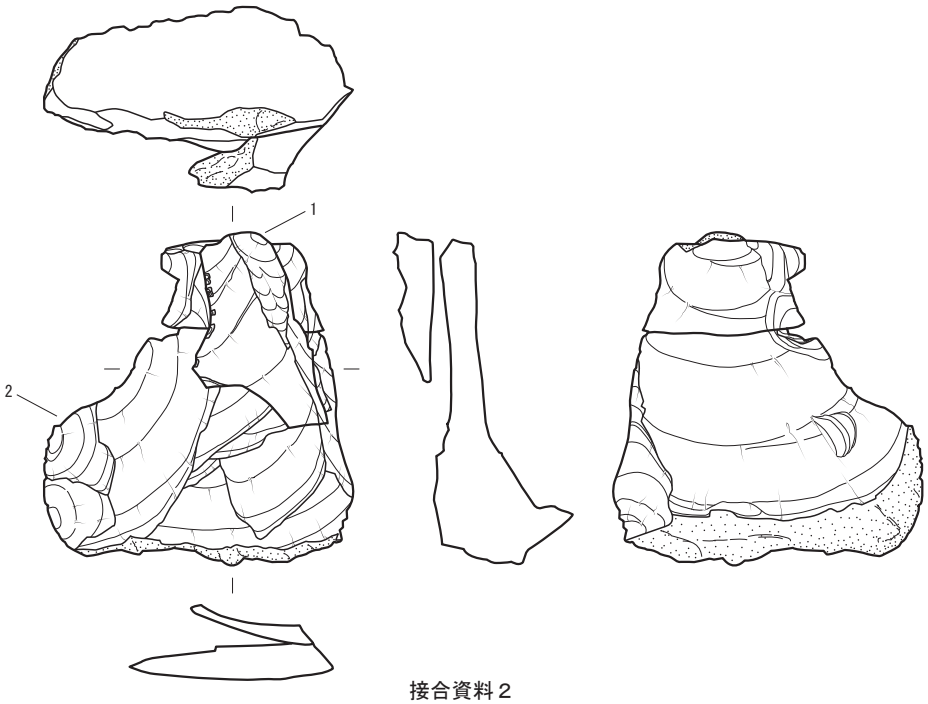


接合資料１

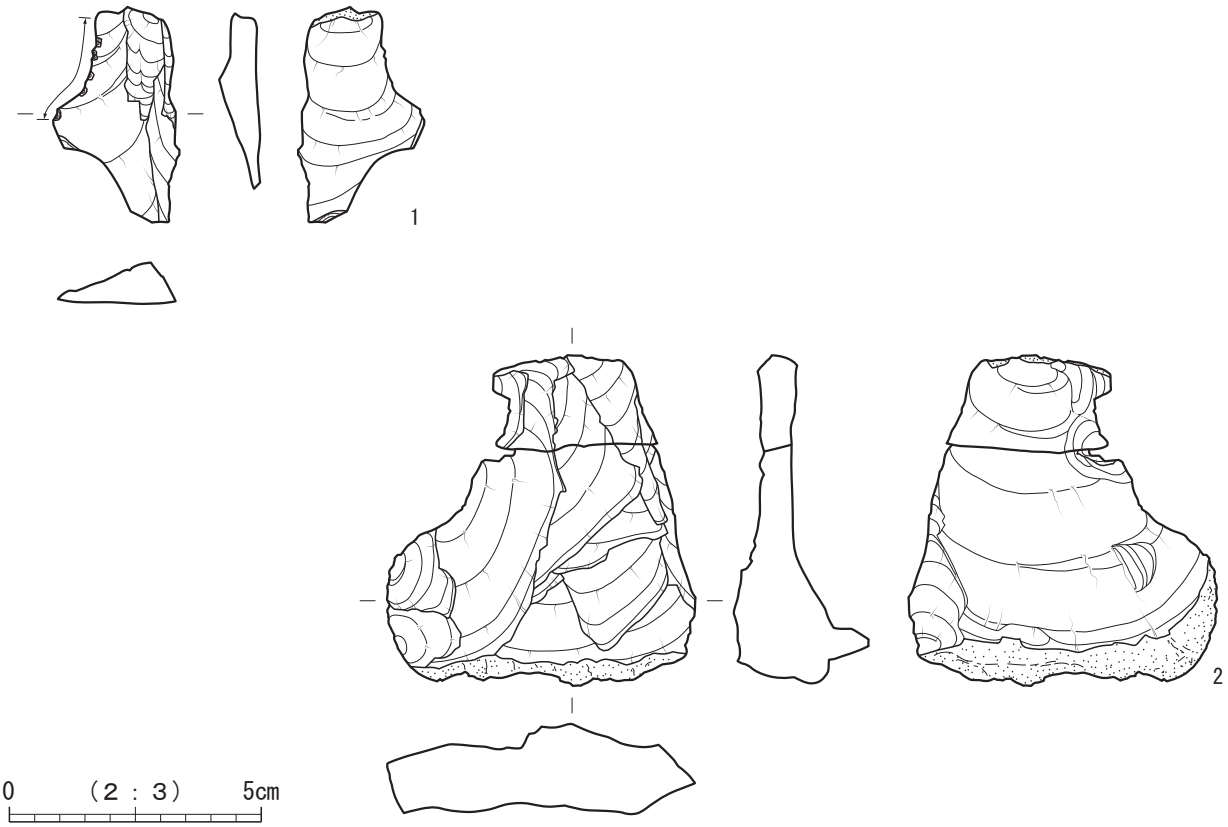


図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
1	Ka-039	-	SI82・堆積土	-	打製石器	剥片	-	3.7×5.0×0.9	8.98	流紋岩	接合資料1、Ka-040と垂直割れ面接合、自然面打面、剥離角115°、自然面あり	148
2	Ka-041	-	SI97A・堆積土	-	打製石器	二次加工のある剥片	Ⅲ	7.2×7.8×2.0	44.03	流紋岩	接合資料1、自然面打面、剥離角100°、表面＋裏面加工、自然面あり	148

第376図　接合資料（１）

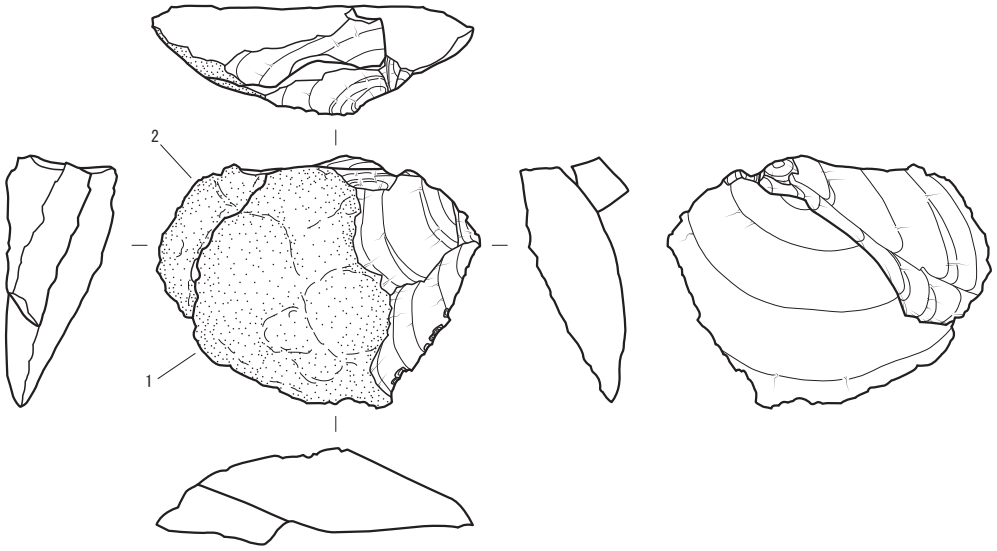


接合資料２

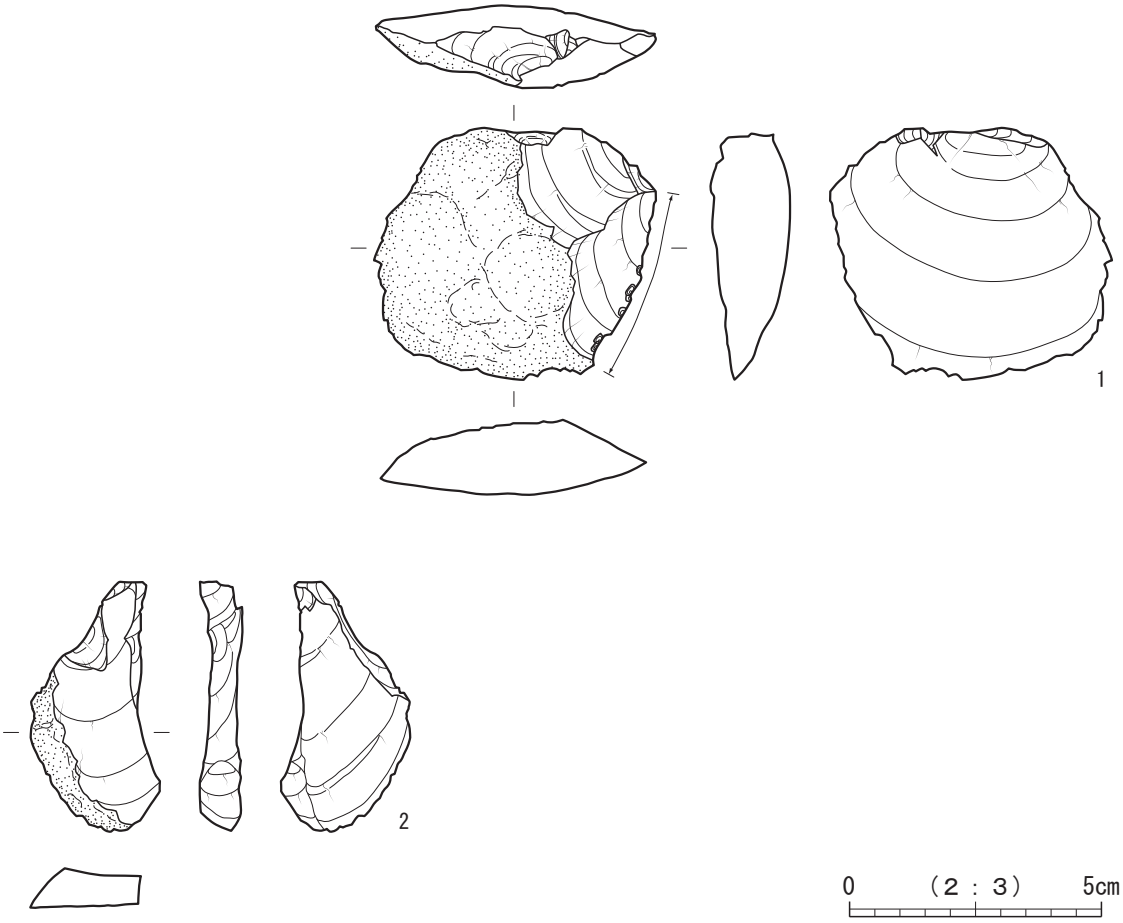


図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
1	Ka-043	-	SI99・堆積土	-	打製石器	微細剥離痕のある剥片	I	4.1×2.4×1.0	6.80	流紋岩	接合資料2、自然面打面、剥離角112°、1縁辺に微細剥離痕あり、自然面あり	148
2	Ka-042	-	遺構検出面	-	打製石器	剥片	-	6.6×6.1×2.7	5.28	流紋岩	接合資料2、自然面打面、剥離角111°、自然面あり	148

第377図　接合資料（２）

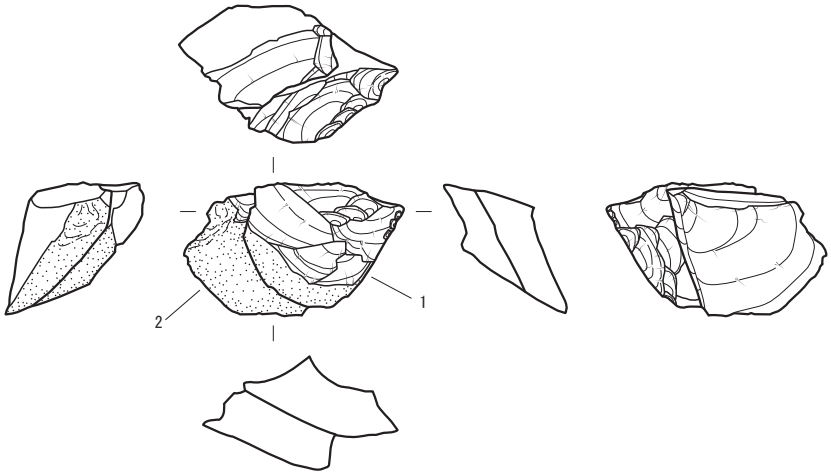


接合資料３

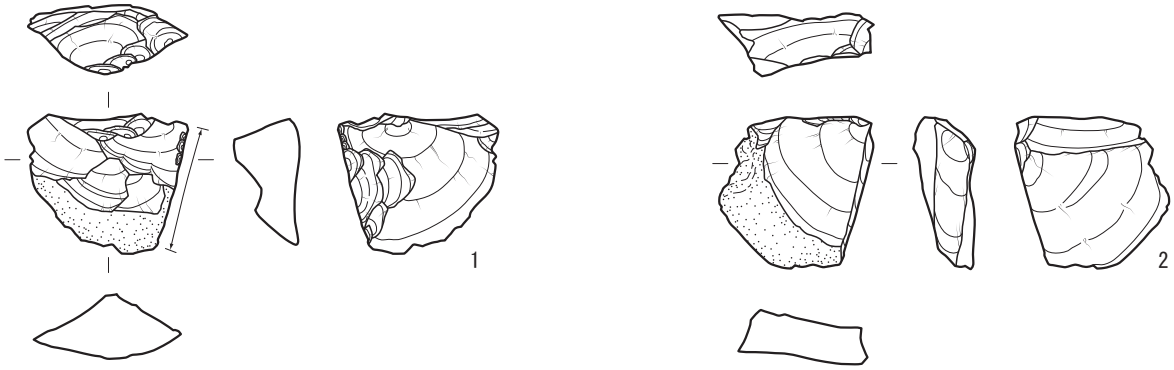


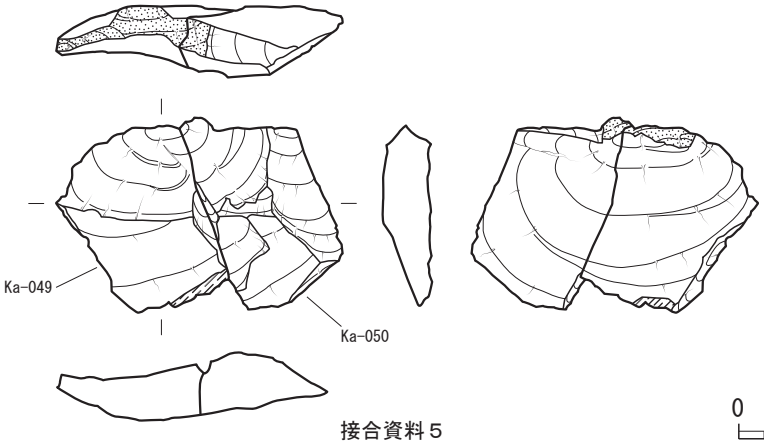
図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
1	Ka-045	-	SD66・堆積土	-	打製石器	微細剥離痕のある剥片	I	4.9×5.3×1.6	39.30	流紋岩	接合資料3、平坦打面、剥離角138°、1縁辺に微細剥離痕あり、自然面あり	148
2	Ka-046	C区	Ⅳ層	P32	打製石器	剥片	-	4.9×2.2×1.1	11.01	流紋岩	接合資料3、打面部欠損、自然面あり	148

第378図　接合資料(3)



接合資料４





接合資料５

0　（２：３）　5cm

図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
1	Ka-047	C区	Ⅳ層	-	打製石器	二次加工のある剥片	Ⅱ	2.7×3.2×1.3	8.71	流紋岩	接合資料4、打面部加工、剥離角132°、裏面加工、1縁辺に微細剥離痕あり、自然面あり	148
2	Ka-048	C区	Ⅳ層	-	打製石器	剥片	-	3.0×2.8×1.2	8.41	流紋岩	接合資料4、打面部欠損、自然面あり	148
	Ka-049	-	遺構検出面	-	打製石器	剥片	-	3.5×3.0×1.2	11.84	流紋岩	接合資料5、自然面打面、剥離角135°、自然面あり	148
	Ka-050	B区	Ⅳ層	S76	打製石器	微細剥離痕のある剥片	-	3.7×2.5×1.1	10.52	流紋岩	接合資料5、自然面打面、剥離角135°、1縁辺に微細剥離痕あり、自然面あり	148

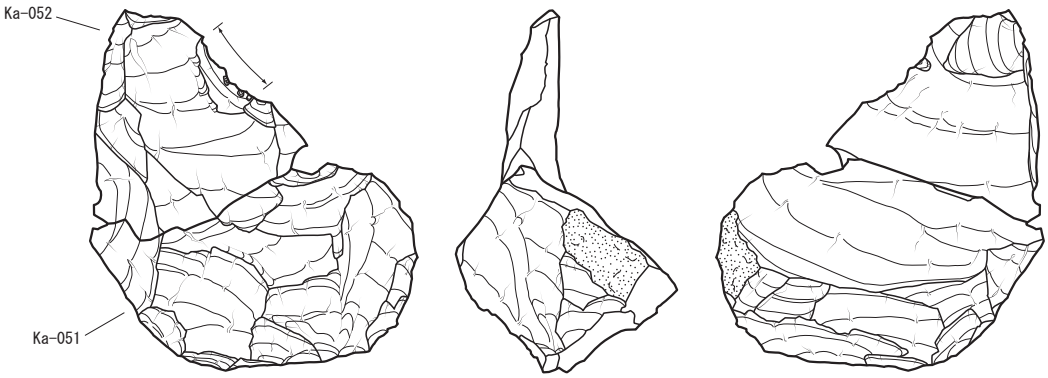
第379図　接合資料(4)

接合資料４（第379図、写真図版148）

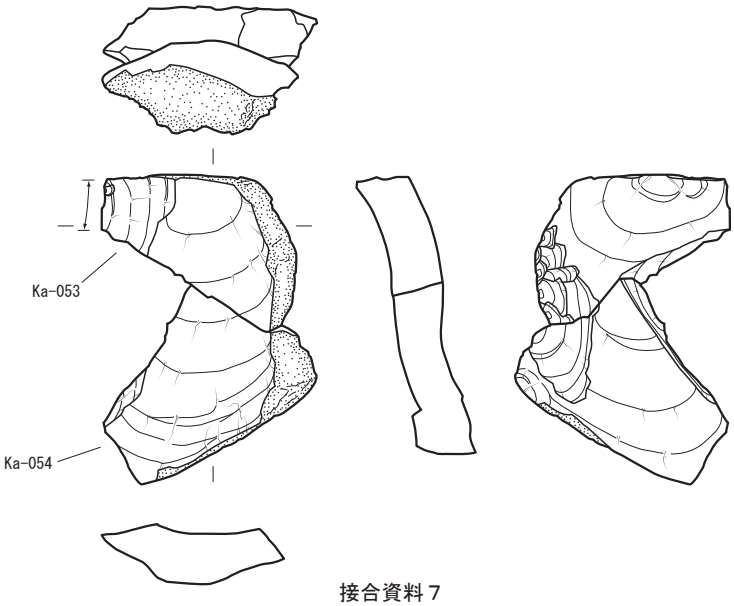
二次加工のある剥片１点と剥片１点の接合資料である。ともに表面に自然面を残している。２は垂直割れを起こしている。１は剥離面から成る面を打面として、剥離された剥片である。２の剥片も１の剥片と同一方向からの加撃によって剥離されている。１は二次加工のある剥片Ⅱ類である。１・２は弥生Ｃ区からの出土である。石材は流紋岩である。

接合資料５（第379図、写真図版148）

垂直割れを起こした剥片の接合資料である。自然面を打面としている。Ka-049は古代の遺構検出面、Ka-050は弥生Ｂ区からの出土である。石材は流紋岩である。



接合資料６

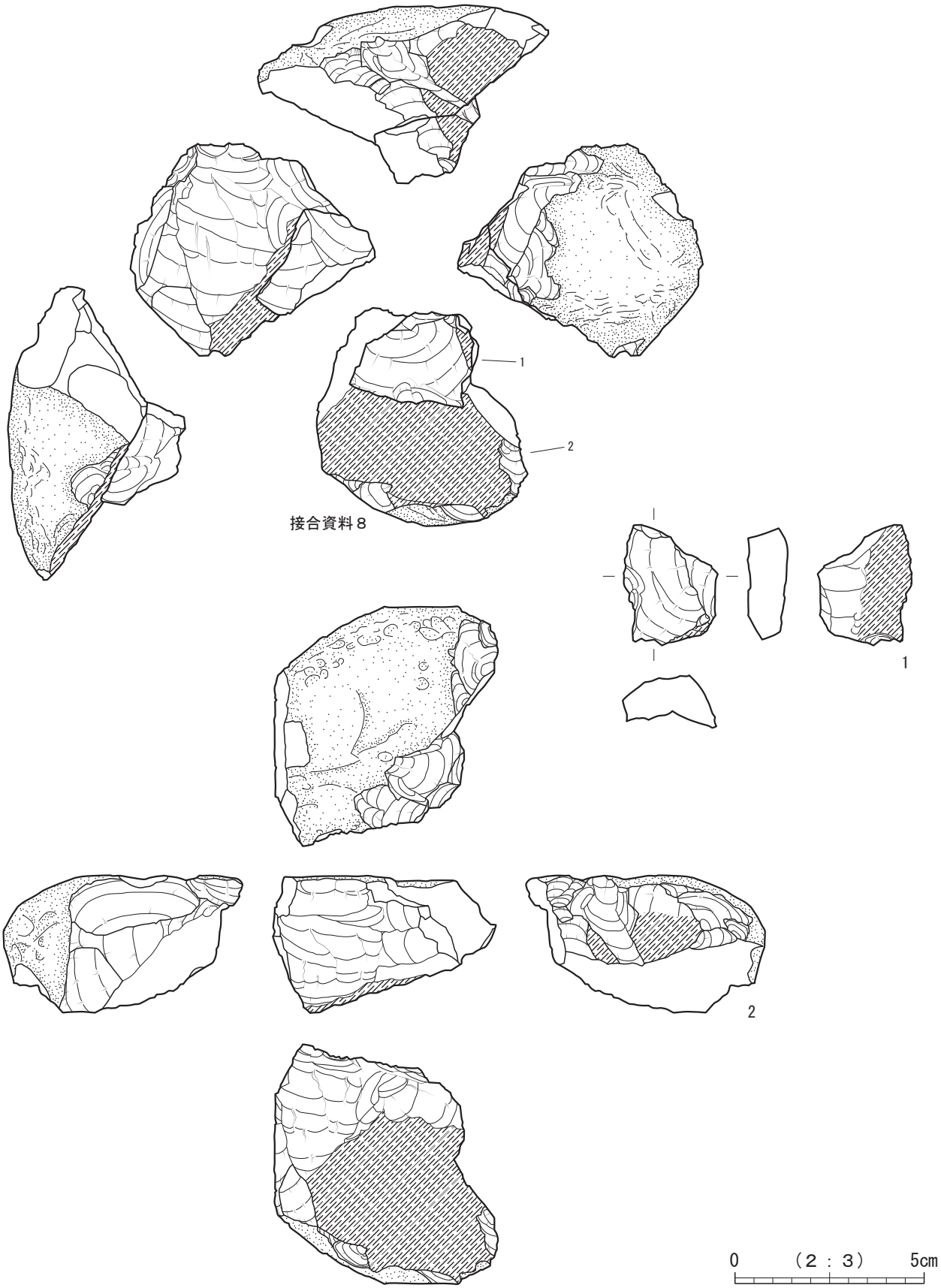


接合資料７

0　（２：３）　5cm

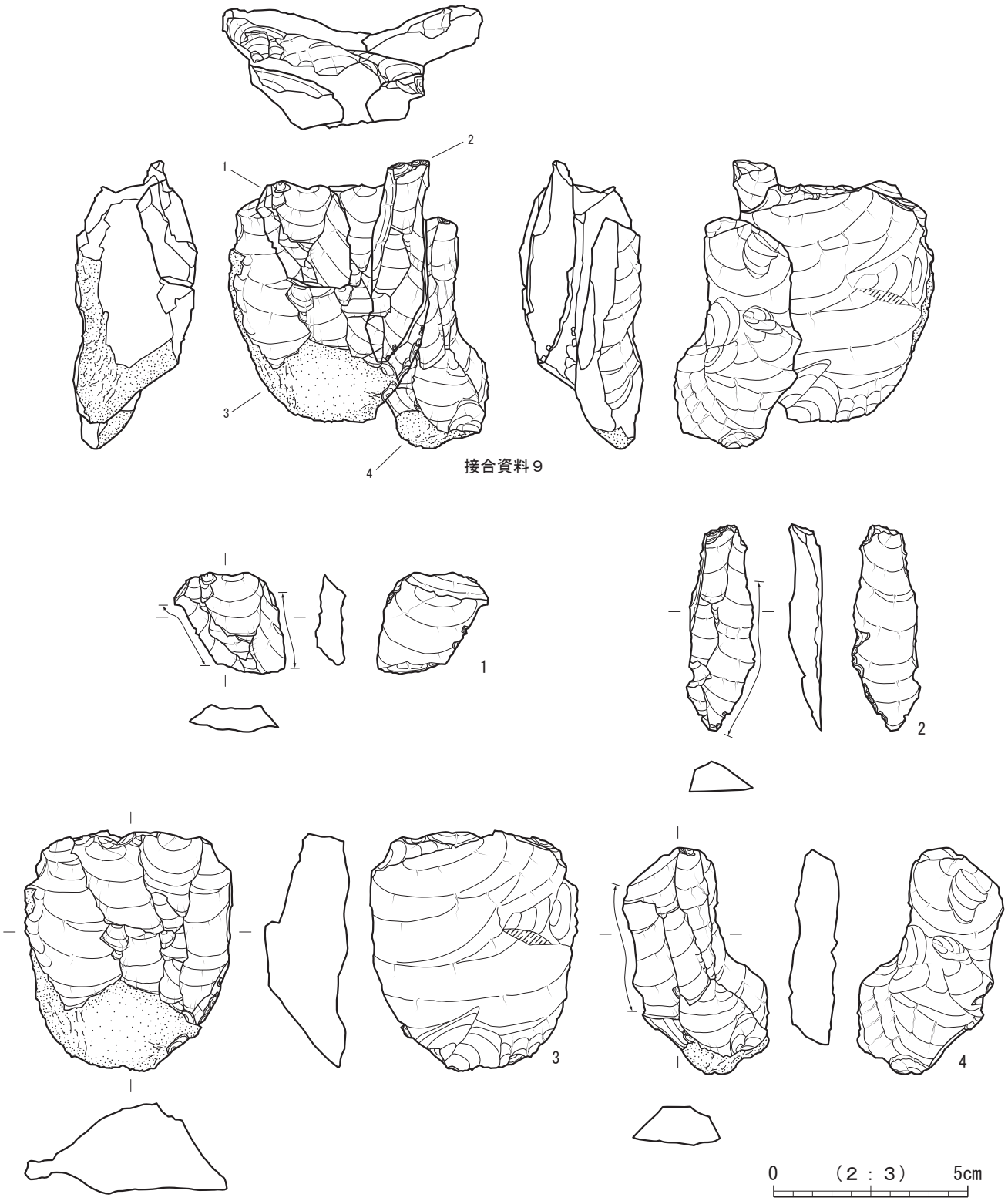
図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構･層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
	Ka-051	-	遺構検出面	-	打製石器	石核	-	3.7×2.5×3.1	77.11	流紋岩	接合資料6、礫素材、打面転移あり、自然面あり	148
	Ka-052	E区	Ⅳ層	S37	打製石器	剥片	-	4.9×4.4×1.3	17.98	流紋岩	接合資料4、打面部欠損、自然面あり	148
	Ka-053	-	遺構検出面	-	打製石器	二次加工のある剥片	Ⅱ	3.0×3.6×1.2	14.41	流紋岩	接合資料7、自然面打面、剥離角122°、裏面加工、1縁辺に微細剥離痕あり、自然面あり	148
	Ka-054	B区	Ⅳ層	S38	打製石器	二次加工のある剥片	Ⅱ	3.8×3.7×1.8	17.30	流紋岩	接合資料7、打面部欠損、裏面加工、自然面あり	148

第380図　接合資料(5)



図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
1	Ka-055	-	SI127・堆積土	-	打製石器	剥片	-	3.1×2.5×1.8	11.82	流紋岩	接合資料8、打面部欠損	148
2	Ka-056	B区	Ⅳ層	S2	打製石器	石核	-	3.6×5.7×5.9	121.69	流紋岩	接合資料8、礫素材、打面転移あり、自然面あり	148

第381図　接合資料(6)



図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
1	Ka-058	-	SI113・堆積土	-	打製石器	微細剥離痕のある剥片	Ⅱ	2.6×2.6×0.9	5.62	流紋岩	接合資料9、平坦打面、剥離角136°、複縁辺に微細剥離痕あり	149
2	Ka-060	B区	Ⅳ層	S25	打製石器	微細剥離痕のある剥片	Ⅰ	5.3×1.7×0.9	5.72	流紋岩	接合資料9、平坦打面、剥離角126°、1縁辺に微細剥離痕あり	149
3	Ka-059	-	SI126・堆積土	堆積土	打製石器	二次加工のある剥片	Ⅰ	6.1×5.3×2.4	66.86	流紋岩	接合資料9、打面部欠損、表面加工、自然面あり	149
4	Ka-057	-	遺構検出面	-	打製石器	微細剥離痕のある剥片	Ⅰ	5.6×3.4×1.3	22.35	流紋岩	接合資料9、平坦打面、剥離角131°、1縁辺に微細剥離痕あり、自然面あり	149

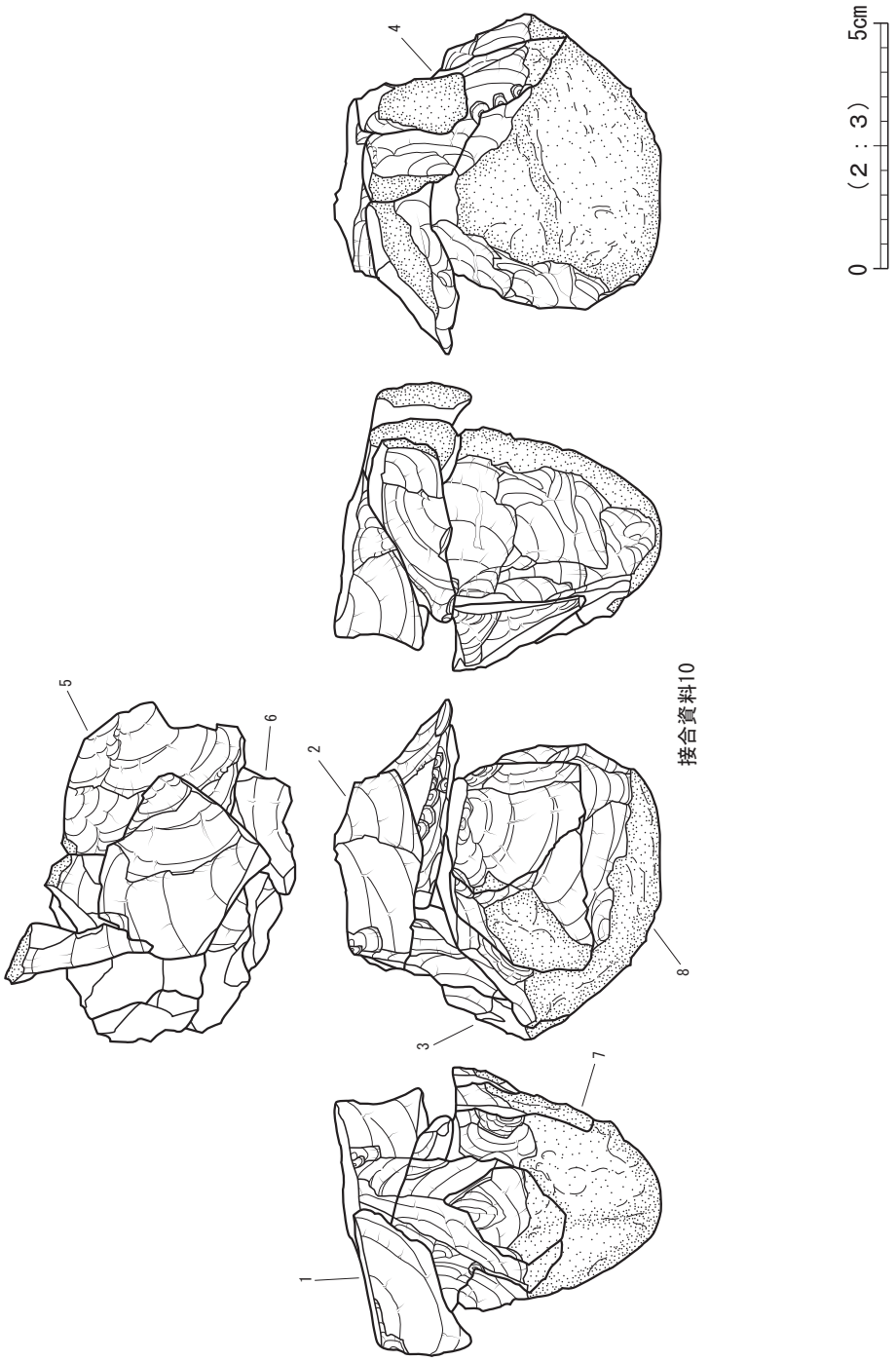
第382図　接合資料(7)

接合資料６（第380図、写真図版148）

同時割れを起こした剥片の接合資料である。石核の下端を剥ぎ取り、ウートラパッセが生じている。一縁辺に微細剥離痕が認められる。Ka-051は古代の遺構検出面、Ka-052は弥生Ｅ区からの出土である。石材は流紋岩である。

接合資料７（第380図、写真図版148）

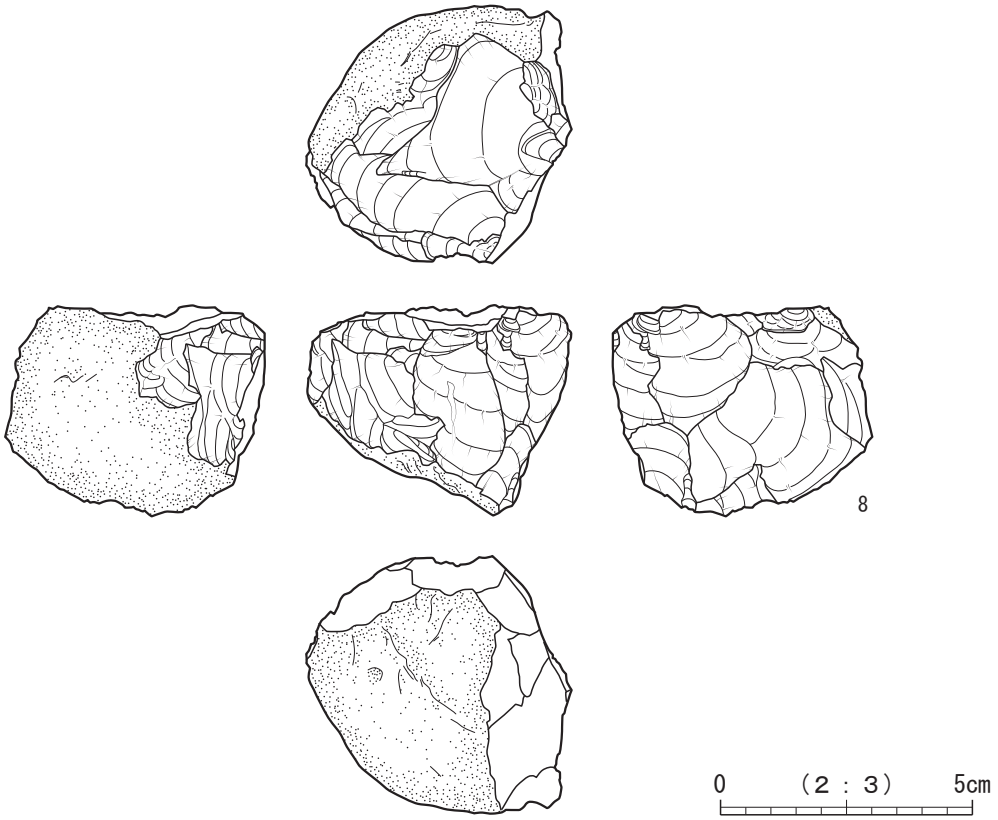
自然面を打面とした二次加工のある剥片の接合資料である。折面で接合している。二次加工のある剥片Ⅱ類であり、側縁への二次加工により折れたものである。Ka-053は古代遺構検出面、Ka-054は弥生Ｂ区からの出土である。石材は流紋岩である。



第383図　接合資料(8)

図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
1	Ka-064	-	遺構検出面	-	打製石器	剥片	-	3.1×1.8×4.8	4.79	流紋岩	接合資料10、自然面打面、剥離角113°、自然面あり	149
2	Ka-062	-	遺構検出面	-	打製石器	剥片	-	3.4×3.0×1.8	18.79	流紋岩	接合資料10、打面部欠損	149
3	Ka-061	-	遺構検出面	-	打製石器	剥片	-	2.6×1.7×0.8	2.84	流紋岩	接合資料10、打面部欠損、自然面あり	149
4	Ka-067	-	SI127・堆積土	-	打製石器	二次加工のある剥片	Ⅰ	3.9×4.0×1.4	17.29	流紋岩	接合資料10、自然面打面、剥離角104°、表面加工、自然面あり	149
5	Ka-063	-	遺構検出面	-	打製石器	二次加工のある剥片	Ⅲ	3.5×3.6×1.2	15.72	流紋岩	接合資料10、自然面打面、剥離角110°、表面＋裏面加工、自然面あり	149
6	Ka-068	B区	Ⅳ層	S35	打製石器	剥片	-	2.7×2.6×1.3	6.84	流紋岩	接合資料10、平坦打面、剥離角108°、自然面あり	149
7	Ka-066	-	SI126・堆積土	-	打製石器	剥片	-	2.8×3.1×0.8	5.82	流紋岩	接合資料10、平坦打面、剥離角115°、自然面あり	149

第384図　接合資料(9)



図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
8	Ka-065	-	遺構検出面	-	打製石器	石核	-	4.1×5.1×4.9	111.32	流紋岩	接合資料10、礫素材、打面転移あり、自然面あり	149

第385図　接合資料(10)

接合資料８（第381図、写真図版148）

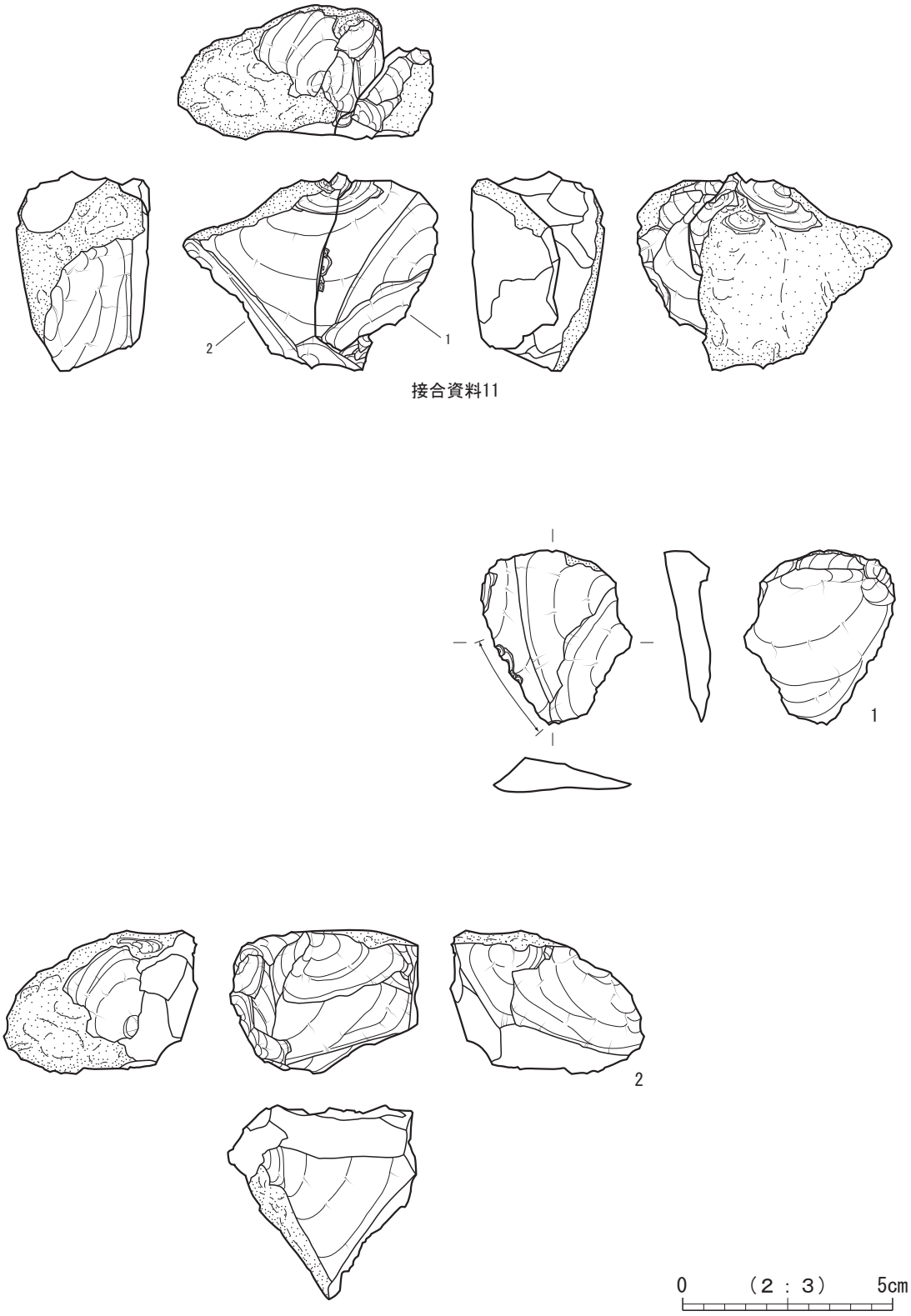
石核１点と剥片１点の接合資料である。２は分割礫素材の石核であり、自然面を多く残している。１は、節理面を介在して剥離されている。１は古代の遺構内堆積土、２は弥生Ｂ区からの出土である。石材は流紋岩である。

接合資料９（第382図、写真図版149）

二次加工のある剥片１点と微細剥離痕のある剥片３点の接合資料である。３・４は表面末端側に自然面を残している。１は剥離面から成る面を打面とし、先行する剥離によって形成された稜線が伸びる方向に打撃を加えて剥離された剥片である。２・３・４の剥片も同一方向からの加撃によって連続的に剥離されている。３は二次加工のある剥片Ⅰ類である。２・４は微細剥離痕のある剥片Ⅰ類であり、１は微細剥離痕のある剥片Ⅱ類である。１・３は古代の遺構内堆積土、２は弥生Ｂ区、４は古代の遺構検出面からの出土である。石材は流紋岩である。

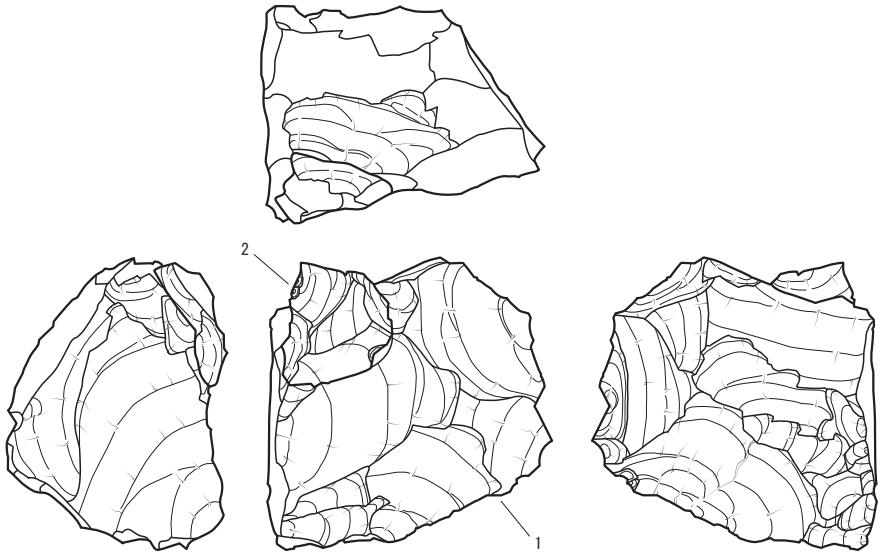
接合資料10（第383 ～ 385図、写真図版149）

石核１点、二次加工のある剥片２点、剥片５点の接合資料である。１・６・７・８は表面に自然面を残している。１は自然面を打面とし、剥離された剥片である。２は75°の打面転移が行われ、剥離面を打面とし、剥離された剥片である。３・４は75°の打面転移が行われ、自然面を打面とし、剥離された剥片である。５は90°作業面を移動し、自然面を打面とし、剥離された剥片である。６・７は90°の打面転移が行われ、剥離面を打面とし、剥離された剥片である。８は石核である。以上のように頻繁に打面転移が行われた剥離作業であることがわかる。４は二次加工のある剥片Ⅰ類であり、５は二次加工のある剥片Ⅲ類である。１・２・３・５・８は古代の遺構検出面、４・７は古代の遺構内堆積土、６は弥生Ｂ区からの出土である。石材は流紋岩である。

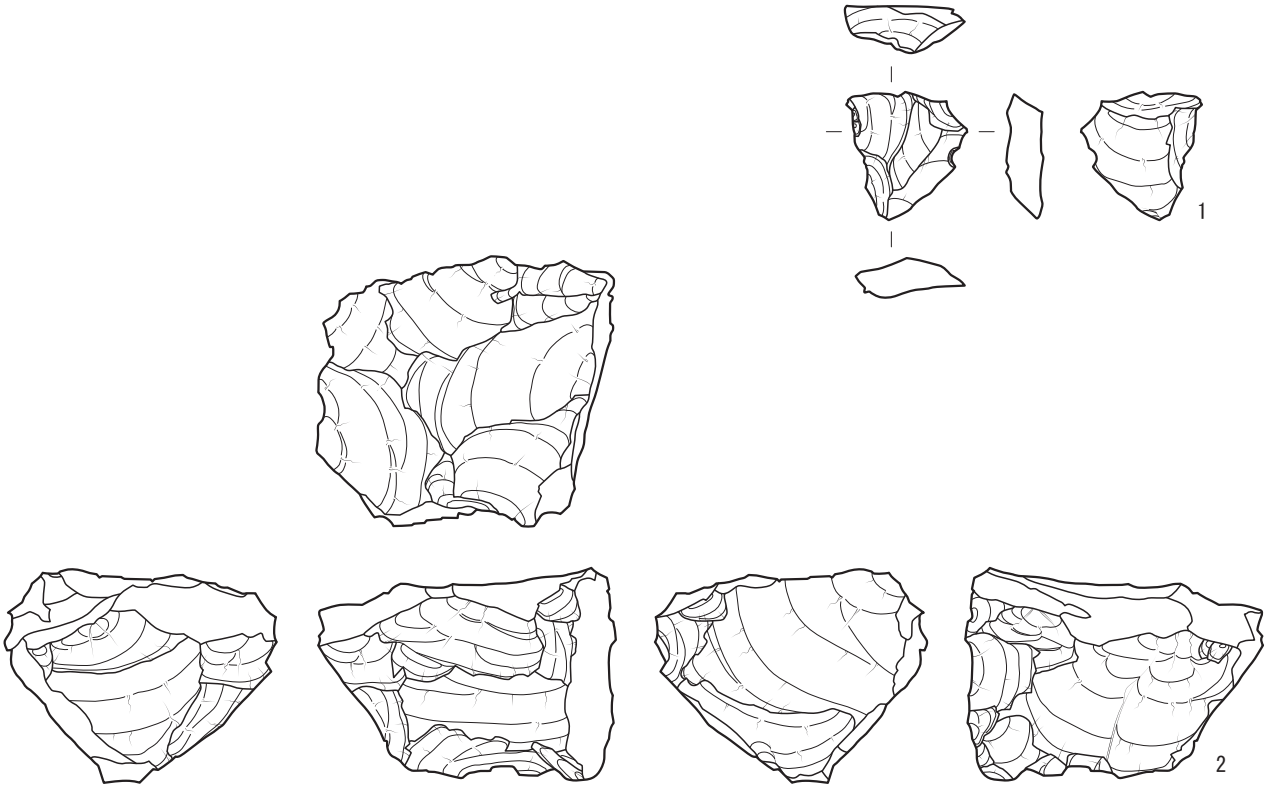


図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
1	Ka-070	-	遺構検出面	-	打製石器	微細剥離痕のある剥片	I	4.2×3.3×1.4	14.21	流紋岩	接合資料11、平坦打面、剥離角128°、1縁辺に微細剥離痕あり、自然面あり	149
2	Ka-069	-	遺構検出面	-	打製石器	石核	-	3.4×4.4×4.3	61.00	流紋岩	接合資料11、礫素材、打面転移あり、自然面あり	149

第386図　接合資料(11)



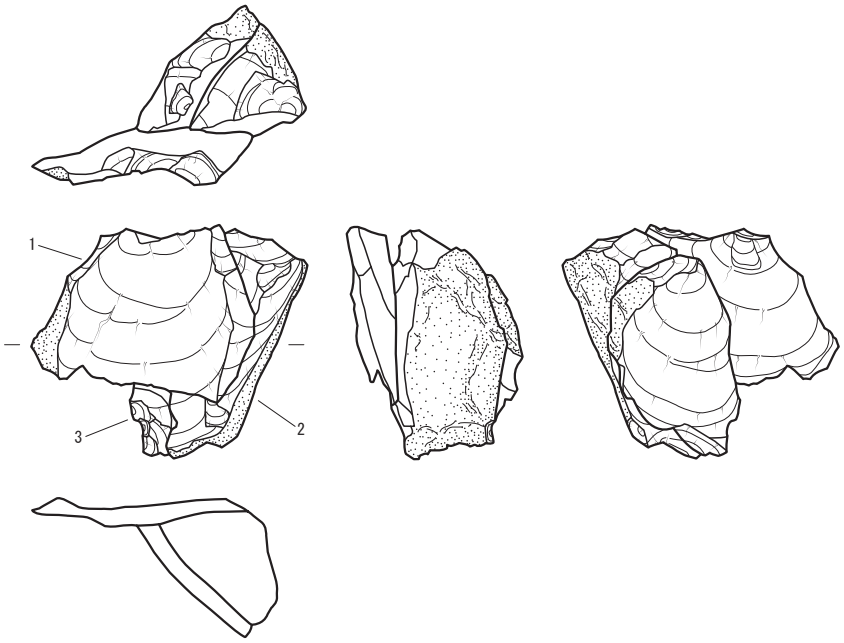
接合資料12



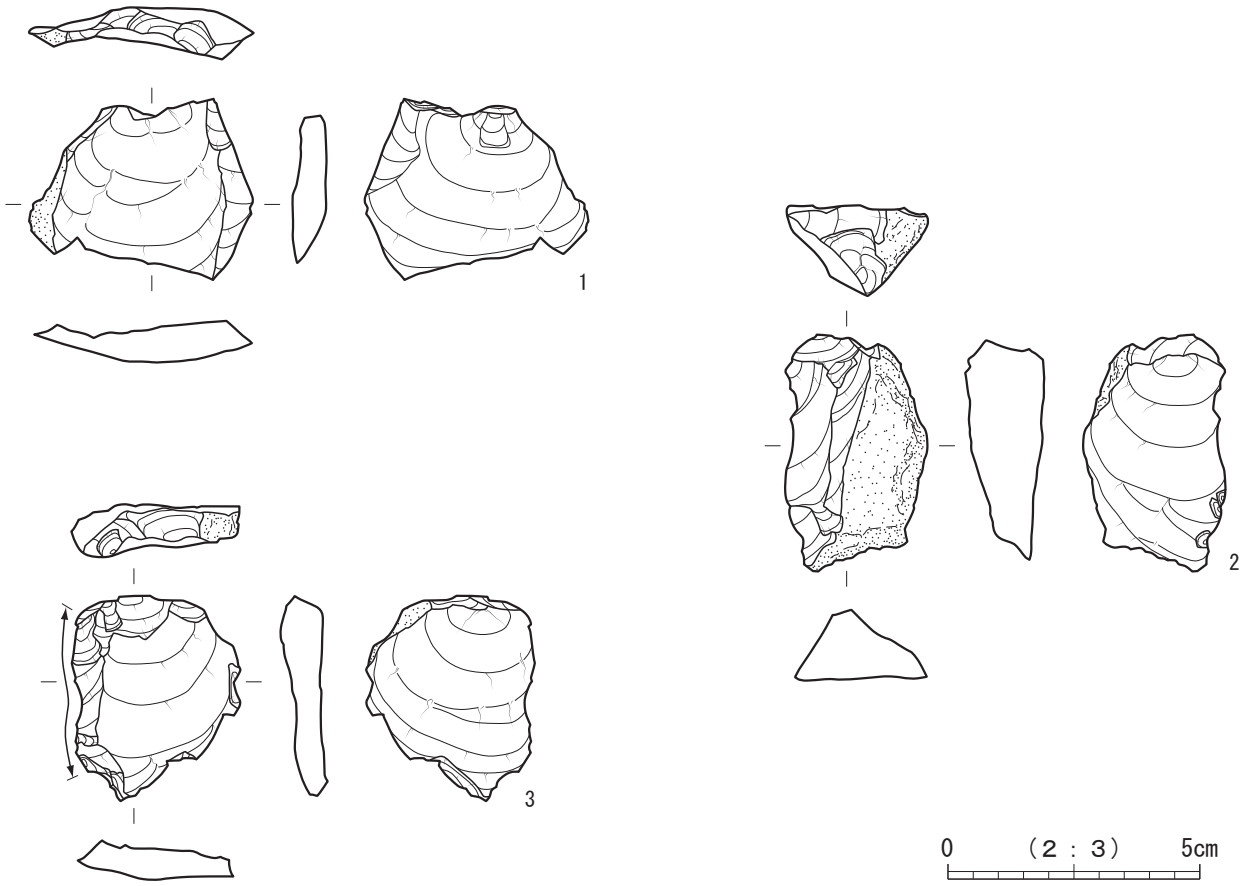
0　（2：3）　5cm

図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
1	Ka-071	-	SD42・堆積土	-	打製石器	二次加工のある剥片	I	2.5×2.2×0.9	3.67	流紋岩	接合資料12、平坦打面、剥離角122°、表面加工	150
2	Ka-072	-	SI113・堆積土	-	打製石器	石核	-	4.2×5.8×5.3	127.17	流紋岩	接合資料12、素材不明、打面転移あり	150

第387図　接合資料(12)



接合資料13



図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
1	Ka-075	B区	Ⅳ層	-	打製石器	剥片	-	3.6×4.4×0.9	10.46	流紋岩	接合資料13、切子打面、剥離角116°、自然面あり	150
2	Ka-073	-	SD64・堆積土	-	打製石器	二次加工のある剥片	Ⅱ	4.7×2.7×1.7	18.06	流紋岩	接合資料13、平坦打面、剥離角126°、裏面加工、自然面あり	150
3	Ka-074	-	SI92・堆積土	-	打製石器	微細剥離痕のある剥片	Ⅰ	4.0×3.3×1.0	11.11	流紋岩	接合資料13、切子打面、剥離角126°、1縁辺に微細剥離痕あり、自然面あり	150

第388図　接合資料(13)

接合資料11（第386図、写真図版149）

石核１点と微細剥離痕のある剥片１点の接合資料である。１の剥片は、分割礫素材の石核である２から剥ぎ取ったものである。１・２は古代の遺構検出面からの出土である。石材は流紋岩である。

接合資料12（第387図、写真図版150）

石核１点と剥片１点の接合資料である。２の石核には多方向からの剥離が確認され、打面転移が頻繁に行われている。１は二次加工のある剥片Ⅰ類である。１・２は古代の遺構内堆積土からの出土である。石材は流紋岩である。

接合資料13（第388図、写真図版150）

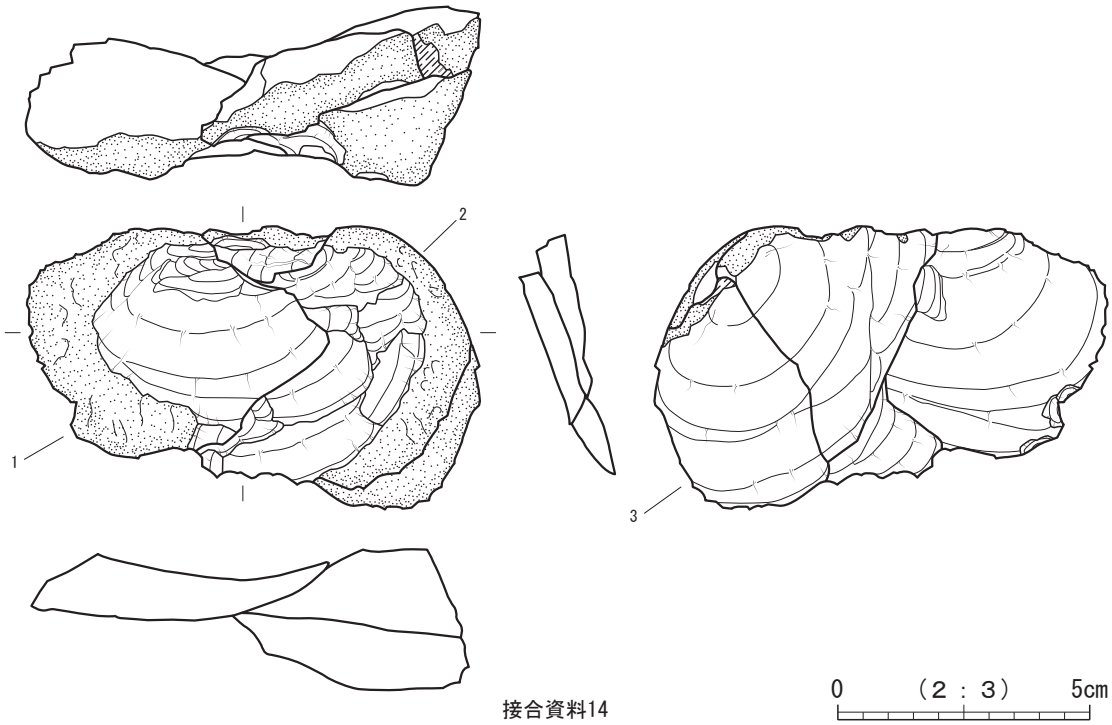
剥片３点の接合資料である。１・２は表面に自然面を残している。１は剥離面と自然面から成る面を打面とし、先行する剥離と同一の方向に打撃を加えて剥離されている。２・３の剥片も同一方向からの加撃によって連続的に剥離されている。２は二次加工のある剥片Ⅱ類であり、３は微細剥離痕のある剥片Ⅰ類である。１は弥生Ｂ区、２・３は古代の遺構内堆積土からの出土である。石材は流紋岩である。

接合資料14（第389・390図、写真図版150）

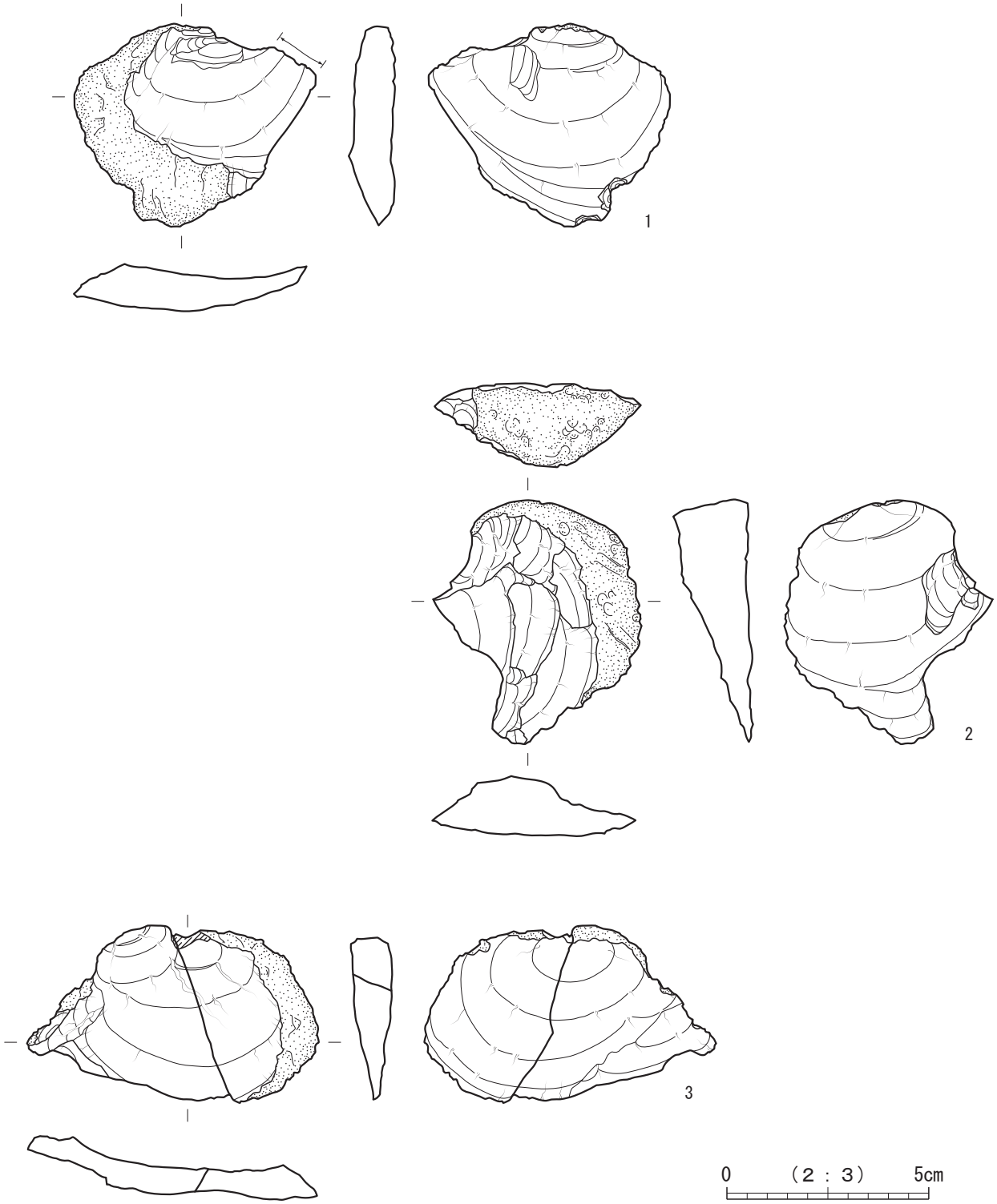
剥片３点の接合資料である。１～３は自然面を打面として、連続的に剥離されている。３は垂直割れを起こしている。１は微細剥離痕のある剥片Ⅰ類である。１～３は古代の遺構内堆積土からの出土である。石材は流紋岩である。

接合資料16（第391図、写真図版150）

剥片３点の接合資料である。１は表面の右側縁に、２と３は左側縁に自然面を残している。１は自然面を打面とし、剥離された剥片である。２は180°の打面転移が行われ、剥離面を打面とし、剥離された剥片である。同時割れを起こしている。３は90°の打面転移が行われ、節理面を打面とし、剥離された剥片である。２は、微細剥離痕のある剥片Ⅰ類である。１～３は古代の遺構検出面からの出土である。石材は流紋岩である。

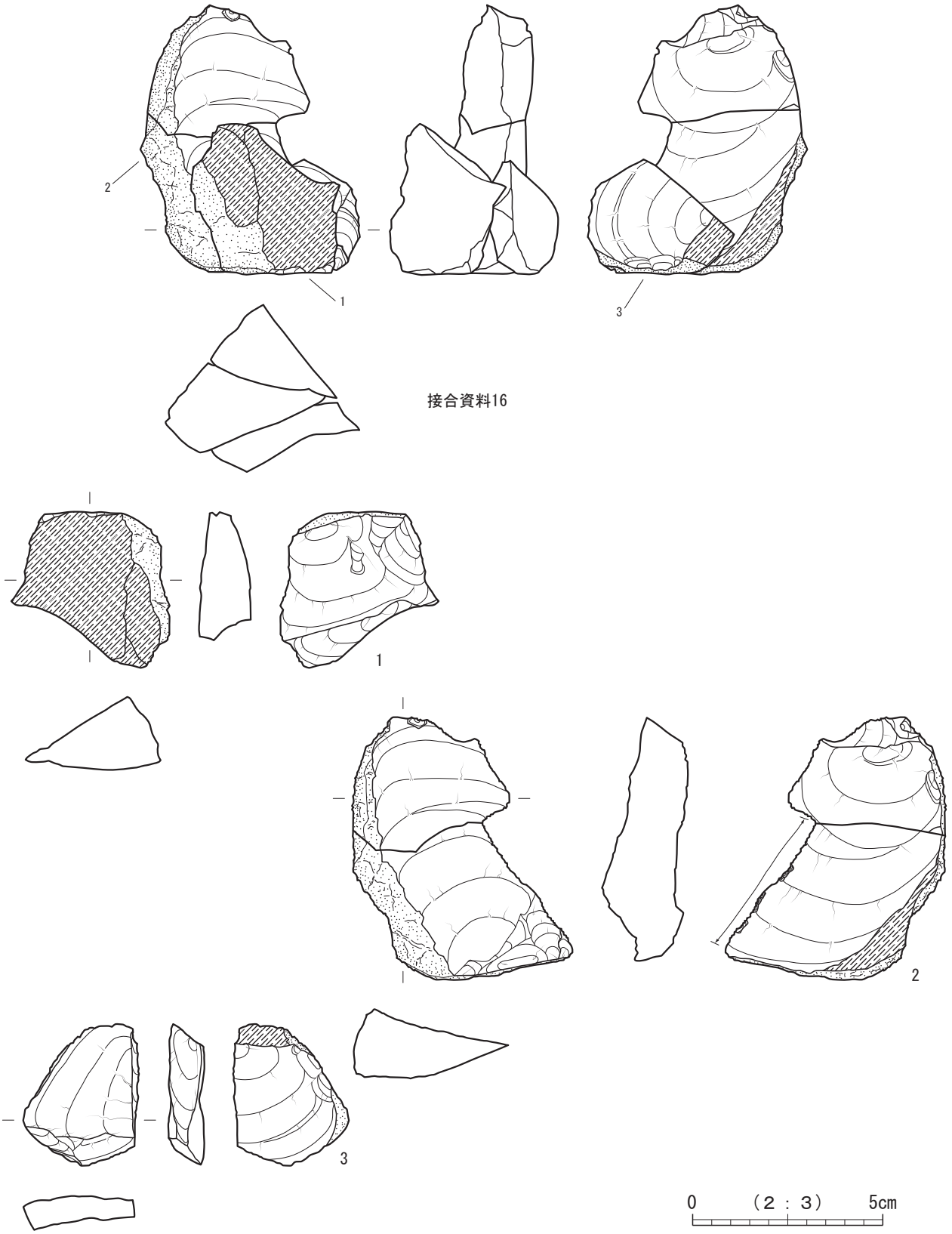


第389図　接合資料（14）



図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
1	Ka-079	-	SI99・堆積土	-	打製石器	微細剥離痕のある剥片	I	5.0×5.9×1.3	30.84	流紋岩	接合資料14、自然面打面、剥離角109°、1縁辺に微細剥離痕あり、自然面あり	150
2	Ka-078	-	SI113・堆積土	-	打製石器	剥片	-	6.0×5.1×2.0	41.40	流紋岩	接合資料14、自然面打面、剥離角106°、自然面あり	150
3	Ka-076	-	SI113・堆積土	-	打製石器	剥片	-	4.2×7.2×1.0	17.93	流紋岩	接合資料14、自然面打面、剥離角131°、自然面あり	150

第390図　接合資料(15)



図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
1	Ka-085	-	遺構検出面	-	打製石器	剥片	-	4.0×4.1×2.1	26.00	流紋岩	接合資料16、自然面打面、剥離角120°、自然面あり	150
2	Ka-082	-	遺構検出面	-	打製石器	微細剥離痕のある剥片	I	6.7×4.7×1.0	64.07	流紋岩	接合資料16、平坦打面、剥離角130°、1縁辺に微細剥離痕あり、自然面あり	150
3	Ka-083	-	遺構検出面	-	打製石器	剥片	-	3.6×2.9×0.9	10.29	流紋岩	接合資料16、平坦打面、剥離角132°、自然面あり	150

第391図　接合資料(16)

接合資料17（第392・393図、写真図版151）

二次加工のある剥片１点、微細剥離痕のある剥片１点、剥片１点の接合資料である。１・２は表面に自然面を残している。３は折れ面で接合したものである。１・２は剥離面を打面とし、剥離された剥片である。１・２は連続的に剥離された剥片であり、３は作業面を移動して剥離された二次加工のある剥片Ⅲ類である。１は厚手の剥片であり、微細剥離痕のある剥片Ⅰ類、３は二次加工のある剥片Ⅲ類である。１は弥生Ｄ区、２・３は弥生Ｃ区からの出土である。石材は流紋岩である。

接合資料18（第394図、写真図版151）

剥片２点の接合資料である。ともに表面に自然面を残している。Ka-091は自然面を打面とし、剥離された剥片である。Ka-090の剥片も同一方向からの加撃によって剥離されているが、打面側を失っている。Ka-091は古代の遺構内堆積土、Ka-090は弥生Ｃ区ＳＸ１からの出土である。石材は流紋岩である。

接合資料19（第394図、写真図版151）

微細剥離痕のある剥片２点の接合資料である。ともに表面に自然面を残している。１は剥離面を打面とし、剥離された剥片である。２の剥片は90°の打面転移が行われ、１と異なる剥離面を打面として、剥離されている。ともに微細剥離痕のある剥片Ⅰ類である。１・２は古代の遺構検出面から出土している。石材は流紋岩である。

接合資料20（第395図、写真図版151）

剥片４点の接合資料である。１・３・４は表面下端に自然面を残している。１の剥片は打面を失っている。２は１と同一方向から剥離されているが、３は打面を180°転移して剥離されている。４はさらに打面を90°転移して、１・２と３の剥離によって形成された稜が延びる方向に打撃を加えて剥離されている。１は古代の遺構内堆積土、２は弥生Ｃ区ＳＸ１、３・４は弥生Ｃ区からの出土である。石材は流紋岩である。

接合資料21（第396図、写真図版152）

微細剥離痕のある剥片１点と剥片１点の接合資料である。ともに表面の左側縁に自然面を残している。１は剥離面を打面とし、剥離された剥片である。２の剥片は同一方向からの加撃によって剥離されているが、打面側を欠損する。２は微細剥離痕のある剥片Ⅰ類である。１は弥生Ｂ区、２は古代の遺構内堆積土からの出土である。石材は流紋岩である。

接合資料22（第397図、写真図版152）

石核１点と剥片１点の接合資料である。ともに一部分に自然面を残している。１は剥離面を打面とし、剥離された剥片である。２は剥離面に覆われた残核状の石核である。１は弥生Ｂ区、２は弥生Ｅ区からの出土である。石材は流紋岩である。

接合資料23（第398～400図、写真図版152）

石核１点、微細剥離痕のある剥片３点、剥片５点の接合資料である。１・２と３～９は分割後別々の個体として剥片剥離がなされている。１・２はともに表面の右側に自然面を大きく残し、３～８は表面の上端面に自然面を残している。９は表面の左側縁側に自然面が残存する。１・２は平坦剥離面を打面とし、剥離された剥片である。３～８は自然面を打面とし、剥離された剥片である。９は90°の打面転移が行われ、剥離面から成る面を打面とし、剥離された剥片である。１・２・９は微細剥離痕のある剥片Ⅰ類である。１・４は古代の遺構検出面、２・３・５～８は古代の遺構内堆積土、９は弥生Ｂ区からの出土である。石材は流紋岩である。

接合資料24（第401図、写真図版153）

剥片２点の接合資料である。１は表面の右側縁側に自然面を残し、２の表面の左側縁側にも自然面が残されている。ともに剥離面を打面としており、１を剥離し、それによって形成された面を打面として90°の打面転移が行われている。２は打面転移後に剥離されている。１・２は古代の遺構検出面からの出土である。石材は流紋岩である。

接合資料25（第402図、写真図版153）

剥片３点の接合資料である。１・２は表面の中央から右側縁側に広がる自然面を残し、３は表面の中央から左側縁側に自然面を残している。１は剥離面と自然面によって構成される面を打面とし、剥離された剥片である。２は90°の打面転移が行われ、剥離面を打面とし、剥離された剥片である。３はさらに90°の打面転移が行われ、剥離面を打面としている。１・２は弥生Ｅ区、３は弥生Ｂ区からの出土である。石材は流紋岩である。

接合資料26（第403図、写真図版153）

二次加工のある剥片１点と垂直割れを起こした剥片の接合資料である。ともに自然面を打面としている。１は、２より先に剥ぎ取ったものであり、二次加工のある剥片Ⅰ類である。１は弥生Ｂ区ＳＫ42･43、２は古代の遺構検出面からの出土である。石材は流紋岩である。

接合資料27（第404図、写真図版153）

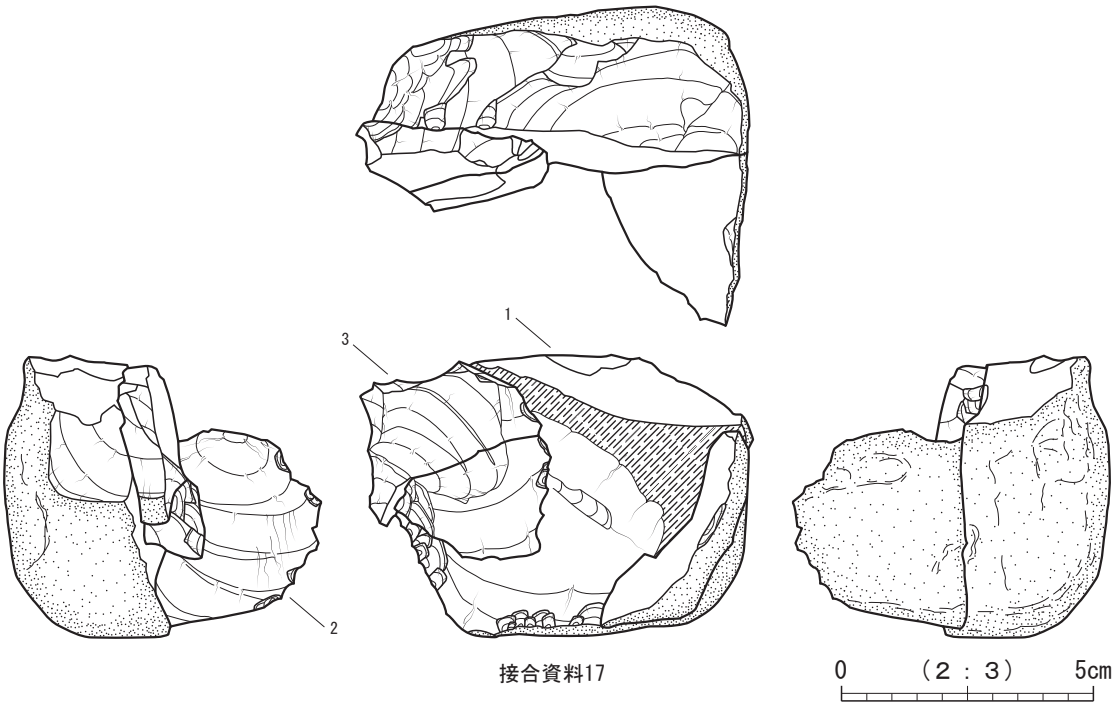
剥片２点の接合資料である。剥離面を打面とし、１を剥離している。90°の打面転移が行われ、剥離面から成る面を打面とし、２を剥離している。１は古代の遺構検出面、２は弥生Ｂ区からの出土である。石材は流紋岩である。

接合資料28（第405図、写真図版154）

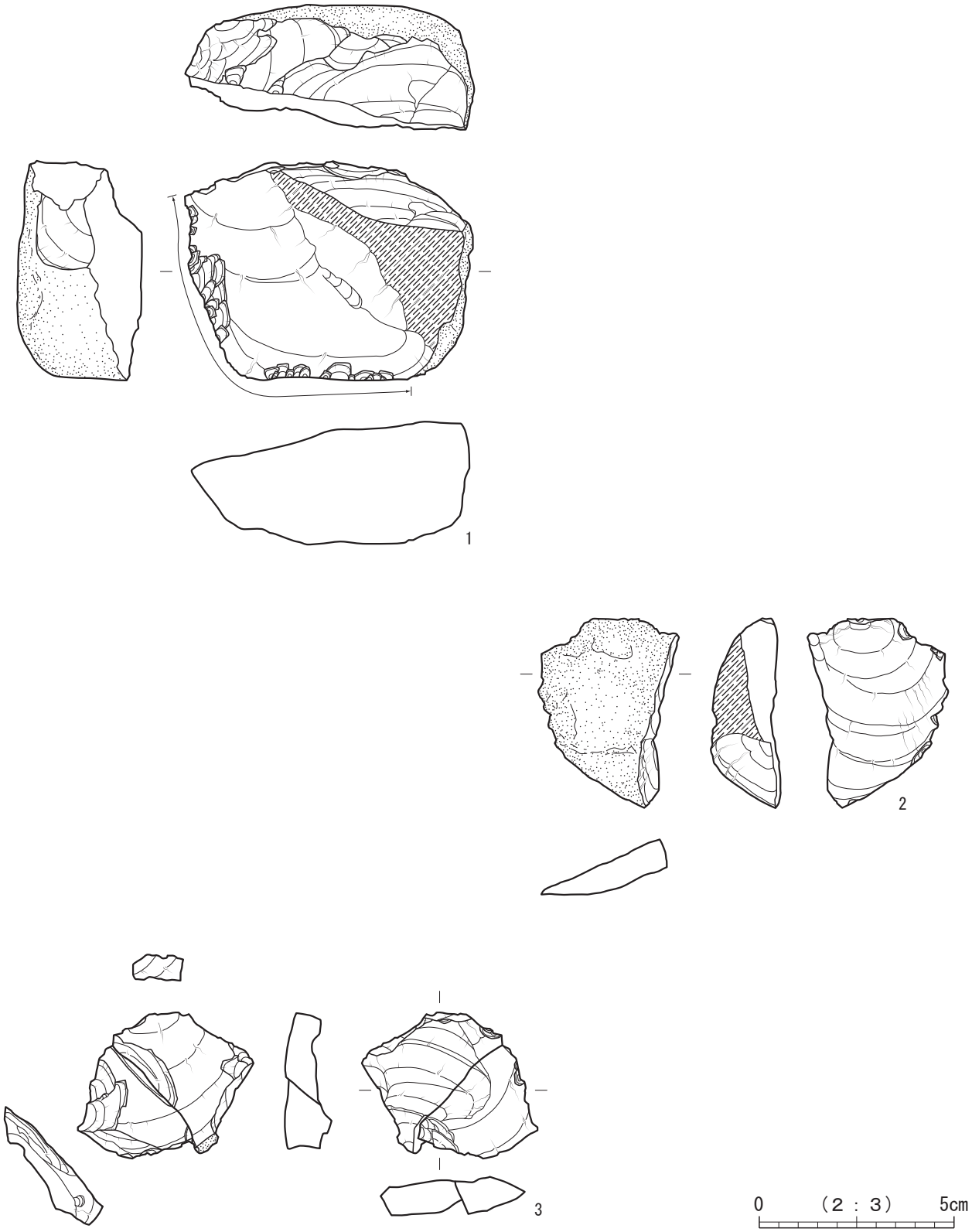
剥片２点の接合資料である。ともに表面の左側縁側に自然面を残している。１は剥離面と自然面から成る面を打面とし、表面右方向からの剥離によって形成された稜線が伸びる方向に打撃を加えて剥離された縦長剥片である。２の剥片も同一方向からの加撃によって剥離されている。１は弥生Ｅ区、２は古代の遺構検出面からの出土である。石材は流紋岩である。

接合資料29（第406図、写真図版154）

石核１点と剥片３点の接合資料である。３は、垂直割れを起こしている。１は自然面を打面とし、剥離された剥片である。２は180°の打面転移が行われ、剥離面から成る面を打面とし、剥離された剥片である。３は再度180°の打面転移が行われ、剥離面を打面とし、剥離された剥片である。１・３・４は弥生Ａ区、２は古代の遺構検出面からの出土である。石材は流紋岩である。

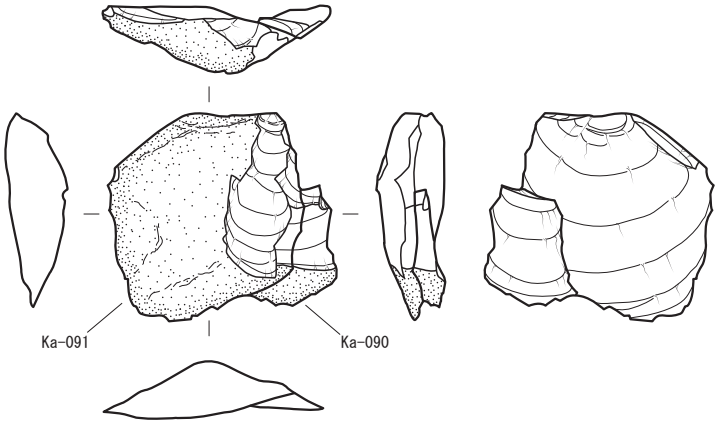


第392図　接合資料(17)

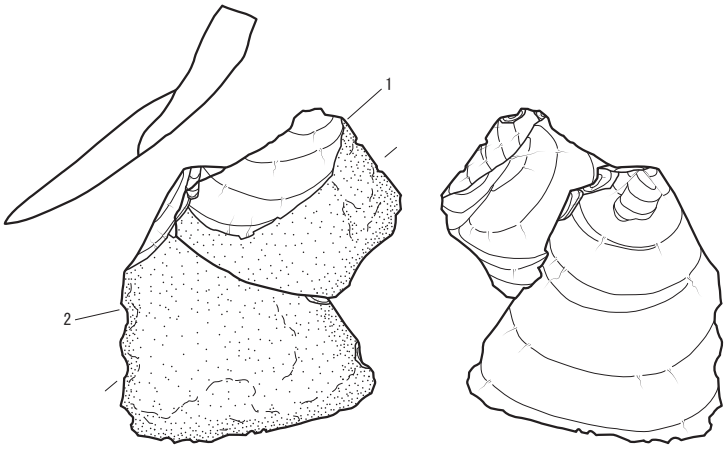


図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
1	Ka-086	D区	Ⅳ層	-	打製石器	微細剥離痕のある剥片	Ⅰ	5.6×7.3×3.2	164.19	流紋岩	接合資料17、打面部欠損、1縁辺に微細剥離痕あり、自然面あり	151
2	Ka-087	C区	Ⅳ層	S6	打製石器	剥片	-	4.8×3.4×1.7	15.78	流紋岩	接合資料17、平坦打面、剥離角129°、自然面あり	151
3	Ka-088	C区	Ⅳ層	S154	打製石器	二次加工のある剥片	Ⅲ	3.8×4.7×1.2	16.73	流紋岩	接合資料17、平坦打面、剥離角100°、表面＋裏面加工、自然面あり	151

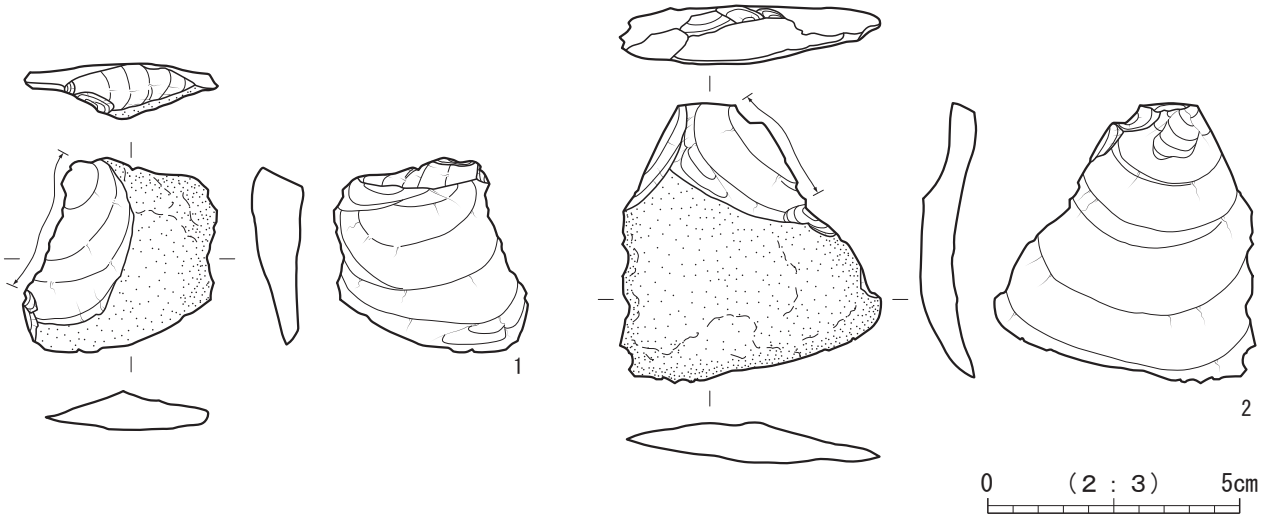
第393図　接合資料(18)



接合資料18

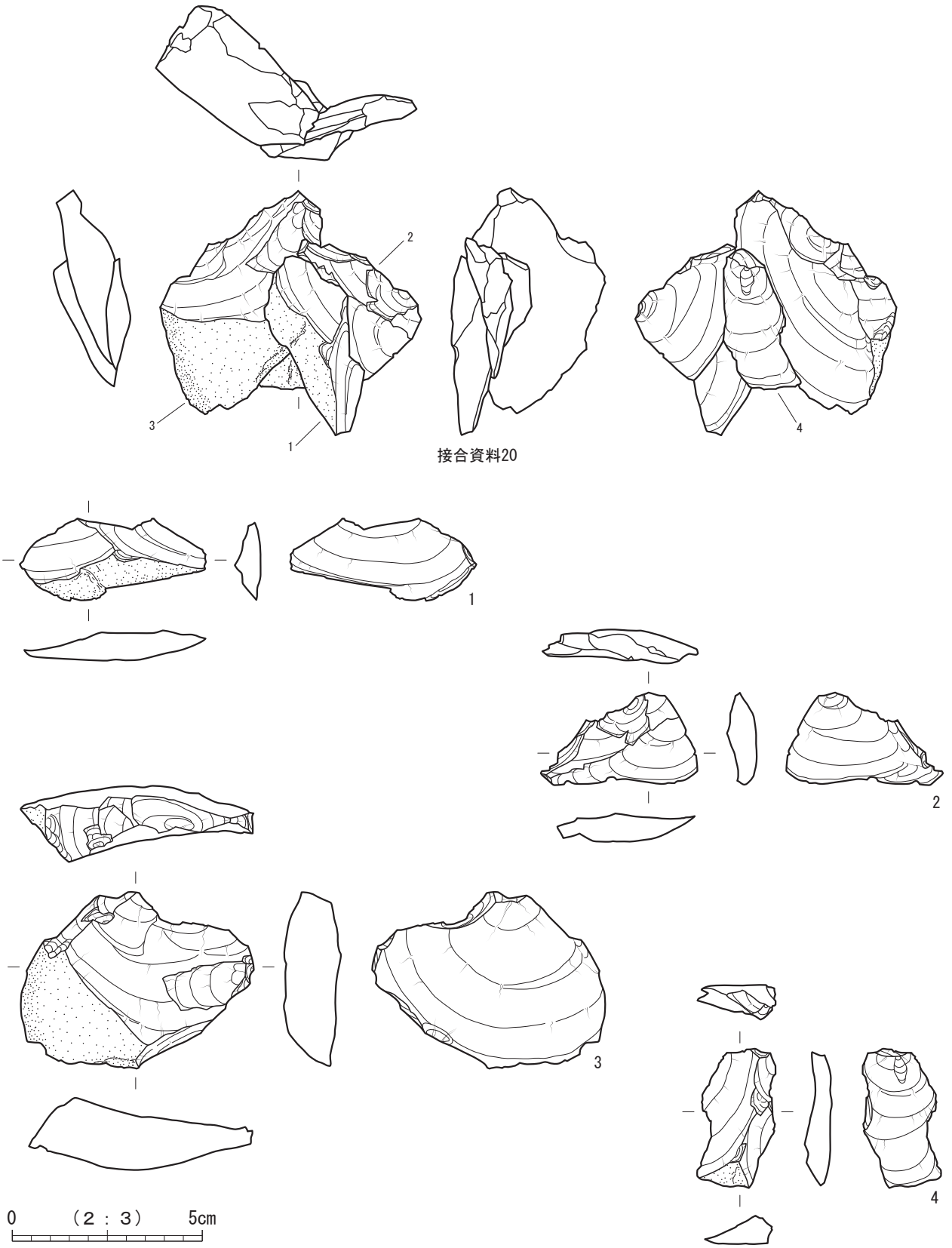


接合資料19



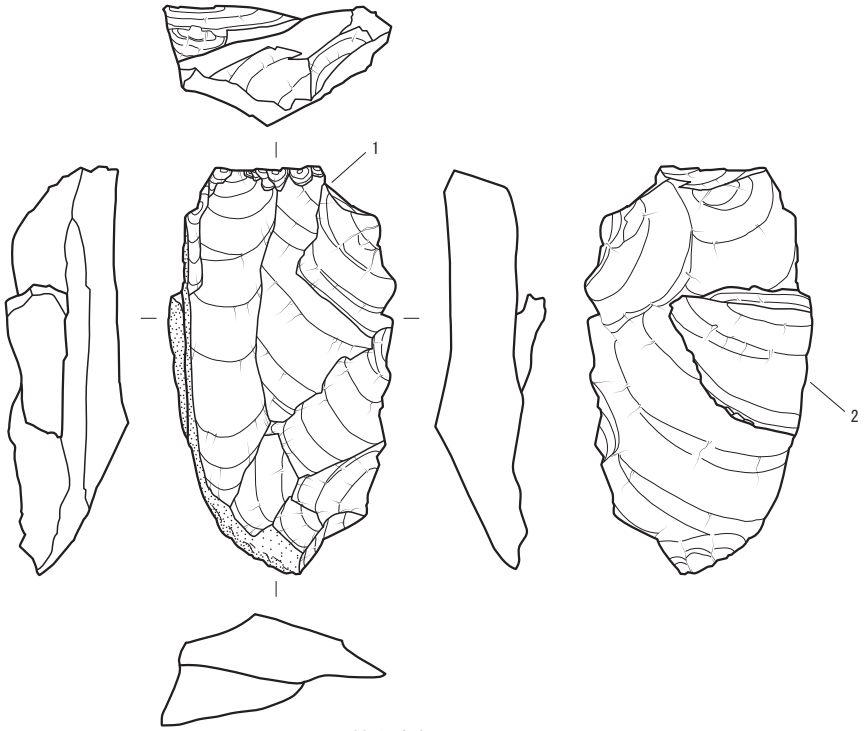
図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
	Ka-091	-	SI119・堆積土	-	打製石器	剥片	-	4.0×4.1×1.2	15.48	流紋岩	接合資料18、平坦打面、剥離角105°、自然面あり	151
	Ka-090	C区	SX1・堆積土	S3	打製石器	剥片	-	2.2×1.8×0.5	1.36	流紋岩	接合資料18、平坦打面、自然面あり	151
1	Ka-092	-	遺構検出面	-	打製石器	微細剥離痕のある剥片	I	3.8×3.7×1.0	10.20	流紋岩	接合資料19、平坦打面、剥離角119°、1縁辺に微細剥離痕あり、自然面あり	151
2	Ka-093	-	遺構検出面	-	打製石器	微細剥離痕のある剥片	I	5.5×5.0×0.8	18.89	流紋岩	接合資料19、平坦打面、剥離角120°、1縁辺に微細剥離痕あり、自然面あり	151

第394図　接合資料(19)

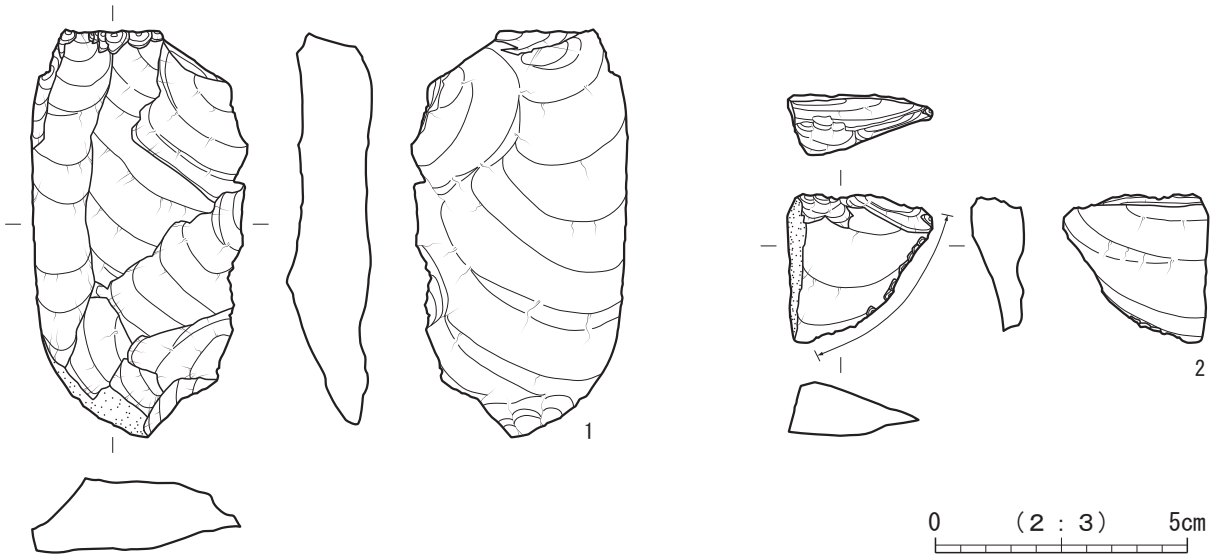


図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
1	Ka-094	-	SI119・堆積土	-	打製石器	剥片	-	2.1×4.9×0.8	5.40	流紋岩	接合資料20、打面部欠損、自然面あり	151
2	Ka-096	C区	SX1・堆積土	S2	打製石器	剥片	-	2.4×4.1×0.9	5.96	流紋岩	接合資料20、点状打面、剥離角125°	151
3	Ka-095	C区	Ⅳ層	S76	打製石器	剥片	-	4.6×6.0×1.9	42.23	流紋岩	接合資料20、平坦打面、剥離角128°、自然面あり	151
4	Ka-097	C区	Ⅳ層	S183	打製石器	剥片	-	3.6×1.8×0.8	4.60	流紋岩	接合資料20、平坦打面、剥離角125°、自然面あり	151

第395図　接合資料(20)

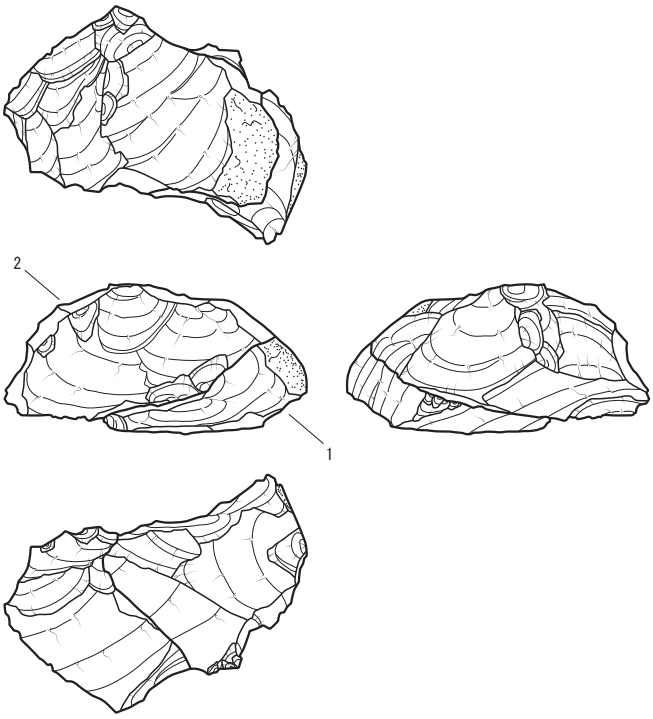


接合資料21

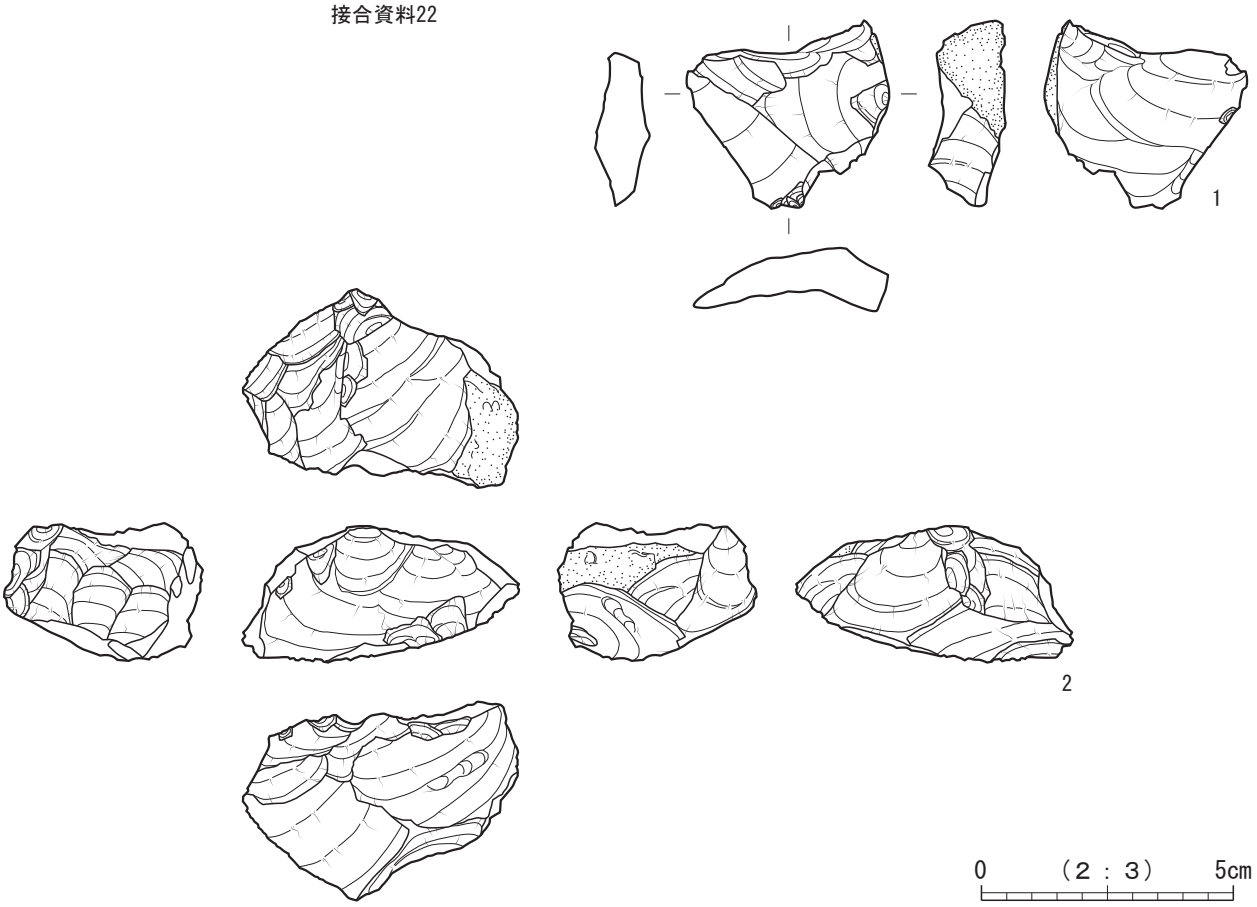


図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
1	Ka-099	B区	Ⅳ層	-	打製石器	剥片	-	8.1×4.3×1.8	55.60	流紋岩	接合資料21、平坦打面、剥離角126°、自然面あり	152
2	Ka-098	-	SI127・堆積土	-	打製石器	微細剥離痕のある剥片	I	2.9×2.9×1.2	7.41	流紋岩	接合資料21、打面部欠損、1縁辺に微細剥離痕あり、自然面あり	152

第396図　接合資料(21)

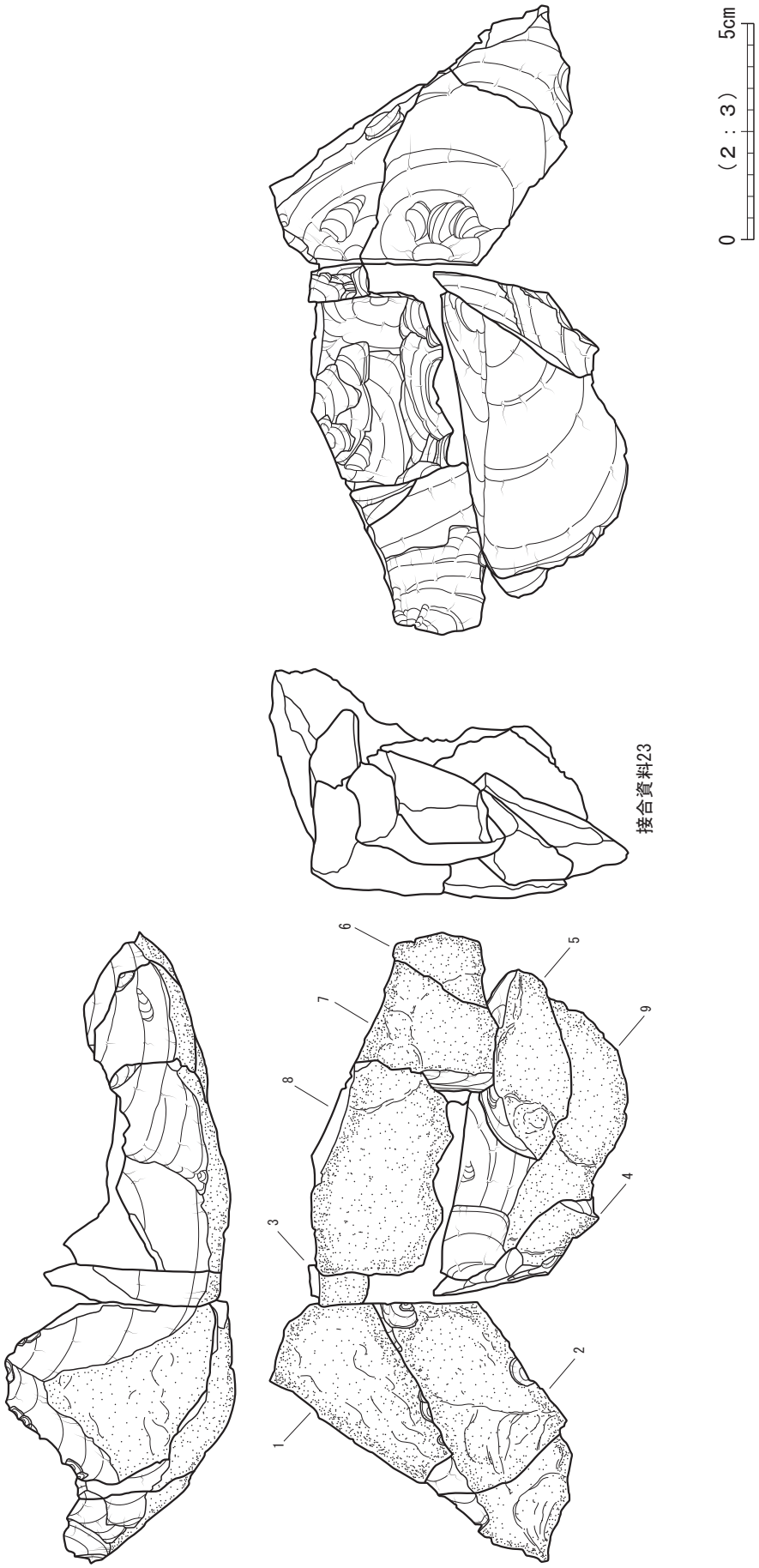


接合資料22



図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
1	Ka-100	B区	Ⅳ層	-	打製石器	剥片	-	3.1×4.0×1.3	14.85	流紋岩	接合資料22、打面部欠損、自然面あり	152
2	Ka-101	E区	Ⅳ層	-	打製石器	石核	-	2.6×5.0×3.8	49.78	流紋岩	接合資料22、礫素材、打面転移あり、自然面あり	152

第397図　接合資料(22)



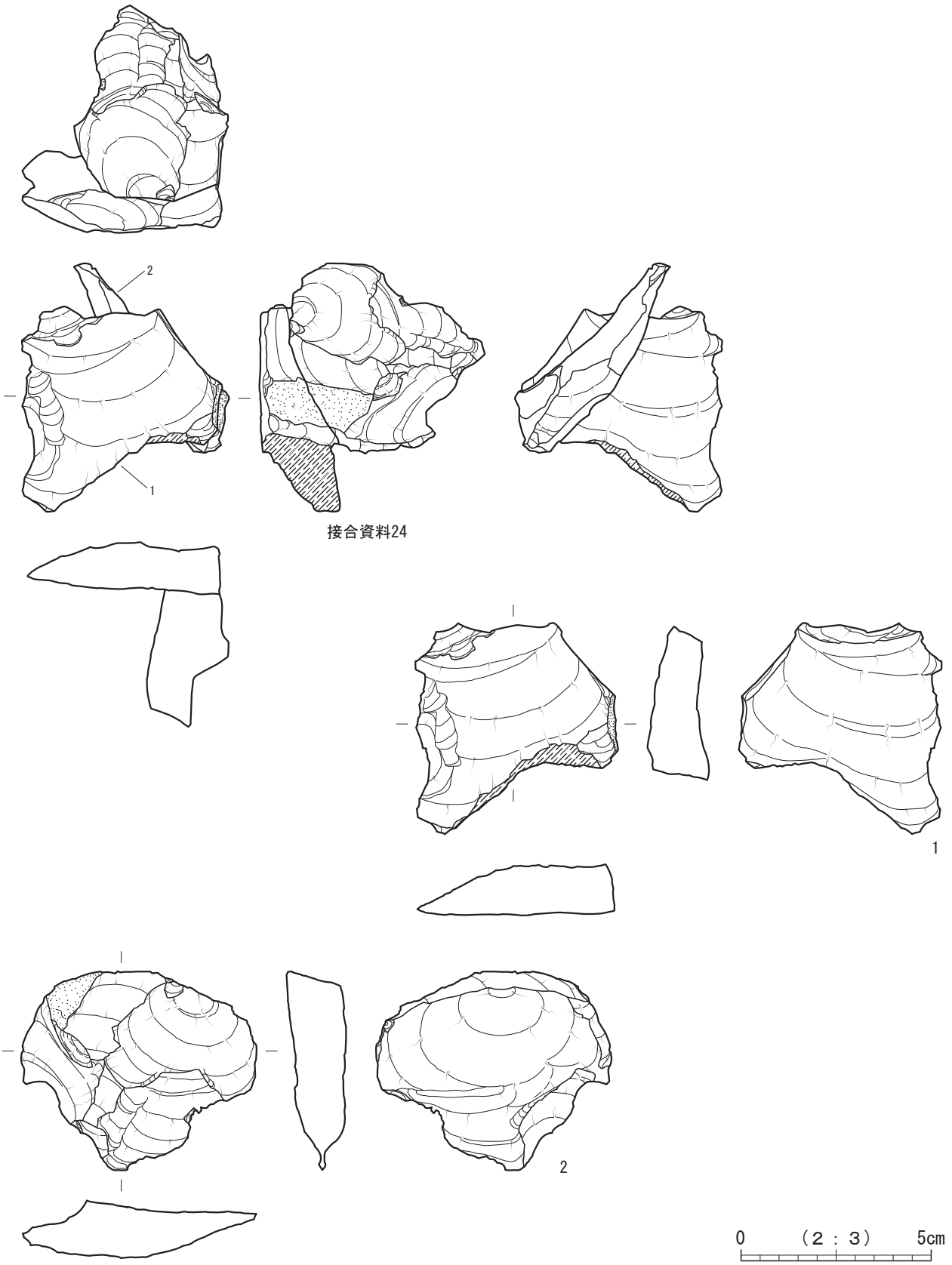
第398図　接合資料(23)

図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
1	Ka-103	-	遺構検出面	-	打製石器	微細剥離痕のある剥片	I	4.8×5.6×1.8	37.15	流紋岩	接合資料23、平坦打面、剥離角135°、1縁辺に微細剥離痕あり、自然面あり	152
2	Ka-102	-	SI113・堆積土	-	打製石器	微細剥離痕のある剥片	I	7.3×5.2×1.9	42.73	流紋岩	接合資料23、平坦打面、剥離角126°、1縁辺に微細剥離痕あり、自然面あり	152
3	Ka-111	-	SI113・堆積土	-	打製石器	剥片	-	4.1×1.2×0.9	4.86	流紋岩	接合資料23、自然面打面、剥離角93°、自然面あり	152
4	Ka-109	-	遺構検出面	-	打製石器	剥片	-	3.6×3.8×1.1	11.07	流紋岩	接合資料23、自然面打面、剥離角110°、自然面あり	152
5	Ka-107	-	Pit148・堆積土	-	打製石器	剥片	-	2.5×4.6×1.1	9.60	流紋岩	接合資料23、自然面打面、剥離角140°、自然面あり	152

第399図　接合資料(24)

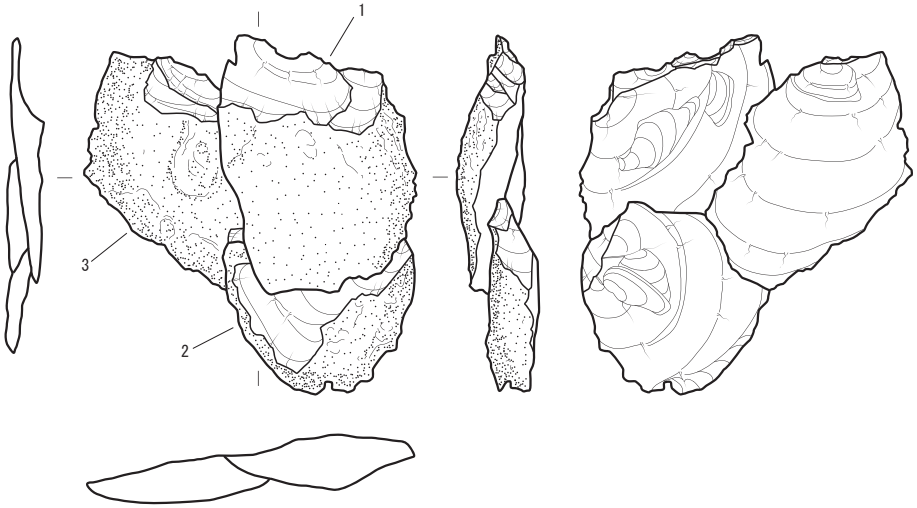
図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
6	Ka-106	-	SI127・堆積土	-	打製石器	剥片	-	3.4×2.9×1.5	10.05	流紋岩	接合資料23、自然面打面、剥離角92°、自然面あり	152
7	Ka-104	-	SI99・堆積土	-	打製石器	剥片	-	2.3×3.4×2.5	18.15	流紋岩	接合資料23、自然面打面、剥離角113°、自然面あり	152
8	Ka-105	-	SI115・堆積土	-	打製石器	石核	-	2.9×5.2×2.7	42.84	流紋岩	接合資料23、礫素材、打面転移あり、自然面あり	152
9	Ka-108	B区	Ⅳ層	S22	打製石器	剥片	-	6.8×3.8×1.8	35.05	流紋岩	接合資料23、打面部欠損、自然面あり	152

第400図　接合資料(25)

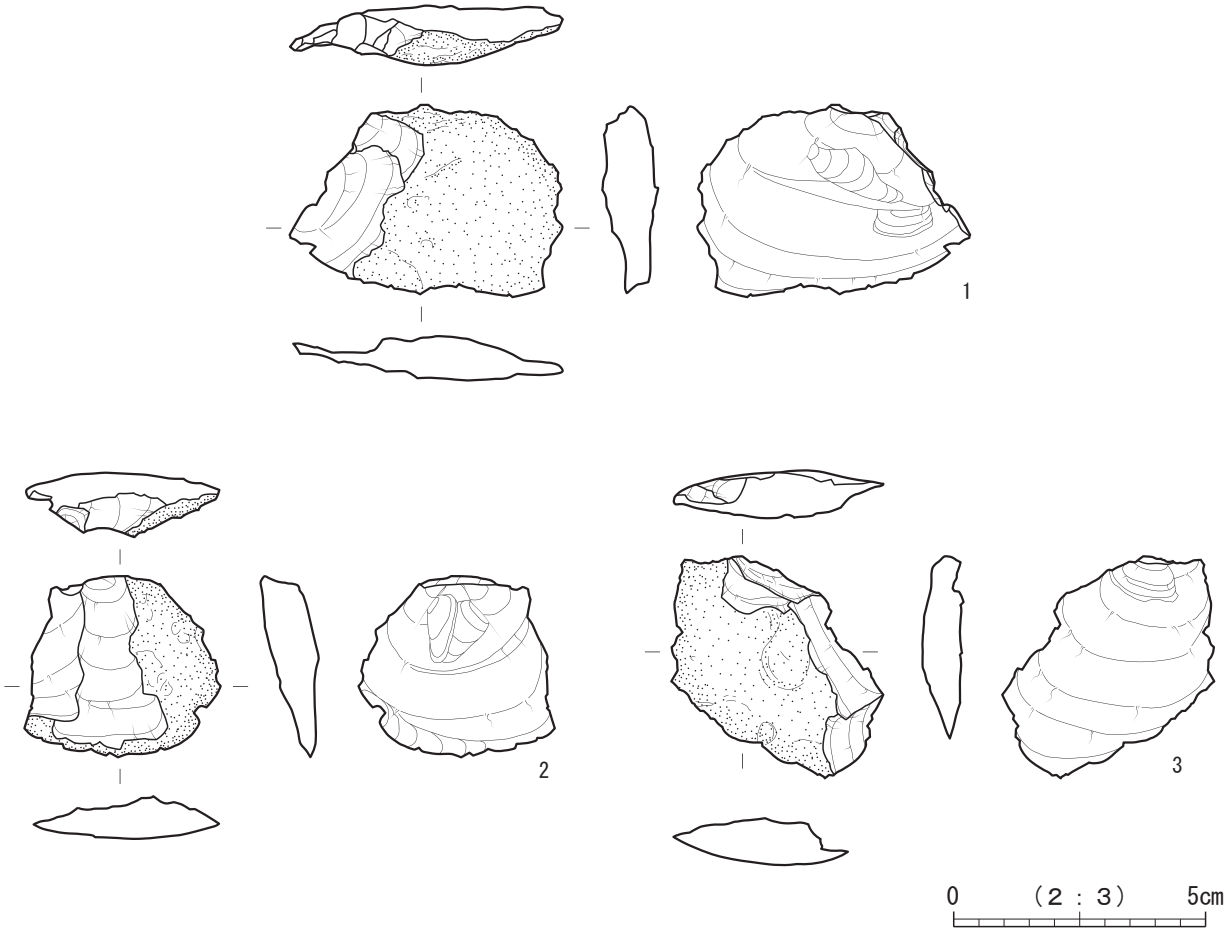


図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
1	Ka-112	-	遺構検出面	-	打製石器	剥片	-	5.3×5.2×1.8	39.75	流紋岩	接合資料24、打面部欠損、自然面あり	153
2	Ka-113	-	遺構検出面	-	打製石器	剥片	-	5.2×6.2×1.7	42.87	流紋岩	接合資料24、平坦打面、剥離角114°、自然面あり	153

第401図　接合資料(26)

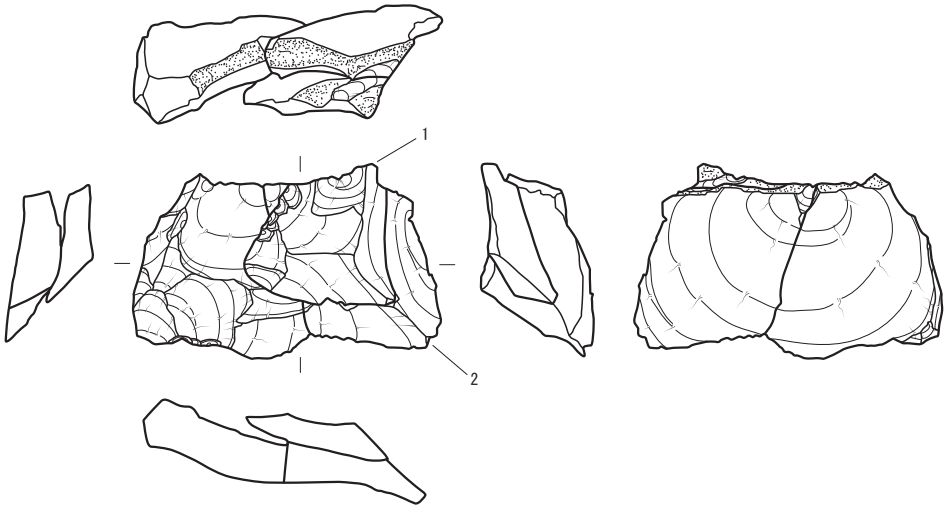


接合資料25

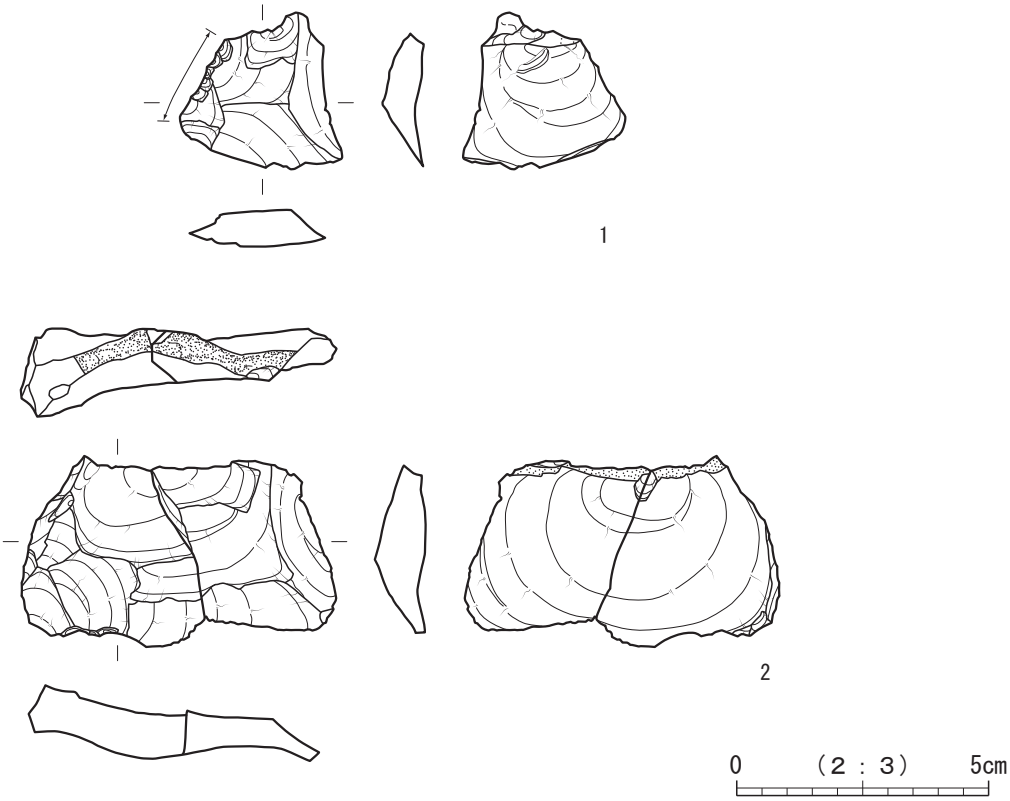


図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
1	Ka-115	E区	Ⅳ層	-	打製石器	剥片	-	3.7×5.3×1.2	18.08	流紋岩	接合資料25、切子打面、剥離角116°、自然面あり	153
2	Ka-114	E区	Ⅳ層	-	打製石器	剥片	-	3.6×3.7×1.0	12.28	流紋岩	接合資料25、切子打面、剥離角116°、自然面あり	153
3	Ka-116	B区	Ⅳ層	S41	打製石器	剥片	-	3.7×4.4×0.9	12.13	流紋岩	接合資料25、打面部欠損、自然面あり	153

第402図　接合資料(27)

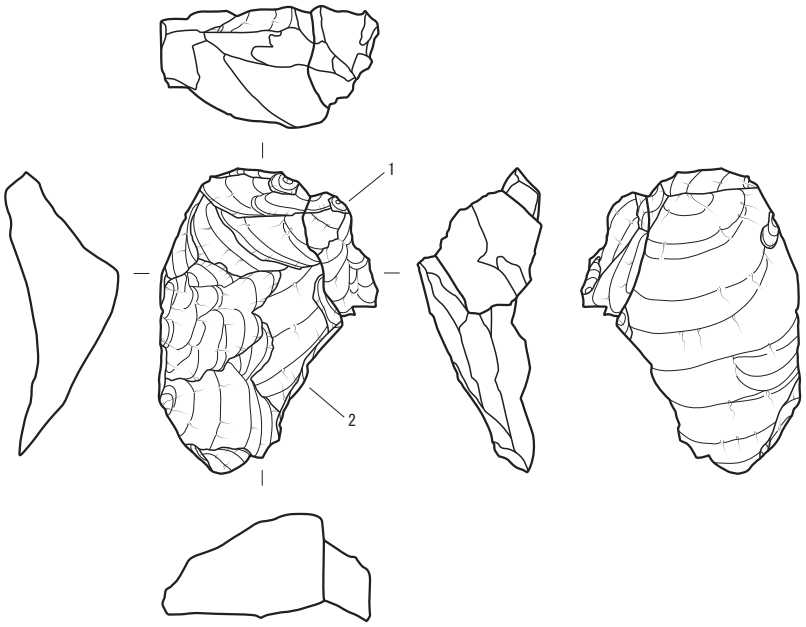


接合資料26

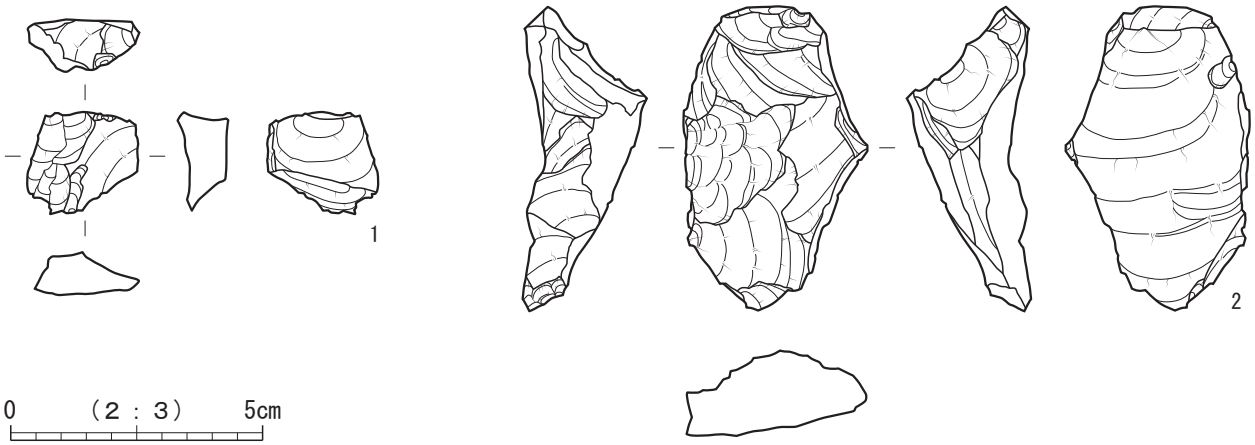


図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
1	Ka-117	B区	SK42・43・堆積土	-	打製石器	二次加工のある剥片	I	3.1×2.9×0.8	5.66	流紋岩	接合資料26、自然面打面、剥離角125°、表面加工、自然面あり	153
2	Ka-118	-	遺構検出面	-	打製石器	剥片	-	3.6×6.2×1.2	9.97	流紋岩	接合資料26、自然面打面、剥離角118°、自然面あり	153

第403図　接合資料(28)

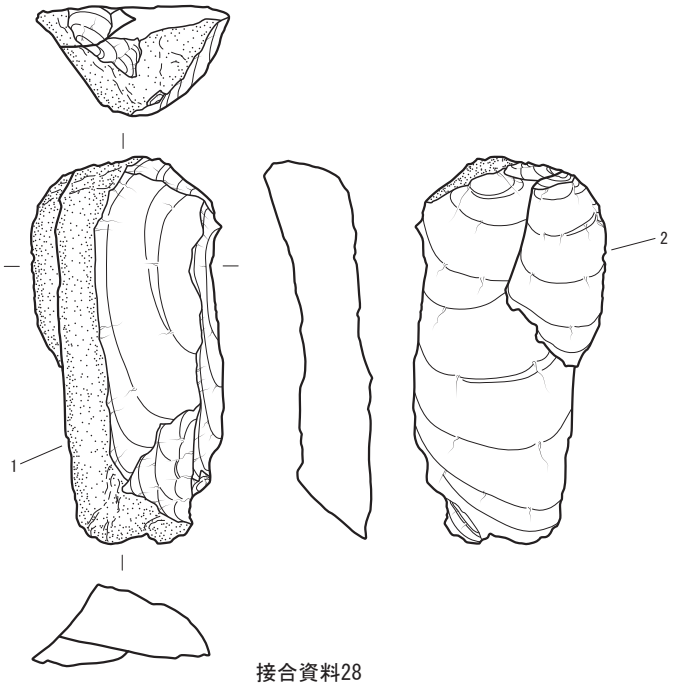


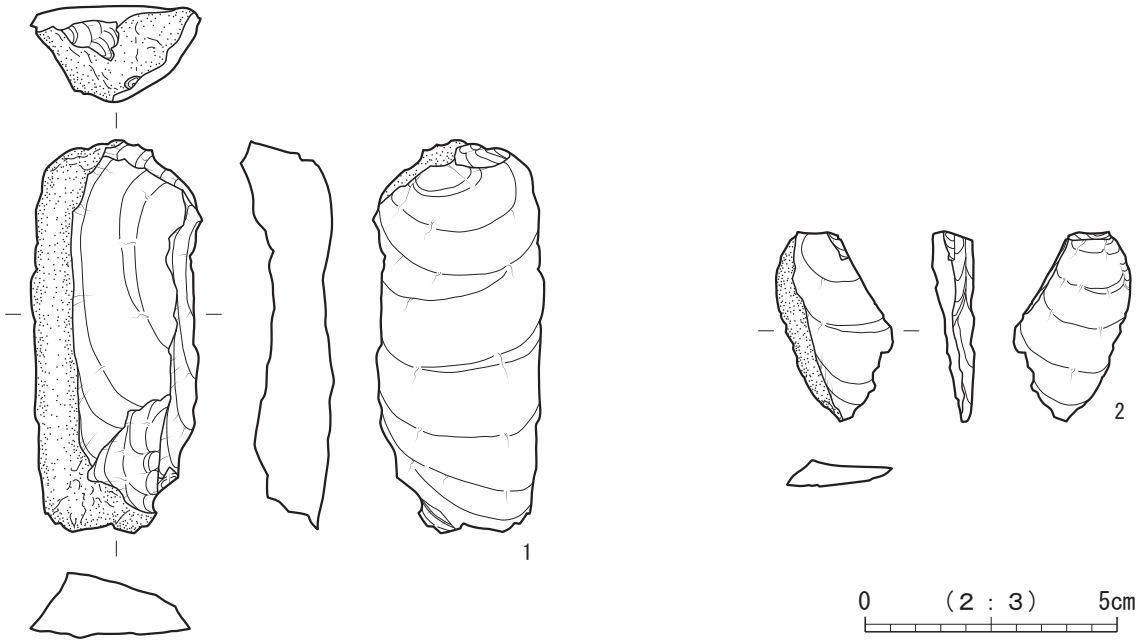
接合資料27



図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
1	Ka-121	-	遺構検出面	-	打製石器	剥片	-	2.0×2.2×1.0	4.05	流紋岩	接合資料27、平坦打面、剥離角105°	153
2	Ka-120	B区	Ⅳ層	S36	打製石器	剥片	-	6.0×3.6×2.1	36.05	流紋岩	接合資料27、平坦打面、剥離角123°	153

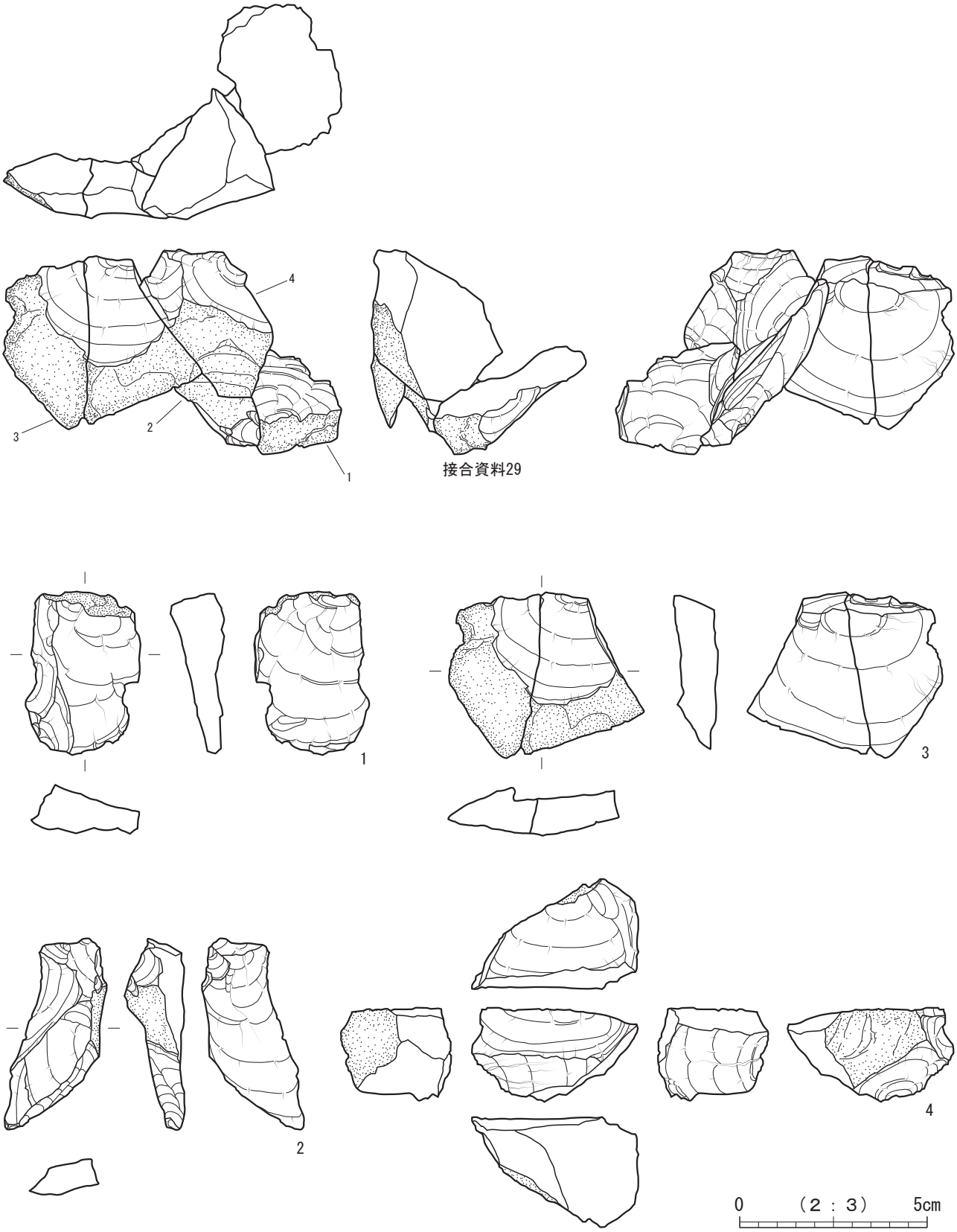
第404図　接合資料(29)





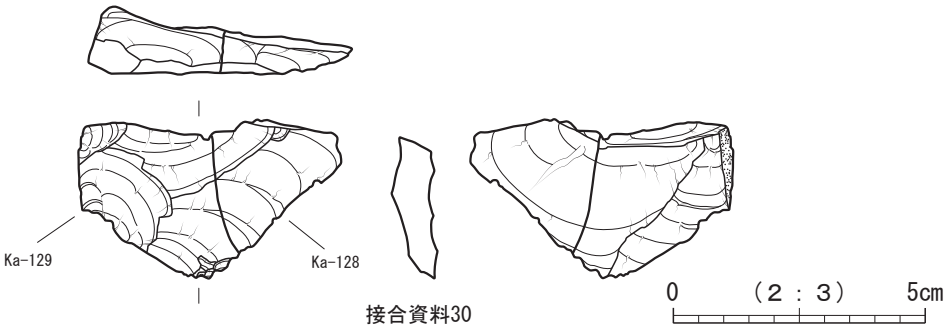
図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
1	Ka-122	E区	Ⅳ層	-	打製石器	剥片	-	7.7×3.2×1.7	47.82	流紋岩	接合資料28、自然面打面、剥離角120°、自然面あり	154
2	Ka-123	-	SD55・堆積土	-	打製石器	剥片	-	3.6×2.1×0.8	4.55	流紋岩	接合資料28、平坦打面、剥離角103°、自然面あり	154

第405図　接合資料(30)



図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
1	Ka-127	A区	Ⅳ層	-	打製石器	剥片	-	4.3×2.9×1.6	16.19	流紋岩	接合資料29、自然面打面、剥離角110°、自然面あり	154
2	Ka-010	A区	Ⅳ層	-	打製石器	石核	-	2.4×4.1×2.8	27.12	流紋岩	接合資料29、剥片素材、打面転移あり、自然面あり	154
3	Ka-124	A区	Ⅳ層	-	打製石器	剥片	-	4.3×4.7×1.3	14.12	流紋岩	接合資料29、平坦打面、剥離角118°、自然面あり	154
4	Ka-126	-	遺構検出面	-	打製石器	剥片	-	4.4×2.2×1.5	11.36	流紋岩	接合資料29、平坦打面、剥離角125°、自然面あり	154

第406図　接合資料(31)



図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
	Ka-128	B区	Ⅳ層	-	打製石器	剥片	-	2.8×2.6×1.3	9.29	流紋岩	接合資料30、平坦打面、剥離角140°、自然面あり	154
	Ka-129	-	遺構検出面	-	打製石器	剥片	-	2.5×2.7×0.8	4.09	流紋岩	接合資料30、打面部欠損	154

第407図　接合資料(32)

接合資料30（第407図、写真図版154）

折れ面で接合した剥片である。表面の左側縁側に自然面を残している。Ka-128は弥生Ｂ区出土、Ka-129は古代の遺構検出面からの出土である。石材は流紋岩である。

接合資料31（第408・409図、写真図版154）

微細剥離痕のある剥片２点と剥片１点の接合資料である。いずれも表面の左側縁側に自然面を残している。１は剥離面と自然面から成る面を打面として、２は自然面を打面として、剥離された剥片であり、３は２の剥離によって形成された剥離面を打面とし、剥離された剥片である。２・３は微細剥離痕のある剥片Ⅰ類である。１は弥生Ｃ区、２・３は古代の遺構内堆積土からの出土である。石材は流紋岩である。

接合資料34（第410図、写真図版154）

二次加工のある剥片１点と剥片１点の接合資料である。剥離面から成る面を打面とし、１、２の順序で剥離されている。２は同時割れを起こしており、そのうち１点は二次加工のある剥片Ⅲ類である。１は弥生Ｅ区、２は古代の遺構検出面からの出土である。石材は流紋岩である。

接合資料35（第411図、写真図版154）

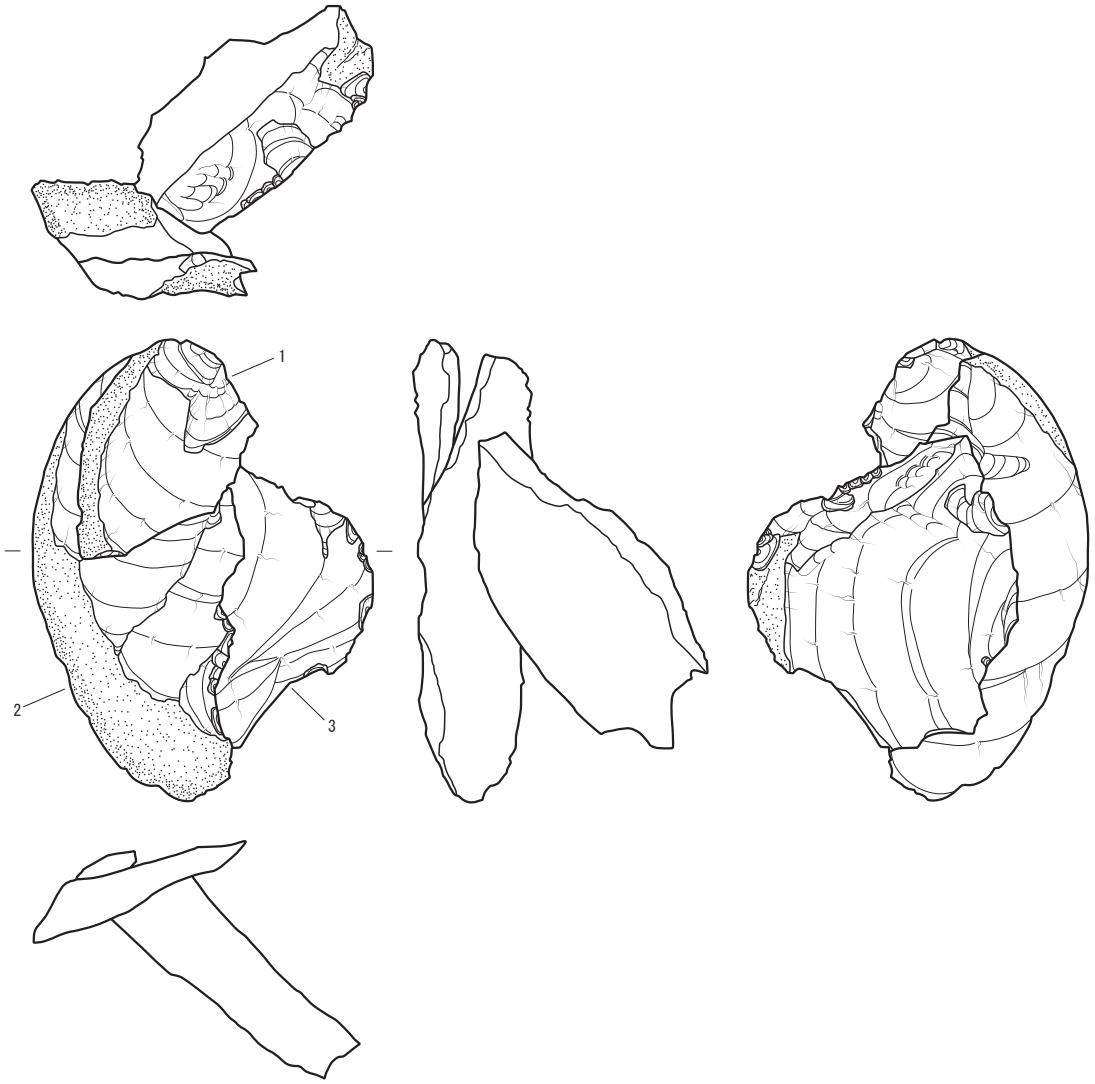
二次加工のある剥片１点、微細剥離痕のある剥片１点、剥片１点の接合資料である。１は表面に自然面を残し、２・３は表面の右側縁側に自然面を残している。２は同時割れを起こしている。１は剥離面を打面とし、剥離された剥片である。２は90°の打面転移が行われ、１の剥離によって形成された剥離面を打面とし、剥離された剥片である。３は90°の打面転移が行われ、剥離面を打面とし、剥離された剥片である。１は二次加工のある剥片Ⅱ類であり、３は微細剥離痕のある剥片Ⅰ類である。１は古代の遺構内堆積土、２は古代の遺構検出面、３は弥生Ｃ区からの出土である。石材は流紋岩である。

接合資料36（第412図、写真図版154）

剥片３点の接合資料である。いずれも表面に自然面を大きく残している。１は同時割れを起こしている。１～３は連続的に剥離されているが、打面は剥離時に欠損している。１は弥生Ｅ区、２は弥生Ｂ区、３は古代の遺構検出面からの出土である。石材は流紋岩である。

接合資料37（第412図、写真図版154）

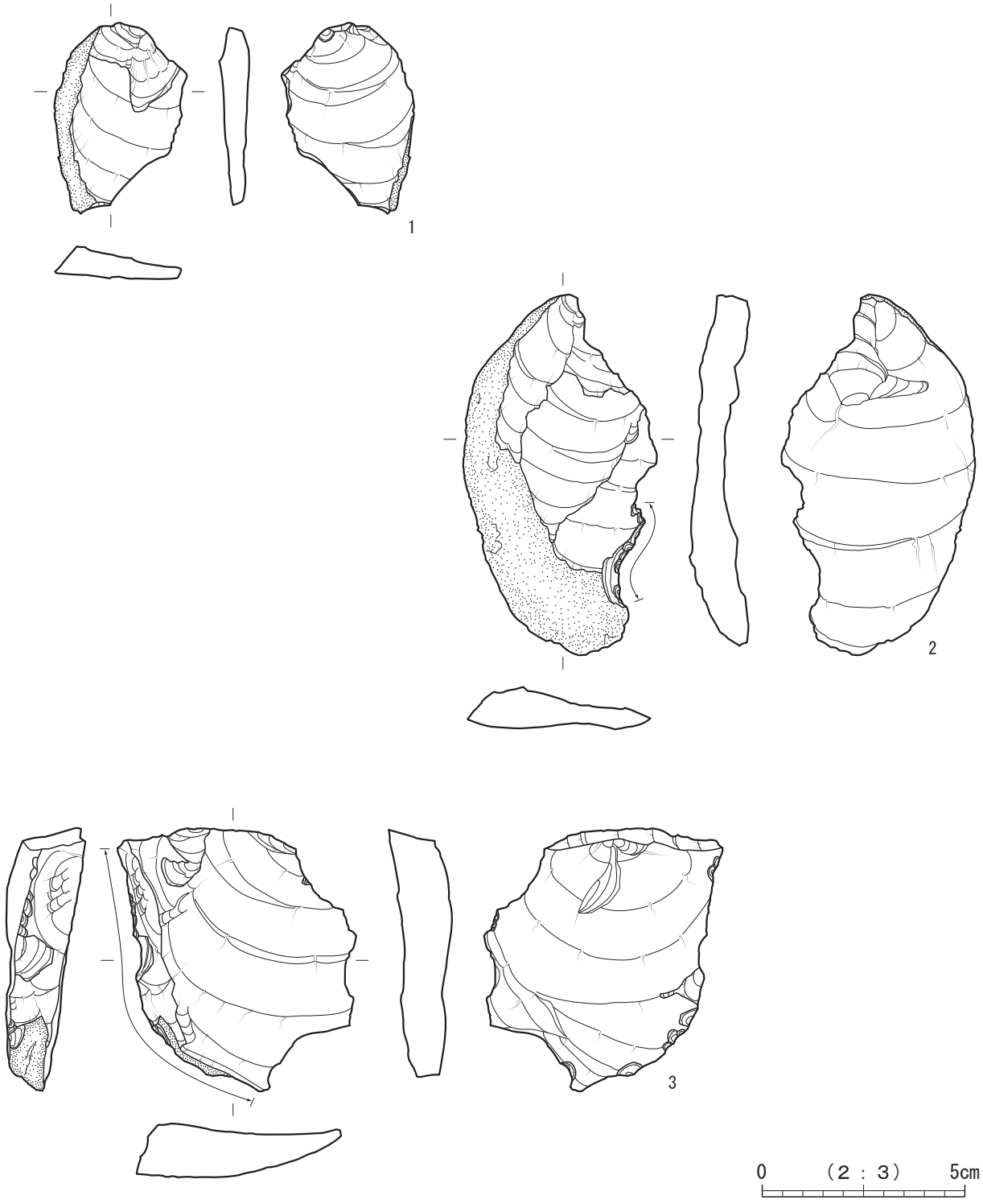
Ka-148～151は同時割れを起こした剥片である。剥離面から成る面を打面として、剥離されている。Ka-148・149は古代の遺構検出面、Ka-150は弥生Ｂ区、Ka-151は弥生Ｅ区からの出土である。石材は流紋岩である。



接合資料31

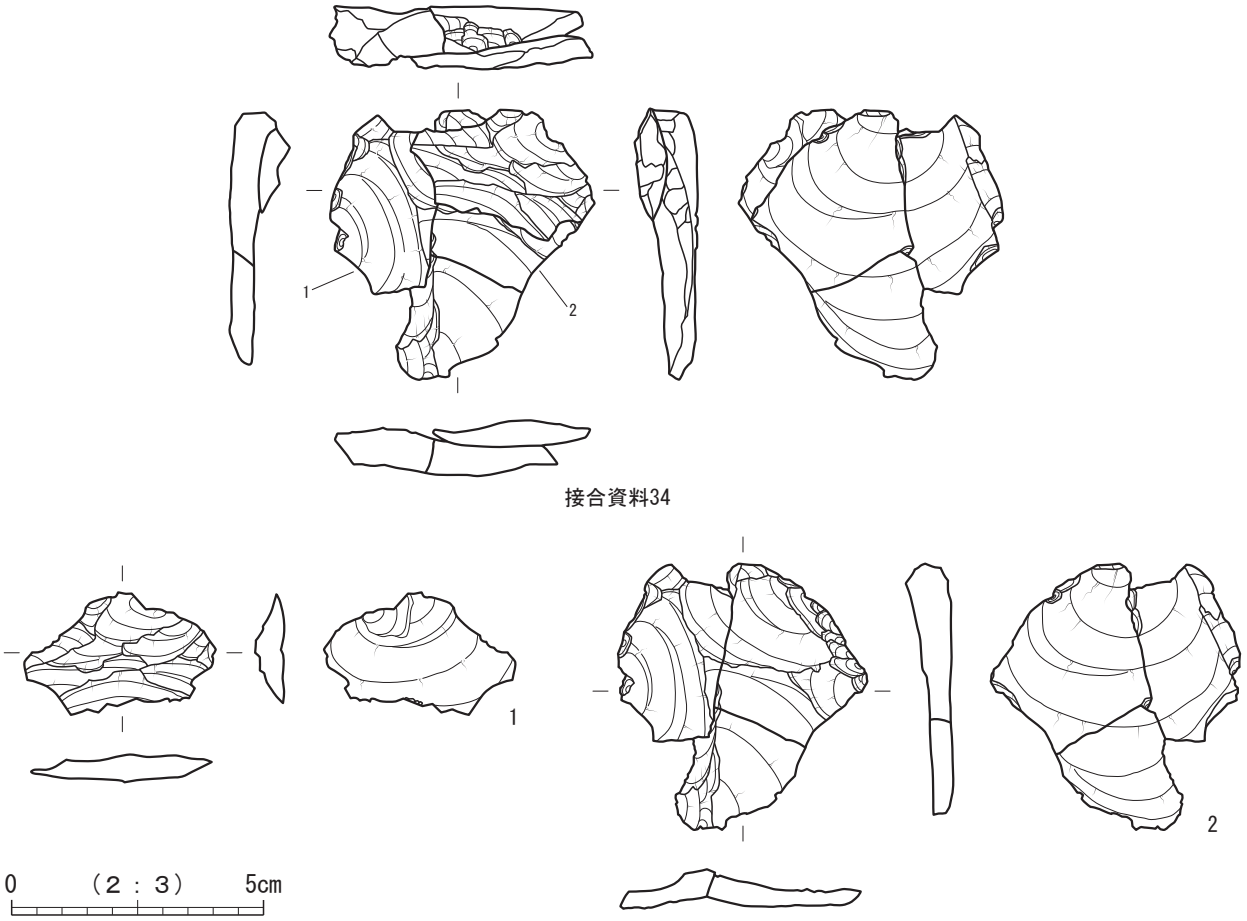
0　（2：3）　5cm

第408図　接合資料(33)



図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
1	Ka-131	C区	Ⅳ層	S174	打製石器	剥片	-	4.4×3.1×1.0	10.25	流紋岩	接合資料31、平坦打面、剥離角120°、自然面あり	154
2	Ka-130	-	SI99・堆積土	-	打製石器	微細剥離痕のある剥片	I	8.8×4.7×1.3	45.15	流紋岩	接合資料31、打面部欠損、1縁辺に微細剥離痕あり、自然面あり	154
3	Ka-132	-	SB8・堆積土	-	打製石器	微細剥離痕のある剥片	I	6.3×5.4×1.7	53.75	流紋岩	接合資料31、平坦打面、剥離角120°、1縁辺に微細剥離痕あり、自然面あり	154

第409図　接合資料(34)



図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
1	Ka-139	E区	Ⅳ層	-	打製石器	剥片	-	2.2×3.7×0.6	3.71	流紋岩	接合資料34、打面部欠損	155
2	Ka-137	-	遺構検出面	-	打製石器	二次加工のある剥片	Ⅲ	5.0×4.8×0.9	10.26	流紋岩	接合資料34、打面部加工、剥離角132°、表面＋裏面加工	155

第410図　接合資料(35)

接合資料38（第413図、写真図版155）

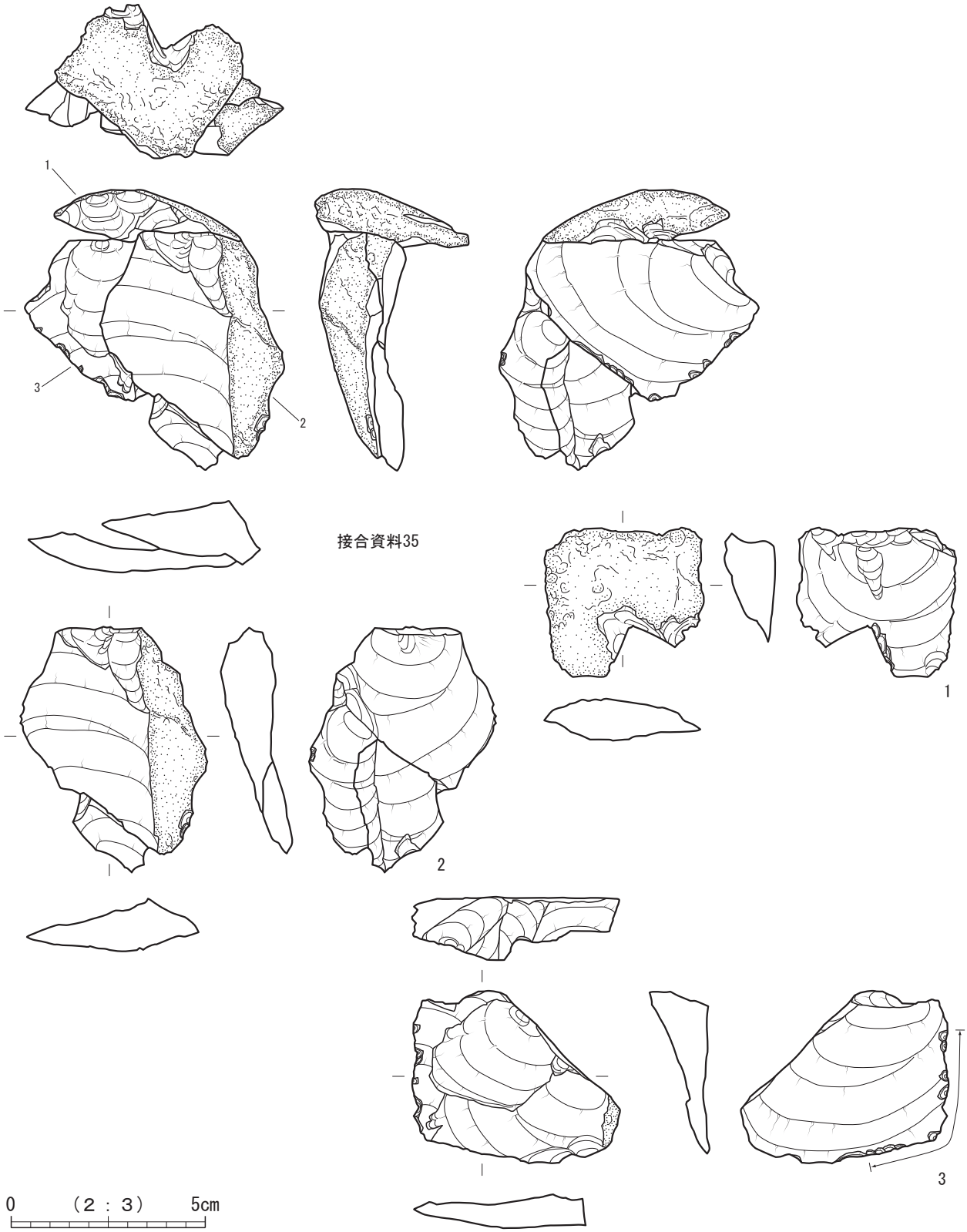
二次加工のある剥片１点と剥片２点の接合資料である。１・２は表面の右側縁側に自然面を残しており、剥離面を打面として、連続的に剥離された剥片である。３は90°の打面転移が行われた後、剥離されている。３は二次加工のある剥片Ⅲ類である。１・３は古代の遺構検出面、２は弥生Ｂ区から出土している。石材は流紋岩である。

接合資料39（第414図、写真図版156）

二次加工のある剥片１点、微細剥離痕のある剥片１点、剥片１点の接合資料である。１は表面の左側縁側に自然面を残し、２は表面の右側縁側、３は表面の末端側に自然面を残している。１は剥離面から成る面を打面とした剥片であり、２は平坦打面から剥離された剥片である。３は90°の打面転移が行われ、剥離された剥片である。２は二次加工のある剥片Ⅱ類であり、１は微細剥離痕のある剥片Ⅰ類である。１・２は古代の遺構検出面、３は弥生Ｅ区からの出土である。石材は流紋岩である。

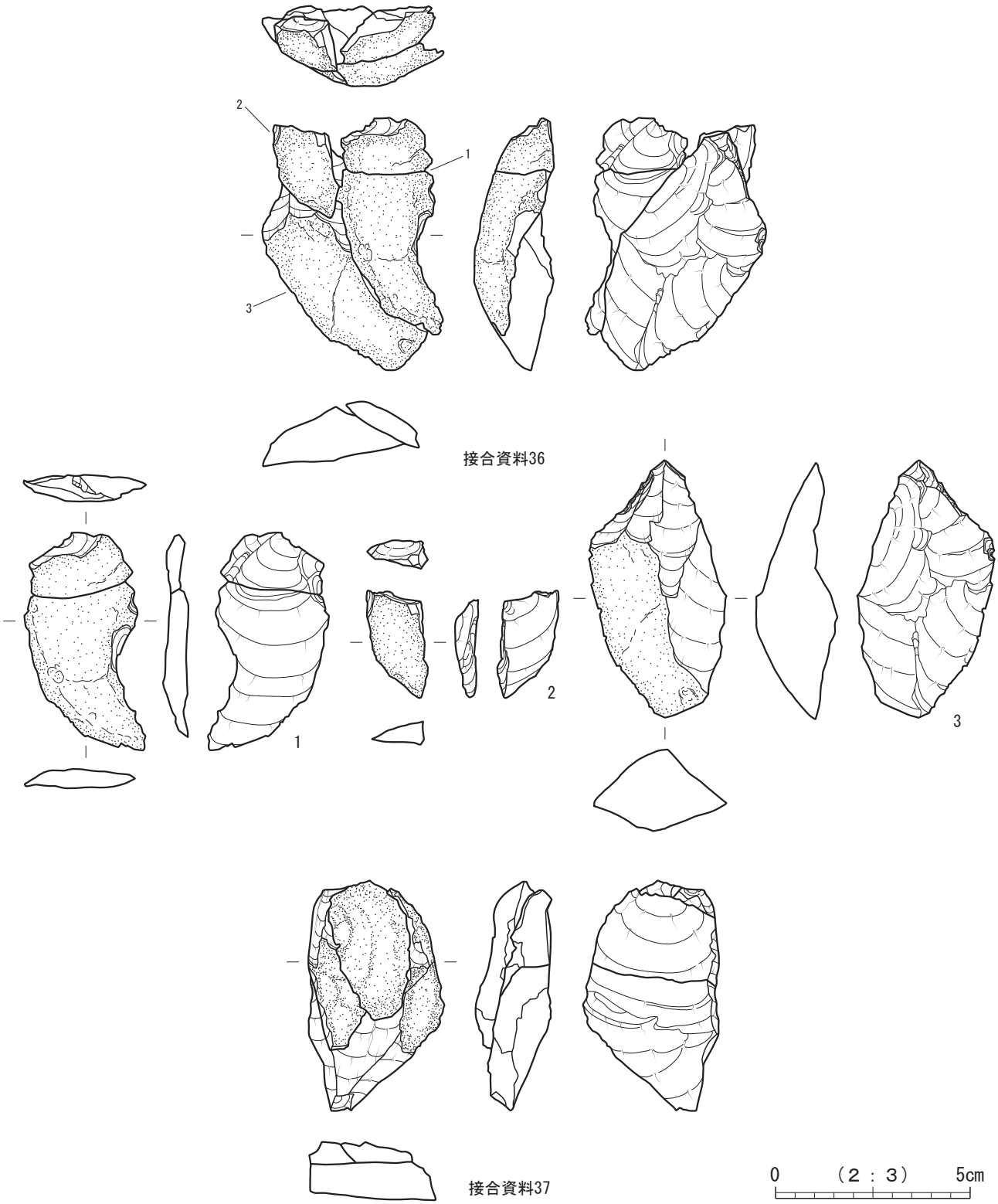
接合資料40（第415図、写真図版156）

剥片２点の接合資料である。ともに表面に自然面を残している。同一の剥離面を打面として連続的に剥離された剥片である。１は古代の遺構内堆積土、２は弥生Ｅ区ＳＩ１からの出土である。石材は流紋岩である。



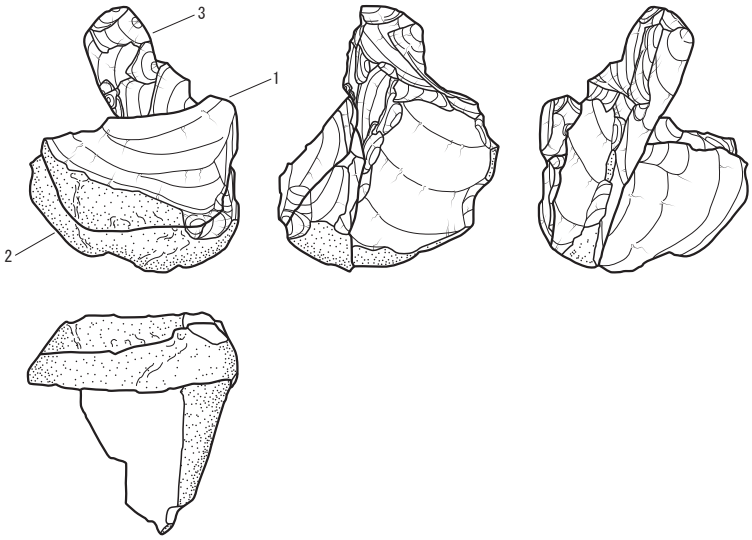
図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
1	Ka-140	-	SI96・堆積土	-	打製石器	二次加工のある剥片	Ⅱ	3.8×4.0×1.3	16.33	流紋岩	接合資料35、打面部欠損、裏面加工、自然面あり	155
2	Ka-141	-	遺構検出面	-	打製石器	剥片	-	6.3×4.5×1.6	26.69	流紋岩	接合資料35、平坦打面、剥離角129°、自然面あり	155
3	Ka-142	C区	Ⅳ層	S200	打製石器	微細剥離痕のある剥片	Ⅰ	4.2×5.2×1.6	20.86	流紋岩	接合資料35、切子打面、剥離角110°、1縁辺に微細剥離痕あり、自然面あり	155

第411図　接合資料(36)

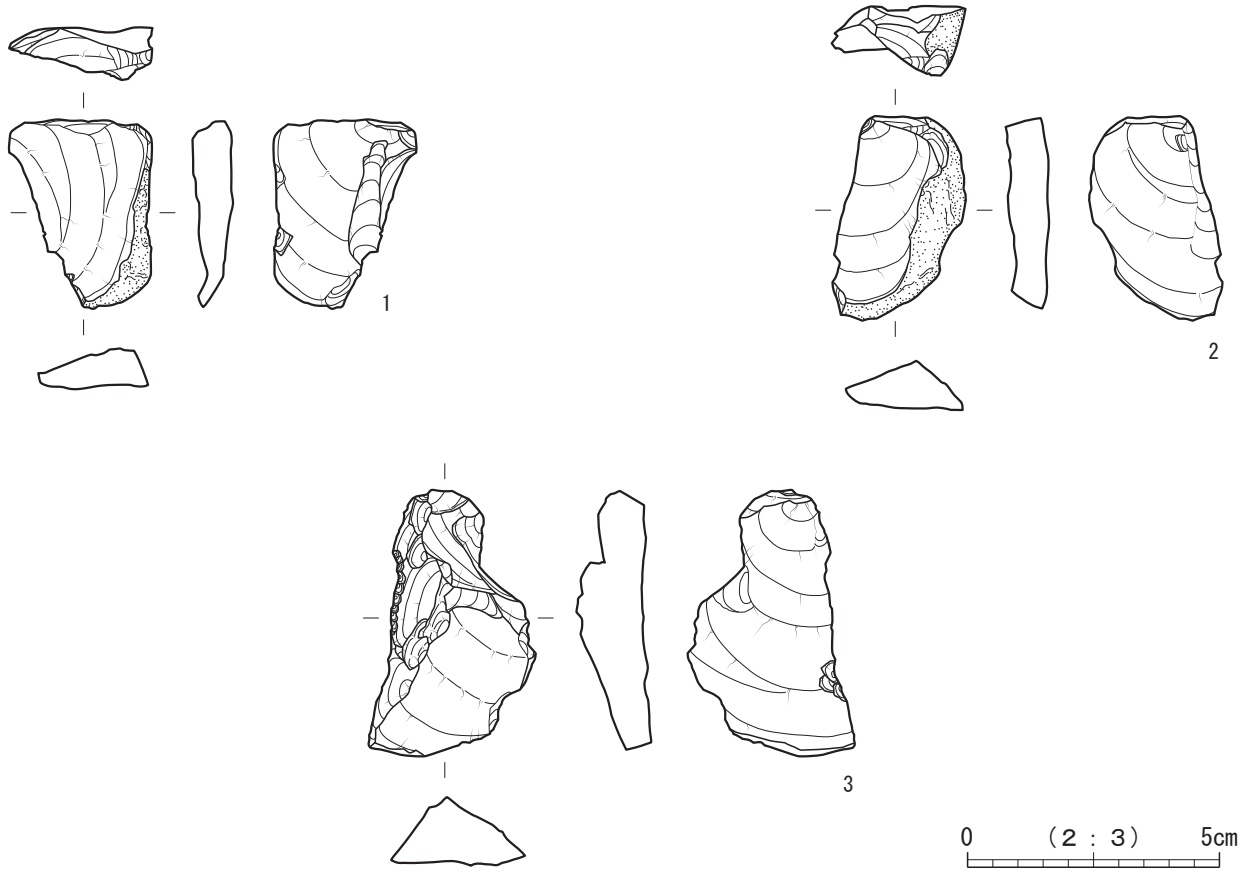


図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
1	Ka-146	E区	Ⅳ層	-	打製石器	剥片	-	5.6×2.9×0.6	6.27	流紋岩	接合資料36、打面部欠損、自然面あり	155
2	Ka-145	B区	Ⅳ層	-	打製石器	剥片	-	1.4×2.5×0.7	2.22	流紋岩	接合資料36、打面部欠損、自然面あり	155
3	Ka-144	-	遺構検出面	-	打製石器	剥片	-	6.6×3.4×2.5	29.04	流紋岩	接合資料36、打面部欠損、自然面あり	155
	Ka-148	-	遺構検出面	-	打製石器	剥片	-	3.4×3.4×1.3	10.68	流紋岩	接合資料37、打面部欠損、自然面あり	155
	Ka-149	-	遺構検出面	-	打製石器	剥片	-	4.2×1.3×0.8	4.57	流紋岩	接合資料37、打面部欠損、自然面あり	155
	Ka-150	B区	Ⅳ層	S68	打製石器	剥片	-	3.6×2.1×0.8	4.69	流紋岩	接合資料37、打面部欠損、自然面あり	155
	Ka-151	E区	Ⅳ層	S63	打製石器	剥片	-	2.9×3.2×1.0	14.05	流紋岩	接合資料37、打面部欠損、自然面あり	155

第412図　接合資料(37)

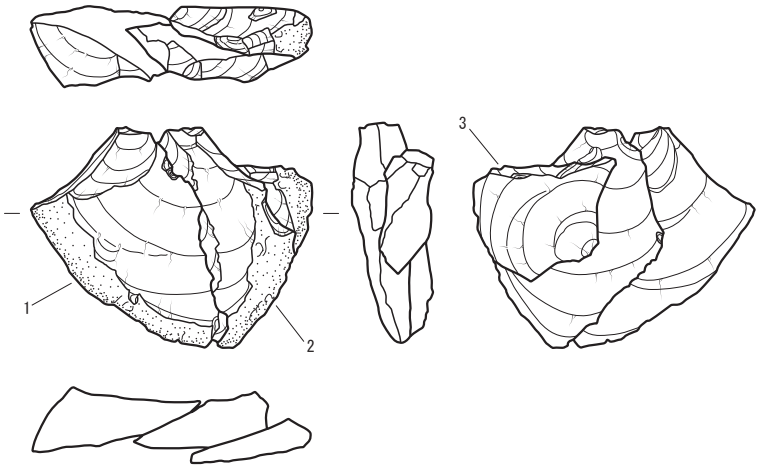


接合資料38

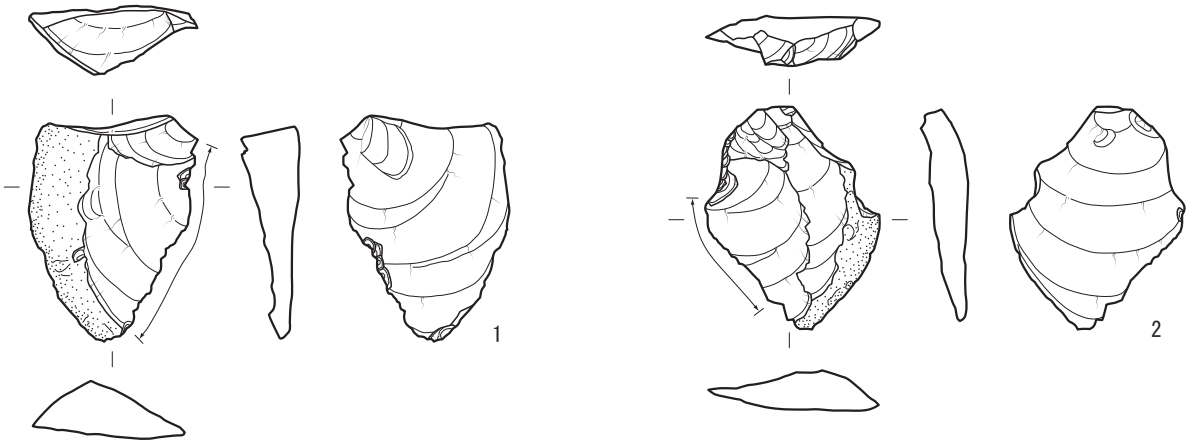


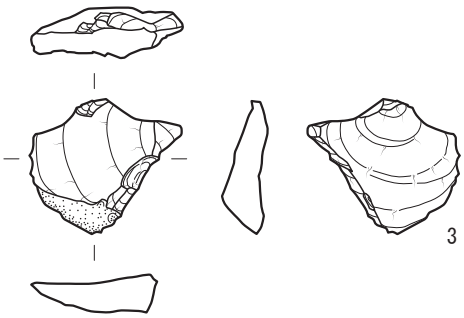
図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
1	Ka-152	-	遺構検出面	-	打製石器	剥片	-	3.7×2.8×1.0	9.27	流紋岩	接合資料38、平坦打面、剥離角134°、自然面あり	155
2	Ka-153	B区	Ⅳ層	-	打製石器	剥片	-	4.0×2.4×1.3	9.83	流紋岩	接合資料38、平坦打面、剥離角115°、自然面あり	155
3	Ka-154	-	遺構検出面	-	打製石器	二次加工のある剥片	Ⅲ	5.2×2.8×1.4	18.28	流紋岩	接合資料38、切子打面、剥離角122°、表面＋裏面加工、自然面あり	155

第413図　接合資料(38)



接合資料39

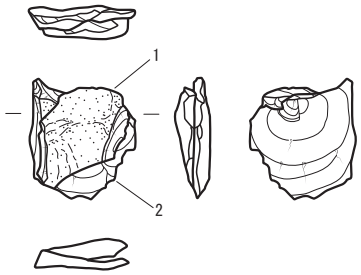




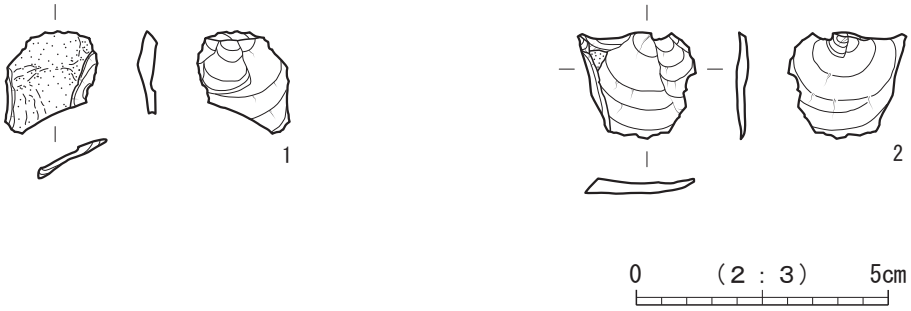
0　（2：3）　5cm

図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
1	Ka-156	-	遺構検出面	-	打製石器	微細剥離痕のある剥片	Ⅰ	4.2×3.2×1.3	12.93	流紋岩	接合資料39、点状打面、剥離角104°、1縁辺に微細剥離痕あり、自然面あり	156
2	Ka-155	-	遺構検出面	-	打製石器	二次加工のある剥片	Ⅱ	4.2×3.4×0.8	9.76	流紋岩	接合資料39、平坦打面、剥離角111°、表面加工、同側縁に微細剥離痕あり、自然面あり	156
3	Ka-157	E区	Ⅳ層	-	打製石器	剥片	-	2.6×2.9×1.0	4.71	流紋岩	接合資料39、点状打面、剥離角127°、自然面あり	156

第414図　接合資料(39)



接合資料40



図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
1	Ka-158	-	SI115A・堆積土	-	打製石器	剥片	-	1.6×1.7×0.5	1.27	流紋岩	接合資料40、平坦打面、剥離角114°、自然面あり	156
2	Ka-159	E区	SI1・堆積土	-	打製石器	剥片	-	2.1×2.1×0.4	1.28	流紋岩	接合資料40、線状打面、剥離角120°、自然面あり	156

第415図　接合資料(40)

接合資料41（第416・417図、写真図版156）

石核１点と二次加工のある剥片１点の接合資料である。大型の剥片が剥離された際、同時割れが生じて２分された剥片の末端側が石核として用いられ、剥片剥離作業が行われたものと考えられる。素材剥片は剥離面と自然面から成る面を打面とし、表面に自然面を残している。１は二次加工のある剥片Ⅲ類である。２の石核の一端にはマメツ痕が確認され、剥片剥離作業後は、何らかの用途に使用されたものと考えられる。一方、打面側の剥片には表面左側縁に二次加工が施されている。１は弥生Ｂ区、２は古代の遺構内堆積土からの出土である。石材は流紋岩である。

接合資料42（第418図、写真図版156）

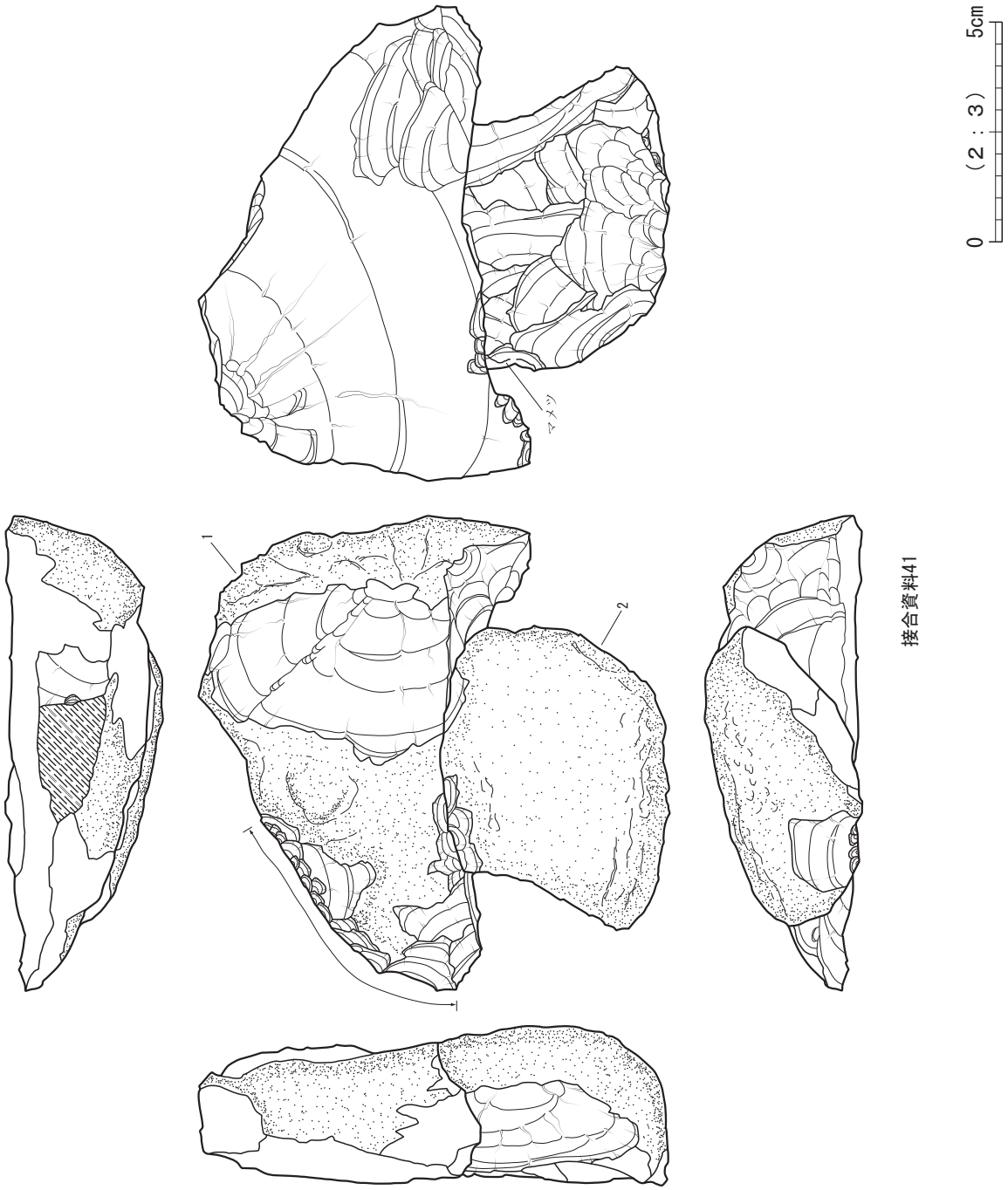
剥片２点の接合資料である。１・２とも剥離面と自然面から成る面を打面とし、剥離された剥片である。１は古代の遺構検出面、２は弥生Ｅ区からの出土である。石材は流紋岩である。

接合資料43（第419図、写真図版156）

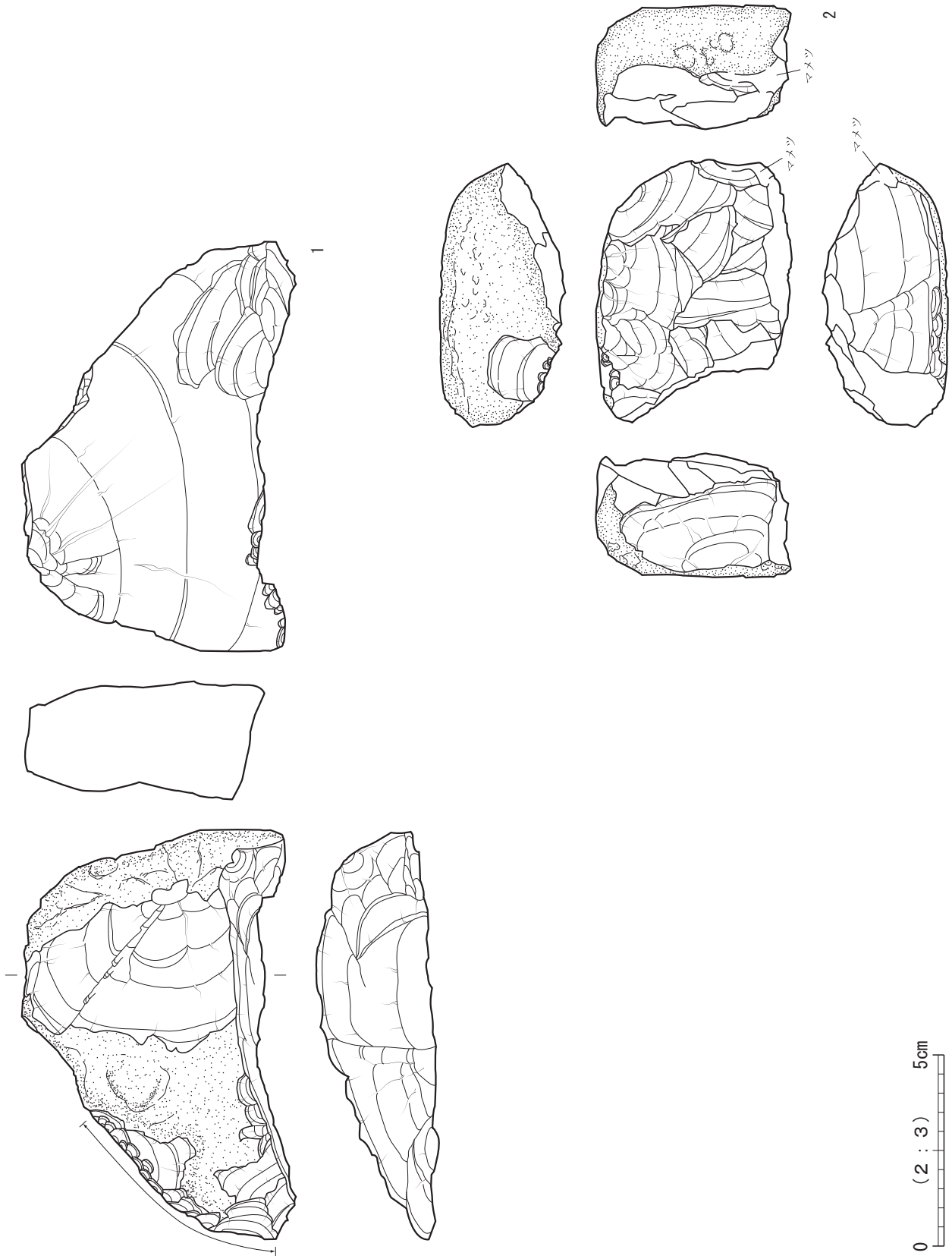
石核１点と剥片１点の接合資料である。２の石核の素材は扁平な亜円礫と推定され、自然面を打面として剥離作業を行い、その後作業面を打面にして剥片を剥離している。１・２ともに古代の遺構内堆積土からの出土である。石材は流紋岩である。

接合資料44（第420図、写真図版156）

同時割れを起こした剥片の接合資料である。自然面を打面としている。Ka-166は古代の遺構検出面、Ka-167は古代の遺構内堆積土からの出土である。石材は流紋岩である。

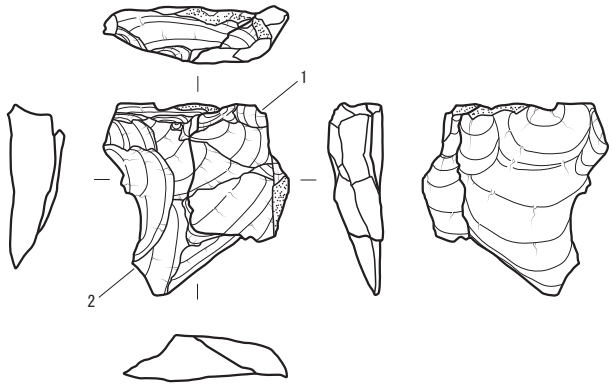


第416図　接合資料(41)

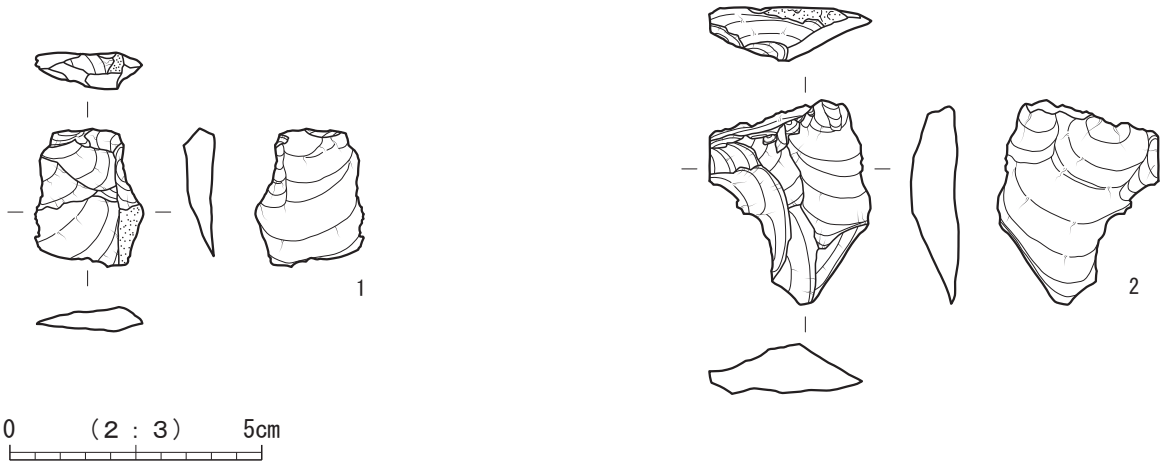


図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
1	Ka-160	-	SI88・P7	-	打製石器	二次加工のある剥片	Ⅲ	6.3×10.4×3.1	224.34	流紋岩	接合資料41、平坦打面、剥離角133°、表面＋裏面加工、同側縁に微細剥離痕あり、自然面あり	156
2	Ka-161	B区	Ⅳ層	S7	打製石器	石核	-	4.9×6.0×3.2	129.16	流紋岩	接合資料41、礫素材、打面転移あり、自然面あり	156

第417図　接合資料(42)



接合資料42



図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
1	Ka-163	-	遺構検出面	-	打製石器	剥片	-	2.7×2.1×0.7	3.37	流紋岩	接合資料42、平坦打面、剥離角101°、自然面あり	156
2	Ka-162	E区	Ⅳ層	-	打製石器	剥片	-	3.0×3.9×1.0	8.61	流紋岩	接合資料42、切子打面、剥離角120°、自然面あり	156

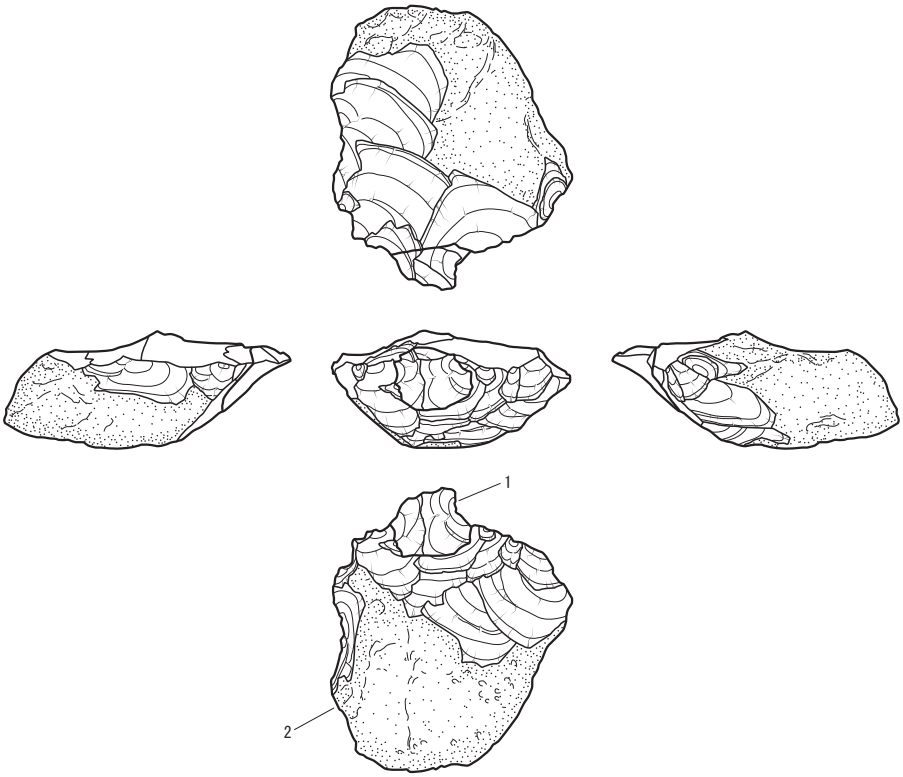
第418図　接合資料(43)

接合資料45（第420図、写真図版157）

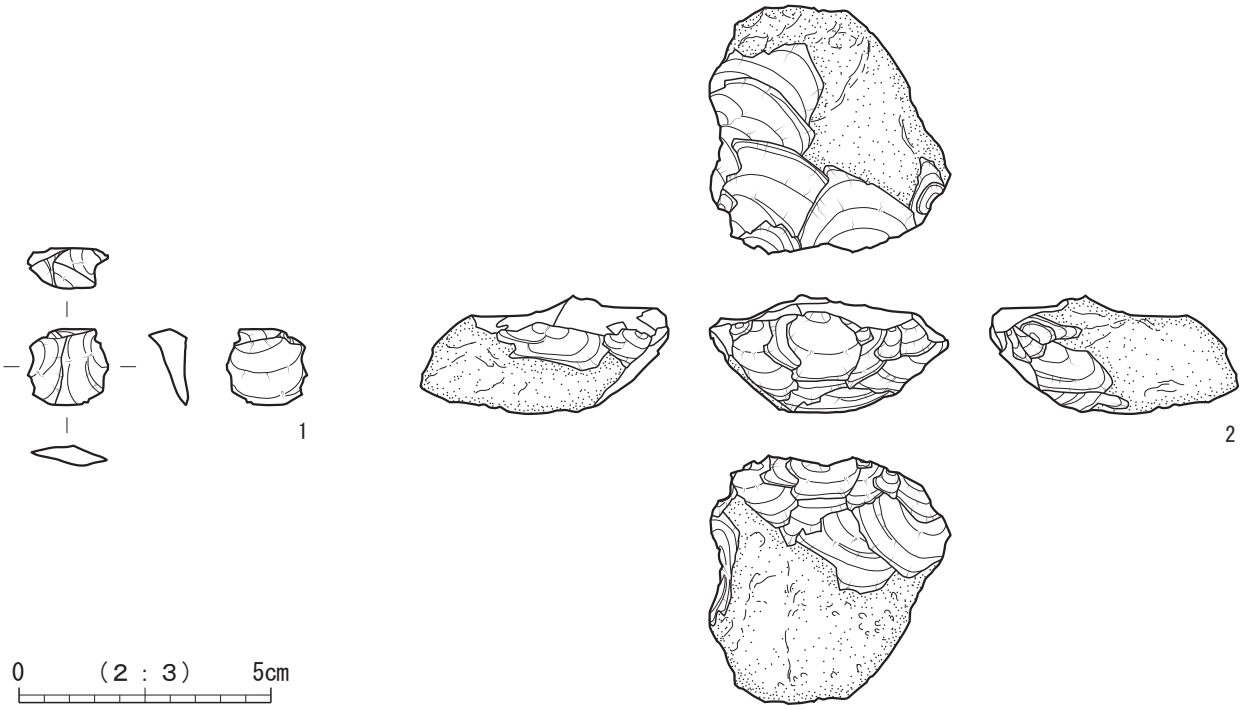
微細剥離痕のある剥片１点と剥片１点の接合資料である。１・２とも同一の剥離面を打面としている。１は縦長剥片である。表面の右側縁側に自然面を残しており、先行する剥離によって形成された稜線が伸びる方向に打撃を加えて剥離されている。２の剥片も同一方向からの加撃によって剥離されている。１は微細剥離痕のある剥片Ⅱ類である。１は古代の遺構内堆積土、２は古代の遺構検出面からの出土である。石材は流紋岩である。

接合資料46（第421図、写真図版157）

折れ面で接合した剥片である。表面は自然面であり、打面は剥片剥離時に失われている。Ka-170・171は、折面で接合したものである。Ka-170は古代の遺構内堆積土、Ka-171は弥生Ｃ区からの出土である。石材は流紋岩である。

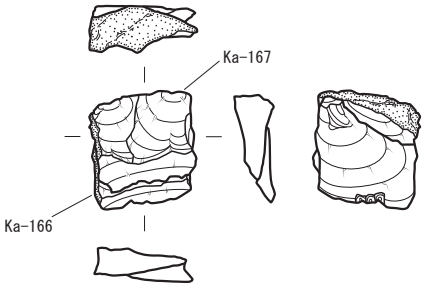


接合資料43

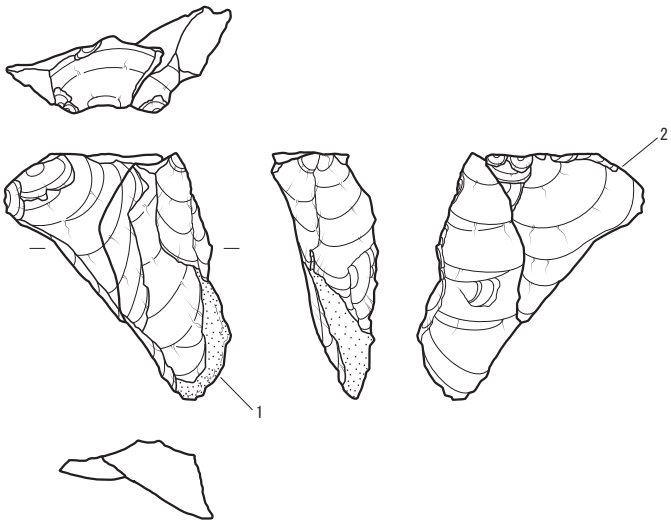


図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
1	Ka-165	-	SM162・堆積土	-	打製石器	剥片	-	1.5×1.5×0.8	1.06	流紋岩	接合資料43、切子打面、剥離角116°	156
2	Ka-164	-	SD66・堆積土	-	打製石器	石核	-	2.3×4.6×4.3	48.04	流紋岩	接合資料43、礫素材、打面転移あり、自然面あり	156

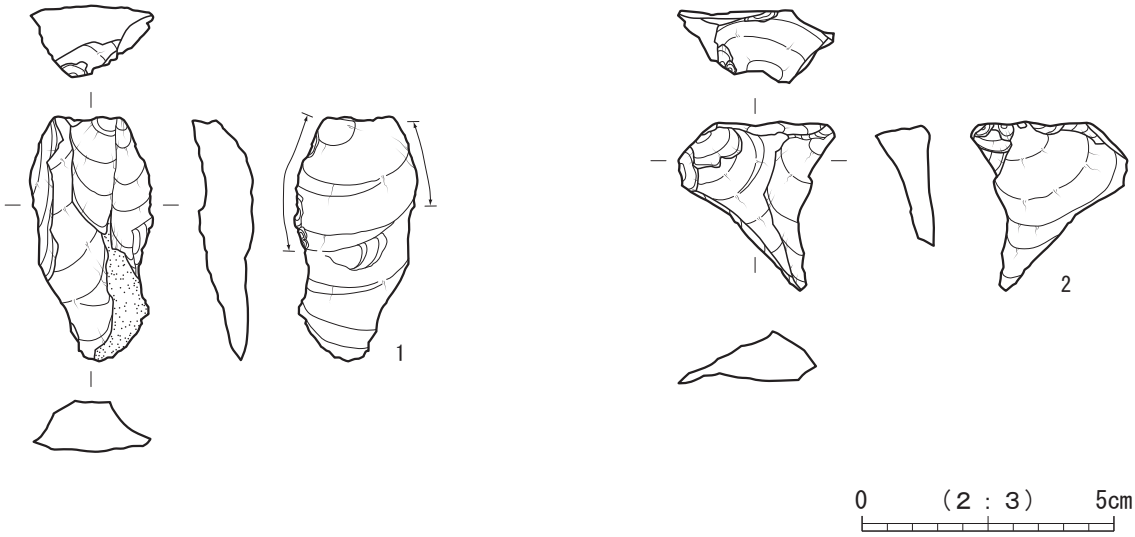
第419図　接合資料(44)



接合資料44

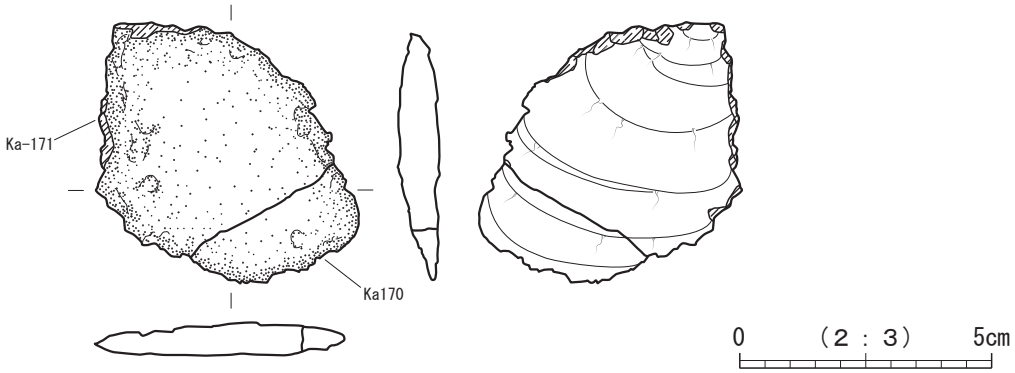


接合資料45



図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
	Ka-166	-	遺構検出面	-	打製石器	剥片	-	2.0×1.9×0.8	1.46	流紋岩	接合資料44、自然面打面、剥離角106°、自然面あり	156
	Ka-167	-	SI99・堆積土	-	打製石器	剥片	-	2.0×2.0×0.4	2.55	流紋岩	接合資料44、打面部欠損	156
1	Ka-169	-	SI113・堆積土	-	打製石器	微細剥離痕のある剥片	Ⅱ	4.8×2.4×1.2	12.18	流紋岩	接合資料45、平坦打面、剥離角132°、複縁辺に微細剥離痕あり、自然面あり	157
2	Ka-168	-	遺構検出面	-	打製石器	剥片	-	3.3×2.8×1.4	5.82	流紋岩	接合資料45、平坦打面、剥離角82°	157

第420図　接合資料(45)



接合資料46

図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
	Ka-170	-	SD76・堆積土	-	打製石器	剥片	-	1.7×3.3×0.8	3.78	流紋岩	接合資料46、打面部欠損、自然面あり	157
	Ka-171	C区	Ⅳ層	P180	打製石器	剥片	-	4.5×4.5×0.8	20.57	流紋岩	接合資料46、自然面打面、剥離角88°、自然面あり	157

第421図　接合資料(46)

接合資料47（第422～424図、写真図版157）

石核１点、微細剥離痕のある剥片４点、剥片２点の接合資料である。１は表面の下端縁に自然面を残し、２・３は表面の左側縁に自然面を残している。１～６は剥離面を打面として、連続的に剥離された剥片である。７は分割礫素材の石核であり、一部に自然面を残している。１は微細剥離痕のある剥片Ⅱ類であり、２・５・６はⅠ類である。１・３・４・５は古代の遺構内堆積土、２・６・７は古代の遺構検出面からの出土である。石材は流紋岩である。

接合資料48（第425図、写真図版157）

同時割れと考えられる剥片の接合資料である。末端に自然面を残している。打面は剥片剥離時に失われている。ともに古代の遺構内堆積土からの出土である。石材は流紋岩である。

接合資料49（第425図、写真図版158）

微細剥離痕のある剥片１点と剥片１点の接合資料である。１・２とも自然面を打面とし、同一方向からの加撃によって剥離されている。１は微細剥離痕のある剥片Ⅰ類である。ともに古代の遺構内堆積土からの出土である。石材は流紋岩である。

接合資料50（第426図、写真図版158）

同時割れと考えられる剥片の接合資料である。表面の右側縁側に自然面を残し、Ka-189は上端面に自然面を残している。Ka-188・189は同時割れを起こしている。Ka-188・189の剥離面を打面として、１が剥離されている。Ka-188・189は剥片素材の石核である。１・Ka-189は古代の遺構検出面、Ka-188は古代の遺構内堆積土からの出土である。石材は流紋岩である。

接合資料51（第426図、写真図版158）

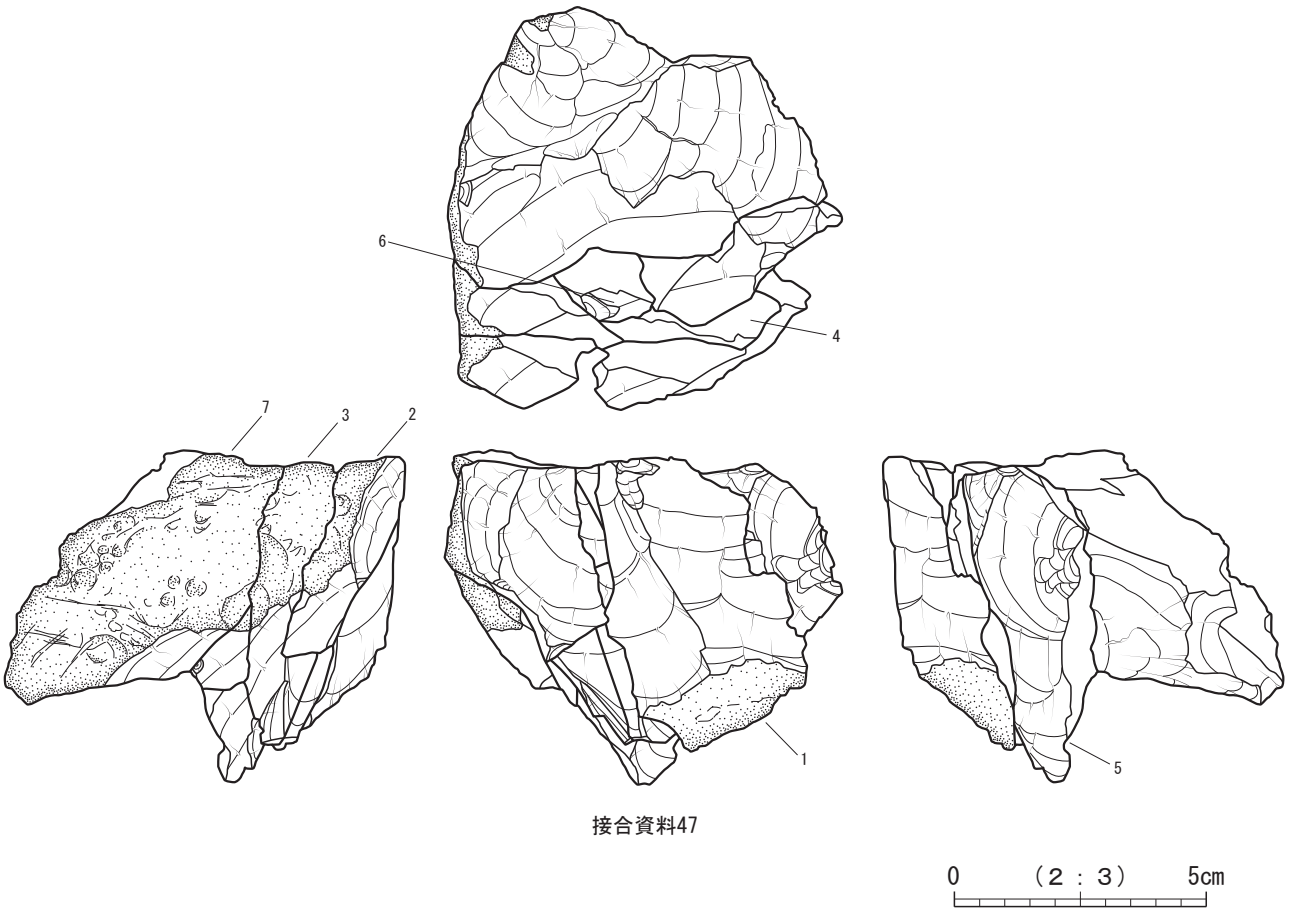
剥片２点の接合資料である。Ka-191は末端側に自然面を残している。Ka-190・191は剥離面を打面とし、打面転移が頻繁におこなわれている石核の一端から、剥離された縦長剥片である。ともに古代の遺構検出面からの出土である。石材は流紋岩である。

接合資料52（第427図、写真図版158）

石核１点、剥片１点の接合資料である。１は表面に自然面を残し、２は下端縁に自然面を残している。１は剥離面から成る面を打面とし、剥片素材の石核である２より剥離されている。Ka-193は古代の遺構検出面、Ka-192は弥生Ａ区からの出土である。石材は流紋岩である。

接合資料53（第428図、写真図版158）

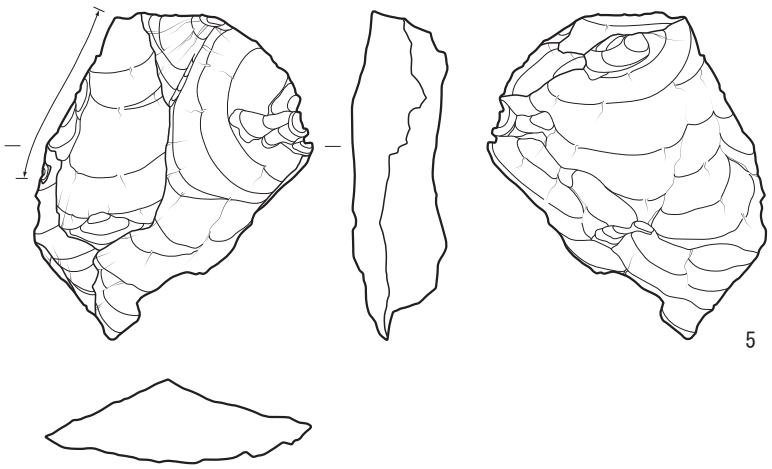
剥片２点の接合資料である。１は表面の左側縁に自然面を残している。１は節理面を打面とし、打撃を加えて剥離された剥片である。２の剥片も同一方向からの加撃によって剥離されているが、節理面に隣接する剥離面を打面としている。ともに古代の遺構内堆積土からの出土である。石材は流紋岩である。

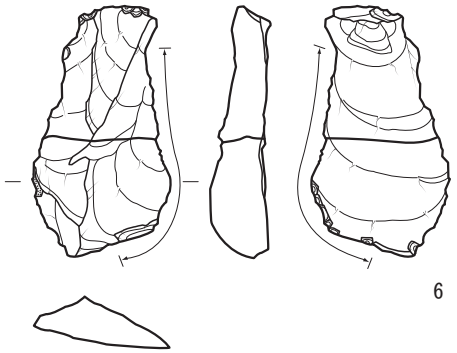


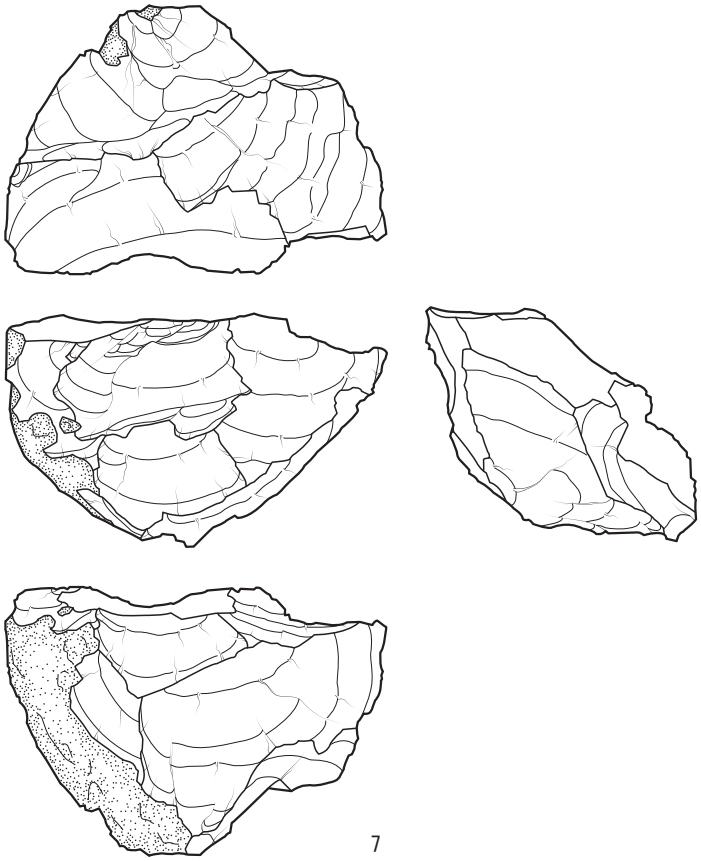
第422図　接合資料（47）

図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
1	Ka-181	-	SI113・堆積土	-	打製石器	微細剥離痕のある剥片	Ⅱ	6.0×3.7×1.4	24.98	流紋岩	接合資料47、平坦打面、剥離角121°、複縁辺に微細剥離痕あり	157
2	Ka-173	-	遺構検出面	-	打製石器	微細剥離痕のある剥片	Ⅰ	4.3×2.6×1.4	13.36	流紋岩	接合資料47、平坦打面、剥離角115°、1縁辺に微細剥離痕あり、自然面あり	157
3	Ka-179	-	SI113・堆積土	-	打製石器	剥片	-	4.4×3.5×1.6	18.94	流紋岩	接合資料47、平坦打面、剥離角105°、自然面あり	157
4	Ka-172	-	Pit735・堆積土	-	打製石器	剥片	-	4.3×3.6×0.9	10.73	流紋岩	接合資料47、線状打面、剥離角100°	157

第423図　接合資料(48)



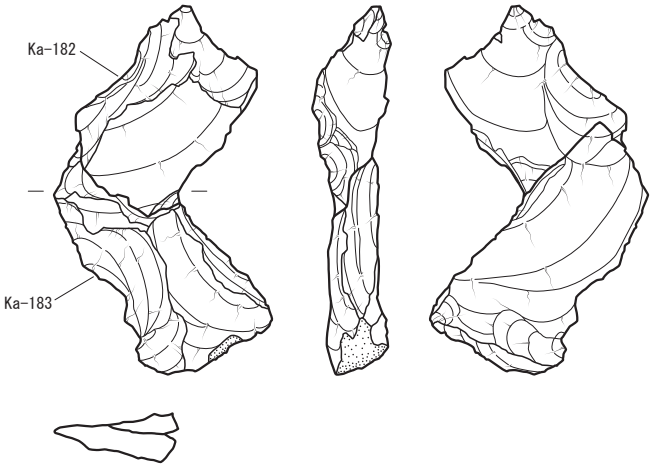




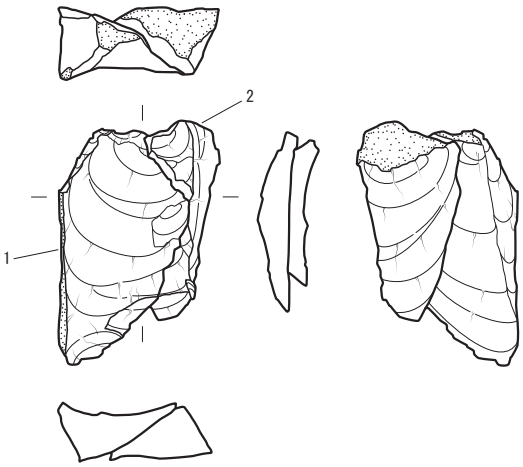
0　（2：3）　5cm

図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
5	Ka-176	-	SI99・堆積土	-	打製石器	微細剥離痕のある剥片	I	6.4×5.3×1.9	47.08	流紋岩	接合資料47、平坦打面、剥離角135°、1縁辺に微細剥離痕あり	157
6	Ka-174	-	遺構検出面	-	打製石器	微細剥離痕のある剥片	I	4.8×2.7×1.1	4.53	流紋岩	接合資料47、平坦打面、剥離角120°、1縁辺に微細剥離痕あり、自然面あり	157
7	Ka-175	-	遺構検出面	-	打製石器	石核	-	4.4×7.5×4.5	136.10	流紋岩	接合資料47、礫素材、打面転移あり、自然面あり	157

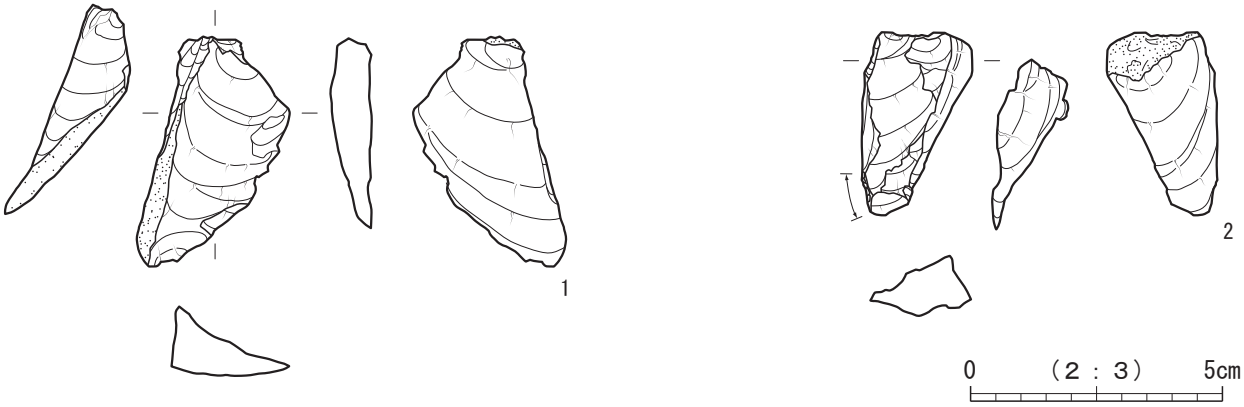
第424図　接合資料(49)



接合資料48

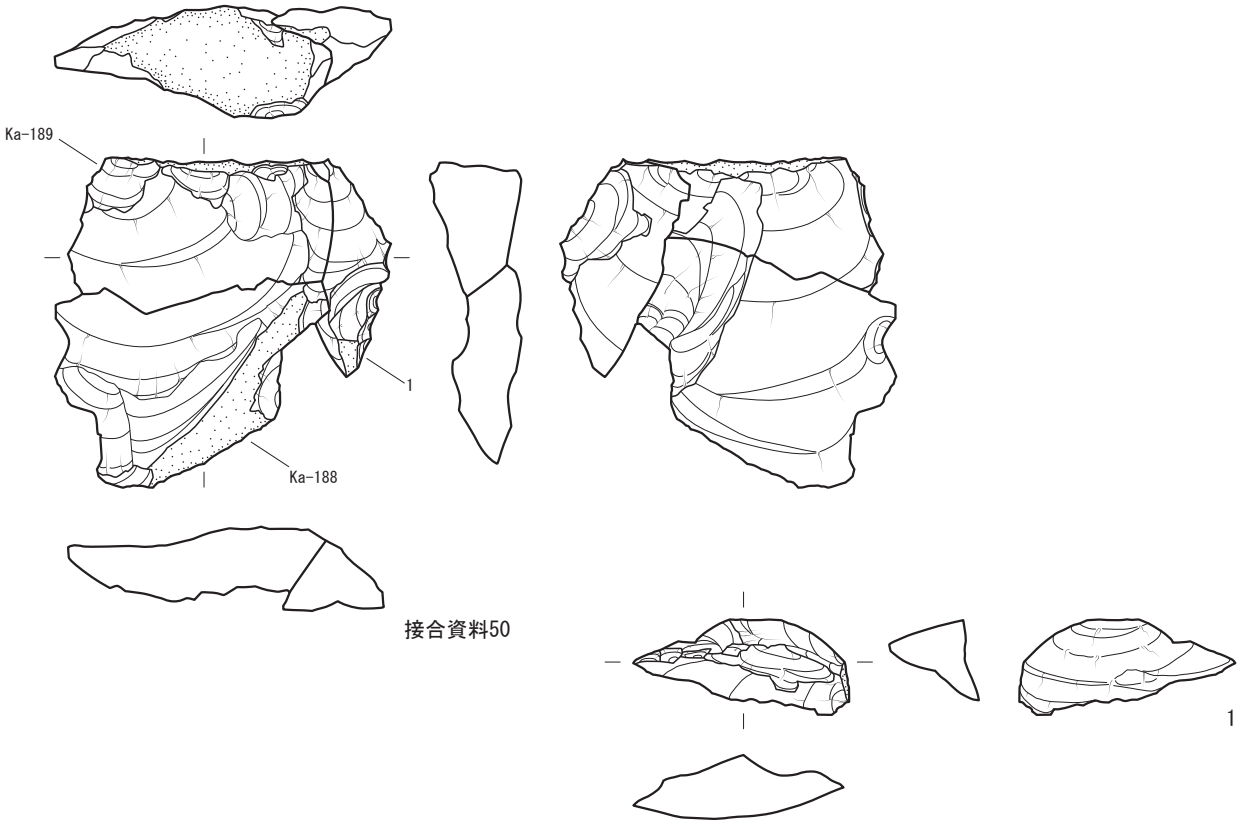


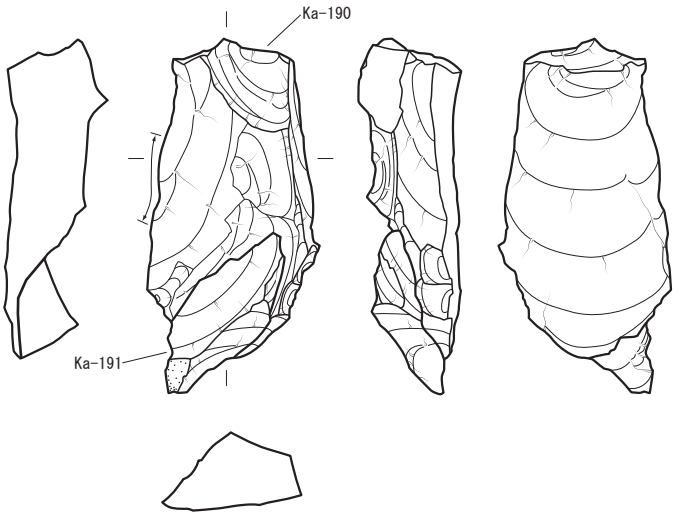
接合資料49



図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
	Ka-182	-	SD64・堆積土	-	打製石器	剥片	-	5.1×2.8×1.0	13.72	流紋岩	接合資料48、打面部欠損	157
	Ka-183	-	SD55・堆積土	-	打製石器	剥片	-	4.3×3.1×0.7	9.24	流紋岩	接合資料48、打面部欠損	157
1	Ka-185	-	SI113・堆積土	-	打製石器	剥片	-	4.1×2.3×1.4	9.70	流紋岩	接合資料49、自然面打面、剥離角108°、自然面あり	158
2	Ka-184	-	SI99・堆積土	-	打製石器	微細剥離痕のある剥片	I	3.6×2.1×1.2	6.48	流紋岩	接合資料49、自然面打面、剥離角152°、1縁辺に微細剥離痕あり、自然面あり	158

第425図　接合資料(50)



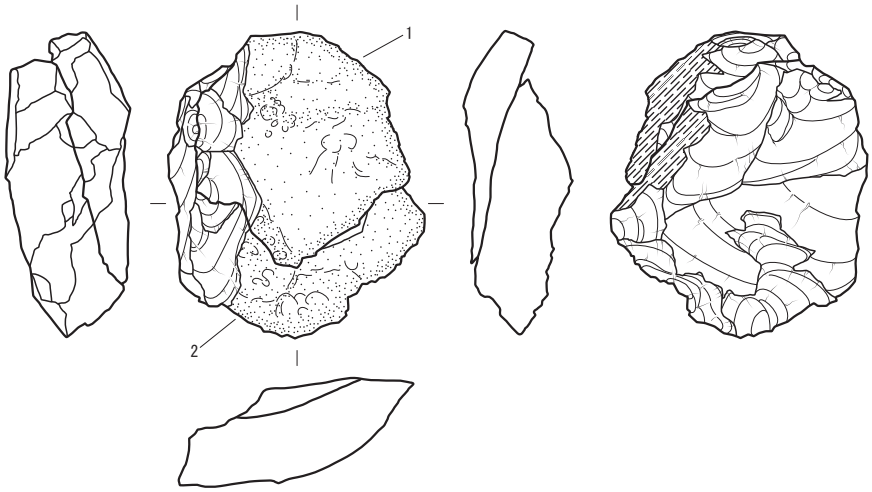


接合資料51

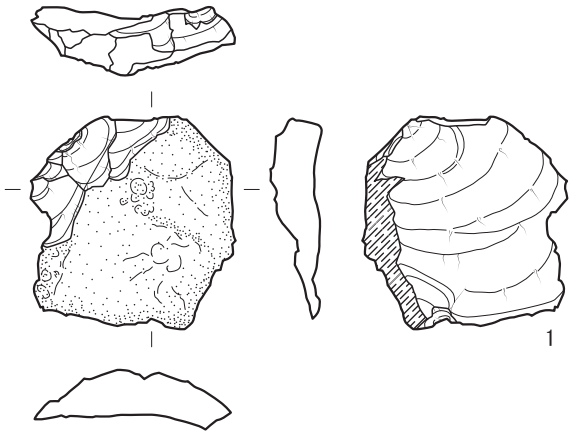
0　（2：3）　5cm

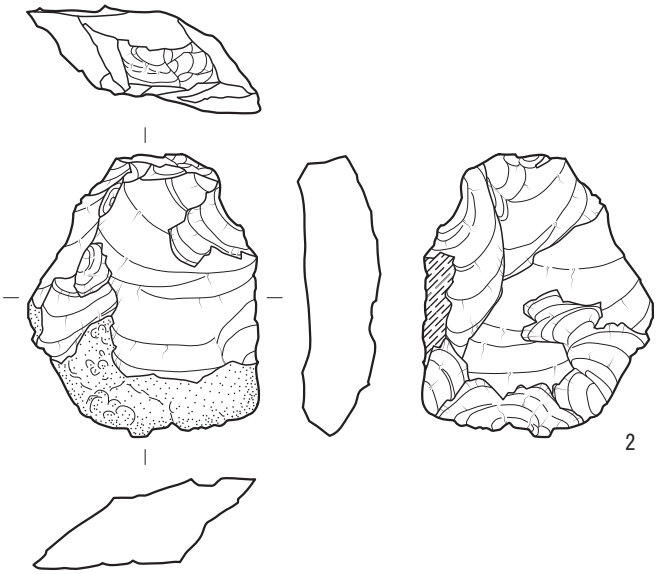
図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
1	Ka-187	-	遺構検出面	-	打製石器	剥片	-	1.8×4.2×1.4	7.59	流紋岩	接合資料50、平坦打面、剥離角90°	158
	Ka-188	-	SD55・堆積土	-	打製石器	剥片	-	2.1×2.0×1.0	22.09	流紋岩	接合資料50、打面部欠損、自然面あり	158
	Ka-189	-	遺構検出面	-	打製石器	剥片	-	3.1×5.3×2.1	29.78	流紋岩	接合資料50、打面部欠損、自然面あり	158
	Ka-190	-	遺構検出面	-	打製石器	剥片	-	6.3×3.3×1.7	30.98	流紋岩	接合資料51、平坦打面、剥離角115°	158
	Ka-191	-	遺構検出面	-	打製石器	剥片		4.9×1.5×1.1	4.49	流紋岩	接合資料51、打面部欠損、自然面あり	158

第426図　接合資料(51)



接合資料52

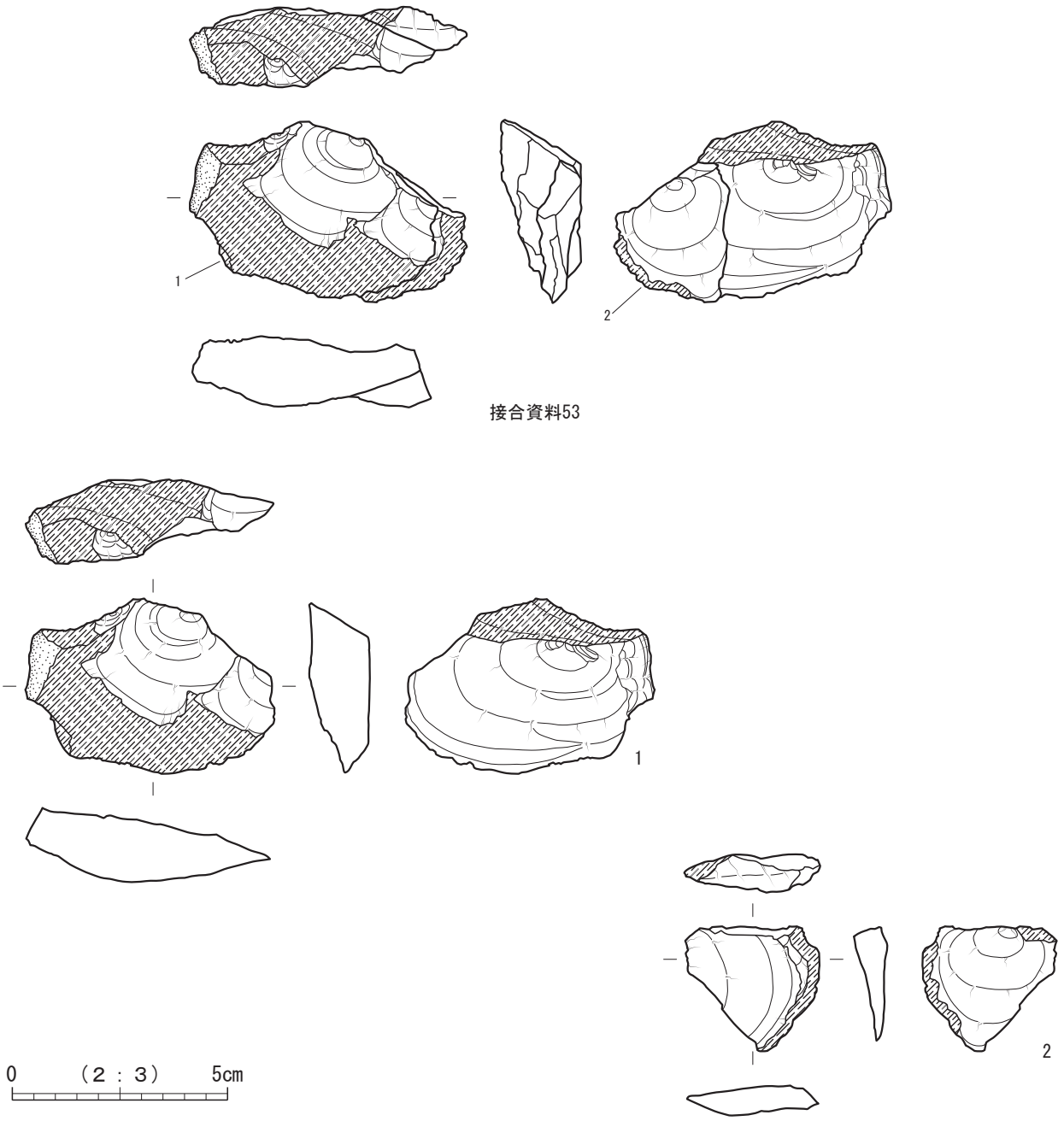




0　（2：3）　5cm

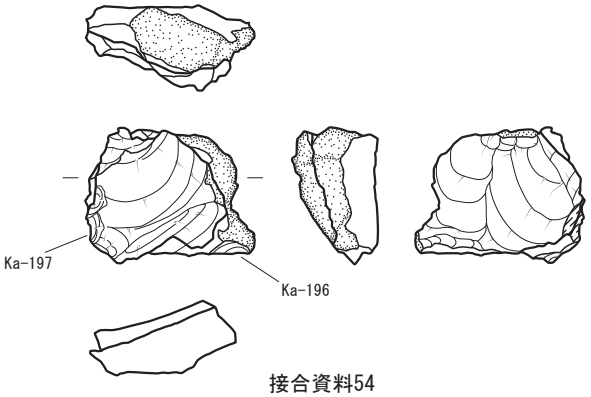
図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
1	Ka-193	-	遺構検出面	-	打製石器	剥片	-	4.2×3.9×1.2	16.35	流紋岩	接合資料52、切子打面、剥離角92°、自然面あり	158
2	Ka-192	A区	Ⅳ層	S6	打製石器	剥片	-	5.6×4.5×2.0	43.99	流紋岩	接合資料52、打面部欠損、自然面あり	158

第427図　接合資料(52)

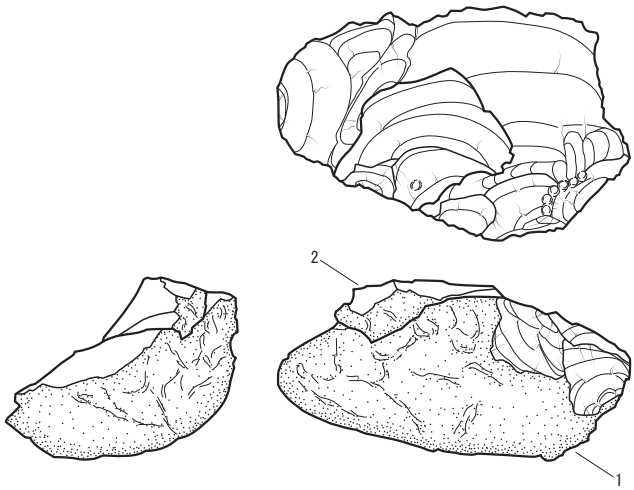


図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
1	Ka-194	-	SI126・堆積土	-	打製石器	剥片	-	4.0×5.7×1.9	34.60	流紋岩	接合資料53、平坦打面、剥離角126°、自然面あり	158
2	Ka-195	-	SI95・堆積土	-	打製石器	剥片	-	2.8×3.1×0.9	5.32	流紋岩	接合資料53、平坦打面、剥離角80°	158

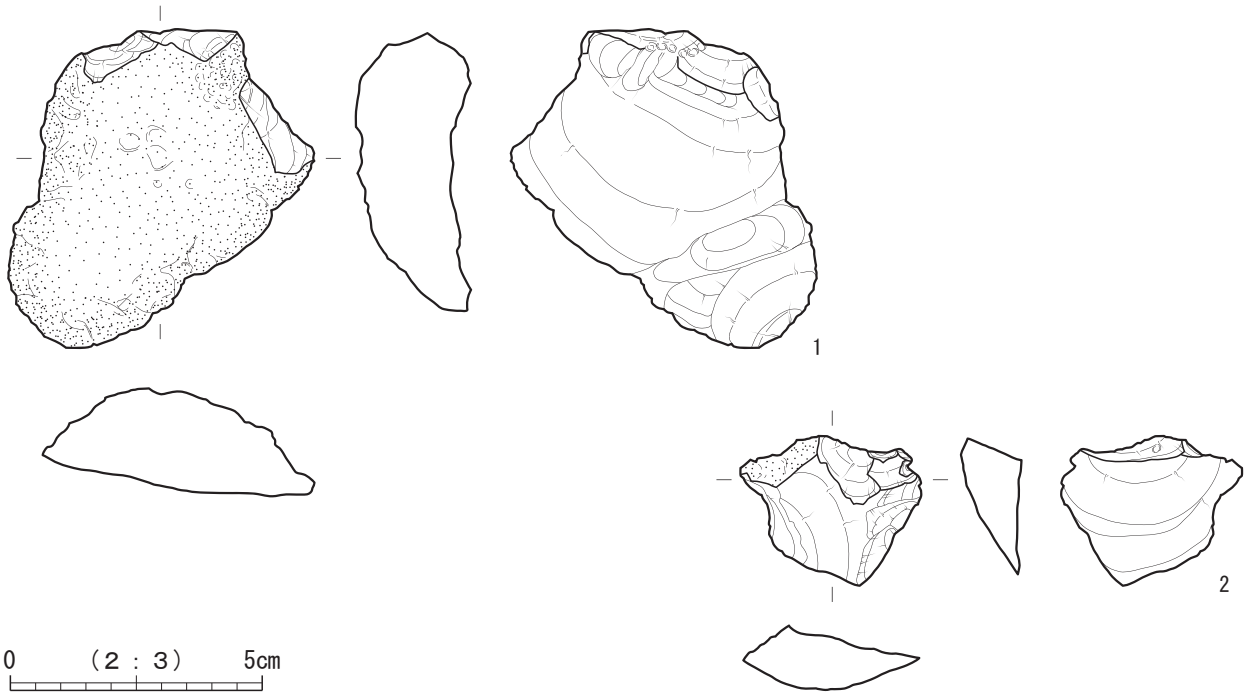
第428図　接合資料(53)



接合資料54

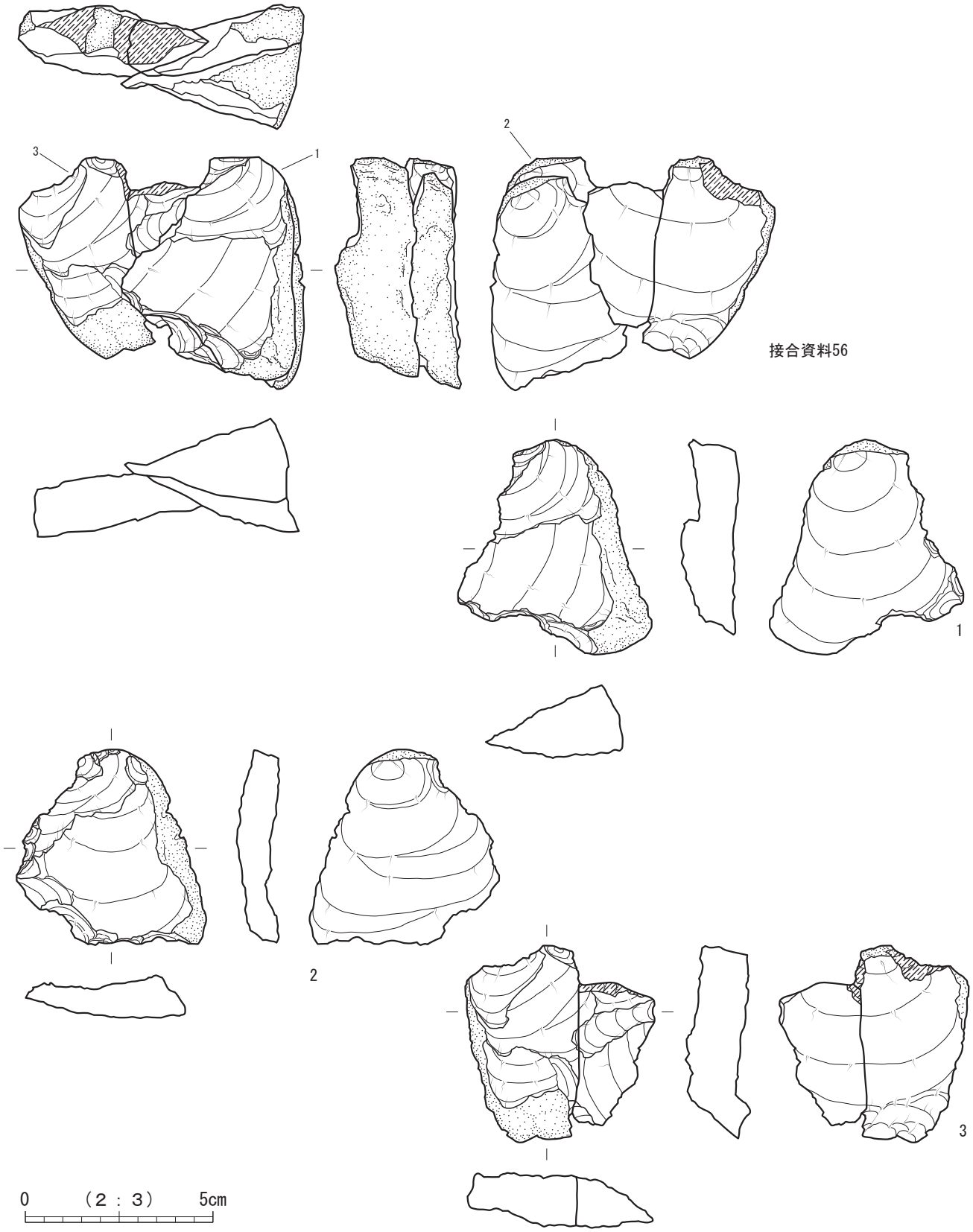


接合資料55



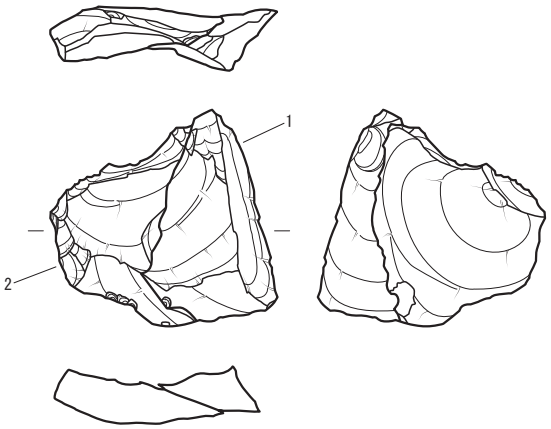
図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
	Ka-196	-	SI113・堆積土	-	打製石器	剥片	-	2.7×2.9×0.5	3.38	流紋岩	接合資料54、打面部欠損、自然面あり	158
	Ka-197	-	遺構検出面	-	打製石器	剥片	-	2.5×3.2×1.3	9.03	流紋岩	接合資料54、自然面打面、剥離角116°、自然面あり	158
1	Ka-198	-	SI109・堆積土	-	打製石器	剥片	-	5.9×5.3×2.2	74.25	流紋岩	接合資料55、平坦打面、剥離角129°、自然面あり	158
2	Ka-199	-	SI82・堆積土	-	打製石器	剥片	-	2.7×3.5×1.4	9.23	流紋岩	接合資料55、平坦打面、剥離角112°、自然面あり	158

第429図　接合資料(54)

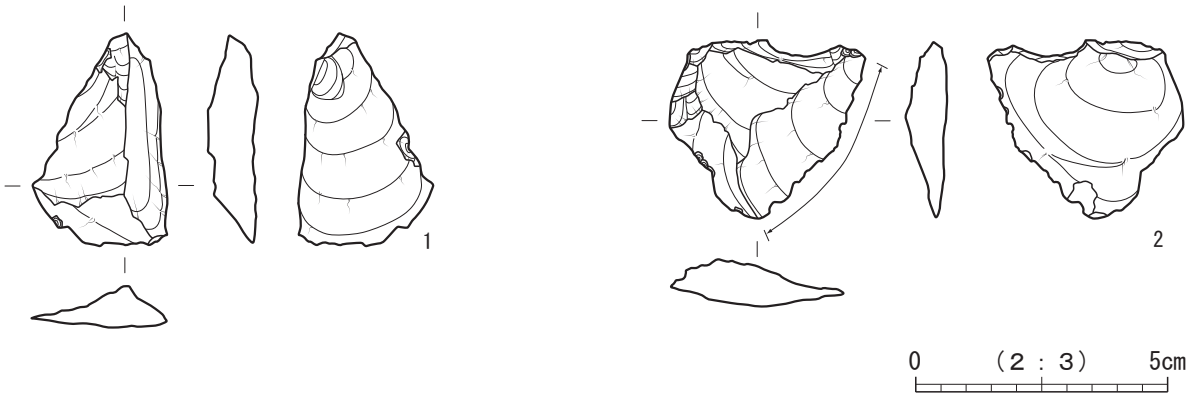


図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
1	Ka-202	-	遺構検出面	-	打製石器	剥片	-	5.4×5.0×2.0	37.46	流紋岩	接合資料56、自然面打面、剥離角115°、自然面あり	158
2	Ka-203	B区	Ⅳ層	S12	打製石器	二次加工のある剥片	Ⅰ	5.2×4.8×1.3	27.20	流紋岩	接合資料56、自然面打面、剥離角112°、表面加工、自然面あり	158
3	Ka-200	B区	Ⅳ層	-	打製石器	剥片	-	5.2×5.0×1.7	27.83	流紋岩	接合資料56、自然面打面、剥離角109°、自然面あり	158

第430図　接合資料(55)



接合資料59



図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
1	Ka-208	C区	Ⅳ層	S13	打製石器	剥片	-	4.2×2.6×1.0	6.99	流紋岩	接合資料59、平坦打面、剥離角137°	159
2	Ka-207	-	SD66・堆積土	-	打製石器	微細剥離痕のある剥片	Ⅰ	3.5×3.6×1.1	9.27	流紋岩	接合資料59、平坦打面、剥離角119°、1縁辺に微細剥離痕あり	159

第431図　接合資料(56)

接合資料54（第429図、写真図版158）

同時割れと考えられる剥片の接合資料である。表面の右側縁側に自然面を残しており、自然面を打面としている。Ka-196は古代の遺構内堆積土、Ka-197は古代の検出面からの出土である。石材は流紋岩である。

接合資料55（第429図、写真図版158）

同時割れと考えられる剥片の接合資料である。１は表面に自然面を残し、２は表面の左側縁に自然面を残している。剥離面を打面としており、１の打面には数度の打撃痕が観察される。１、２は潜在割れにより二分されたものである。ともに古代の遺構内堆積土からの出土である。石材は流紋岩である。

接合資料56（第430図、写真図版158）

二次加工のある剥片１点と剥片２点の接合資料である。１・２は表面の右側縁側に自然面を残し、３は左側縁に自然面を残している。３は節理が影響して同時割れを起こしている。自然面を打面として連続的に剥離された剥片である。２は二次加工のある剥片Ⅰ類である。１は古代の遺構検出面、２・３は弥生Ｂ区からの出土である。石材は流紋岩である。

接合資料59（第431図、写真図版159）

微細剥離痕のある剥片１点と剥片１点の接合資料である。１は剥離面を打面とし、打撃を加えて剥離された剥片である。１と２は同一作業面で剥片剥離作業を行っているが、打面を異にして剥離された剥片である。２は微細剥離痕のある剥片Ⅰ類である。１は弥生Ｃ区、２は古代の遺構内堆積土からの出土である。石材は流紋岩である。

接合資料60（第432図、写真図版159）

二次加工のある剥片１点と剥片１点の接合資料である。１は表面に自然面を残しており、剥離面を打面とし、打撃を加えて剥離された剥片である。２は90°の打面転移を行い剥離面を打面とし、打撃を加えて剥離された剥片である。１は二次加工のある剥片Ⅰ類である。ともに古代の遺構検出面からの出土である。石材は流紋岩である。

接合資料61（第433図、写真図版159）

微細剥離痕のある剥片１点と剥片１点の接合資料である。ともに自然面を打面としている。１は先行する剥離によって形成された稜線が伸びる方向に打撃を加えて剥離された剥片である。２の剥片も同一方向からの加撃によって剥離されているが垂直割れを起こしている。２は微細剥離痕のある剥片Ⅰ類である。１は古代の遺構内堆積土、２は弥生Ｂ区からの出土である。石材は珪質頁岩である。

接合資料62（第433図、写真図版159）

剥片２点の接合資料である。ともに表面に自然面を残している。１は自然面を打面とし、打撃を加えて剥離された剥片である。２は90°の打面転移を行い剥離面を打面とし、打撃を加えて剥離された剥片である。１は古代の遺構検出面、２は古代の遺構内堆積土からの出土である。石材は流紋岩である。

接合資料63（第434図、写真図版159）

石核１点と二次加工のある剥片１点の接合資料である。１の縦長剥片は表面の末端側に自然面を残しており、打面は線状打面である。２は剥離面を打面として剥離されている。１は二次加工のある剥片Ⅱ類である。２は剥片素材の石核である。１は古代の遺構検出面、２は古代の遺構内堆積土からの出土である。石材は流紋岩である。

接合資料64（第435図、写真図版159）

節理による同時割れと考えられる剥片の接合資料である。剥離面を打面とし、先行する剥離によって形成された稜線が伸びる方向に打撃を加えて剥離された縦長剥片である。ともに古代の遺構検出面からの出土である。石材は流紋岩である。

接合資料65（第435図、写真図版159）

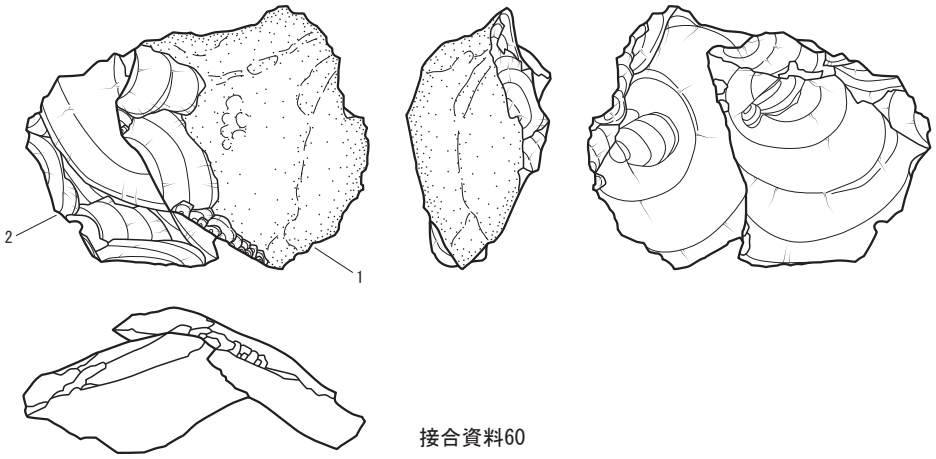
剥片３点の接合資料である。自然面を打面とし、連続的に剥離された剥片である。Ka-219･220は弥生Ｄ区、Ka-221は古代の遺構検出面からの出土である。石材は流紋岩である。

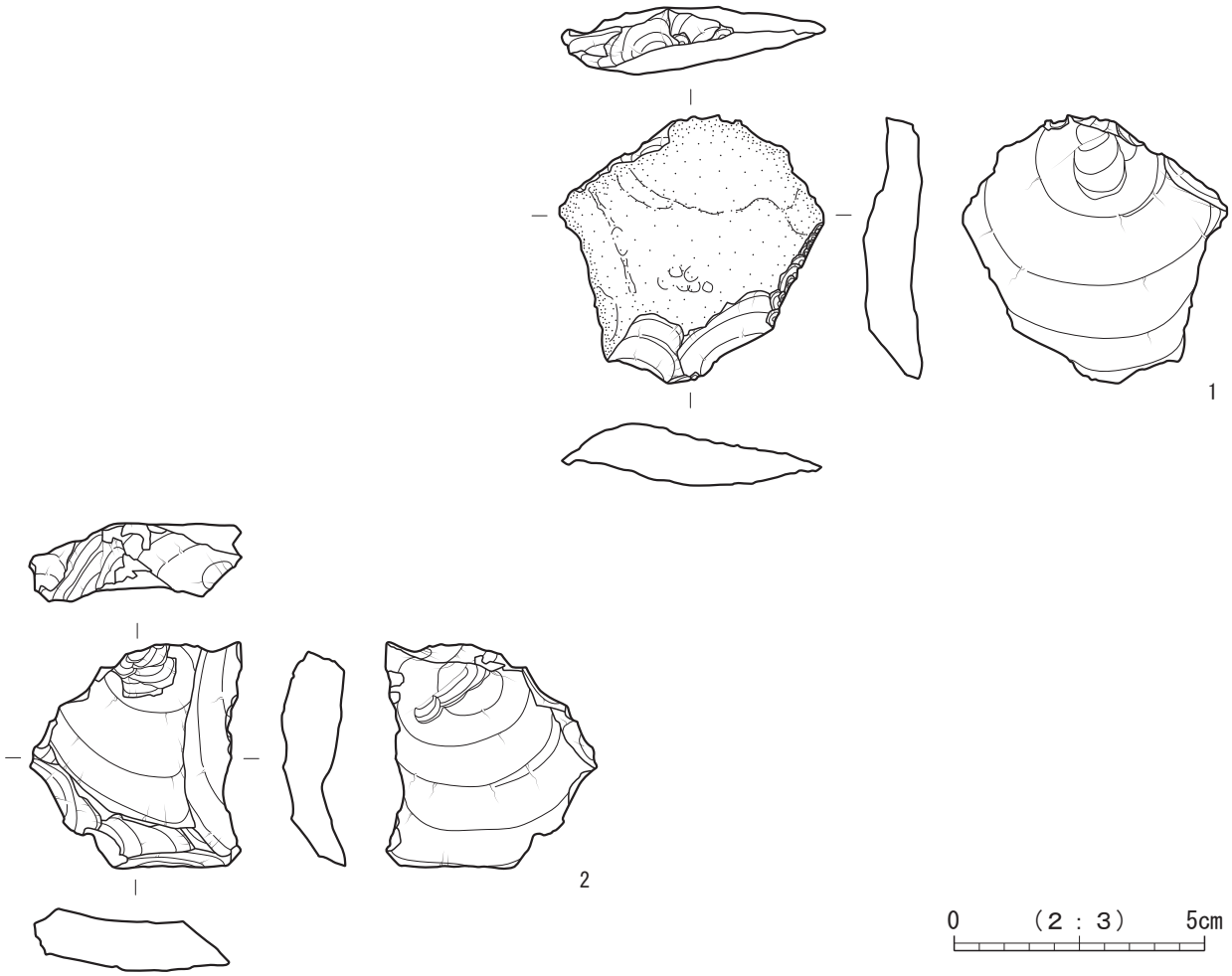
接合資料66（第436・437図、写真図版159）

剥片２点と石錐に転用された石核１点の接合資料である。１は原礫を分割した際の剥片であり、剥片剥離作業は行われていない。３は原礫を分割後、剥片素材の石核として剥片剥離作業が行われており、２はその一連の作業によって剥離されている。３は剥片剥離が進行し残核となった後、その形状を利用し石錐として転用されたものと考えられる。１～３は弥生Ｃ区からの出土である。石材は流紋岩である。

接合資料67（第438図、写真図版160）

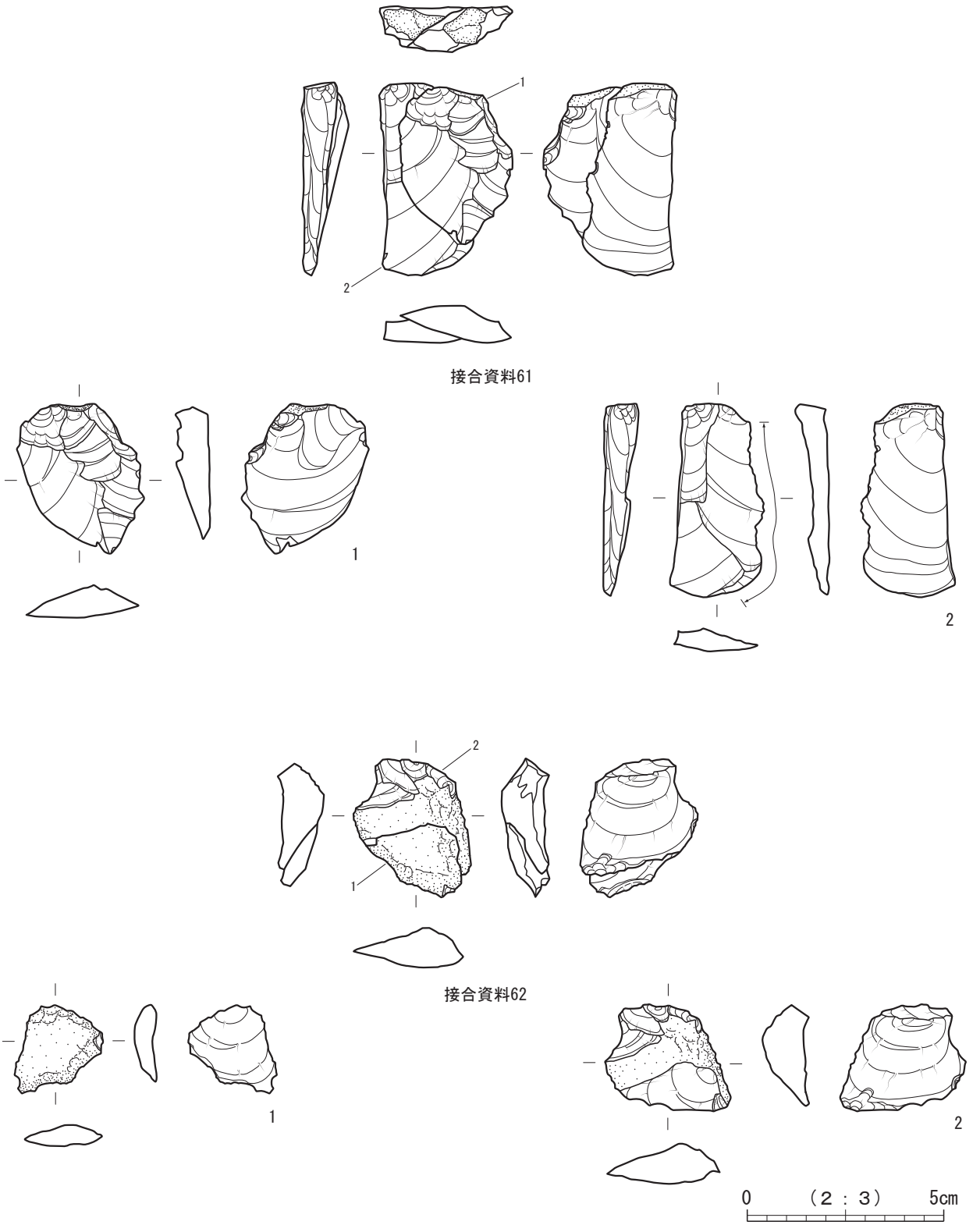
剥片２点の接合資料である。ともに表面の右側縁側に自然面を残している。１は剥離面を打面とし、打撃を加えて剥離された剥片である。２の剥片も同一方向からの加撃によって剥離している。ともに弥生Ｃ区からの出土である。石材は流紋岩である。





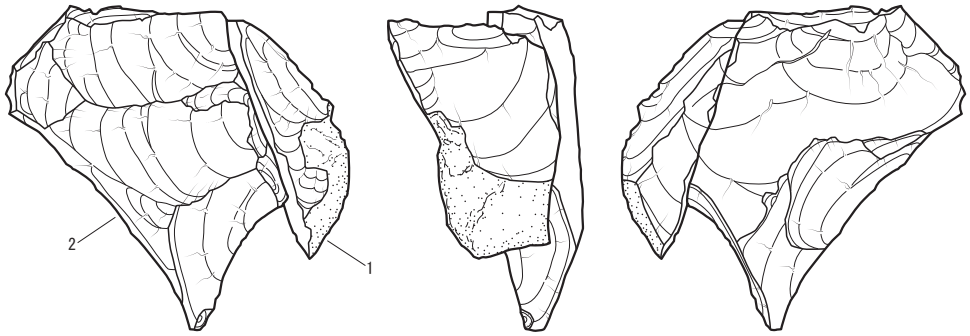
図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
1	Ka-210	-	遺構検出面	-	打製石器	二次加工のある剥片	I	5.2×5.2×1.3	26.94	流紋岩	接合資料60、切子打面、剥離角116°、表面加工、自然面あり	159
2	Ka-209	-	遺構検出面	-	打製石器	剥片	-	4.4×3.9×1.5	23.31	流紋岩	接合資料60、平坦打面、剥離角112°	159

第432図　接合資料(57)

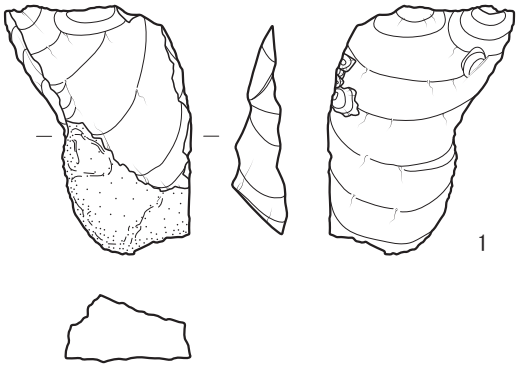


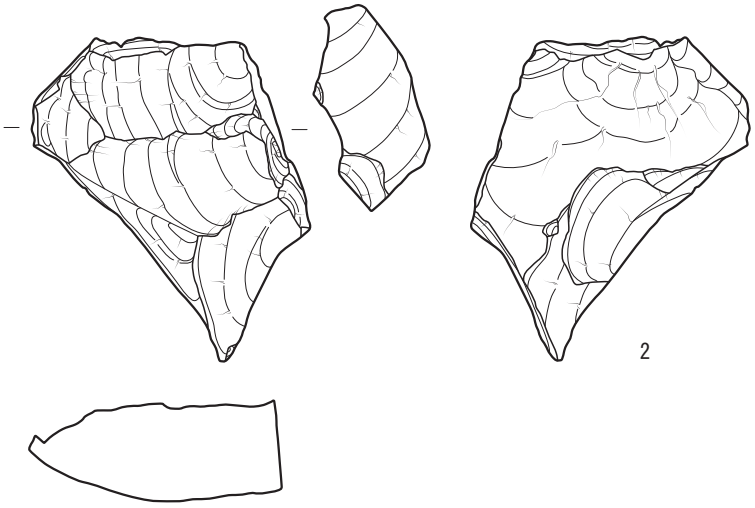
図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
1	Ka-211	-	SD43・堆積土	-	打製石器	剥片	-	3.6×3.0×0.9	9.43	珪質頁岩	接合資料61、自然面打面、剥離角117°、自然面あり	159
2	Ka-212	B区	Ⅳ層	S93	打製石器	微細剥離痕のある剥片	Ⅰ	4.9×2.3×0.9	7.96	珪質頁岩	接合資料61、自然面打面、剥離角100°、1縁辺に微細剥離痕あり、自然面あり	159
1	Ka-213	-	遺構検出面	-	打製石器	剥片	-	2.1×1.9×0.6	2.29	流紋岩	接合資料62、自然面打面、剥離角97°、自然面あり	159
2	Ka-214	-	SI99・周溝	-	打製石器	剥片	-	2.6×2.9×1.1	7.46	流紋岩	接合資料62、平坦打面、剥離角123°、自然面あり	159

第433図　接合資料(58)



接合資料63

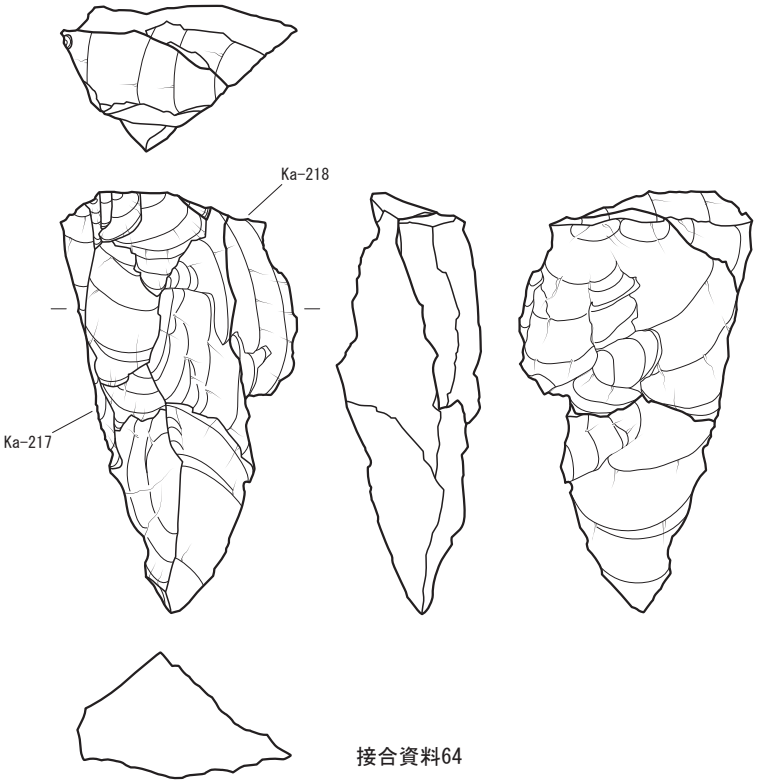




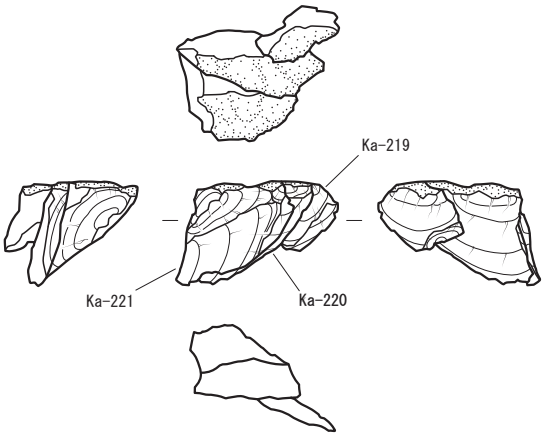
0　（2：3）　5cm

図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
1	Ka-215	-	遺構検出面	-	打製石器	二次加工のある剥片	Ⅱ	4.9×3.2×1.4	21.70	流紋岩	接合資料63、線状打面、剥離角87°、裏面加工、自然面あり	159
2	Ka-216	-	SA1・堆積土	-	打製石器	石核	-	6.2×4.8×2.2	59.30	流紋岩	接合資料63、剥片素材、打面転移あり	159

第434図　接合資料(59)



接合資料64

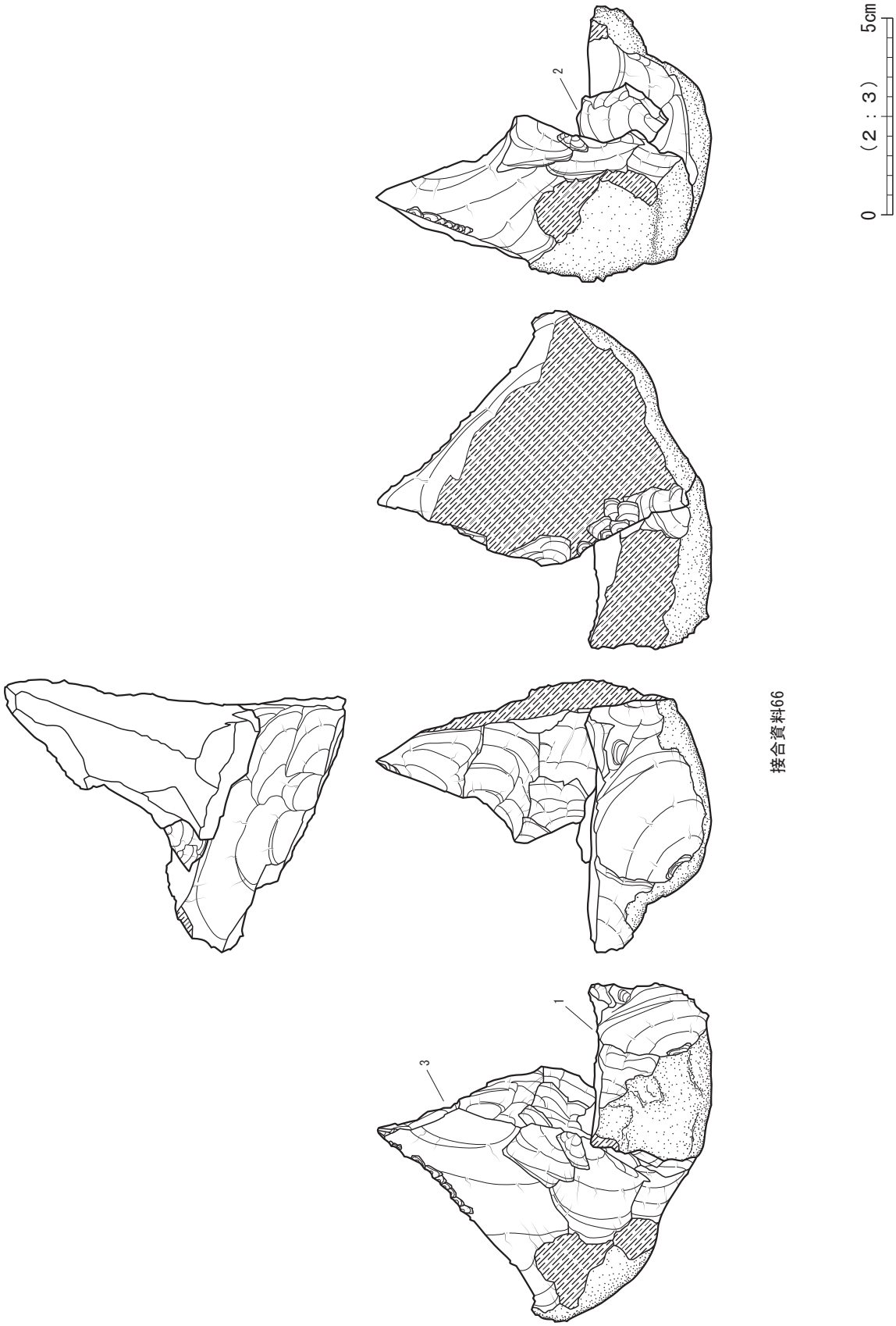


接合資料65

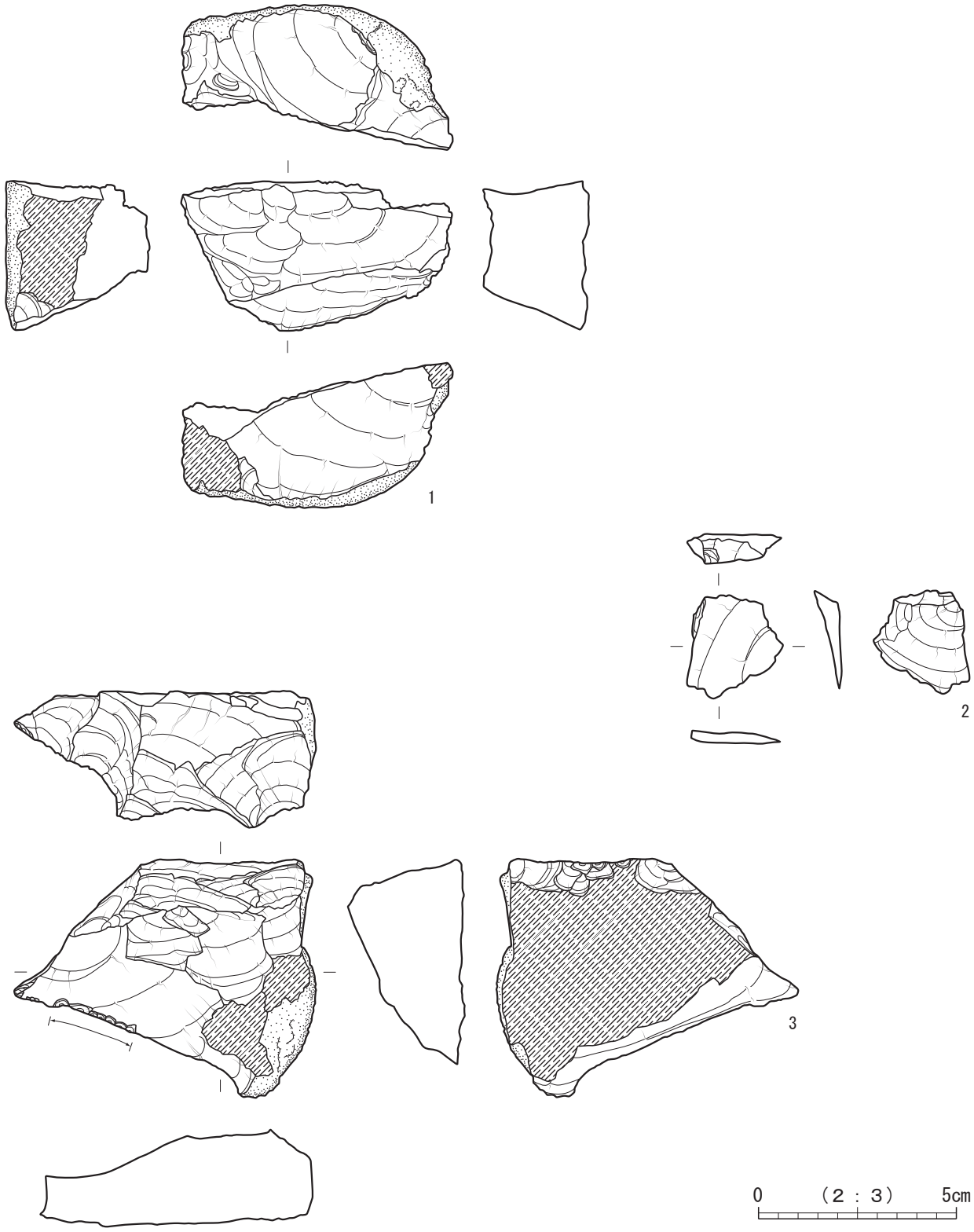
0　（2：3）　5cm

図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
	Ka-217	-	遺構検出面	-	打製石器	剥片	-	8.3×3.4×2.3	51.41	流紋岩	接合資料64、平坦打面、剥離角112°	159
	Ka-218	-	遺構検出面	-	打製石器	剥片	-	4.2×4.5×1.1	16.91	流紋岩	接合資料64、平坦打面、剥離角118°	159
	Ka-221	-	遺構検出面	-	打製石器	剥片	-	1.2×1.7×0.7	3.41	流紋岩	接合資料65、自然面打面、剥離角118°、自然面あり	159
	Ka-220	D区	Ⅳ層	-	打製石器	剥片	-	2.1×2.5×0.7	3.20	流紋岩	接合資料65、自然面打面、剥離角113°、自然面あり	159
	Ka-219	D区	Ⅳ層	-	打製石器	剥片	-	3.1×2.2×0.9	0.99	流紋岩	接合資料65、自然面打面、剥離角126°、自然面あり	159

第435図　接合資料(60)

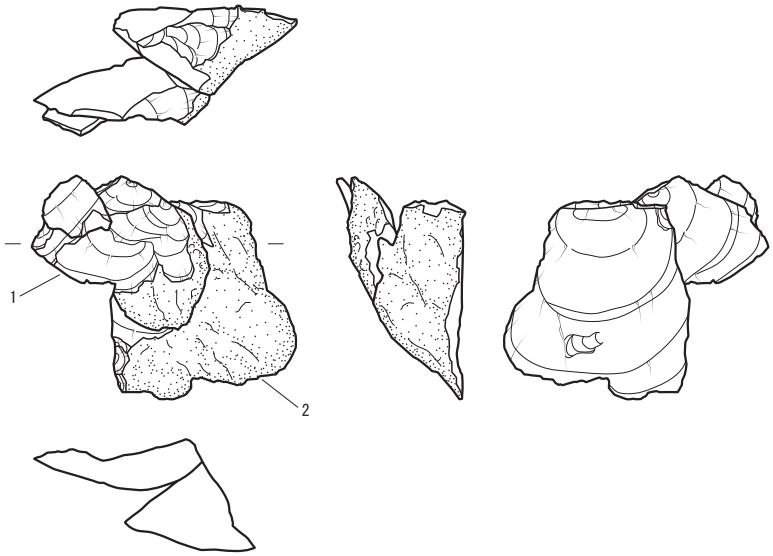


第436図　接合資料(61)

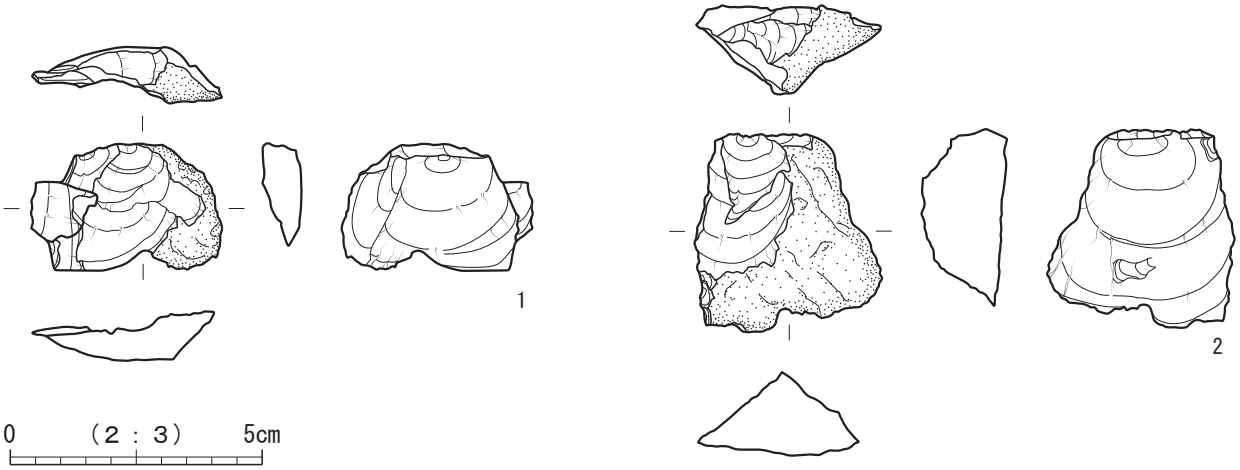


図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
1	Ka-222	C区	Ⅳ層	S105	打製石器	剥片	-	3.7×6.7×3.6	87.04	流紋岩	接合資料66、打面部欠損、自然面あり	159
2	Ka-224	C区	Ⅳ層	S200	打製石器	剥片	-	2.5×2.3×0.6	2.37	流紋岩	接合資料66、平坦打面、剥離角130°	159
3	Ka-223	C区	Ⅳ層	S112	打製石器	微細剥離痕のある剥片	I	5.9×7.6×3.4	115.69	流紋岩	接合資料66、切子打面、剥離角83°、1縁辺に微細剥離痕あり、自然面あり	159

第437図　接合資料(62)



接合資料67



図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
1	Ka-226	C区	Ⅳ層	S184	打製石器	剥片	-	2.5×3.7×1.1	7.52	流紋岩	接合資料67、平坦打面、剥離角114°、自然面あり	160
2	Ka-225	C区	Ⅳ層	S100	打製石器	剥片	-	3.9×3.6×1.6	18.09	流紋岩	接合資料67、切子打面、剥離角113°、自然面あり	160

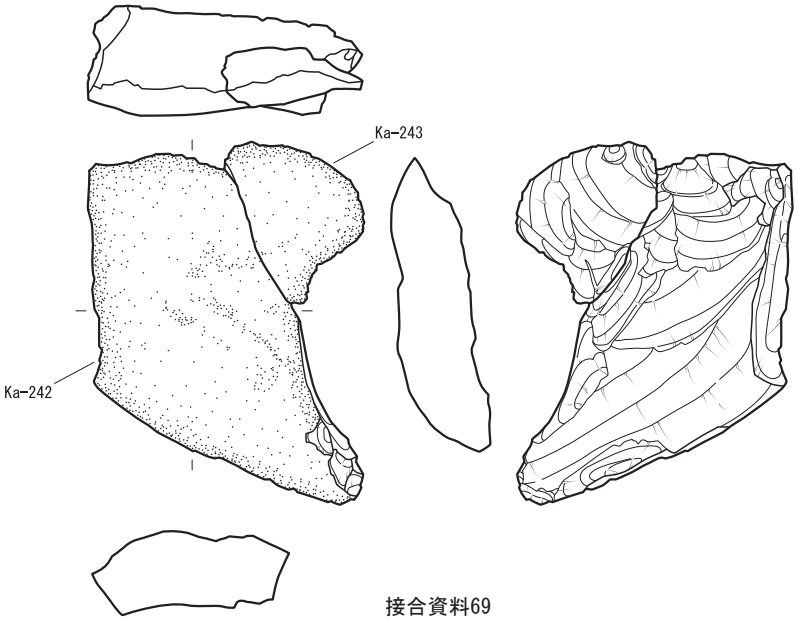
第438図　接合資料(63)

接合資料69（第439図、写真図版160）

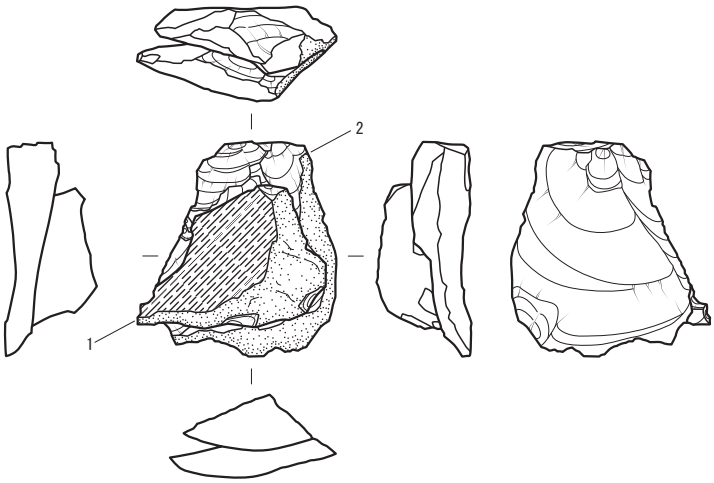
節理が影響し同時割れを起こしたと考えられる剥片の接合資料である。表面は自然面である。Ka-242は古代の遺構検出面、Ka-243は弥生Ｂ区からの出土である。石材は流紋岩である。

接合資料70（第439図、写真図版160）

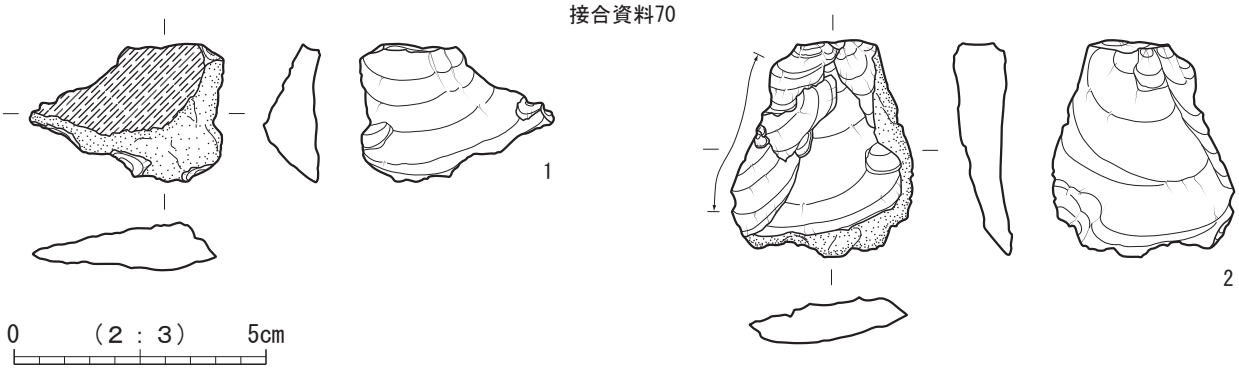
二次加工のある剥片１点と微細剥離痕のある剥片１点の接合資料である。ともに表面の右側縁側から下端縁に自然面を残している。１と２は同一方向からの加撃によって剥離されているが、打面側は剥離の際に失われている。１の表面には節理面が認められる。２の剥片は剥離面を打面として剥離されている。１は二次加工のある剥片Ⅲ類であり、２は微細剥離痕のある剥片Ⅰ類である。１は弥生Ａ区、２は古代の遺構内堆積土からの出土である。石材は流紋岩である。



接合資料69

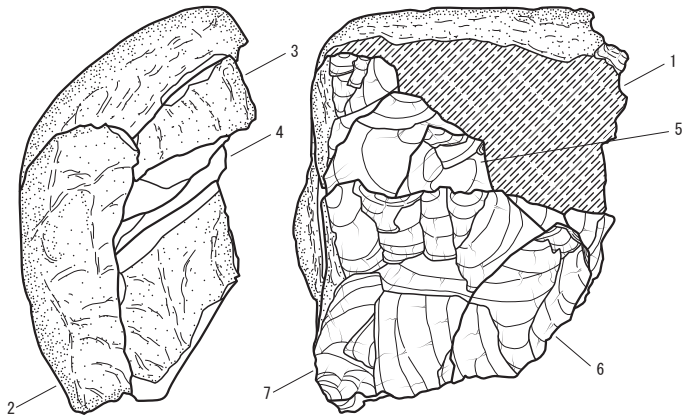


接合資料70

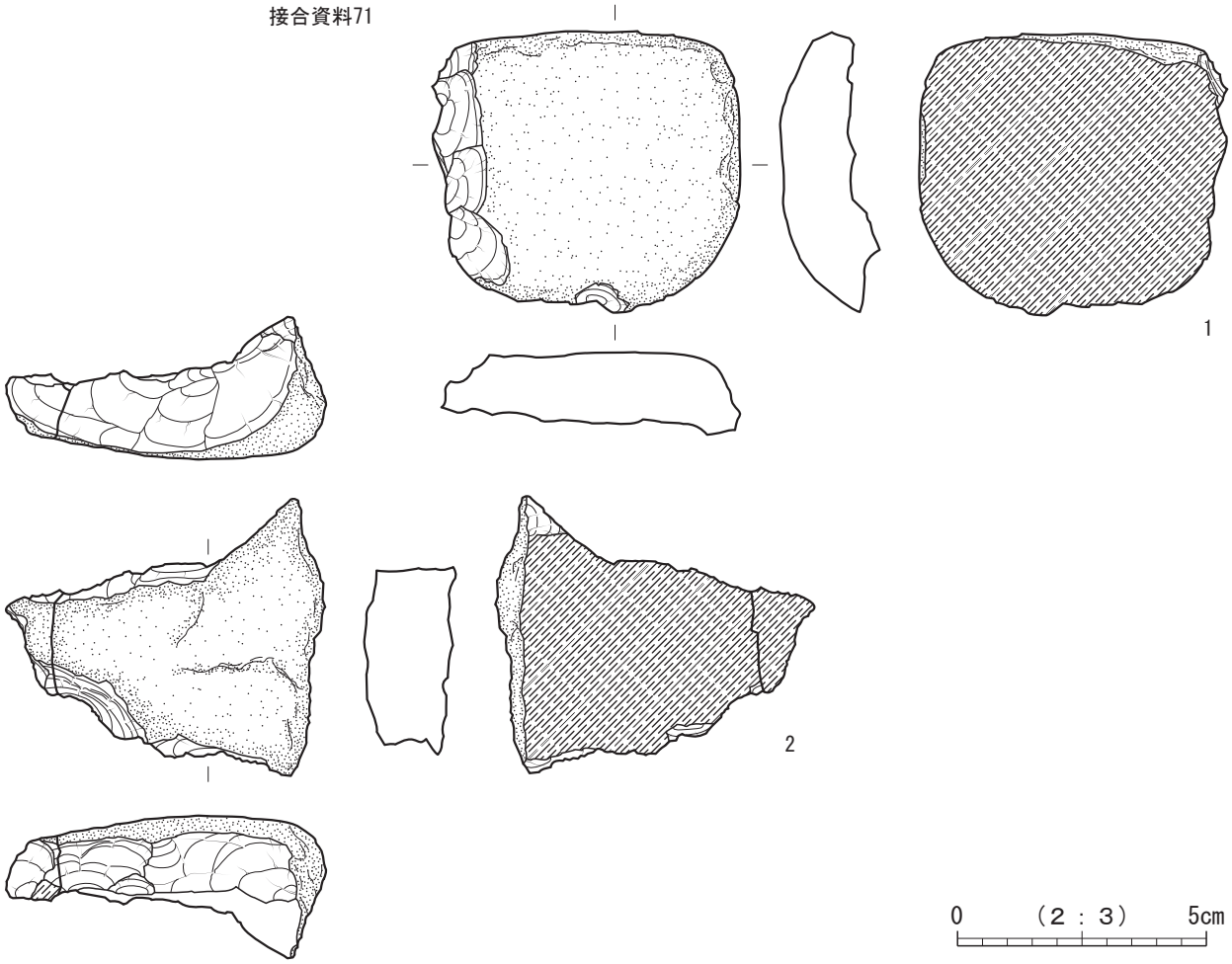


図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
	Ka-242	-	遺構検出面	-	打製石器	剥片	-	6.5×3.9×1.9	51.52	流紋岩	接合資料69、打面部欠損、自然面あり	160
	Ka-243	B区	Ⅳ層	S14	打製石器	剥片	-	3.0×2.7×1.2	6.17	流紋岩	接合資料69、打面部欠損、自然面あり	160
1	Ka-244	A区	Ⅳ層	-	打製石器	二次加工のある剥片	Ⅲ	2.7×3.7×1.1	8.09	流紋岩	接合資料70、打面部欠損、表面＋裏面加工、自然面あり	160
2	Ka-245	-	SI99・堆積土	-	打製石器	微細剥離痕のある剥片	Ⅰ	4.3×3.6×1.2	13.66	流紋岩	接合資料70、平坦打面、剥離角104°、1縁辺に微細剥離痕あり、自然面あり	160

第439図　接合資料(64)

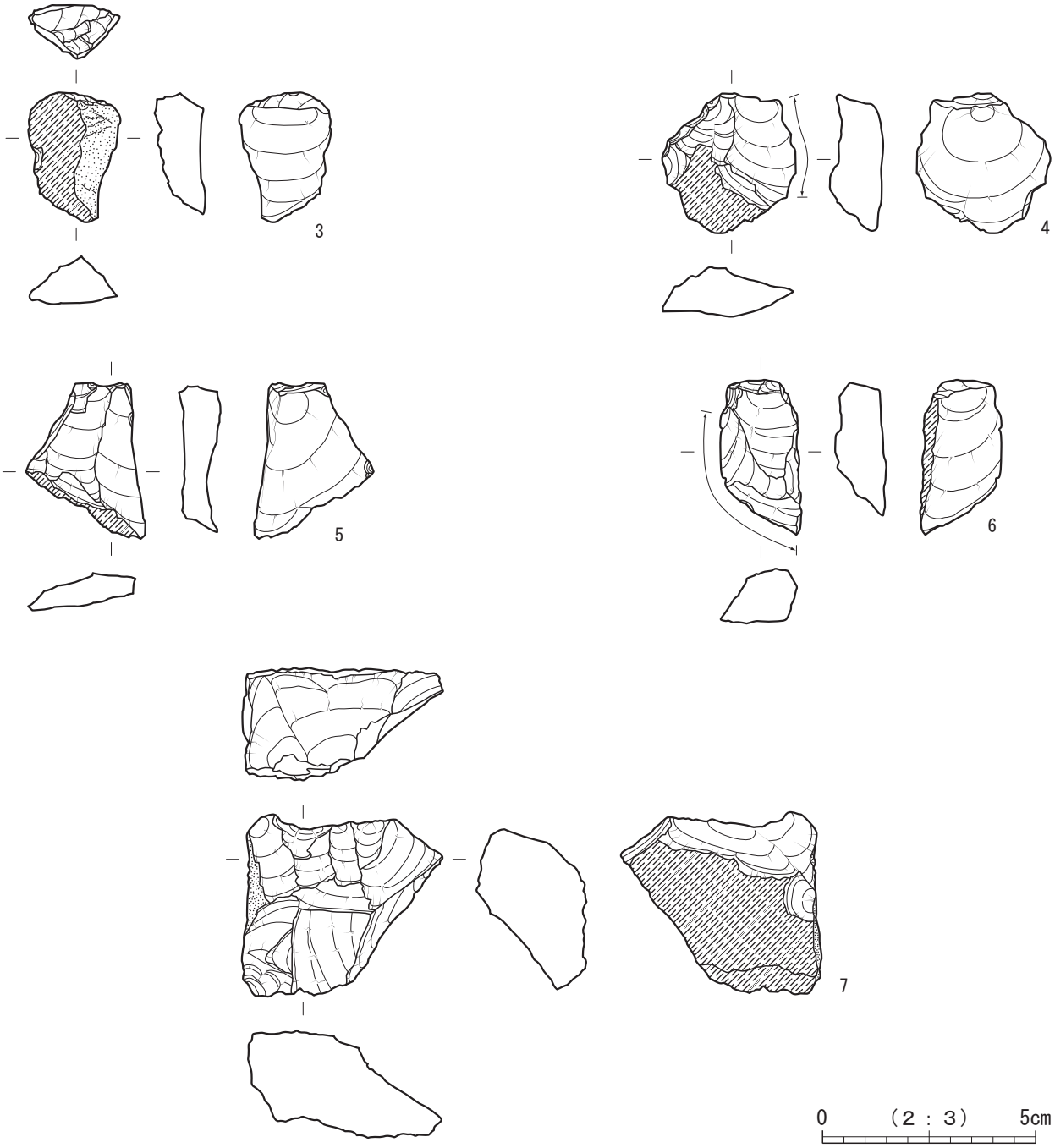


接合資料71



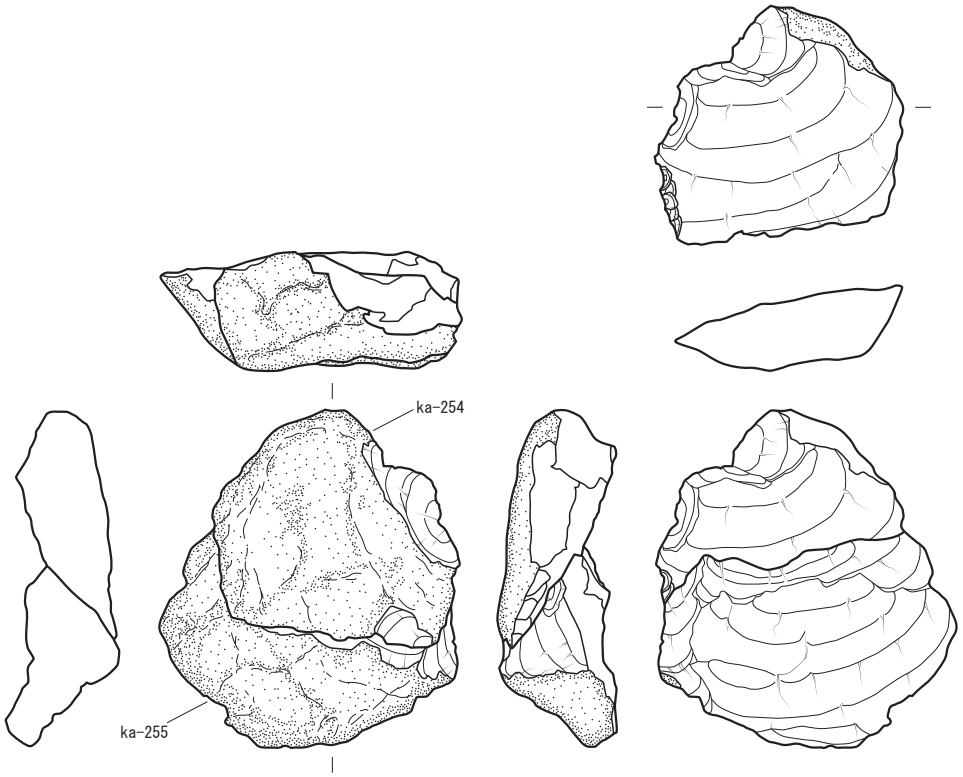
図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
1	Ka-249	-	SI113・堆積土	堆積土	打製石器	剥片	-	6.2×5.7×2.2	9.41	流紋岩	接合資料71、打面部欠損、自然面あり	160
2	Ka-250	-	SI127・堆積土	堆積土	打製石器	剥片	-	6.4×5.6×2.7	60.02	流紋岩	接合資料71、打面部欠損、自然面あり	160

第440図　接合資料(65)



図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
3	Ka-253	-	遺構検出面	-	打製石器	剥片	-	3.0×2.2×1.2	6.01	流紋岩	接合資料71、平坦打面、剥離角122°、自然面あり	160
4	Ka-252	-	遺構検出面	-	打製石器	微細剥離痕のある剥片	I	3.2×3.1×1.3	10.66	流紋岩	接合資料71、平坦打面、剥離角129°、1縁辺に微細剥離痕あり	160
5	Ka-248	-	SI113・堆積土	-	打製石器	剥片	-	3.6×2.6×1.0	7.67	流紋岩	接合資料71、平坦打面、剥離角115°	160
6	Ka-247	-	SI113・堆積土	-	打製石器	微細剥離痕のある剥片	I	3.4×1.9×1.5	80.35	流紋岩	接合資料71、平坦打面、剥離角116°、1縁辺に微細剥離痕あり	160
7	Ka-246	-	SI102・堆積土	-	打製石器	石核	-	4.6×4.2×2.6	43.61	流紋岩	接合資料71、剥片素材、打面転移あり、自然面あり	160

第441図　接合資料(66)



接合資料73

0　（2：3）　5cm

図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
	Ka-254	-	SI133・堆積土	-	打製石器	二次加工のある剥片	Ⅱ	4.4×4.8×1.9	43.90	流紋岩	接合資料73、打面部欠損、裏面加工、自然面あり	160
	Ka-255	-	遺構検出面	-	打製石器	剥片	-	4.0×6.0×2.1	37.60	流紋岩	接合資料73、打面部欠損、自然面あり	160

第442図　接合資料(67)

接合資料71（第440・441図、写真図版160）

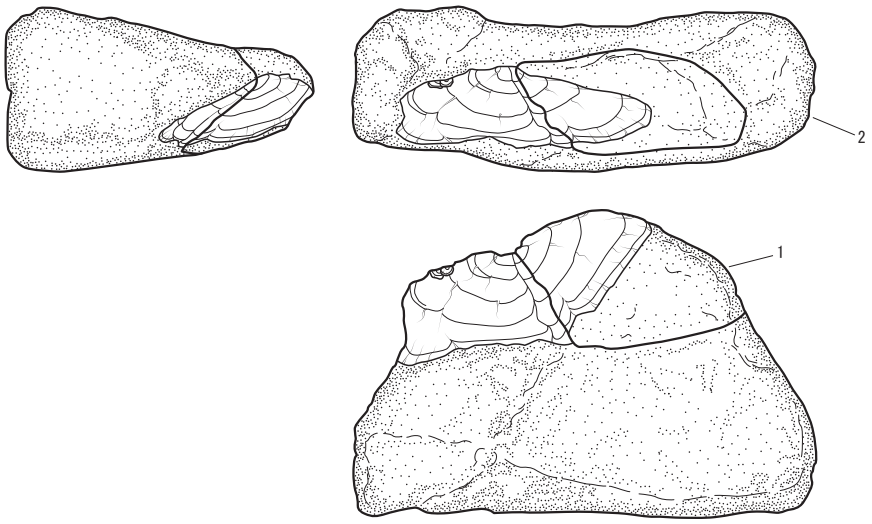
石核１点、微細剥離痕のある剥片２点、剥片４点の接合資料である。１～3・７は表面に自然面を残している。１・２の剥片は節理面に沿って自然面除去が行われた際に生じたものであり、同時割れを起こしている。３～５の打面作出を目的としたものと考えられる。３～５は剥離面を打面とし、先行剥離や自然面・節理面によって形成された稜線の伸びる方向に打撃を加えて連続的に剥離された剥片である。６の剥片は90°の打面転移が行われ、剥離面を打面とし、打撃を加えて剥離されている。７は残核である。４・６は微細剥離痕のある剥片Ⅰ類である。１・２・５～７は古代の遺構内堆積土、３・４は古代の遺構検出面からの出土である。石材は流紋岩である。

接合資料73（第442図、写真図版160）

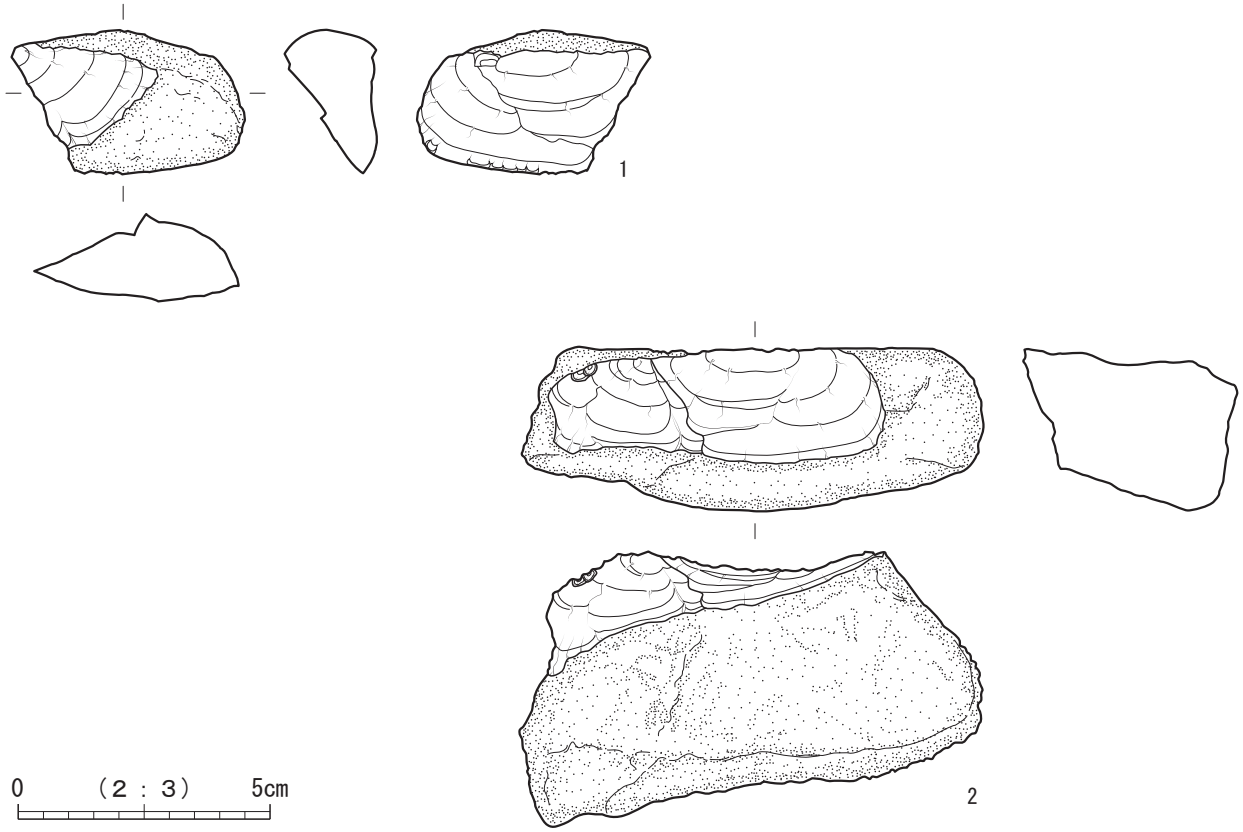
同時割れと考えられる剥片の接合資料である。表面に自然面を残している。Ka-255は同時割れ後に二次加工を施したものであり、二次加工のある剥片Ⅱ類である。Ka-254は古代の遺構内堆積土、Ka-255は古代の遺構検出面からの出土である。石材は流紋岩である。

接合資料74（第443図、写真図版160）

石核１点と剥片１点の接合資料である。１は原礫の一端を剥離した剥片である。２は平面形が三角形を呈する扁平な礫を素材とした石核である。ともに弥生Ｃ区からの出土である。石材は流紋岩である。

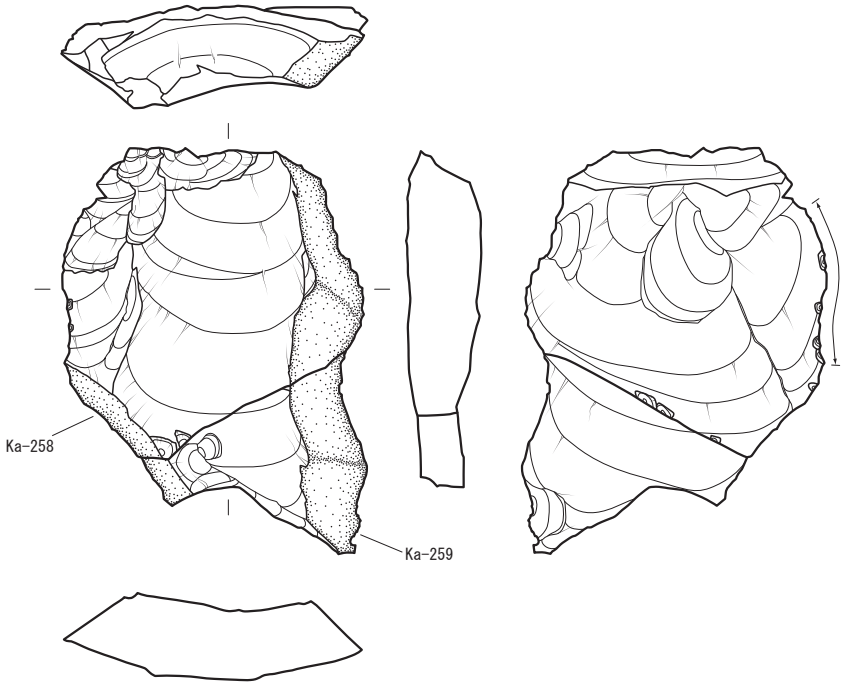


接合資料74

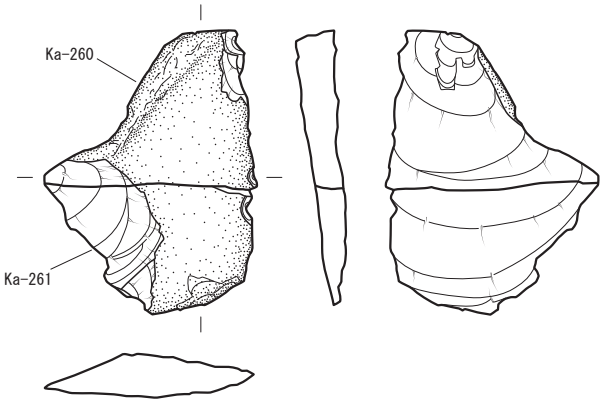


図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
1	Ka-257	C区	Ⅳ層	-	打製石器	剥片	-	2.1×4.0×2.3	19.47	流紋岩	接合資料74、自然面打面、剥離角123°、自然面あり	160
2	Ka-256	C区	Ⅳ層	S163	打製石器	石核	-	3.2×9.0×5.4	178.42	流紋岩	接合資料74、礫素材、打面転移なし、自然面あり	160

第443図　接合資料(68)



接合資料75



接合資料76

0　（2：3）　5cm

図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
	Ka-258	-	SK63・堆積土	-	打製石器	微細剥離痕のある剥片	Ⅰ	6.2×6.0×2.0	66.44	流紋岩	接合資料75、平坦打面、剥離角129°、1縁辺に微細剥離痕あり、自然面あり	160
	Ka-259	-	SI132・周溝	-	打製石器	剥片	-	4.3×3.7×1.2	15.21	流紋岩	接合資料75、打面部欠損、自然面あり	160
	Ka-260	A区	Ⅳ層	S1	打製石器	剥片	-	3.2×4.2×1.2	12.59	流紋岩	接合資料76、自然面打面、剥離角97°、自然面あり	160
	Ka-261	-	Pit412・堆積土	-	打製石器	剥片	-	2.5×4.1×0.9	8.05	流紋岩	接合資料76、打面部欠損、自然面あり	160

第444図　接合資料(69)

接合資料75（第444図、写真図版160）

節理で折れており、折れ面で接合する剥片の接合資料である。表面の両側縁側に自然面を残している。Ka-258は微細剥離痕のある剥片Ⅰ類である。Ka-258・259は古代の遺構内堆積土からの出土である。石材は流紋岩である。

接合資料76（第444図、写真図版160）

折面で接合した剥片の接合資料である。表面に自然面を残している。Ka-260は弥生A区、Ka-261は古代の遺構内堆積土からの出土である。石材は流紋岩である。

接合資料77（第445図、写真図版161）

剥片素材の石核１点と微細剥離痕のある剥片１点の接合資料である。１の剥片は表面に自然面が残されており、剥離面を打面とし、打撃を加えて剥離されている。２の石核には連続的な二次加工が施され転用されたものと考えられる。１は微細剥離痕のある剥片Ⅰ類である。１は古代の遺構検出面、２は弥生Ｂ区からの出土である。石材は珪質頁岩である。

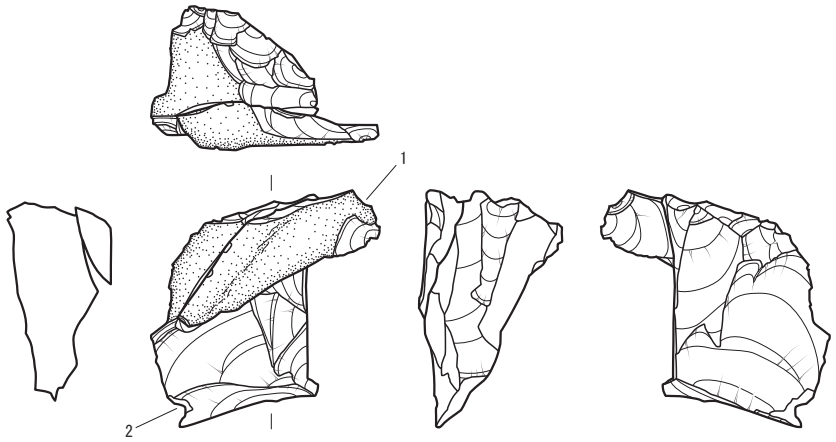
接合資料78（第446図、写真図版161）

剥片２点の接合資料である。１は表面の右側縁側に自然面を残し、２は表面の右側縁側から下端縁にかけて自然面を残している。１は剥離面と自然面から成る面を打面とし、打撃を加えて剥離された剥片である。２は打面を移動して剥離された剥片であり、剥離面を打面としている。１は弥生Ｅ区ＳＩ１、２は弥生Ｂ区からの出土である。石材は流紋岩である。

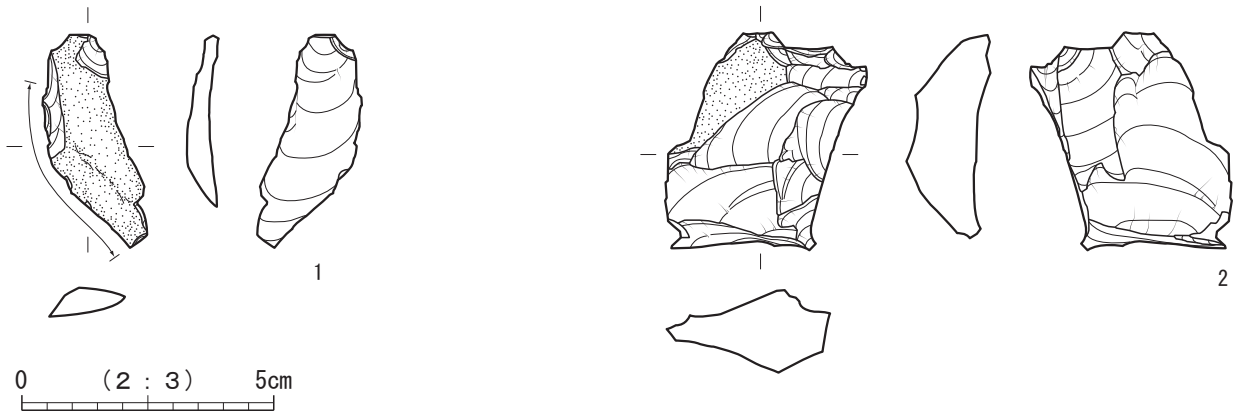
接合資料79（第447図、写真図版161）

微細剥離痕のある剥片１点と剥片１点の接合資料である。ともに右側縁側に自然面を残している。１は剥離面を打面とし、先行する剥離によって形成された稜線が伸びる方向に打撃を加えて剥離された縦長剥片である。２の縦長剥片も同一の剥離面を打面とし、同一方向からの加撃によって剥離している。１は微細剥離痕のある剥片Ⅱ類である。ともに古代の遺構検出面からの出土である。石材は流紋岩である。

接合資料80（第448図、写真図版161）

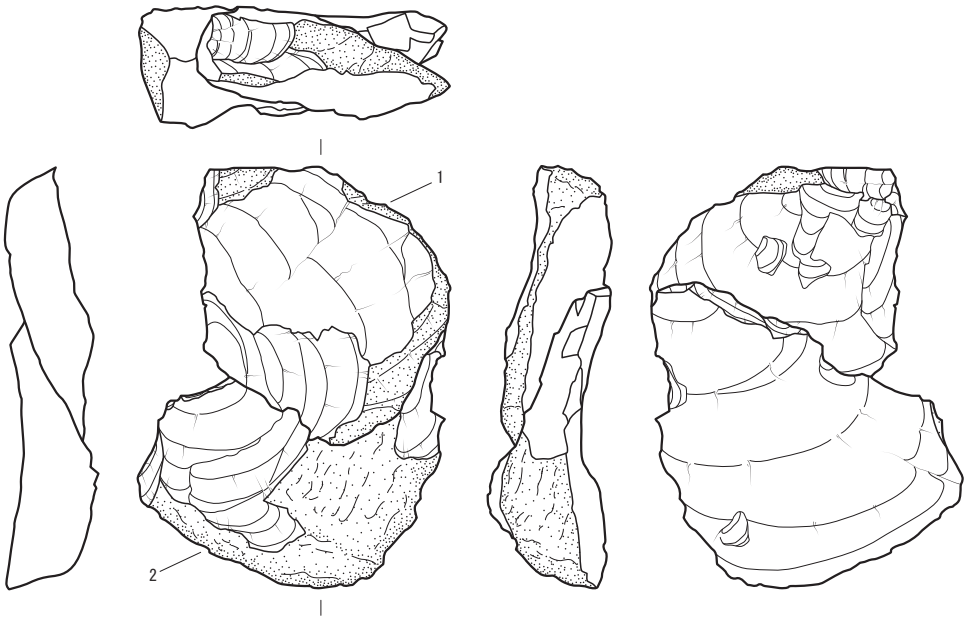


接合資料77

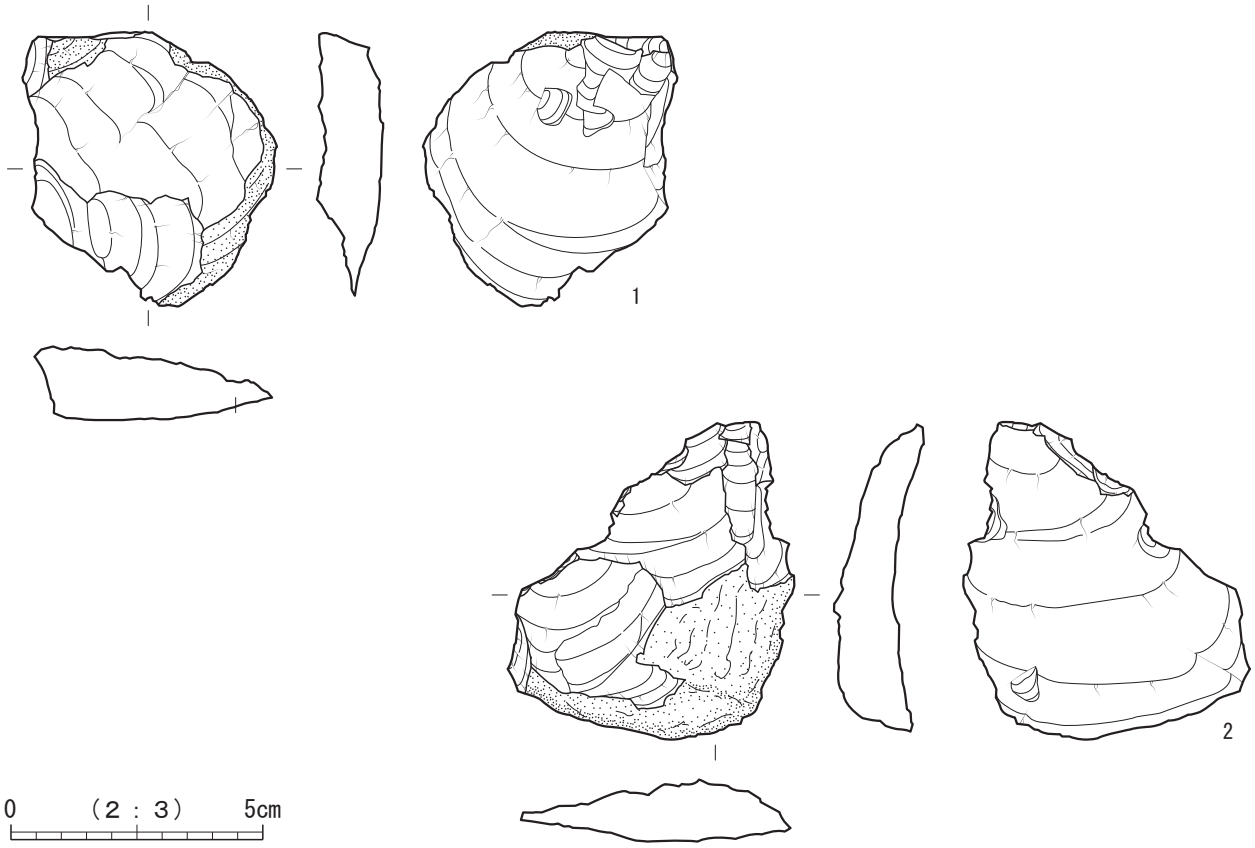


図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
1	Ka-263	-	遺構検出面	-	打製石器	微細剥離痕のある剥片	Ⅰ	3.5×1.6×0.7	3.99	珪質頁岩	接合資料77、平坦打面、剥離角97°、1縁辺に微細剥離痕あり、自然面あり	161
2	Ka-262	E区	Ⅳ層	-	打製石器	二次加工のある剥片	Ⅰ	4.2×3.2×1.8	23.26	珪質頁岩	接合資料77、打面部加工、表面加工、自然面あり	161

第445図　接合資料(70)

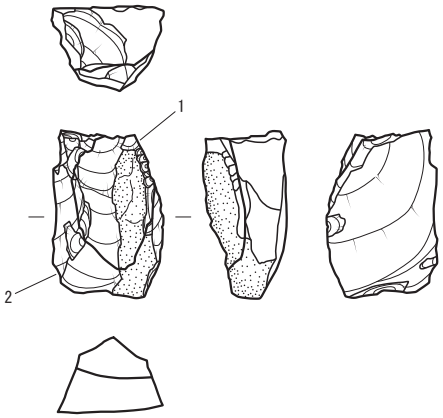


接合資料78

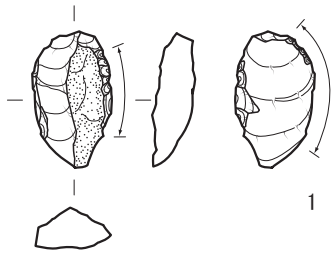


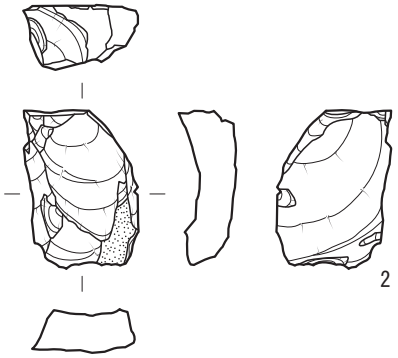
図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
1	Ka-264	E区	SI1・堆積土	-	打製石器	剥片	-	5.4×4.8×1.7	40.96	流紋岩	接合資料78、礫打面、剥離角132°、自然面あり	161
2	Ka-265	B区	Ⅳ層	S14	打製石器	剥片	-	6.2×5.5×2.2	55.30	流紋岩	接合資料78、打面部欠損、自然面あり	161

第446図　接合資料(71)



接合資料79





0　（2：3）　5cm

図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
1	Ka-267	-	遺構検出面	-	打製石器	微細剥離痕のある剥片	Ⅱ	2.7×1.5×0.8	3.07	流紋岩	接合資料79、平坦打面、剥離角121°、 復縁辺に微細剥離痕あり、自然面あり	161
2	Ka-266	-	遺構検出面	-	打製石器	剥片	-	3.3×2.0×1.3	9.32	流紋岩	接合資料79、打面部欠損、自然面あり	161

第447図　接合資料(72)

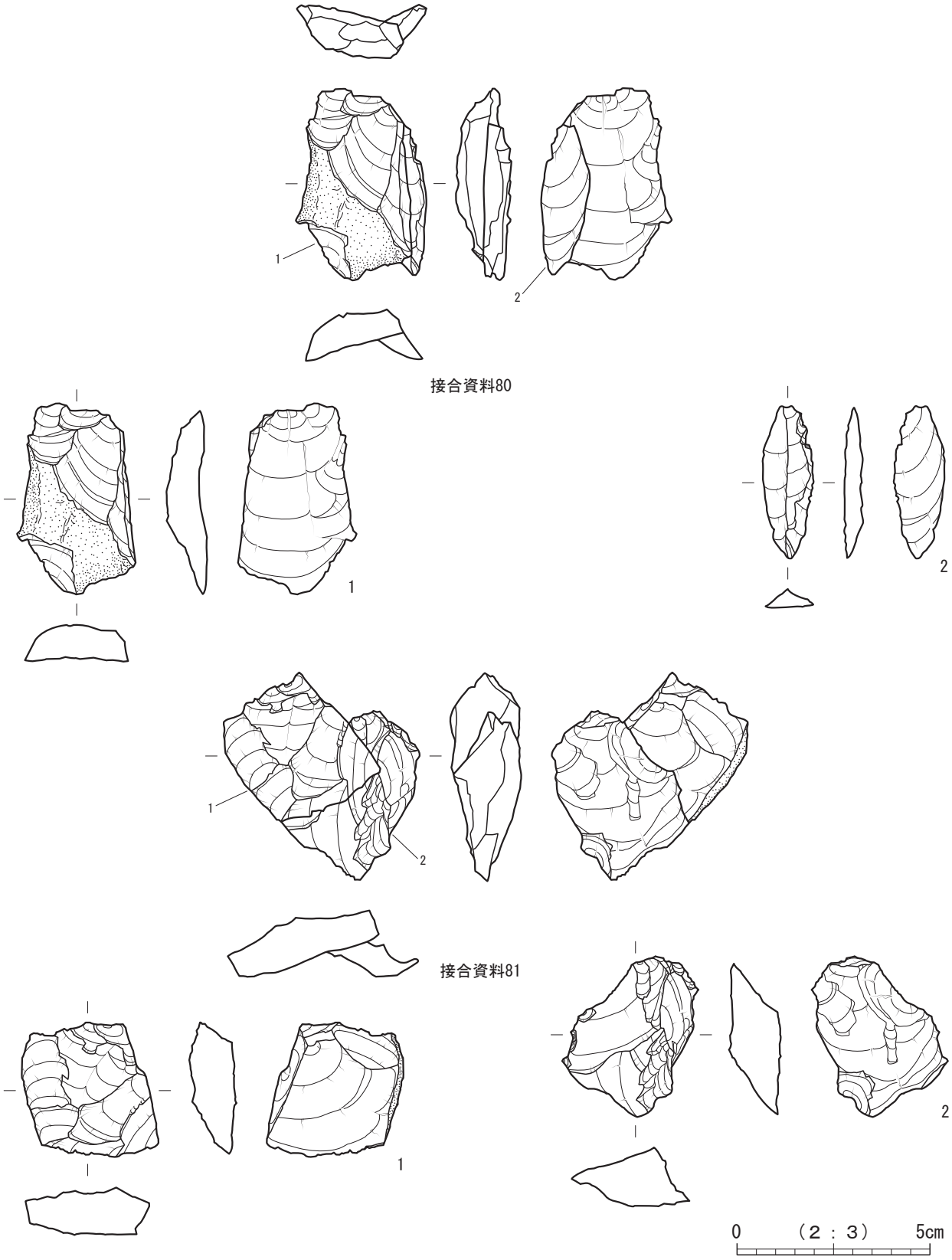
剥片２点の接合資料である。１は表面に自然面を残している。１は剥離面を打面とし、剥離された剥片である。２の剥片も同一方向からの加撃によって剥離されている。２は同時割れで打面部分を失っている。ともに古代の遺構内堆積土からの出土である。石材は流紋岩である。

接合資料81（第448図、写真図版161）

剥片２点の接合資料である。１は表面の左側縁に自然面を残しており、剥離面を打面とし、剥離された剥片である。２の剥片は同一方向からの剥片剥離が進行した後、剥離されている。１は古代の遺構内堆積土、２は古代の遺構検出面からの出土である。石材は流紋岩である。

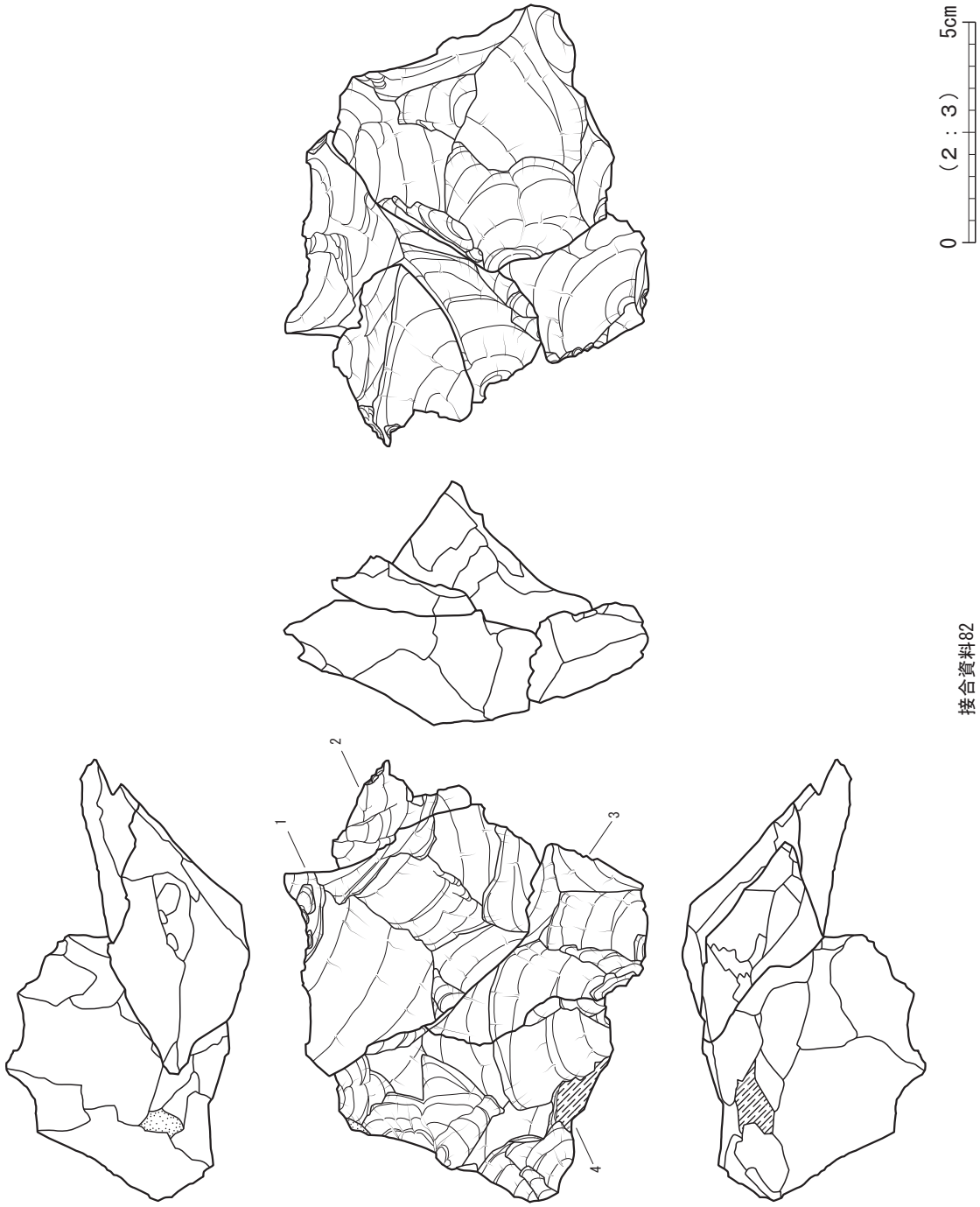
接合資料82（第449～451図、写真図版161）

石核２点、石錐１点、二次加工のある剥片１点の接合資料である。本来、同一の石核であり、剥片剥離が行われ、１・２と３・４の別個体になった後、それぞれで剥片剥離が行われている。１は剥片素材の石核である。２は剥離面を打面として剥離された剥片に二次加工を施し、石錐へ加工している。３は剥離面から成る面を打面とし、剥離された剥片である。４の石核は、残された剥離面の観察から、打面転移を頻繁に繰り返し、求心状に剥片剥離を行っている。３は二次加工のある剥片Ⅲ類である。１・４は古代の遺構内堆積土、３は古代の遺構検出面からの出土、２は出土地不明である。石材は流紋岩である。

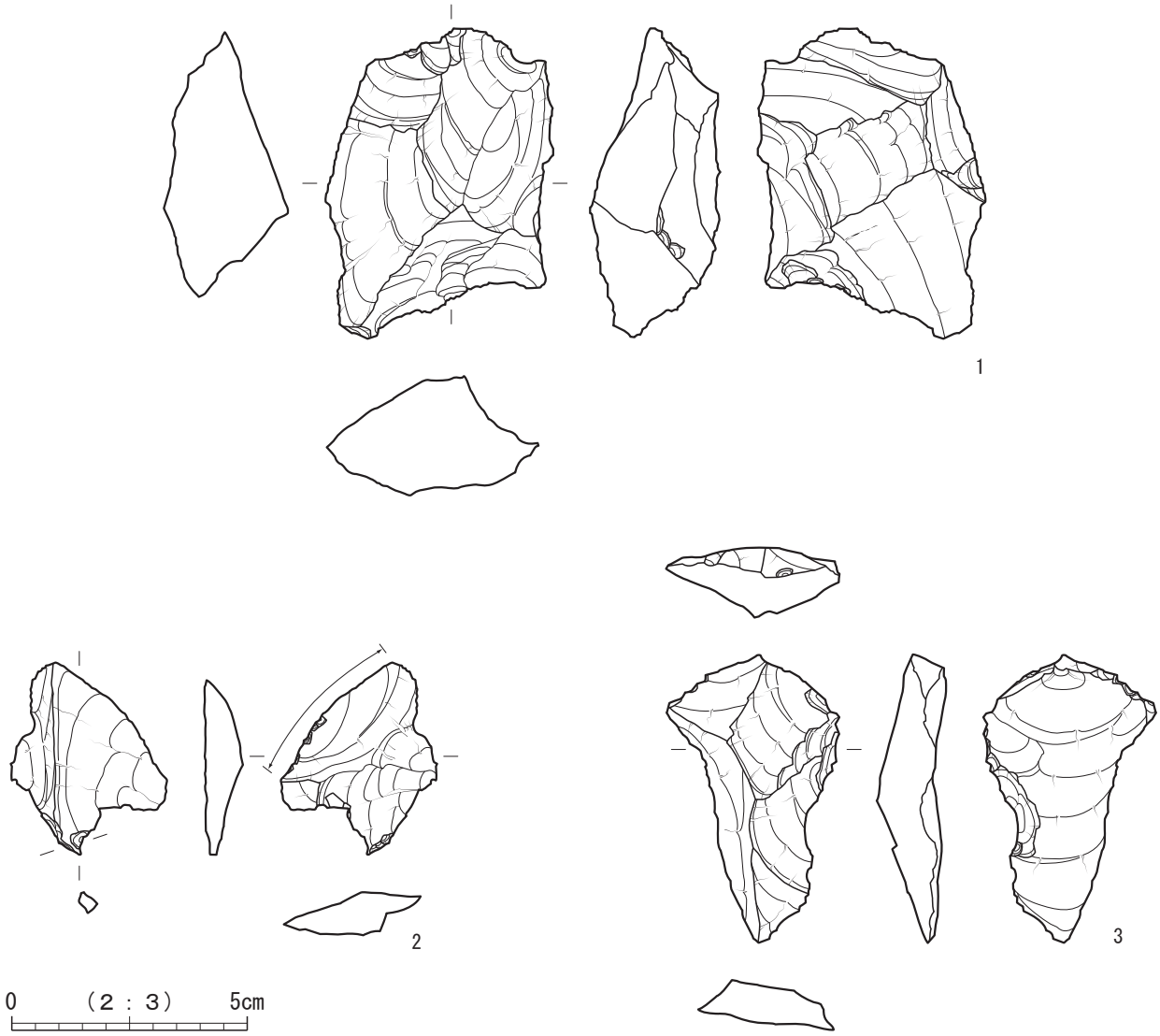


図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
1	Ka-268	-	Pit244・堆積土	-	打製石器	剥片	-	4.8×3.0×1.0	13.95	流紋岩	接合資料80、線状打面、剥離角109°、自然面あり	161
2	Ka-269	-	SI115B・堆積土	-	打製石器	剥片	-	3.9×1.3×0.5	2.00	流紋岩	接合資料80、打面部欠損	161
1	Ka-271	-	SA1・堆積土	-	打製石器	剥片	-	3.5×3.2×1.3	15.23	流紋岩	接合資料81、切子打面、剥離角134°	161
2	Ka-270	-	遺構検出面	-	打製石器	剥片	-	4.0×3.1×1.6	12.47	流紋岩	接合資料81、平坦打面、剥離角136°	161

第448図　接合資料(73)

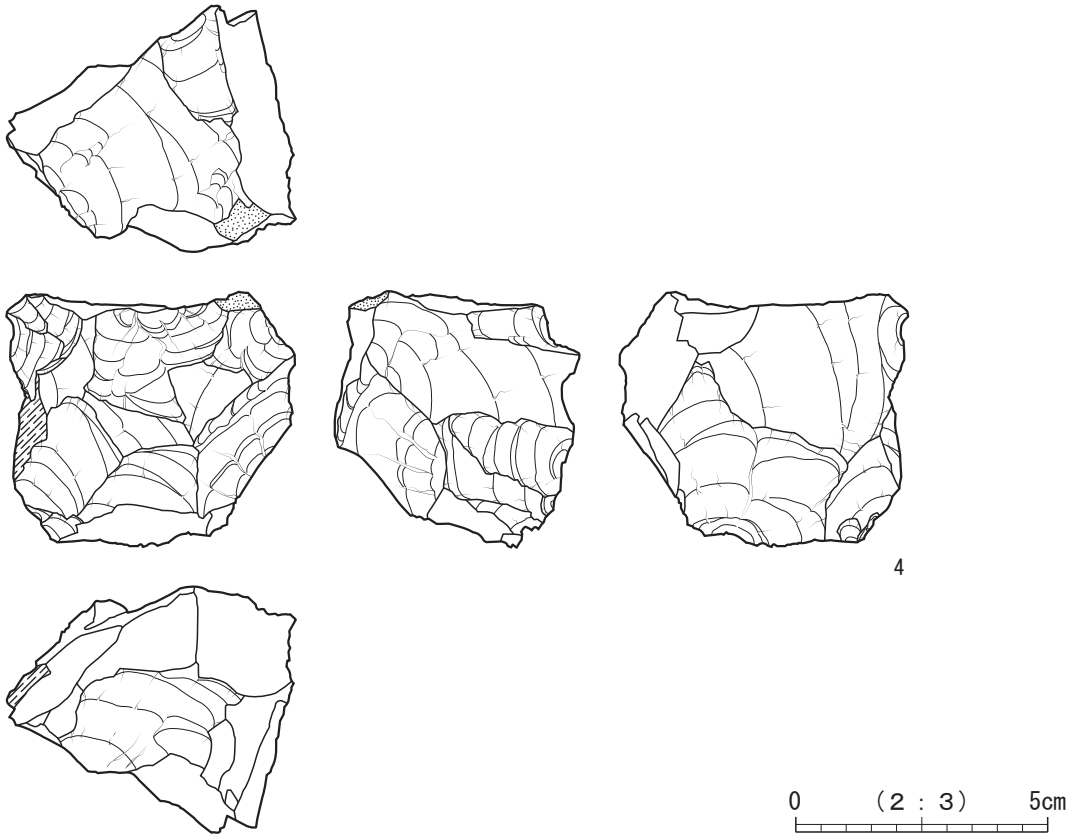


第449図　接合資料(74)



図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
1	Ka-273	-	SI107・堆積土		打製石器	石核	-	5.8×4.6×2.7	59.13	流紋岩	接合資料82、剥片素材、打面転移あり	161
2	Ka-275	-	不明		打製石器	石錐	-	3.8×3.3×1.0	8.01	流紋岩	接合資料82、完形品、錐部1.0cm×1.3cm×0.5cm、円周長1.25cm、片面加工	161
3	Ka-272	-	遺構検出面		打製石器	二次加工のある剥片	Ⅲ	6.1×3.5×1.3	16.36	流紋岩	接合資料82、切子打面、剥離角131°、表面＋裏面加工	161

第450図　接合資料(75)



図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
4	Ka-274	-	SI104・堆積土	-	打製石器	石核	-	4.8×5.6×4.7	115.92	流紋岩	接合資料82、礫素材、打面転移なし、自然面あり	161

第451図　接合資料(76)

接合資料83（第452図、写真図版162）

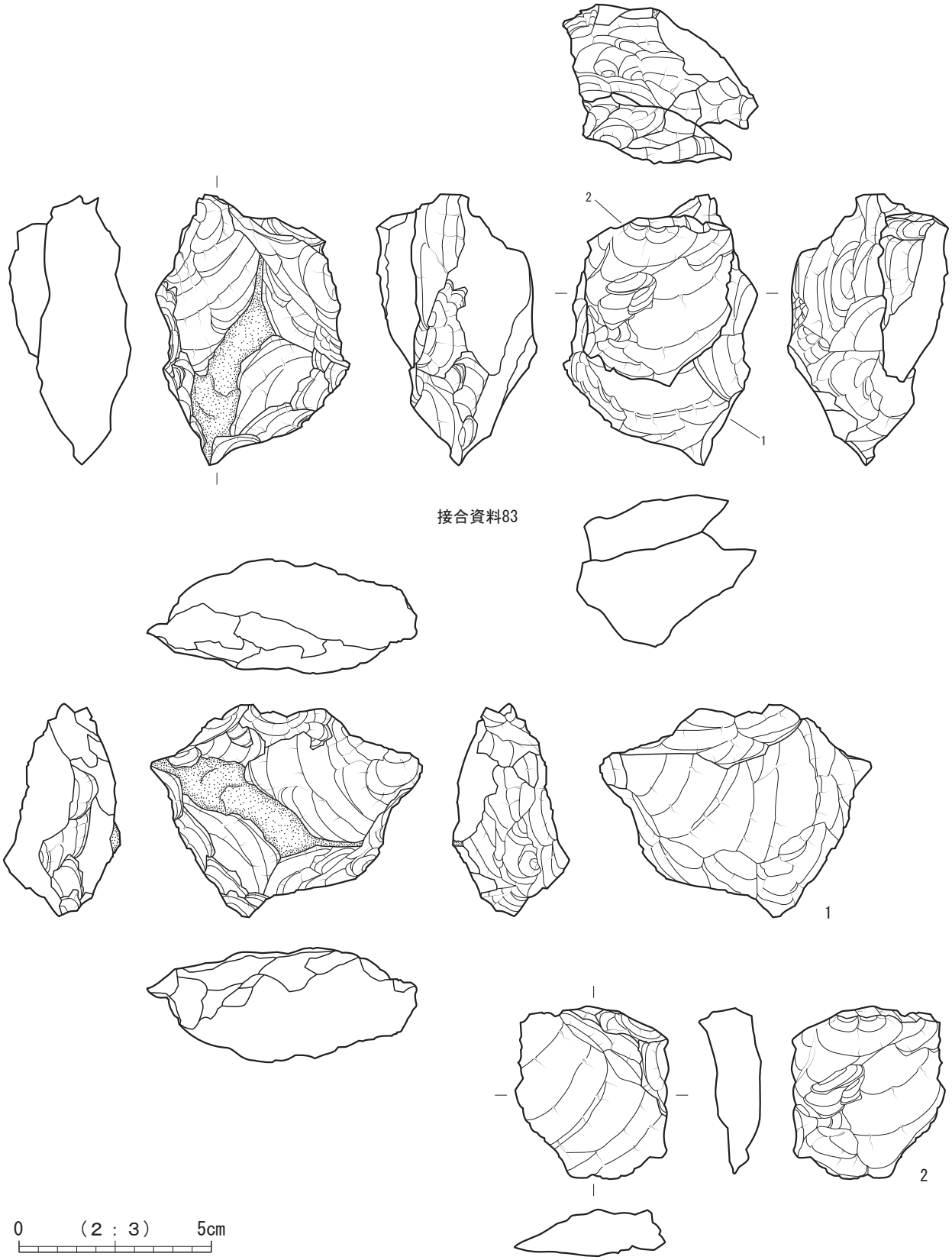
石核１点と剥片１点の接合資料である。１の石核の一部に自然面を残している。１は剥片素材の石核であり、節理によって素材の打面部分は失われている。２の剥片は剥離面を打面として剥離されている。ともに古代の遺構内堆積土からの出土である。石材は流紋岩である。

接合資料84（第453図、写真図版162）

二次加工のある剥片１点と微細剥離痕のある剥片１点の接合資料である。１・２は表面の末端側に自然面を残している。１は剥離面を打面とし、剥離された剥片に二次加工を施している。２の微細剥離痕のある剥片も同一方向の加撃によって剥離されている。１は二次加工のある剥片Ⅰ類である。２は微細剥離痕のある剥片Ⅰ類である。１は古代の遺構検出面、２は弥生Ｅ区からの出土である。石材は流紋岩である。

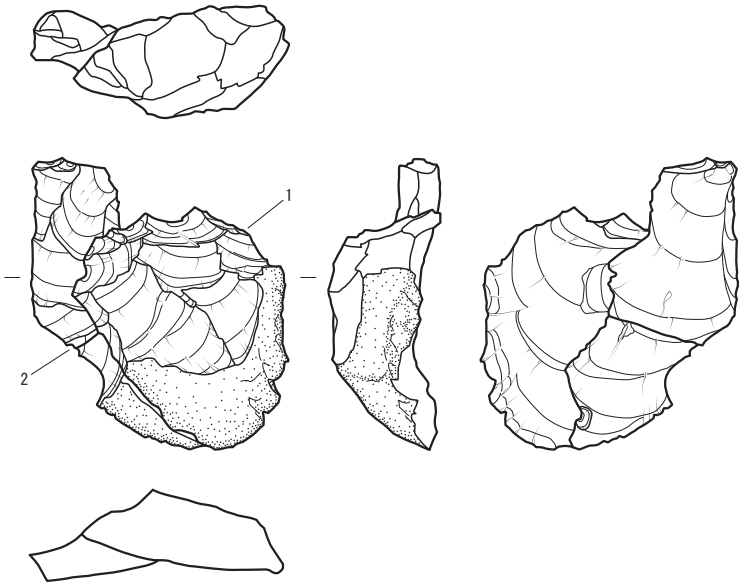
接合資料85（第454図、写真図版162）

節理を多く介在しているため、同時割れを起こしている剥片の接合資料である。表面に自然面を残している。自然面と剥離面から成る面を打面として剥離されている。Ka-281 ～ 283は古代の遺構内堆積土からの出土である。石材は流紋岩である。

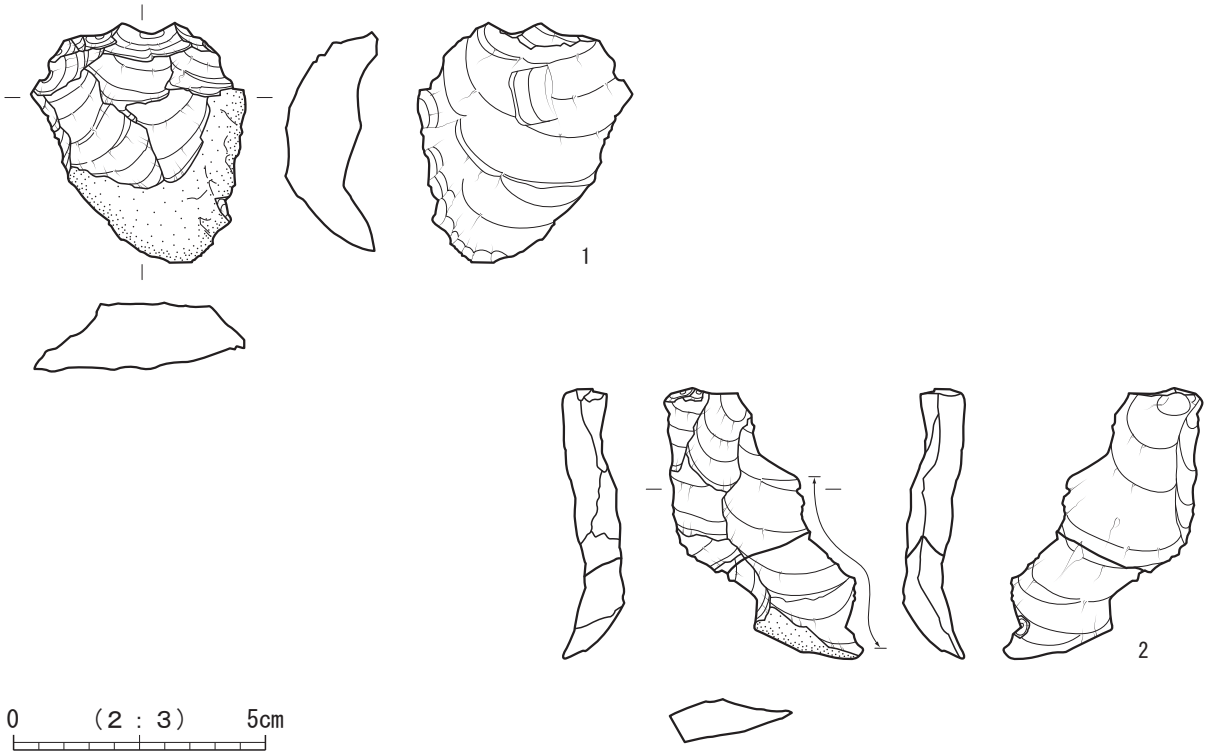


図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
1	Ka-277	-	SI115B・堆積土	-	打製石器	石核	-	5.5×7.0×2.7	79.95	流紋岩	接合資料83、剥片素材、打面転移あり、自然面あり	162
2	Ka-276	-	SI99・堆積土	-	打製石器	剥片	-	4.4×3.9×1.6	21.58	流紋岩	接合資料83、平坦打面、剥離角119°	162

第452図　接合資料(77)

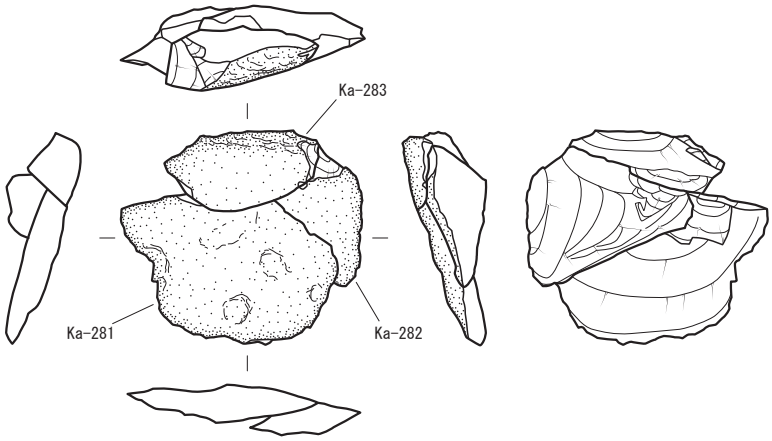


接合資料84



図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
1	Ka-280	-	遺構検出面	-	打製石器	二次加工のある剥片	Ⅰ	4.8×4.2×1.5	28.26	流紋岩	接合資料84、打面部加工、表面加工、自然面あり	162
2	Ka-278	E区	Ⅳ層	-	打製石器	微細剥離痕のある剥片	Ⅰ	3.8×2.7×0.9	7.48	流紋岩	接合資料84、切子打面、剥離角120°、1縁辺に微細剥離痕あり、自然面あり	162

第453図　接合資料(78)



接合資料85

0　（2：3）　5cm

図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
	Ka-281	-	SI126・堆積土	-	打製石器	剥片	-	3.0×3.7×0.9	8.62	流紋岩	接合資料85、打面部欠損、自然面あり	162
	Ka-282	-	SI103・堆積土	-	打製石器	剥片	-	2.8×3.2×1.1	5.79	流紋岩	接合資料85、打面部欠損、自然面あり	162
	Ka-283	-	SI115 A・堆積土	-	打製石器	剥片	-	1.3×3.2×1.1	4.61	流紋岩	接合資料85、礫打面、剥離角107°、自然面あり	162

第454図　接合資料(79)

接合資料86（第455図、写真図版162）

石核１点と剥片１点の接合資料である。１は表面に自然面を残しており、剥離面を打面とし、剥離されている。折面で接合している。２の石核は打面転移を頻繁に繰り返した結果、残された剥離面に覆われている。１は古代の遺構検出面、２は古代の遺構内堆積土からの出土である。石材は流紋岩である。

接合資料87（第456図、写真図版162）

折面で接合する剥片の接合資料である。Ka-287・288は表面の末端部に自然面を残している。表面の左側縁側からの二次加工によって折れたものと考えられる。Ka-287は古代の遺構内堆積土からの出土である。Ka-288は古代の遺構検出面からの出土である。石材は流紋岩である。

接合資料88・89・91（第456図、写真図版162）

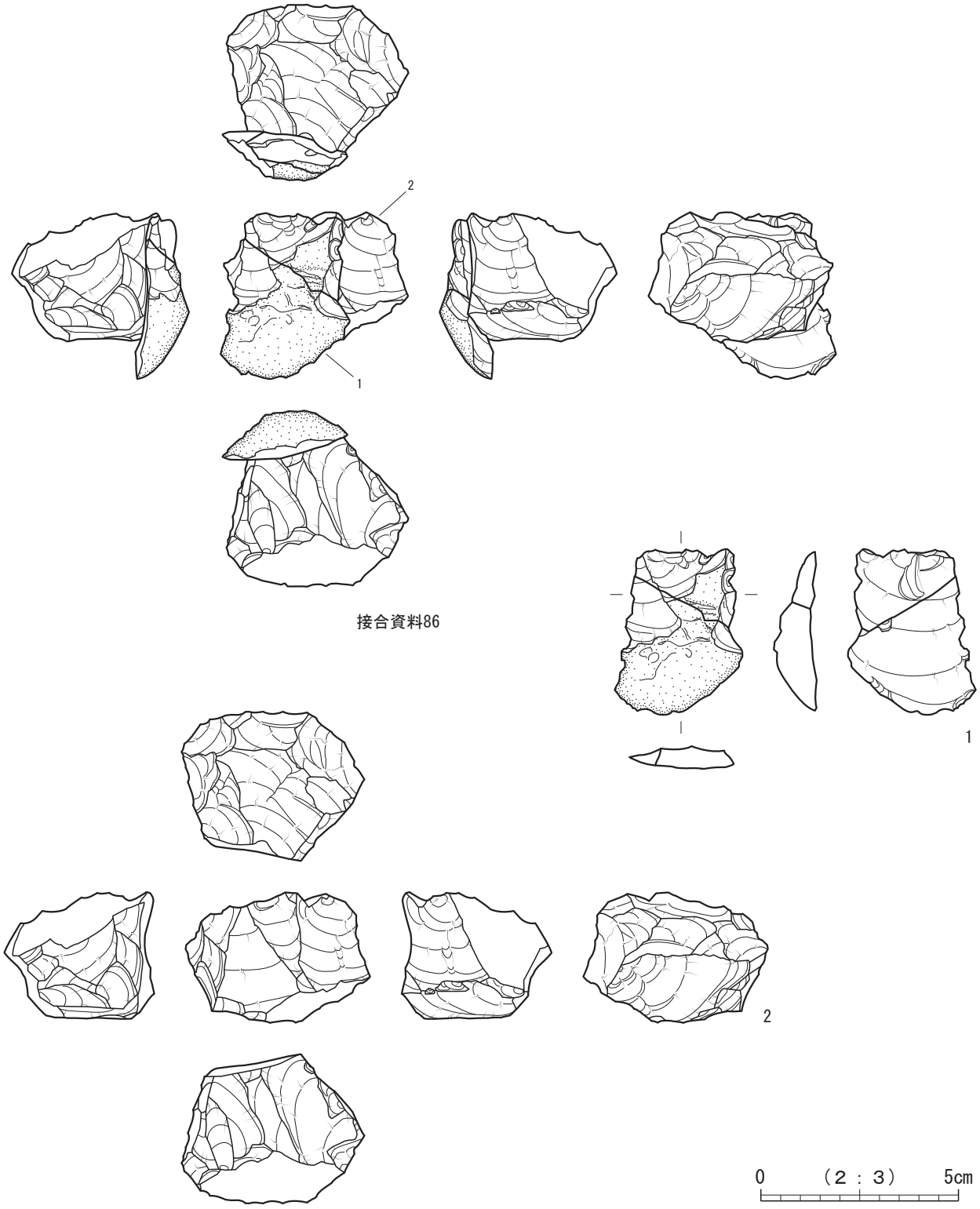
接合資料88（Ka-289・290）、接合資料89（Ka-291・292）、接合資料91（Ka-295・296）は同時割れを起こしている剥片の接合資料である。Ka-289・290は自然面を打面とし、剥離している剥片である。Ka-291・292は剥片の末端部であり、打面側を失っている。Ka-295・296は剥離面と自然面から成る面を打面とし、剥離している剥片である。Ka-289・291・295・296は古代の遺構検出面、Ka-290・292は古代の遺構内堆積土からの出土である。石材は流紋岩である。

接合資料92（第457図、写真図版162）

石核１点と微細剥離痕のある剥片１点の接合資料である。１は剥離面を打面とし、剥離している剥片であり、表面の末端部に自然面を残している。２の石核の一部には自然面が残されている。１の剥片が剥離された後も剥片剥離が進行し残核となったものである。１は微細剥離痕のある剥片Ⅰ類である。１は古代の遺構内堆積土、２は古代の遺構検出面からの出土である。石材は流紋岩である。

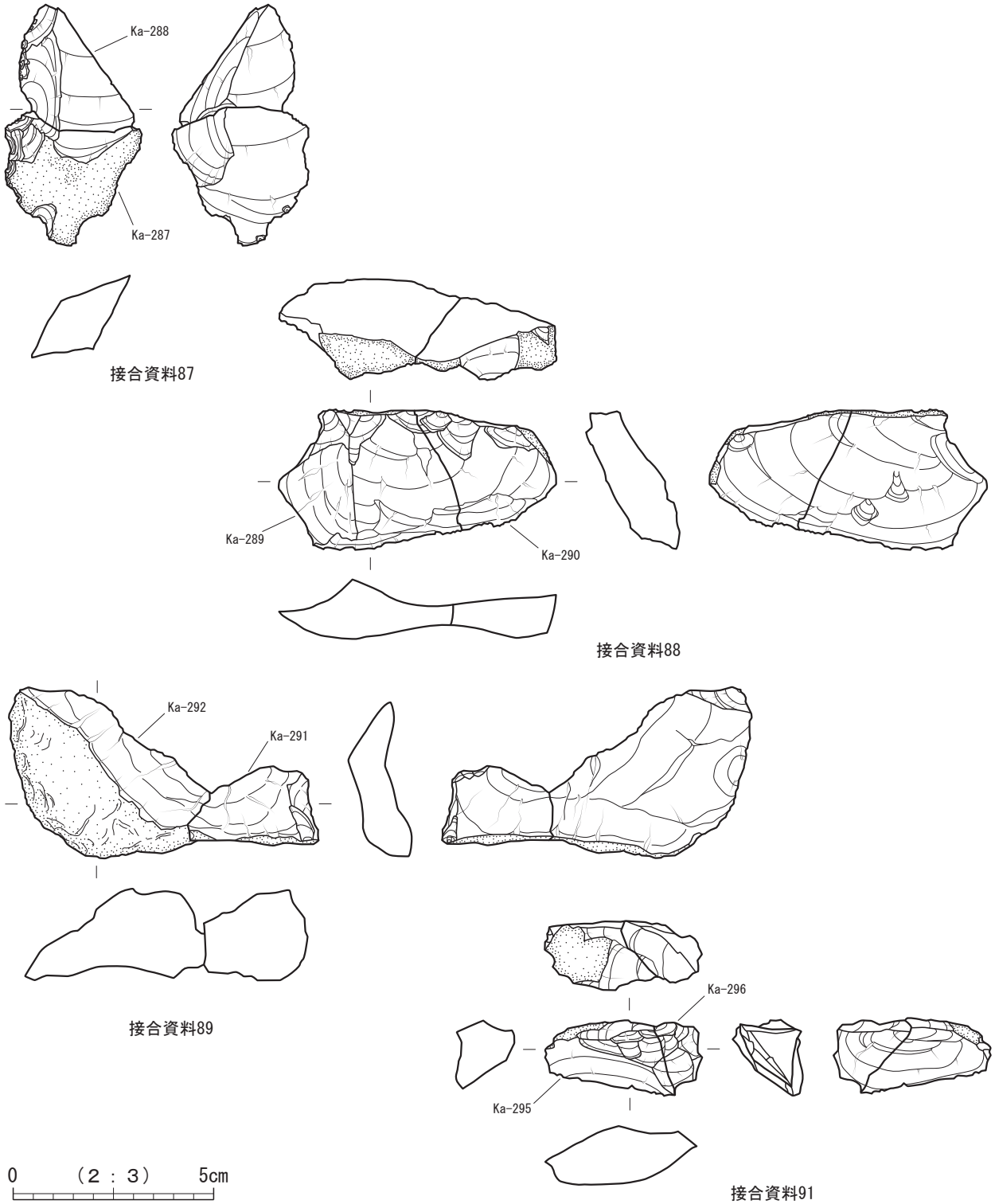
接合資料93（第458図、写真図版162）

折面で接合する剥片の接合資料である。表面の末端側に自然面を残している。微細剥離痕のある剥片Ⅱ類である。Ka-299は古代の遺構内堆積土、Ka-300は弥生Ｂ区からの出土である。石材は流紋岩である。



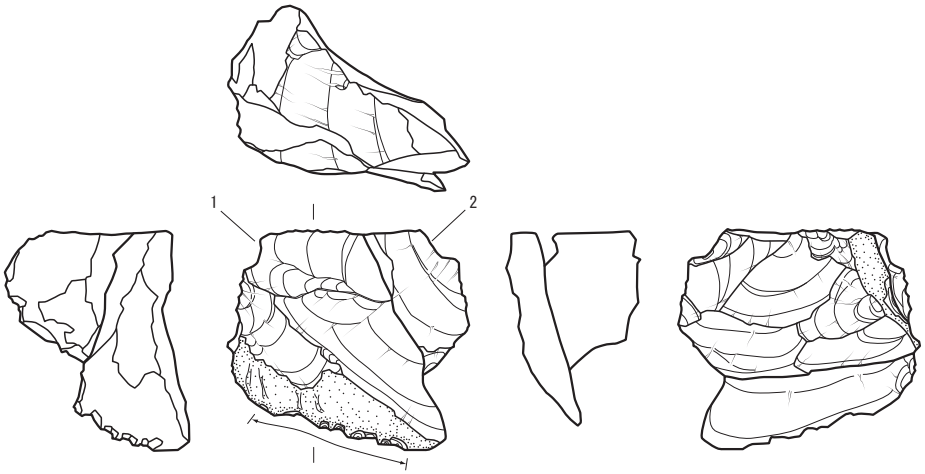
図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
1	Ka-284	-	遺構検出面	-	打製石器	剥片	-	4.2×3.1×1.0	8.18	流紋岩	接合資料86、線状打面、剥離角110°、自然面あり	162
2	Ka-286	-	SI115 A・堆積土	-	打製石器	石核	-	2.8×3.9×3.0	53.12	流紋岩	接合資料86、礫素材、打面転移あり	162

第455図　接合資料(80)

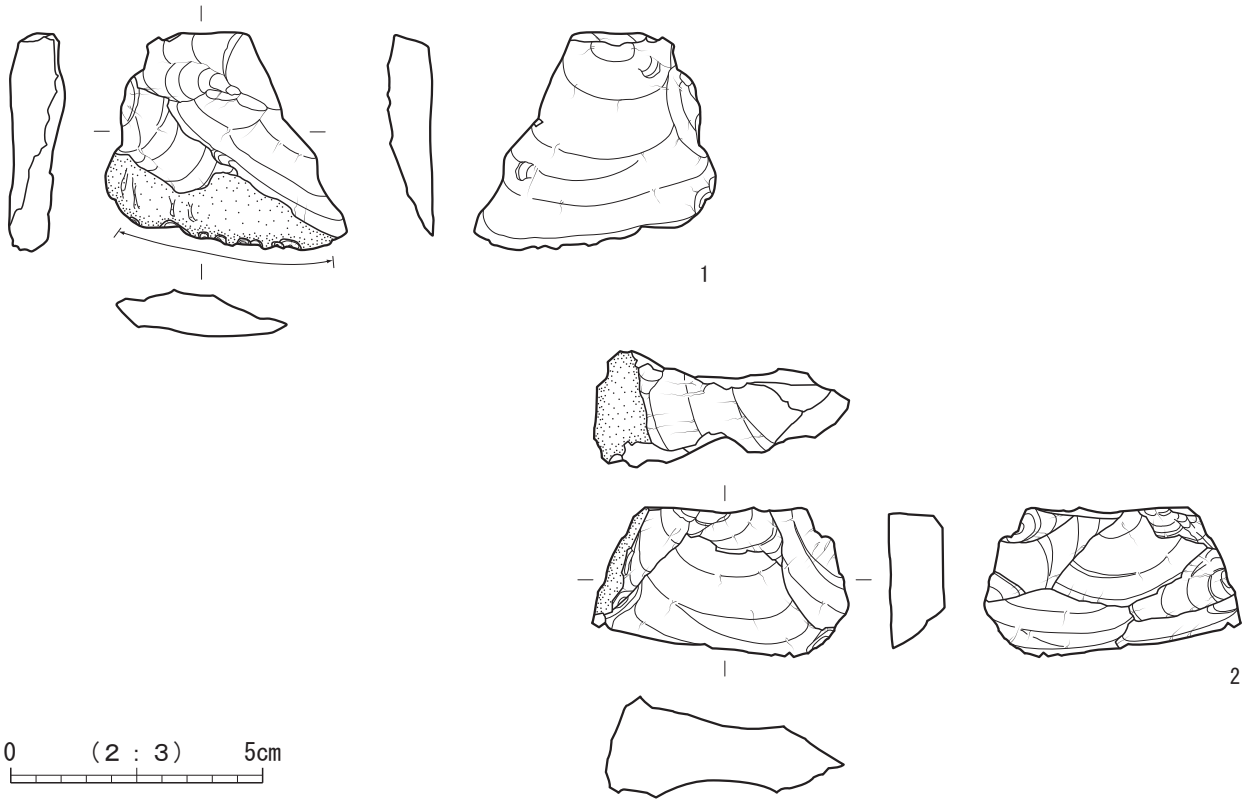


図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
	Ka-287	-	SI113・堆積土	-	打製石器	剥片	-	3.5×3.8×1.6	13.74	流紋岩	接合資料87、打面部欠損、自然面あり	162
	Ka-288	-	遺構検出面	-	打製石器	剥片	-	3.5×1.5×1.5	8.97	流紋岩	接合資料87、打面部欠損	162
	Ka-289	-	遺構検出面	-	打製石器	剥片	-	3.5×4.7×1.5	23.37	流紋岩	接合資料88、自然面打面、剥離角116°、自然面あり	162
	Ka-290	-	SI92・P2	-	打製石器	剥片	-	3.4×2.7×1.1	11.32	流紋岩	接合資料88、打面部欠損、自然面あり	162
	Ka-291	-	遺構検出面	-	打製石器	剥片	-	1.9×3.2×2.7	16.41	流紋岩	接合資料89、打面部欠損、自然面あり	162
	Ka-292	-	SI115B・堆積土	-	打製石器	剥片	-	4.5×4.6×2.5	36.35	流紋岩	接合資料89、打面部欠損、自然面あり	162
	Ka-295	-	遺構検出面	-	打製石器	剥片	-	1.8×3.3×1.6	7.31	流紋岩	接合資料91、平坦打面、自然面あり	162
	Ka-296	-	遺構検出面	-	打製石器	剥片		1.8×2.2×1.0	2.13	流紋岩	接合資料91、平坦打面	162

第456図　接合資料(81)

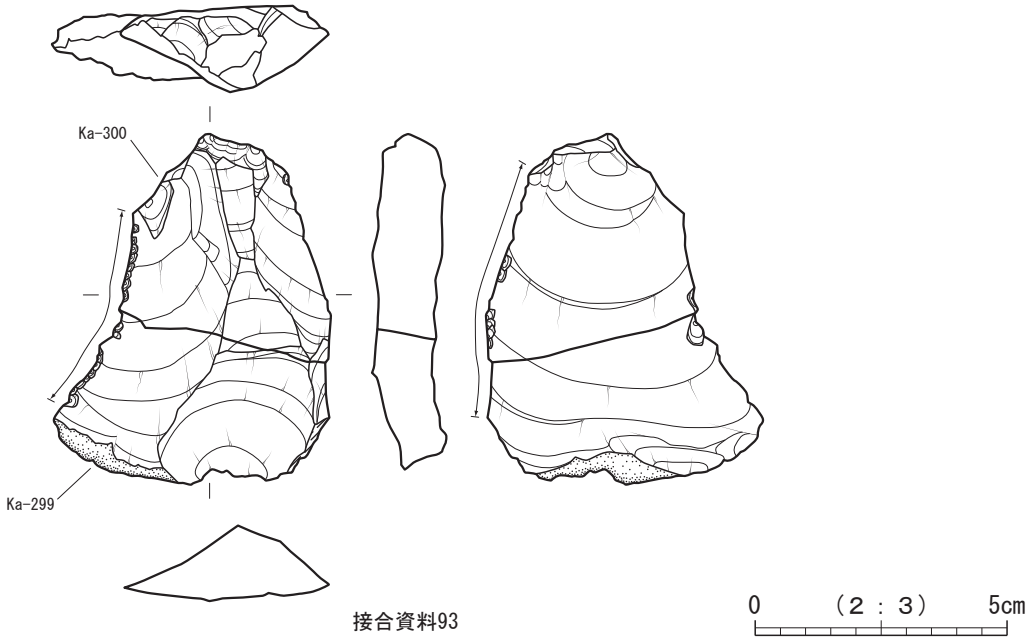


接合資料92



図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
1	Ka-298	-	SI95・堆積土	-	打製石器	微細剥離痕のある剥片	I	4.2×4.3×1.0	15.24	流紋岩	接合資料92、平坦打面、剥離角130°、1縁辺に微細剥離痕あり、自然面あり	162
2	Ka-297	-	遺構検出面	-	打製石器	石核	-	2.9×5.0×2.1	26.82	流紋岩	接合資料92、剥片素材、打面転移あり、自然面あり	162

第457図　接合資料(82)



図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
	Ka-299	-	SI103・堆積土	-	打製石器	剥片	-	3.1×5.4×1.4	20.78	流紋岩	接合資料93、打面部欠損、自然面あり	162
	Ka-300	B区	Ⅳ層	S53	打製石器	剥片	-	4.1×4.2×1.6	24.69	流紋岩	接合資料93、平坦打面、剥離角131°、自然面あり	162

第458図　接合資料(83)

接合資料94（第459・460図、写真図版162）

石核１点、微細剥離痕のある剥片１点、剥片２点の接合資料である。１は表面の左側縁側に自然面を残しており、剥離面を打面として剥離された剥片である。２・３の剥片は１の剥離によって形成された面を打面として剥離されている。４の石核には多くの方向からの剥離面が観察され、打面転移が頻繁に行われたものと考えられる。３は微細剥離痕のある剥片Ⅰ類である。１は古代の遺構内堆積土、２は古代の遺構検出面、３・４は弥生Ｂ区からの出土である。石材は流紋岩である。

接合資料95（第461・462図、写真図版163）

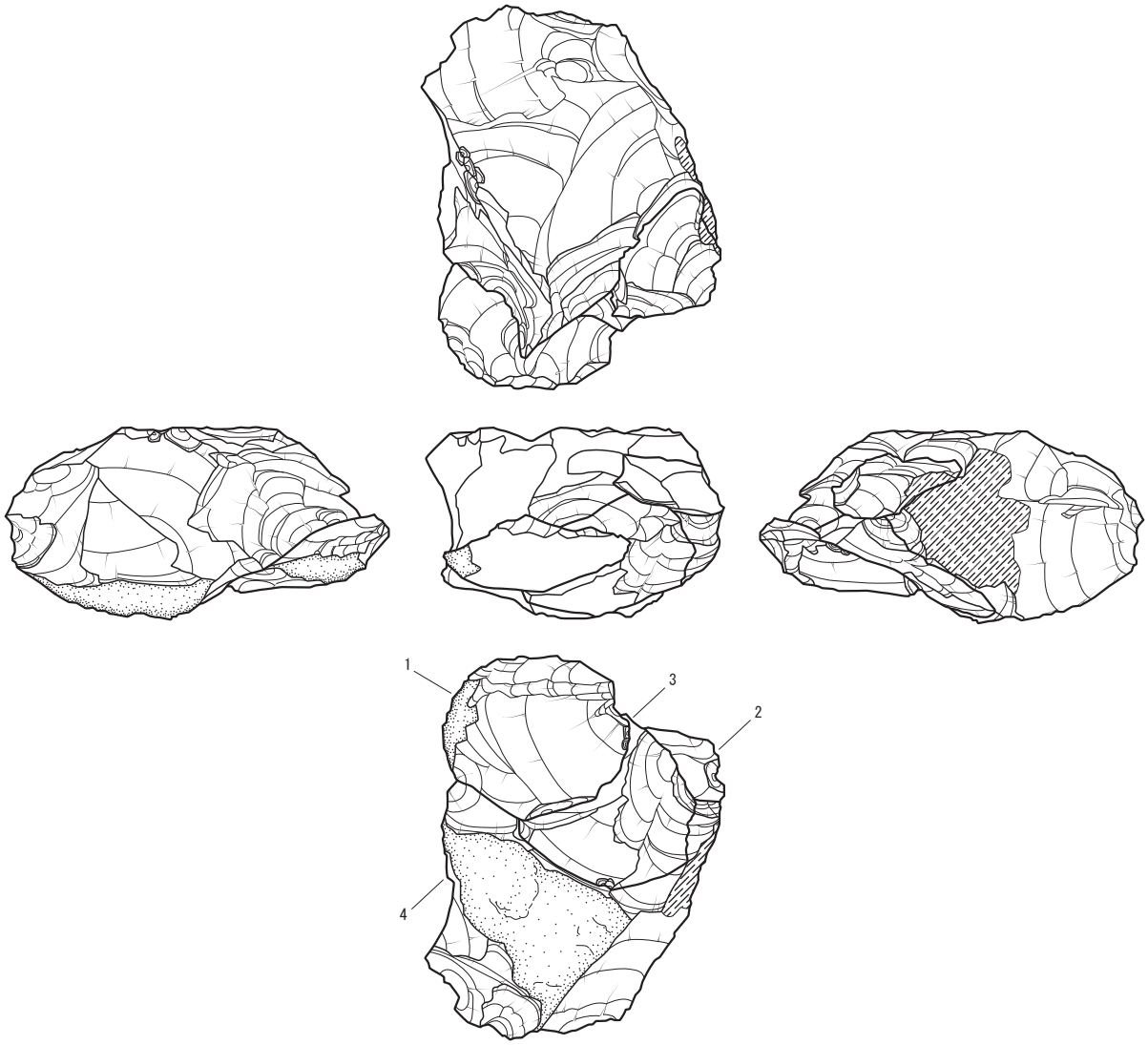
石核１点、剥片２点の接合資料である。２の剥片の打面と、３の石核の一部に自然面が残されている。１は剥離面を打面とし、剥離された剥片である。２は自然面を打面としており、節理面で剥離している剥片である。３は分割礫素材と推定される残核である。１は弥生Ｂ区、２・３は古代の遺構検出面からの出土である。石材は流紋岩である。

接合資料96（第463図、写真図版163）

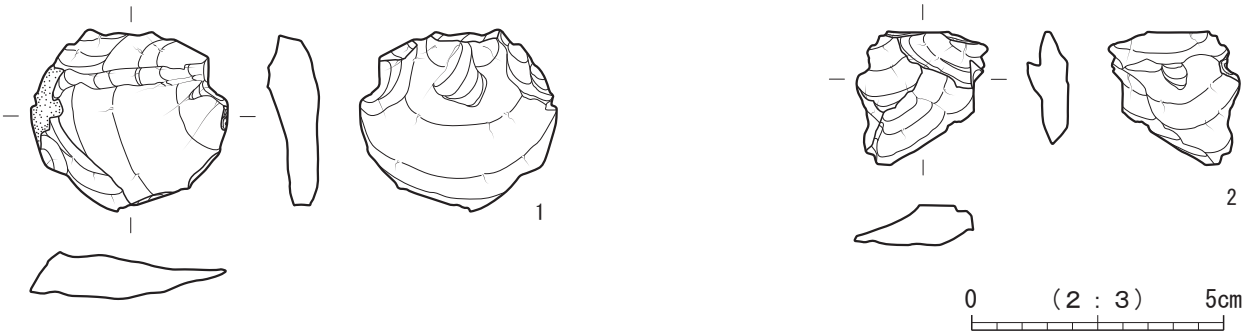
節理による同時割れを起こしたと考えられる剥片の接合資料である。剥離面と自然面から成る面を打面として剥離された剥片である。Ka-308・309は表面に自然面を残している。Ka-308は古代の遺構内堆積土、Ka-309は弥生Ｂ区ＳＫ42・43からの出土である。石材は流紋岩である。

接合資料97（第463図、写真図版163）

剥片２点の接合資料である。１は剥離面を打面とし、剥離された剥片である。２の剥片も１と同一の剥離面を打面とし、同一方向の加撃によって剥離されている。ともに古代の遺構内堆積土からの出土である。石材は流紋岩である。

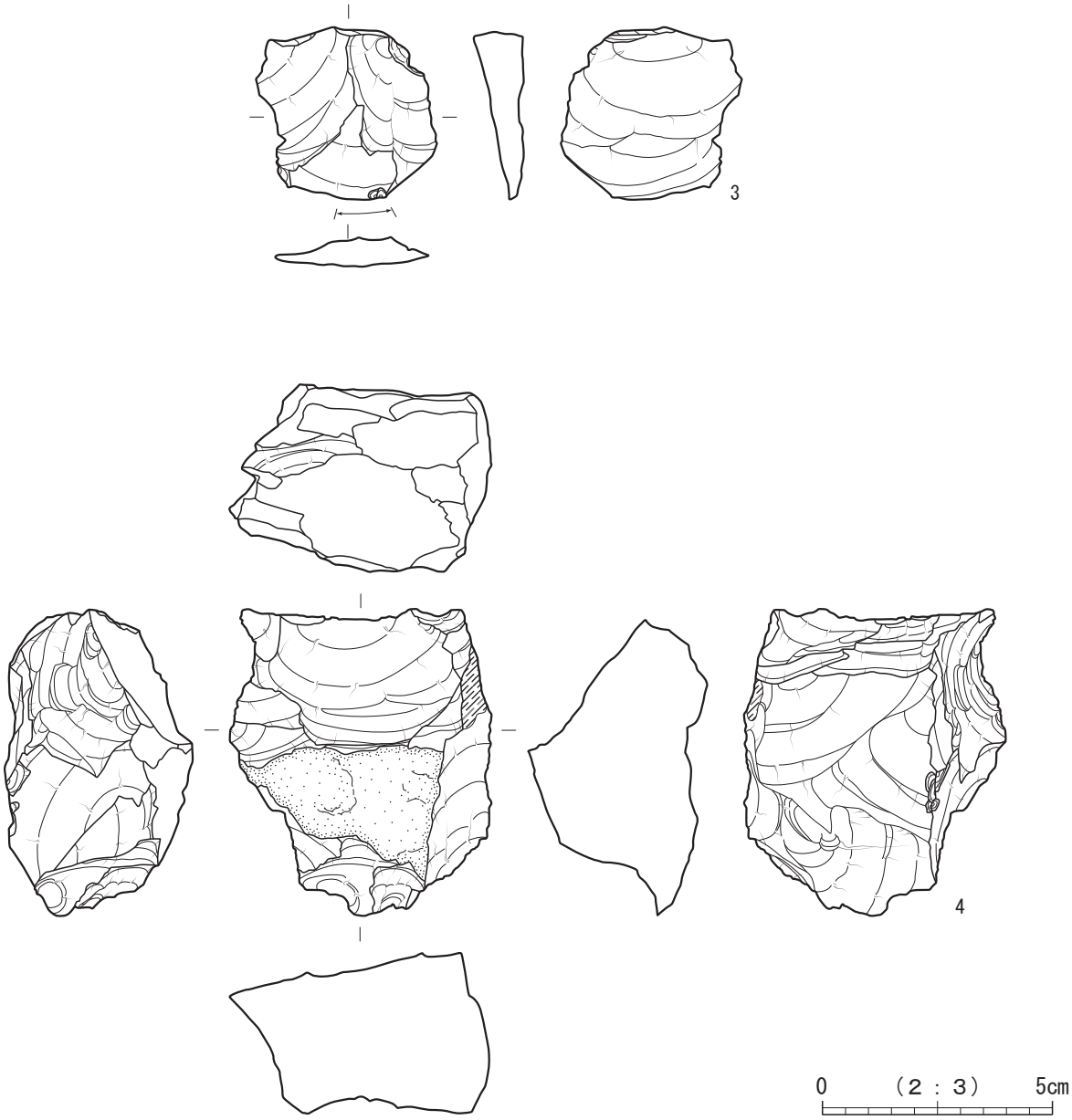


接合資料94



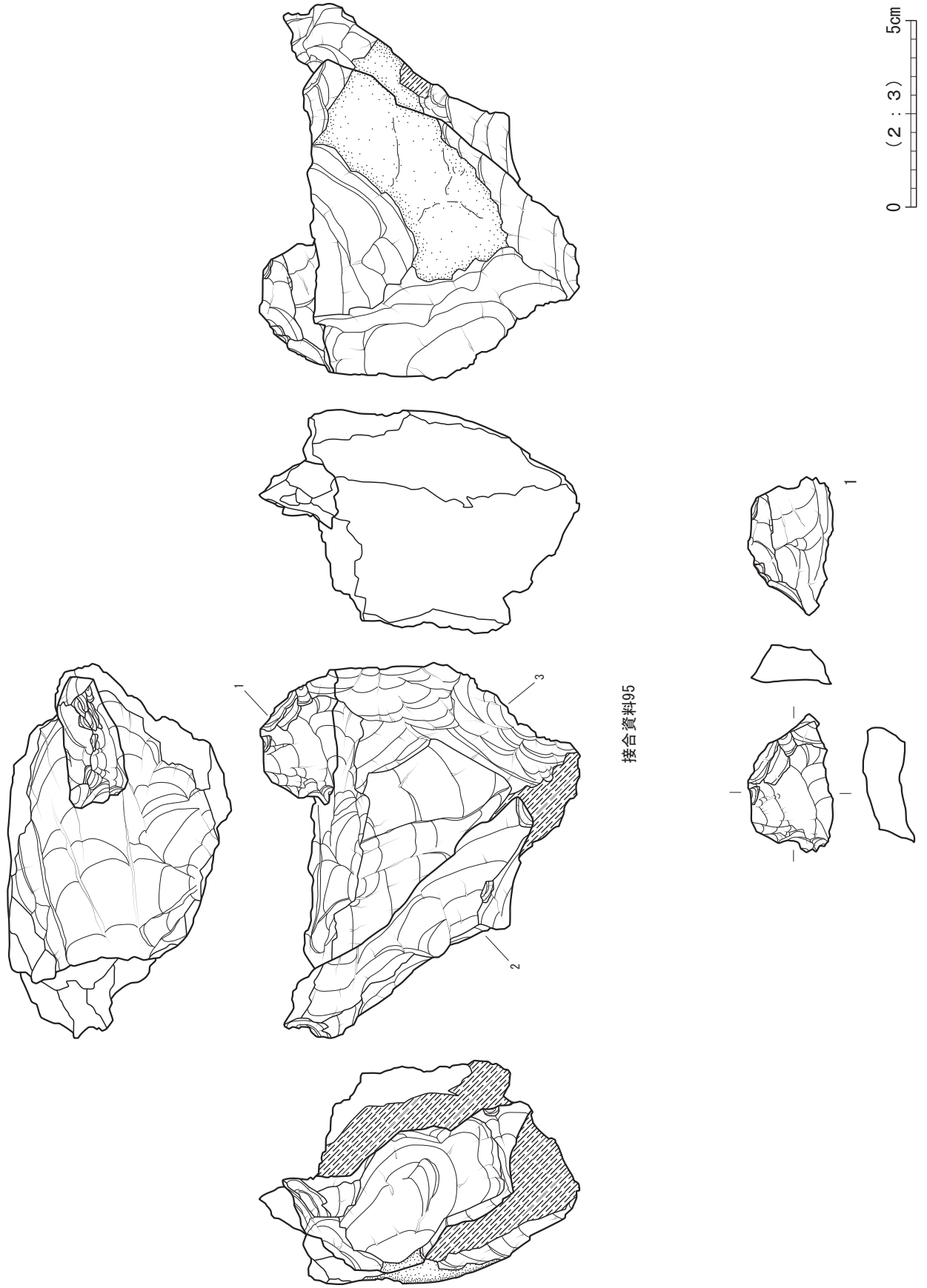
図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
1	Ka-302	-	Pit625・堆積土	-	打製石器	剥片	-	3.5×3.9×1.1	12.48	流紋岩	接合資料94、平坦打面、剥離角115°、自然面あり	162
2	Ka-301	-	遺構検出面	-	打製石器	剥片	-	2.6×2.4×0.8	4.15	流紋岩	接合資料94、打面部欠損	162

第459図　接合資料(84)



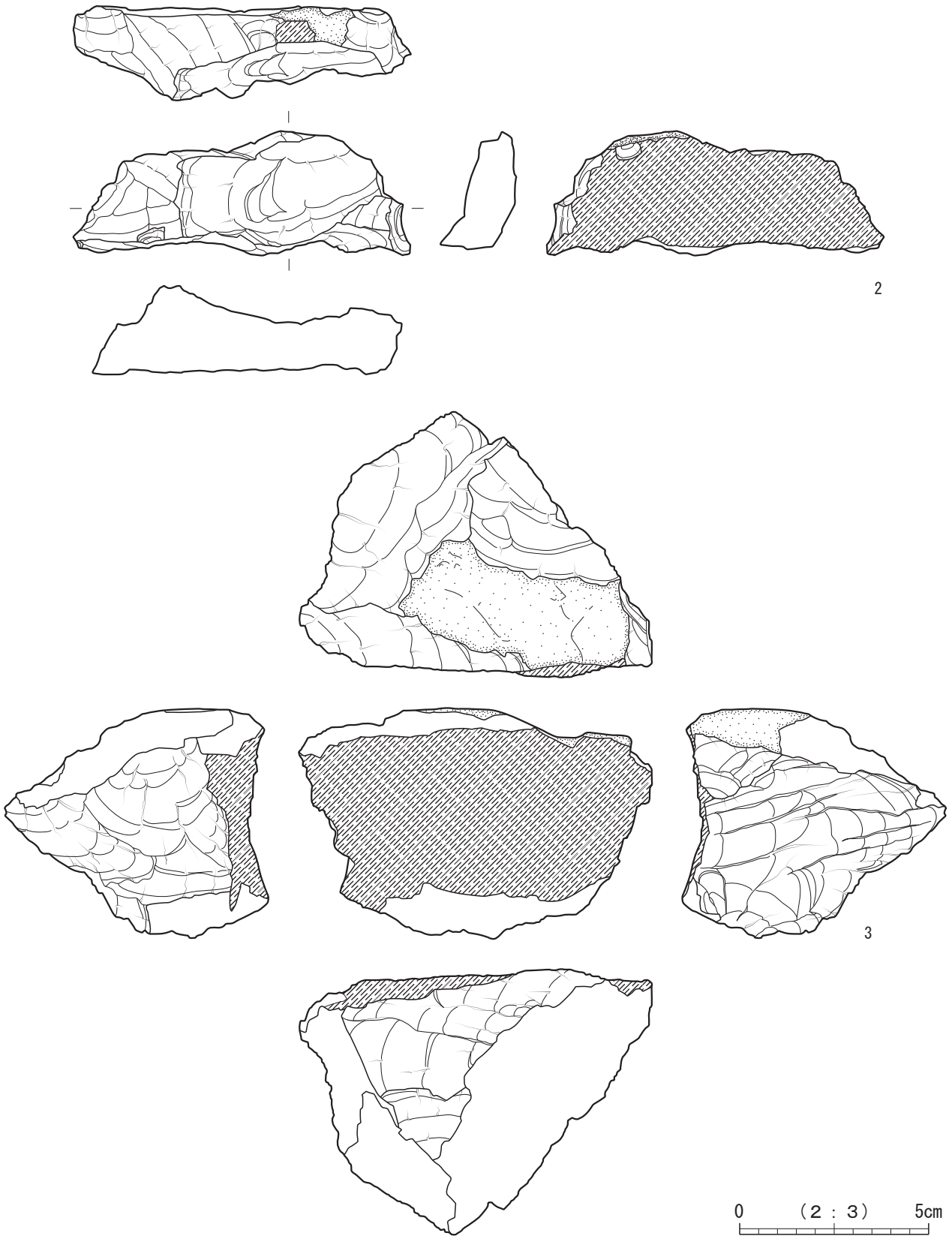
図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
3	Ka-304	B区	Ⅳ層	-	打製石器	微細剥離痕のある剥片	Ⅰ	3.7×3.7×1.1	10.29	流紋岩	接合資料94、切子打面、剥離角101°、1縁辺に微細剥離痕あり	162
4	Ka-303	B区	Ⅳ層	-	打製石器	石核	-	6.5×5.6×4.0	141.88	流紋岩	接合資料94、礫素材、打面転移あり、自然面あり	162

第460図　接合資料(85)



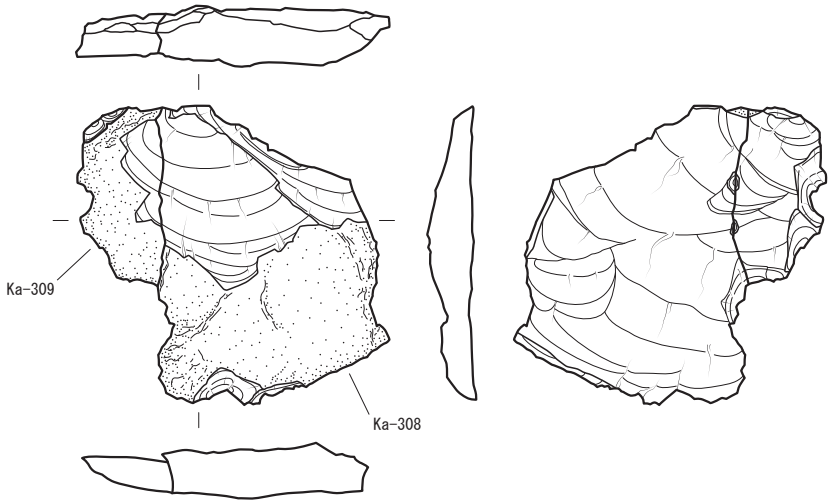
図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
1	Ka-307	B区	Ⅳ層	-	打製石器	剥片	-	2.1×3.4×1.1	9.56	流紋岩	接合資料95、平坦打面、剥離角123°	163

第461図　接合資料(86)

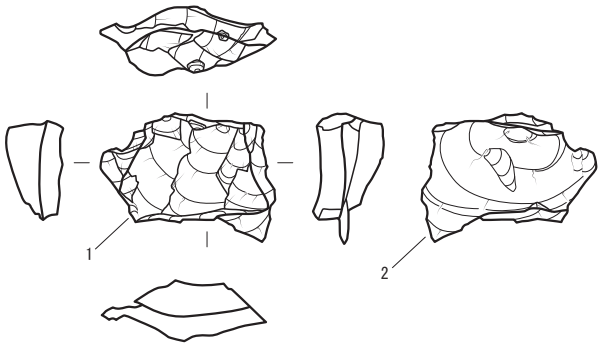


図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
2	Ka-306	-	遺構検出面	-	打製石器	剥片	-	3.2×8.8×2.4	58.50	流紋岩	接合資料95、自然面打面、剥離角102°、自然面あり	163
3	Ka-305	-	遺構検出面	-	打製石器	石核	-	5.9×9.0×6.5	267.98	流紋岩	接合資料95、礫素材、打面転移あり、自然面あり	163

第462図　接合資料(87)



接合資料96

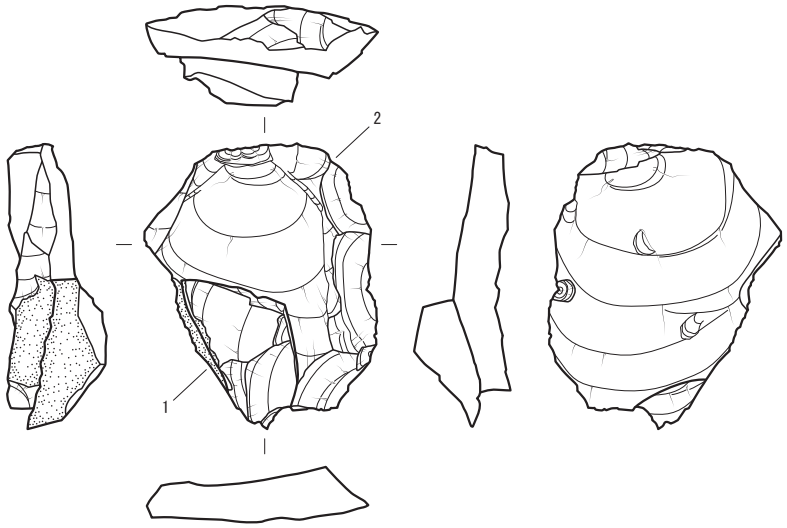


接合資料97

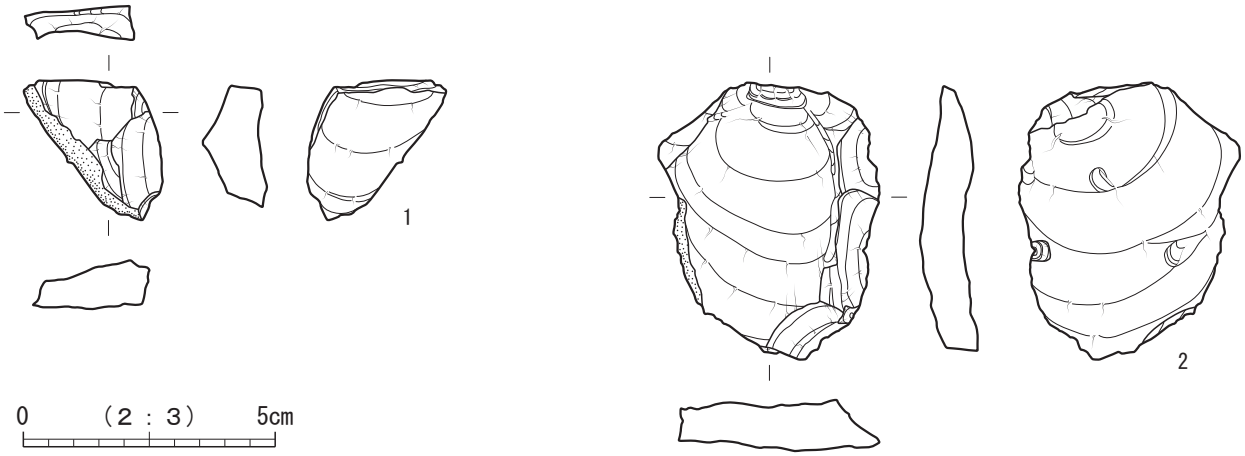
0　（2：3）　5cm

図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
	Ka-308	-	SI99・堆積土	-	打製石器	剥片	-	6.0×4.6×1.1	31.13	流紋岩	接合資料96、自然面あり	163
	Ka-309	B区	SK42・43・堆積土	-	打製石器	剥片	-	3.5×1.7×0.8	5.64	流紋岩	接合資料96、自然面打面、剥離角97°、自然面あり	163
1	Ka-311	-	SI99・堆積土	-	打製石器	剥片	-	2.1×2.8×0.9	4.80	流紋岩	接合資料97、平坦打面、剥離角119°	163
2	Ka-310	-	SD42・堆積土	-	打製石器	剥片	-	2.2×3.3×0.8	3.67	流紋岩	接合資料97、平坦打面、剥離角106°	163

第463図　接合資料(88)



接合資料98



図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
1	Ka-313	-	SI127・堆積土	-	打製石器	剥片	-	2.6×2.4×1.1	6.89	流紋岩	接合資料98、打面部欠損、自然面あり	163
2	Ka-312	-	SI99・堆積土	-	打製石器	剥片	-	5.4×4.2×1.1	29.41	流紋岩	接合資料98、平坦打面、剥離角124°、自然面あり	163

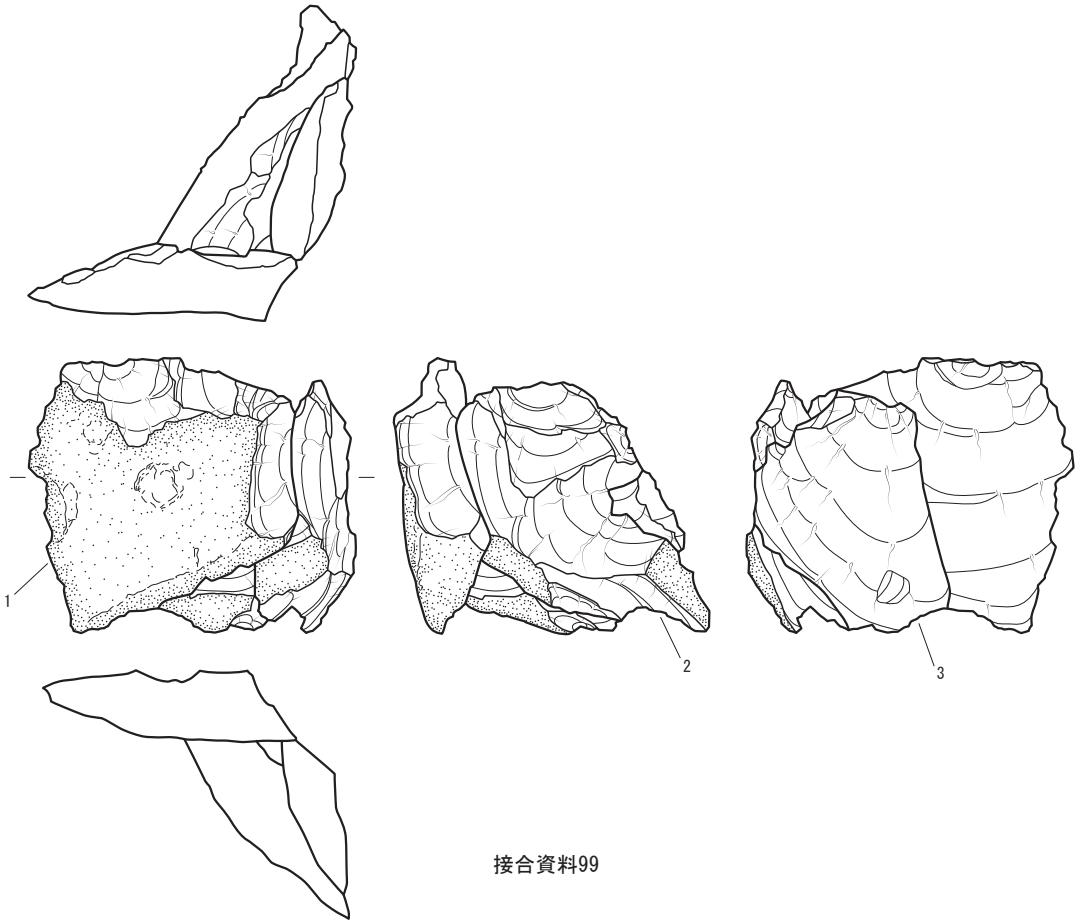
第464図　接合資料(89)

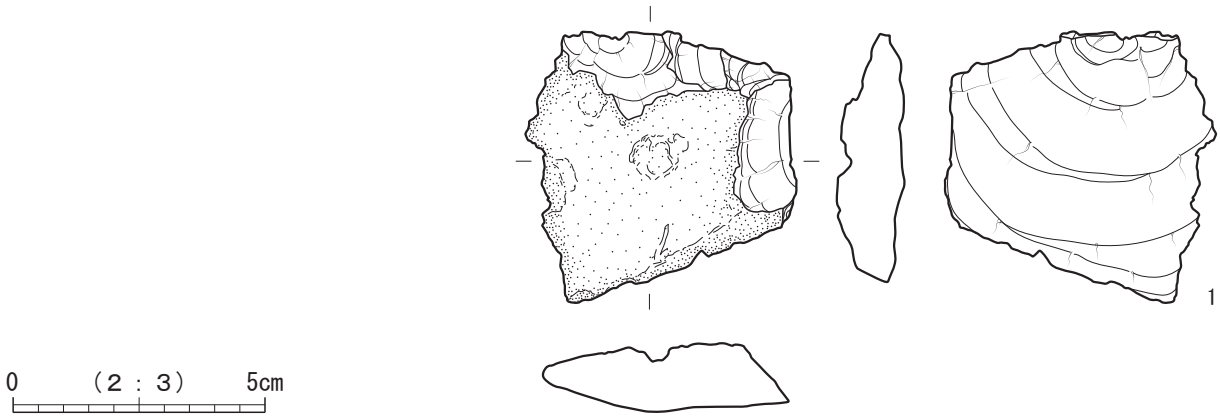
接合資料98（第464図、写真図版163）

剥片２点の接合資料である。ともに表面の左側縁側に自然面を残している。１は打面側を欠損しているが、２の剥片剥離の前に剥離されており、同一方向からの加撃によるものであることから、剥離面打面と推定される。１・２ともに古代の遺構内堆積土からの出土である。石材は流紋岩である。

接合資料99（第465・466図、写真図版163）

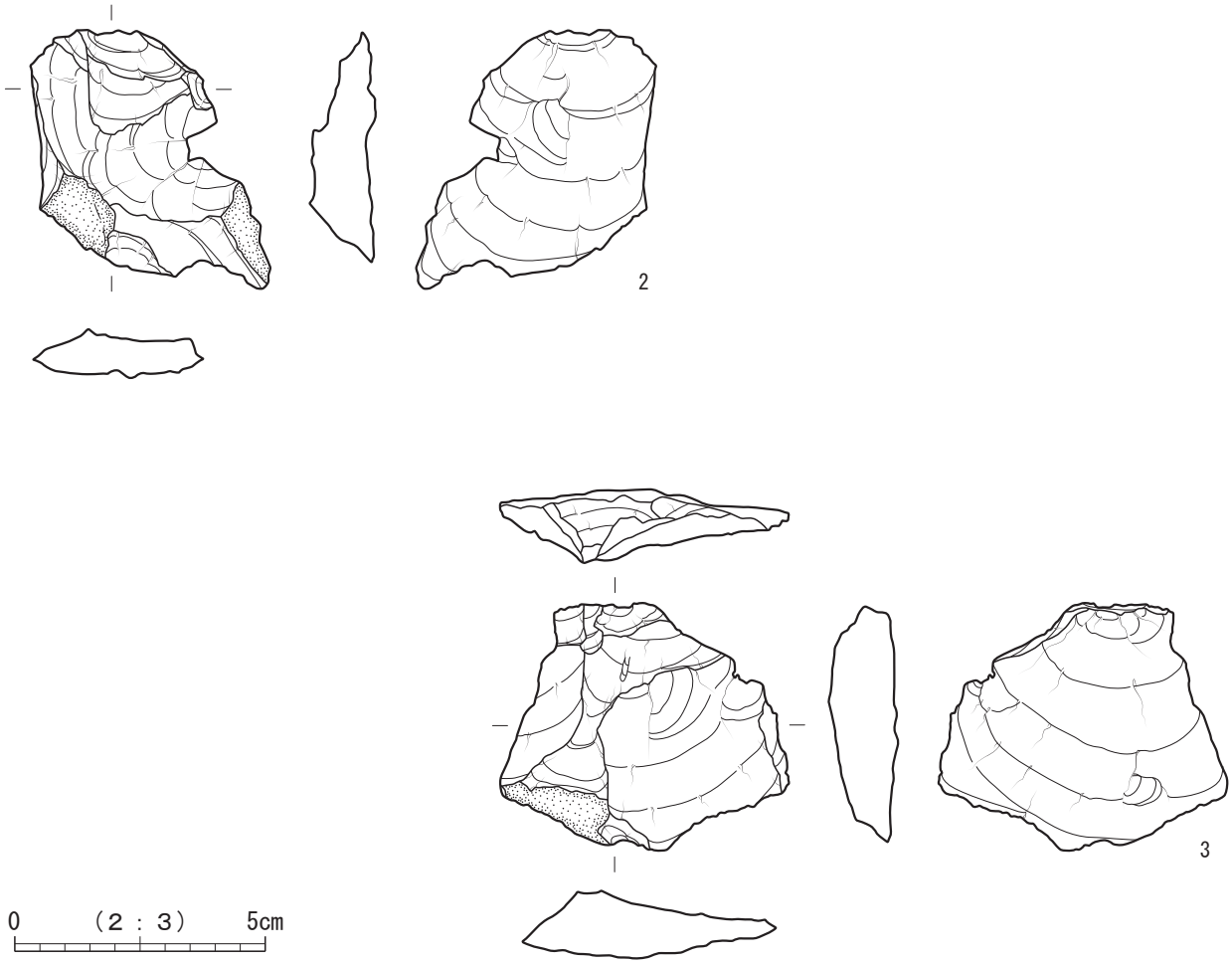
剥片３点の接合資料である。１は表面に自然面を残している。２は表面の両側縁側に自然面を残しており、３は表面の末端側に自然面を残している。１は剥離面を打面とし、剥離された剥片である。２と３の剥片は作業面を90°回転し、同一方向からの加撃によって剥離している。１は弥生Ｃ区、２は古代の遺構内堆積土、３は古代の遺構検出面からの出土である。石材は流紋岩である。





図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
1	Ka-316	C区	Ⅳ層	-	打製石器	剥片	-	5.3×5.2×1.6	39.61	流紋岩	接合資料99、線状打面、剥離角125°、自然面あり	163

第465図　接合資料(90)



図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
2	Ka-315	-	SI82・堆積土	-	打製石器	剥片	-	4.8×4.2×1.2	22.38	流紋岩	接合資料99、線状打面、剥離角110°、自然面あり	163
3	Ka-314	-	遺構検出面	-	打製石器	剥片	-	4.9×5.8×1.4	29.73	流紋岩	接合資料99、平坦打面、剥離角124°、自然面あり	163

第466図　接合資料(91)

接合資料100（第467図、写真図版163）

折面で接合した石核の接合資料である。剥片を素材とする石核と考えられ、a面とb面で剥片剥離が行われている。石材は流紋岩である。

接合資料101（第467図、写真図版164）

剥片と、剥片を素材とする石核の接合資料である。1は剥離面を打面とし、剥離された剥片であり、ウートラパッセが生じている。2は1の剥片が剥離されたことによって形成されたわずかに凹んだ部位に、微細剥離痕が認められることから、この部位を刃部として使用されたものと考えられる。1は微細剥離痕のある剥片Ⅰ類である。ともに弥生C区からの出土である。石材は珪質頁岩である。

接合資料102（第468図、写真図版164）

節理面の影響から同時割れを起こした石核の接合資料である。Ka-321は古代の遺構内堆積土、Ka-322は弥生B区からの出土である。石材は珪質頁岩である。

接合資料103（第468図、写真図版164）

微細剥離痕のある剥片１点と剥片１点の接合資料である。１は剥離面から成る面を打面とし、剥離された剥片である。２の剥片は90°打面転移が行われ、剥離されている。１は微細剥離痕のある剥片Ⅰ類である。１は古代の遺構検出面、２は弥生Ｃ区からの出土である。石材は珪質頁岩である。

接合資料104（第469図、写真図版164）

二次加工のある剥片１点と剥片１点の接合資料である。１・２は表面に自然面を大きく残している。１は自然面を打面とし、剥離された剥片である。２の剥片も同一方向からの加撃によって剥離されているが、調整打面である。２は二次加工のある剥片Ⅰ類である。ともに弥生Ｃ区から出土している。石材は珪質頁岩である。

接合資料105（第469図、写真図版164）

折面で接合した二次加工のある剥片の接合資料である。表面の右側縁側に二次加工を施しており、二次加工のある剥片Ⅱ類である。Ka-327は古代の遺構検出面、Ka-328は弥生Ｃ区から出土している。石材は珪質頁岩である。

接合資料106（第470図、写真図版164）

剥片２点の接合資料である。ともに表面に自然面を大きく残している。１・２とも剥離面を打面とし、剥離された剥片である。２の剥片は90°打面転移が行われ、剥離している。ともに弥生Ｂ区から出土している。石材は珪質頁岩である。

接合資料107（第471図、写真図版164）

二次加工のある剥片１点と剥片１点の接合資料である。ともに表面に自然面を大きく残している。１は点状打面であり、２は同一方向からの加撃によって連続的に剥離されている。２は二次加工のある剥片Ⅱ類である。１は古代の遺構内堆積土、２は弥生Ｂ区からの出土である。石材は流紋岩である。

接合資料108（第472・473図、写真図版164）

石核１点と剥片２点の接合資料である。分割礫の分割面を打面として剥片剥離作業が行われている。１は表面に自然面を大きく残し、２は表面の末端側に自然面をわずかに残す剥片である。１・２は古代の遺構内堆積土、３の石核は古代の遺構検出面からの出土である。石材は流紋岩である。

接合資料109（第474図、写真図版165）

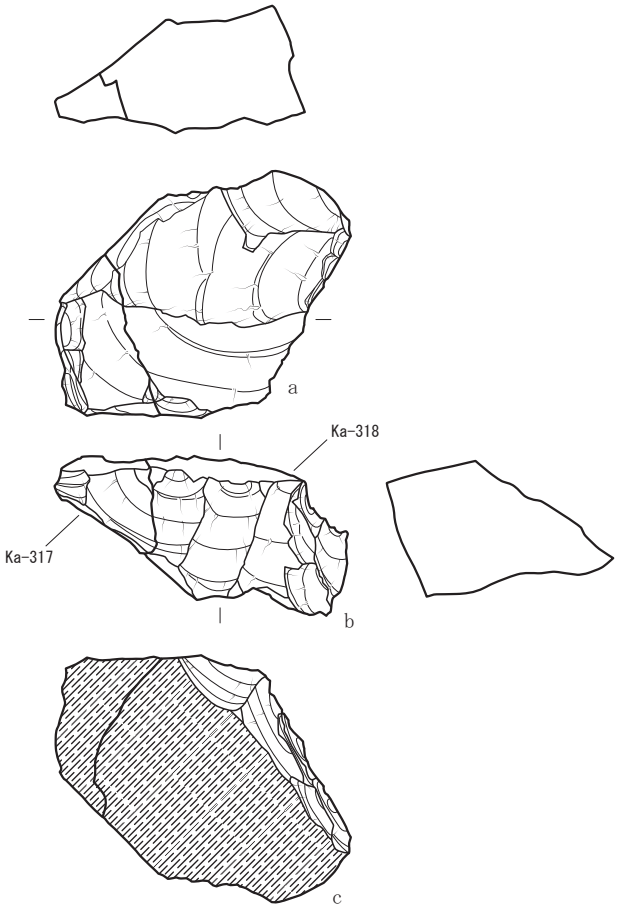
二次加工のある剥片１点と剥片１点の接合資料である。２は、折面で接合しており、裏面の左側縁側に二次加工を施す際に折れたものと考えられる。１は剥離面から成る面を打面とし、剥離された剥片である。２の剥片も同一方向からの加撃によって剥離している。２は二次加工のある剥片Ⅲ類である。１は弥生Ｄ区、２は古代の遺構内堆積土からの出土である。石材は流紋岩である。

接合資料110（第474図、写真図版165）

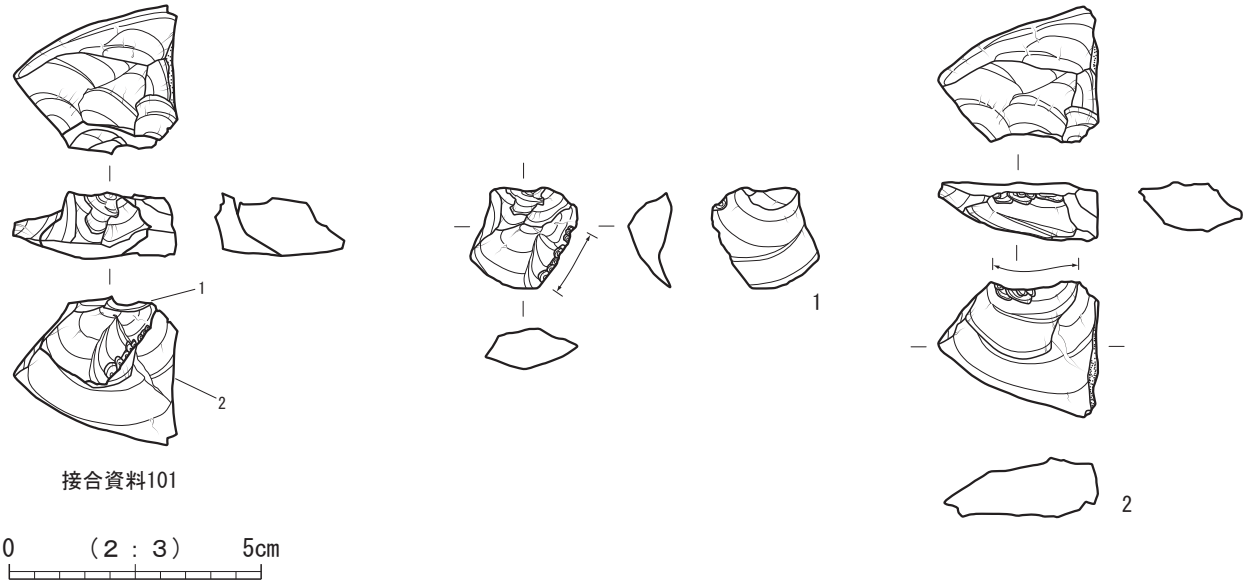
同時割れを起こしている剥片の接合資料である。Ka-339は古代の遺構検出面、Ka-340は弥生Ｅ区からの出土である。石材は珪質頁岩である。

接合資料111（第475図、写真図版165）

石核１点と剥片１点の接合資料である。１は表面の末端側に自然面を残す剥片であり、剥離面を打面として、剥離されている。２は剥片を素材とする石核であり、表面の左側縁側に自然面を残しており、１縁辺には微細剥離痕が観察される。ともに古代の遺構検出面からの出土である。石材は流紋岩である。



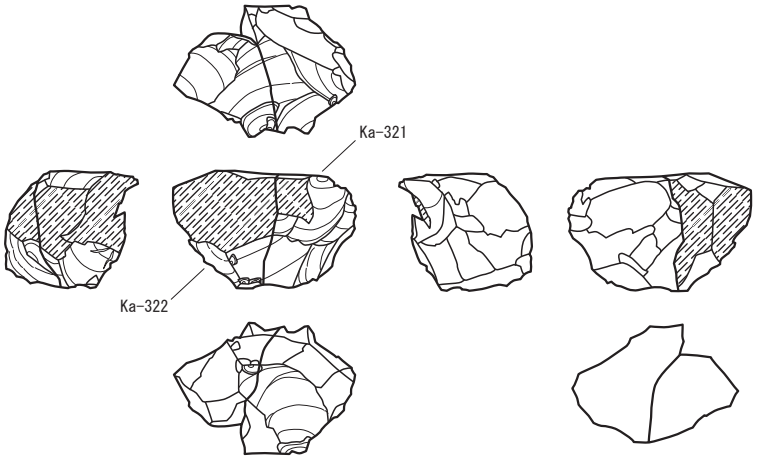
接合資料100



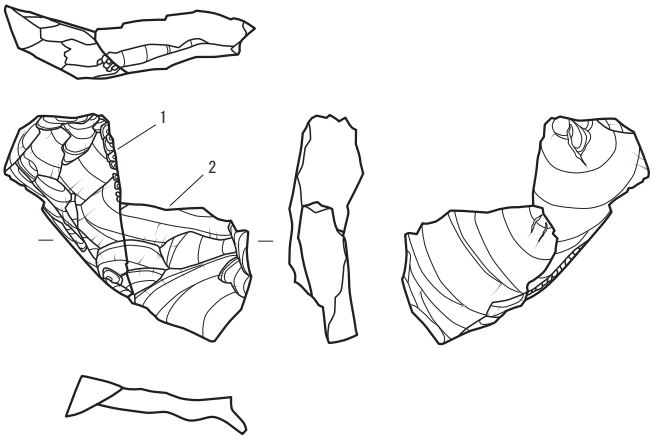
接合資料101

図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
	Ka-317	B区	Ⅳ層	-	打製石器	剥片	-	1.8×1.6×3.1	7.18	流紋岩	接合資料100、打面部欠損	163
	Ka-318	B区	Ⅳ層	S21	打製石器	石核	-	2.6×5.4×3.9	53.23	流紋岩	接合資料100、剥片素材、打面面転移あり	163
1	Ka-319	C区	Ⅳ層	P13	打製石器	微細剥離痕のある剥片	I	1.9×1.9×0.8	2.45	珪質頁岩	接合資料101、平坦打面、剥離角162°、1縁辺に微細剥離痕あり	164
2	Ka-320	C区	Ⅳ層	S29	打製石器	石核	-	2.7×3.1×1.1	8.02	珪質頁岩	接合資料101、打面部加工、1縁辺に微細剥離痕あり、自然面あり	164

第467図　接合資料(92)



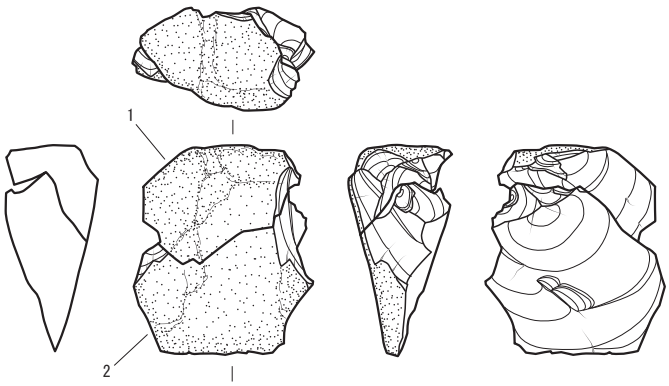
接合資料102



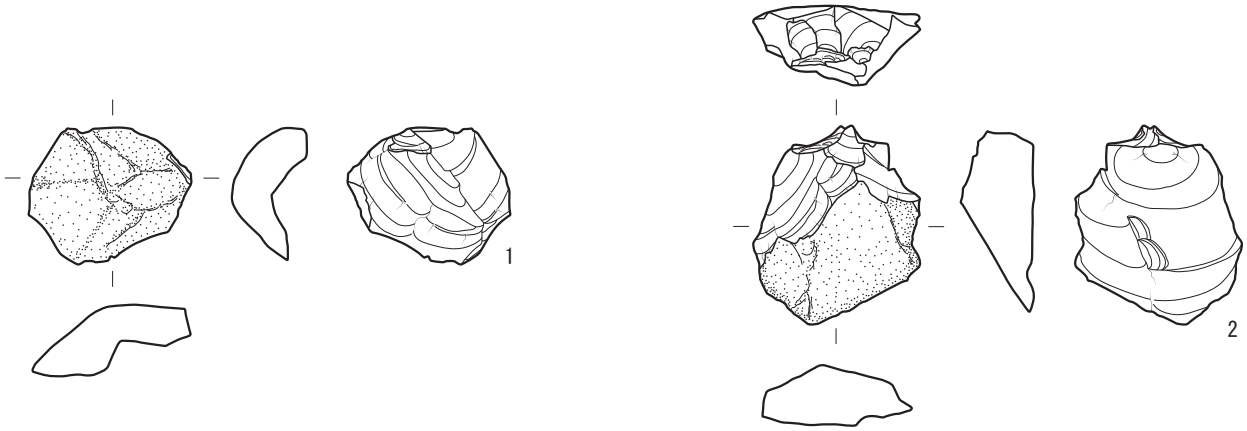
接合資料103

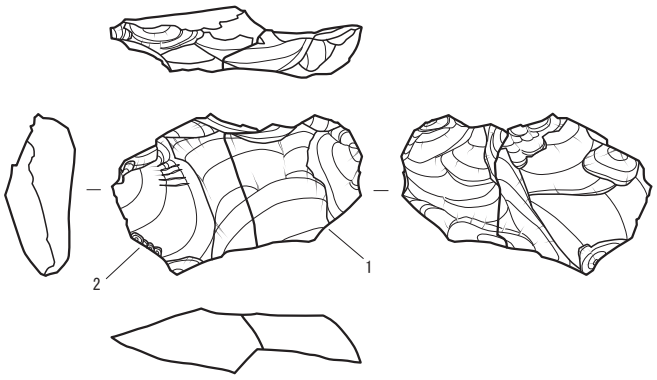
図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
	Ka-321	-	SB9・堆積土	-	打製石器	石核	-	2.3×1.7×2.5	9.51	珪質頁岩	接合資料102、素材不明、打面転移あり、自然面あり	164
	Ka-322	B区	Ⅳ層	-	打製石器	剥片	-	2.3×1.9×2.2	6.64	珪質頁岩	接合資料102、打面部欠損、自然面あり	164
1	Ka-323	-	遺構検出面	-	打製石器	微細剥離痕のある剥片	Ⅰ	3.3×2.5×1.0	5.99	珪質頁岩	接合資料103、線状打面、剥離角103°、1縁辺に微細剥離痕あり、自然面あり	164
2	Ka-324	C区	Ⅳ層	-	打製石器	剥片	-	3.3×2.3×0.8	6.01	珪質頁岩	接合資料103、線状打面、剥離角104°	164

第468図　接合資料(93)



接合資料104



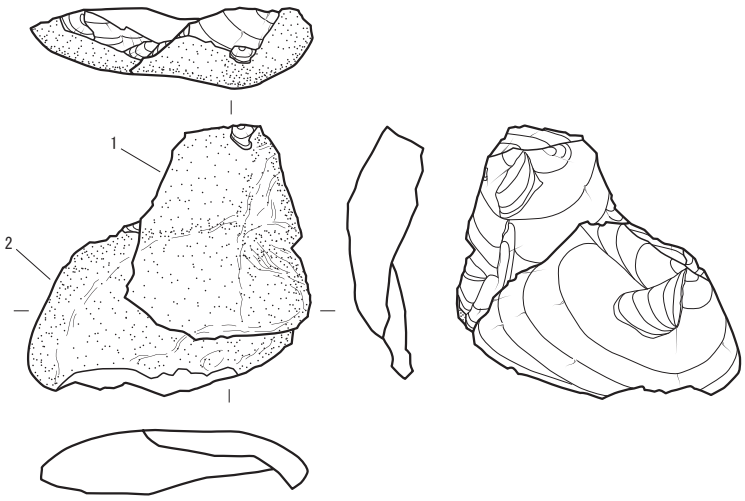


接合資料105

0　（2：3）　5cm

図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
1	Ka-325	C区	Ⅳ層	-	打製石器	剥片	-	2.7×3.6×1.3	8.51	珪質頁岩	接合資料104、打面部欠損、自然面あり	164
2	Ka-326	C区	Ⅳ層	S198	打製石器	二次加工のある剥片	Ⅰ	3.6×3.2×1.5	16.02	珪質頁岩	接合資料104、打面部加工、表面加工、自然面あり	164
	Ka-327	-	遺構検出面	-	打製石器	剥片	-	3.2×3.1×1.3	10.46	珪質頁岩	接合資料105、打面部欠損、自然面あり	164
	Ka-328	B区	Ⅳ層	S90	打製石器	二次加工のある剥片	Ⅰ	2.4×2.8×1.0	6.44	珪質頁岩	接合資料105、打面部欠損、表面加工、自然面あり	164

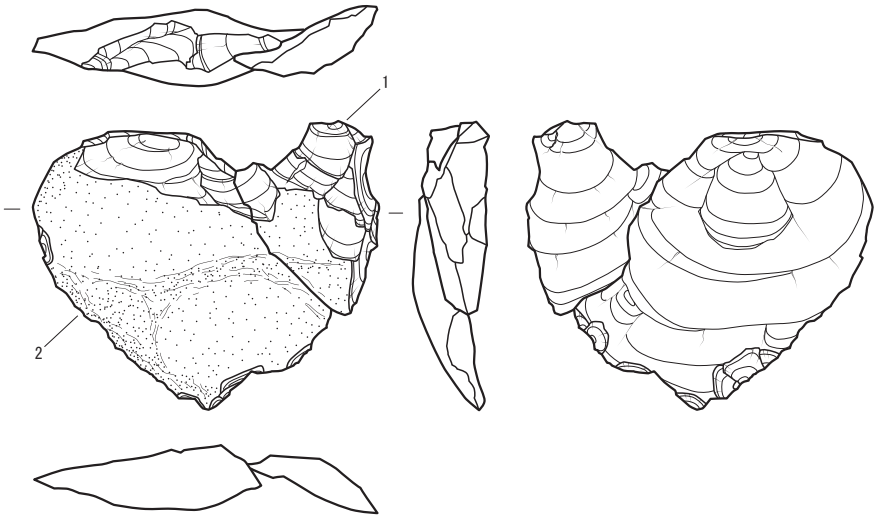
第469図　接合資料(94)



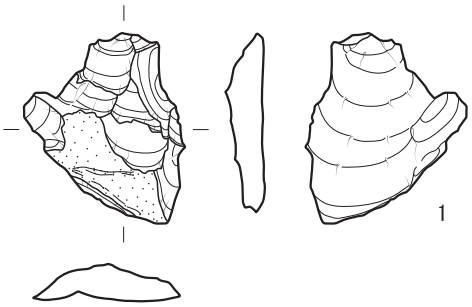
接合資料106

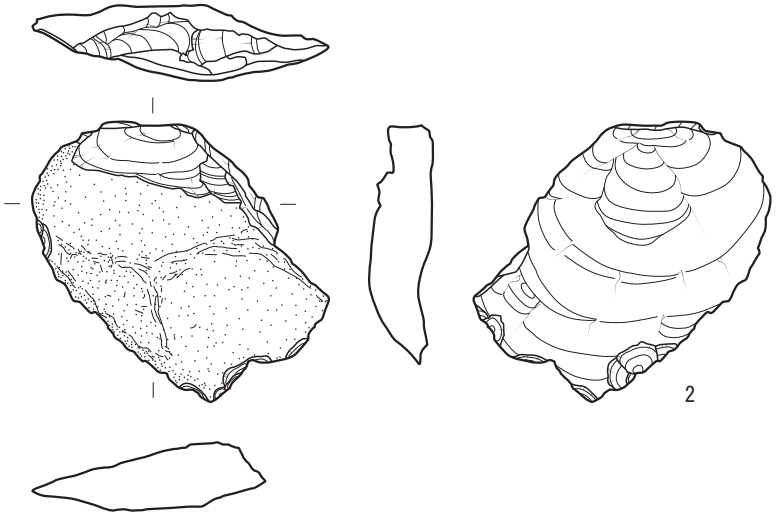
図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
1	Ka-329	C区	Ⅳ層	S71	打製石器	剥片	-	4.3×3.7×1.4	17.96	珪質頁岩	接合資料106、平坦打面、剥離角111°、自然面あり	164
2	Ka-330	C区	Ⅳ層	S104	打製石器	剥片	-	3.6×4.4×1.3	22.03	珪質頁岩	接合資料106、切子打面、剥離角118°、自然面あり	164

第470図　接合資料(95)



接合資料107

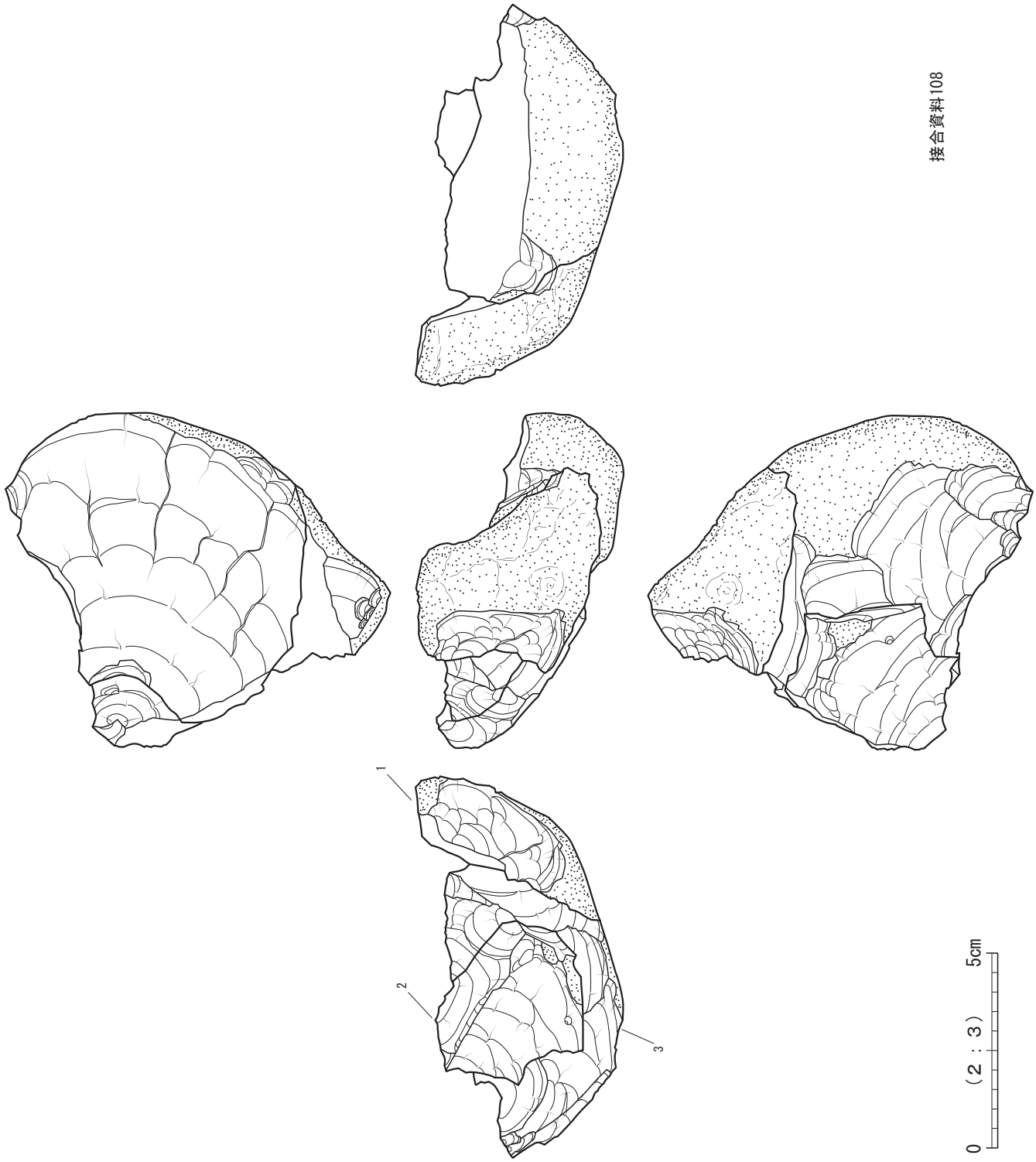




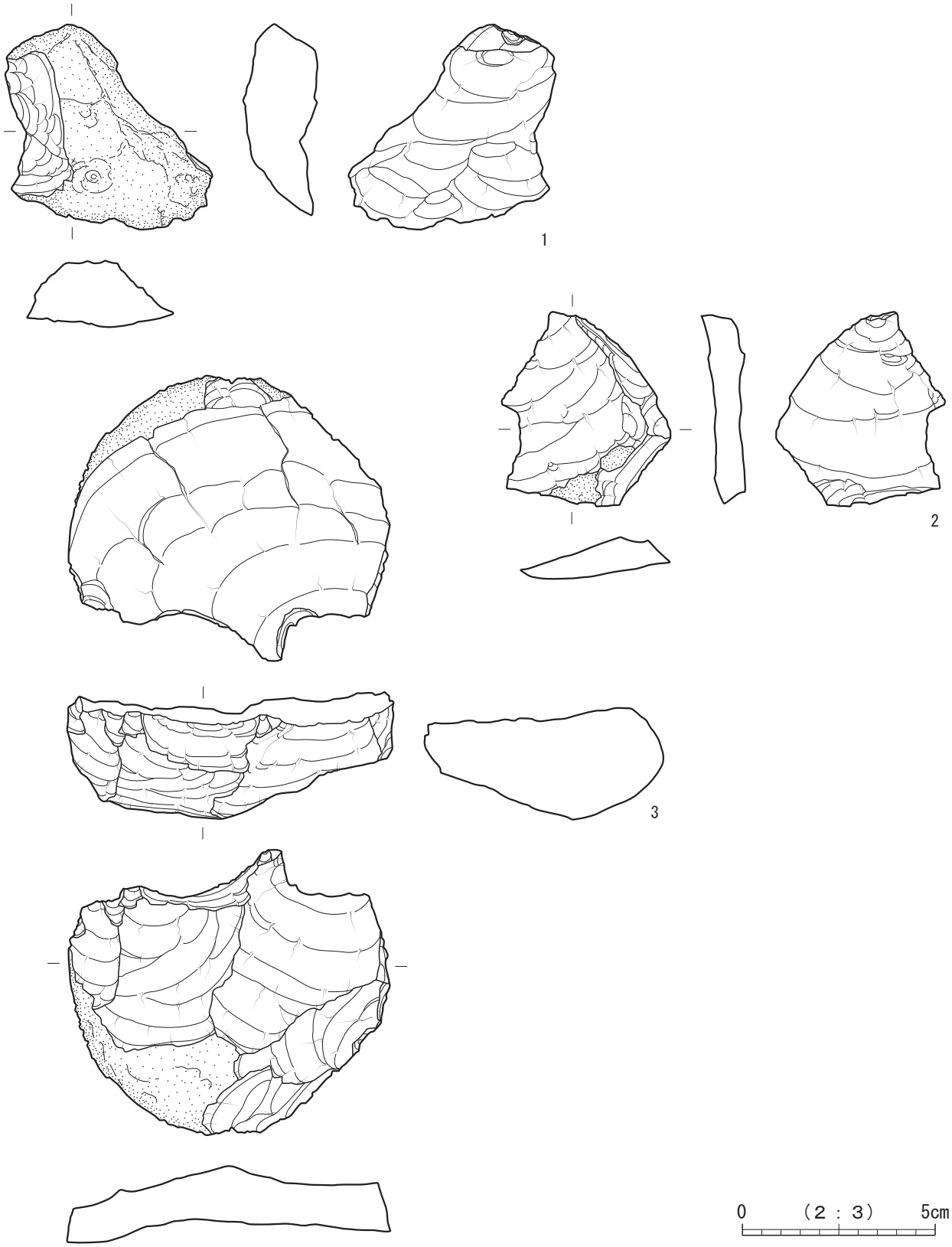
0　（2：3）　5cm

図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ（cm）	重量（g）	石材	備　考	写真図版
1	Ka-331	-	SD42・堆積土	-	打製石器	剥片	-	3.6×3.1×0.9	31.39	流紋岩	接合資料107、点状打面、剥離角115°、自然面あり	164
2	Ka-332	B区	Ⅳ層	S57	打製石器	二次加工のある剥片	Ⅱ	5.2×5.1×1.4	6.55	流紋岩	接合資料107、平坦打面、剥離角136°、裏面加工、自然面あり	164

第471図　接合資料（96）

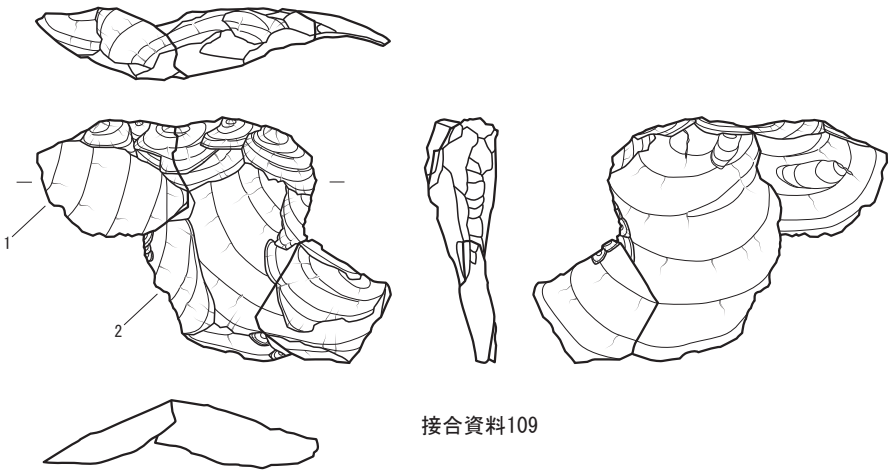


第472図　接合資料(97)

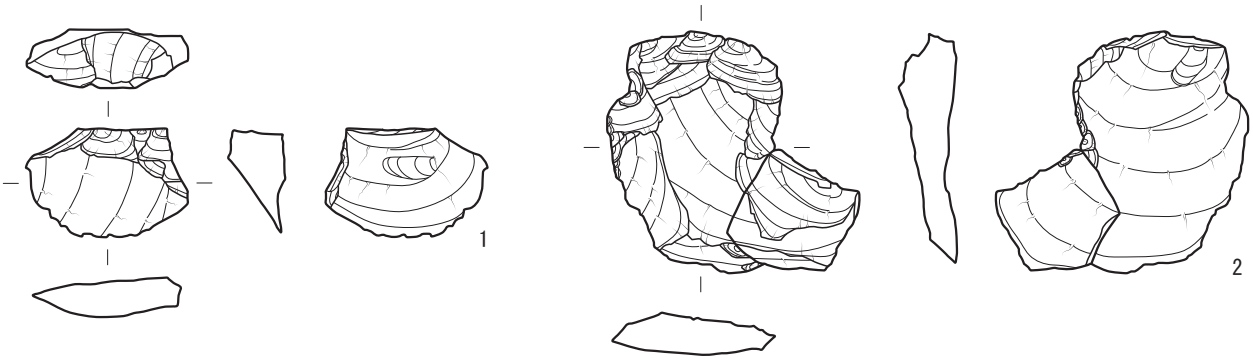


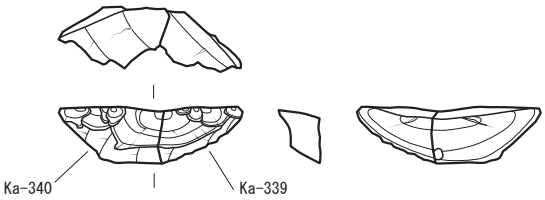
図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
1	Ka-334	-	SI113・堆積土	-	打製石器	剥片	-	5.0×5.1×1.9	39.87	流紋岩	接合資料108、平坦打面、剥離角129°、自然面あり	164
2	Ka-335	-	SI126・堆積土	-	打製石器	剥片	-	4.8×3.8×1.5	21.31	流紋岩	接合資料108、平坦打面、剥離角129°、自然面あり	164
3	Ka-333	-	遺構検出面	-	打製石器	石核	-	2.8×8.4×7.2	155.71	流紋岩	接合資料108、剥片素材、打面転移あり、自然面あり	164

第473図　接合資料(98)



接合資料109



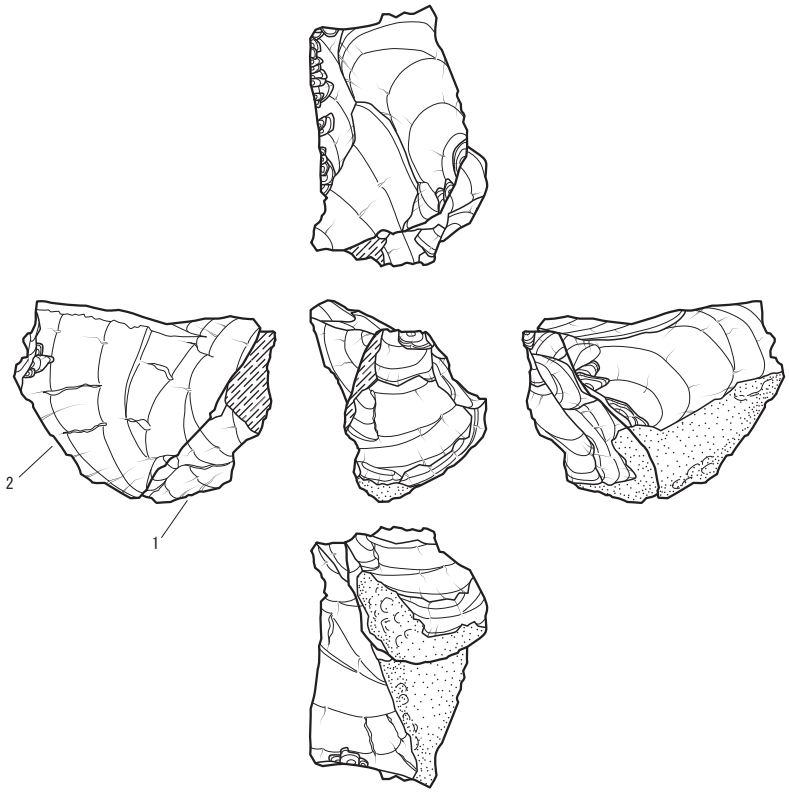


接合資料110

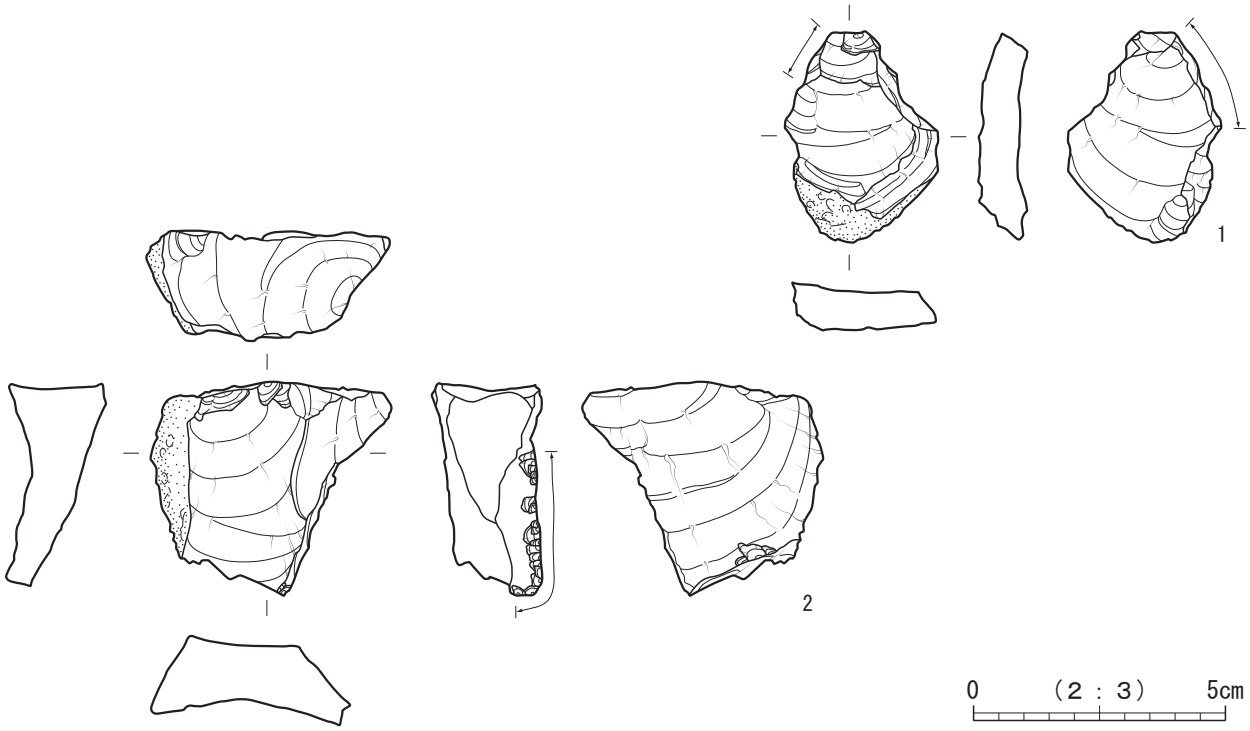
0　（2：3）　5cm

図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
1	Ka-338	D区	Ⅳ層	-	打製石器	剥片	-	2.1×3.1×1.1	5.99	流紋岩	接合資料109、平坦打面、剥離角100°	165
2	Ka-336	-	SI82・堆積土	-	打製石器	二次加工のある剥片	Ⅲ	4.6×4.7×1.3	17.02	流紋岩	接合資料109、切子打面、剥離角111°、表面＋裏面加工、自然面あり	165
	Ka-339	-	遺構検出面	-	打製石器	剥片	-	0.9×1.6×1.0	1.08	珪質頁岩	接合資料110、平坦打面、剥離角113°、自然面あり	165
	Ka-340	E区	Ⅳ層	-	打製石器	剥片	-	1.0×2.0×1.1	1.71	珪質頁岩	接合資料110、平坦打面、剥離角113°、自然面あり	165

第474図　接合資料(99)



接合資料111



図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考	写真図版
1	Ka-342	-	遺構検出面	-	打製石器	剥片	-	4.1×3.0×1.3	12.61	流紋岩	接合資料111、平坦打面、剥離角111°、自然面あり	165
2	Ka-341	-	遺構検出面	-	打製石器	石核	-	4.2×4.6×2.2	29.92	流紋岩	接合資料111、剥片素材、打面転移あり、1縁辺に微細剥離痕あり、自然面あり	165

第475図　接合資料(100)

接合資料112（第476・477図、写真図版165）

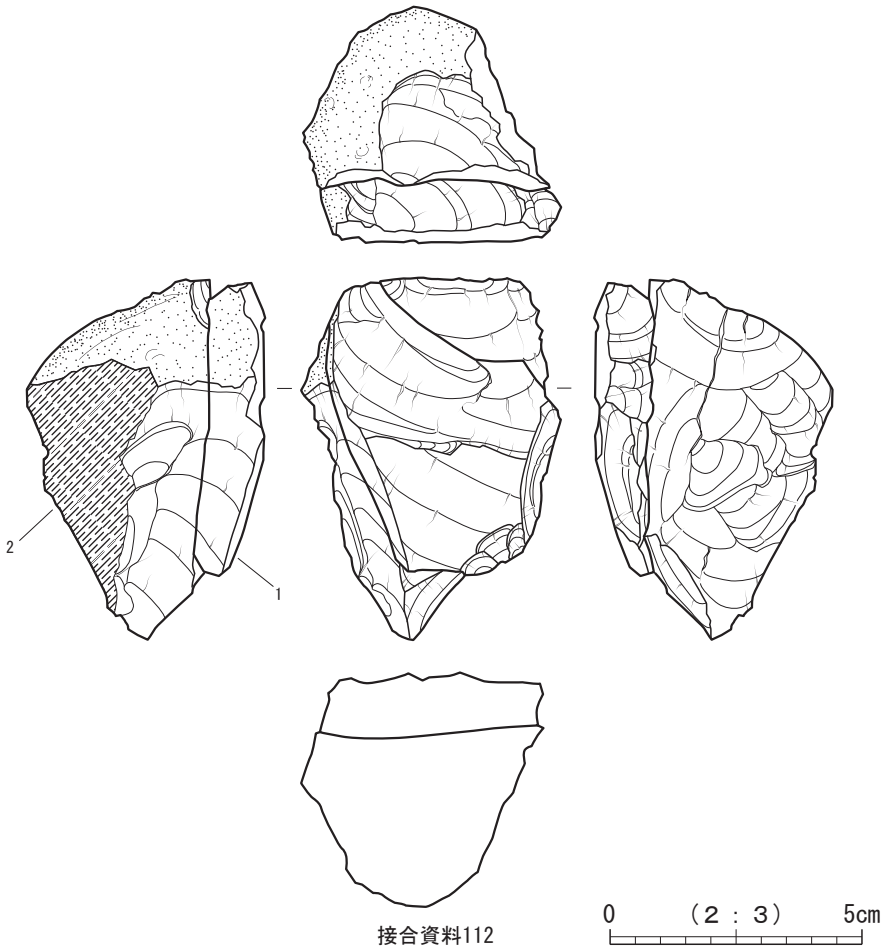
石核１点と二次加工のある剥片１点の接合資料である。１は剥離面を打面として剥離されている、二次加工のある剥片Ⅰ類である。２は分割礫素材の石核である。ともに弥生Ｂ区から出土している。石材は流紋岩である。

接合資料113（第478図、写真図版165）

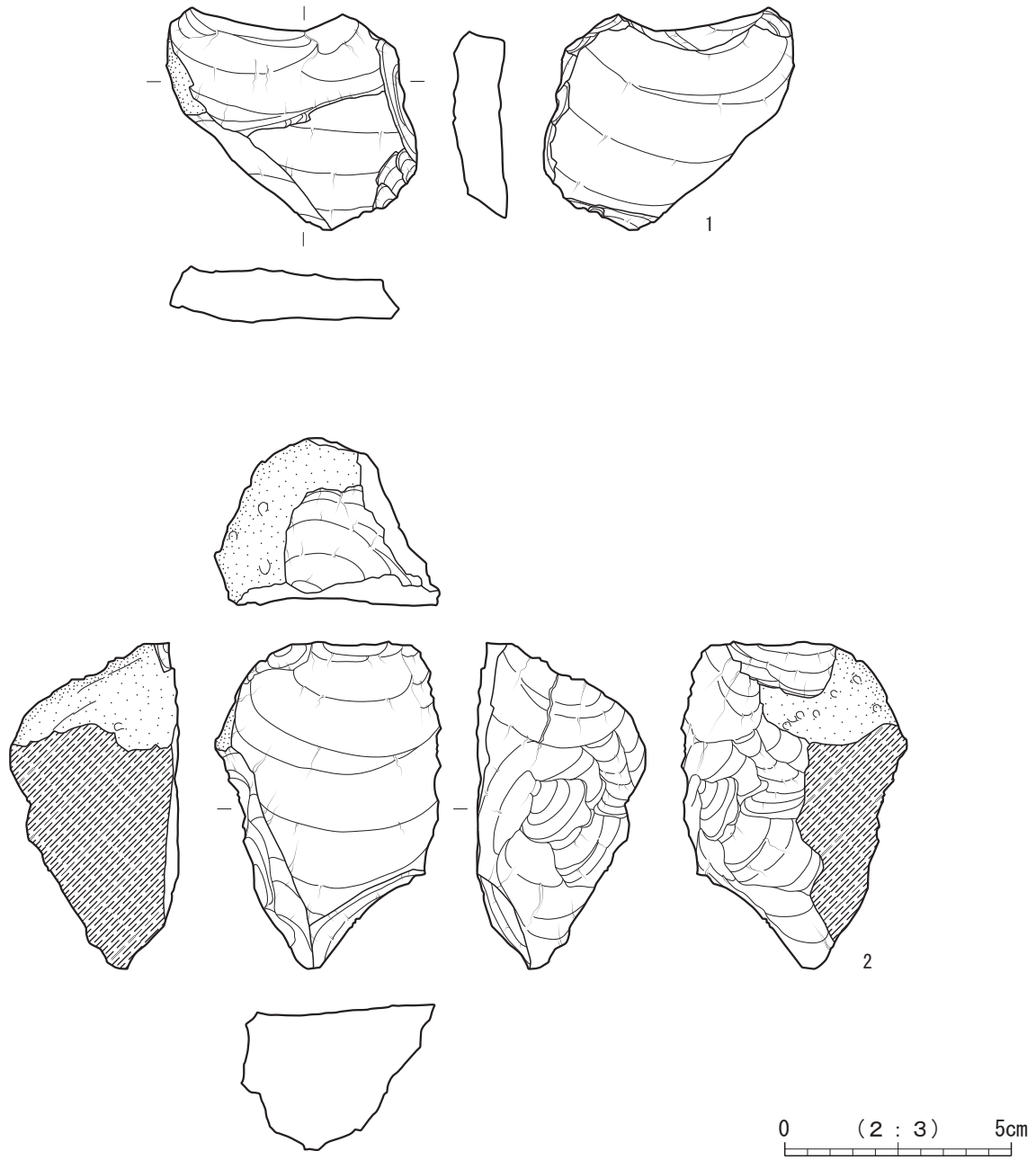
二次加工のある剥片１点と微細剥離痕のある剥片１点の接合資料である。１は表面の右側縁に自然面をわずかに残している。１は同時割れを起こして別個体になった後、それぞれに二次加工が施されている。２の裏面末端に微細剥離痕が観察される。１は二次加工のある剥片Ⅲ類であり、２は微細剥離痕のある剥片Ⅰ類である。１は弥生Ｂ区からの出土である。２は古代の遺構検出面からの出土である。石材は流紋岩である。

接合資料114（第479～481図、写真図版165）

二次加工のある剥片１点、微細剥離痕のある剥片１点、剥片４点の接合資料である。１・２・４は表面に大きく自然面を残し、５は表面の末端側に、６は表面の左側縁側に自然面を残している。１は剥離面を打面として、剥離された剥片である。２の剥片剥離では90°の打面転移が行われ、剥離面から成る面を打面として、剥離している。３の剥片では更に90°の打面転移が行われ、剥離面と自然面から成る面を打面として、剥離している。４・５の剥片はもう一度90°の打面転移が行われ、剥離面を打面として、剥離している。６の剥片は90°の打面転移が行われ、剥離面と自然面から成る面を打面として、剥離している。１は二次加工のある剥片Ⅲ類であり、３は微細剥離痕のある剥片Ⅰ類である。１・３・６は古代の遺構内堆積土、２は弥生Ｅ区、４・５は弥生Ｂ区からの出土である。石材は流紋岩である。

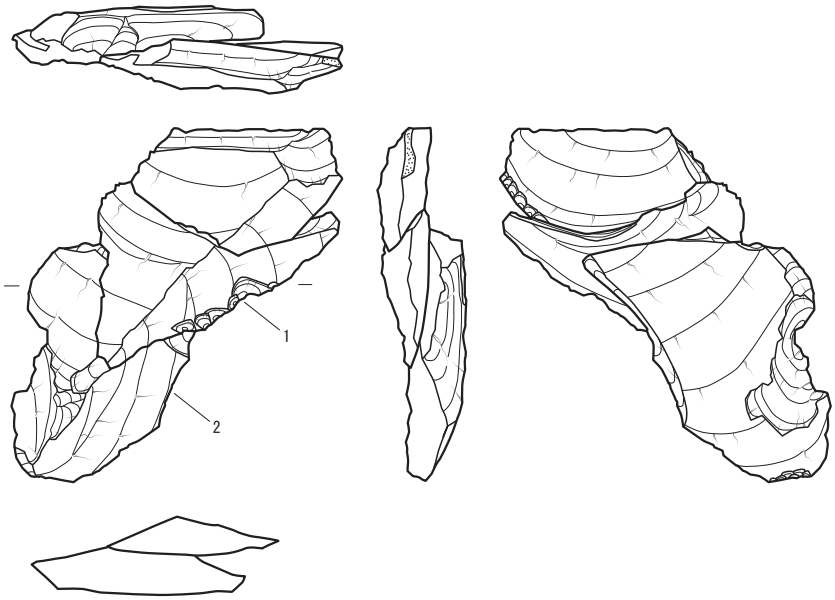


第476図　接合資料（101）

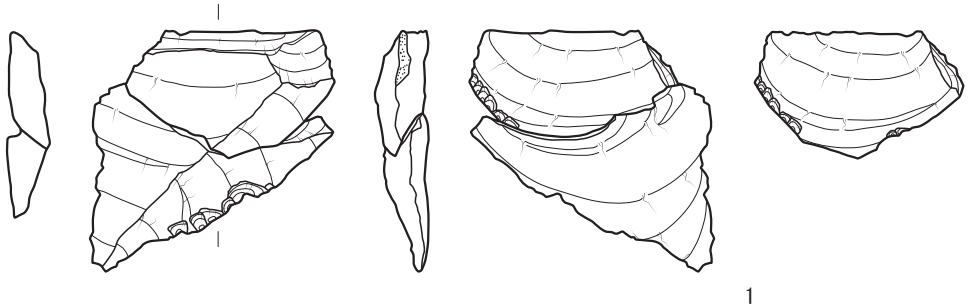


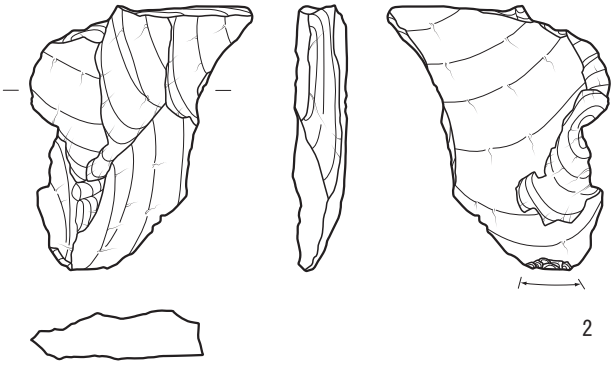
図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
1	Ka-344	B区	Ⅳ層	S47	打製石器	二次加工のある剥片	I	4.6×5.1×1.3	34.79	流紋岩	接合資料112、打面部欠損、表面加工、自然面あり	165
2	Ka-343	B区	Ⅳ層	S1	打製石器	石核	-	7.2×4.8×3.6	104.89	流紋岩	接合資料112、礫素材、打面転移あり、自然面あり	165

第477図　接合資料(102)



接合資料113

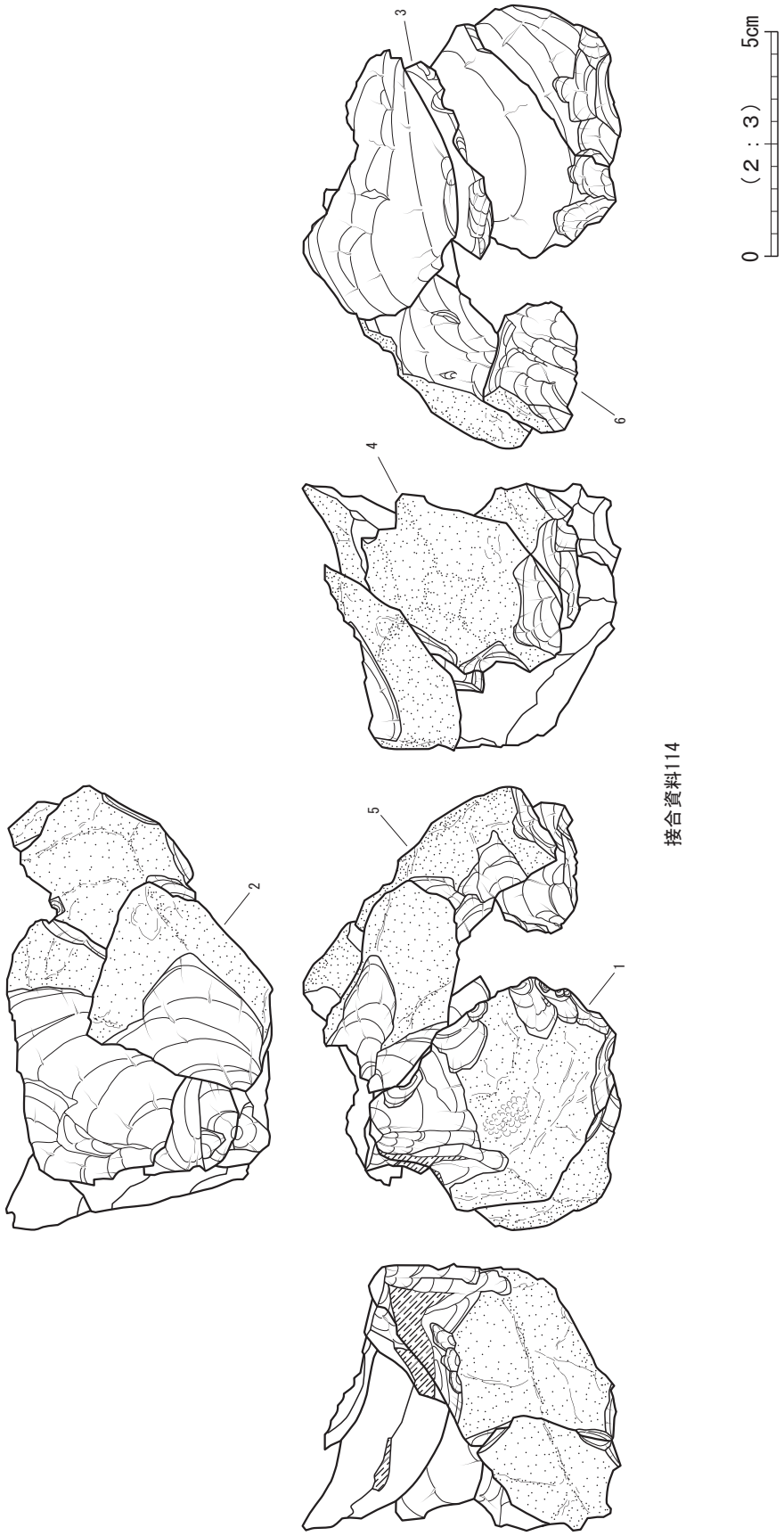




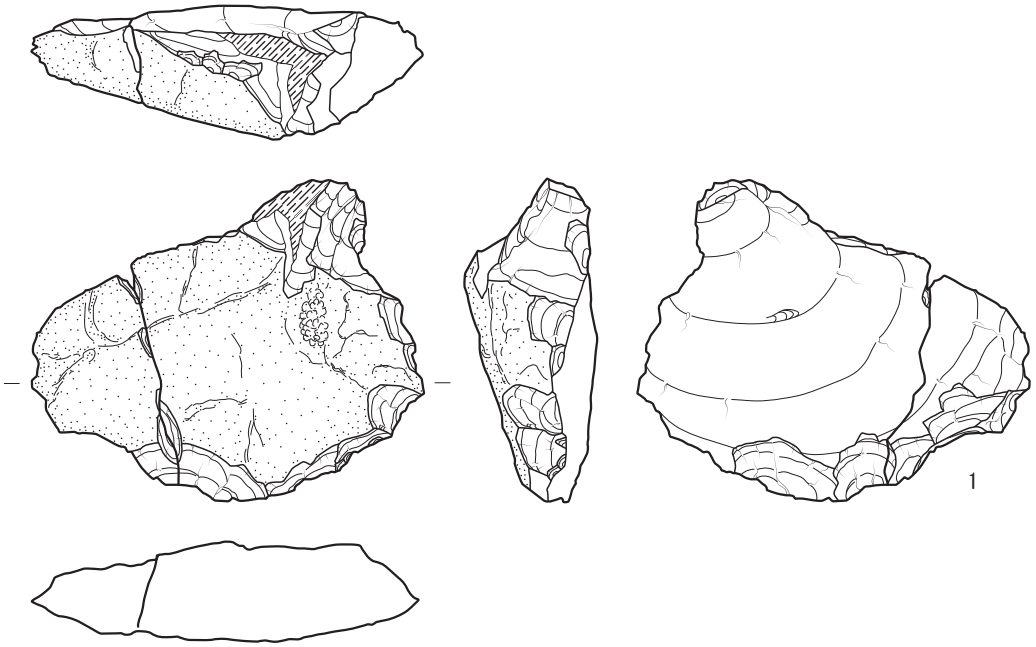
0　（2：3）　5cm

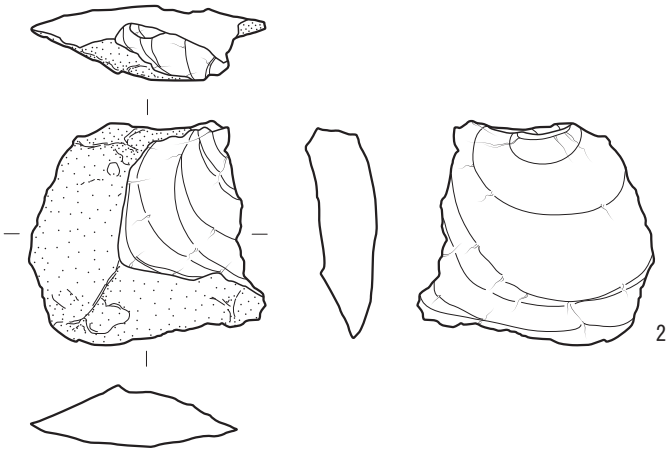
図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
1	Ka-345	B区	Ⅳ層	S50	打製石器	二次加工のある剥片	Ⅲ	5.1×3.7×1.0	7.49	流紋岩	接合資料113、打面部欠損、表面加工＋裏面加工、自然面あり	165
2	Ka-346	-	遺構検出面		打製石器	微細剥離痕のある剥片	Ⅰ	4.1×4.8×1.0	21.35	流紋岩	接合資料113、打面部欠損、1縁辺に微細剥離痕あり	165

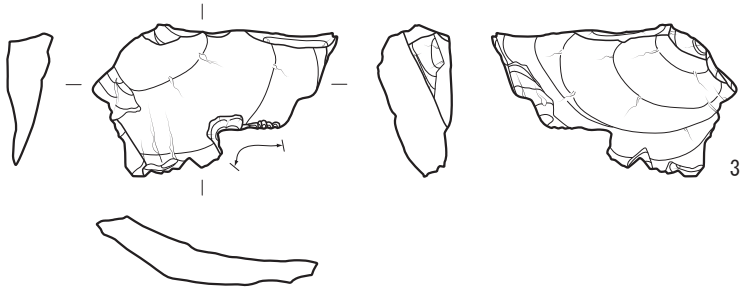
第478図　接合資料(103)



第479図　接合資料(104)



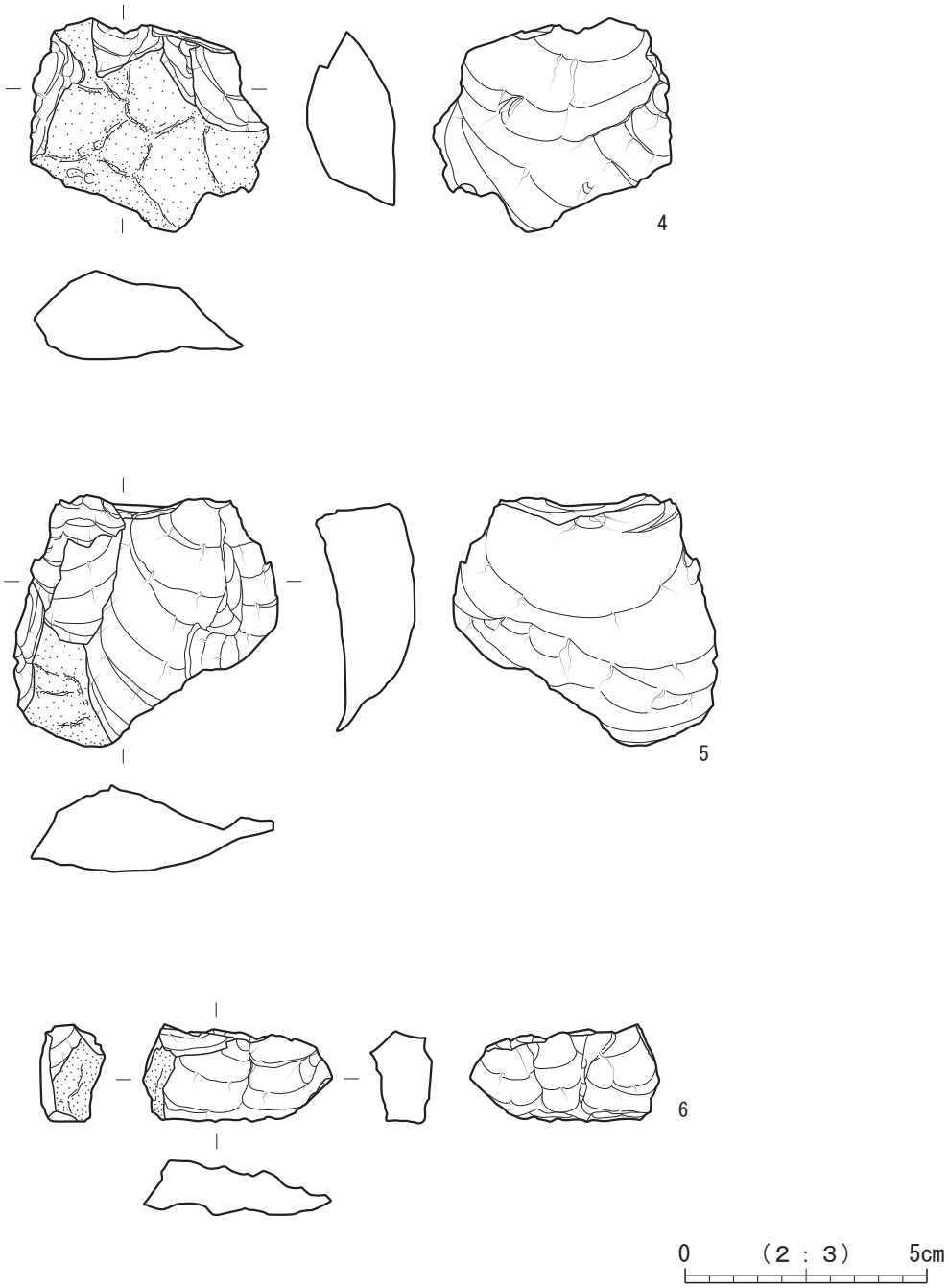




0　（2：3）　5cm

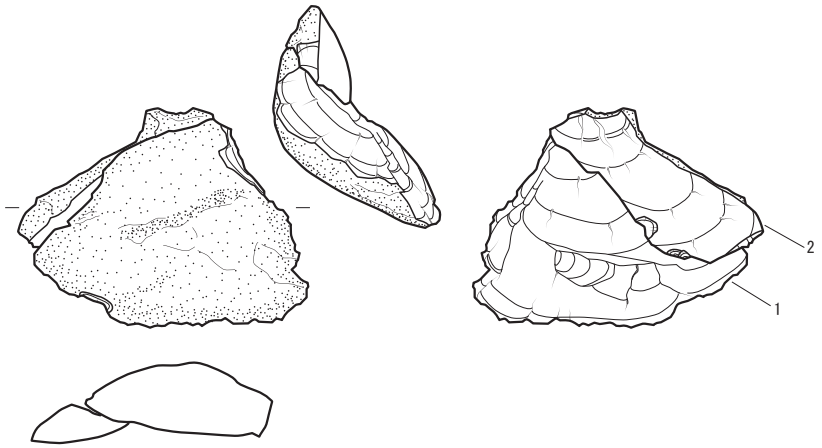
図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
1	Ka-348	-	SI99・堆積土	-	打製石器	二次加工のある剥片	Ⅲ	6.0×7.8×2.5	101.50	流紋岩	接合資料114、平坦打面、剥離角118°、表面＋裏面加工、自然面あり	165
2	Ka-353	E区	Ⅳ層	-	打製石器	剥片	-	4.4×3.4×1.3	24.25	流紋岩	接合資料114、平坦打面、剥離角115°、自然面あり	165
3	Ka-349	-	SI99・堆積土	-	打製石器	微細剥離痕のある剥片	Ⅰ	2.9×4.4×1.4	10.67	流紋岩	接合資料114、平坦打面、剥離角118°、1縁辺に微細剥離痕あり	165

第480図　接合資料(105)

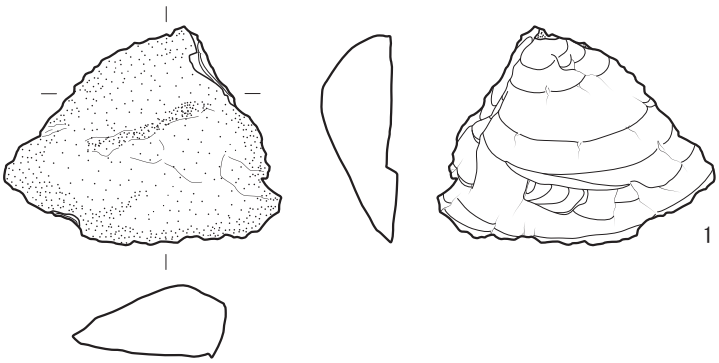


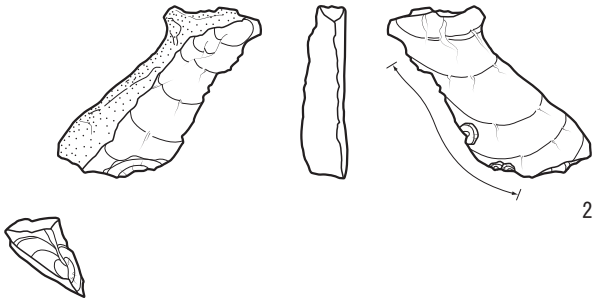
図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
4	Ka-350	B区	Ⅳ層	-	打製石器	剥片	-	4.1×4.8×1.9	45.55	流紋岩	接合資料114、打面部欠損、自然面あり	165
5	Ka-351	B区	Ⅳ層	-	打製石器	剥片	-	5.1×5.3×1.9	33.66	流紋岩	接合資料114、平坦打面、剥離角132°、自然面あり	165
6	Ka-352	-	SI113・堆積土	-	打製石器	剥片	-	1.9×3.9×1.2	9.87	流紋岩	接合資料114、打面部欠損、自然面あり	165

第481図　接合資料(106)



接合資料115

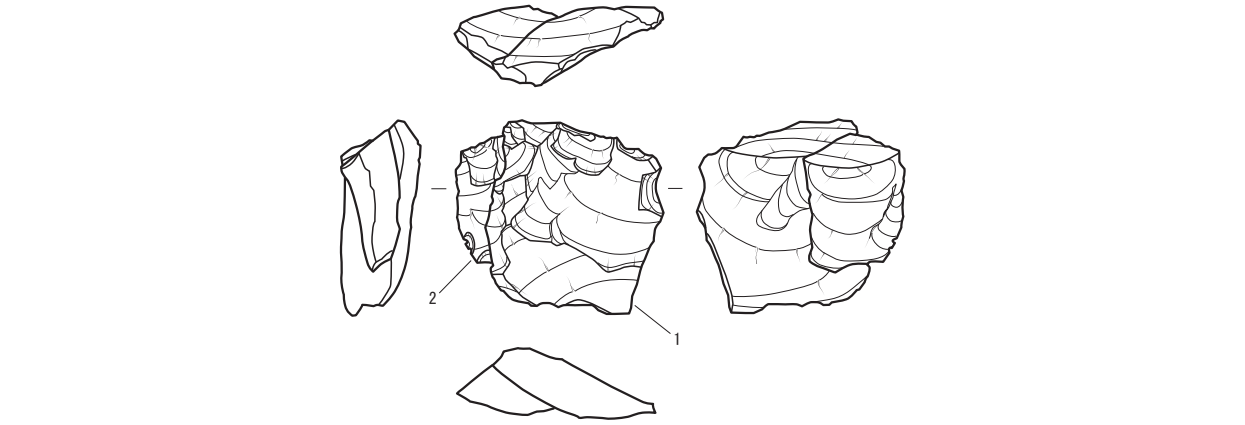




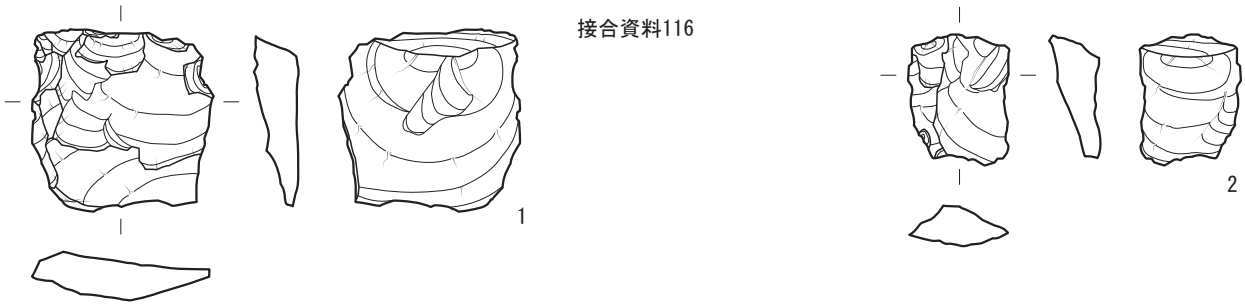
0　（2：3）　5cm

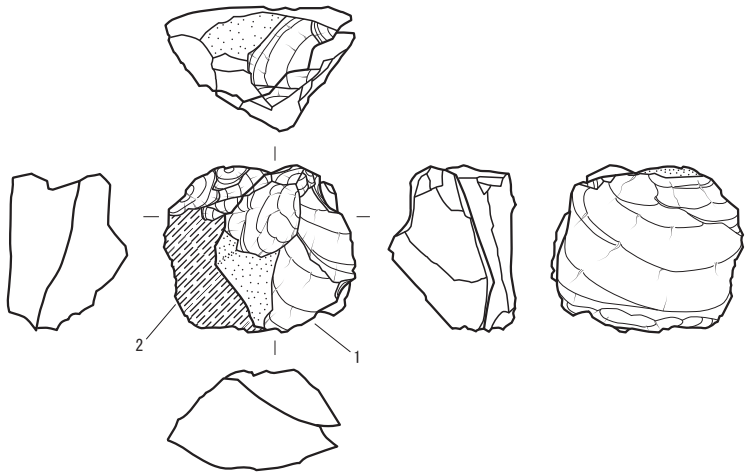
図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
7	Ka-354	-	SK73・堆積土	-	打製石器	剥片	-	4.2×5.2×1.5	28.86	流紋岩	接合資料115、礫打面、剥離角113°、自然面あり	166
8	Ka-355	-	遺構検出面	-	打製石器	微細剥離痕のある剥片	I	3.0×2.4×1.0	6.84	流紋岩	接合資料115、礫打面、剥離角108°、1縁辺に微細剥離痕のあり、自然面あり	166

第482図　接合資料(107)

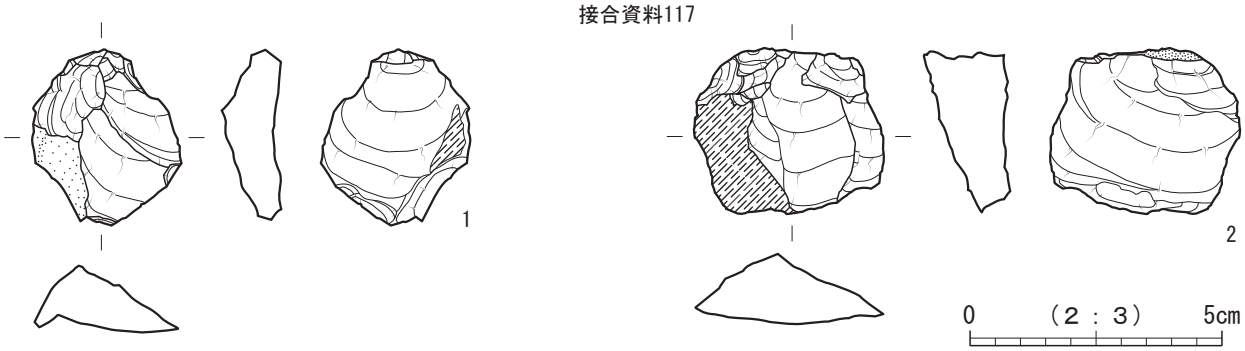


接合資料116





接合資料117



図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
1	Ka-356	-	SI99・堆積土	-	打製石器	剥片	-	3.6×3.6×1.1	12.17	流紋岩	接合資料116、平坦打面、剥離角128°	166
2	Ka-357	-	SI99・堆積土	-	打製石器	剥片	-	2.5×2.0×0.9	4.05	流紋岩	接合資料116、平坦打面、剥離角122°	166
1	Ka-358	-	SI113・堆積土	-	打製石器	剥片	-	3.4×2.9×1.4	9.06	流紋岩	接合資料117、平坦打面、剥離角130°、自然面あり	166
2	Ka-359	C区	Ⅳ層	S72	打製石器	剥片	-	3.2×3.7×1.9	18.93	流紋岩	接合資料117、礫打面、剥離角118°、自然面あり	166

第483図　接合資料(108)

接合資料115（第482図、写真図版166）

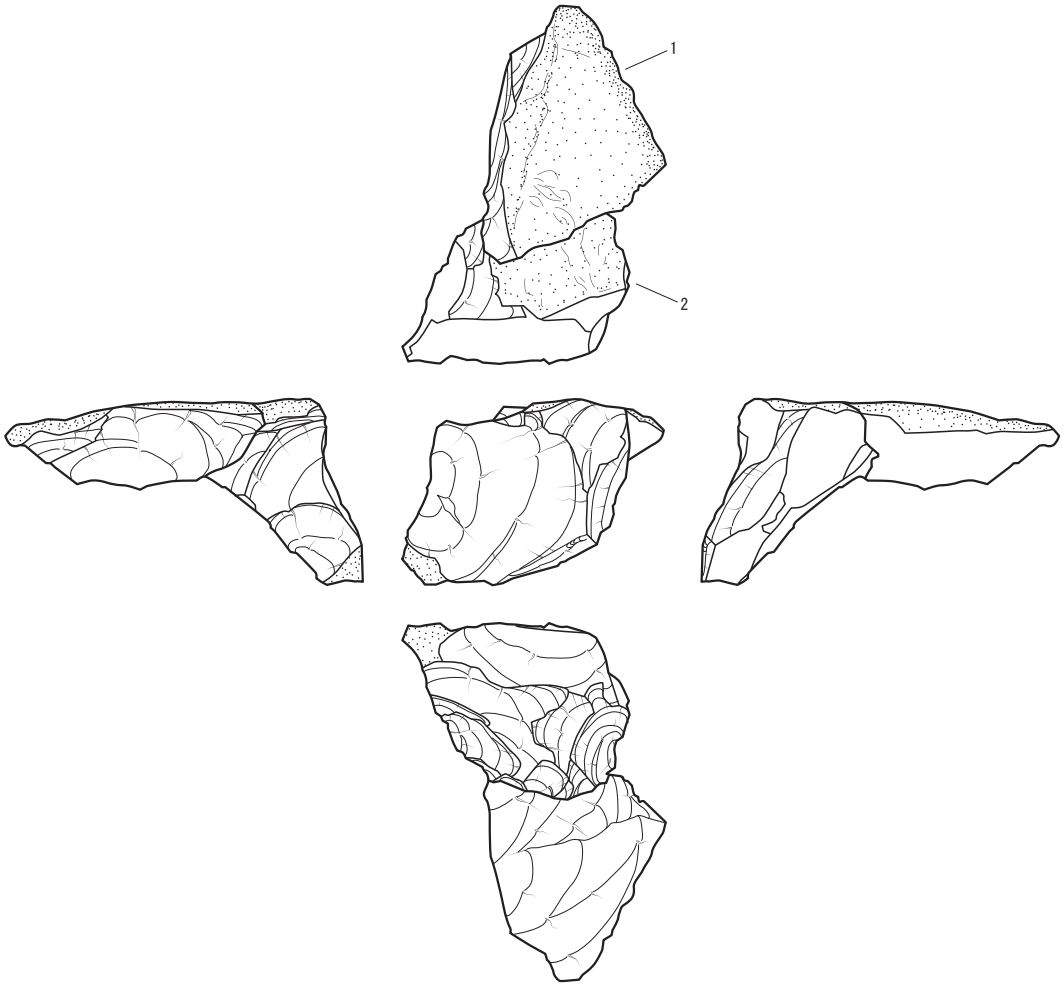
微細剥離痕のある剥片１点と剥片１点の接合資料である。１は表面が自然面であり、２の表面左側縁側にも自然面が認められる。１・２ともに自然面を打面として剥離された剥片である。１・２ともに同一方向からの加撃によって剥離している。２は微細剥離痕のある剥片Ⅰ類である。１は古代の遺構内堆積土、２は古代の遺構検出面からの出土である。石材は流紋岩である。

接合資料116（第483図、写真図版166）

剥片２点の接合資料である。１は剥離面を打面として、剥離された剥片である。２の剥片も同一の剥離面を打面とし同一方向からの加撃によって剥離している。ともに古代の遺構内堆積土からの出土である。石材は流紋岩である。

接合資料117（第483図、写真図版166）

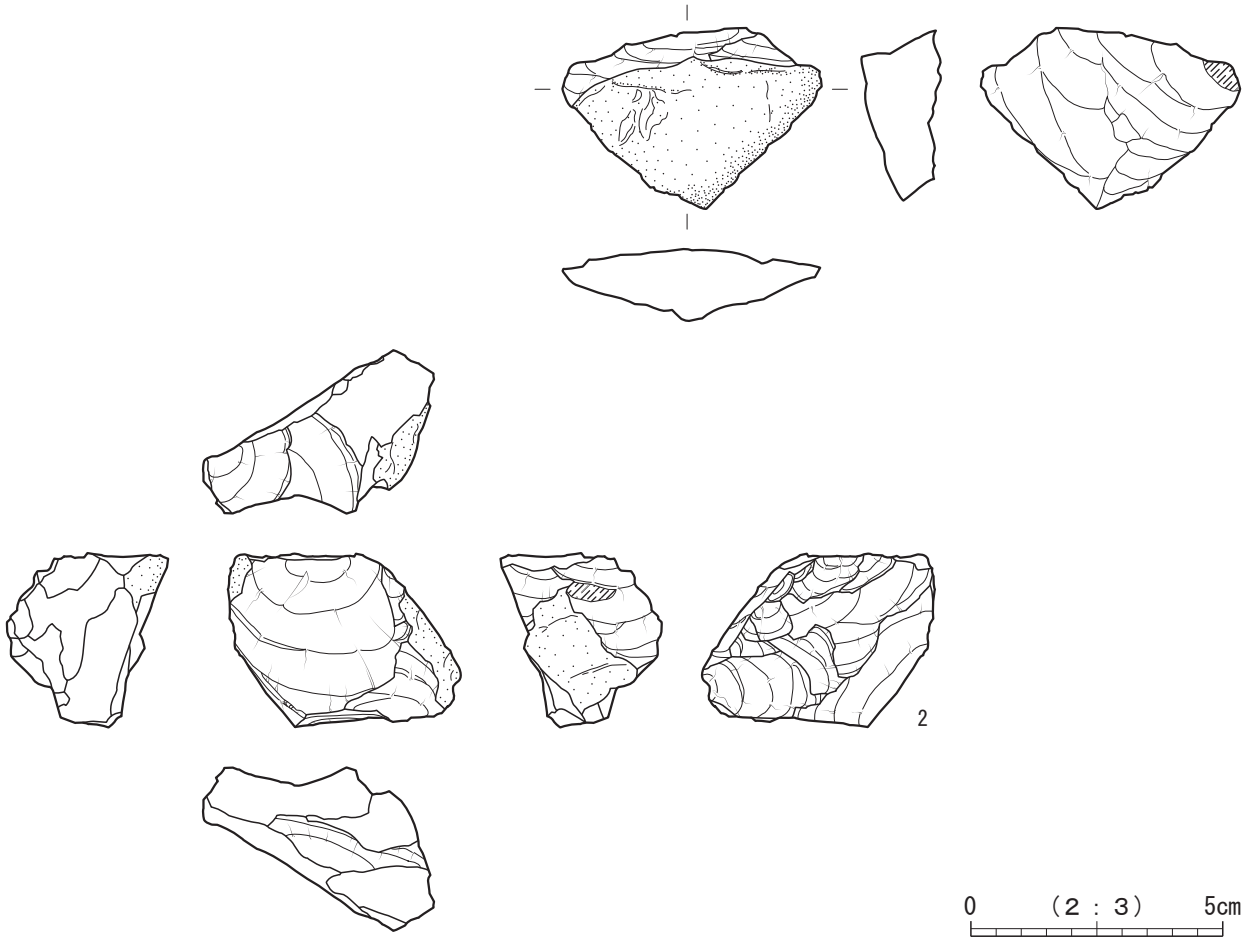
剥片２点の接合資料である。１は表面の左側縁側に自然面を残し、２は節理面を左側縁側に残している。１は剥離面を打面とし、先行する剥離によって形成された稜線が伸びる方向に打撃を加えて剥離された剥片である。２の剥片は剥離面と自然面からなる面を打面とし、１と同一方向からの加撃によって連続的に剥離している。１は古代の遺構内堆積土、２は弥生Ｃ区からの出土である。石材は流紋岩である。



接合資料118

0　（２：３）　5cm

第484図　接合資料（109）



図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
1	Ka-360	-	遺構検出面	-	打製石器	剥片	-	3.5×5.1×1.6	17.88	流紋岩	接合資料118、打面部欠損、自然面あり	166
2	Ka-361	-	SD42・堆積土	-	打製石器	石核	-	3.4×4.2×2.7	32.49	流紋岩	接合資料118、剥片素材、打面転移あり、自然面あり	166

第485図　接合資料(110)

接合資料118（第484・485図、写真図版166）

石核１点と剥片１点の接合資料である。１は表面に広く自然面を残している。２は剥片素材の石核であり、部分的に自然面が残されている。剥片剥離が進行しており、頻繁に打面転移が行われたことが観察される。１は古代の遺構検出面、２は古代の遺構内堆積土からの出土である。石材は流紋岩である。

接合資料119（第486図、写真図版166）

石核１点と剥片１点の接合資料である。１の剥片は表面の左側縁に自然面を残している。自然面打面である。２は作業面以外はすべて自然面であり、原礫の一端がわずかに残る石核である。１は古代の遺構内堆積土、２は弥生Ａ区からの出土である。石材は流紋岩である。

接合資料120（第486図、写真図版166）

同時割れを起こしている剥片の接合資料である。剥離面を打面とし表面に自然面を大きく残している。Ka-364は古代の遺構検出面、Ka-365は弥生Ｂ区からの出土である。石材は流紋岩である。

接合資料121（第487図、写真図版166）

石核１点と剥片２点の接合資料である。１の表面の大半は自然面であり、裏面の右側縁側に節理面が認められる。剥離面を打面とし、剥離された剥片である。２の剥片は90°の打面転移が行われ、剥離面を打面とし、剥離している。３は節理面の介在によって剥離している剥片を素材とした石核である。１・３は弥生Ｃ区、２は弥生Ｃ区ＳＸ２性格不明遺構堆積土からの出土である。石材は珪質頁岩である。

接合資料122（第488図、写真図版166）

節理面の影響により、同時割れを起こしている剥片の接合資料である。表面に自然面を広く残している。Ka-369･370はともに弥生Ｃ区からの出土である。石材は流紋岩である。

接合資料123（第488図、写真図版166）

不定形石器１点と剥片１点の接合資料である。１は表面左側縁側に自然面をわずかに残し、２の表面の末端側には自然面が大きく残されている。２の末端には連続する二次加工が施されている。１は弥生Ｂ区、２は古代の遺構内堆積土からの出土である。石材は流紋岩である。

接合資料124（第489図、写真図版166）

節理面に影響され、同時割れを起こしている剥片の接合資料である。２面の剥離面から成る打面に打撃を加えて剥離されている。Ka-373は弥生Ｂ区、Ka-374は古代の遺構検出面からの出土である。石材は流紋岩である。

接合資料125（第489図、写真図版167）

微細剥離痕のある剥片１点と剥片１点の接合資料である。２の表面には自然面が広く残されている。１は剥離面と自然面から成る面を打面とし、剥離された剥片である。２の剥片は点状打面であり、１と同一方向からの加撃によって剥離している。１は微細剥離痕のある剥片Ⅰ類である。１は弥生Ｃ区、２は古代の遺構内堆積土からの出土である。石材は珪質頁岩である。

接合資料126（第490図、写真図版167）

石核と石核の接合資料である。本来、同一の石核であり、剥片剥離作業の最終段階の加撃によって２分されたものと考えられ、その後それぞれで剥片剥離作業が行われている。ともに古代の遺構検出面からの出土である。石材は珪質頁岩である。

接合資料127（第491図、写真図版167）

潜在割れの影響により、同時割れを起こしている剥片の接合資料である。表面に自然面を残している。ともに弥生Ｃ区からの出土である。石材は流紋岩である。

接合資料128（第491図、写真図版167）

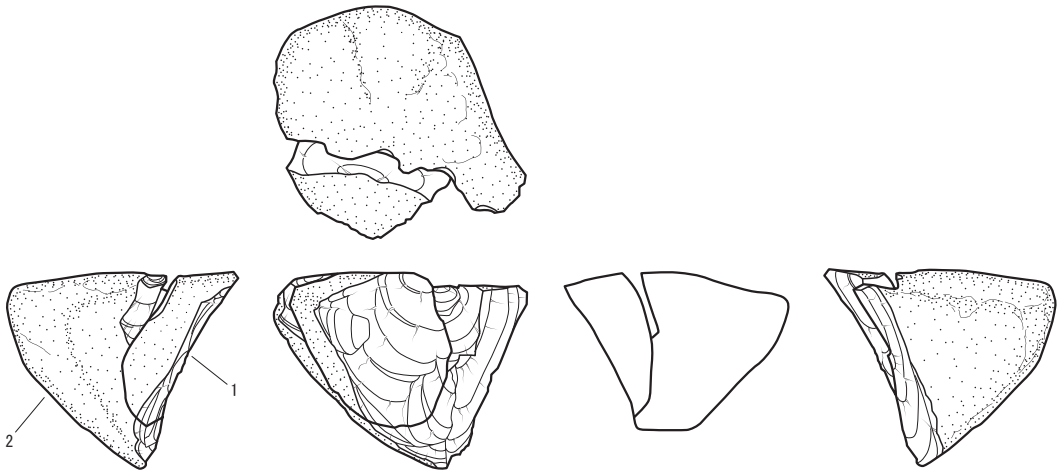
表面右側縁側からの二次加工と節理面の影響により折れている剥片の接合資料である。表面に自然面を残している。二次加工のある剥片Ⅱ類である。古代の遺構検出面からの出土である。石材は流紋岩である。

接合資料129（第491図、写真図版167）

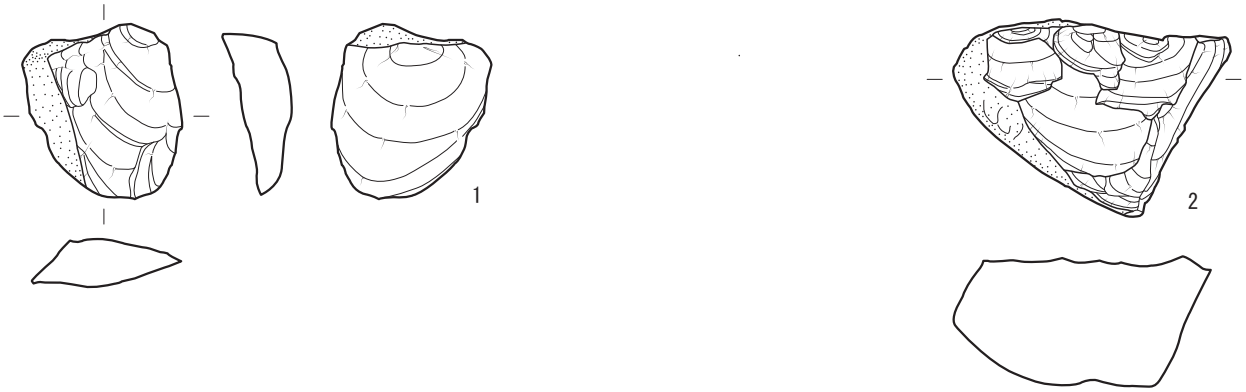
連続して剥離された剥片２点の接合資料である。１は表面の大部分に自然面を残し、２は表面の左側縁側に自然面を残している。１・２とも剥離面を打面とし、剥離された剥片である。１は弥生Ｅ区、２は古代の遺構検出面からの出土である。石材は流紋岩である。

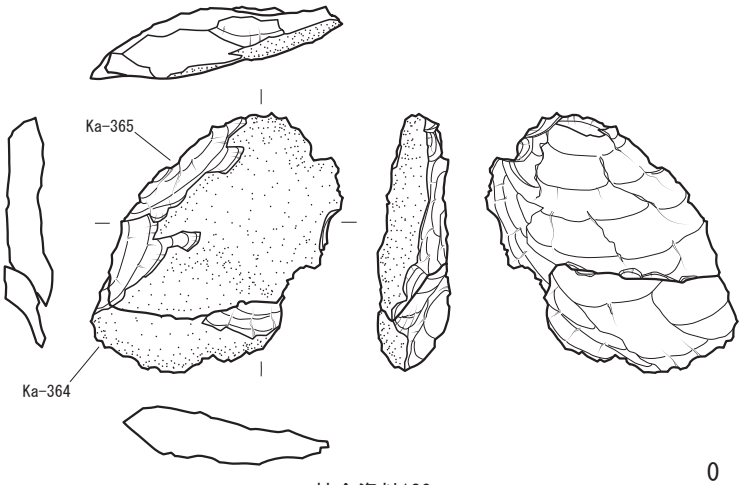
接合資料130（第492図、写真図版167）

二次加工のある剥片２点の接合資料である。１の表面の右側縁側には自然面が残されている。１は二次加工のある剥片であり、複数の縁辺に二次加工が施され、裏面の左側縁側に微細剥離痕が認められる。２は90°の打面転移が行われ、自然面を打面として剥離された剥片である。１・２ともに二次加工のある剥片Ⅲ類である。１は古代の遺構検出面、２は弥生Ｂ区からの出土である。石材は瑪瑙である。



接合資料119



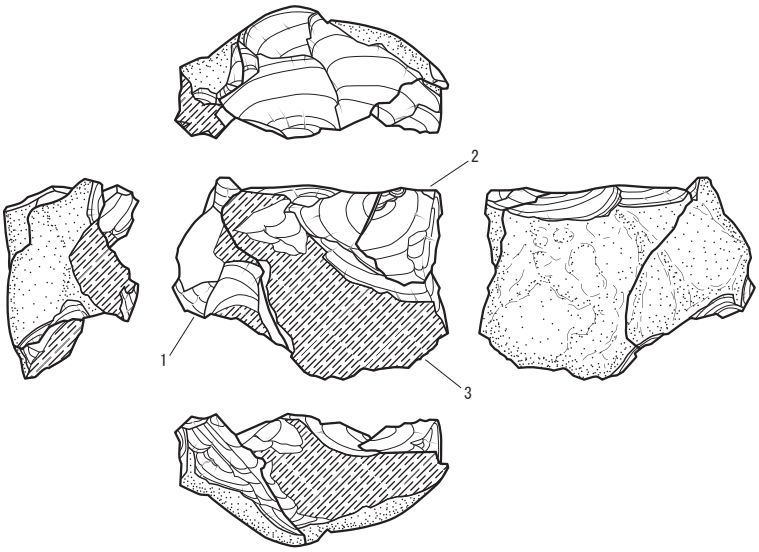


接合資料120

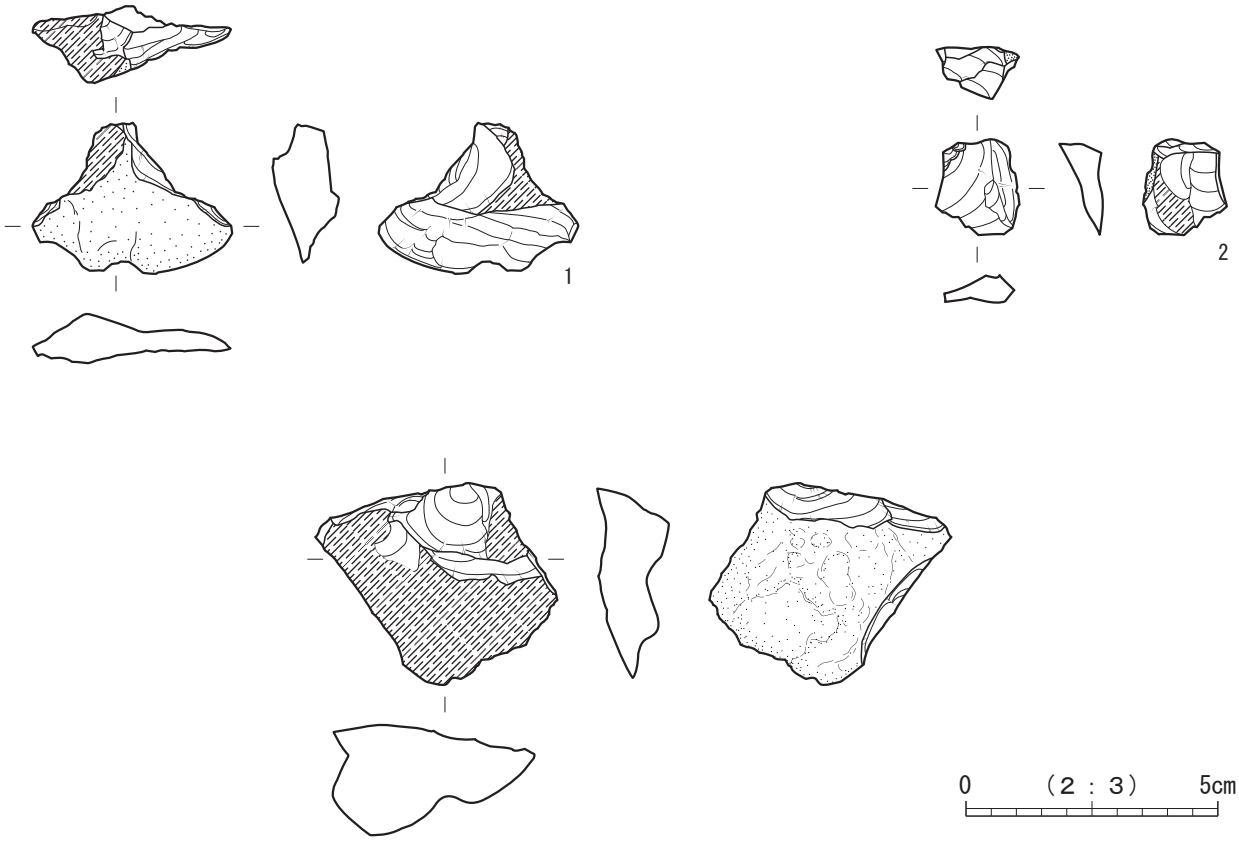
0　（2：3）　5cm

図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
1	Ka-362	-	SI98・堆積土	-	打製石器	剥片	-	3.5×3.0×1.1	10.26	流紋岩	接合資料119、自然面打面、剥離角125°、自然面あり	166
2	Ka-363	A区	Ⅳ層	-	打製石器	石核	-	3.6×5.3×3.0	49.18	流紋岩	接合資料119、礫素材、打面転移なし、自然面あり	166
	Ka-364	-	遺構検出面	-	打製石器	剥片	-	1.9×4.0×1.0	5.40	流紋岩	接合資料120、打面部欠損、自然面あり	166
	Ka-365	B区	Ⅳ層	S12	打製石器	剥片	-	3.7×4.9×1.1	16.93	流紋岩	接合資料120、平坦打面、自然面あり	166

第486図　接合資料(111)

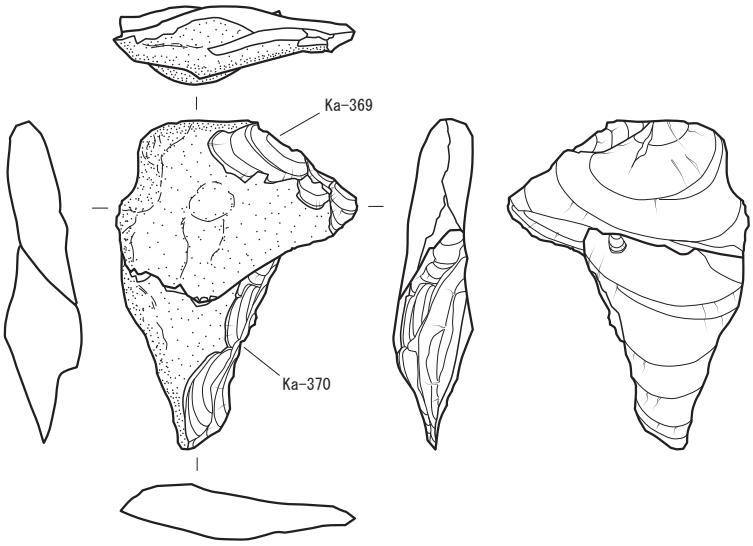


接合資料121

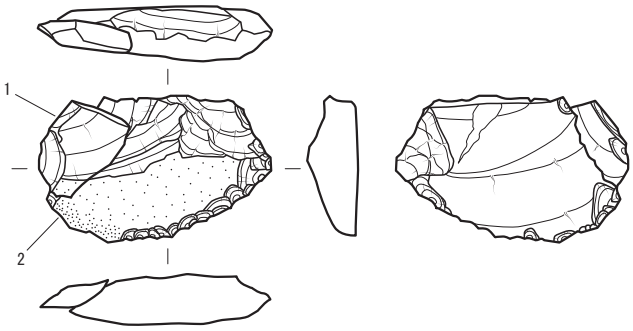


図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
1	Ka-367	C区	Ⅳ層	S138	打製石器	剥片	-	2.8×3.9×1.4	8.76	珪質頁岩	接合資料121、打面部欠損、自然面あり	166
2	Ka-368	C区	SX2・堆積土	S9	打製石器	剥片	-	1.9×1.6×0.9	2.06	珪質頁岩	接合資料121、平坦打面、剥離角113°、自然面あり	166
3	Ka-366	C区	Ⅳ層	-	打製石器	石核	-	4.2×3.5×2.6	30.59	珪質頁岩	接合資料121、剥片素材、打面転移あり、自然面あり	166

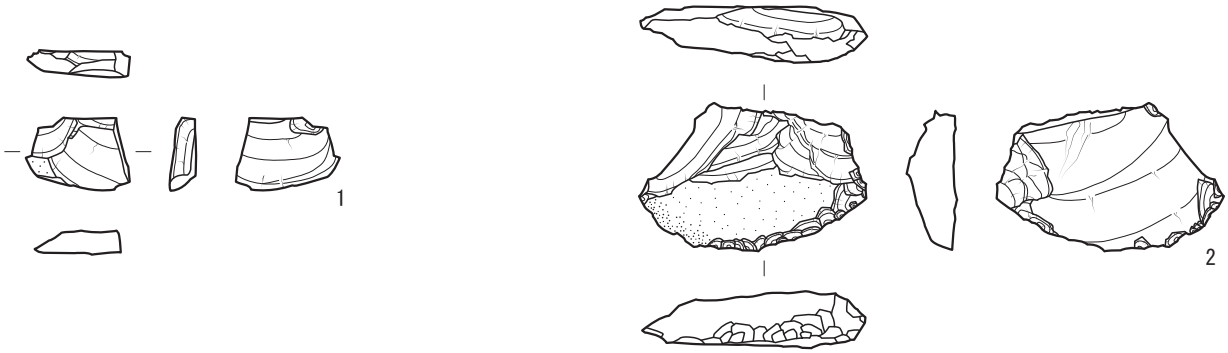
第487図　接合資料(112)



接合資料122

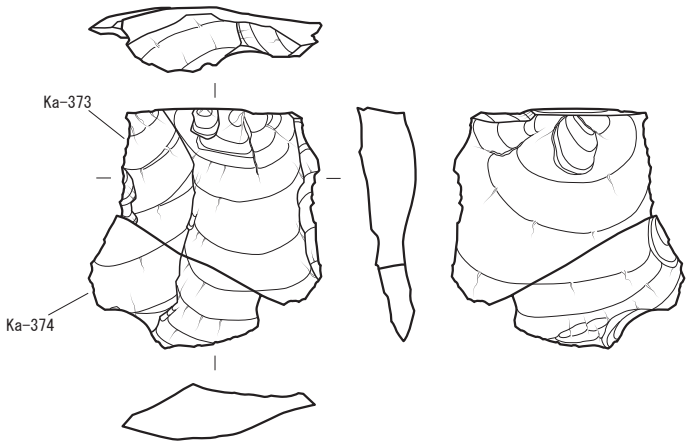


接合資料123

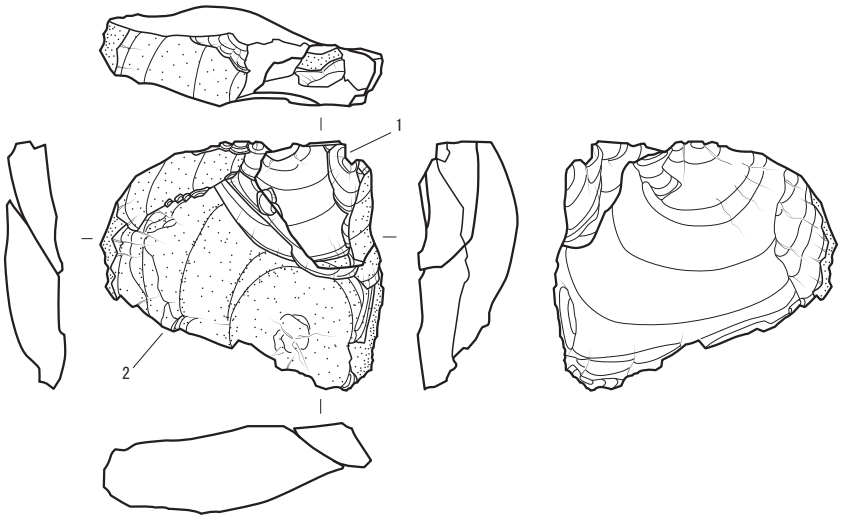


図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
	Ka-369	C区	Ⅳ層	S14	打製石器	剥片	-	3.7×4.8×1.1	16.23	珪質頁岩	接合資料122、自然面打面、剥離角116°、自然面あり	166
	Ka-370	C区	Ⅳ層	S177	打製石器	剥片	-	4.0×3.2×1.6	14.57	珪質頁岩	接合資料122、打面部欠損、自然面あり	166
1	Ka-372	B区	Ⅳ層	-	打製石器	剥片	-	1.4×1.9×0.5	1.59	流紋岩	接合資料123、打面部欠損、自然面あり	166
2	Ka-371	-	SI127・堆積土	-	打製石器	不定形石器	-	2.9×4.5×1.1	12.03	流紋岩	接合資料123、打面部欠損、表面＋裏面加工、自然面あり	166

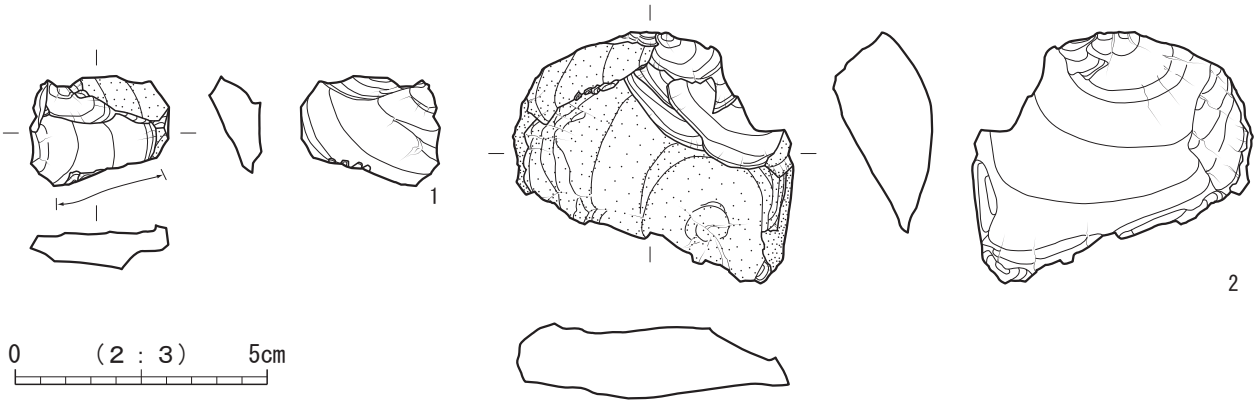
第488図　接合資料(113)



接合資料124

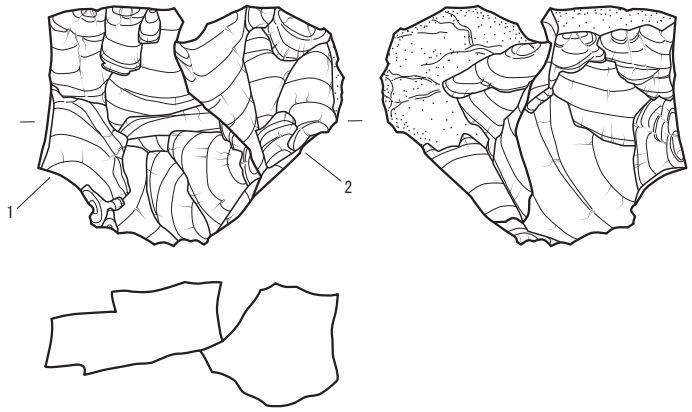


接合資料125

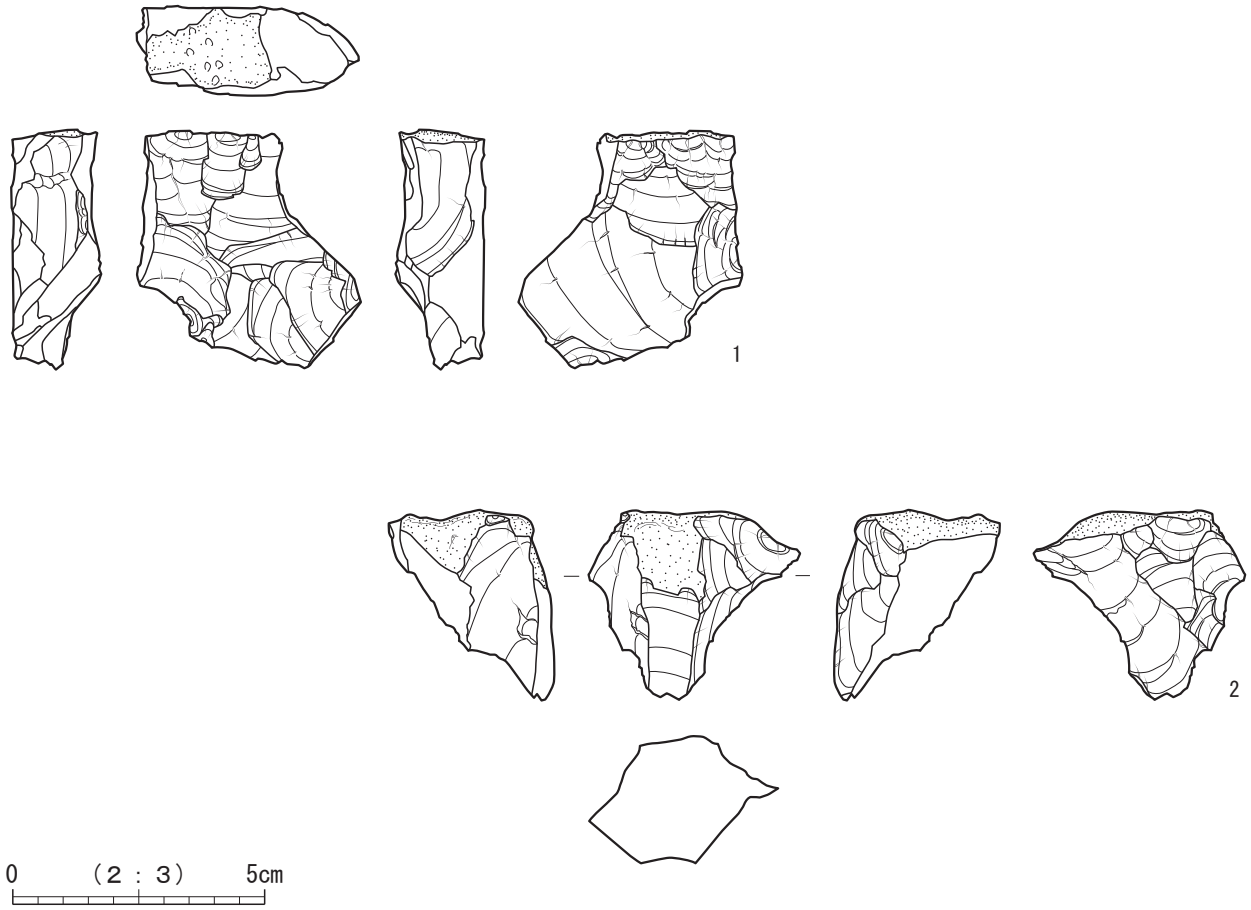


図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
	Ka-373	B区	Ⅳ層	-	打製石器	剥片	-	3.8×3.8×1.2	14.31	流紋岩	接合資料124、平坦打面、剥離角103°	166
	Ka-374	-	遺構検出面	-	打製石器	剥片	-	1.9×3.4×0.9	5.05	流紋岩	接合資料124、打面部欠損	166
1	Ka-376	C区	Ⅳ層	-	打製石器	微細剥離痕のある剥片	Ⅰ	2.0×2.7×1.1	3.95	珪質頁岩	接合資料125、打面部欠損、1縁辺に微細剥離痕あり、自然面あり	167
2	Ka-375	-	SI113・堆積土	-	打製石器	剥片	-	4.3×5.5×2.0	32.17	珪質頁岩	接合資料125、点状打面、剥離角124°、自然面あり	167

第489図　接合資料(114)

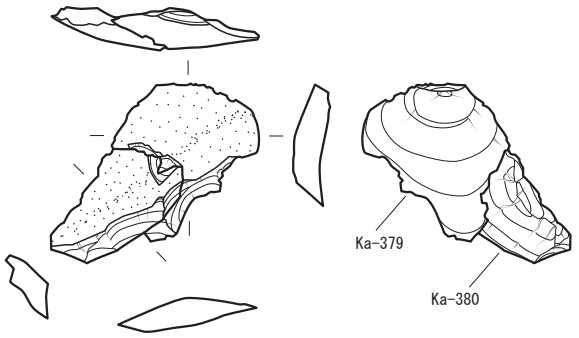


接合資料126

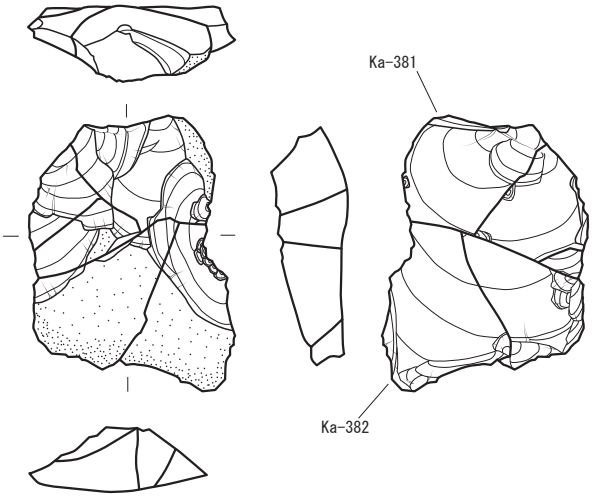


図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
1	Ka-377	-	遺構検出面		打製石器	石核	-	4.5×4.3×1.7	34.25	珪質頁岩	接合資料126、剥片素材、打面転移あり、自然面あり	167
2	Ka-378	-	遺構検出面		打製石器	石核	-	3.7×4.0×2.8	30.77	珪質頁岩	接合資料126、剥片素材、打面転移あり、自然面あり	167

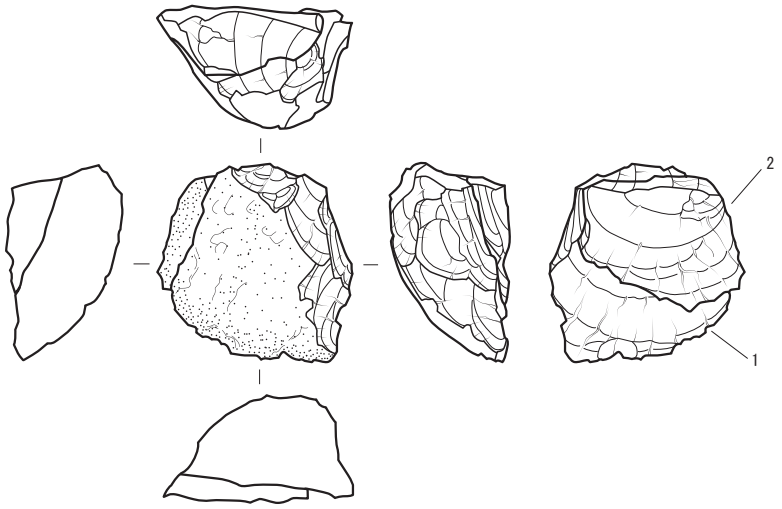
第490図　接合資料(115)



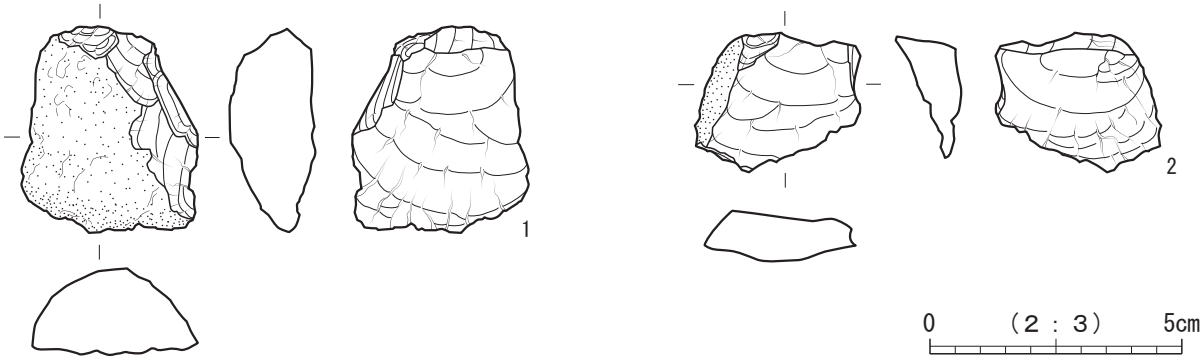
接合資料127



接合資料128

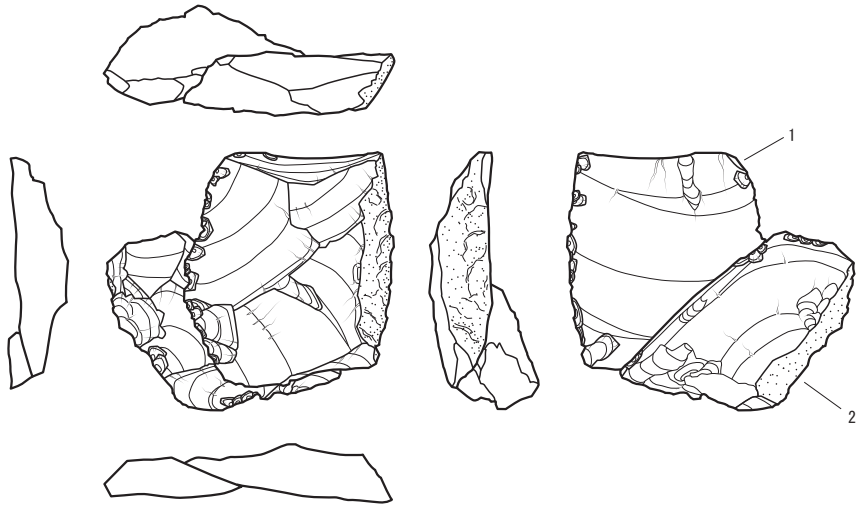


接合資料129

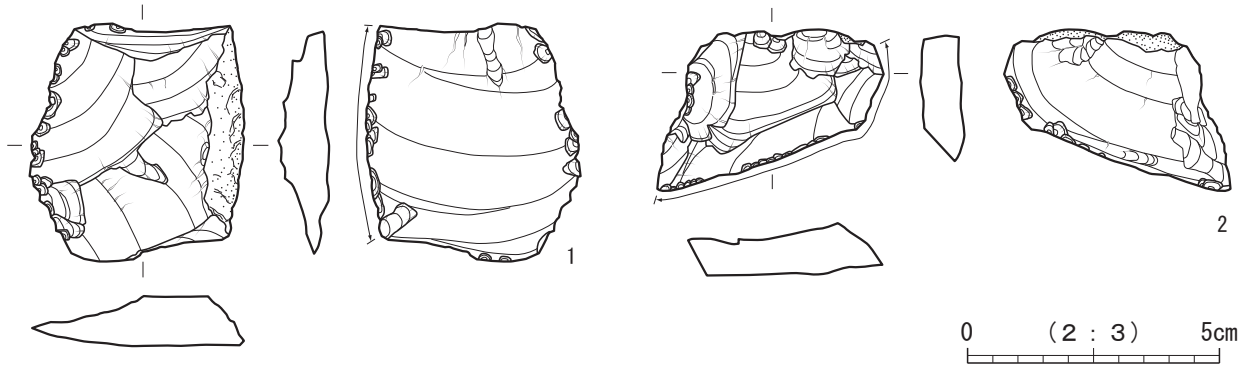


図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
	Ka-379	C区	Ⅳ層	S58	打製石器	剥片	-	3.1×2.9×0.7	3.68	流紋岩	接合資料127、平坦打面、剥離角116°、自然面あり	167
	Ka-380	C区	Ⅳ層	S62	打製石器	剥片	-	1.7×3.1×0.5	2.27	流紋岩	接合資料127、打面部欠損、自然面あり	167
	Ka-381	-	遺構検出面	-	打製石器	二次加工のある剥片	Ⅰ	2.8×3.9×1.4	12.65	流紋岩	接合資料128、平坦打面、剥離角120°、表面加工、自然面あり	167
	Ka-382	-	遺構検出面	-	打製石器	二次加工のある剥片	Ⅰ	3.3×3.9×1.3	12.17	流紋岩	接合資料128、打面部欠損、表面加工、自然面あり	167
1	Ka-383	E区	Ⅳ層	-	打製石器	剥片	-	4.1×3.4×1.8	25.42	流紋岩	接合資料129、平坦打面、剥離角131°、自然面あり	167
2	Ka-384	-	遺構検出面	-	打製石器	剥片	-	2.7×3.2×1.2	7.99	流紋岩	接合資料129、平坦打面、剥離角114°、自然面あり	167

第491図　接合資料(116)



接合資料130



図版番号	登録番号	弥生調査区	出土遺構・層位	取上番号	種別	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考	写真図版
1	Ka-385	-	遺構検出面	-	打製石器	二次加工のある剥片	Ⅲ	4.7×4.2×1.1	22.42	瑪瑙	接合資料130、打面部欠損、表面＋裏面加工、同側縁に微細剥離痕あり、自然面あり	167
2	Ka-386	B区	Ⅳ層	S10	打製石器	二次加工のある剥片	Ⅲ	2.8×3.4×1.3	15.00	瑪瑙	接合資料130、自然面打面、剥離角110°表面＋裏面加工、同側縁に微細剥離痕あり、自然面あり	167

第492図　接合資料(117)

接合資料からみた剥片剥離作業と使用石材

３Ｂ区の接合資料の特徴としては、石核の素材に分割礫と厚手の剥片が用いられていること、打面形態は自然面打面と平坦打面（単剥離面打面）が主体となっていること、打面調整、頭部調整はみられないこと、頻繁な打面転移が行われていることなどが上げられる。これらのことから、剥片剥離作業の進行による石核の形状変化に応じて打面と作業面に適する面を決定し、剥片剥離を行っていることが読みとれる。その結果として、規格性のある剥片は剥離されないが、それでも充分に目的は達せられていたものと推定され、剥離された剥片の形状等にそれほどこだわらない剥片剥離作業が行われていたものと考えられる。

接合資料に用いられている石材は、掲載した124点中、108点が流紋岩である。接合資料全体の84％を占め、３Ｂ区での主要石材ということができる。本遺跡から約2.5Km南方の名取川沿いでは現在でも流紋岩を採取でき、３Ｂ区から出土した石器の石材についても、遺跡周辺から搬入されたものと推定される。また、自然面が残る資料が多いことと、接合資料８･10･11･22･43･74･112･114･119のように原礫の大きさを推定できる接合資料から、搬入された石材はそれほど大きなものではなかったことが考えられる。

４．３Ａ区下層調査（第493～499図）

第１章に記載したように、平成15年度には３Ｂ区の南側に隣接する３Ａ区の縄文時代遺物包含層を対象とした調査を実施した。３Ａ区の北側と中央部に21～25×15ｍ程の調査区を設定し、それぞれ北区、南区とした（第493・494図）。

（1）　基本層序（第495～498図）

下層調査区の層序は、大別16層、細別43層に分層した。概ね水平堆積の様相を呈していることから、自然堆積と思われる。なお、２Ｂ区において実施された下層調査についても同様の堆積状況が確認されている（第324集）。なお、南壁面土層に存在しない土層は、北壁面土層にＡ・Ｂ層、①～⑧層と個別に土層名を付した。以下、各層の概要を記載する。

Ⅶ層：14層に細分される。Ⅶａ層は層厚80cmを測るオリーブ褐色砂層で、層中に含まれる酸化鉄・マンガンの量により、Ⅶａ’層とに細々分される。Ⅶｂ層は下面に酸化鉄が集積する暗オリーブ褐色砂層で、地点により層厚に二倍程の差が認められる。Ⅶｃ層は黄褐色シルト主体で酸化鉄集積土を互層状に含む。暗黄褐色粗砂と粘土が互層状となるⅦｃ’層とに細々分される。Ⅶｄ層は酸化鉄と炭化物を帯状に含む灰黄色粘土質シルトである。また、北区ではⅦｂ層とⅦｃ層の間から、どちらにも含まれない土層が確認された。この層についてはⅦ層に包括されるものと考えられるが、便宜的に①～⑧層とした。

Ⅷ層：3層に細分される。Ⅷａ層およびⅧｃ層は同質層で、鉄分と炭化物を少量含む層厚10cm程の明オリーブ灰色粘土質シルト。Ⅷｂ層は鉄分と炭化物を微量に含む青灰色砂質シルトである。

Ⅸ層：3層に細分される。Ⅸａ層は鉄分・炭化物・植物繊維を僅かに含む黒色粘土質シルト、Ⅸｂ層は暗褐色粘土質シルト、Ⅸｃ層は緑黒色粘土質シルトである。２Ｂ区の下層調査においては大洞Ａ’式に比定される土器が出土している。

Ⅹ層：多量の鉄分と炭化物を含む粘土質シルト層で、色調により暗褐色のⅩａ層、灰色のⅩｂ層、Ⅹｂ層に比べて僅かに暗い灰色のⅩｃ層に細分される。

Ⅺ層：青灰色粘土質シルトで、鉄分と炭化物の量によりⅪａ～Ⅺｄに細分される。

Ⅻ層：鉄分・炭化物・繊維質の量により、黒褐色粘土質シルトのⅫａ層、オリーブ黒色粘土質シルトのⅫｂ・Ⅻｃ層に細分される。

XIII～XVI層：南区のみで確認された。青灰色・緑灰色粘土ないし青灰色粘土質シルトで、グライ化が認められる。

XVII・XVIII層：暗青灰色粘土質シルトで、鉄分・炭化物・植物繊維の量により細分される。

XIX～XXI層：南区ではXIX層が2層に細分される。このほか、北区ではXX層とXXI層の間からどちらにも含まれない層を確認しており、便宜的にＡ層・Ｂ層とした。

XXII層：暗オリーブ砂である。グライ化が著しく、湧水が認められるようになる。

（2）　３Ａ区下層調査出土遺物（第499図）

両下層調査区内からは、少量ではあるが、縄文時代に帰属する遺物が出土している。以下、下層調査区内から出土した遺物について、層位別に記述する。

ａ．Ⅻ層出土遺物（第499図）

壺1点、深鉢4点、台付鉢1点、注口土器1点を掲載した（第499図1～7）。いずれも縄文時代後期後半の所産と思われる。1は精製の壺で、口縁部上端および口唇部にＬＲ縄文が横位回転施文された後、地文直下に横位の沈線

が施文される。2～5は深鉢の破片資料で、2は壺の可能性もある。3は層状的に施文された刺突列の上下が沈線により区画される。4はＲＬ縄文が縦位回転施文される。5は弧状の沈線内にＬ縄文が充填される。6は台付鉢で、体部上半には文様内にＬＲ縄文が充填され、下半および内面はミガキ調整される。7は注口土器の体部下端から底部にかけての破片資料で、外面底部が窪む器形を呈する。内面は剥離が著しい。

ｂ．Ⅻ層出土遺物（第499図）

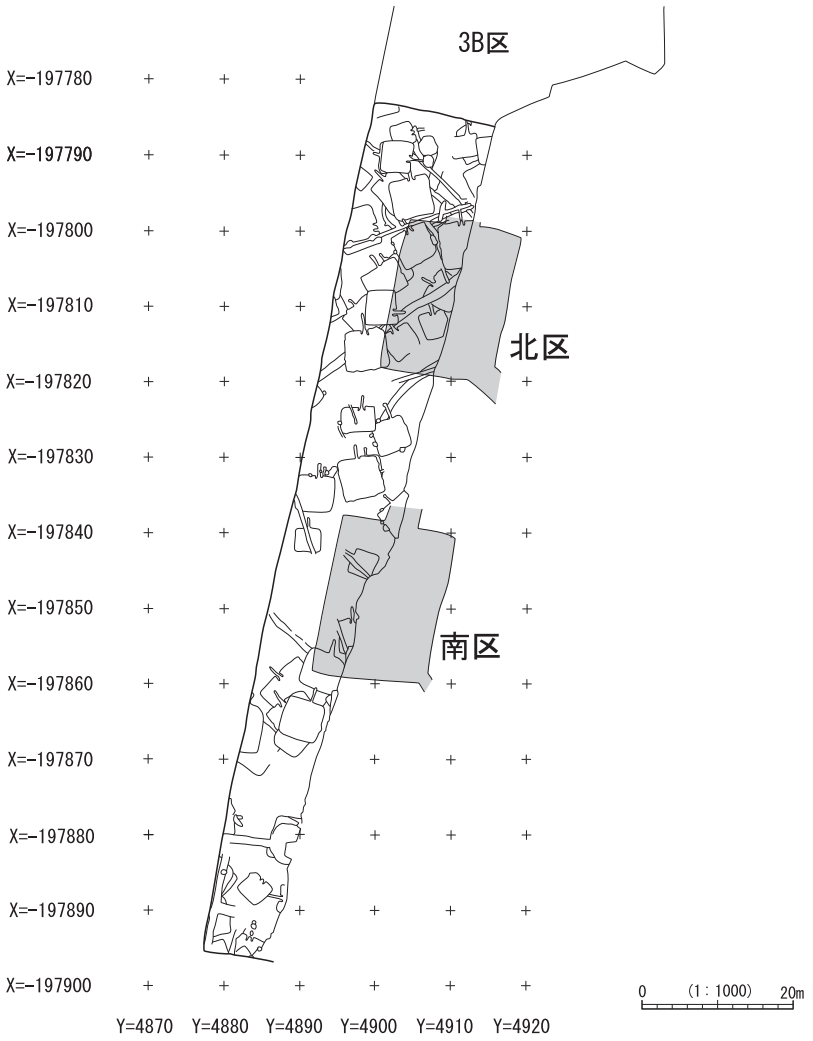
深鉢の口縁部破片1点を掲載した（第499図-8）。口唇部が先細る器形を呈し、外面には無節Ｌ縄文が縦位回転施文される。時期は判然としないが、２Ｂ区の下層調査ⅩⅡ層同一層位から縄文時代後期後葉の所産と考えられる遺物が出土している（第324集）。

ｃ．ⅩⅦ層出土遺物（第499図）

第499図-9は、南区で出土した磨石である。Ⅰ類Ｂ種であり、楕円礫を素材とし、片面中央の平坦面に磨痕が広く認められる。石材は安山岩である。

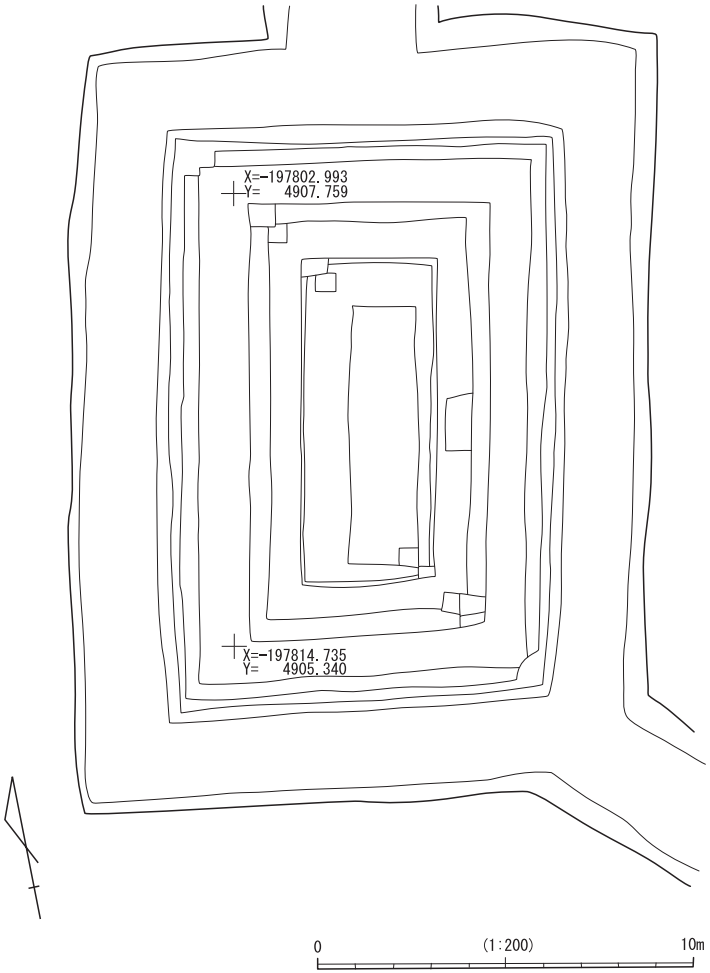
ｄ．出土層位不明遺物（第499図）

第499図-10は、北区で出土した磨石である。Ⅰ類Ａ種であり、円礫を素材とし、片面中央の平坦面に磨痕が認められる。石材は安山岩である。

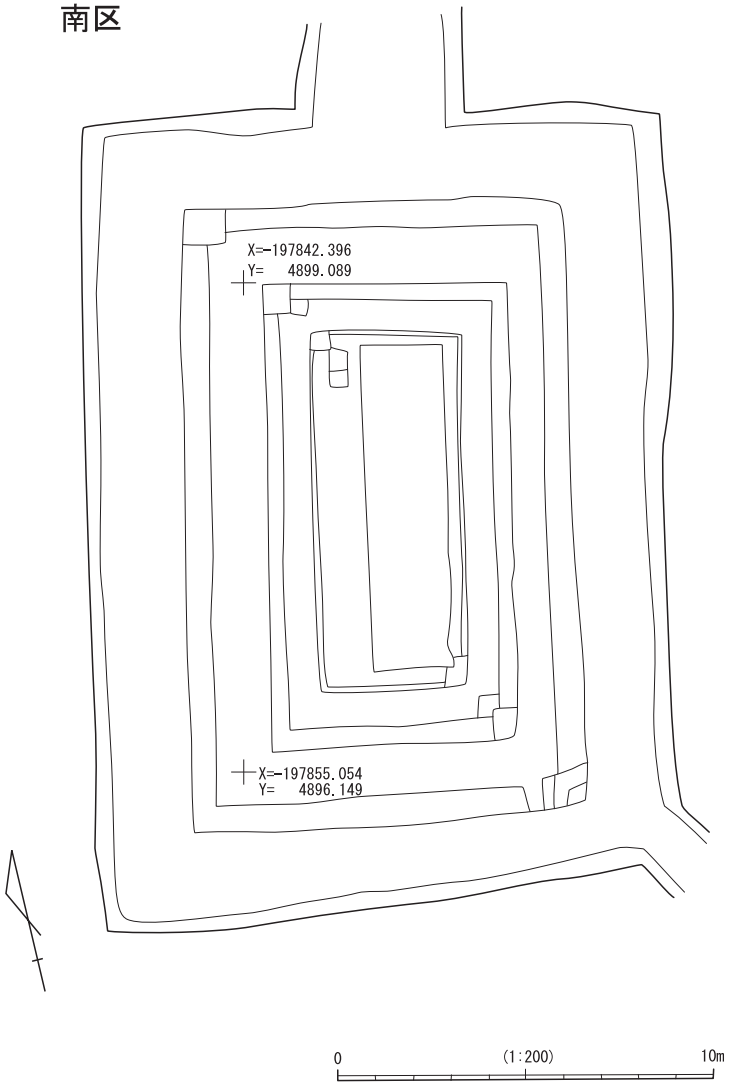


第493図　３Ａ区下層調査区位置図

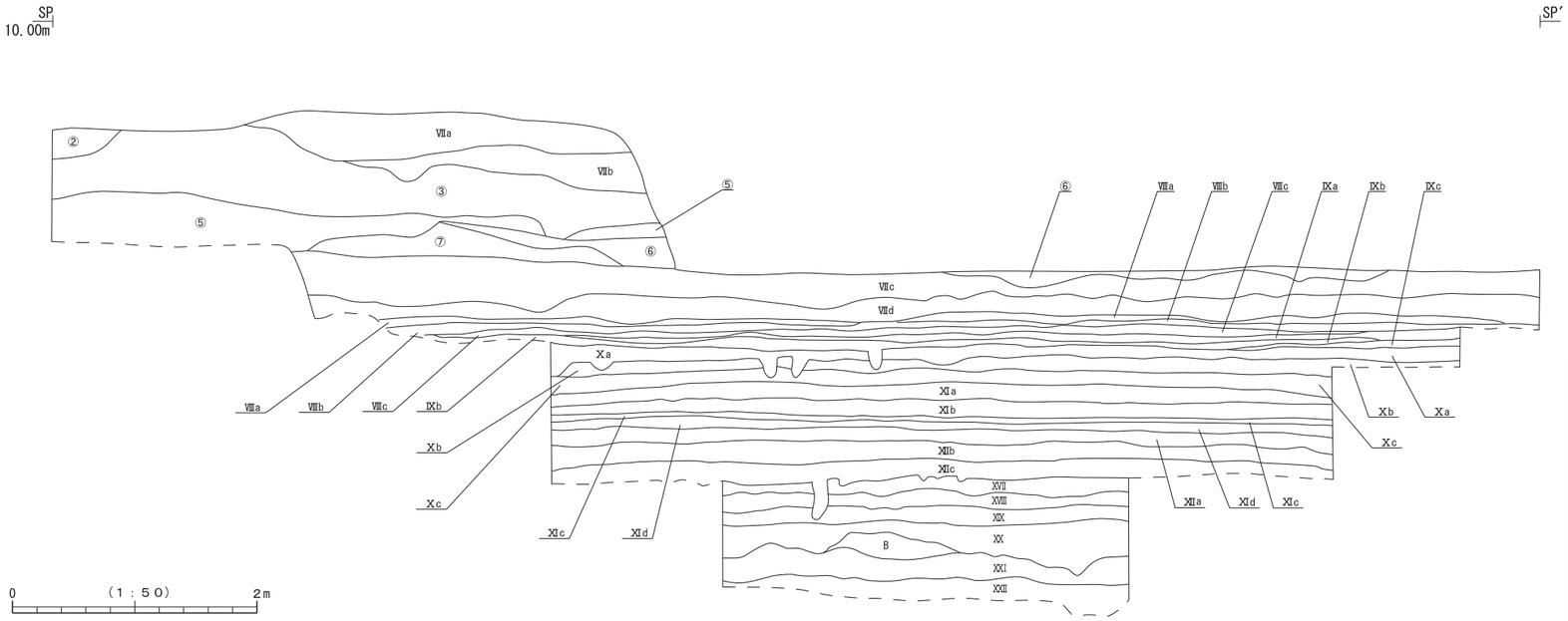
北区



南区



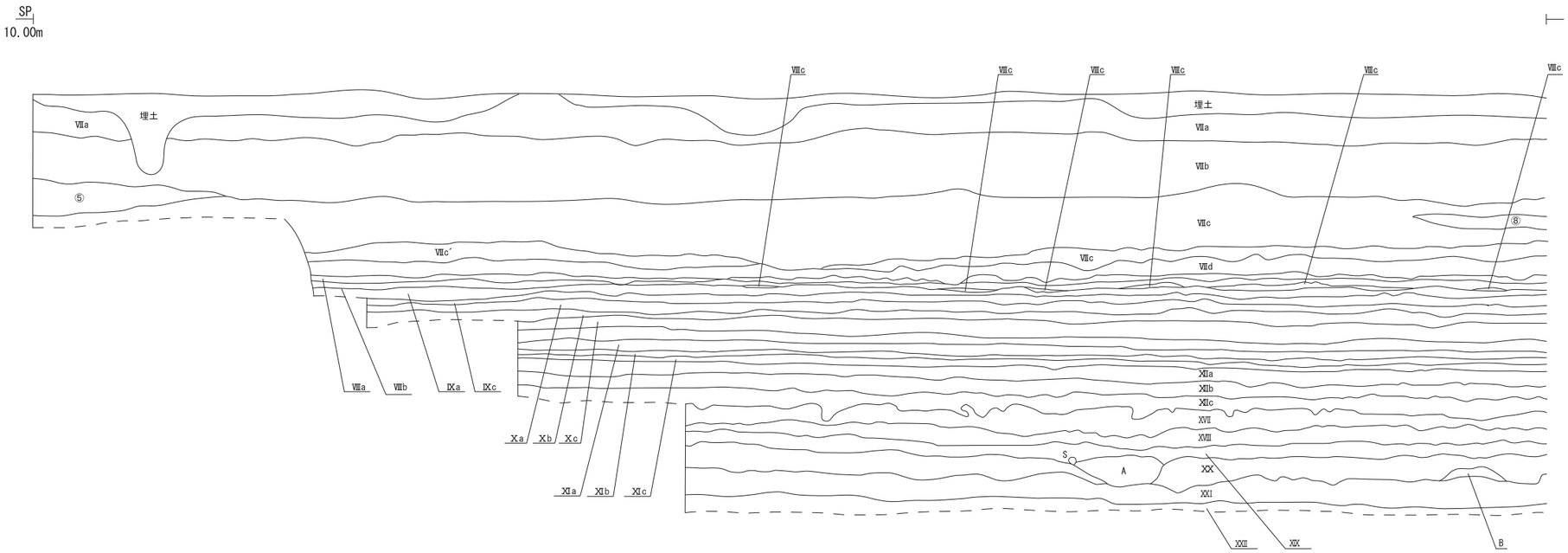
第494図　３Ａ区下層調査区平面図

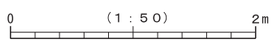


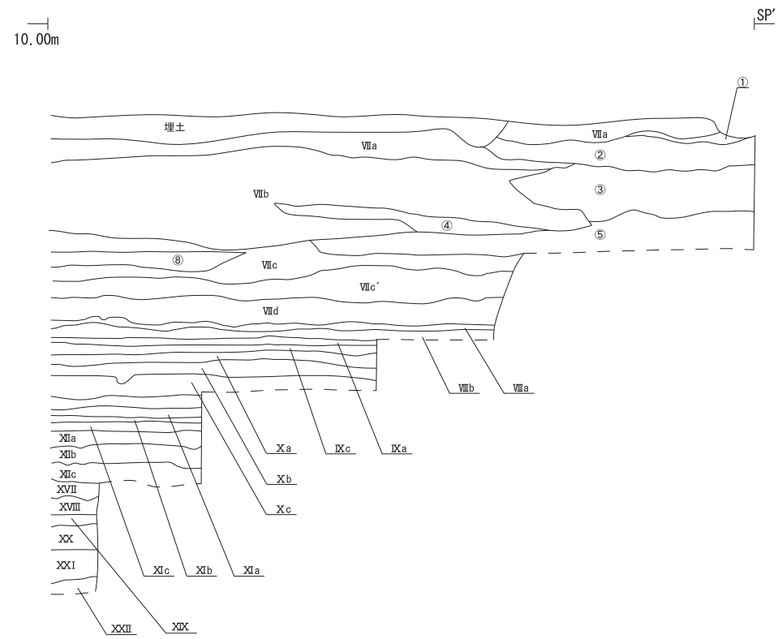
3A区下層北区　土層

層位	土　色		土　性	備　　考
Ⅶa	2.5Y4/6	オリーブ褐色	砂層	酸化鉄斑　マンガン斑
Ⅶb	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	砂層	Ⅶa層に比べ酸化鉄斑・マンガン斑少
Ⅶc	2.5Y5/1	黄灰色	砂質シルト	中央に厚さ2～3cm程の砂質黄褐色土を互層状に含む
Ⅶc′	2.5Y5/2	暗黄灰色	粗砂	粗い砂質と粘土の互層 酸化鉄、炭化物を板状に含む
Ⅶd	2.5Y6/2	灰黄色	粘土質シルト	酸化鉄、炭化物を帯状に含む
Ⅷa	5GY7/1	明オリーブ灰色	粘土質シルト	少量の鉄分および炭化物を含む　粘性やや強　しまりあり
Ⅷb	10BG5/1	青灰色	砂質シルト	微量の鉄分および炭化物を含む　しまりあり
Ⅷc	5GY7/1	明オリーブ灰色	粘土	Ⅷa層に同じ
Ⅸa	N2/1	黒色	粘土質シルト	極微量の鉄分、炭化物、少量の植物繊維含む
Ⅸb	N3/	暗灰色	粘土質シルト	少量の鉄分、炭化物、微量の植物繊維を含む
Ⅸc	10GY2/1	緑黒色	粘土質シルト	極微量の鉄分、微量の炭化物、少量の植物繊維を含む　粘性・しまり共に強
Ⅹa	N3/	暗灰色	粘土質シルト	多量の鉄分、炭化物を粒状に含む　しまりあり
Ⅹb	N5/	灰色	粘土質シルト	多量の鉄分、炭化物を粒状に含む　しまりあり
Ⅹc	N4/	灰色	粘土質シルト	多量の鉄分、炭化物を粒状に含む　しまりあり
Ⅺa	10BG5/1	青灰色	粘土質シルト	少量の鉄分、微量の炭化物を粒状に含む　しまりあり Ⅹ層への漸移層
Ⅺb	10BG5/1	青灰色	粘土質シルト	多量の鉄分、微量の炭化物を粒状に含む 炭化物を帯状に含む　しまりあり
Ⅺc	10BG5/1	青灰色	粘土質シルト	多量の鉄分、炭化物を粒状に含む　しまりあり
Ⅺd	10BG5/1	青灰色	粘土質シルト	多量の鉄分、少量の炭化物を含む　しまりあり
Ⅻa	5Y2/1	黒色	粘土質シルト	中量の鉄分、少量の炭化物、多量の植物繊維をブロック状に含む 粘性やや強　しまりあり
Ⅻb	5Y2/2	オリーブ黒色	粘土質シルト	多量の鉄分、植物繊維、少量の炭化物を帯状・ブロック状に含む　しまりあり
Ⅻc	5Y3/2	オリーブ黒色	粘土質シルト	中量の鉄分、少量の炭化物、植物繊維をブロック状に含む しまりあり
XⅦ	2.5GY5/1	オリーブ灰色	粘土	少量の鉄分、炭化物、植物繊維を含む　しまりあり
XⅧ	10BG4/1	暗青灰色	粘土質シルト	多量の鉄分、炭化物、少量の植物繊維を含む　粘性・しまり共に強
XⅨ	2.5GY4/1	暗オリーブ灰色	粘土	少量の鉄分、多量の炭化物粒、植物繊維を含む
XX	5GY2/1	オリーブ黒色	粘土	少量の鉄分、炭化物粒、多量の植物繊維を含む
XXⅠ	5GY2/1	オリーブ黒色	粘土	粘土混じりの砂層、 多量の小礫(径100～200mm)、明緑灰色(10GY7/1)、植物繊維を含む
XXⅡ	2.5GY4/1	暗オリーブ灰色	砂	グライ化　湧水あり
A	5GY2/1	オリーブ黒色	粘土	XXⅠ層の倒木根か
B	2.5GY3/1	暗オリーブ灰色	粘土	少量の鉄分、炭化物、植物繊維、微量の明緑灰色粒子を含む　しまりあり
①	2.5Y4/6	オリーブ褐色	砂層	マンガン、酸化鉄含む　しまりあり
②	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂	黒色粘土粒、マンガン、酸化鉄を含む
③	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	粗砂	径2～5mmの砂利と砂の互層 水の影響を受けたⅦb層か
④	2.5Y4/2	暗灰黄色	粗砂	砂利を含まない③層　酸化鉄、炭化物を含む
⑤	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	砂質	径5～20mmの小礫と砂の互層
⑥	2.5Y6/1	黄灰色	粘土	酸化鉄、マンガン含む　しまり弱
⑦	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	砂質	径5～30mmの小礫、粘土ブロックの混合層
⑧	2.5Y5/2	暗灰黄色	粗砂	酸化鉄、マンガン、層下部に径2～20mmの小礫含む

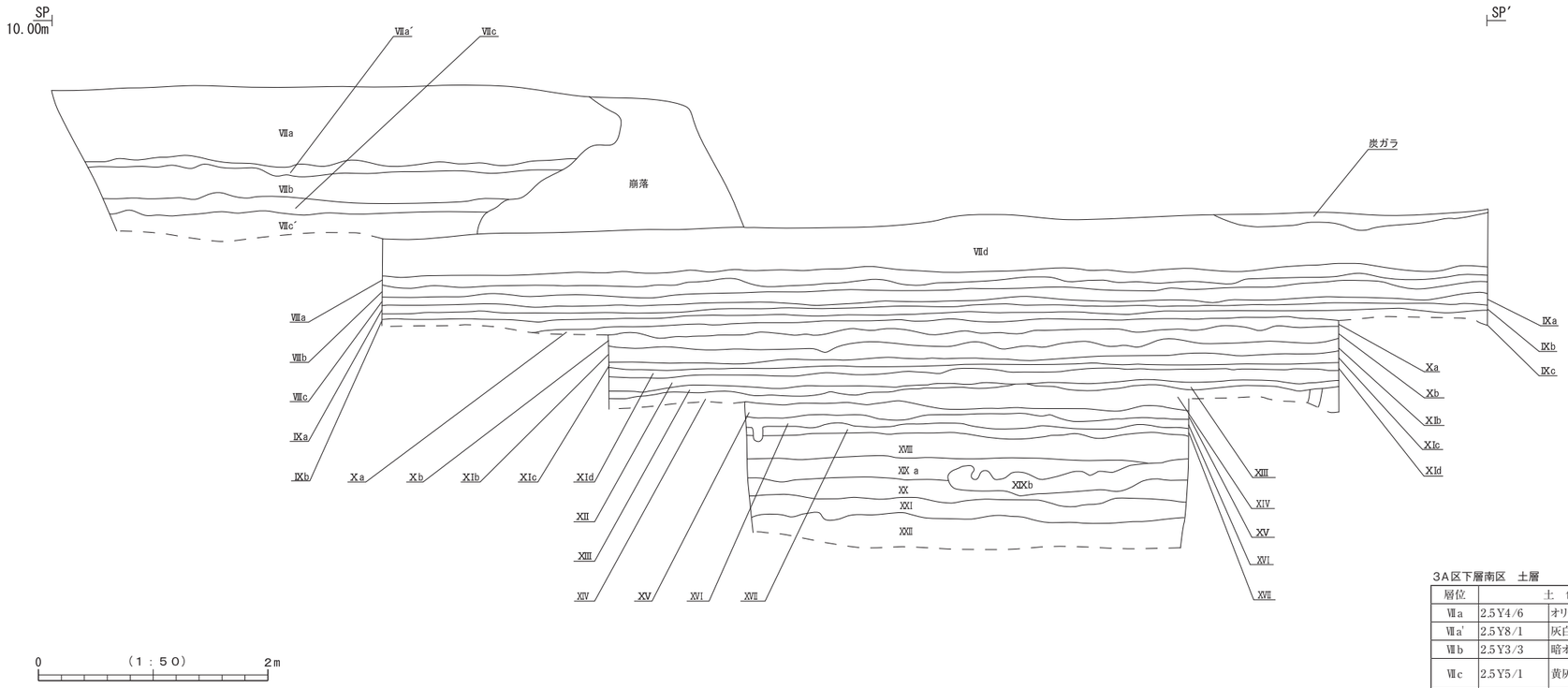
第495図　3A区下層調査区北区北壁土層図







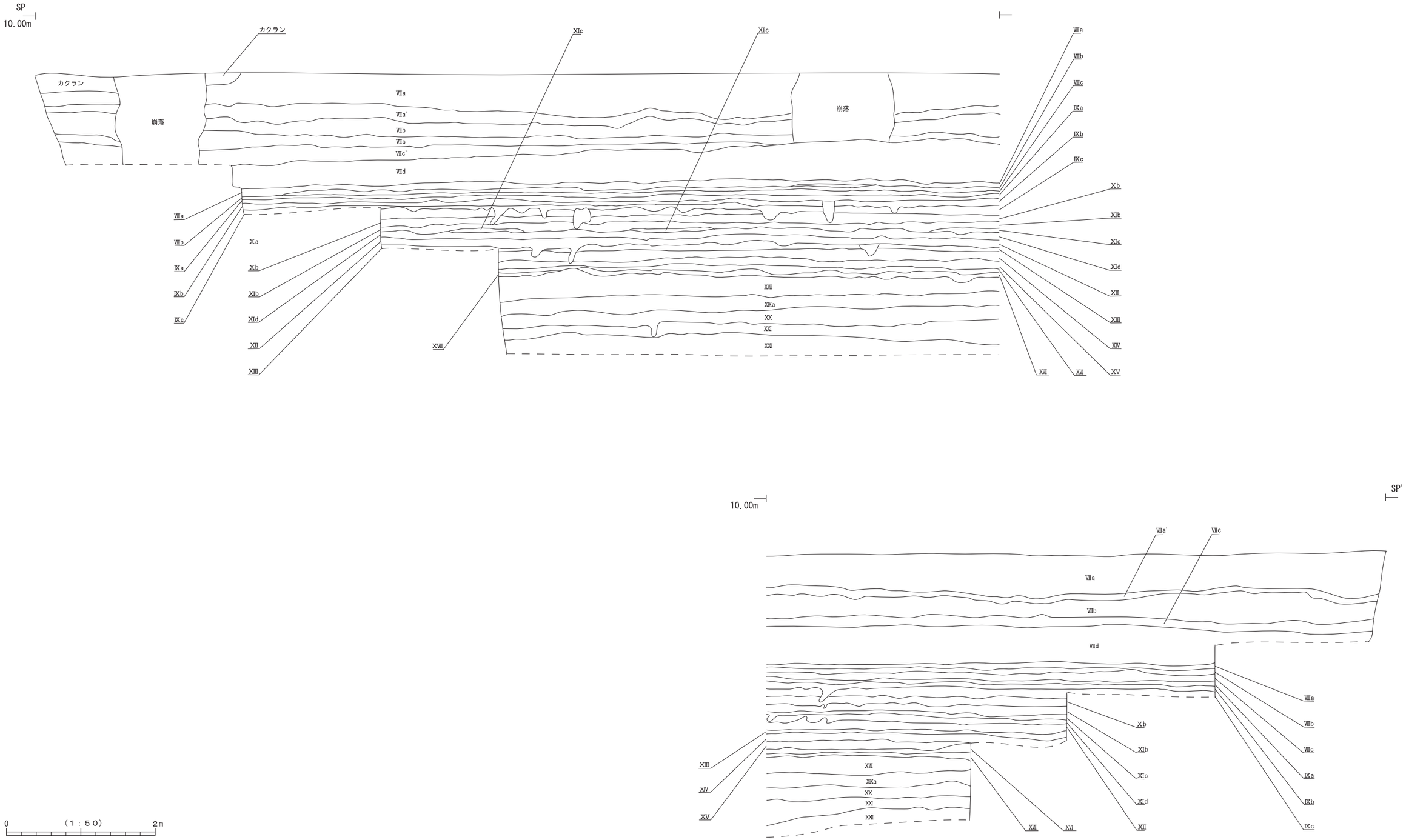
第496図　3A区下層調査区北区西壁土層図



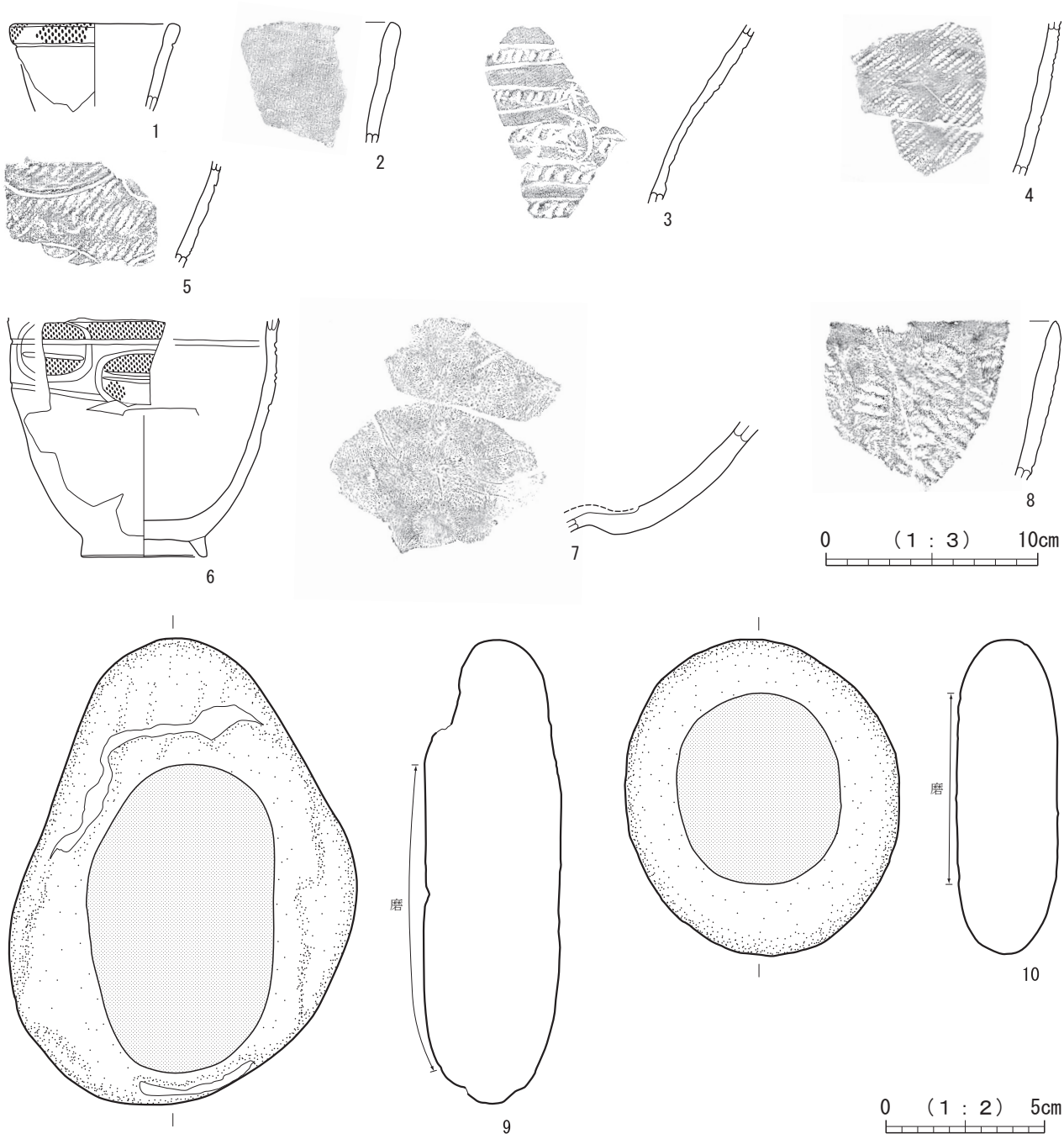
3A区下層南区　土層

層位	土　色		土　性	備　　考
Ⅶa	2.5Y4/6	オリーブ褐色	砂	酸化鉄斑　マンガン斑
Ⅶa′	2.5Y8/1	灰白色	砂	多量の酸化鉄、マンガンを斑状に含む　粒子やや粗い
Ⅶb	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	砂層	Ⅶa層に比べ酸化鉄斑・マンガン斑少
Ⅶc	2.5Y5/1	黄灰色	砂質シルト	中央に厚さ2～3cm程の砂質黄褐色土を互層状に含む
Ⅶc′	2.5Y5/2	暗黄灰色	粗砂	粗い砂質と粘土の互層　酸化鉄、炭化物を板状に含む
Ⅶd	2.5Y6/2	灰黄色	粘土質シルト	酸化鉄、炭化物を帯状に含む
Ⅷa	5GY7/1	明オリーブ灰色	粘土質シルト	少量の鉄分および炭化物を含む　粘性やや強　しまりあり
Ⅷb	10BG5/1	青灰色	砂質シルト	微量の鉄分および炭化物を含む　しまりあり
Ⅷc	5GY7/1	明オリーブ灰色	粘土	Ⅷa層に同じ
Ⅸa	N2/1	黒色	粘土質シルト	極微量の鉄分、炭化物、少量の植物繊維含む
Ⅸb	N3/	暗灰色	粘土質シルト	少量の鉄分、微量の炭化物、白色粒子、植物繊維を含む
Ⅸc	10GY2/1	緑黒色	粘土質シルト	極微量の鉄分、微量の炭化物、少量の植物繊維を含む　粘性・しまり共に強
Ⅹa	N3/	暗灰色	粘土質シルト	多量の鉄分、炭化物を含む
Ⅹb	N5/	灰色	粘土質シルト	多量の鉄分、少量の炭化物を含む
XIb	10BG5/1	青灰色	粘土質シルト	多量の鉄分、微量の炭化物を含む
XIc	10BG5/1	青灰色	粘土質シルト	多量の鉄分、炭化物を粒状に含む　粘性やや弱　しまりあり
XII	5Y2/1	黒色	粘土質シルト	少量の鉄分、少量の炭化物、粘性やや弱　しまりあり
XIII	10BG6/1	青灰色	粘土質シルト	少量の鉄分、炭化物を含む
XIV	10G6/1	緑灰色	粘土	多量の鉄分、少量の炭化物、径1～2mmの白色粒子を含む　粘性・しまり共に強
XV	5BG6/1	青灰色	粘土	多量の鉄分、微量の炭化物を含む
XVI	10BG5/1	青灰色	粘土	多量の鉄分、微量の炭化物を含む
XVII	2.5GY5/1	オリーブ灰色	粘土	少量の鉄分、炭化物を含む　しまりあり
XVIII	10BG4/1	暗青灰色	粘土質シルト	少量の鉄分、炭化物を含む
XIXa	2.5GY4/1	暗オリーブ灰色	粘土	多量の鉄分、炭化物を含む
XIXb	10BG7/1	明青灰色	粘土質シルト	XIXa層以上に炭化物を含む
XX	5GY2/1	オリーブ黒色	粘土	少量の鉄分、炭化物粒、多量の植物繊維を含む
XXI	5GY2/1	オリーブ黒色	粘土	粘土混じりの砂層 多量の小礫(径100～200mm)、明緑灰色(10GY7/1)、少量の植物繊維を含む 粘性・しまり共に強
XXII	2.5GY4/1	暗オリーブ灰色	砂	グライ化　湧水あり

第497図　3A区下層調査区南区北壁土層図



第498図　3A区下層調査区南区西壁土層図



図版番号	登録番号	弥生調査区	層位	種別	器種	部位	外面調整・文様	内面調整・文様	備　考	写真図版
1	A-008	南区	XⅡa層	縄文土器	壺	口縁	口:LR縄文横位回転→沈線→頸:ミガキ	ミガキ	取り上げ№15	167
2	A-003	北区	XⅡa層	縄文土器	深鉢	口縁	ミガキ	ミガキ		167
3	A-005	南区	XⅡa層	縄文土器	深鉢	体	刺突→沈線→ミガキ(密)	ナデ	内面炭化物付着、取り上げ№6	167
4	A-002	南区	XⅡa層	縄文土器	深鉢	体	RL縄文縦位回転	ミガキ	取り上げ№13	167
5	A-004	北区	XⅡa層	縄文土器	深鉢	体	沈線→L縄文→沈線	ナデ		167
6	A-006	北区	XⅡa層	縄文土器	台付鉢	体上半～高台	体上半:LR縄文横位回転→沈線→ミガキ、体下半～高台:高台貼付→ミガキ	ミガキ		167
7	A-007	北区	XⅡa層	縄文土器	注口	底	ミガキ	ナデ	内面剥離顕著	167
8	A-001	南区	XX層	縄文土器	深鉢	口縁	L縄文縦位回転	ナデ	取り上げ№31	167

図版番号	登録番号	出土地点	層位	取上番号	器種	分類	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考	写真図版
9	Kc-178	3A下層南	XⅦ層	礫石器	磨石	IB	14.6×10.9×4.5	992.46	安山岩	完形品、楕円礫、磨1面(凸)	167
10	Kc-179	3A下層北	不明	礫石器	磨石	IA	9.9×8.6×3.0	339.67	安山岩	完形品、円礫、磨1面(平)	167

第499図　３Ａ区下層調査区出土遺物

第６章　自然科学分析

１．仙台市長町副都心土地区画整理事業関係遺跡発掘調査に伴う自然科学分析（火山灰分析）

株式会社古環境研究所

⑴　はじめに

宮城県中部の仙台市域とその周辺には、蔵王、愛島、肘折、十和田など東北地方の火山のほか、浅間、御岳、姶良、阿蘇、洞爺など遠方の火山に由来するテフラ（火山砕屑物，いわゆる火山灰）が数多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

そこで、テフラ層が認められた長町駅東遺跡においても、発掘調査担当者により柱状に採取された土層試料から分析者により観察･採取されたテフラ試料を対象に、テフラ粒子の屈折率測定と、EPMAによる火山ガラスの主成分化学組成分析を行って、指標テフラとの同定を行うことになった。測定分析の対象となった試料は、10トレンチの９層（試料10-9層，層厚0.7㎝）、11トレンチの５層（試料11-5層，層厚２㎝）、35トレンチの10層（試料35-10層，層厚２㎝）の３試料である。

⑵　屈折率測定

①測定試料と測定方法

３試料を対象に、日本列島とその周辺のテフラ･カタログ（町田･新井，1992）の作成に利用された温度一定型屈折率測定法（新井，1972，1993）により、テフラ粒子の屈折率測定を行った。

②測定結果

屈折率測定の結果を表１に示す。10-９層には、軽石型の火山ガラス（最大径0.3mm）が多く含まれている。色調は、白色や無色透明である。火山ガラスの屈折率（n）は、1.501-1.508（modal range: 1.502-1.507）である。重鉱物としては、斜方輝石、単斜輝石、角閃石、黒雲母がごく少量含まれている。斜方輝石の屈折率（γ）は、1.706-1.708である。

11-５層には、軽石型の火山ガラス（最大径0.3mm）が多く含まれている。色調は、白色や無色透明である。火山ガラスの屈折率（n）は、1.502-1.507である。重鉱物としては、斜方輝石、単斜輝石、角閃石ごく少量含まれている。斜方輝石の屈折率（γ）は、1.707±である。

35-10層には、軽石型の火山ガラス（最大径0.4mm）が多く含まれている。色調は、白色や無色透明である。火山ガラスの屈折率（n）は、1.502-1.507である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石がごく少量含まれている。斜方輝石の屈折率（γ）は、1.706-1.708である。

⑶　火山ガラスの主成分化学組成分析

①分析試料と分析方法

３試料を対象として、指標テフラとの同定精度を向上させるために、試料に含まれる火山ガラスについて、波長分散型エレクトロンプローブＸ線マイクロアナライザー（以下，WDS型EPMAとする）により主成分化学組成分析を行った。分析に使用した分析機器は、山形大学理学部の日本電子JXA8600MWDS型EPMAである。加速電圧15kV、照射電流0.01μA、ビーム径5μmの条件で行った。補正法はOxide ZAF法を用いた。

②分析結果

火山ガラスの主成分化学組成分析結果を表２に示す。さらにこの表には、915年に十和田火山から噴出したと推定されている十和田ａ火山灰（To-a，大池，1972，町田ほか，1981，町田･新井，1992）と、約5,500年前*1に十和田火山から噴出した十和田中掷テフラ（To-Cu，大池ほか，1966，早川，1983a，福田，1986，町田･新井，1992）に含まれる火山ガラスの主成分化学組成分析結果も合わせて示した。

10-9層には、主成分化学組成上、３タイプの火山ガラスが含まれているように思われる。また、11-5層にも２タイプの火山ガラスが含まれているようである。35-10層には、さほど主成分化学組成に違いが認められず、非常に純度が高い試料のように思われる。

⑷　考察

火山ガラスの形態や色調さらに斜方輝石の屈折率などをみると、検出されたテフラ粒子の多くが十和田系のテフラに由来する可能性が考えられる。しかしながら、火山ガラスの屈折率は、約1.2～1.3万年前*1に十和田火山から噴出した十和田八戸テフラ（To-HP，早川，1983b，Hayakawa，1985）によく似ているものの、テフラ･カタログ（町田･新井，1992）に記載されている完新世の十和田系テフラのそれと完全には一致しない。

そこで、火山ガラスの主成分化学組成が火山ガラスの主成分化学組成を見ると、10-９層および11-5層に含まれるTiO2がもっとも多く含まれてタイプの火山ガラス、さらに35-10層に多く含まれている火山ガラスについては、TiO 、Al2O3 、FeO、CaO、Na2O、K2Oなどの含有量の点において、To-aに含まれる火山ガラスと主成分化学組成がよく似ていることがわかる。これらのことを総合すると、３試料に含まれる火山ガラスの多くについては、To-aに由来する可能性が高いと考えられよう。３試料の中では、やはり35-10層の純度が高いように思われる。以上のことから、長町東遺跡において認められた火山灰層が、一次堆積のテフラ層であれば、To-aである可能性が高い。

なお、To-aに含まれる火山ガラスのテフラ･カタログに記載されている屈折率と、今回得られたそれとの違いについては、岩手県南部や宮城県域などで検出されるTo-aに共通した傾向である。これについては、テフラ･カタログに記載された標準試料の採取地点が給源火山に近いために、火山ガラスが分厚く、またTo-aの噴出年代が新しいために十分水和が進んでいないこと、遠隔地ではその逆で水和が進んで屈折率に違いが生じていることに起因すると考えられる（新井房夫群馬大学名誉教授談話）。またTo-aのユニット間で、屈折率が異なるとの説もある（町田ほか，1981）。

したがって、より高精度の同定のためには、今回のように、火山ガラスや斜方輝石などの高精度の屈折率測定に合わせて、信頼度の高いEPMA（Ｘ線プローブマイクロアナライザー）による火山ガラスの主成分化学組成分析が行われると良い。

⑸　まとめ

仙台市長町駅東遺跡において、採取されたテフラ試料を対象として、屈折率測定とEPMAによる火山ガラスの主成分化学組成分析を行った。その結果、本遺跡で認められたテフラ層については、十和田ａ火山灰（To-a，915年）の可能性が高いことが明らかになった。

山形大学教育学部の八木浩司助教授には、火山ガラスの主成分化学組成に関する未公表のデータを提供いただいた。ここに記して御礼申し上げます。

（＊1）　放射性炭素（14C）年代

引用・参考文献

新井房夫(1972)斜方輝石・角閃石によるテフラの同定−テフロクロノロジーの基礎的研究．第四紀研究，11，p.254-269．

新井房夫(1993)温度一定型屈折率測定法．日本第四紀学会編「第四紀試料分析法2−研究対象別分析法」，p.138-149．

福田友之(1986)考古学からみた「中掫軽石」の降下年代．弘前大学考古学研究，3，p.4-15．

早川由紀夫(1983a)十和田火山中掫テフラ層の分布，粒度組成，年代．火山，第2集，28，p.263-273．

早川由紀夫(1983b)火山豆石として降下堆積した十和田火山八戸火山灰．火山，28，p.25-40．

Hayakawa, Y. (1985) Pyroclastic geology of Towada volcano. Bull. Earthq. Res. Inst. Univ. Tokyo，60，p.507-592．

町田　洋・新井房夫(1992)火山灰アトラス．東京大学出版会，276p.

町田　洋・新井房夫・森脇　広(1981)日本海を渡ってきたテフラ．科学，51，p.562-569．

大池昭二(1972)十和田火山東麓における完新世テフラの編年．第四紀研究，11，p.232-233．

表１　屈折率測定結果

トレンチ・試料	火山ガラス				重鉱物	
	量	色調	形態	屈折率(n)	組合せ	屈折率
10-9 層	+++	wh,cl	pm	1.501-1.508	(opx,cpx,ho,bi)	opx(γ):1.706-1.708
				(1.502-1.507)		
11-5 層	+++	wh,cl	pm	1.502-1.507	(opx,cpx,ho)	opx(γ):1.707±
35-10層	+++	wh,cl	pm	1.502-1.507	(opx,cpx)	opx(γ):1.706-1.708

++++:とくに多い,+++:多い,++:中程度,+:少ない,-:認められない. wh:白色,cl:無色透明. pm:軽石型.
opx:斜方輝石,cpx:単斜輝石,ho:角閃石,bi:黒雲母.重鉱物の()は,量が少ないことを示す.屈折率の測定は,温度一定型屈折率測定法(新井,1972,1993)による.屈折率の()は,modal rangeを示す.

表２　火山ガラスの主成分化学組成分析結果

トレンチ・試料	SiO2	TiO2	Al2O3	FeO	MnO	MgO	CaO	Na2O	K2O	P2O5	Total	n
10-9 層	78.55	0.10	12.06	1.21	0.13	0.06	0.78	3.62	3.49	0.00	100.00	5
	0.55	0.02	0.19	0.39	0.07	0.05	0.26	0.56	0.16	0.00		
	79.36	0.16	11.90	1.28	0.06	0.15	1.04	3.22	2.80	0.04	100.01	3
	77.73	0.27	12.49	1.81	0.05	0.33	2.00	3.78	1.52	0.01	99.99	4
11-5 層	77.51	0.37	12.57	1.71	0.12	0.42	2.05	3.80	1.41	0.04	100.00	10
	0.23	0.04	0.10	0.15	0.05	0.04	0.07	0.16	0.09	0.04		
	78.93	0.11	12.08	0.92	0.00	0.06	0.55	4.00	3.35	0.00	100.00	1
35-10層	77.58	0.34	12.59	1.78	0.11	0.42	2.03	3.71	1.39	0.05	100.00	10
	0.60	0.05	0.09	0.10	0.08	0.03	0.08	0.58	0.08	0.04		
To-a*1	77.87	0.37	12.81	1.75	0.10	0.42	2.00	3.29	1.34	0.06	100.01	-
To-Cu*2	75.08	0.44	13.28	2.46	0.08	0.63	2.63	4.04	1.29	0.09	100.02	-

山形大学理学部のWDS型EPMAによる.n:分析ポイント数.上段が平均値,下段は標準偏差. *1:八木浩司山形大学教育学部助教授の未公表資料.

２.長町駅東遺跡出土鉄器の科学組成に基づく分類

東北大学大学院国際文化研究科　関　博光

⑴　はじめに

長町駅東遺跡は、平成13年以降、継続的に実施されている発掘調査によって、６世紀後半から８世紀後半に比定される竪穴住居跡が300軒以上見つかった集落跡である。その東側には、７世紀中葉から営まれた官衙（あるいは城柵）と見なされている郡山遺跡が隣接する。長町駅東遺跡の集落は、郡山遺跡の官衙施設の造営に先行して営まれ、その後は官衙と消長を同じくすることが明らかにされている。立地、存続時期を考慮すると、郡山遺跡官衙施設の造営や官衙の維持などに関係する人たちの集落であった可能性が高い。

集落の維持には、生業を営むための鋤･鍬、鎌などの農耕具、刈取り具が不可欠である。また、新しい住居や官衙施設の建設、土地の開墾には、工具や大工道具、建築資材の入手が欠かせない。当該時期、これらの道具は、ほとんどが鉄を素材としており、製品鉄器あるいは、それらを製作するための原料鉄を安定的に入手することは、集落や官衙の運営において重要な課題であったことは間違いない。当該時期の鉄器獲得の実態を明らかにするために、長町駅東遺跡から出土した鉄器の金属考古学的調査を実施し、科学組成に基づく鉄器の分類を行った。その結果、複数の供給地から鉄器を獲得しており、時代の推移とともに供給地が変化した可能性の高いことが明らかになった。以下に得られた成果について述べる。

⑵　長町駅東遺跡の概要

長町駅東遺跡は仙台市太白区長町に立地する。これまでの調査によって、６世紀後半から８世紀後半に比定される竪穴住居跡が300軒以上検出されている。土器の形式編年ならびに遺構の切り合い関係から、住居跡群には５時期（１期:６世紀後半～７世紀前半、２期:７世紀前半～７世紀中葉、３期:７世紀後半代、４期:７世紀末～８世紀前半、５期:８世紀後半）の変遷が報告されている。また、区画溝、材木列の一部が見つかっており、集落が区画されていた可能性のあることが報告されている。

前述のとおり、長町駅東遺跡は、７世紀中葉～８世紀前半に営まれた郡山遺跡官衙の西側に位置している。郡山遺跡Ⅰ期官衙期と並行するのが長町駅東遺跡３期、Ⅱ期官衙と並行するのが４期にあたる。このことから、郡山遺跡官衙の造営よりも先行して営まれた集落であり、その後官衙造営に関係する人たちの居住地として発展し、造営後も官衙の維持などに関係する人たちの集落であった可能性が高い。長町駅東遺跡にあった集落が、隣接する官衙と深く関係を持ちながら本格的に発展し、その後終焉する時期は、竪穴住居跡数が増減する状況から、７世紀前半から８世紀前半と考えられている。

⑶　調査資料の概要

調査資料９点の資料名、出土状況、推定年代を表１にまとめる。No.4は、X線透過観察の結果、２本の棒状鉄器（註１）が錆着したものと判断できたので、両者（それぞれNo.4①棒状、No.4 ②棒状と呼ぶ）から分析用試料を摘出することとした。郡山遺跡Ⅰ期官衙以前（７世紀前半）に比定される鉄器が１点（No.1刀子）、Ⅱ期官衙期（７世紀末葉～８世紀前半）のものが２点（No.2･3刀子）、Ⅱ期官衙以後（８世紀中葉）のものが３点（No.4①･②棒状、No.5鎌）である。また、No.6鎌、No.7釘、No.8刀子は、出土遺構の年代は出土土器の形式編年によって推定されているものの、堆積土から出土した鉄器であるため、厳密に鉄器廃棄時期を特定することが困難とされた（註2）。以下では、参考資料として扱うことにする。

⑷　分析方法

①分析用試料片の摘出

Ｘ線透過写真に基づき、他に比べて錆化が進んでおらず、残存状況が良好と判断される部分を選んだ。外観形状を損ねることのないよう細心の注意を払いながら、ダイヤモンドカッターを装着したハンドドリル（以下ハンドドリル）で、Ｖ字状の切り込みを入れ、0.1-0.2ｇの試料片を摘出した。得られた試料片をさらに二分し、大きい方を組織観察に、小さい方を化学成分分析に供した。試料摘出後、その部位はエポキシ樹脂による充填、岩絵の具による古色を施し修復した。

②試料の調整と分析方法

組織観察用試料片はエポキシ樹脂で包埋し、エメリー紙、ダイヤモンドペーストを使って研磨した。得られた検鏡面を金属顕微鏡で観察した。地金の製造方法を推定する上で重要と判断された非金属介在物（鋼を製造する過程で分離・除去することができずに残った異物）については、エレクトロン・プローブ・マイクロアナライザー（EPMA）によりその組成を調べた。表１のうち、No.3刀子、No.5鎌を除く、７資料から摘出した試料は、そのほとんどがメタルで構成されていたので、ナイタール（硝酸2.5mlとエタノール97.5mlの混合溶液）によるエッチングを施し、炭素量を推定した。

化学成分分析用試料片については、試料片表面に付着する土砂、錆をハンドドリルで除去した後、エチルアルコールならびにアセトンで超音波洗浄し十分に乾かした。試料片をテフロン分解容器に直接秤量し、塩酸、硝酸、フッ化水素酸を加え、マイクロウェーブ分解装置で分解した。さらにホウ酸を加え蒸留水を加え定溶とした。溶液中に含有される全鉄（T.Fe）、銅（Cu）、ニッケル（Ni）、コバルト（Co）、マンガン（Mn）、りん（P）、チタン（Ti）、けい素（Si）、カルシウム（Ca）、アルミニウム（Al）、マグネシウム（Mg）、バナジウム（V）、ヒ素（As）、モリブデン（Mo）、クロム（Cr）、硫黄（S）の16成分を高周波誘導結合プラズマ発光分光分析法（ICP－AES法）で分析した。

⑸　分析結果

①化学組成

９試料の化学成分分析結果を表２に示す。No.1・2刀子、No.6鎌、およびNo.7釘のT.Feは97mass%以上で、ほぼメタルからなる試料が、No. 4①・4②棒状、No.8刀子のT.Feは92-96mass%以上で、メタルを主体とし、わずかに錆が混在する試料が分析されている。これら７試料からは、0.012mass%以上のCu、0.006mass%以上のNi、および0.031mass%以上のCoが、また、No.2刀子には、他の資料に比べ高レベルの、0.17mass%のP、0.05mass%のAsが検出されている。ほぼメタルもしくはメタルを主体とし、わずかに錆が混在した試料であり、埋蔵環境下からの富化の可能性はまずない。上記７資料に銅あるいは銅合金をはじめとする鉄以外の金属を素材とする資料の付着が認められないことをふまえるとCu、Ni、およびCoの３成分、およびNo.2刀子のP、Asは、それぞれの鉄器を製作する際に使用された地金に含有されていたと見なすことができる。

No.3刀子、No.5鎌のT.Feは47-59mass%である。錆試料のため、埋蔵環境下からの富化の可能性について吟味する必要がある（佐々木、伊藤1987）。資料内部に加え表層部からも試料を摘出し、化学成分分析を実施した。表層部のT.Feは30-37mass%で、内部から摘出した試料に比べ低レベルである。また、Siは13-18mass%、Alは3-4.6mass%で、表層部は内部に比べ錆化が進んでいて、土砂の混入量も多い。No.3刀子の表層部から摘出した試料のCu、Ni、およびCoは、内部から摘出した試料中のCu、Ni、およびCo含有量より低く、埋蔵環境からの富化の可能性は乏しいといえる。分析された３成分のほとんどは元の地金に含まれていたと判断できる。一方、No.5鎌の表層部と内部のCuはいずれも0.007mass%で同レベルにあった。後述するとおり、組織観察の結果、局所的にCu粒の残存が確認されており、相当量の銅が元の地金に含まれていたことは確実である。

②組織観察結果

No.1刀子から摘出した試料はそのほとんどがメタルによって構成されている。マクロエッチング組織は、ほとんど腐食されず、金属光沢を呈する領域と、黒く腐食された領域とからなる（第500図）。パーライト[フェライト（αFe）とセメンタイト（Fe¼C）との共析組織]の占める面積割合から、前者は0.2-0.3mass%Cの鋼、後者は0.5-0.6mass%Cの鋼と推定された（佐藤編1968）。ほぼ同様の組織は、No.8刀子にも認められ、0.1mass%C程度と0.7mass%C以上の鋼が配されていた（第500･502図）。No.1･8刀子の製作時に、炭素量の異なる鋼を合わせた可能性が考えられる。

No.4②棒状、No.6鎌にも、それぞれ0.1mass%C程度と0.2-0.3mass%、0.1mass%C程度と0.3-0.4mass%の炭素量の異なる領域が観察された。異なる炭素量の鋼を合わせて製作された可能性があるが、広領域の組織観察を行った上で判断したい。No.2刀子、No.4①棒状、No.7釘は、試料片のほとんどが腐食されなかった。いずれの試料も0.1mass%C程度の鋼と見なすことができる。

No.1刀子には、灰色を呈する微細粒子（IO）と黒色を呈するガラス化領域（Gl）によって構成される非金属介在物が分布する（第500図）。EPMAによる分析によって、IOはFe-O系化合物、GlはFe-Mg-K-Al-Si-O系のガラス質けい酸塩であることがわかった。No.2刀子からも、Fe-O系化合物（IO）とFe-P-Ca-Al-Si-O系化合物（XF）、それらを取り囲む微細な粒子が混在するマトリックス（Ma）からなる非金属介在物が観察された（第500図）。XF、MaにはPが含有されていた。既述のとおりNo.2刀子からは0.17mass%のPが検出されている。分析されたPのほとんどは、非金属介在物に起因すると見なされる。

No.4①･②棒状、No.6鎌、No.7釘およびNo.8刀子からは、Fe-O系化合物（IO）、やや暗灰色を呈するFe-Ti-Al-Mg-O系化合物（XT:以下鉄チタン酸化物という）、暗灰色のFe-Mg-Si-O系化合物（XF）とそれらを取り囲むFe-Mg-Al-Si-O系のマトリックス（Ma）から構成される非金属介在物が観察された（第501図･表３）。なお、No.4①･②棒状、No.7釘およびNo.8刀子の非金属介在物XFとMaにはPが含まれていた（第501･502図）。表２に示すとおり、上記４資料から0.03-0.25mass%のPが分析されたが、そのほとんどは非金属介在物に起因するものと判断できる。

図4cに示すように、No.5鎌のマクロ組織には、局所的に微細な金属粒（Cu粒）が観察された。EPMAによる分析によって、それらは銅粒であることが分かった。No.3刀子、No.5鎌から摘出した試料には、錆化前の地金の炭素量を推定できる組織を、No.3刀子には非金属介在物を見いだすことができなかった（第503･504図）。

⑹　考察

①鉄器の製作に使用された地金の分類

摘出した試料の組織観察によって、調査した７資料の製作には亜共析鋼（炭素量0.8mass%未満の鋼）が使用されていることが明らかとなった。No.1刀子およびNo.8刀子には炭素量の異なる鋼が配されていた可能性がある。この点については、当該資料から広領域の調査用試料を摘出した後、組織観察を行い確かめる必要がある。No.3鏃、No.5鎌については炭素量の異なる鋼の使用を指摘できる組織を見いだすことはできなかった。

表３から明らかなように、７資料から摘出された試料には非金属介在物が観察された。No.１･2刀子を除く５資料に鉄チタン酸化物の残存が認められた。原料から鋼を製造する過程において、チタン化合物を含む物質が使用された、または生産設備を構築する素材にチタン化合物を含む物質が使用されたことを示している。一方、７世紀前半のNo.1刀子、７世紀末葉～８世紀初頭のNo.2刀子には鉄チタン酸化物の残存が見られない。鉄チタン酸化物の有無という点で非金属介在物組成に差異がある。８世紀中葉のNo.4①･②棒状、No.5鏃に鉄チタン酸化物が確認されたことをふまえると、８世紀初頭から８世紀中葉にかけて、時代が推移するとともに鋼製造方法が変化した可能性が考えられる。この点については同時代に比定される官衙や城柵、および一般集落から見いだされた鉄関連生産

遺構、および出土遺物の金属考古学的調査結果の蓄積を図る中で明らかにしたい。

No.5鎌から摘出した試料には微細な銅粒が局所的に残存していた。その成因については鋼製造に使用された原料における銅鉱物の混在、鋼製造過程での銅鉱物または銅合金資料の添加、あるいは当該物質の偶発的混入が考えられる。この点については類例の検出を図りつつ、鉄関連生産遺構の調査結果と対比しながら解明を進めたい。

②微量元素の含有量比に基づく鉄器の分類

表２に示した元素の内、銅（Cu）、ニッケル（Ni）、およびコバルト（Co）の三成分は鉄よりも錆にくい金属であるため、鉄中に取り込まれた後は、そのほとんどは鉄中にとどまると推定される。従って、合金添加が行われていなかったとすると、その組成比は鋼製造法の如何に関わらず、製鉄原料の組成比に近似すると推定される。この方法については、いくつかの鉄器の金属考古学的調査に用いられ、これまでのところ、鉄器の形態学的研究結果とほぼ整合する結果が導き出されている（赤沼2004）（赤沼、関2001）。

表２に示す各試料の化学成分分析結果から、それぞれ（mass% Co）/（mass% Ni）と（mass% Cu）/（mass% Ni）、（mass% Ni）/（mass% Co）と（mass% Cu）/（mass% Co）を求め、それらの値をプロットしたものが第504図である。なお、分析精度を考慮して、図にはNi、Coが0.01 mass%以上含有されるもののみをプロットした。また、図では７世紀前半に比定される鉄器を四角形、７世紀後半を丸形、７世紀末葉～８世紀初頭を三角形で、８世紀中葉を逆三角形で示し、非金属介在物中に鉄チタン酸化物が残存するものを白色、鉄チタン酸化物の残存が認められないものを黒色、非金属介在物が見いだされなかったものを灰色で表した。

第504図aによると、７世紀前半のNo.1刀子が図の中央、７世紀末葉～８世紀前半のNo.2･3刀子は図の上方、８世紀中葉のNo.4①･②棒状は図の中央下にプロットされた。近い領域にプロットされた鉄器はほぼ同じ組成の鋼から製作されていると見なすことができ、No.4①･②棒状はほぼ同じ組成の鋼から製作されている可能性が高い。他の３点はそれぞれ離れた位置にあり、特に、No.2刀子からは他の鉄器よりも高レベルにある0.161 mass%のCu、0.05 mass%のAsが検出されており、異なる組成比の鋼がそれらの鉄器の製作に使用されている。第504図においても、No.4①･②棒状は近い位置に、他の鉄器は離れた位置に分布している。また、（６）①で述べたとおり、No.1･2刀子とNo.4①･②棒状には、鉄チタン酸化物の有無という点で、非金属介在物組成に差異が見られた。８世紀前半以前と８世紀中葉以降とで、長町駅東遺跡にあった集落に鉄器を供給する地域が変化した可能性が考えられる。今後、ほぼ同時期の集落跡から出土した鉄器の調査例を増やしていく中で、当該時期の鉄器供給の様相が明らかになってくるものと思われる。

なお、No.6-8は、既述の通り鉄器の廃絶年代が特定できない資料であるが、No.4①･②棒状と近い位置にプロットされた。３資料が８世紀中葉に廃絶された可能性、または７世紀後半からこの組成比の鋼が長町駅東遺跡から見つかった集落に供給されていた可能性、のいずれかが考えられる。この点については、当該時期に比定される鉄器の調査例が蓄積されるのを待って判断したい。

⑺　まとめ

仙台市長町駅東遺跡から出土した鉄器９点の金属考古学的調査を行った結果、時代の推移とともに鉄器供給地域が変化していた可能性の高いことがわかった。今後、長町駅東遺跡周辺に立地する、ほぼ同時期の官衙や城柵および集落において同様の調査を行うことによって、律令国家成立期の陸奥国集落における鉄器供給の実態が見えてくるものと思われる。

謝　辞

本調査を実施するにあたり、貴重な資料を提供していただいた仙台市教育委員会、ならびに調査資料の考古学的

情報についてご教示賜った仙台市教育委員会工藤信一郎氏にお礼申し上げる。また、自然科学的調査に関して、岩手県立博物館、赤沼英男氏にご協力、ご指導賜った。記してお礼申し上げる。

註1：No.4①・②棒状とも、関（両関）と思われる部位が認められる（レントゲン左側）。長頸鏃と考えることもできるが、鏃の部位でいう、鏃身部と頸部が湾曲しており、鏃身部の形状も不明瞭である。何らかの工具の可能性も考えられる。類例の蓄積を図り、器種を検討したい。

註2：発掘調査を担当された工藤信一郎氏からご教示いただいた。

引用・参考文献

赤沼英男（2004）「出土遺物の組成からみたオホーツク文化における鉄器使用の変遷」『アイヌ文化の成立』pp.203-230、北海道出版企画センター

赤沼英男、関博充（2001）「金属考古学的調査結果からみた丹後平古墳群出土刀剣の分類」『八戸市博物館研究紀要』第16号、pp.14-23

佐々木稔、伊藤薫（1987）「川合遺跡出土の鉄斧・鉄鎌ならびに鋤先の金属学的調査」『静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要』Ⅱ、静岡県埋蔵文化財調査研究所、pp.63-80

佐藤知雄編（1968）『鉄鋼の顕微鏡写真と解説』丸善株式会社

仙台市教育委員会（2005）仙台市文化財調査報告書第283集『郡山遺跡発掘調査報告書-総括編-』

仙台市教育委員会（2007）仙台市文化財調査報告書第315集『長町駅東遺跡第4次調査』

仙台市教育委員会（2008）仙台市文化財調査報告書第324集『長町駅東遺跡第1・2次調査』

表１　調査鉄器の概要

No.	資料名	遺構名	層　位	推定年代	登録番号
1	刀子	SI15	床面	7世紀前半	N-03
2	刀子	SI248	掘方	7世紀末葉～8世紀前半	N-066
3	刀子	SI247A	床直		N-062
4①	棒状	SI253A	土壙2	8世紀中葉	N-69
4②	棒状				
5	鎌	SI146	周溝		N-18
6	鎌	SI222	埋土	7世紀後半	N-046
7	釘	SI33		7世紀末葉～8世紀前半	N-8
8	刀子	SI61		8世紀中葉	N-20

註1）　No.、資料名は筆者、遺構名、層位、推定年代、登録番号は報告書（仙台市教委2007･2008）

表２　分析結果

No.	Sa	資料名	化学組成（mass%）																Co/Ni	Cu/Ni	Ni/Co	Cu/Co	ミクロ組織	n.m.i.
			T.Fe	Cu	Ni	Co	Mn	P	Ti	Si	Ca	Al	Mg	V	As	Mo	Cr	S						
1	内部	刀子	98.21	0.032	0.016	0.031	<0.001	<0.01	<0.001	<0.01	0.003	0.015	0.003	<0.001	<0.01	0.001	0.001	0.03	1.94	2.00	0.52	1.03	Pa（0.2-0.3） Pa（0.5-0.6）	IO,Ma
2	内部	刀子	98.17	0.161	0.018	0.061	0.001	0.17	0.001	0.01	0.021	0.014	0.004	0.001	0.05	0.001	0.001	0.02	3.39	8.94	0.30	2.64	Pa（αFe）	IO,XF,Ma
3	内部	刀子	58.29	0.033	0.012	0.015	0.003	0.59	0.009	1.65	0.054	0.307	0.032	<0.001	0.02	0.002	<0.001	0.07	1.25	2.75	0.80	2.20	no	no
	表層		30.60	0.009	0.003	0.001	0.052	2.29	0.133	18.0	0.930	4.58	0.486	<0.001	0.01	<0.001	<0.001	0.03					-	-
4①	内部	棒状	92.75	0.019	0.014	0.044	0.004	0.25	0.140	0.25	0.033	0.036	0.024	0.003	0.01	0.002	0.004	<0.01	3.14	1.36	0.32	0.43	Pa（αFe）	IO,XT,XF,Ma
4②	内部	棒状	95.10	0.012	0.015	0.045	0.005	0.20	0.198	0.01	0.021	0.043	0.020	0.004	<0.01	0.002	0.008	0.03	3.00	0.80	0.33	0.27	Pa（αFe） Pa（0.2-0.3）	IO',XT,XF,Ma
5	内部	鎌	47.86	0.007	0.006	0.012	0.011	0.39	0.037	5.81	0.232	1.30	0.127	0.002	<0.01	0.001	<0.001	<0.01	(2.00)	(1.17)	(0.50)	(0.58)	no	Cu粒
	表層		36.30	0.007	0.001	0.001	0.041	0.43	0.096	13.9	0.530	3.07	0.318	<0.001	0.01	<0.001	<0.001	0.03					-	-
6	内部	鎌	98.25	0.027	0.049	0.129	0.004	0.06	0.098	0.05	0.015	0.025	0.014	0.001	0.01	0.005	0.002	<0.01	2.63	0.55	0.38	0.21	Pa（αFe） Pa（0.3-0.4）	(XT,XF,Ma) (XT,Gl)
7	内部	釘	97.60	0.043	0.043	0.117	<0.001	0.03	0.007	0.01	<0.001	0.001	0.001	<0.001	0.07	0.002	<0.001	<0.01	2.72	1.00	0.37	0.37	Pa（αFe）	(IO,XF,Gl)(XT)
8	内部	刀子	95.16	0.021	0.025	0.066	0.001	0.03	0.013	0.33	0.011	0.080	0.013	0.012	<0.01	<0.001	0.001	<0.01	2.64	0.84	0.38	0.32	Pa（αFe） Pa（>0.7）	XT,XF,Ma

註1）　No.は表1に対応、Saはサンプル採取位置、資料名は筆者。化学成分分析はICP-AES法による。

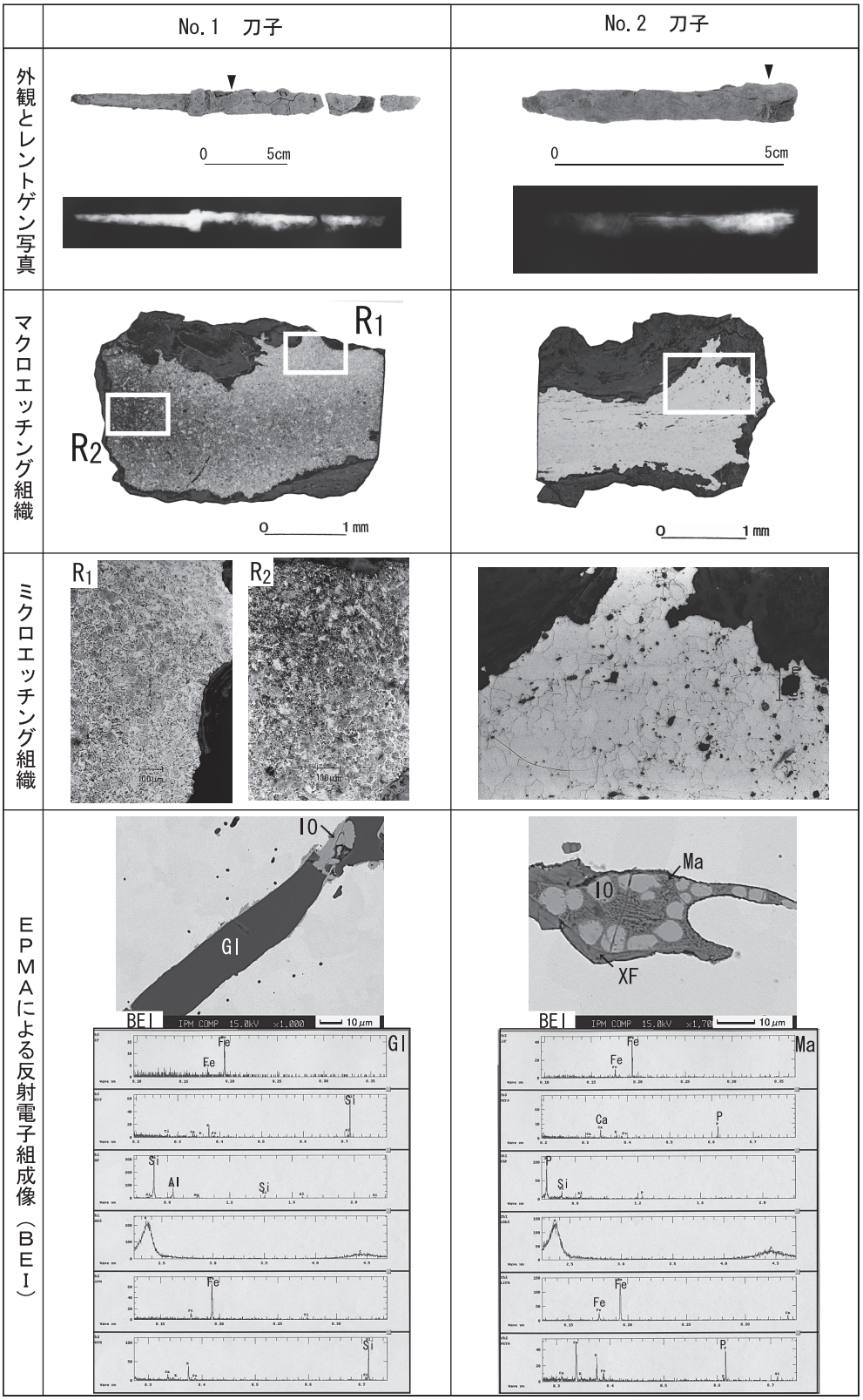
註2）　ミクロ組織のPaはパーライト、括弧内の数字はミクロ組織から推定される炭素量。noは見いだされず。

註3）　n.m.i.は非金属介在物組成。IOはFe-O系化合物、IO'はわずかにTiを含むFe-O系化合物XTは分析せず。鉄チタン酸化物、XFはFe-Si-O系化合物、Glはガラス質けい酸塩、Maはマトリックス。

表３　EPMAによる非金属介在物の定量分析結果

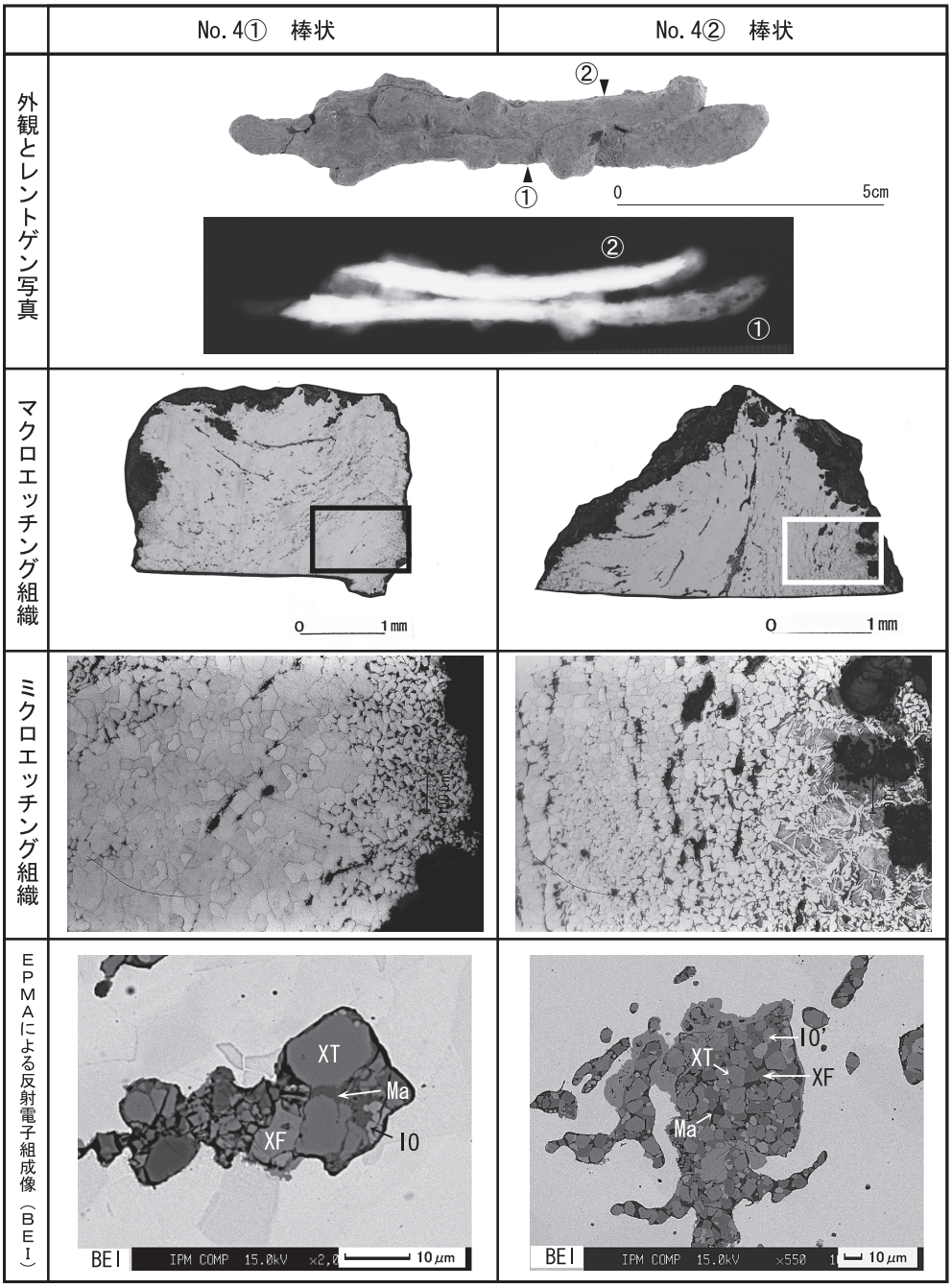
資料名	測定領域	化学組成（mass%）						
		FeO	TiO¼	V¼O¼	MgO	A¼O¼	SiO¼	Total
No.6鎌	XT	12.7	73.1	2.10	6.73	2.43	0.06	97.13

註1）　資料名は表1に、測定領域は図3に対応。

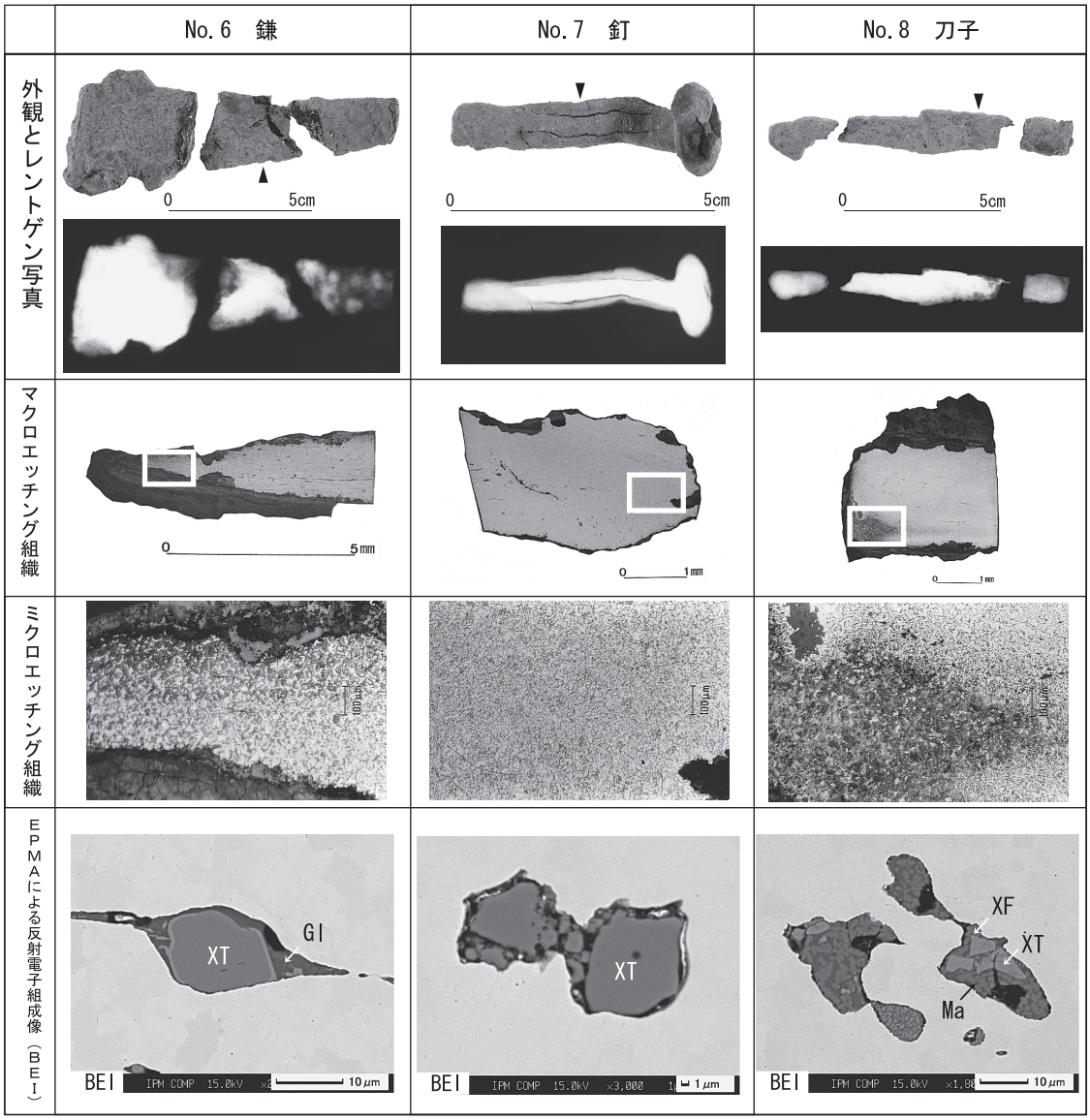


第500図　No.1・2刀子の外観と組織観察結果

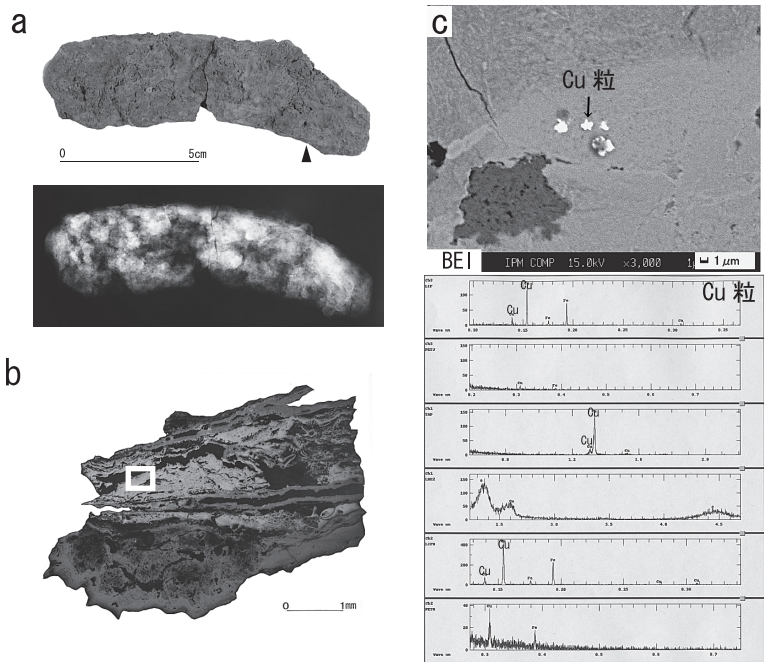
外観の矢印は試料摘出位置。マクロ、ミクロ組織はナイタールによるエッチング組織。
ミクロエッチング組織はマクロエッチング組織の枠内部。
IO：Fe-O系化合物、XF：Fe-P-Al-Mg-Si-O系化合物、GI：ガラス質けい酸塩、Ma：マトリックス



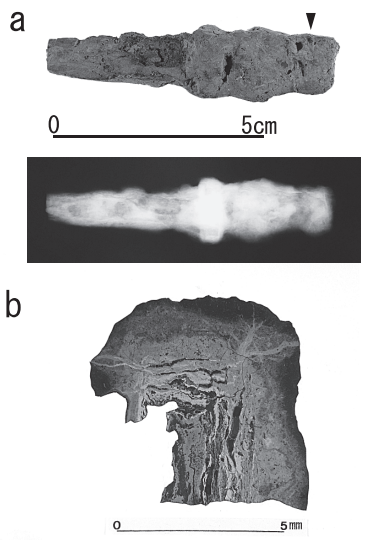
第501図　No.4①・②棒状の外観と組織観察結果
外観の矢印は試料摘出位置。マクロ、ミクロ組織はナイタールによるエッチング組織。
ミクロエッチング組織はマクロエッチング組織の枠内部。
IO：Fe-O系化合物、IO'：わずかにTiを含むFe-O系化合物、XT：鉄チタン酸化物
XF：Fe-P-Al-Mg-Si-O系化合物、Ma：マトリックス



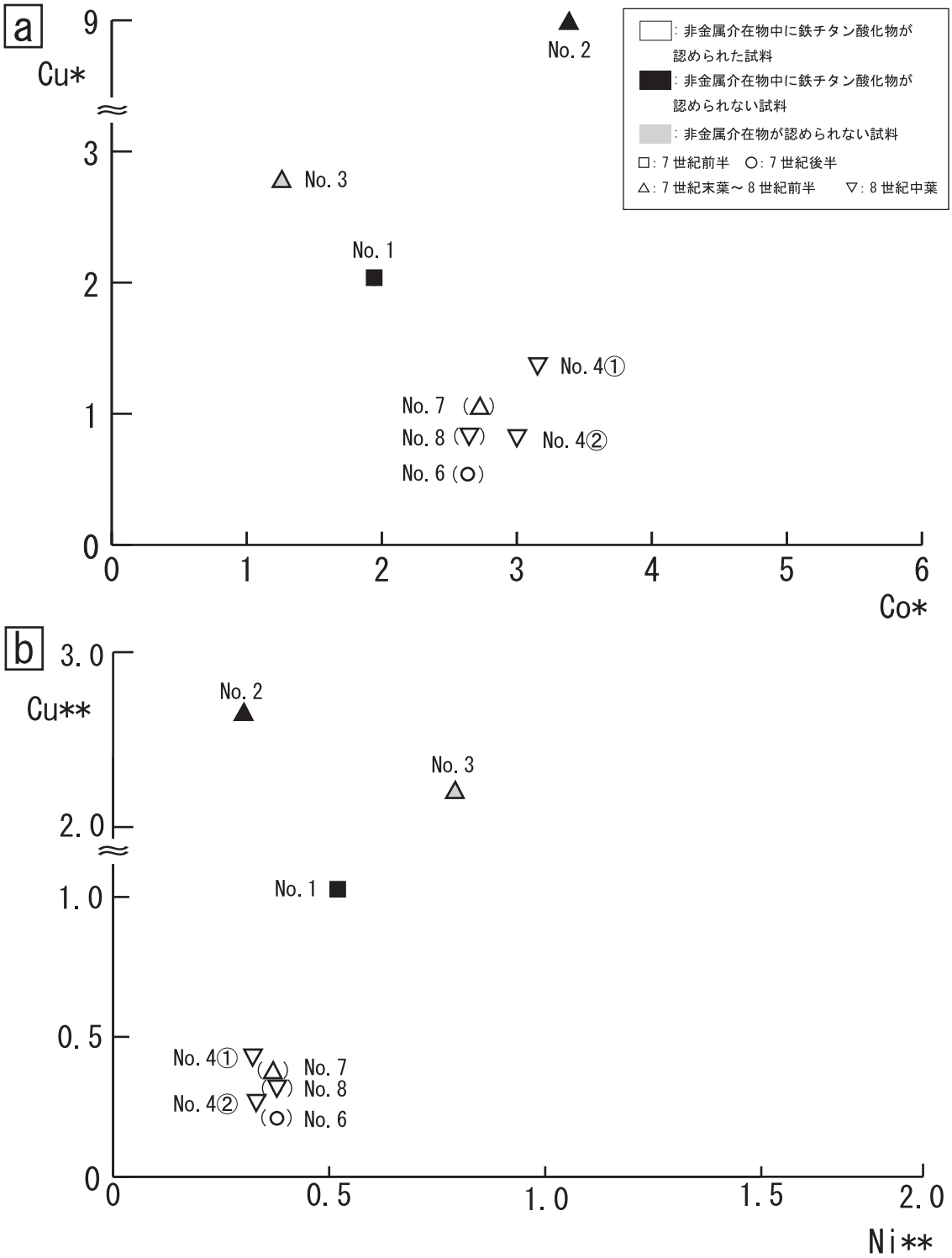
第502図　No.6鎌、No.7釘、No.8刀子の外観と組織観察結果
外観の矢印は試料摘出位置。マクロ、ミクロ組織はナイタールによるエッチング組織。
ミクロエッチング組織はマクロエッチング組織の枠内部。
XT：鉄チタン酸化物、XF：Fe-P-Al-Mg-Si-O系化合物、GI：ガラス質けい酸塩、Ma：マトリックス



第503図　No.５鎌の外観と組織観察結果
ａ：外観とレントゲン写真。矢印は試料片摘出位置。　ｂ：マクロ組織。
ｃ：EPMAによる反射電子組成像(BEI)と定性チャート。



第504図　No.３刀子の外観と組織観察結果
ａ：外観とレントゲン写真。矢印は試料片摘出位置。　ｂ：マクロ組織。



第505図　試料に含有されるCu、Ni、Co三成分比の関係
Cu*：(mass% Cu)/(mass% Co)、Co*：(mass% Ni)/(mass% Co)
Cu**：(mass% Cu)/(mass% Ni)、Ni**：(mass% Co)/(mass% Ni)

第７章　まとめ

仙台市あすと長町土地区画整理事業に伴う発掘調査は平成10年から開始し、これまでに西台畑遺跡（平成10～13年・17年・19年）、郡山遺跡（平成13年・16～18年）、長町駅東遺跡（平成13～20年度）の調査が行われている。

西台畑遺跡の調査では、総数140軒程の竪穴住居跡のなかで、竪穴住居の配置や構築に一定の規格をもったブロックがあることが確認されているほか、方四町Ⅱ期官衙外溝の西辺などが発見されている。

郡山遺跡の調査では、平成13年の調査で、Ⅰ期官衙に関連すると考えられるＬ字型に延びる溝跡が発見されている。この溝跡は、Ⅰ期官衙西辺の推定ラインから西50ｍに位置し、南北方向に延びる部分では平行している。Ⅰ期官衙に関連する施設か、官衙周辺の土地割りに伴う施設と考えられる。

平成16年の調査では、外溝の北西コーナー部が発見され、その後の国庫補助事業による調査成果から、Ⅱ期官衙と藤原京との関連、藤原宮との類似性が指摘されてきた。最近の調査成果では、外溝は一辺533～534.7ｍ（1500大尺）で官衙の周囲を巡っていることが明らかになってきた。このことから外溝が一辺1500大尺で設計された可能性が示唆され、藤原京の条坊制の一坊分と同じ規模であることから、Ⅱ期官衙の年代や性格を考える上で重要な遺構となってきている。

長町駅東遺跡の調査では、総数300軒以上の竪穴住居跡が発見されており、集落の区画施設と考えられる遺構が集落の北側（区画溝跡、材木列１列、一本柱列４列）と南側（材木列１列）で確認されている。

調査を開始して10年が経過し、郡山遺跡の官衙の構造に関わるような溝跡の発見だけでなく、官衙の西側に大規模な集落が形成されたことが明らかになってきた。この集落の成立と衰退については官衙との関係の中で考えていく必要があるが、今回の報告では集落の構造や遺構について整理し、まとめとしたい。

今回の報告にあたり、出土遺物についての詳細な分析は行うことができなかった。長町駅東遺跡や西台畑遺跡については毎年発掘調査が実施されており、膨大な量の資料が蓄積されてきている。今後刊行される調査報告書の中で、これらの課題について検討することにしたい。

１．調査成果の基礎整理

⑴　遺構の確認

これまでに行われてきた２Ｂ・３Ａ・４区と同様に、３Ｂ区においても表土から遺構検出面までの撹乱が顕著であり、検出された遺構の大部分は上部が失われている状況にあった。また、激しく重複する遺構群は遺構の検出作業および上面観察を難航させ、各遺構が掘り込まれた層位を明確にできないままに調査を行わざるを得なかった。よって、ここでは調査区壁面の土層断面を基として、遺構全体の傾向を検討する。

土層断面を観察する限り、最も上位から掘り込まれているのは、古代～中世に帰属すると考えられる一部のピットと小溝状遺構SM203・204・207である。SM207を切るSD42については、少なくともⅡ層上面からの掘り込みである。

竪穴住居跡や区画施設に代表される古代の遺構については、その大部分がⅢ層中から掘り込まれるものと思われ、重複関係上、新しい時期の遺構はⅢ層上面から、古い時期の遺構はⅢ層下面ないしⅣ層上面から掘り込まれたものも認められる。

⑵　竪穴住居跡の整理

３Ｂ区から検出した竪穴住居跡を検討するにあたり、各竪穴住居跡の諸属性を抽出し、一覧表を作成した。属性については、３Ｂ区と同様に区画施設SD66周辺から多数の竪穴住居跡が検出された４次調査報告書（第315集）を

長町駅東遺跡３Ｂ区　竪穴住居跡一覧表

住居番号	調査地区	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	方位	長軸×短軸(m)	平面形	カマド位置	煙道部			その他の施設			時期区分	備　　考
							底面	途中	先端	棟持柱	間仕切溝	灰溜坑		
SI69	3A	57・60	N-7°-E	3.70×-	隅丸方形	北辺	-	-	-	-	-	-	6	3B区は煙道部のみ検出
	3B	3												
SI71A	3A	61・62	N-13°-E	4.37×(3.27)	隅丸方形	北壁中央	-	-	-	-	-	-	4	
	3B	1・2・5												
SI71B	3B	2・5	N-15°-E	(3.02)×(1.65)	隅丸方形	東壁	-	-	-	-	-	-	4	3B区のみ残存
SI73	3A	61・62	N-16°-W	(4.30)×(3.32)	隅丸方形	-	-	-	-	-	○	-	3	
	3B	1・2・5												
SI75	3A	60	N-18°-W	4.10×1.95	隅丸方形	-	-	-	-	-	-	-	4	
	3B	3												
SI78	3B	3・6	N-10°-W	(3.97)×3.35	隅丸方形	北壁中央	上	-	-	-	-	-	4	
SI79	3B	2・5	N-25°-W	3.67×3.48	隅丸方形	北壁中央	水平	-	-	-	-	-	1	
SI80	3B	14・19	N-12°-E	4.85×(4.00)	隅丸方形	北壁中央	上	-	○	-	-	○	5	
SI81	3B	6・10	N-0°	2.00×1.70	隅丸長方形	-	-	-	-	-	-	-	6	竪穴遺構
SI82	3B	16・21	N-89°-E	(3.32)×3.85	隅丸方形	東壁中央	上	-	-	-	○	○	5	
SI83	3B	8・12	N-8°-E	3.21×(2.00)	隅丸方形	北壁中央	水平	-	○	-	-	-	5	
SI84	3B	15・20	N-20°-E	4.97×4.50	隅丸方形	-	-	-	-	-	-	-	5	
SI85A	3B	8・12	N-5°-W	(3.67)×(0.80)	隅丸方形	-	-	-	-	-	-	-	5	
SI85B	3B	8・12	N-6°-E	(3.30)×(1.10)	隅丸方形	-	-	-	-	-	-	-	5	
SI86	3B	1	-	(0.60)×(0.10)	-	-	-	-	-	-	-	-	5	
SI87	3B	7・8	N-20°-W	(3.11)×(2.07)	隅丸方形	-	-	-	-	-	-	-	6	
SI88	3B	20・21・25・26	N-50°-E	4.20×4.10	隅丸方形	北辺中央	下	-	-	-	-	-	2	
SI89	3B	30・35	N-20°-E	2.97×2.75	隅丸方形	東辺中央	水平	-	○	-	-	-	4	SK74は一連する可能性大 外側に張り出すカマド
SI90A	3B	25・30	N-97°-W	5.25×4.97	隅丸方形	西壁中央	水平	-	-	-	-	-	5	
SI90B	3B	25・30	N-13°-W	(4.50)×(4.00)	長方形	北壁中央	下	-	-	-	-	-	4	
SI91	3B	9・14	N-11°-W	(2.65)×(1.13)	-	-	-	-	-	-	-	-	5	
SI92A	3B	7・11	N-25°-W	5.10×4.78	隅丸方形	北辺中央	-	-	-	-	○	-	5	
SI92B	3B	7・11	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5	
SI93	3B	10・11・15・16	N-55°-E	(4.80)×4.50	隅丸方形	北辺中央	上	-	○	-	-	-	4	
SI94	3B	3	N-5°-W	-×-	-	-		-	-	-	-	-	4	
SI95A	3B	17	N-30°-W	(3.45)×3.35	隅丸方形	-	-	-	-	-	-	-	2	
SI95B	3B	17	N-30°-W	(3.43)×3.28	隅丸方形	北壁中央	-	-	-	-	-	-	2	煙道部を欠く
SI96	3B	29・34	N-5°-E	6.46×(3.10)	隅丸長方形	北壁	水平	-	-	-	-	-	4	
SI97A	3B	16・17・21・22	N-35°-W	3.00×2.00	隅丸長方形	北壁西	下	-	-	-	-	-	5	
SI97B	3B	21・22	N-44°-W	(4.00)×(1.00)	隅丸長方形	-	-	-	-	-	-	-	4	
SI98	3B	4	N-29°-W	-×-	-	-		-	-	-	-	-	5	
SI99	3B	11・16・17	N-70°-W	(5.50)×3.35	隅丸長方形	-		-	-	○	-	-	6	
SI100	3B	31・36	N-15°-E	5.63×5.32	隅丸方形	北壁中央	下	-	○	-	-	-	6	SI128建替後
SI101	3B	19・24	N-104°-E	(4.88)×(3.80)	隅丸方形	東壁中央	水平	-	○	-	-	-	4	
SI102	3B	7	N-15°-W	(4.03)×(2.96)	隅丸方形	-	-	-	-	-	-	-	5	
SI103A	3B	16・17・21・22	N-55°-E	5.15×4.85	隅丸方形	東辺中央	水平	-	-	-	-	-	4	
SI103B	3B	16・17・21・22	N-45°-W	(4.65)×4.20	隅丸方形	北辺中央	上	-	○	-	-	-	4	
SI104	3B	31・32・33	N-20°-E	3.50×3.50	隅丸方形	北壁中央	水平	-	○	-	-	-	6	
SI105	3B	19	N-3°-E	(0.80)×(0.25)	-	-	水平	-	-	-	-	-	4	
SI106	3B	15・20	N-89°-E	5.70×5.25	隅丸方形	東壁中央	下	-	○	-	-	-	4	
SI107	3B	8・12	N-25°-W	(4.63)×(3.72)	隅丸方形	-	-	-	-	-	-	-	4	
SI108	3B	29・30・34・35	N-10°-W	4.55×4.50	隅丸方形	北壁中央	上	-	-	-	-	-	3	
SI109	3B	15-2	N-36°-W	4.93×4.82	隅丸方形	北辺中央	-	-	-	-	-	-	2	
SI110	3B	5・9	N-24°-W	(1.50)×(1.20)	隅丸方形	-	-	-	-	-	-	-	5	
SI111	3B	24・29	N-20°-E	(2.90)×(1.25)	-	-	-	-	-	-	-	-	4	
SI112	3B	29	N-130°-E	(2.48)×(2.03)	隅丸方形	東辺中央	下	-	-	-	-	-	3	
SI113	3B	7・11	N-25°-W	(4.40)×(2.85)	隅丸方形	-	-	-	-	○	-	-	4	
SI114	3B	4・7	N-3°-W	(5.07)×(1.97)	隅丸方形	-	-	-	-	-	-	-	4	
SI115A	3B	10・11・15・16	N-35°-W	(6.40)×(6.30)	隅丸方形	北辺中央	上	-	○	-	-	-	3	
SI115B	3B	10・11・15・16	N-45°-W	5.10×4.84	隅丸長方形	-	-	-	-	-	-	-	3	
SI116	3B	11	N-2°-E	-×-	-	-	-	○	-	-	-	-	4	煙道部のみ残存
SI117	3B	10・11	N-30°-W	3.37×2.64	隅丸長方形	北壁中央	-	-	-	-	-	-	4	
SI118	3B	25・30	N-15°-W	(4.23)×3.64	隅丸長方形	北壁中央	上	-	-	-	-	-	4	
SI119	3B	38・43	N-62°-W	4.53×3.50	隅丸長方形	東辺南	-	-	-	○	-	-	5	煙道部は調査区外
SI120	4A	1・6	N-41°-W	6.92×(5.70)	隅丸長方形	北辺中央	-	-	-	-	-	-	3	
	3B	41・45・46												
SI121	3B	19・20・24・25	N-8°-E	(5.55)×(4.50)	隅丸方形	北辺中央	-	-	-	-	-	-	3	
SI122	3B	31	N-71°-W	(2.75)×(2.63)	隅丸方形	東辺中央	-	-	-	-	-	-	2	
SI123	3B	43	N-120°-W	(3.45)×(3.30)	隅丸方形	西辺南	段有	○	○	-	-	-	2	
SI124	4A	2・7	N-42°-E	3.07×2.35	隅丸長方形	北辺中央	-	-	-	-	-	-	3	北側1/3は4区
	3B	46・47												
SI125	3B	30	N-50°-W	(1.05)×(0.88)	-	-	-	-	-	-	-	-	3	
SI126	3B	11	N-15°-W	(2.70)×(1.60)	-	-	-	-	-	-	-	-	4	
SI127	3B	11・12	N-50°-W	(3.45)×(1.35)	-	-	-	-	-	-	-	-	4	
SI128	3B	31・36	N-15°-E	3.23×3.60	隅丸方形	-	-	-	-	-	-	-	4	SI100建替前
SI129A	3B	41・45・46・51	N-40°-W	5.24×5.13	隅丸方形	北辺中央	上	○	-	-	-	-	2	
SI129B	3B	41・45・46・52	N-40°-W	(4.24)×4.13	隅丸方形	-	-	-	-	-	-	-	2	
SI130	3B	7	N-25°-W	3.97×(2.12)	隅丸方形	北壁中央	-	-	-	-	-	-	2	
SI131	3B	21・22・26・27	-	5.38×5.35	円形	-	-	-	-	-	-	-	2	平地式住居の可能性有
SI132	3B	21・22・26	-	4.73×4.41	隅丸方形	-	-	-	-	-	-	-	2	平地式住居の可能性有

基にしている。その結果、以下の特徴が認められた。

①：重複が激しいため判然としない部分もあるが、竪穴住居跡の規模および平面形状は、３Ｂ区１期（次節参照。以下、３Ｂ区を省略）を除く各期において、一辺４～５ｍ程の規模を測る隅丸方形を基調とし、これに5.5～６ｍ程の大型に属するものが数軒加わる傾向が認められる。ただし、５・６期には一辺が6ｍを超えるものは認められない。

②：主軸方位は、Ｎ-25～45°-Ｗ、Ｎ-0～20°-Ｗ、Ｎ-10～20°-Ｅのいずれかに該当するものが多く、概ねこの３グループに大別される。それぞれの主軸方位において次の傾向が看取された。

ａ；Ｎ-25～45°-Ｗに軸を持つものは、各期において多数を占める主軸方位となる。

ｂ；Ｎ-0～20°-Ｗに軸を持つものは３期から認められ、郡山Ｉ期官衙期に相当する４期になると増加する。５期には減少し、６期にはほぼ構築されなくなる。

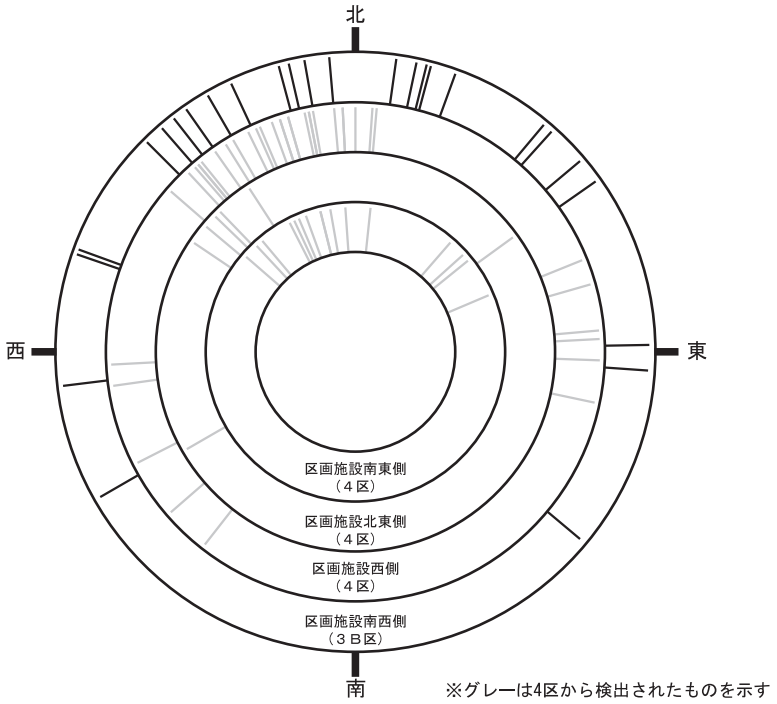
ｃ；Ｎ-10～20°-Ｅに軸を持つものは３期から認められ、上記２の軸方位の竪穴住居跡と入れ替わるかのように６期に特徴的な軸方位となる。

ｄ；上記ａ～ｃの傾向を併せて考えると、３Ｂ区における竪穴住居跡の主軸方位は、概ねＮ-25～45°-Ｗ→Ｎ-0～20°-Ｗ→Ｎ-10～20°-Ｅと変遷し、各期を通じてある程度の規則性が認められるものの、同時に複数の軸方位を持つ竪穴住居跡が混在する状況にある。

③：カマドの位置が特定できる37軒中、2/3に相当する25軒が北壁もしくは北辺に構築される。

④：カマドは1軒（SI89）のみ壁の外側に構築される。

⑤：カマド煙出しがピット状に窪む構造のものは４期以降に認められる。



第506図　竪穴住居跡カマド付設方向（第315集第431図を一部改変）

これらの各傾向のうち、②ａについては同じ主軸方位を持つ竪穴住居跡が２Ｂ区・３Ａ区・４区からも多数検出されており、本遺跡に構築された竪穴住居跡の中心的な主軸方位と考えられる。特に２Ｂ区・３Ａ区においては郡山Ｉ期官衙期に併行すると考えられる時期に特徴的なことが確認されている（第324集）。これに対し、３Ｂ区では６期を除く全期に認められるが、２Ｂ区・３Ａ区とは対照的に郡山Ｉ期官衙以前（１～３期）に属するものに多く認められる。また、②ｄ・③の傾向についても、２Ｂ区・３Ａ区で同様の傾向が指摘されている。

④については、SI89のように壁の外側に張り出してカマドが構築される竪穴住居跡は関東地方に多く認められる構造である。本遺跡からはこれまでにSI74（３Ａ区）、SI124（３Ｂ区と４区を跨ぎ、カマドは４区に位置する）が既に報告されており、SI89が3例目の報告となる。現段階ではいずれも郡山Ｉ期官衙期の前後段階に構築されたものと考えられることと、多くの竪穴住居跡に混じり点在することを除いて不明な点が多いものの、いわゆる関東系土師器と共に関東地方から東北地方への移住を検討する際の傍証になり得るものとして注目される。

⑶　遺構重複状況

３Ｂ区での発掘調査の結果、古代に帰属すると考えられる各遺構の重複関係を示したのが第507図である。竪穴住居跡については建て替えされたものも含むと最大７期にわたる変遷が認められ、出土遺物等との関連から６期に区分される（次節参照）。第508～517図には各期の竪穴住居跡出土土器を、第518～527図には区画施設SD66出土土器を再掲した。以下、各期の遺構配置について概略を記載する。

長町駅東遺跡３Ｂ区１期

２Ｂ区および３Ａ区（第324集）での１期、４区（第315集）での１期に概ね相当する。調査区南西端に北西方向に主軸を持つ竪穴住居跡1軒（SI79）と、これとほぼ同じ方向に延びる一本柱列SA4・5が区画施設SD66および材木列SA1に先行して調査区北東側に構築される。

長町駅東遺跡３Ｂ区２期（郡山プレＩ―Ａ期）

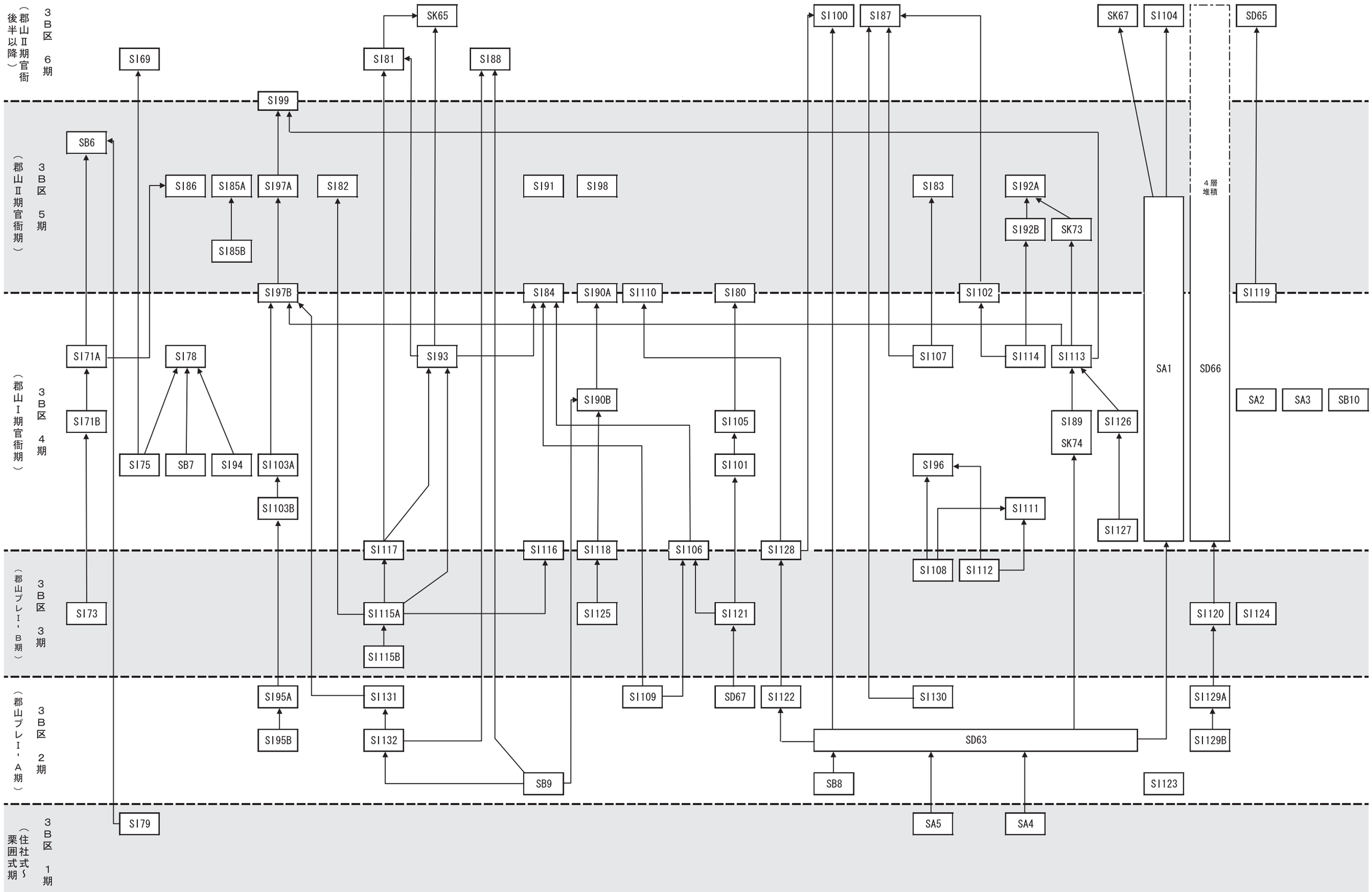
２Ｂ区および３Ａ区での２期前段階、４区での２期前半に概ね相当する。この段階から竪穴住居跡は調査区の中央部に構築されはじめ、平地式の可能性を有するもの（SI131・132）が混在する。竪穴住居跡の主軸方位は前段階と同様に北西を指向するものが多数存在する中で、SA4・5を切って構築されるSD63の北側には南西を指向するSI123が1軒位置する。また、この段階には南北もしくは東西方向を主軸とする掘立柱建物跡（SB7・8）も構築される。

長町駅東遺跡３Ｂ区３期（郡山プレＩ―Ｂ期）

２Ｂ区および３Ａ区での２期中頃、４区での２期後半に概ね相当する。竪穴住居跡は調査区中央部から拡散し、主軸は北西を指向するものの他、ほぼ真北を指向するもの（SI108・121）、北東を指向するもの（SI124）、南東を指向するもの（SI112）があり、ばらつきが認められる。また、一辺約6.5～7ｍを測る大型の竪穴住居跡（SI115Ａ・120）も構築される。

長町駅東遺跡３Ｂ区４期（郡山Ｉ期官衙期）

２Ｂ区および３Ａ区での３期、４区での２期後段階、郡山Ｉ期官衙期に相当し、この段階で調査区北東部に区画施設と考えられる溝跡SD66および材木列SA1が構築される。区画施設の南西側には多くの竪穴住居跡が構築され、３Ｂ区におけるピークとなる。中には壁柱穴を有するもの（SI106）も認められる。また、区画施設の北東側には一本柱列SA2・3、他の竪穴住居跡とは床面施設の様相を異にするSI119が構築される。竪穴住居跡の主軸は前



第507図　長町駅東遺跡３Ｂ区遺構重複関係図

段階と同様に一様ではなく、東を指向するもの（SI100・101）も加わるが、真北に近い角度を指向するものが優占するようになる。また、規模は多数の竪穴住居跡が一辺約４～５ｍを測る中で、約6.5ｍを測る大型のもの（SI96）や3ｍ前後を測る小型のもの（SI89・128）もあり、一様ではない。調査区南西には、南西-北東に棟を持つ掘立柱建物跡（SB7）が構築される。

長町駅東遺跡３Ｂ区５期（郡山Ⅱ期官衙期）

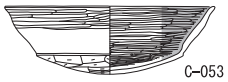
２Ｂ区および３Ａ区での４期、４区での３期、郡山Ⅱ期官衙期に相当する。この段階になると区画施設SD66はその機能が低下しはじめ、4層の堆積時には、おびただしい数の遺物が廃棄される。竪穴住居跡は多数構築されるものの、前段階に比べ減少する。中には壁柱穴を有するもの（SI85Ａ・90Ａ）のほか、小型のもの（SI97Ａ）も認められ、主軸方位もまた一様ではない。調査区南西端には、前段階の竪穴住居跡を切るかたちで南西-北東に棟を持つ掘立柱建物跡（SB6）が構築される。

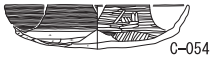
長町駅東遺跡３Ｂ区６期

２Ｂ区および３Ａ区での５期、４区での４期、郡山Ⅱ期官衙後半以降に相当する。竪穴住居跡の数は減少し、主軸方位は北東側を指向するものが優占するようになる。

３Ｂ区１期

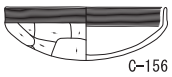
SI79出土遺物



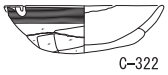


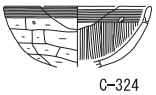
３Ｂ区２期①

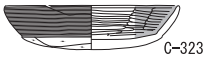
SI95A出土遺物



SI122出土遺物





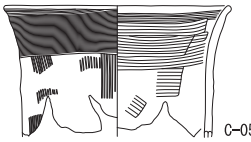


SI123出土遺物

第508図　各期竪穴住居跡出土土器(1)

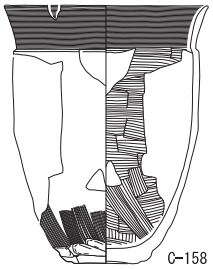
３Ｂ区１期

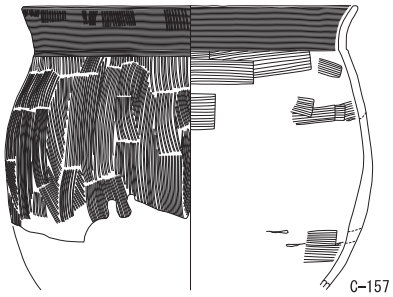
SI79出土遺物

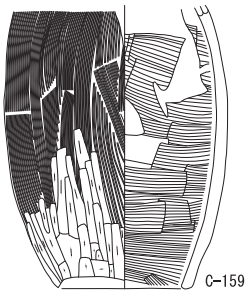


３Ｂ区２期①

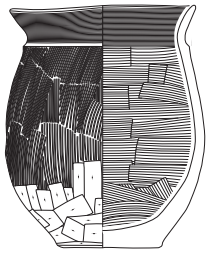
SI95A出土遺物

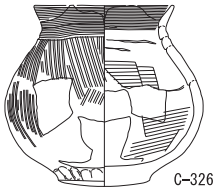




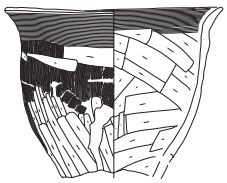


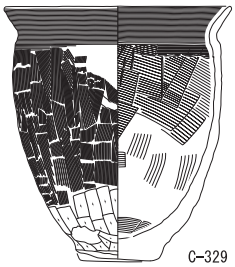
SI122出土遺物

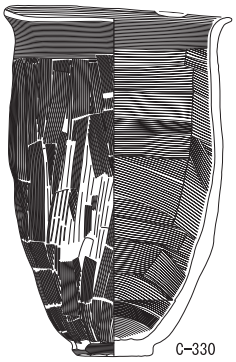


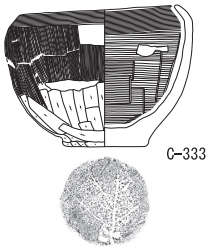


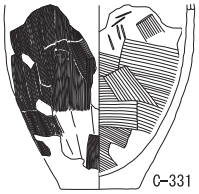
SI123出土遺物











３Ｂ区２期②

SI129B出土遺物

C-352

C-353

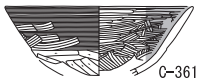
C-351

C-355

C-354

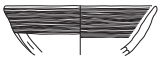
SI130出土遺物

C-360


C-361

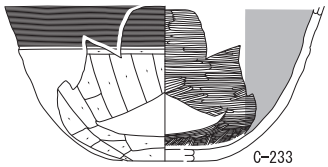
３Ｂ区３期①

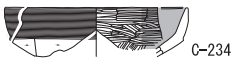
SI73出土遺物


C-045

SI108出土遺物

C-232


C-233

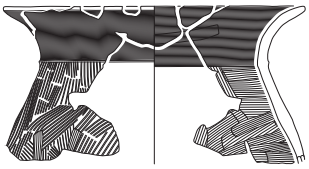

C-234

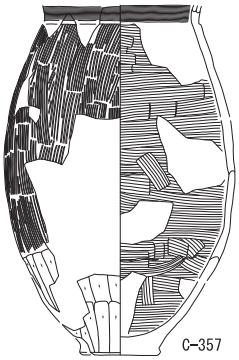
C-235

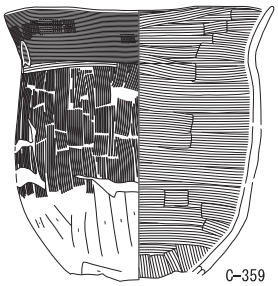
第509図　各期竪穴住居跡出土土器(2)

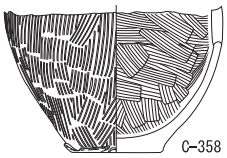
３Ｂ区２期②

SI129B出土遺物


C-356


C-357


C-359

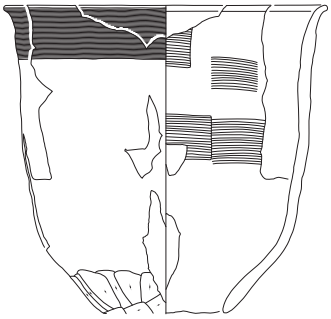

C-358

SI130出土遺物

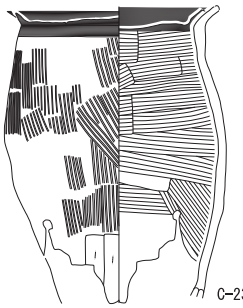
C-362

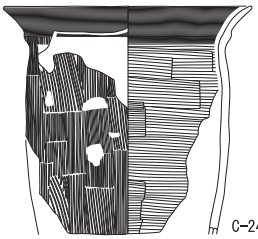
３Ｂ区３期①

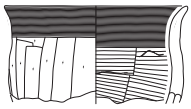
SI73出土遺物

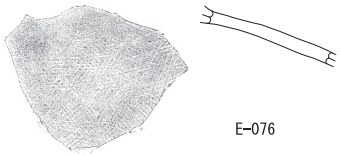

C-046

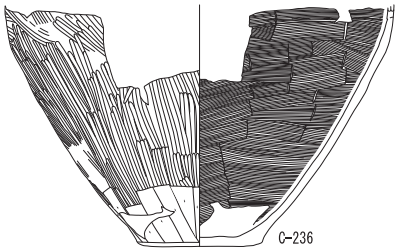
SI108出土遺物

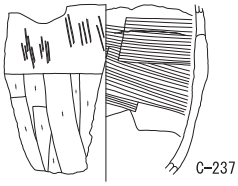

C-239


C-240


C-238


E-076


C-236

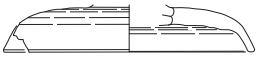

C-237

３Ｂ区３期②

SI115A出土遺物

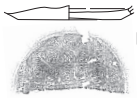
C-266

C-265

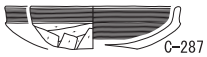

E-081

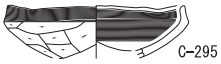
C-267

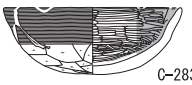
C-268

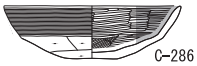

E-080

SI120出土遺物


C-287

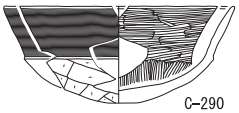

C-295

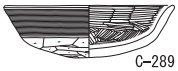

C-283


C-286

C-291

C-294


C-290


C-289

C-288

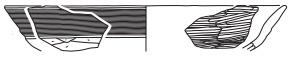
C-296

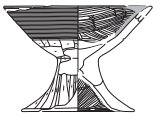
C-291

C-285

C-297

C-284

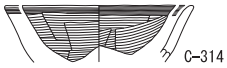

C-293


C-298

C-313

C-312

SI121出土遺物


C-314

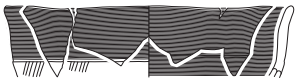
C-315

C-316

第510図　各期竪穴住居跡出土土器(3)

３Ｂ区３期②

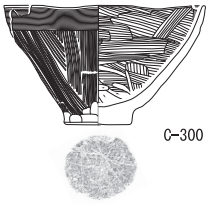
SI115A出土遺物

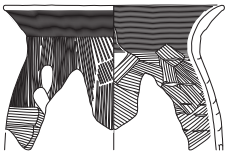

C-269

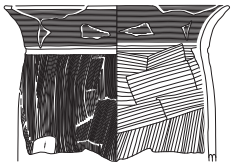
C-270

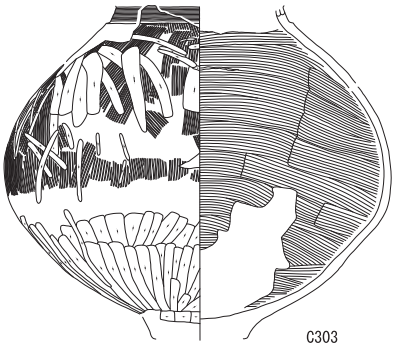
C-271

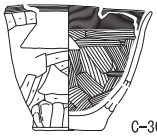
SI120出土遺物

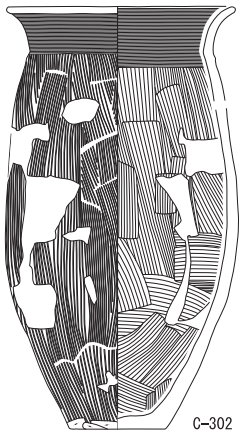

C-300

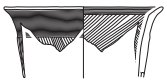

C-305

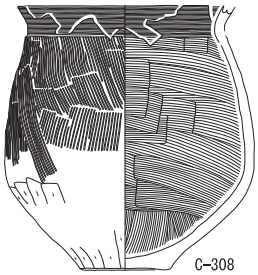

C-301

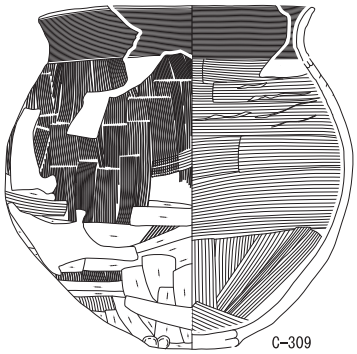

C303


C-306


C-302

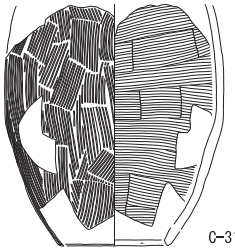

C-307

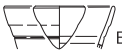

C-308


C-309

C-299

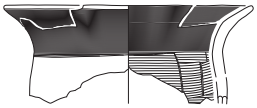
C-304


C-310

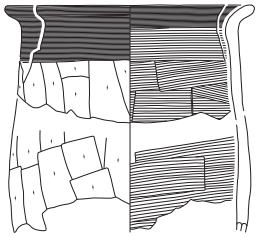

E-083

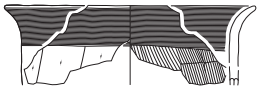
C-311

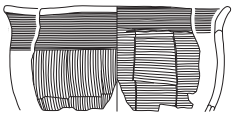
SI121出土遺物


C-317

C-318

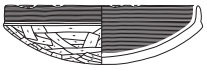

C-319


C-320

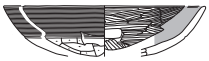

C-321

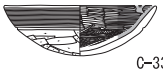
３Ｂ区３期③

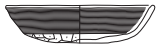
SI124出土遺物

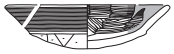

C-334(3B区)

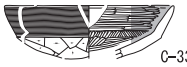
C-336(3B区)


C-335(3B区)


C-337(3B区)

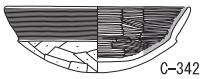

C-340(3B区)


C-339(3B区)


C-338(3B区)

C-341(3B区)

C-343(3B区)


C-342(3B区)

C-344(3B区)

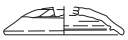
C-349(3B区)

SI125出土遺物

３Ｂ区４期①

SI71A出土遺物

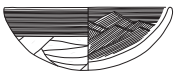
E-029(3B区)

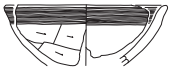

E-030(3B区)

SI75出土遺物

C-048(3B区)

C-047(3B区)

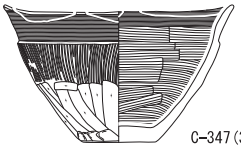

C-316(3A区)

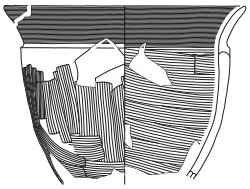

C-049(3B区)

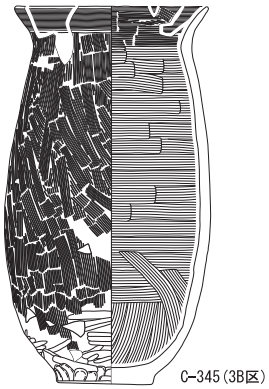
第511図　各期竪穴住居跡出土土器(4)

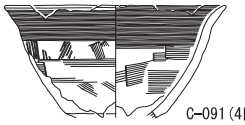
３Ｂ区３期③

SI124出土遺物

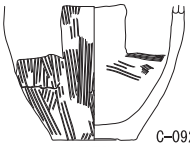

C-347(3B区)

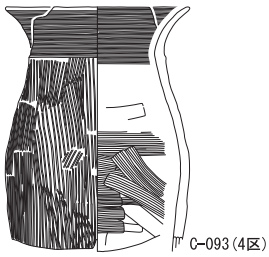

C-346(3B区)

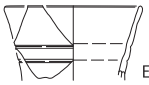

C-345(3B区)

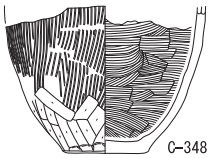

C-091(4区)

C-094(4区)

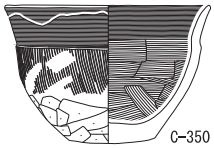

C-092(4区)


C-093(4区)


E-084(3B区)


C-348(3B区)

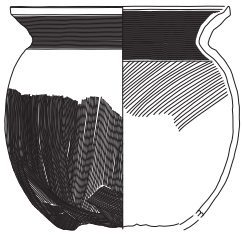
SI125出土遺物

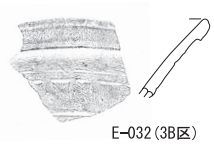

C-350

３Ｂ区４期①

SI71A出土遺物

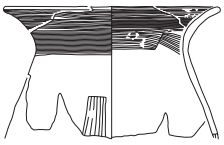
C-295(3A区)

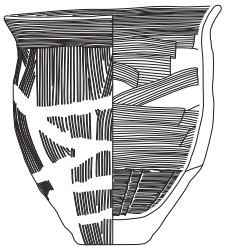

C-044(3B区)

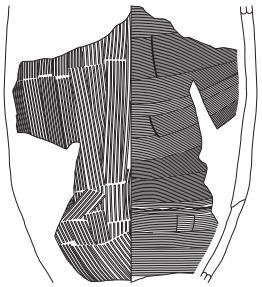

E-032(3B区)

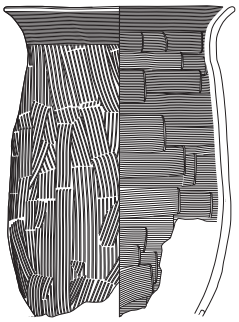
E-031(3B区)

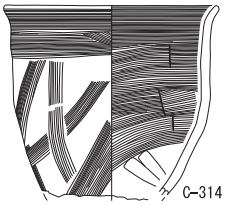
SI75出土遺物


C-050(3B区)


C-313(3A区)


C-311(3A区)


C-315(3A区)


C-314(3A区)

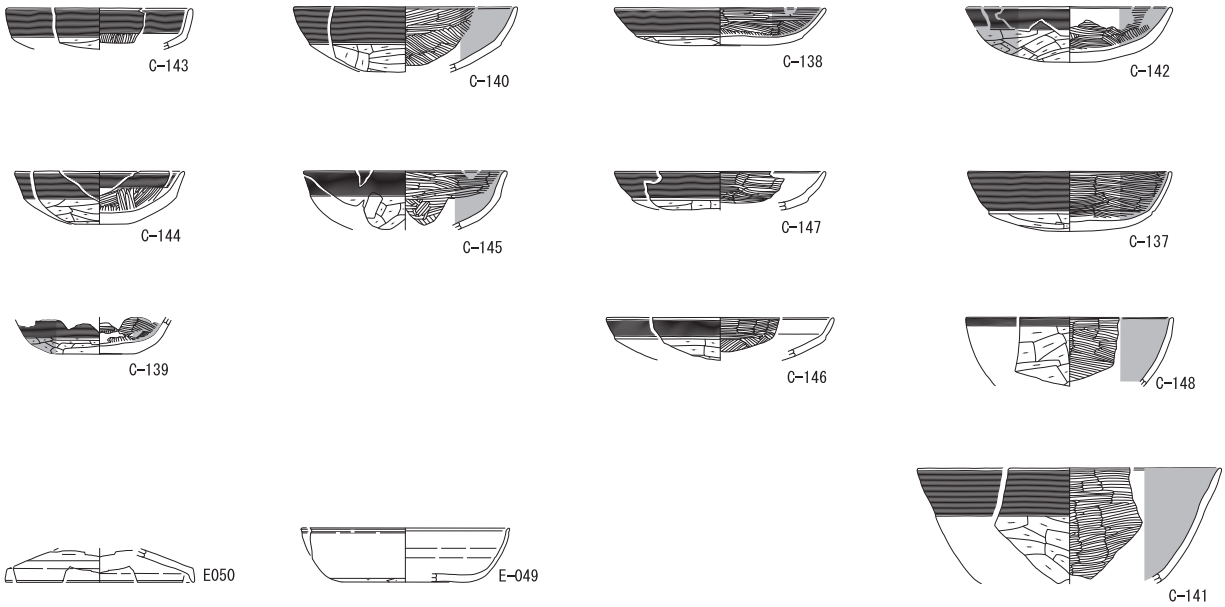
３Ｂ区４期②

SI78出土遺物

SI89出土遺物

SI90B出土遺物

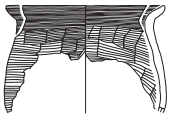
SI93出土遺物



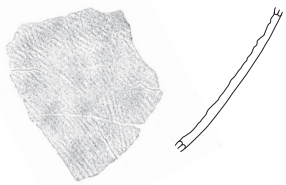
第512図　各期竪穴住居跡出土土器(5)

３Ｂ区４期②

SI78出土遺物

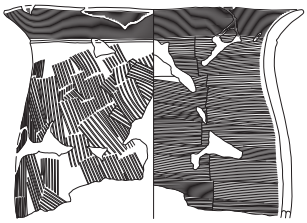

C-052

E-033



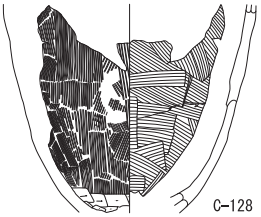
E-034

SI89出土遺物


C-097

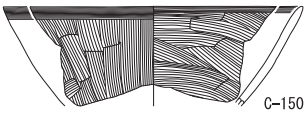
C-098

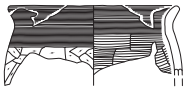
SI90B出土遺物

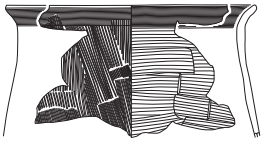

C-128

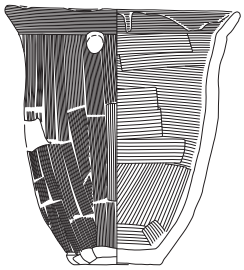
C-129

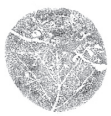
SI93出土遺物

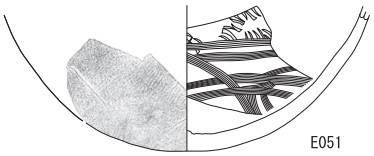

C-150

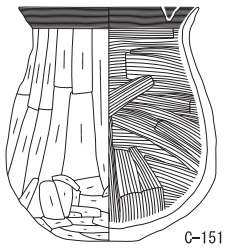

C-153

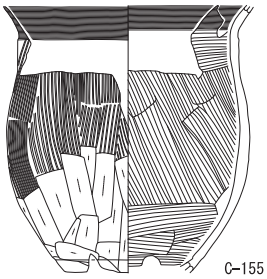

C-154


C-152



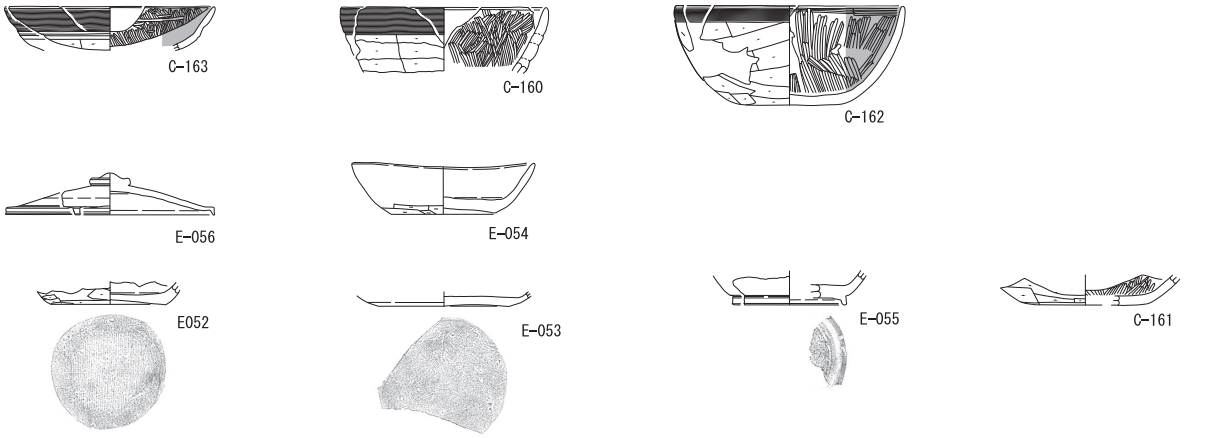

E051


C-151


C-155

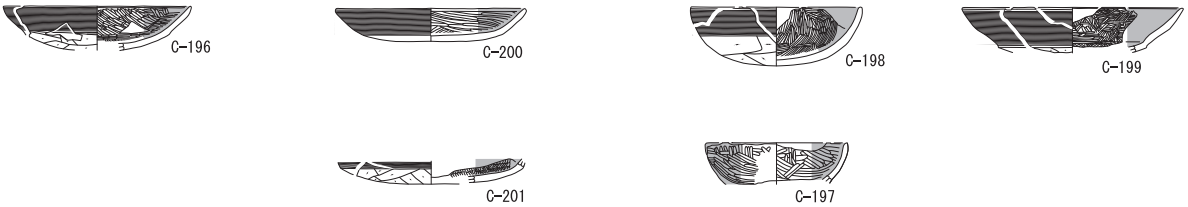
３Ｂ区４期③

SI96出土遺物



SI101出土遺物

SI103A出土遺物



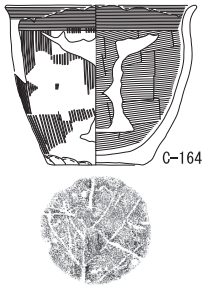
SI103B出土遺物

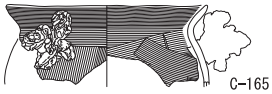
SI107出土遺物

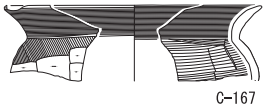
第513図　各期竪穴住居跡出土土器(6)

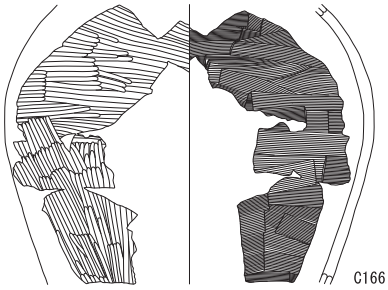
３Ｂ区４期③

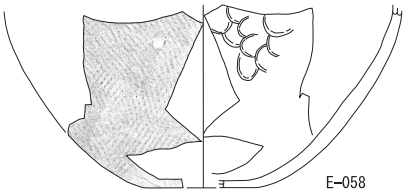
SI96出土遺物



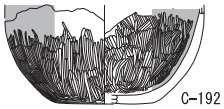


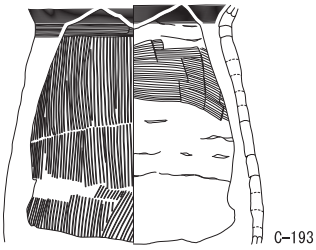


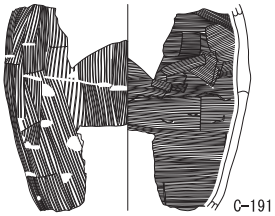




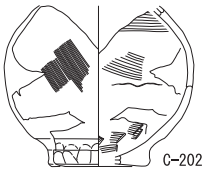
SI101出土遺物

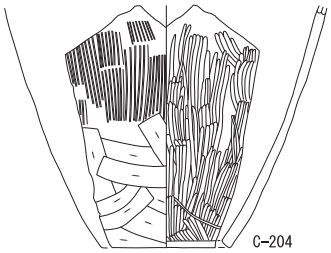






SI103A出土遺物



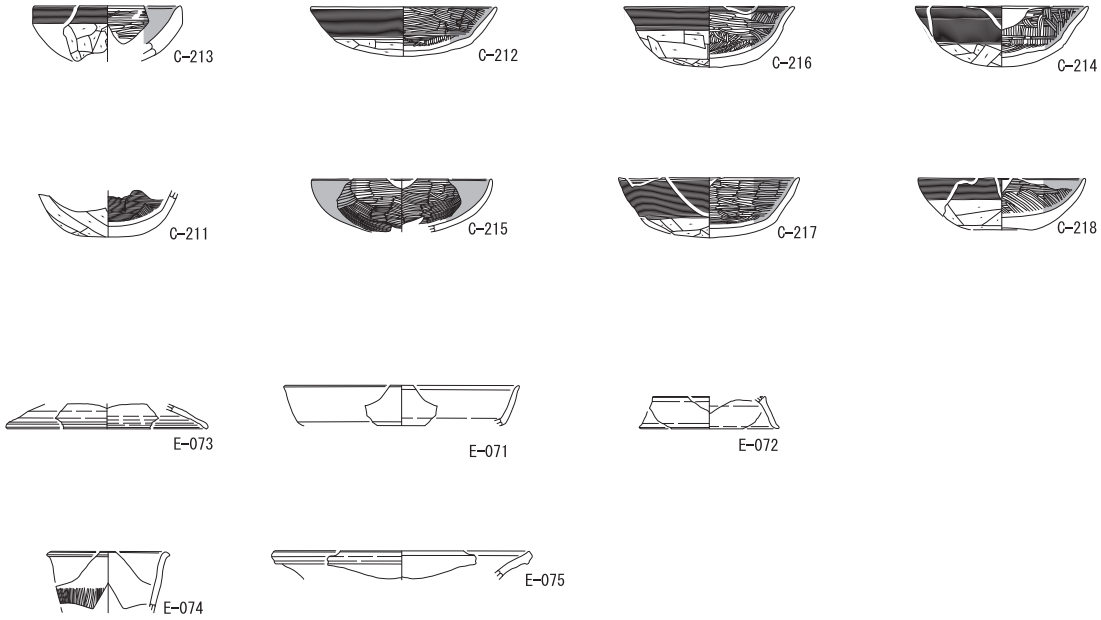


SI103B出土遺物

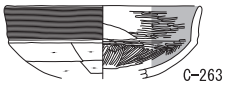
SI107出土遺物

３Ｂ区４期④

SI106出土遺物



SI114出土遺物



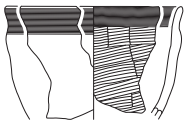
SI117出土遺物

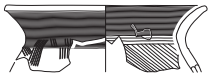
SI118出土遺物

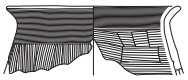
第514図　各期竪穴住居跡出土土器（７）

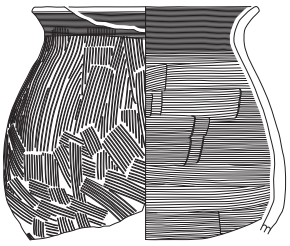
３Ｂ区４期④

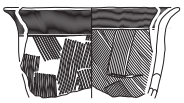
SI106出土遺物


C-220

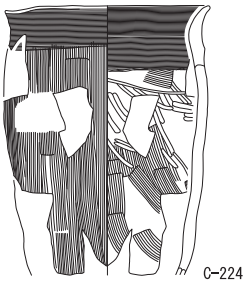

C-226

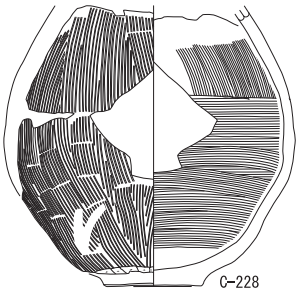

C-225

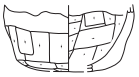

C-227


C-222

C-223

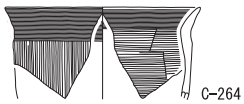

C-224


C-228

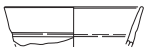

C-219

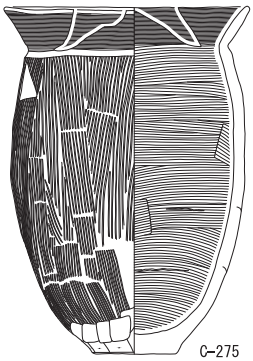
C-221

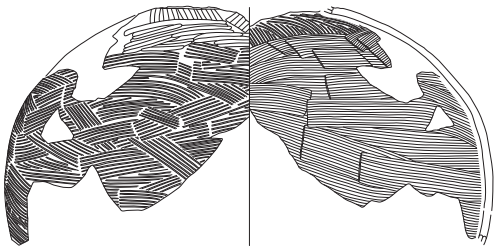
SI114出土遺物


C-264

SI117出土遺物

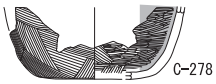

E-082


C-275


C-274

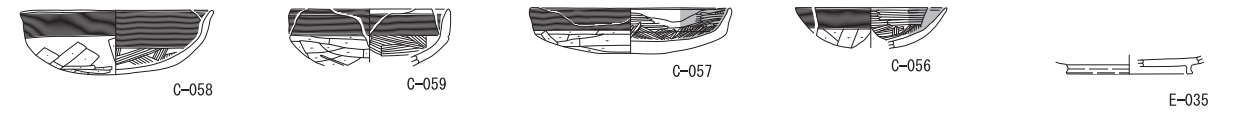
SI118出土遺物

C-279

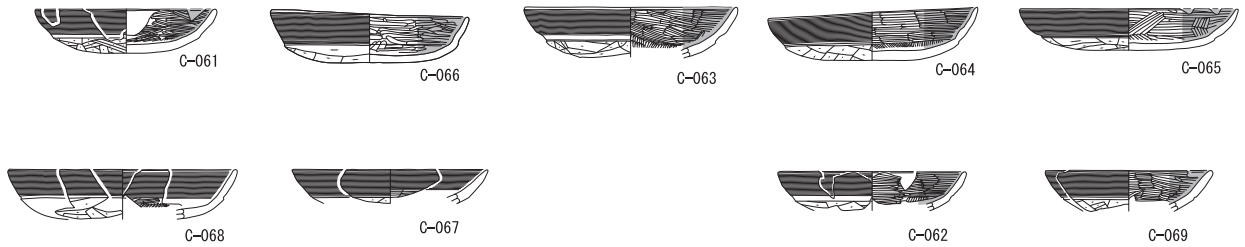

C-278

３Ｂ区５期①

SI80出土遺物

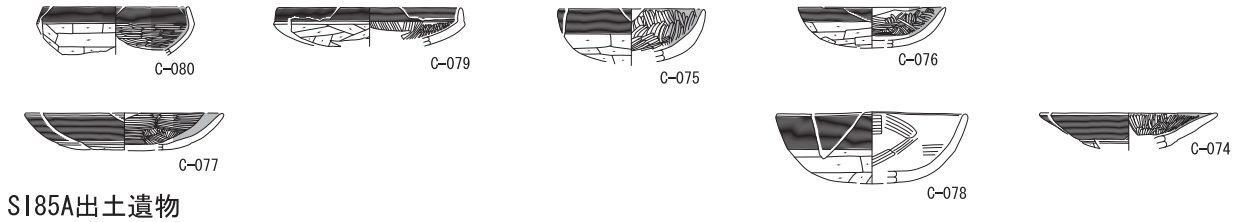


SI82出土遺物

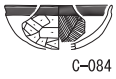


SI83出土遺物

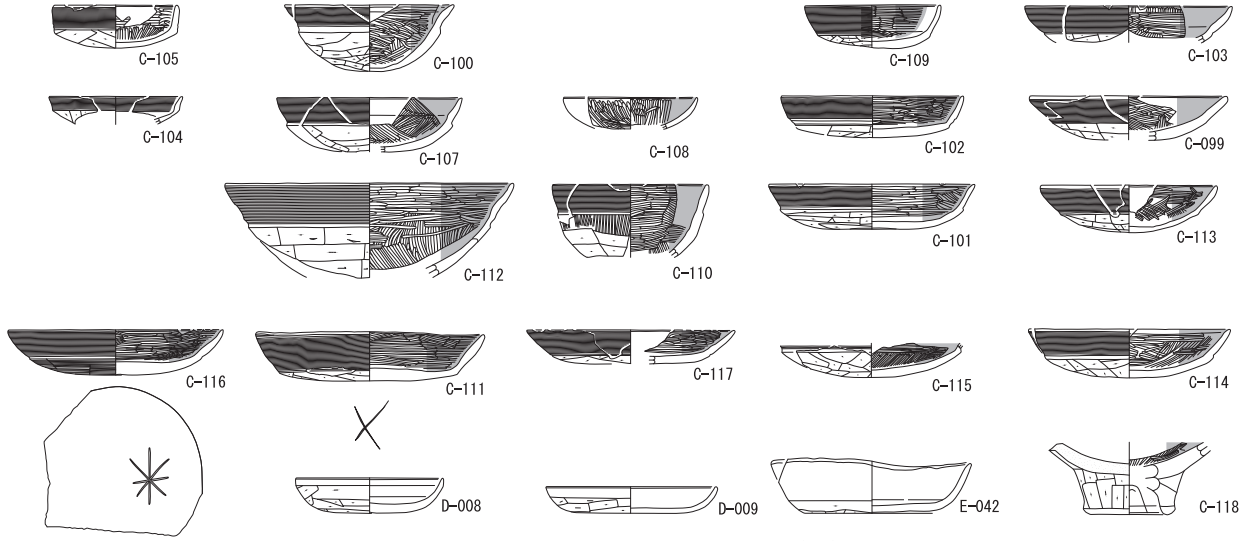
SI84出土遺物



SI85A出土遺物



SI90A出土遺物

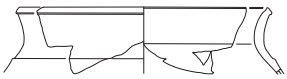


第515図　各期竪穴住居跡出土土器（８）

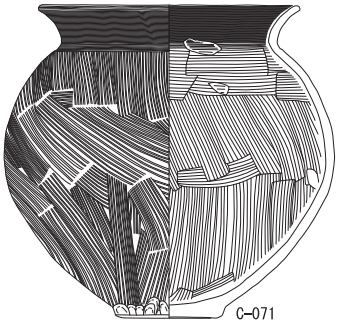
３Ｂ区５期①

SI80出土遺物

C-060


D-003

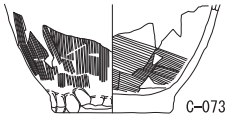
SI82出土遺物


C-071

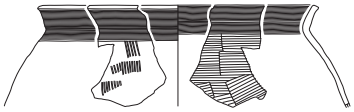
C-072

C-070

SI83出土遺物

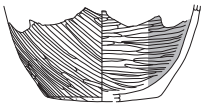

C-073

SI84出土遺物


C-081

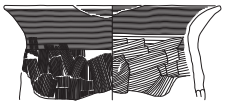
SI85A出土遺物

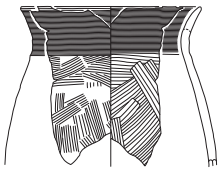
C-086

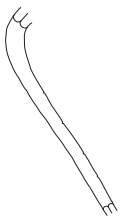

C-085

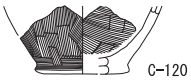
SI90A出土遺物

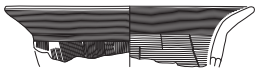
C-119


C-122


C-123


E-043


C-120


C-121

C-125

C-126

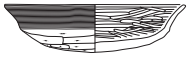
C-127

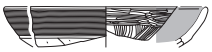
C-124

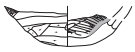
３Ｂ区５期②

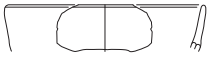
SI91出土遺物

SI92A出土遺物









SI98出土遺物

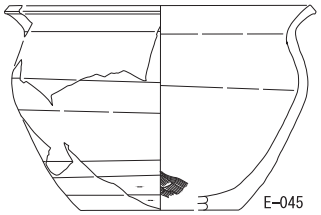
SI102出土遺物

SI119出土遺物

第516図　各期竪穴住居跡出土土器（９）

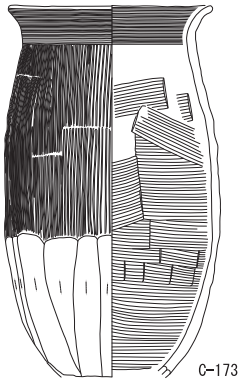
３Ｂ区５期②

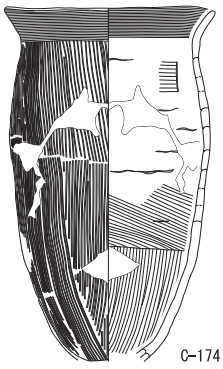
SI91出土遺物



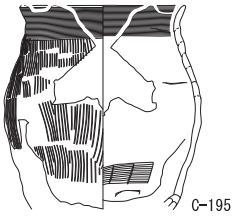
SI92A出土遺物

SI98出土遺物





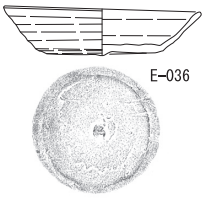
SI102出土遺物



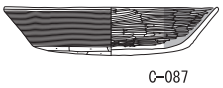
SI119出土遺物

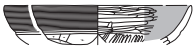
３Ｂ区６期

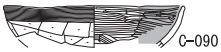
SI81出土遺物



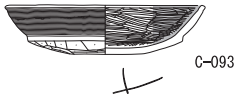
SI87出土遺物

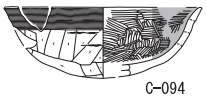


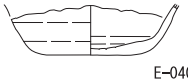




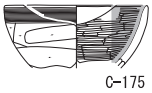
SI88出土遺物



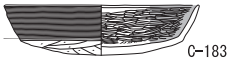


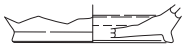


SI99出土遺物

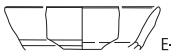


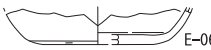
SI100出土遺物

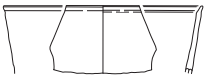




SI104出土遺物





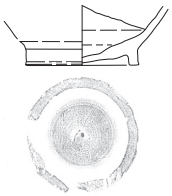


第517図　各期竪穴住居跡出土土器(10)

３Ｂ区６期

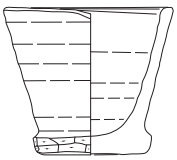
SI81出土遺物

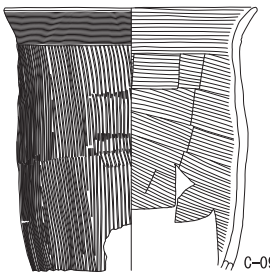
SI87出土遺物

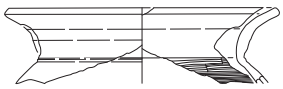

E-038

E-039

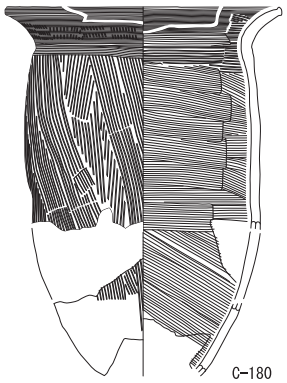
SI88出土遺物

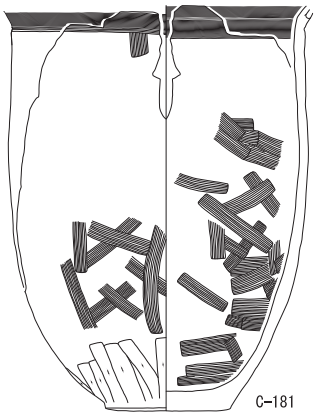

E-041

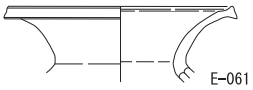

C-095


D-007

SI99出土遺物

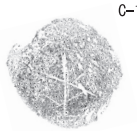

C-180


C-181

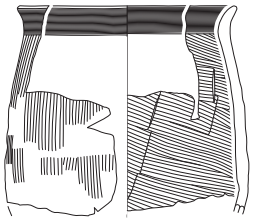

E-061

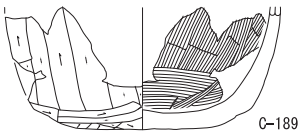
E-060

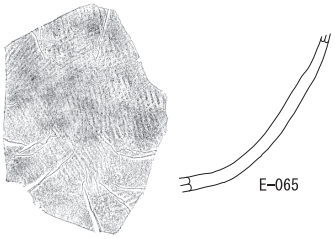
C-182



SI100出土遺物

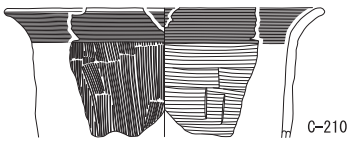

C-190

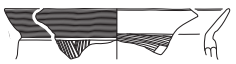

C-189

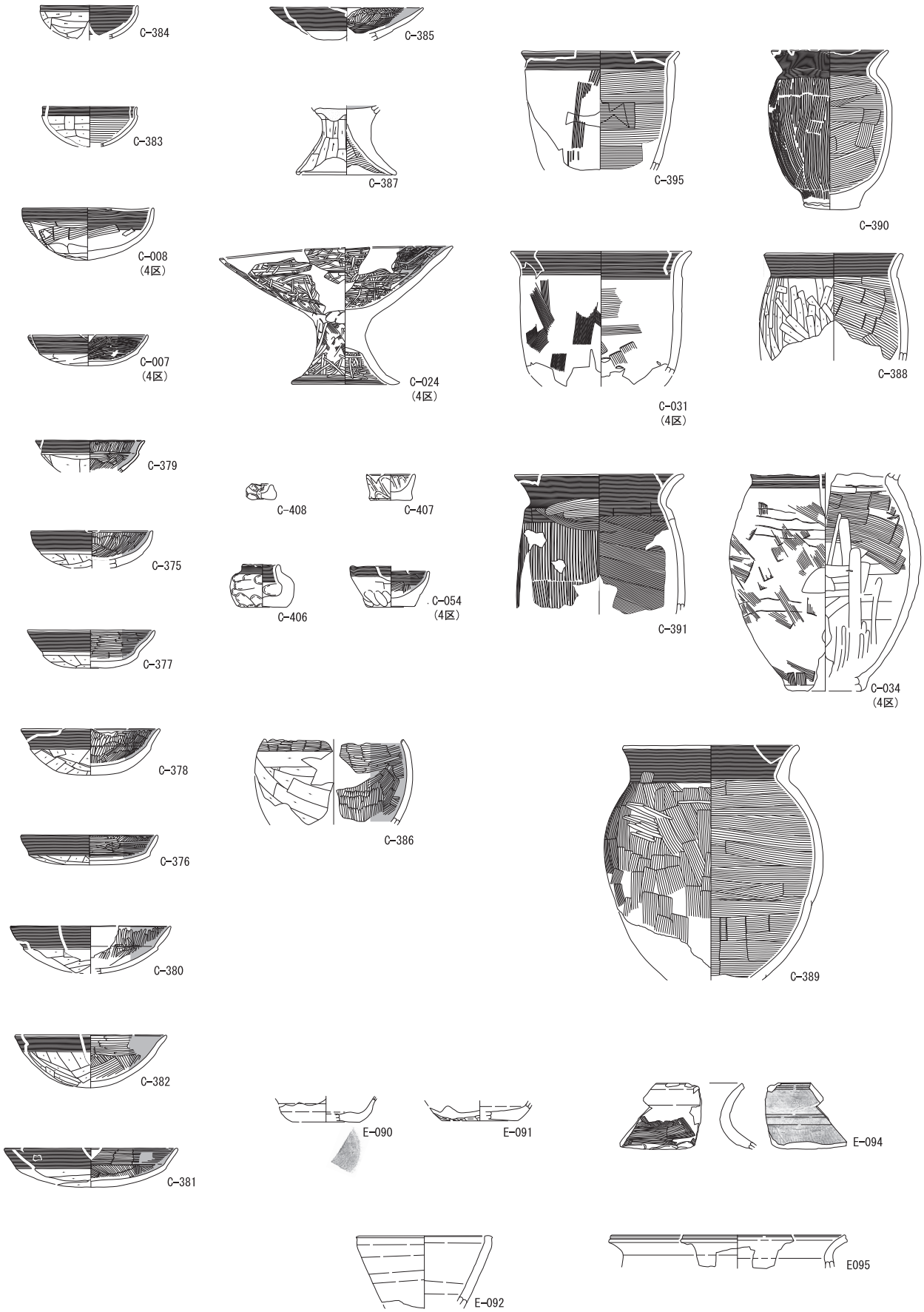

E-065

SI104出土遺物

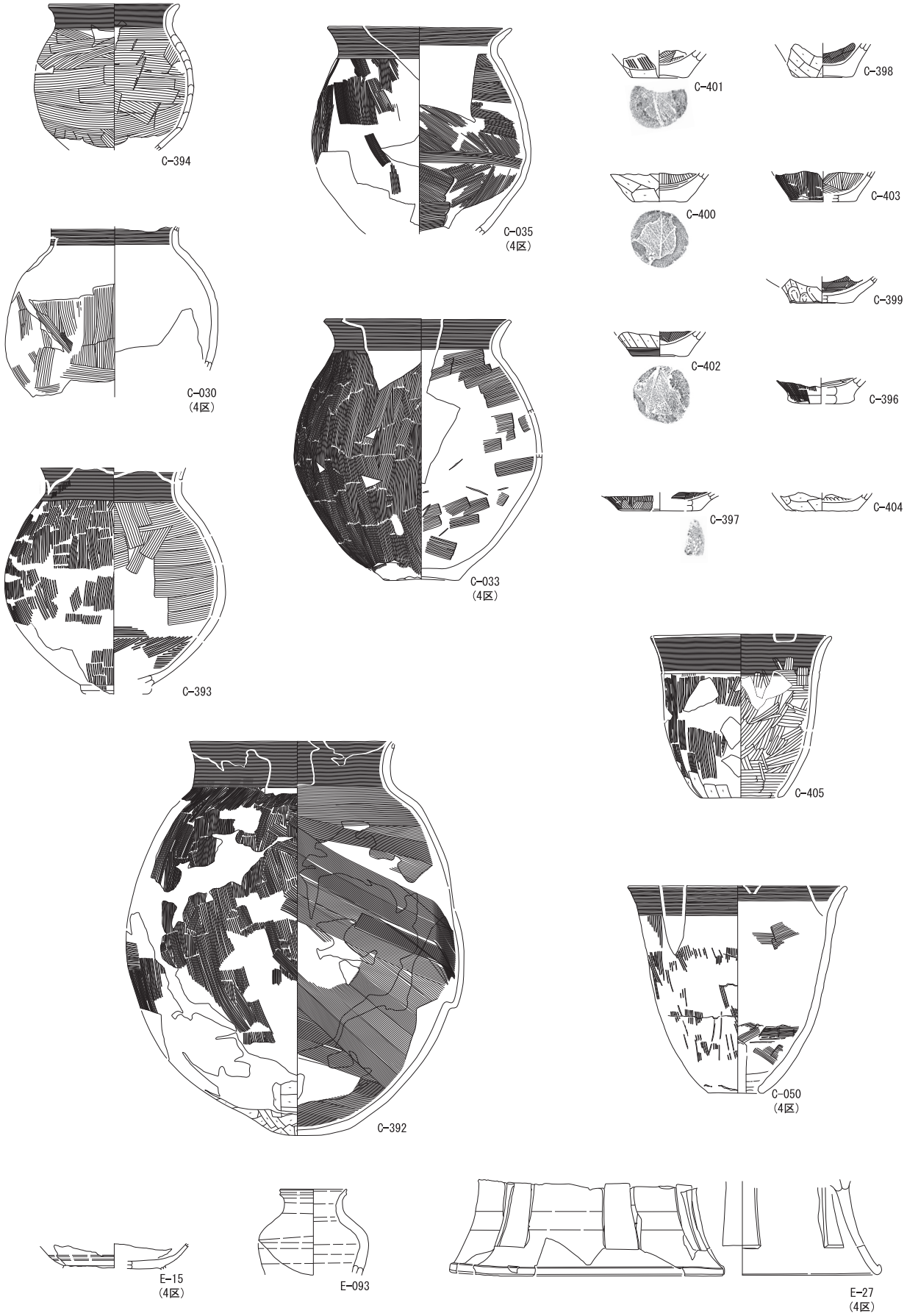
C-208


C-210

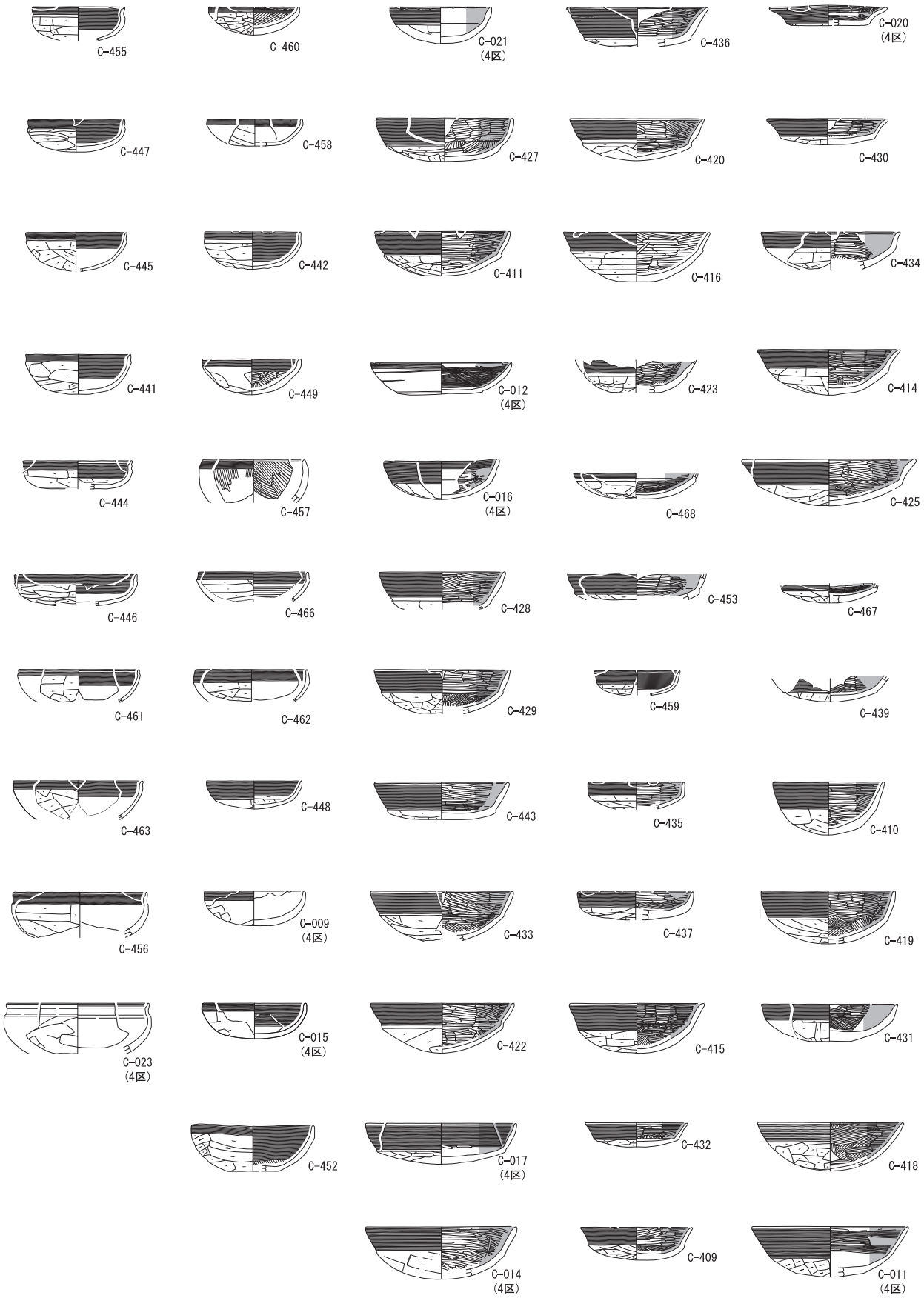

C-209



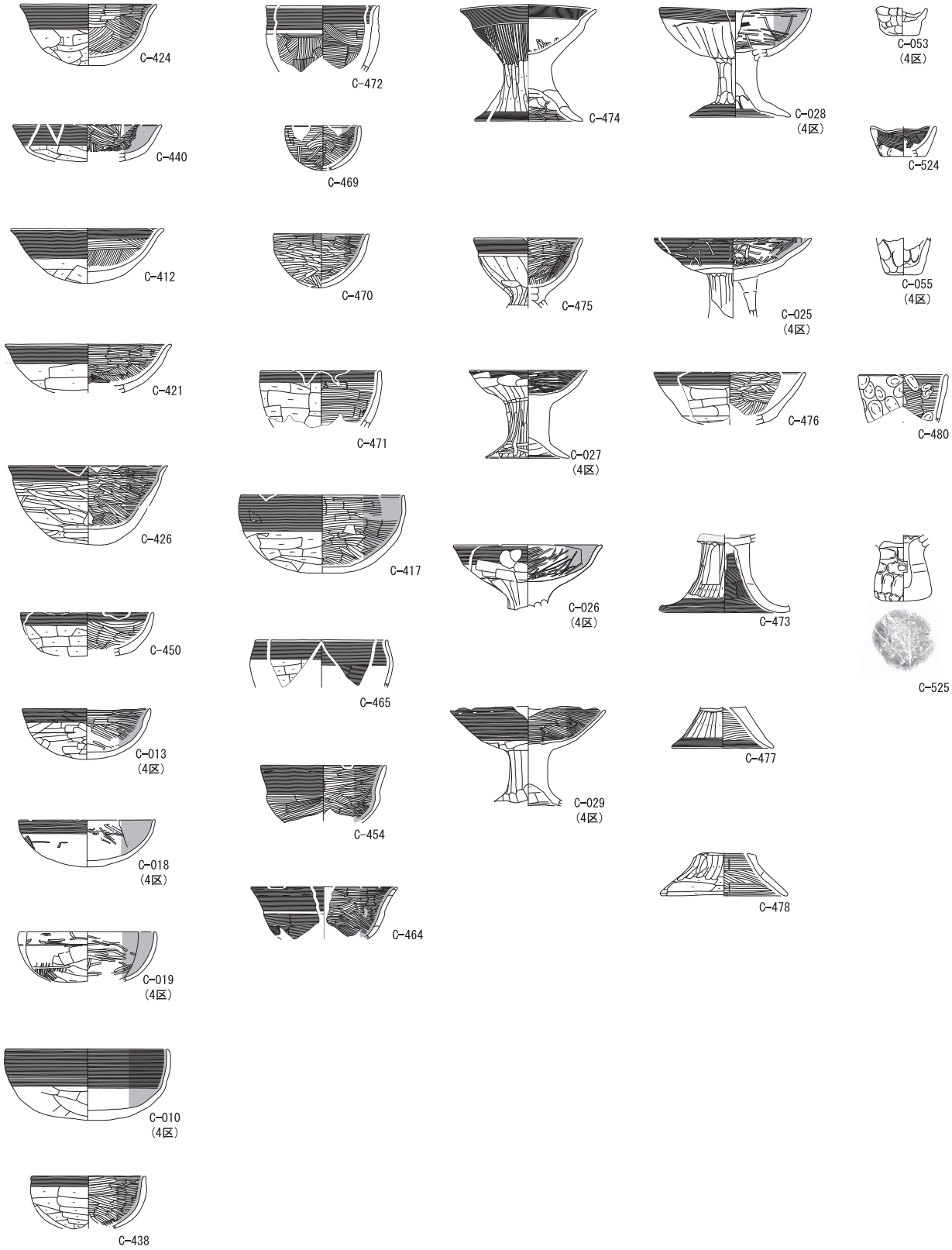
第518図　SD66出土土器集成（上層①）



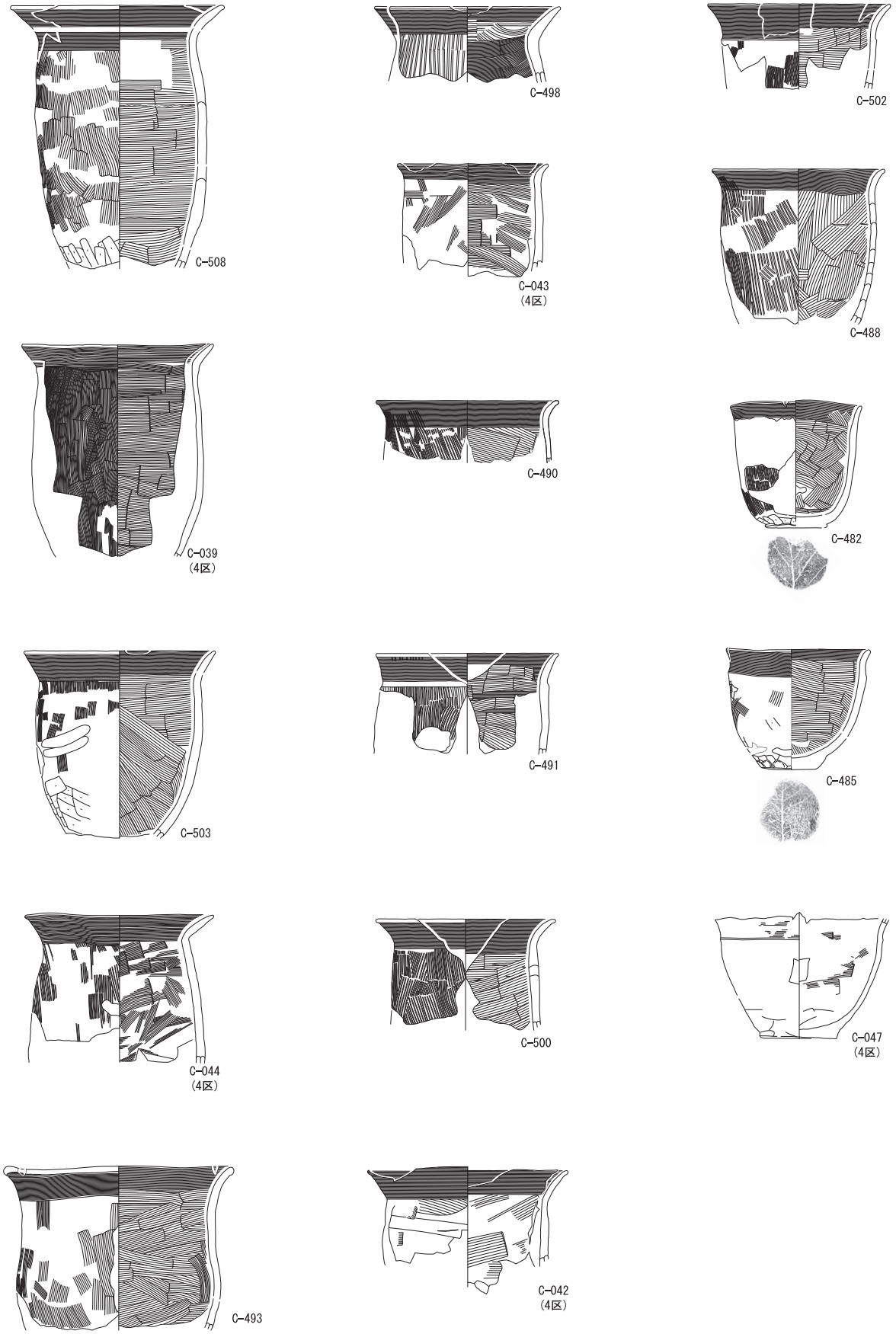
第519図　SD66出土土器集成（上層②）



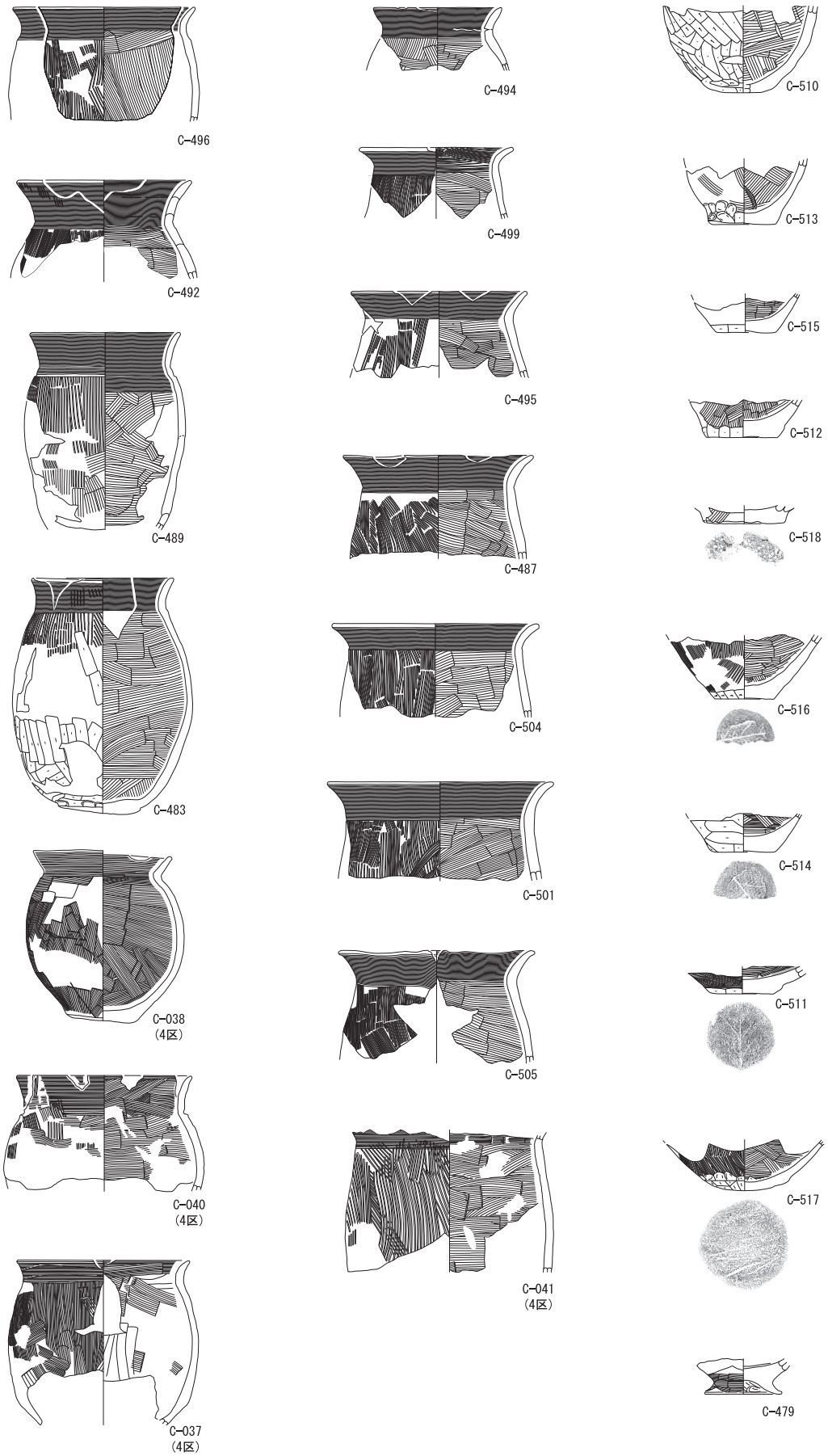
第520図　SD66出土土器集成（4層①）



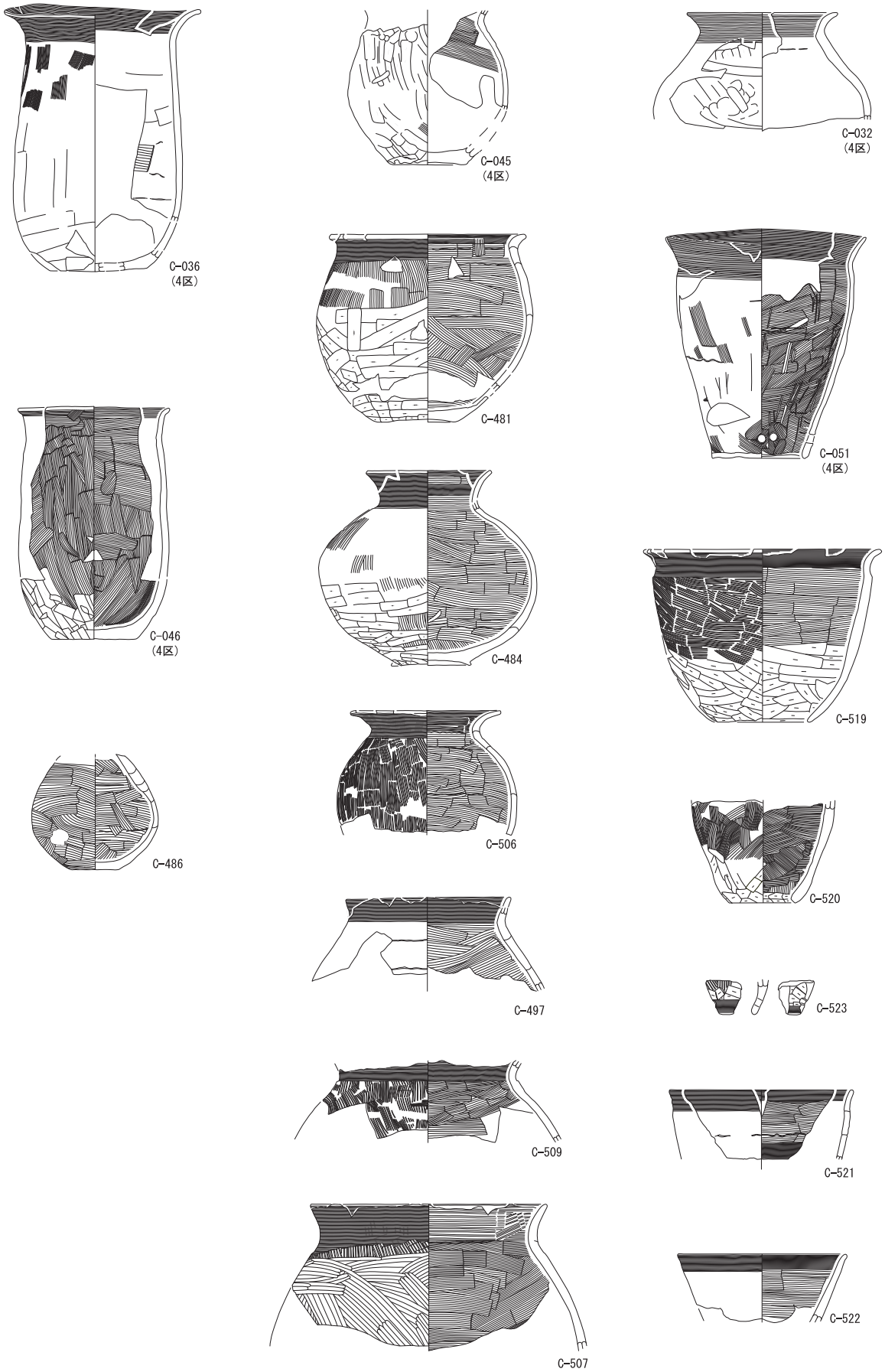
第521図　SD66出土土器集成（4層②）



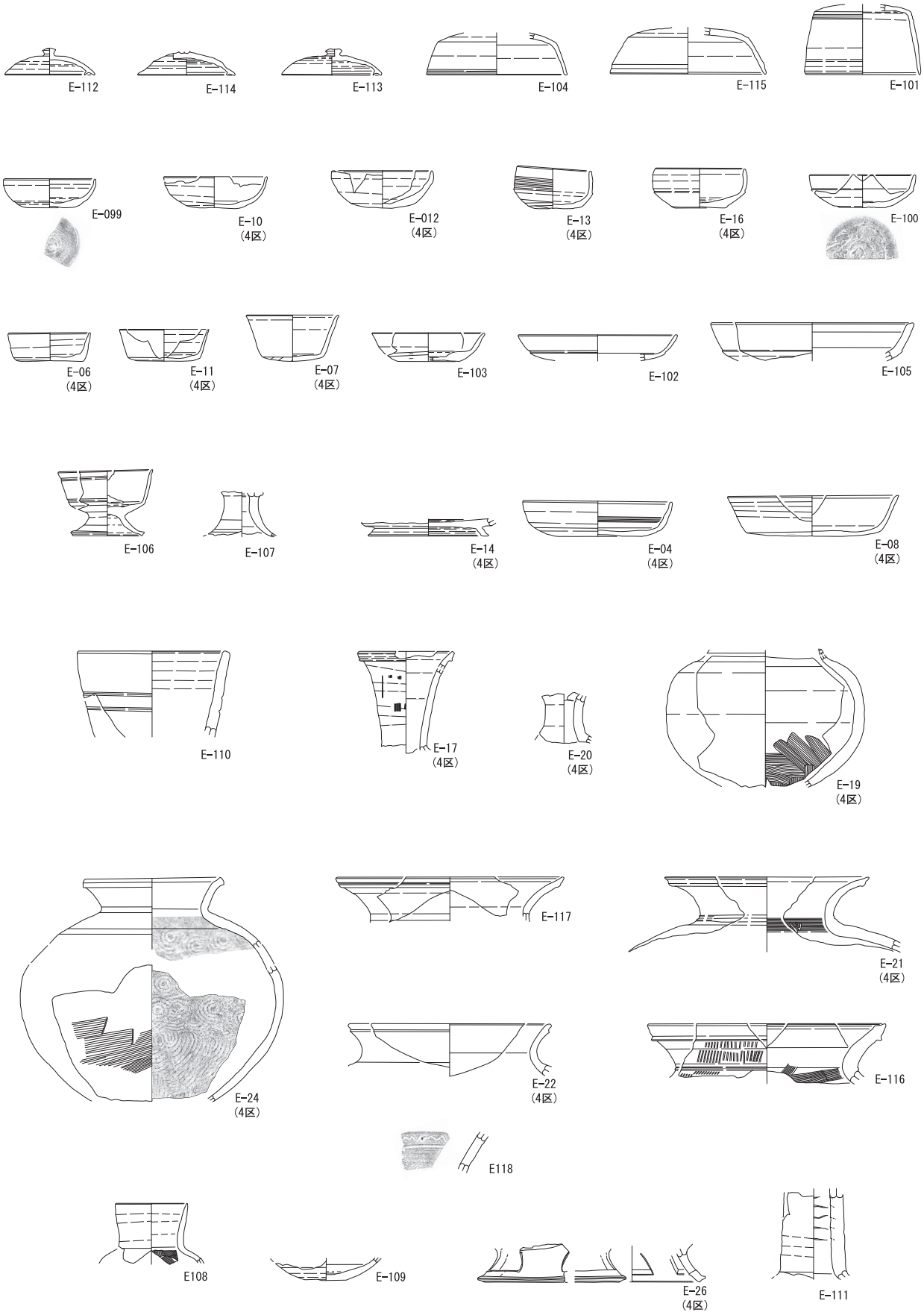
第522図　SD66出土土器集成（4層③）



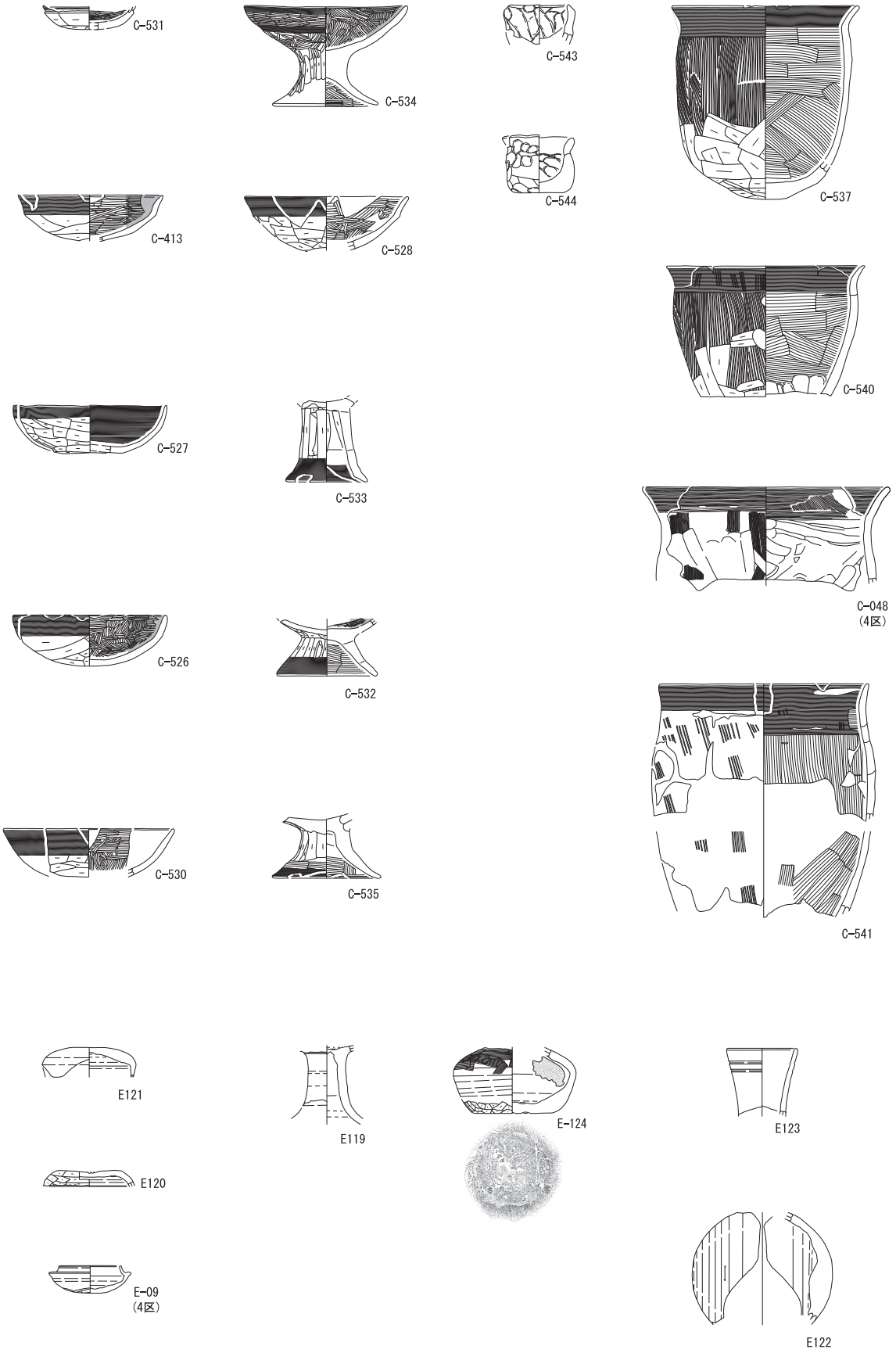
第523図　SD66出土土器集成（4層④）



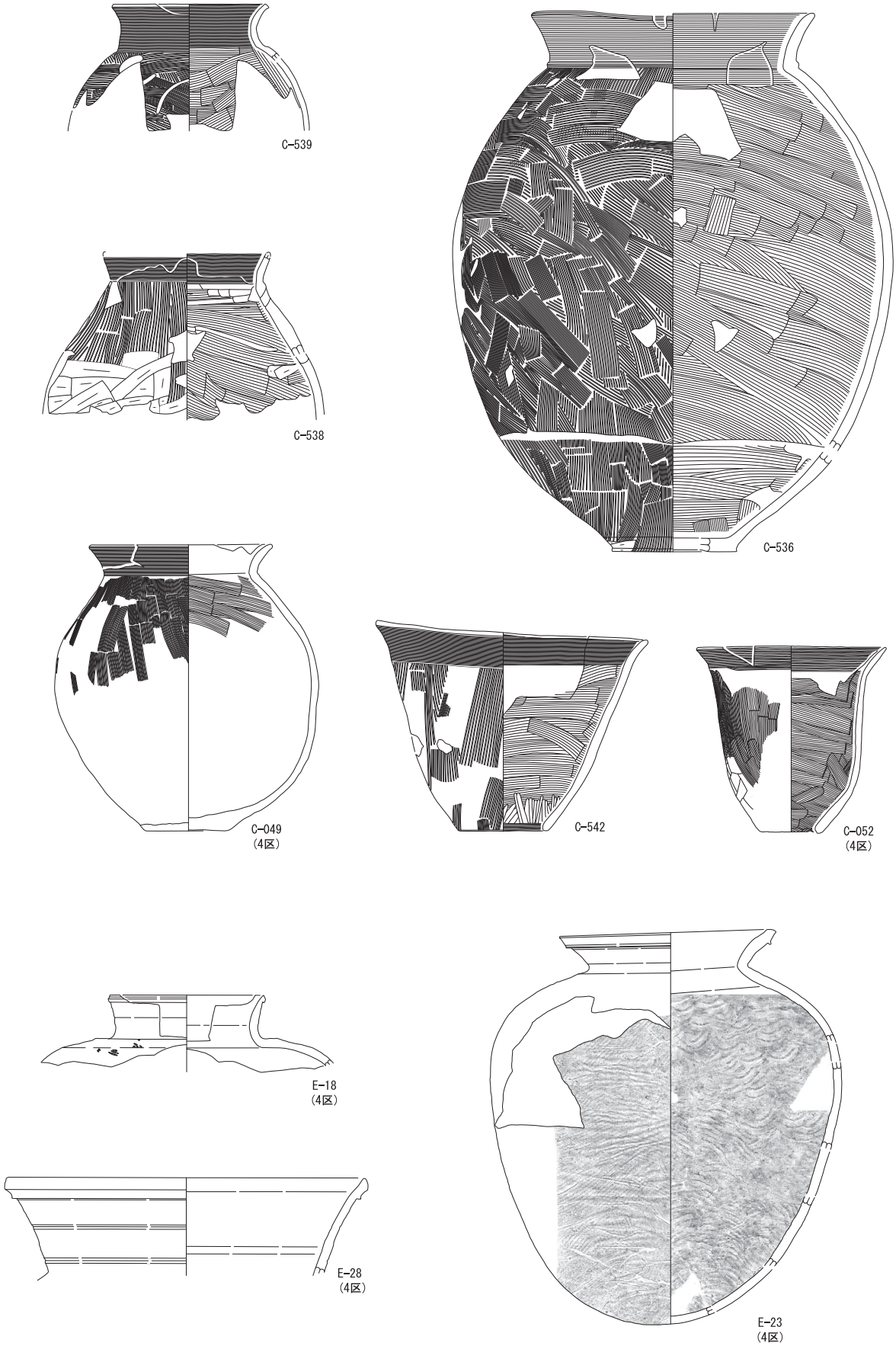
第524図　SD66出土土器集成（4層⑤）



第525図　SD66出土土器集成（4層⑥）



第526図　SD66出土土器集成(下層①)



第527図　SD66出土土器集成（下層②）

２．長町駅東遺跡と西台畑遺跡の集落について

郡山遺跡については、昭和54年以来継続的な調査が実施されてきたが、官衙域の周辺、特に西側の状況については調査例が少なく不明な点が多かった。あすと長町土地区画整理事業の施行に伴い、郡山遺跡の西側に位置する西台畑遺跡･長町駅東遺跡の調査が進められたことにより、郡山遺跡官衙の西方の状況が明らかになってきた。

西台畑遺跡及び長町駅東遺跡の集落の変遷について検討するため、これまでの調査資料の中から、住居跡の位置、重複関係、主軸方位などからいくつかの住居跡を抽出し、資料の検討を行い、時期区分を行った。全ての住居跡の資料の検討によるものではないことから、現時点における見解として理解いただきたい（註１）。

⑴　西台畑遺跡の集落（第528図）

西台畑遺跡内にはこれまでの調査により、総数約140軒の竪穴住居跡が確認されているが、調査地点によって、住居跡の方向や規模･床面のレベル等についてある程度の規格性のあることが見出せる。Ⅱ期官衙外溝西辺の直近であるⅡ区の住居跡は真北方向を基準として造られたものと、真北よりも僅かに東に軸線の振れるものに大別され、重複関係からは東に軸線の振れる住居跡のほうが新しい。密集度も高くなく、住居間の重複関係も２～３時期であり、出土遺物の内容からも短期間の中での変遷が考えられる。しかし、外溝から離れた遺跡内西側のⅤ区ではそうした住居跡の規格性が不明瞭となり、真北よりも西に軸線の振れるものが多くなる。密集度も高くなり、住居間の重複関係が最大で６時期の変遷におよぶ箇所があることが確認された（註２）。

住居跡の時期については、遺跡北西部のⅢ区北側にまとまって見られる鬼高系土師器と在地の土師器が共伴する竪穴住居跡が集落の始まりと考えられる。その後、Ⅱ期官衙段階に住居跡が増加していることから、この時期が集落の最盛期と考えられる。

⑵　長町駅東遺跡の集落（第529図）

長町駅東遺跡はこれまでの調査により、総数約300軒以上の竪穴住居跡が確認されている。南北に長く伸びる調査区の中では、竪穴住居跡の密集度が高い区域も認められ、住居間の重複関係が最大で８時期の変遷におよぶ箇所があることが確認された。

また最近の長町駅東遺跡南側40街区の調査では、北西から南東方向にかけて複数の河川により形成された比高差１．５～２ｍを測る地形の変化があり、これより南西側の低位部分では住居跡が確認されていない。住居跡は高位部分から確認され、住居跡の配置や方向がこの地形に沿っていることと、集落の初期に造られたと考えられる材木列が確認されたことにより、4区の通路状遺構から南に約200ｍ以上離れたこの周辺が集落の南端部となっている可能性がより高くなってきた（註３）。

⑶　長町駅東遺跡集落の変遷について（第530図）

集落の変遷については、官衙以前の段階を、長町駅東遺跡集落の初現で在地の土師器が主体となる段階、鬼高系土師器と在地の土師器が共伴する段階（郡山遺跡プレⅠ－Ａ期）、その後鬼高系土師器の中に関東系土師器の要素が加わった段階（郡山遺跡プレⅠ－Ｂ期）の3区分とした。そして、Ⅰ期官衙期、Ⅱ期官衙期、Ⅱ期官衙後半以降の3区分を加え全体を6期とした。

①　住社～栗囲式期　　在地土師器

長町駅東遺跡に集落が形成されてくるが、西台畑遺跡ではこの時期の住居跡は確認されていない。この時期

の住居跡としては、長町駅東遺跡３Ｂ区SI 79、４Ａ区SI 134・136などがある。これらの住居跡と方向が揃うことから、区画施設のなかで一本柱列SA４・５がこの段階で造られた可能性が考えられる。

② 郡山遺跡プレⅠ－Ａ期　　鬼高系土師器＋在地土師器

関東地方における土師器編年で鬼高式の特徴を有する坏と在地の坏が共伴する段階で、郡山遺跡プレⅠ－Ａ期にあたる。長町駅東遺跡の集落に続き、郡山遺跡北西部に位置する西台畑遺跡Ⅲ区北半部やその北側の郡山遺跡Ⅰ区にもこの時期の集落が形成されてくる。在来の集落に関東地方からの移住という要素が加わり集落が発展してくる。この時期の住居跡としては、長町駅東遺跡３Ｂ区SI109、４Ｂ区SI181・184などがある。

③ 郡山遺跡プレⅠ－Ｂ期　　関東系土師器＋在地土師器

坏の形態が鬼高式の形態を継承しているが、在地の調整技法が見られる段階、郡山遺跡プレⅠ－Ｂ期にあたる。この時期の住居跡としては、長町駅東遺跡３Ｂ区SI120・124、４Ａ区SI147、４Ｃ区SI234などがある。

④ Ⅰ期官衙期

この時期の住居跡としては、長町駅東遺跡３Ｂ区SI 119、４Ａ区SI 138・141・135・137、４Ｃ区SI 221・230などがある。

長町駅東遺跡では、４Ｃ区SI 221住居跡を人為的に埋め戻し整地後に材木列SA１が造られ、区画溝SD 66についてもこの時期に造られたと考えられる。

⑤ Ⅱ期官衙期

この時期の住居跡としては、長町駅東遺跡４Ａ区SI145、４Ｃ区SI232・248・255などがある。西台畑遺跡・長町駅東遺跡ともこの時期の住居跡が主体となる。

⑥ Ⅱ期官衙後半以降

この時期の住居跡としては、長町駅東遺跡３Ｂ区SI 81・87・100・104、４Ａ区SI 146、４Ｃ区SI 212・236・253などがある。

(4) 長町駅東遺跡の集落について

① 在地集落（住社～栗囲式期）として長町駅東遺跡に集落が形成され、その後在来の集落に関東地方からの移住という要素が加わり集落が発展してくる。西台畑遺跡ではこの段階の住居跡は確認されていないことから、集落の開始時期については、長町駅東遺跡が先行する形になっている。

② Ⅱ期官衙の段階、区画溝の東側では、住居跡の数が減少し掘立柱建物跡が造られるようになる。住居跡と同様に、通路状遺構の想定延長ラインに沿って２×２間あるいは２×３間程度の比較的小規模な掘立柱建物跡が造られている。なかには、東西４間×南北２間の東西棟、南北５間×東西２間の南北棟となる掘立柱建物跡などもみられることから、区画溝東側の機能に変化があったことがうかがわれる。

③ Ⅱ期官衙以降の遺構としては、4Ｃ区SI253住居跡に８世紀中葉の遺物があるものの、その後の遺構としては小溝状遺構群が広い範囲に分布している。さらに、区画溝を切るような大溝も構築され、集落という居住域から耕作という生産の場に変化していった状況がみられる。

④ 長町駅東遺跡や西台畑遺跡の集落については、郡山遺跡Ⅱ期官衙が終焉をむかえ多賀城にその機能が移る時期に合わせるように住居跡の数が激減し、８世紀後半以降の住居跡は確認されていない。その後この地に確認される遺構は数百年を経た中世段階のものである。

こうしたことから、集落の成立に関しては一般的な集落として発生し、その後の集落の発展から終末までの状況では、官衙との強い結びつきがあったことが考えられる。

３．長町駅東遺跡の区画施設について（第529・530図）

(1) 区画施設の概要

３Ｂ区・４区の調査から集落の区画施設と考えられる材木列1列、一本柱列4列、大溝跡1条が確認されているが、各施設の方向・規模等については、最も残存状況が良好であった４区における状況について記述する。

【ＳＤ６６溝跡】

調査区をＮ－34～40°－Ｗの方向に延びている。これまでに確認された総長は180ｍを越えている（註４）。上幅は約4ｍ、下幅は約１ｍ、深さ約1.7ｍを測る。断面形は逆台形を呈している。溝の一部を幅4ｍほど土橋状に掘り残した通路状遺構が確認されている。通路状遺構の東側に幅15～18ｍの遺構の空白域が認められることから、この部分が通路あるいは道路として利用されていたことが想定される。この部分での住居跡の配置を見ると、通路状遺構の想定延長ラインに沿っている状況があり、住居間の重複関係もあまり認められない。

通路状遺構の西側では、想定される通路を塞ぐ位置にSI212住居跡があることから、この住居が構築されたⅡ期官衙後半以降の時期には通路状遺構の機能は希薄となり、区画内での通路に連絡する状況にはなっていないことが考えられる。

堆積土の最上層に灰白色火山灰を含むことや、中位の層から官衙並行期の遺物が見られる状況は、Ⅱ期官衙外郭大溝や外溝の状況と類似している。

【ＳＡ１材木列】

SD66溝跡から4.5～7.8ｍほど西に位置し、溝跡に平行して伸びている。上幅20～40㎝の溝状の掘り方と直径10～20㎝ほどの柱痕跡が確認された。柱を抜き取った痕跡は見られない。材木列は通路状遺構の部分では切れており、開口部の長さは約5.5ｍとなるが、通路状遺構の位置からはやや北側にずれている。

確認された総長は北側が約6ｍ、南側では60ｍを越えている。南から伸びてくる材木列の先端部は、SI221住居跡を埋め戻し整地した後に造られており、ほかの部分よりも掘り方が深くなっている。

【ＳＡ２一本柱列】

SD66溝跡の東側約5.3～5.5ｍの位置に掘り方が5基確認された。これらを結んだ方向はＮ－39～40°－Ｗである。掘り方の形状は一様ではないが、大きさはほぼ同じで、長辺50～60㎝、短辺が40～50㎝である。柱間にはややばらつきが見られる。

【ＳＡ３一本柱列】

SD66溝跡の東側約9.2～9.5ｍの位置に掘り方が3基確認された。これらを結んだ方向はＮ－39～40°－Ｗである。掘り方の形状は方形を基本とし、大きさは長辺50～60㎝、短辺が40～60㎝である。柱間にはややばらつきが見られる。

【ＳＡ４一本柱列】

SD66溝跡の西側約2.8～3.0ｍの位置に掘り方が12基確認された。これらを結んだ方向はＮ－39～40°－Ｗである。掘り方の形状は方形を基本とし、大きさは長辺40～60㎝、短辺が40～50㎝である。柱間は2.2ｍを測る。

【ＳＡ５一本柱列】

SD66溝跡の西側約3.2～3.5ｍの位置に掘り方が11基確認された。これらを結んだ方向はＮ－38～39°－Ｗである。掘り方の形状は方形を基本とし、大きさは長辺40～60㎝、短辺が40～50㎝である。柱間は2.2ｍを測るが、多少ばらつきが見られる。

⑵　区画施設の変遷

確認された材木列1列、一本柱列4列、大溝跡1条については、竪穴住居跡や溝跡との重複関係から区画施設の変遷が想定される。SA1材木列とSA4･5一本柱列には、SD63溝跡を挟んでの重複関係から、SA4･5からSA1という変遷がある。

SA4･5一本柱列については、Ⅰ期官衙以前の在地集落が形成された段階の住居跡が同方向をとることから、この時期に造られた可能性が考えられる。SA1材木列は、SI221住居跡を人為的に埋め戻し整地したのちに構築されている。SI221住居跡から出土した遺物から、材木列の構築時期については郡山遺跡Ⅰ期官衙期と考えられ、SD66溝跡についても、材木列の開口部と通路状遺構との関係やSI120（郡山プレ１－Ｂ期）を切っていることからほぼ同時期に構築されたものと考える。これまでの調査においてSD66溝跡を切る遺構は検出されていないが、SA１材木列を切る住居跡としてSI104がある。この住居跡はⅡ期官衙後半以降の住居跡であることから、この時期にはSA１材木列は機能を失っていたと考えられる。

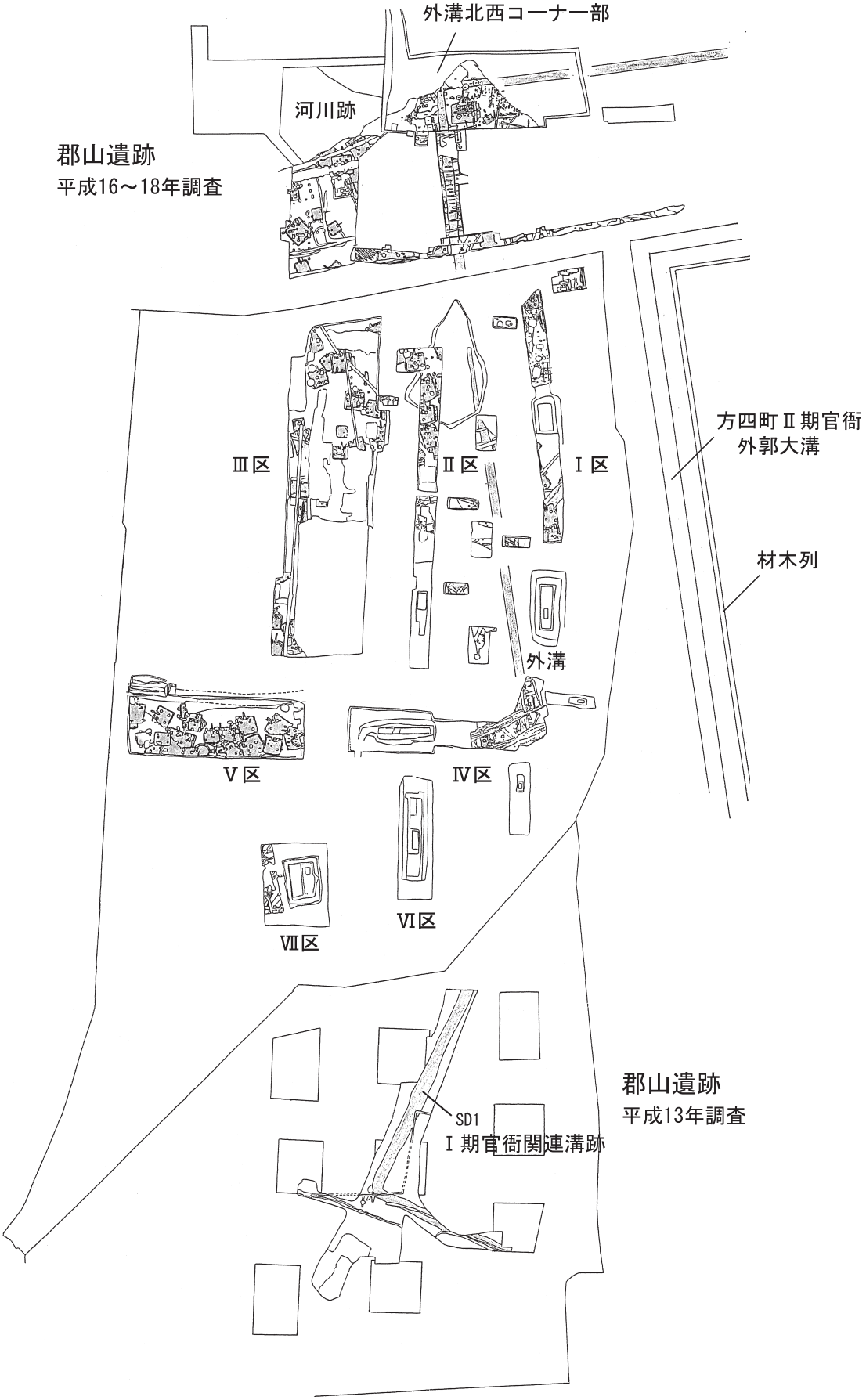
SA2･3一本柱列については、北側４区や東側の平成20年度調査区で確認されなかったことから、集落全体の区画施設とはならないことが考えられる。

註１：平成20年2月に開催された第34回古代城柵官衙遺跡検討会での報告にあたり、西台畑遺跡及び長町駅東遺跡の集落の変遷について検討するため、これまでの調査資料の中から、住居跡の位置、重複関係、主軸方位などからいくつかの住居跡を抽出し、資料の検討を行い、時期区分を作成し報告を行った。今回の報告書ではその内容の一部を改変し掲載している。

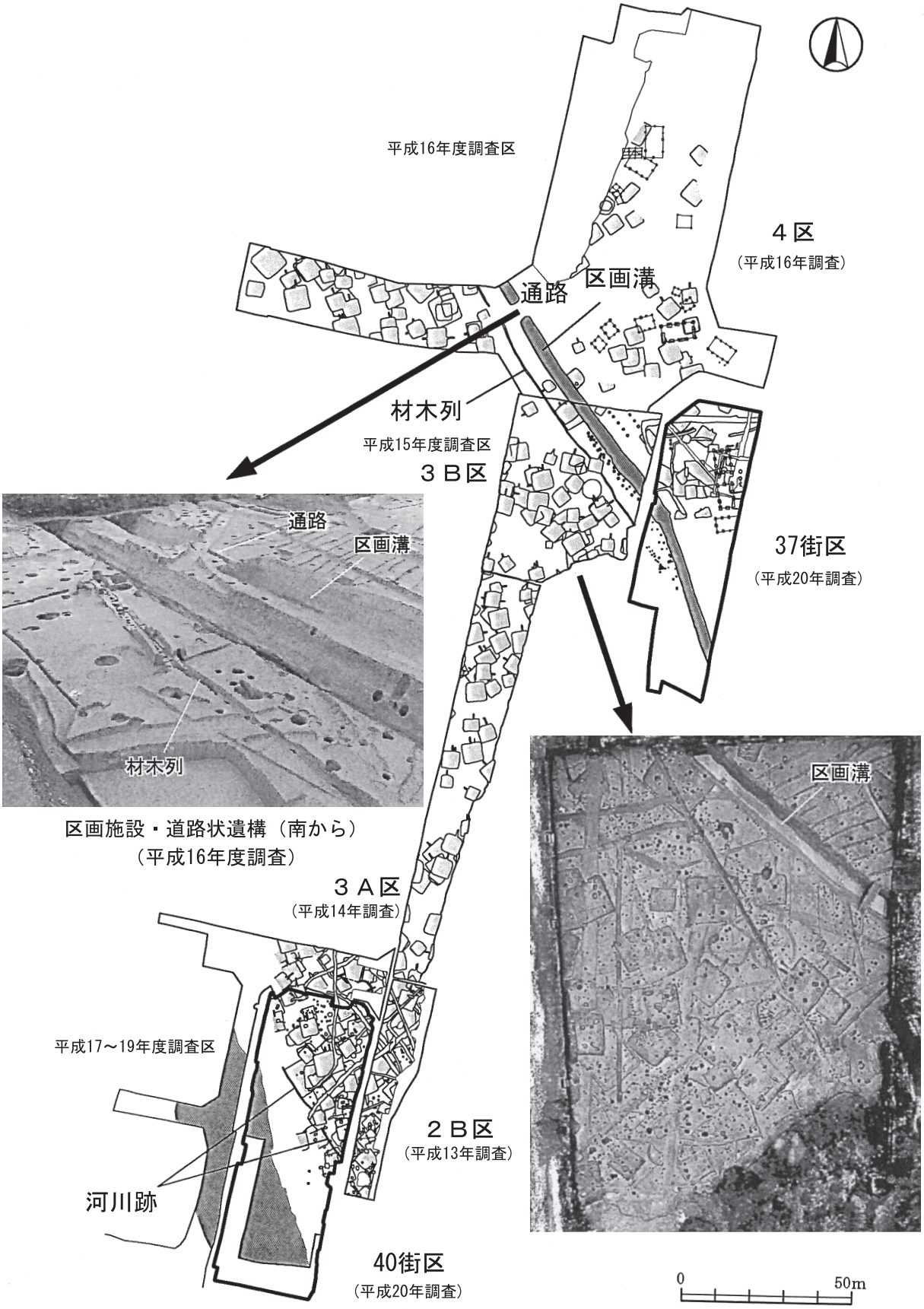
註２：平成19年の17街区調査において、遺構面を切る河川跡とその河川跡の方向に沿うように材木列1列を確認した。全容は未確認であるが、あるいはこれが西台畑遺跡の集落の西側を区画する施設となることも考えられる。

註３：材木列は、平成20年度の調査で確認された。竪穴住居との重複関係などから集落北側の区画施設同様にⅠ期官衙期前後に造られたと考えられる。Ⅱ期官衙期の遺構と考えられる掘立柱建物跡に切られており、造り替えもされていない。

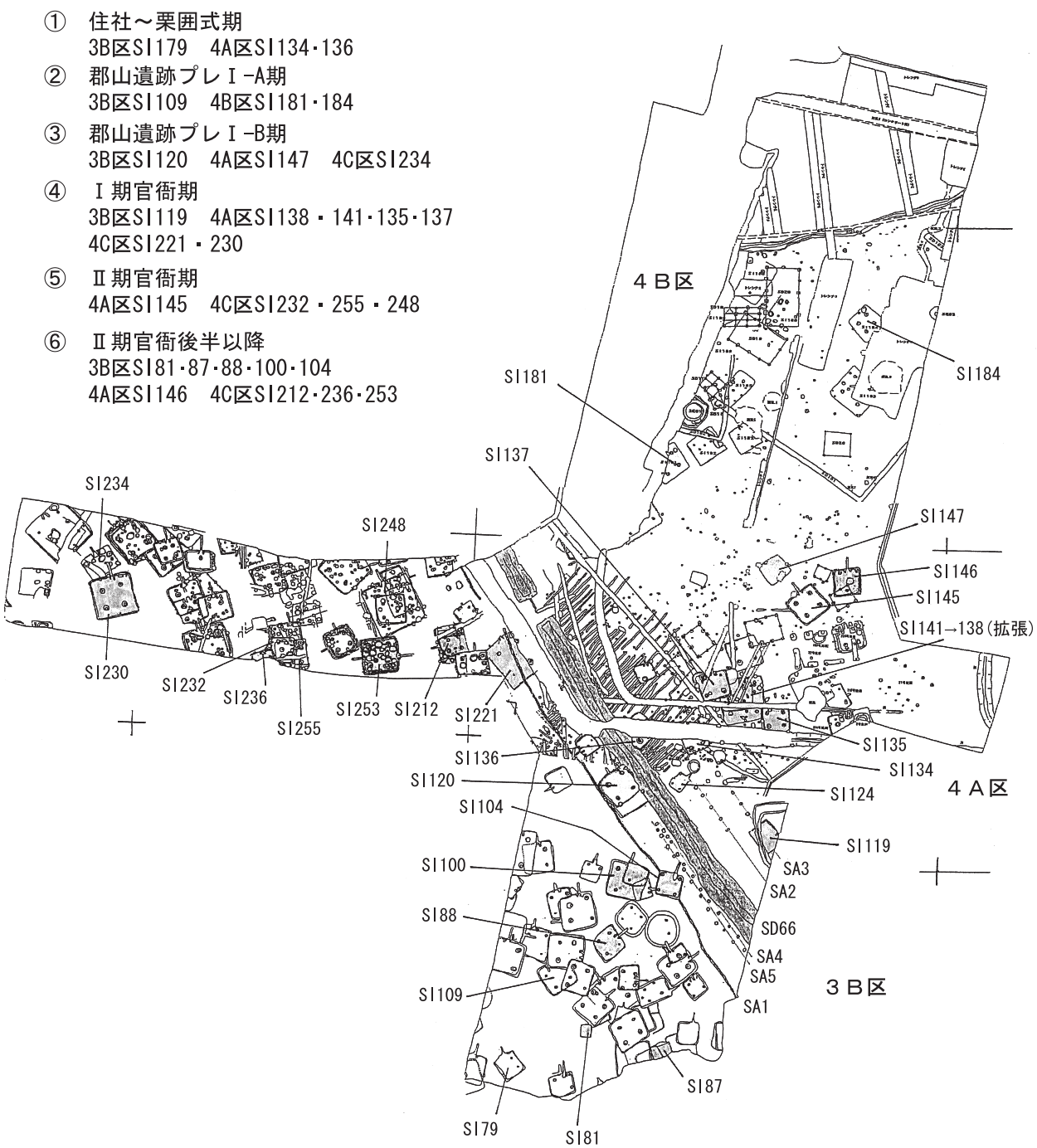
註４：区画溝については、平成19年に実施した遺構確認調査において、通路状遺構から西へ60ｍ以上伸びていることが確認されている。



第528図　西台畑遺跡・郡山遺跡遺構配置図



第529図　長町駅東遺跡遺構配置図



第530図　長町駅東遺跡区画施設検出状況

4．弥生時代の遺構について（第531図）

今回の調査により、竪穴住居跡1軒の他に住居跡の可能性がある性格不明遺構３基、土器埋設遺構４基を検出した。平成16年に行った北側に隣接する４区の調査では、水田跡や土器埋設遺構が検出されたが、これらの遺構については、確認層位や分布状況などからいずれも中期桝形囲式期のものであり、同時期に存在した可能性が高いことが考えられる。遺構配置をみると、４区東側の低地部分に水田跡が拡がっており、水田跡から西方へ約30ｍ離れた微高地上である４Ｃ区から３Ｂ区北西部にかけて、後背湿地にそった墓域が形成され、その東側３Ｂ区に居住域が拡がっていることが考えられる（第531図）。

今回確認された竪穴住居跡は、桝形囲式期の竪穴住居跡としては宮城県内では初めての発見であり、水田跡（生

産域)、土器埋設遺構・土壙墓（墓域）に併せて竪穴住居跡（居住域）が確認されたことにより、弥生時代中期における仙台平野の集落のあり方が見えてきたといえる。ここでは、竪穴住居跡・土器埋設遺構・水田跡とその関係について若干の検討を行いたい。

⑴　竪穴住居跡（居住域）

仙台市内での弥生時代の竪穴住居跡としては、これまで後期天王山式期のもの５軒が、長町駅東遺跡北西の八木山丘陵上から南斜面にかけて位置する八木山緑町遺跡・土手内遺跡・原遺跡から発見されている。

土手内遺跡は標高70ｍ前後の丘陵南斜面の富沢低地を望む位置にあり、竪穴住居跡が1軒確認され、後期天王山式から踏瀬大山式期とされている。平面形は長軸3.67ｍ、短軸2.8ｍの楕円形を呈し、３本の柱穴（4本柱の可能性あり）と中央部に地床炉とみられる焼け面がある。原遺跡は土手内遺跡の南西にあり、丘陵裾部の標高35ｍ前後の平坦面に位置し、竪穴住居跡が３軒確認されている。平面形は楕円形のもの２軒、隅丸長方形のもの１軒がある。楕円形の住居跡の規模は、長軸3.6 ～ 3.9ｍ、短軸2.9ｍを測る。隅丸長方形の住居跡は、長軸4.25ｍ、短軸3.3ｍを測る。八木山緑町遺跡は標高80ｍ前後の丘陵尾根上にあり、竪穴住居跡が1軒確認されている。平面形は長軸3.98ｍ、短軸3.24ｍの楕円形を呈し、床面東側に地床炉とみられる焼け面が２箇所ある。柱穴は、径15 ～ 30cmの壁柱穴と見られる。住居跡の東側約10ｍ離れたところから土壙墓12基が確認されているが、出土遺物が無いことから住居跡との時期的な関連は不明である。

これまで調査された住居跡の平面形をみると、原遺跡の1軒以外は楕円形を呈しており、規模は長軸3.6 ～ 4.25ｍ、短軸2.8 ～ 3.3ｍを測る。炉跡は床面が僅かに窪んで焼土が堆積している地床炉である点などの特徴がある。いずれの住居も床面が平らでなく、周溝がなく壁との境が不明瞭で、あまりしっかりとした造りにはなっていない。

今回確認された竪穴住居跡は時期は異なるが、平面形は楕円形を呈し、長軸６ｍ、短軸４ｍとやや規模は大きくなるが、地床炉をもつことや、床面の状況などは後期の住居跡と同じ特徴を持っている。弥生時代の竪穴住居跡に関しては、調査例も少ないことから、今後の調査による資料の蓄積により検討していくことが必要である。

⑵　土器埋設遺構（墓域）

これまで長町駅東遺跡において土器埋設遺構が確認されているのは、遺跡内でも北側の３Ｂ区及び４Ｃ区からで、土器埋設遺構は合わせて６基あり、４Ｃ区からは土壙墓２基も検出されている。標高が下がる南側の２Ｂ区や３Ａ区では遺物包含層や土坑などはあるものの、土器埋設遺構は２Ｂ区から１基しか確認されていない。

土器埋設遺構の配列をみると、４Ｃ区では概ね東西方向に並ぶのに対して、３Ｂ区では南北方向に並んでいる。限られた範囲内での調査であり、自然地形や東側に作られた水田域との関係も考慮しなければならないが、この配列の違いに何らかの規則性があることが想定される。

長町駅東遺跡の北東に位置する西台畑遺跡からは、昭和32年の調査で、土壙墓１基と６点の大型壺を用いた土器棺とその副葬土器が出土しているが、あすと長町事業に伴う調査でも何基かの土器埋設遺構が確認されている。

長町駅東遺跡から出土した土器は弥生時代中期の桝形囲式のもので、西台畑遺跡から出土した土器もほぼ同時期のものである。仙台平野における弥生時代中期中葉の墓制は、土器棺墓と土壙墓の組み合わせを基本にしていると考えられており（佐藤1989）、仙台市内ではほかに、南小泉遺跡・中在家南遺跡などに同様の調査例がある。

また４区SK214からは、碧玉製の管玉11点が出土しているが、仙台平野でこの時期の土壙墓内からの出土例としては、中在家南遺跡36号土壙墓についで２例目となる。36号土壙墓は、平面形は隅丸長方形を呈し、残存部の全長233cm、幅67 ～ 77cmで、扁平片刃石斧、鑿型石斧とともに管玉13点が出土している。中在家南遺跡から発見されている5基の土壙墓の平面形は、長楕円形または隅丸長方形のものであり、不整形プランを呈し比較的小規

模な長町駅東のものとは規模や形態に違いがみられることから、被葬者が成人あるいは小児といった違いによる可能性も考えられる。

そのほかの出土例としては、長町駅東遺跡の北西丘陵上に位置する八木山緑町遺跡から土壙墓12基が発見され、そのうち2基の土壙墓から碧玉製の管玉がそれぞれ６点ずつ出土している。土壙墓の平面形は、１基が楕円形を呈する以外は隅丸長方形のもので、規模的には全長２ｍ以上となる２基以外は1.3～1.8ｍの中に収まる。土壙からの出土遺物が無いことから、弥生時代のなかでどの時期に位置付けられるかは明らかになっていない。

⑶　水田跡（生産域）

4区調査時に、弥生時代の遺物包含層と遺構面の調査を行ったところ、検出された遺構面は東側が20～30cm程低くなっており、この低地全体が水田跡であることが確認された。自然科学分析ではイネのプラントオパールは検出されなかったが、当時の植生としては湿地かそれに近い環境であったと推定されており、検出された遺構の状況や石庖丁や大型板状石器といった出土遺物の存在からも水田耕作が行われた可能性は高いと考えられる。

畦畔状の高まりはⅣ～Ⅵ層にかけて4面検出され、各面を通じてほぼ同位置で検出されているが、下層ほど検出される畦畔が明瞭になる傾向が認められた。細分されたⅣ層中で検出された畦畔状の高まり2面は、層厚も薄く、無遺物層との互層状の堆積であり、水田土壌に見られる層の乱れも観察されなかったことから、Ⅴ層水田跡の畦畔の上位に観察される擬似畦畔Ａと判断された。また、下層のⅥ層からは、畦畔の下位に残る耕作による攪拌の影響を受けなかった痕跡である擬似畦畔Ｂが検出された。

Ⅴａ層・Ⅴｂ層水田跡から検出された畦畔は、上端幅25～100cmで、耕作面との比高差は約10cmを測る。検出された畦畔は、途切れてしまうものが多く水田区画を推定することはできなかった。耕作域の標高は西から東に向かって僅かに低くなっており、Ⅴａ層水田跡では、東西距離約35ｍで標高差約30cmを測る。このほか、水田関連遺構としては、Ⅴｂ層水田跡から水口1箇所、水利施設と考えられる溝状遺構1条がある。

⑷　今後の課題

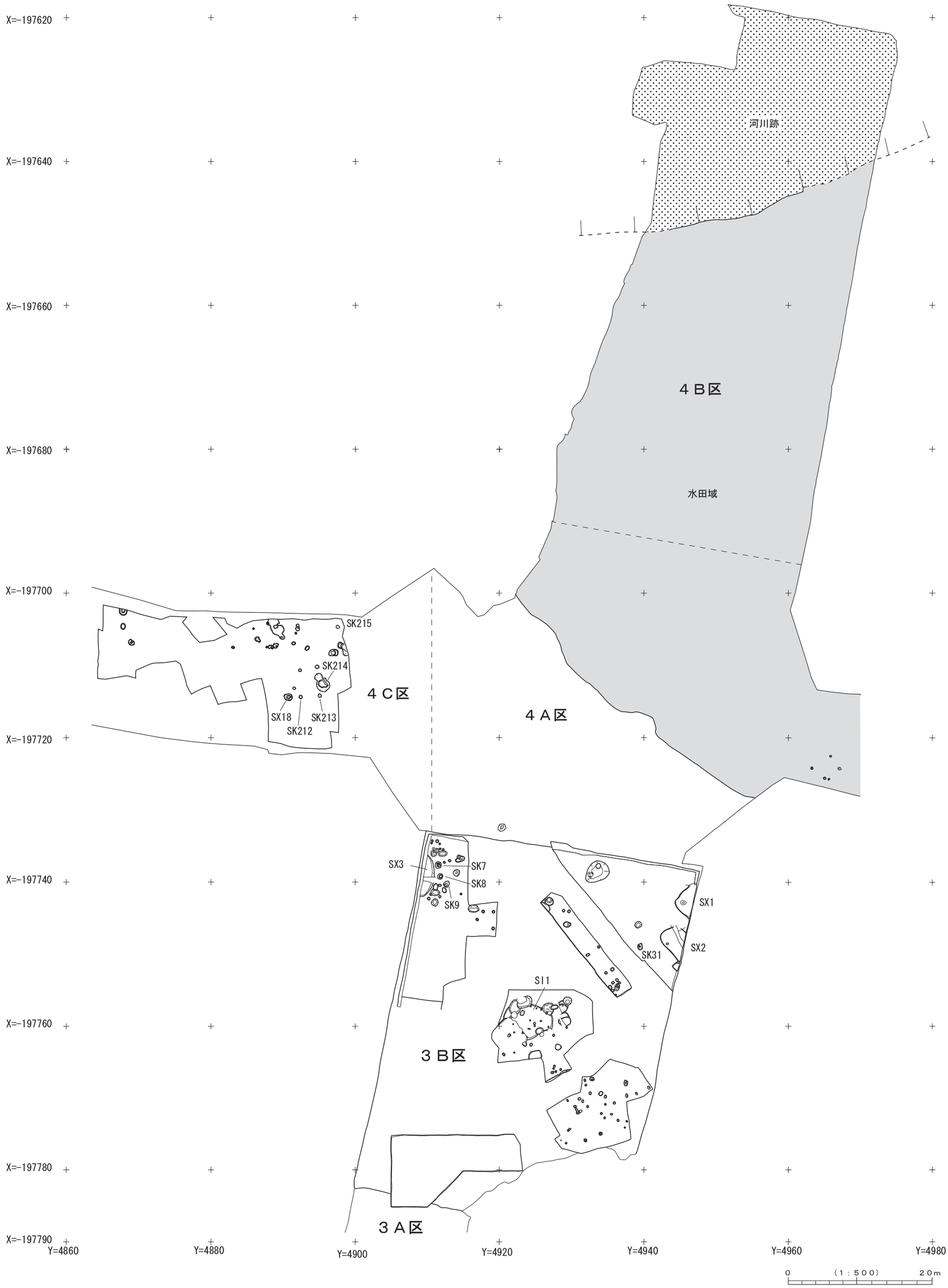
あすと長町事業に伴う調査では、西台畑遺跡の調査でも桝形囲式期の水田跡や土器埋設遺構、遺物包含層などが確認されている。今のところ竪穴住居跡は確認されていないが、他にも土壙や焼土遺構などが発見されていることから、長町駅東遺跡と同様にこれまでの調査区周辺に居住域があることが想定される。

出土遺物の比較では、これまで報告されている西台畑遺跡の資料については、伊藤玄三が指摘しているように、連孤文が無いことや「山の字状文」や「錨形文」などの「変形渦状文」がみられること、壺型土器頸部上方の隆帯など、桝形囲式期のなかでもやや古い様相をもつことが考えられる（伊藤1993）。

長町駅東遺跡の資料については、細い沈線により横位直線文・連孤文・渦文・連続山形文などが施文され、充填縄文手法が主体であることや、つまみをもたない蓋の形状について、直線または弱く外反する器形が多いことなどから桝形囲式期のなかでもやや新しい要素をもつものと考えられるが、あすと長町事業に伴う西台畑遺跡調査資料と併せて再検討を行い、今後報告していきたい。

仙台市内の同時期の代表的な遺跡である中在家南遺跡と高田Ｂ遺跡との比較では、西台畑遺跡については高田Ｂ遺跡に近く、長町駅東遺跡についてはやや新しい様相であることから中在家南遺跡に近い時期が想定される。

これまでの調査により、両遺跡の間には、弥生時代から中世に至るまで繰り返し流れ込んだと考えられる旧河道が存在していることが明らかになってきている。地形的に旧河道を挟んで立地している状況や出土遺物の様相から、西台畑遺跡に先行する集落が営まれ、その後やや時期をおいて長町駅東遺跡に集落が営まれたことが考えられる。



第531図　弥生時代の竪穴住居跡・土器埋設遺構・土壙墓・水田域の位置関係図

引用・参考文献

荒井　格他　2000　『高田Ｂ遺跡』仙台市文化財調査報告書　第242集　仙台市教育委員会

石川日出志　2005　「仙台平野における弥生中期土器編年の再検討」
『関東・東北弥生土器と北海道続縄文土器の広域編年（課題番号14320189）』
平成14年度～平成16年度科学研究費補助金（基盤研究Ｂ(2)）研究成果報告書

伊藤玄三　1993　「仙台市西台畑弥生時代墳墓の再検討」『法政考古学第20集記念論文集』

川又隆央　2005　「相模国出土の筒形土製品について」『論叢古代相模－相模の古代を考える会十周年記念論集－』
相模の古代を考える会

工藤信一郎・前川雅夫他　2008　『長町駅東遺跡1･2次調査』仙台市文化財調査報告書　第324集　仙台市教育委員会

工藤信一郎・土岐耕司他　2007　『長町駅東遺跡４次調査』仙台市文化財調査報告書　第315集　仙台市教育委員会

工藤信一郎他　2001　『八木山緑町遺跡ほか発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書　第253集　仙台市教育委員会

工藤信一郎他　1996　『野川遺跡』仙台市文化財調査報告書　第205集　仙台市教育委員会

工藤哲司　2002　『中在家南遺跡（第３・４次）　押口遺跡（第３次）発掘調査報告書』
仙台市文化財調査報告書　第255集　仙台市教育委員会

工藤哲司他　1996　『中在家南遺跡他』仙台市文化財調査報告書　第213集　仙台市教育委員会

佐藤　淳・主浜光朗　1997　『相ノ原・大貝中・川添東遺跡』仙台市文化財調査報告書　第217集　仙台市教育委員会

佐藤甲二　1989　「67　宮城県南小泉遺跡」『探訪　弥生の遺跡〈畿内・東日本編〉』

佐藤敏幸・大久保弥生　2007　「宮城県の湖西産須恵器」『宮城考古学』第９号　宮城県考古学会

佐藤敏幸　2006　「東北地方における７世紀から８世紀前半の土器研究史」『宮城考古学』第８号　宮城県考古学会

篠原信彦　2002　『原遺跡第４次調査報告書』仙台市文化財調査報告書　第257集　仙台市教育委員会

主浜光朗　1992　『土手内－土手内遺跡・土手内窯跡・土手内横穴Ｂ地点発掘調査報告書－』
仙台市文化財調査報告書　第165集　仙台市教育委員会

仙台市教育委員会　1984　「下ノ内浦遺跡」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅲ』仙台市文化財調査報告書　第69集
仙台市教育委員会

仙台市史編さん委員会　1999　『仙台市史』通史編１　原始

仙台市史編さん委員会　1995　『仙台市史』特別編２　考古資料

東国土器研究会　1995　『東国土器研究　第４号　東国における律令制成立までの土器様相とその歴史的動向』

東国土器研究会　1990　『東国土器研究　第３号　特集　黒色土器－展開と終焉』

東国土器研究会　1989　『東国土器研究　第２号　特集　黒色土器－出現と背景』

長島榮一　2005　『郡山遺跡発掘調査報告書　総括編』仙台市文化財調査報告書　第283集　仙台市教育委員会

長島榮一・稲葉俊一　1993　『仙台平野の遺跡群Ⅻ－平成４年度発掘調査報告書』
仙台市文化財調査報告書　第170集　仙台市教育委員会

長島榮一・稲葉俊一　1992　『仙台平野の遺跡群Ⅺ－平成３年度発掘調査報告書』
仙台市文化財調査報告書　第162集　仙台市教育委員会

福田健司・前川雅夫　2002　『落川・一の宮遺跡Ⅲ　総括編』落川・一の宮遺跡（日野3･2･7号線）調査会

宮城県教育委員会　1994　『高田Ｂ遺跡－第２次・３次調査－』宮城県文化財調査報告書　第164集

山内清男　1979　『日本先史土器の縄文』先史考古学会

山内清男　1924　「石器時代にも稲あり」『人類学雑誌』47－７

報　告　書　抄　録

ふりがな	ながまちえきひがしいせきだいさんじちょうさ
書名	長町駅東遺跡第３次調査
副書名	仙台市あすと長町土地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書Ⅲ
巻次	
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書
シリーズ番号	第 340 集
編著者名	工藤信一郎　皆川貴史　工藤　司　鵜久森彬
編集機関	仙台市教育委員会
所在地	〒980-8671　宮城県仙台市青葉区国分町三丁目７番1号　TEL 022-214-8894
発行年月	2009 月 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
長町駅東遺跡第３次 （ながまちえきひがしいせきだいさんじ）	宮城県仙台市（みやぎけんせんだいし） 太白区（たいはくく） 長町六丁目（ながまちろくちょうめ）	4100	01449	38° 13′ 18″	140° 53′ 09″	2003/4/14 ～ 2004/1/30	2,430	土地区画整理事業に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長町駅東遺跡第３次	散布地	縄文時代		縄文土器	
	集落跡 墓域	弥生時代	竪穴住居跡 性格不明遺構 土器埋設遺構	弥生土器 石器	桝形囲式期の竪穴住居跡 第４次調査と合わせて、居住域・生産域（水田跡）・墓域がまとまって検出
	官衙関連遺跡 集落跡	飛鳥時代 ～ 奈良時代	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 区画施設 材木列 一本柱列	土師器 須恵器 土製品	郡山遺跡官衙造営集落 集落に伴う区画施設 （大溝・材木列） 関東系土師器 須恵器円面硯
	生産地　他	平安時代 ～ 中世	小溝状遺構群 溝跡 土坑 ピット		

仙台市文化財調査報告書第340集

長町駅東遺跡第3次調査

―仙台市あすと長町土地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書Ⅲ―

［第2分冊］

2009年3月

発　行　　仙台市教育委員会

宮城県仙台市青葉区国分町三丁目7-1
文化財課　022(214)8894

印　刷　　八幡印刷株式会社

福島県いわき市平字田町82-13